

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31

## 平成26年度発掘調査報告

(第2分冊)

佐 助 ヶ 谷 遺 跡

極 楽 寺 旧 境 内 遺 跡

北 条 小 町 邸 跡

弁 ヶ 谷 遺 跡

大 倉 幕 府 跡

若 宮 大 路 周 辺 遺 跡 群

横 小 路 周 辺 遺 跡

大 慶 寺 旧 境 内 遺 跡

平成27年3月

鎌倉市教育委員会





弁ヶ谷遺跡（材木座六丁目 640 番 2）第Ⅱ面全景（南東から）



大慶寺旧境内遺跡(寺分一丁目939番1の一部)第1面かわらけ集中遺構出土鉄製仏像





## ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和 59 年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ 6 割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成 17～23 年度及び平成 26 年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査と資料整理の成果として 14 地点の調査記録を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日  
鎌倉市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は平成26年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第1分冊に掲載した表のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。ただし、報告12は株式会社博通が、報告13は有限会社鎌倉遺跡調査会が現地調査及び出土資料の整理を行った。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。
- 6 報告6については当時の調査担当者である古田土俊一氏に玉稿を賜った。

# 総目次

(第2分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
<b>6 佐助ヶ谷遺跡 (No.203) 佐助二丁目667番3外地点</b>	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第二章 調査の概要	8
第三章 検出遺構と出土遺物	11
第四章 まとめ	15
<b>7 極楽寺旧境内遺跡 (No.291) 極楽寺三丁目330番6地点</b>	
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	22
第二章 調査の経過と概要	22
第三章 検出された遺構と遺物	25
第四章 まとめ	28
<b>8 北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目427番2外地点</b>	
第一章 遺跡と調査地点の概観	41
第二章 調査の概略	52
第三章 調査結果	54
第四章 まとめと考察	96
<b>9 弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目640番2・3地点</b>	
第一章 調査地点の概観	121
第二章 調査の概要	128
第三章 検出された遺構と出土遺物	133
第四章 まとめと考察	179
<b>10 大倉幕府跡 (No.253) 雪ノ下三丁目693番8地点</b>	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	213
第二章 調査の方法と経過	216
第三章 基本土層	217
第四章 発見された遺構と遺物	220
第五章 調査成果のまとめ	255

## 11 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 小町一丁目333番15地点

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	305
第二章 調査の方法と経過	307
第三章 基本土層	308
第四章 発見された遺構と遺物	309
第五章 調査成果のまとめ	325

## 12 横小路周辺遺跡 (No. 259) 二階堂字荏柄939番10地点

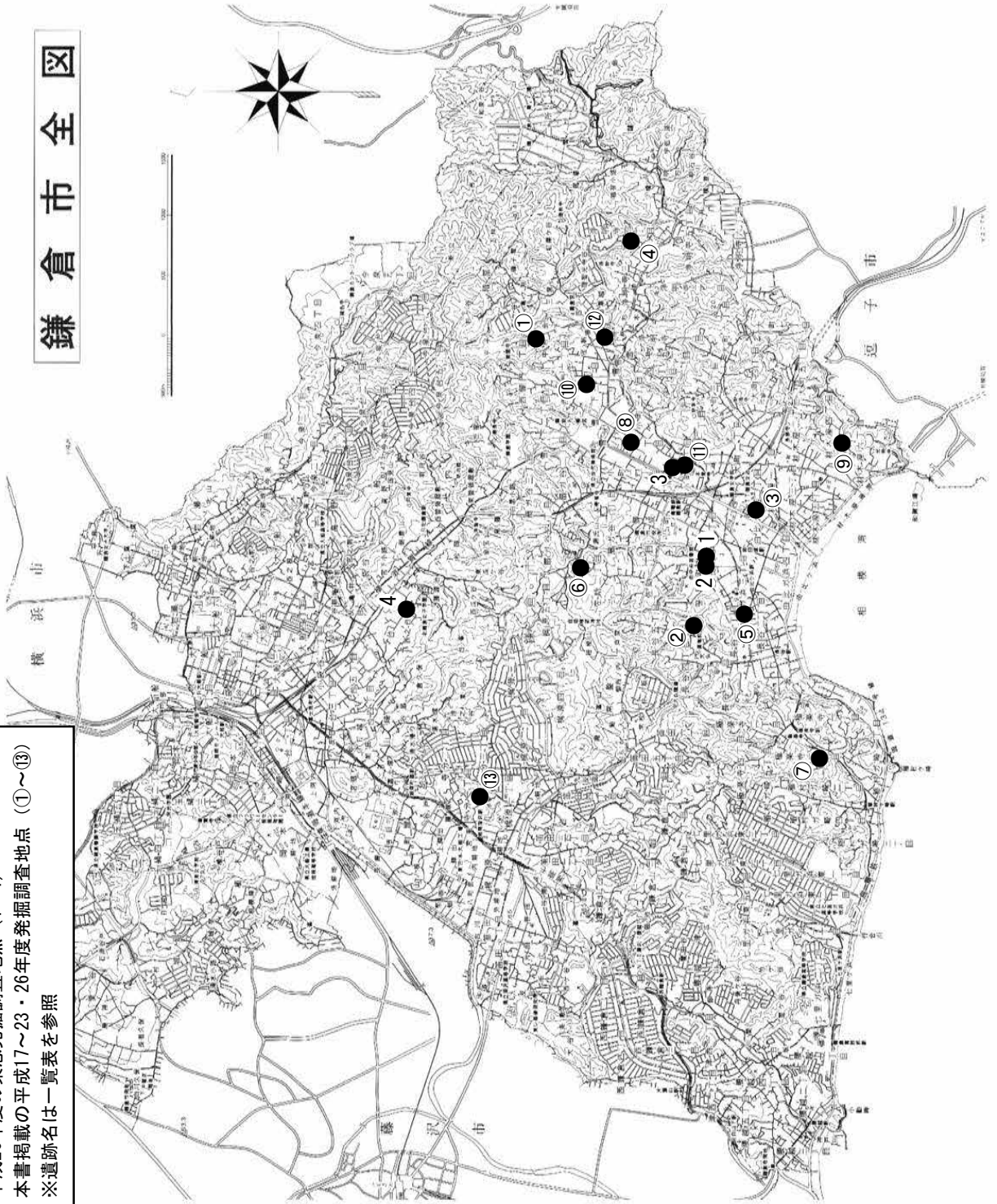
第一章 調査に至る経緯	352
第二章 遺跡概観	353
第三章 調査の経過と方法	355
第四章 堆積土層	357
第五章 発見された遺構と遺物	358
第六章 まとめ	372

## 13 大慶寺旧境内遺跡 (No. 361) 寺分一丁目939番1の一部地点

第一章 調査地点概観	384
第二章 検出した遺構と遺物	388
第三章 まとめと考察	398

平成26年度の緊急発掘調査地点 (1~4)  
本書掲載の平成17~23・26年度発掘調査地点 (①~⑬)  
※遺跡名は一覧表を参照

# 鎌倉市全図





# 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203)

佐助二丁目 667 番 3 外

## 例 言

1. 本報は佐助ヶ谷遺跡（No.203）内、鎌倉市佐助二丁目 667 番 3 外地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査期間と調査対象面積は以下の通りで、鎌倉市教育委員会が実施した。  
発掘調査期間：平成 18 年 5 月 17 日～7 月 3 日 調査対象面積 33.00㎡
3. 現場の調査体制は以下の通りである。  
調査担当者：古田土俊一、福田誠  
調査員：石元道子、鈴木絵美  
協力機関名：鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所  
作業員：浅香文保、川島仁司、鈴木順治、田口康雄
4. 整理作業および本報の作成は以下の通りである。  
遺物実測作業：田畑衣理  
遺構挿図作成：田畑衣理、岡田慶子  
遺物挿図作成：伊丹まどか、田畑衣理、古田土俊一  
遺物写真撮影：須佐仁和  
本文原稿執筆：古田土俊一  
本報編集作業：伊丹まどか、古田土俊一  
なお、本報の遺物、遺構挿図、観察表作成に際しては、田畑衣理氏、伊丹まどか氏より格別のご配慮とご教示を得た。特記し感謝申し上げる次第である。
5. 本報掲載の写真は全景を古田土が、個別遺構を古田土、鈴木（絵）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は以下の通りである。
  - ・図版縮尺 全測図 1／80 遺構図 1／40 遺物図 1／3
  - ・遺構図版 遺構のレベルは海拔標高の数値を示す。
8. 発掘作業および出土品整理にあたり、多方面からのご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する（順不同・敬称略）  
菊川泉、松尾宣方、青木敬、太田美智子、原廣志、鈴木庸一郎、河野眞知郎、押木弘己、馬淵和雄、玉林美男、手塚直樹、山口正紀、汐見一夫、松葉崇、松吉大樹、松吉里永子



## 目 次 本 文 目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	4
1. 遺跡の位置	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要	8
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 堆積土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	11
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構と遺物	
4. 第3面下トレンチの遺構と遺物	
第四章 まとめ	15

## 挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺遺跡	7
図2 遺跡位置図・国土座標・グリッド配置図	10
図3 堆積土層図・全測図	12
図4 出土遺物	14

## 写真図版目次

図版1 検出遺構	17
図版2 出土遺物	18

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

## 1. 遺跡の位置

本遺跡は鎌倉市街地の北西部、佐助ヶ谷地区に位置し、JR鎌倉駅から西方向へ約800mの距離に所在する「佐助一」交差点から北へ延びる佐介谷の最奥に位置する。所在地は鎌倉市佐助二丁目667番3外に相当し、神奈川県遺跡台帳の佐助ヶ谷遺跡（遺跡台帳No.203）に含まれる。

佐介谷は源氏山の南西、滑川の支流である佐助川の上流に当たる谷戸で、開口部は「佐助一」交差点よりも300mほど南方、およそ御成中学校から鎌倉市立中央図書館の間に所在する。海拔50～100mの低丘陵に囲まれた複雑な谷地には木部ヶ谷・七観音谷・鍛冶ヶ谷・宝蓮寺谷・北斗堂谷・西ヶ谷などの名を有する支谷が存在し、佐助川を遡上するかたちで谷戸奥に進むと葛原岡神社、化粧坂などがある源氏山に至る。途中には佐助稲荷、銭洗弁財天といった由緒ある宗教施設も存在し、歴史的に重要な地域であると言える。

## 2. 歴史的環境

佐介の名は鎌倉時代から見える地名である。『新編鎌倉志』はその名の由来として上総介・三浦介・常陸介三介の屋敷があったことや、この谷に住む稲荷の神霊が源頼朝（佐殿）の挙兵を助けたと伝わる佐助稲荷が所在することなどを挙げる。

また、佐介の史料上の初見は『吾妻鏡』寛元四年（1246）六月二十七日条であり「入道越後守時盛佐介亭」と見え、鎌倉追放となった前将軍藤原頼経が当地にあった北条時盛亭に入り、翌七月帰洛したことを記す。北条時盛は鎌倉幕府の初代連署北条時房の長男であり、佐介流北条氏の祖となる人物である。以後この所作は先例となったようで、鎌倉幕府五代将軍藤原頼嗣が帰洛する建長四年（1252）三月二十一日には「入道越後守佐介亭」に入っており、六代将軍宗尊親王が帰洛する際にも時盛亭に入っていることが記される（『吾妻鏡』文永三年（1266）七月四日条）。

なお谷戸名の初見は、文永八年（1271）卯月五日の聖教『阿字肝心抄』奥書にある「於佐介谷禅房」と見られる（神奈川県史資料編1 - 612）。また、正和三年（1314）頃と推定される円義書状は「さすけ」から宇治の義観房に出されたものである（神奈川県史資料編2 - 1916）。さらに『悉曇字記抄』扉書の墨書に「弘安八年（1285）西七月十八日於関東佐介谷信範記云明了坊即指此記云々」と見え（『昭和現存天台書籍綜合目録下』）、『四教五時略名目』の奥書にも「元徳四年（1332）〈壬申〉正月廿二日於鎌倉佐介谷抄之畢、恵鎮記之」とある（『昭和現存天台書籍綜合目録上』）。このほか『金沢文庫古文書』の年代未詳の某書状に「佐介の口ニ松尾と申候所に」と見える（神奈川県史資料編3上 - 3918）。

降って上杉禅秀の乱の際に佐介の名が見える。『鎌倉大草紙』によると、応永二十四年（1417）十月二日木戸満範の知らせによって禅秀の挙兵を知った足利持氏は「御馬にめし葛辻は敵篝を焼て警固しける間、岩戸のうへの山路をめぐり、十二所にかゝり小坪を打いで、前はまを佐介へいらせ給ふ」と見え、当地に移ったことが記されるが、同6日「佐介館」に火がかかったため、持氏は小田原に落ちのびている（群書類従20）。これは『湘山星移集』にも同様の記載がある（続群書類従21上）。

本調査地点は上記のような歴史を持つ谷戸の最奥に位置し、『新編鎌倉志』には「光明寺畠」と記されている。この光明寺は鎌倉市材木座6丁目に所在する浄土宗大本山・天照山蓮華院光明寺を指し、鎮西派第三祖の然阿良忠が諸国遊歴ののち、大仏朝直の帰依を得て、佐介谷に前身となる悟真寺を建立したことが端緒となる。大仏朝直は佐介時盛と同様、北条時房を父に持つ大仏流北条氏の祖であり、朝直

の子息上野介時遠と考えられる者から悟真寺房地と武蔵国鳩井の地も寄進されていることは、大仏流北条氏との関係を裏付ける（『光明寺文書』県史資1 - 635）。創建の時期については不明な部分が多いものの、『浄土宗要集聴書』の示すことから鑑みれば文応元年（1260）以前のものと見られている（『浄土宗全書』10、『角川地名大辞典』）。また寺号改名の時期および移転の時期は未詳であるものの、正中二年（1325）三月十五日の時点では「佐介谷、本悟真寺、今号蓮華寺」と記されていることから（『光明寺文書』県史資2 - 2433）、弘安十年（1287）の良忠没後であろうとされる（『角川地名大辞典』）。

このほか本調査地点から西側の山中には銭洗弁財天宇賀福神社が鎮座する。『新編鎌倉志』には「隠里【かくれざと】」と記され、洞窟内の湧水を源頼朝が夢告で発見供養し重用したと伝える。現在銭洗弁財天の参道は東と南の二ヶ所あり、東口となる隧道の真上にはやぐら群が確認されている。昭和四十五年に行われた発掘調査では、延慶（1311）から元徳二年（1330）の板碑や五輪塔の優品が多数出土しているが（『鎌倉の五輪塔』）、東口が開削されたのは昭和になってからであることから見て、やぐらは銭洗弁財天に付随する施設ではない。やぐらが谷戸奥中央に向かって開口することは、本調査地点となるこの地に寺院が存在した可能性を示す。

さらに本調査地点東の斜面には坂があり、住民間では「七曲」と俗称されている。この坂を上った先には源氏山一葛原岡神社間の尾根線を挟む形で化粧坂が所在する。藤沢・武蔵方面との出入口で鎌倉の重要な防御拠点であり、元弘三年新田義貞の鎌倉攻めでは、三手にわけた一軍を化粧坂に向け、幕府軍と対峙している（『太平記』）。『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日条に、鎌倉中で小町屋および売買所を構えてもよい所の1つとして「气和飛坂山上」が見えることから、鎌倉後期に最も栄えた地域のひとつと目される。伝聞であるため詳細は不明だが、「七曲」は化粧坂と対を成す坂として使用された時期があったという。現在は使用されていない。

また、本調査地点の周辺地域で行われた過去の発掘調査事例を参考にすれば、佐助ヶ谷の本格的な開発はおおよそ13世紀後半ごろから始められたと見ることができ、佐助ヶ谷の奥となる図1 - 1地点、図1 - 6地点、図1 - 7の調査で、寺院関連施設もしくは寺地と推定される遺構が検出されている。また特に図1 - 7地点は基壇や門、池などが出土しており、寺院の様相が色濃い遺跡として知られる。谷戸内で13世紀後半ごろに存在した可能性を示す寺院は上記の悟真寺くらいだが、14世紀代になれば上杉憲顕創建といわれる禅宗寺院の国清寺も存在が確認できる（『鎌倉廃寺辞典』）。このほか宝蓮寺、松谷寺、宝性寺、薬師堂、北斗堂、天狗堂などがあったといい、鎌倉時代以降に多くの寺院が点在していた谷戸であると言える。

## 参考文献

- 角川日本地名大辞典編纂委員会 1984『角川日本地名大辞典 神奈川県』角川書店  
貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺辞典』有隣堂  
芦田伊人 編 1929『新編鎌倉志・鎌倉覽勝考』（大日本地誌大系）雄山閣出版  
黒板勝美 編 1968『吾妻鏡』（新訂増補国史大系 普及版）吉川弘文館  
後藤丹治・釜田喜三郎校注 1960『太平記』（日本古典文学大系）岩波書店  
塙保己一 編 1981『続群書類従』第20輯 続群書類従完成会  
塙保己一 編 1983『続群書類従』第21輯上 続群書類従完成会  
浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局 編 1972『浄土宗全書』第10輯（寺誌宗史1-2）浄土宗  
神奈川県県民部県史編集室 編 1979『神奈川県史資料編』神奈川県  
鎌倉国宝館『鎌倉の五輪塔』鎌倉国宝館図録 第21集  
古田土俊一 2012「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」『考古論叢神奈河第20集』神奈川県考古学会

#### 発掘調査事例参考文献

1. 瀬田哲夫 2005 『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書 鎌倉市佐助一丁目 583 番外』(有) 鎌倉遺跡調査会
2. 齋木秀雄ほか 1993 『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡調査団
3. 齋木秀雄・降矢順子 2009 「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 496 番 5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 (第 2 分冊) 鎌倉市教育委員会
4. 熊谷満 2011 「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 496 番 4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27 (第 1 分冊) 鎌倉市教育委員会
5. 大三輪龍彦ほか 1989 『佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 620 番地点』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
6. 原廣志・宇都洋平 2012 「宝蓮寺跡 (No.374) 佐助二丁目 905 番 3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 (第 1 分冊) 鎌倉市教育委員会

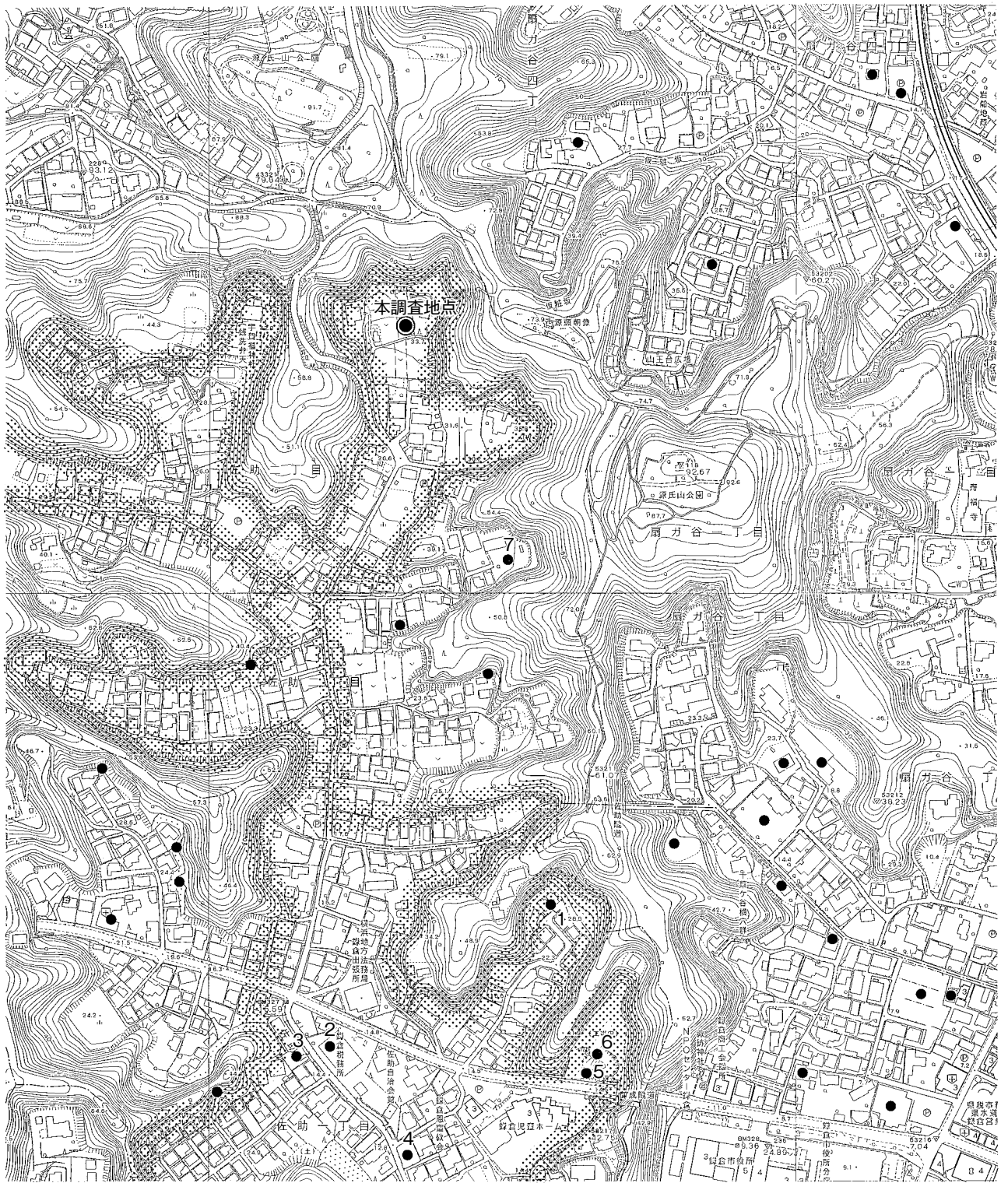


図 1 調査地点と周辺遺跡

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経過

本遺跡は鎌倉市中央部よりやや西側にあたる佐助ヶ谷に位置する。本調査地点は佐助ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No.203）の最北である佐助二丁目 667 番 3 外に所在しており、江戸時代の地誌には光明寺畠と呼ばれ、現在は材木座所在の光明寺の前身となる寺院が存在したことが記されている。近隣には銭洗弁財天や国史跡である化粧坂があるなど歴史的価値の高い場所として認識されているが、発掘調査事例は極めて少ない。

本件は、個人専用住宅建設案件の建築計画が基礎構造を鋼管杭打ち工法であったため、鎌倉市教育委員会により確認調査を行ったところ、現地地表下 140cm以下に中世の遺物包含層と生活面が検出され、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたことによる。これにより発掘調査の実施について建築主と数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法に基づく届出手続き、調査の実施方法の協議を経て、平成 18 年 5 月から調査面積 33.00㎡を対象として発掘調査を実施することとなった。

現地調査は調査排土の置場の問題から調査区を南北に二分割し、北側をⅠ区、南側をⅡ区としてそれぞれの調査範囲を設定し、平成 18 年 5 月 17 日よりⅠ区の表土を重機によって掘削することから始められた。調査期間中は多量の湧水に悩まされながらの作業ではあったが、Ⅰ区において鎌倉時代末期の遺構・遺物が発見され、同年 6 月 2 日までの間に必要な記録保存を行なった。続けて行なったⅡ区の調査開始直後、表土を掘削していた重機が掘削域内より脱出できない事態が発生し、調査中断を余儀なくされる。重機は無事撤収されたものの、現場内安全面の考慮し協議を重ねた結果、同年 7 月 3 日発掘調査の中止が決定し、同日調査を終了した。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

#### 【日誌抄】

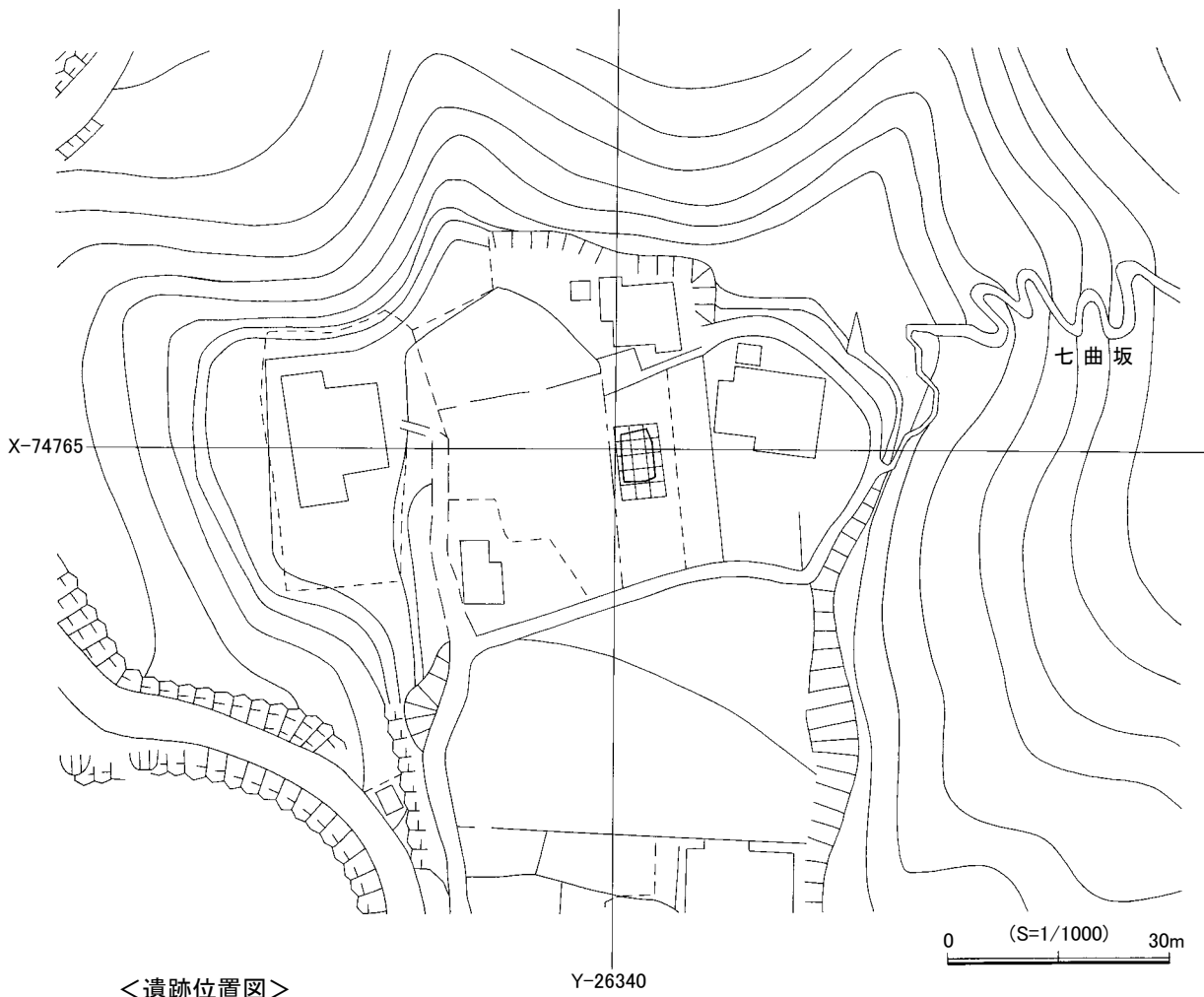
- 5 月 16 日（火） 調査区を設定し表土掘削。
- 17 日（水） 機材搬入とテント設営。
- 19 日（金） Ⅰ区 1 面確認作業。鎌倉市 4 級基準点を基として測量用方眼の設定。
- 22 日（月） 測量用水準点の原点レベルを移動。
- 24 日（水） Ⅰ区 1 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 29 日（月） Ⅰ区 2 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 31 日（水） Ⅰ区 3a 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 6 月 1 日（木） Ⅰ区 3b 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 2 日（金） Ⅰ区トレンチ調査終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 7 日（水） Ⅱ区表土掘削中、重機掘削域内より脱出不能。
- 9 日（金） 重機撤収。
- 7 月 3 日（月） 発掘調査の中止が決定。現地調査終了。機材撤収。

## 2. 測量軸の設定

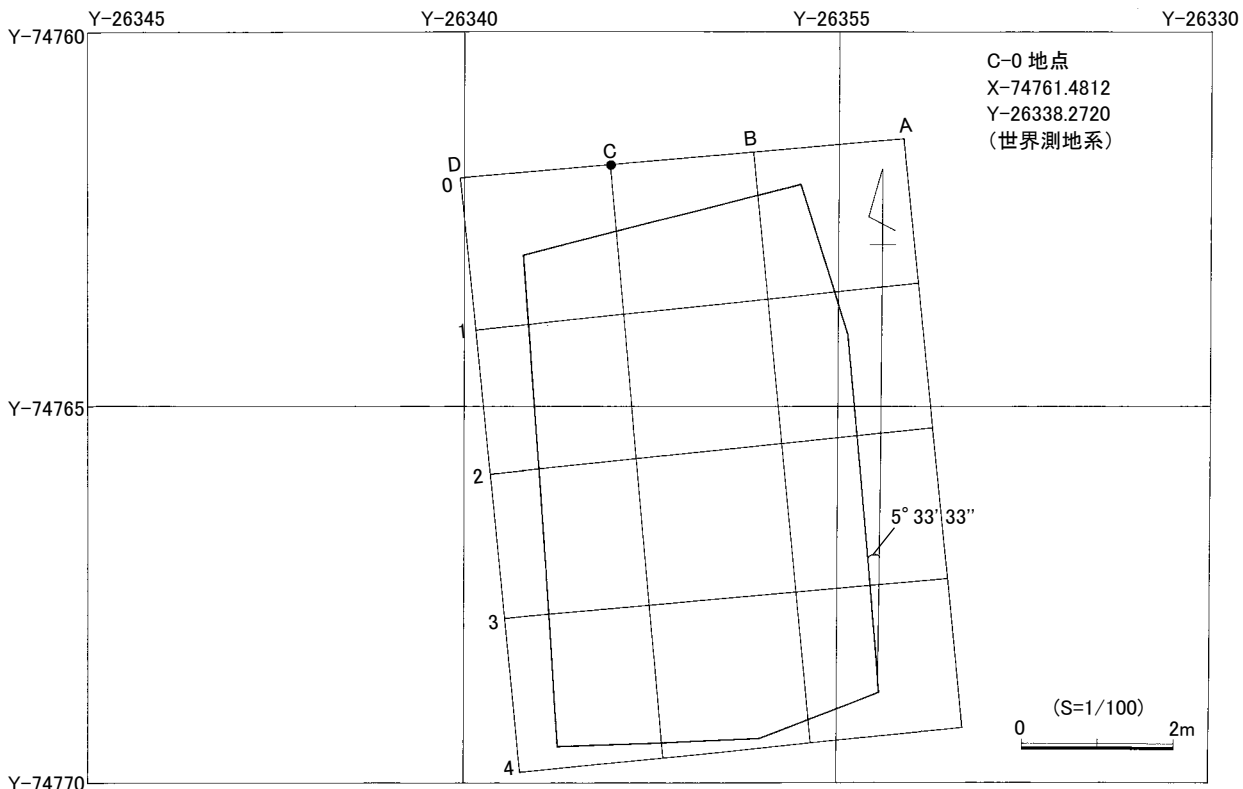
調査にあたり測量方眼軸を設定した。図2のように本調査地点に近接する道路には、鎌倉市道路管理課が設置した4級基準点のE129 [X = - 74781.5194・Y = - 26314.8322] と、E130 [X = - 74790.9254・Y = - 26359.5405]を用いて基準原点にあたるC-0杭を設置した。C-0杭の国土座標値は、X座標値: - 74761.4812・Y座標値: - 26338.2720の数値を得ている。図中の方位はすべて真北を採用し、方眼の南北軸線はN - 5° 33' 30" - Wである。また海拔標高については、源氏山公園から梶原方面へ向かう道の交差点に設けられた鎌倉市3級基準点 (No. 43321 : L = 79.899m) からC-0杭上に仮水準点を移動した。C-0杭の海拔標高は33.052mであり、文章中および挿図に記載されたレベル数値はすべてこれを基準にした海拔高を示している。本調査地点の経緯は、緯度 = 35° 19' 32.04872"、経度 = 139° 32' 37. 17213"となる。

## 3. 堆積土層

調査地点は現地表の海拔高約33mに位置する。調査地点の南側に広がる畑の標高に対して、ある程度の高台となる土地でありつつ平坦な宅地を形成している。表土は現代の攪乱と宝永火山灰を多く含む近代の客土(山砂)が30cmほど堆積しており、それらを除去すると海拔高32.8m前後で第1面が現れた。これより下層で検出した面は第3b面にまで及ぶが、遺構を検出できた面はトレンチ下層面のみとなる。第3面に至るまでの面は、総じて調査区北限が高く調査区南限が低い傾斜した堆積である。第1面の南北標高差は30cmほどで、遺構としては溝1が確認されたのみであった。第1面構成土となる灰褐色砂質土・茶灰色砂質土を除去すると、ブロック状の凝灰質砂岩を多く含む灰色凝灰岩層が現れたためこれを第2面としたが、遺構は確認できなかった。第2面は調査区北限で32.8m、南限32.2m前後で、南北標高差はおよそ60cmである。第2面構成土を除去すると、北側から調査区中央までの斜面堆積層となる茶色凝灰岩層・茶褐色砂質土層が確認でき、それらを除去したところで傾斜の緩くなる面が広がったためこれを第3面とした。第3面は北限32.2m、南限32.0mの高さとなり、標高差は20cmとなるものの、遺構は確認できなかった。第3面以下の調査は斜面崩落の危険を回避する形でトレンチ調査を行ない、遺構が確認できる面までの掘削を行なった。結果として31.20mの面より掘り込まれた溝2を検出し、鎌倉時代末期の遺構面を確認するに至っている。



<遺跡位置図>



<グリッド配置図>

図2 遺跡位置図・国土座標・グリッド配置図



## 第三章 検出遺構と出土遺物

第二章で述べたようにⅡ区の調査は行っていないため、本報告は調査区域のうちⅠ区のみ調査成果となる。調査では検出した硬化面をもとに上層より第1面、第2a面、第2b面、第3a面、第3b面と設定し、各面の調査を実施したものの、第1面以外に遺構は検出されず出土遺物も少量であった。このことからさらに下層に遺構が存在することも考慮し、第3面下へのトレンチ調査を実施した。結果として14世紀代の遺構面を検出するに至っている。

以下、発見した遺構、遺物を上層から下層にかけて第1面から第3b面および第3面下トレンチ調査の順で報告するが、第1面から第3b面にかけての土層は、背面が谷戸奥の崖となる調査区北壁から南壁にかけて傾斜した堆積を見せ、第1面以外から遺構は検出されなかったこともあり、遺構図版は第1面および第3面下トレンチ調査を開始した第3b面、トレンチ内検出面のみを掲載している。

なお、各層で検出した遺物は出土遺物観察表にまとめ、本文に詳細は記載していない。また各層における破片出土点数は表にまとめ、本報末に掲載した。

### 1. 第1面の遺構と遺物

現地表下約100～120cm、海拔標高は北壁33.0m、南壁32.7mで灰褐色砂質土・茶灰色砂質土で構成される硬化面を検出し、これを第1面とした。上層からの攪乱があるほか、検出した遺構は溝1条のみである。

#### 溝1

北壁中央から南東へ延びる溝である。試掘坑によって寸断されてしまったが、調査区東壁に向けて延びていたと考えられる。確認した長さは120cm、幅45cm、深さ40cmで、薬研掘の形状となる底面には炭化物が多く堆積していた。覆土中からは大型のロクロかわらけが1点出土しているが、小片であるため図示していない。

#### 第1面構成土（第2面まで）出土遺物

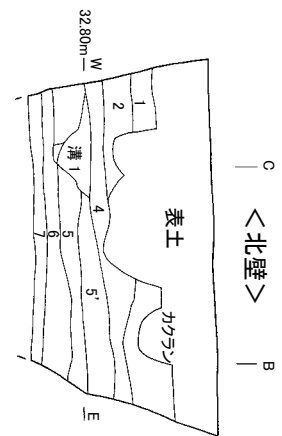
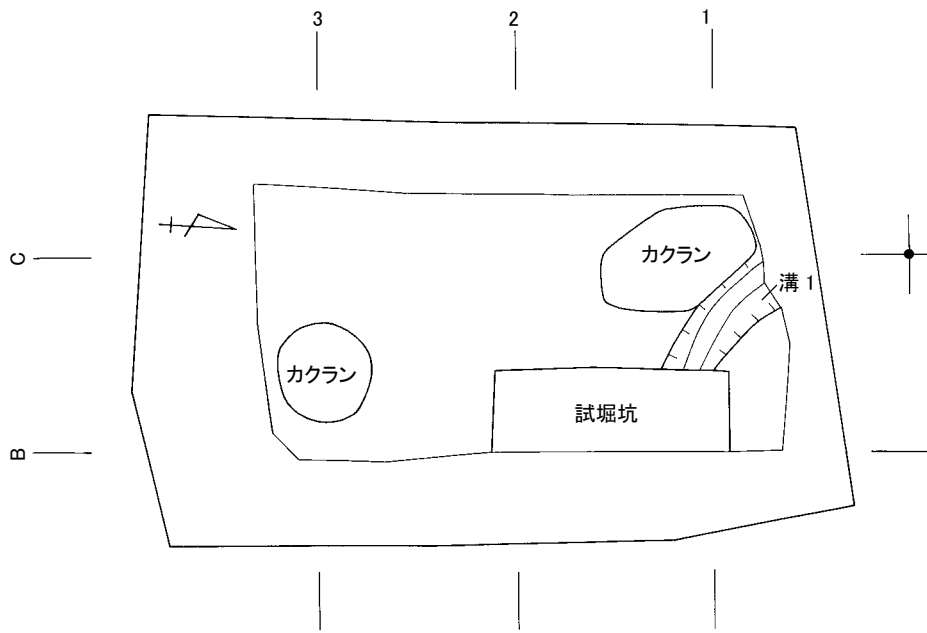
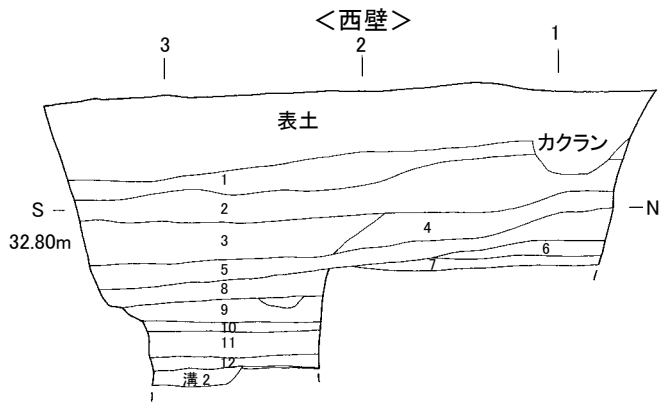
第1面構成土から出土した遺物のうち図示できたものは、図4-1が常滑甕、2が備前播鉢である。このほか小片のかわらけ・瀬戸窯製品・鉄滓が出土している。

### 2. 第2面の遺構と遺物

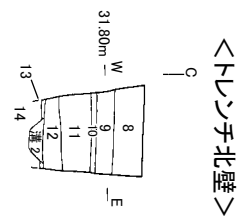
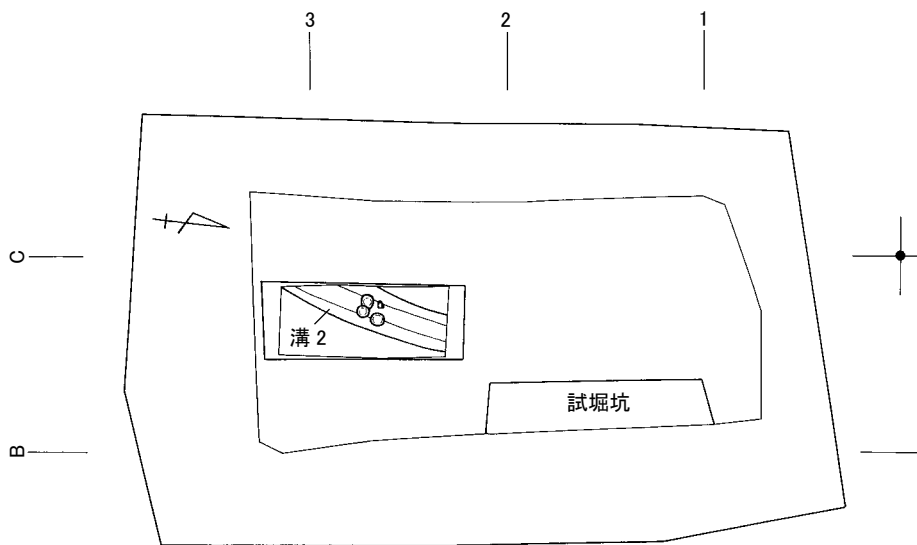
現地表下120cm～170cm、海拔標高は北壁32.8m、南壁32.2mでブロック状の凝灰質砂岩を多く含む硬化面を検出し第2a面とした。第2a面構成土を除去すると、やや粘性を有する茶褐色砂質土とブロック状凝灰質砂岩の含有率が低い茶色凝灰岩層で構成される第2b面を検出した。現地表下150cm～190cm、海拔標高は北壁32.5m、南壁32.0mで、第2b面構成土のひとつとなる茶色凝灰岩層は調査区北側1/3程度のみ堆積する。第2a面・第2b面ともに遺構は検出されなかった。

#### 第2面構成土（第3a面まで）出土遺物

第2面構成土から出土した遺物のうち図示できたものは、図4-3がかわらけである。このほか小片のかわらけ・常滑甕・吉備碗・瓦器質火鉢・獣骨が出土している。

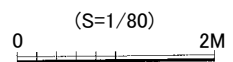


<第1面 全測図>



<第3面 全測図>

図3 堆積土層図・全測図



### 調査区壁断面図 土層注記（図3に対応）

1. 灰黒色弱粘質土：宝永火山灰を含む。締まり無し。
  2. 灰黒色砂質土：山砂。締まり無し。
  3. 灰黒色砂質土：山砂。宝永火山灰を多量に含む。締まりやや有り。
  4. 茶灰色砂質土：山砂。締まりやや有り。
  5. 灰色凝灰岩層：凝灰質砂岩がブロック状に多く混じる。締まりやや有り。
  - 5' 灰色凝灰岩層：凝灰質砂岩がブロック状に多く混じる。締まりやや有り。
  6. 茶色凝灰岩層：凝灰質砂岩の小片を含む。
  7. 茶褐色砂質土：かわらけ片を少量含む。締まり有り。
  8. 茶褐色砂質土：粘性やや有り。締まりやや有り。
  9. 灰褐色砂質土：粗砂粒、泥を含む。締まりやや有り
  10. 暗灰色砂質土：粗砂粒、泥を含む。締まりやや有り。
  11. 淡青灰色砂質土：粗砂粒、泥を含む。締まりやや有り。
  12. 灰色砂質土：粗砂粒を含む。締まりやや有り。
  13. 暗褐色粘質土：締まり有り。
  14. 灰褐色砂質土：炭粒を多少含み、凝灰質砂岩がブロック状に混じる。締まり有り。
- 溝1：灰褐色砂質土：底面に炭化物が多く堆積。締まり無し。  
溝2：灰褐色砂質土：粗砂粒、かわらけ片を多く含む。

### 3. 第3面の遺構と遺物

第2b面構成土のひとつとなる茶色凝灰岩層を除去したところで検出した、茶褐色砂質土で構成される硬化面を第3a面とした。現地表下170cm～190cm、海拔標高は北壁32.3m、南壁32.0mで、第2b面構成土と同様に調査区北側半分のみに堆積し、南半分は第2b面とした硬化面である。遺構は検出されない。第3a面構成土を除去すると、第2b面の調査区南側半分を構成していた茶褐色砂質土層が全面に広がるかたちとなり、これを第3b面とした。現地表下180cm～190cm、海拔標高は北壁32.2m、南壁32.0mで、硬化面の傾斜は緩やかとなるものの、遺構は検出されなかった。

#### 第3a面構成土（第3b面まで）出土遺物

第3a面構成土から出土した遺物はかわらけ・青白磁梅瓶、常滑窯片口鉢Ⅰ類、同Ⅱ類、玉石、人骨、炭化物が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。

### 4. 第3面下トレンチの遺構と遺物

調査期間中雨天が多かった影響もあり、第3b面調査の時点で調査区壁面が一部崩落するなど、以下の平面的な調査には危険が伴うものと判断された。このため調査範囲を縮小し調査区南半部中央に南北400cm×東西160cmのトレンチを設定し、堆積土層と遺構面の確認を行うこととした。第3b面以下の土層は平坦な堆積となり、現地表下約210cm、海拔標高31.80mで検出した灰褐色砂質土層の面上に遺構が見られる。幅45cm、深さ10cmに掘り窪められているが、用途は不明である。それらの土層を除去した現地表下約270cm、海拔標高31.20mにおいて暗褐色粘質土の硬化面と、その面より掘り込まれた溝2を検出した。

#### 溝2

トレンチ内北壁中央から南壁中央へ延びる溝である。確認した長さはおよそ160cm、幅40cm、深さ

15cmで、薬研掘の形状をとる。図4 - 10 ~ 16は溝内覆土中から出土したかわらけである。このほかにかわらけ、砥石、軽石、獣骨が出土しているが、小片であるため図示していない。

第3面下トレンチ内出土遺物

第3面下トレンチ調査で出土した遺物は、図4 - 4 ~ 7がかわらけである。8が瓦器質火鉢、9が砥石である。

トレンチ最下層

トレンチ最下層では図4 - 17のかわらけが出土している。

表採遺物

本調査区内で採取した遺物として図4 - 18のかわらけ、19の平瓦がある。

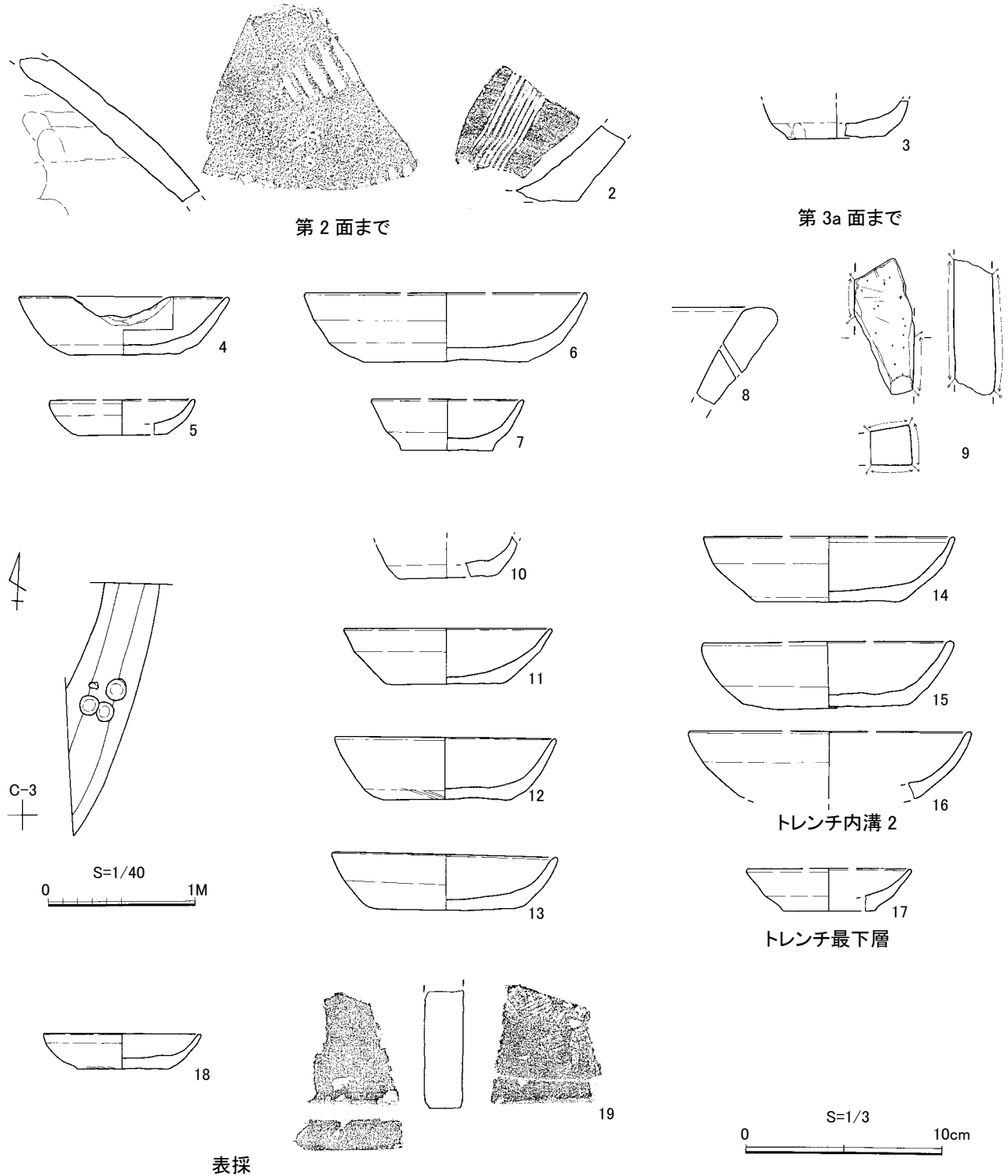


図4 出土遺物

## 第四章 まとめ

本調査地点は、南側に広がる畑の標高に対して、ある程度の高台となる土地でありつつ平坦な宅地を形成している。本調査では、第1面から第3面およびトレンチ内で硬化面を確認したが、このうち遺構を有する面は第1面とトレンチ最終面のみであった。第1面の遺物は中世期のもも含まれるが、第1面下の堆積に宝永火山灰が多量に含まれることからみれば、第1面が使用された年代は少なくとも宝永4年（1707）以降と見るべきだろう。また、それ以前の時期となる第2面から第3面にかけての層は傾斜した堆積を見せており、生活に適するとは言い難い。遺構も無く、土層の多くが山砂で構成されていることを鑑みれば、これらの土層は北側斜面からの崩落土と判断するのが自然であろう。また、降り積もった火山灰が一つの層を形成しているのではなく、砂質土層に含有する形で検出されることから見て、本調査地点の北側斜面および尾根に降り積もった火山灰が許容量を超え、火山灰下層の土層とともに連鎖的に本調査地点へと滑り落ちたものと思われる。

第3面以下となる堆積土層は上層に比べ平坦であり、遺構など生活が営まれた痕跡を確認することができた。現表土下210cmで確認したトレンチ最終面は、溝とともにまとまった量のかわけが出土しており、およそ13世紀後半から14世紀初頭の年代を充てることができる。なお、調査中に確認したところによると、この面の海拔標高は本調査地点の南面に広がる畑より低いレベルであった。このことをふまえば、佐助ヶ谷の最奥となる当地は鎌倉時代以降も使用がみられたが、江戸時代初期には一面の畑「光明寺畠」となり、江戸中期以降に宝永火山灰を含む谷戸奥の斜面堆積土が崩落し、本調査地点を含む山裾一帯が一段高くなったといった歴史を読み取ることができる。

おそらくは最終トレンチ以下の層より、本谷戸の最盛期となる生活面が広がるものと考えられる。しかしながら、本遺跡は掘削深度の安全性を考慮し、最終トレンチが限界深度であった。これまで調査機会の無かった地点での初調査として、今後の調査に有益な情報を提供できたものと考え、まとめとしたい。

出土遺物観察表

図版 番号	出土位置 出土層位	種別	遺存値	口径／長さ		底径／幅		器高／厚		a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				単位:cm ( )は復元値 □は残存値						
図4-1	2面まで	常滑 窯	肩部片							a:輪積み・内面指頭痕・横位ナデ b:砂粒・黒色粒・白色粒を含む灰色粗土 c:灰色 d:外面に自然降灰 e:良好・硬質 f:外面にスタンプ文
図4-2	2面まで	備前 擂鉢	底部小片							a:輪積み b:砂粒・白色粒・小石粒を含む赤褐色粗土 c:茶褐色～赤褐色 e:良好・硬質 f:条線8本
図4-3	3a面まで	かわらけ	底部1/2程度			(5.0)				a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味粗土 c:橙色 e:良好 f:底部脇に指頭痕
図4-4	トレンチ	かわらけ	ほぼ完形	10.4		5.6		3.0		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・白色粒・小石粒・海綿骨針を含む粉質粗土 c:淡橙色 e:良好 f:口縁部一カ所打ち欠き
図4-5	トレンチ	かわらけ	1/5程度	(7.2)		(4.8)		1.8		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切 b:微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む粉質粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-6	トレンチ	かわらけ	2/3程度	(14.1)		(8.0)		3.5		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針を含む砂質粗土 c:橙色 e:やや甘い
図4-7	トレンチ	かわらけ	2/3程度	(7.6)		(4.7)		2.6		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・白色粒・赤色粒・海綿骨針を含む粉質良土 c:橙色 e:良好
図4-8	トレンチ	瓦器質 火鉢	口縁部片							a:輪積み・内面横～斜位ナデ・外面口縁下横ナデ・胴部指頭痕十ハケ目 b:微砂多・黒色粒・白色粒を含む灰色粗土 c:橙色～灰色 e:やや甘い・軟質 f:口縁下に穿穴あり
図4-9	トレンチ	石製品 砥石		[7.0]		3.1		2.0		a:砥面は4面使用 b:流紋岩質粗粒凝灰岩 c:黄白色 f:伊予産
図4-10	トレンチ内 溝2	かわらけ	1/3程度			(5.0)				a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c:橙色 e:甘い f:内底回転ナデ残る
図4-11	トレンチ内 溝2	かわらけ	ほぼ完形	10.4		5.9		2.8		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒・小石粒を含む粉質粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-12	トレンチ内 溝2	かわらけ	ほぼ完形	11.1		6.8		3.2		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒多を含む砂質粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-13	トレンチ内 溝2	かわらけ	ほぼ完形	11.3		7.8		2.9		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質やや粗土 c:橙色 e:良好
図4-14	トレンチ内 溝2	かわらけ	2/3程度	(12.6)		7.2		3.3		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針を含む粉質良土 c:橙色 e:良好
図4-15	トレンチ内 溝2	かわらけ	4/5程度	12.6		8.6		3.5		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・小石粒・海綿骨針・土丹粒多を含む砂質気味粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-16	トレンチ内 溝2	かわらけ	口縁部片	(14.2)						a:ロクロ b:微砂・雲母・赤色粒・土丹粒・海綿骨針を含む砂質粗土 c:橙色～褐色 e:良好 f:部分的に黒く変色
図4-17	トレンチ 最下層	かわらけ	口縁部片	(8.3)		(4.8)		2.2		a:ロクロ・外底回転系切 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c:橙色 e:良好
図4-18	表探	かわらけ	2/3程度	8.0		4.5		1.8		a:ロクロ・内底横ナデ後に見込み回転ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質良土 c:淡橙色 e:良好
図4-19	表探	平瓦	端部片	[5.9]		[5.7]		2.0		a:凸面ナデ十離れ砂付着・凹面ナデ・側縁ケズリナデ b:砂粒・黒色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む灰褐色良土 c:灰色～灰褐色 e:硬質 f:側面に竹管あり

遺物破片数表

種類 \ 出土地		1面まで	1面溝1	2面まで	3a面まで	3b面まで	トレンチ	トレンチ内 溝2	トレンチ 最下層	表探	合計	%
かわらけ	ロクロ(大)	7	1	19	46	20	108	36	1	5	243	71.1
	ロクロ(中)						1	3	1		5	1.5
	ロクロ(小)	4		2	2		15	5			28	8.2
	白・手捏ね(小)						1				1	0.3
	白・ロクロ(小)						3				3	0.9
青磁	蓮弁文碗						1				1	0.3
	無文碗						1				1	0.3
青白磁	梅瓶					1					1	0.3
瀬戸	壺?						1				1	0.3
	不明			1							1	0.3
常滑	片口鉢Ⅰ類						1	2			3	0.9
	片口鉢Ⅱ類						1	1			2	0.6
備前	甕	3		7	4		3				17	5.0
	擂鉢			1							1	0.3
瓦	平瓦								1		1	0.3
瓦器	吉備碗				1		1				2	0.6
	瓦器質				1		1				2	0.6
石製品 他	砥石							1			1	0.3
	軽石							1			1	0.3
	玉石					1	13				14	4.1
鉄製品 他	鉄釘						1				1	0.3
	鉄滓			2							2	0.6
骨	獣骨				2			1			3	0.9
	人骨						1	1			2	0.6
炭							1	3			4	1.2
近現代		1									1	0.3
合計		15	1	32	56	26	157	47	2	6	342	100.0
%		4.4	0.3	9.4	16.4	7.6	45.9	13.7	0.6	1.8	100.0	



調査地点遠景



調査地点付近より銭洗弁財天方向を望む



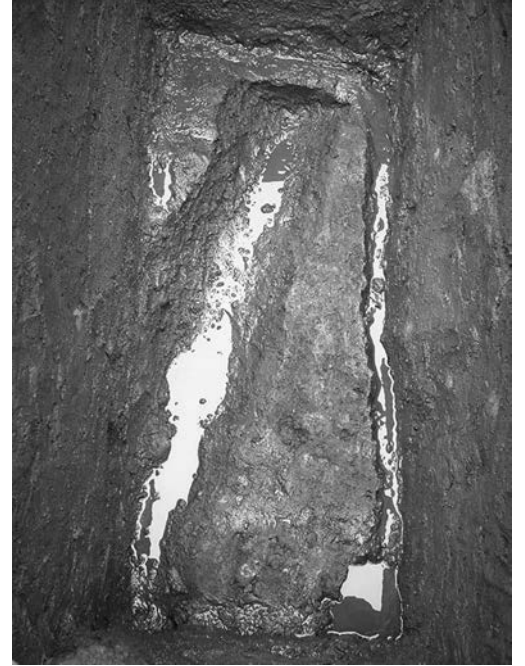
I区第1面全景（南から）



I区第3面全景（南から）

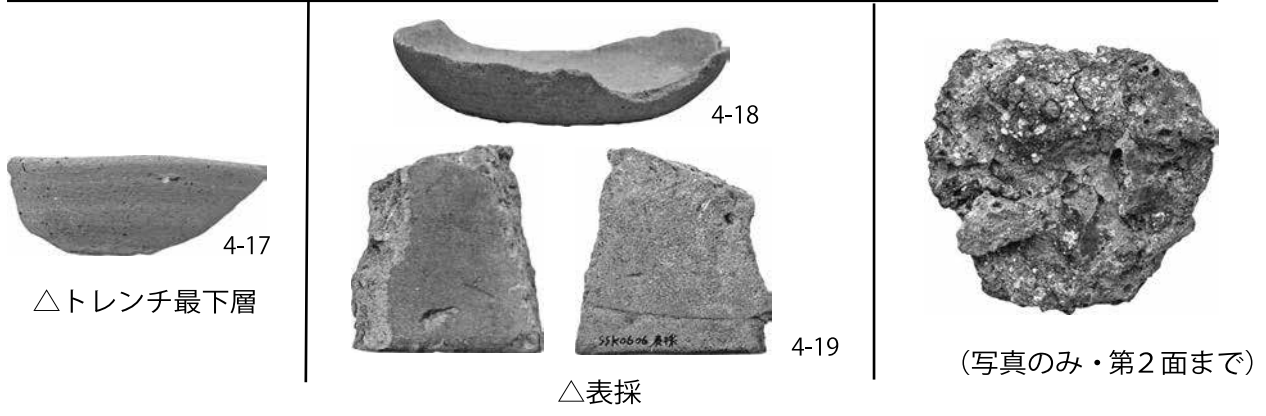
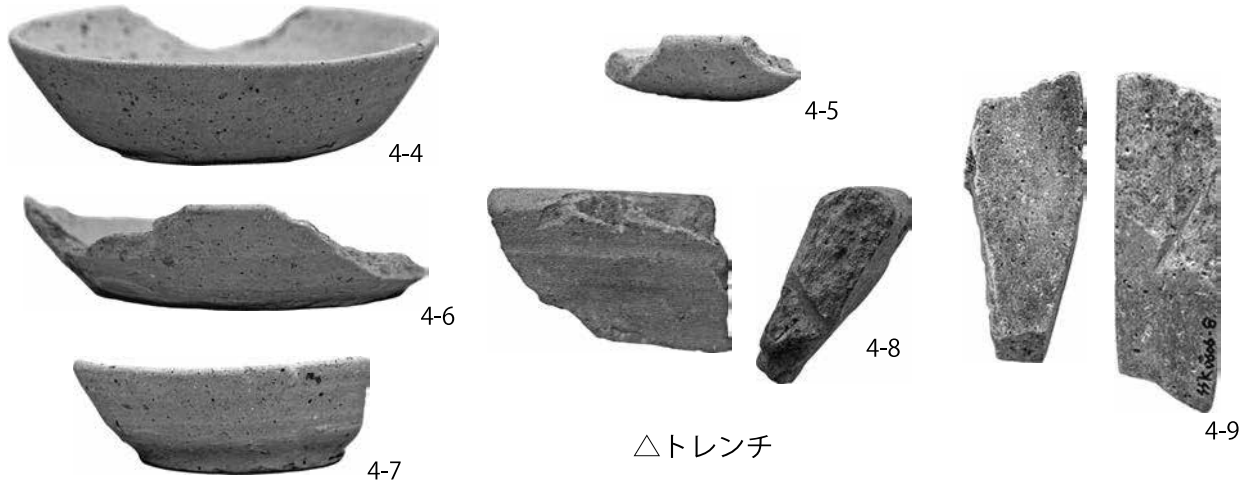


I区トレンチかわらけ出土状況（南から）



1区トレンチ溝2完掘状況（南から）

図版2





# 極楽寺旧境内遺跡 (No. 291)

極楽寺三丁目 330 番 6 地点

## 例 言

1. 本報は極楽寺旧境内遺跡 (No. 291)、極楽寺三丁目 330 番 6 地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、平成 19 年 (2007) 2 月 5 日～同年 2 月 23 日にかけて実施したもので、調査面積は 16.0 $\text{m}^2$ である。
3. 調査の体制は以下の通りである。

### 発掘調査

調査担当者 鈴木絵美 (文化財課臨時的任用職員)、福田 誠 (教育委員会文化財課嘱託)

調査員 石元道子 本城 裕 宇都洋平 (文化財課臨時的任用職員)

作業員 社団法人鎌倉市シルバー人材センター

### 資料整理作業

調査担当者 福田 誠 (教育委員会文化財課嘱託)

4. 現地での遺構写真撮影は鈴木・福田が、資料整理時の遺物写真撮影は福田が行った。
5. 出土品、及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本遺跡の略号は「GT3-330-6」、平成 18 年度通しNo.は GT0622 である。
7. 座標は、鎌倉市 4 級基準点 (日本測地系) を、世界測地系座標変換 Web 版 (TKY2JGD) を用いて世界測地系に変換した。

H186(X=-77,164.432 Y=-27,631.386) → (X=-76,807.616 Y=-27,924.801)

H187(X=-77,128.794 Y=-27,633.032) → (X=-76,771.978 Y=-27,926.444)

原点 1 (X=-77,131.265 Y=-27,637.292) → (X=-76,774.448 Y=-27,930.704)

原点 2 (X=-77,136.276 Y=-27,636.430) → (X=-76,779.460 Y=-27,929.843)

水準は、鎌倉市 3 級基準点 B M 53312(L=30.080 m) から移動した仮 B M (17.471 m) を使用した。

## 本文目次

第一章 調査地点の歴史的環境	22
第1節 位置と歴史的環境	
第二章 調査の経過と概要	22
第1節 調査の経緯	
第2節 土層	
第三章 検出された遺構と遺物	25
第1節 第1面の遺構と遺物	
第2節 第2面の遺構と遺物	
第四章 まとめ	28

## 挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	23	図4 第2面全測図と住居址土層図	25
図2 調査区の設定	23	図5 出土した遺物	27
図3 第1面全測図と調査区東壁の土層図	24		

## 表目次

表1 出土遺物点数表	26
表2 遺物観察表	26

## 図版目次

図版1 調査地周辺	29	図版5 住居址1-2	33
図版2 調査区セクション	30	図版6 住居址1-3	34
図版3 1面全景	31	図版7 出土した遺物	35
図版4 住居址1-1	32		

# 第一章 調査地点の歴史的環境

## 第1節 位置と歴史的環境

調査地の鎌倉市極楽寺三丁目 330 番 6 地点は、極楽寺旧境内に含まれている。月影ヶ谷の入口付近、江ノ電踏切を越え谷奥に向かい南から北に延びる市道の右側に位置する。

極楽寺は正元元年(1259)、北条義時の三男、北条重時が創建『極楽寺縁起』。子の北条長時(六代執権)が文永四年(1267)、当時多宝寺にいた忍性を招き開山。正式名称「靈鷲山感応院極楽寺」。本尊は釈迦如来立像。最盛期には七堂伽藍、四十九支院を持ち寺勢を誇った。新田義貞の鎌倉攻めにより焼失、以後再建を繰り返すが現在は吉祥院を残すのみ。忍性は人々を救済するため施薬院・悲田院・施益院・福田院を設けた。

忍性は嘉元元年(1303)7月12日、極楽寺で没する(87歳)。墓は、極楽寺背後(奥の院)にあり、安山岩製で高さ357cmの五輪塔。国の重要文化財に指定されている。

調査地点のある月影ヶ谷は、冷泉為相の母で十六夜日記の作者、阿仏尼によって弘安二年(1279)の旅日記の中で、鎌倉の住まう所として描写されている。

### 鎌倉の住居

読み下し「あづまにてすむ所は、月かげのやつとぞいふなる。浦近き山もとにて、風いとあらし。山寺のかたはらなれば、のどかにすごくて、浪の音松のかぜたえず。都のおとづれは、いつしかおぼつかなきほどにしも、うつの山にてゆきあひたりし山ぶしのたよりにことづけ申たりし人の御許より、たしかなるたよりにつけて、ありし御返しと覺しくて。」

訳文「鎌倉で住むところの名は、月影の谷というそうだ。海岸に近い山裾で、風がひどく荒い。山寺(極楽寺)のそばなので、ひっそりと物寂しく、波の音、松風が絶えず聞こえるばかり、都からの音信が早速にも待ち遠しい折りしも、宇津の山で行きあった山伏に託しておことづけをした方の方から、確実な便に頼って、いつぞやのお返事と思われるお手紙をいただいた。」(十六夜日記 岩佐美代子訳 中世日記 紀行集 1994 新編日本古典文学全集 48)

現在、稲村小学校の北側、谷内に月影地藏堂がある。元々、月影ヶ谷(江戸時代初期に描かれたと考えられている極楽寺境内絵図内、月影ヶ谷に地藏堂が描かれる。)にあり、江戸時代に移されたと伝えられている。本尊は江戸時代の木造地藏菩薩立像である。

周辺の丘陵には姥ヶ谷横穴、一ノ谷・二ノ谷横穴と云った終末期の横穴式古墳が多く点在する。奈良時代、鎌倉郡方瀬郷に含まれていた地域で、正倉院御物古裂に方瀬郷の銘が見えている。鎌倉時代以前、古墳時代末期～平安時代(7～11世紀)から人々の生活が営まれていたことが伺える地域である。

# 第二章 調査の経過と土層

## 第1節 調査の経過

調査に先行して行われた、鎌倉市教育委員会による試掘調査の結果を基に、本調査は敷地内の専用住宅建設による掘削、削平で遺構面に影響が及ぶ駐車スペース部分 16.0㎡に対して行われた。

測量は、鎌倉市4級基準点(日本測地系)H186(X=-77,164.432 Y=-27,631.386)、H187(X=-77,128.794 Y=-27,633.032)を用いた後、世界測地系座標変換 Web 版(TKY2JGD)を用いて世界測地系に変換した。(例言 7 参照) 水準は、鎌倉市3級基準点BM 53312(L=30.080 m)から移動した仮BM(17.471 m)を使用した。



図1 調査地点と周辺の遺跡

- 極楽寺旧境内遺跡(No.291)
1. 調査地点 極楽寺3-330-6地点
  2. 極楽寺3-298-1外地点(田代1992)  
「東国歴史考古学研究所研究報告第25集」
  3. 極楽寺3-298-1外地点(齋木1998)  
「極楽寺旧境内遺跡」
  4. 極楽寺3-320-1地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-1」
  5. 極楽寺3-358・359地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22-2」
  6. 極楽寺3-359-8の一部地点(宮田2009)  
「極楽寺旧境内遺跡」
  7. 極楽寺3-335-3地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-2」
  8. 極楽寺3-340-5地点(継1992)  
「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
  9. 極楽寺2-18外地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16-1」  
五合枿遺跡(No.292)
  10. 極楽寺1丁目やぐら(田代・宗臺1998)  
「東国歴史考古学研究所調査研究報告15集」  
極楽寺前やぐら(No.129)
  11. 極楽寺1丁目地内(田代1996)  
「東国歴史考古学研究所研究報告第7集」
  12. 極楽寺1丁目地内(田代1996)  
「平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」  
極楽寺中心伽藍跡(No.290)
  13. 極楽寺2-10-6・3-2-3地点(玉林1980)  
「極楽寺旧境内遺跡」
  14. 極楽寺3-1028-1一部地点(汐見2007)  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23-2」
  15. 稲村ガ崎小学校第2グラウンド
  16. 忍性墓

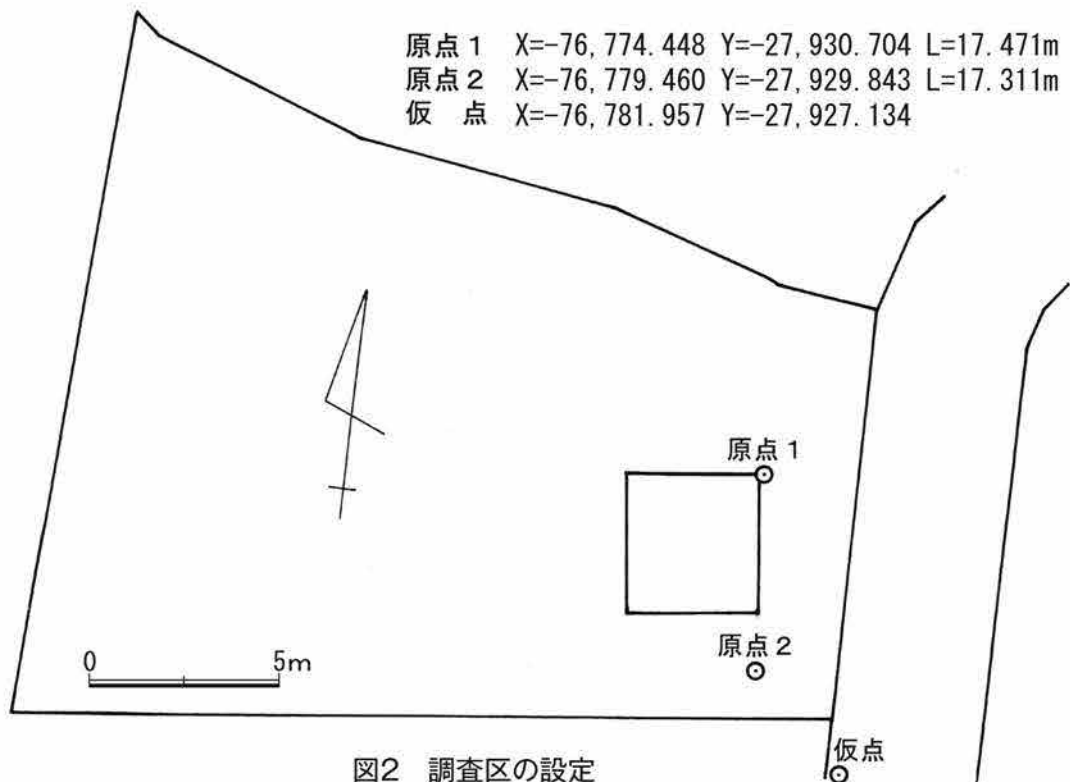
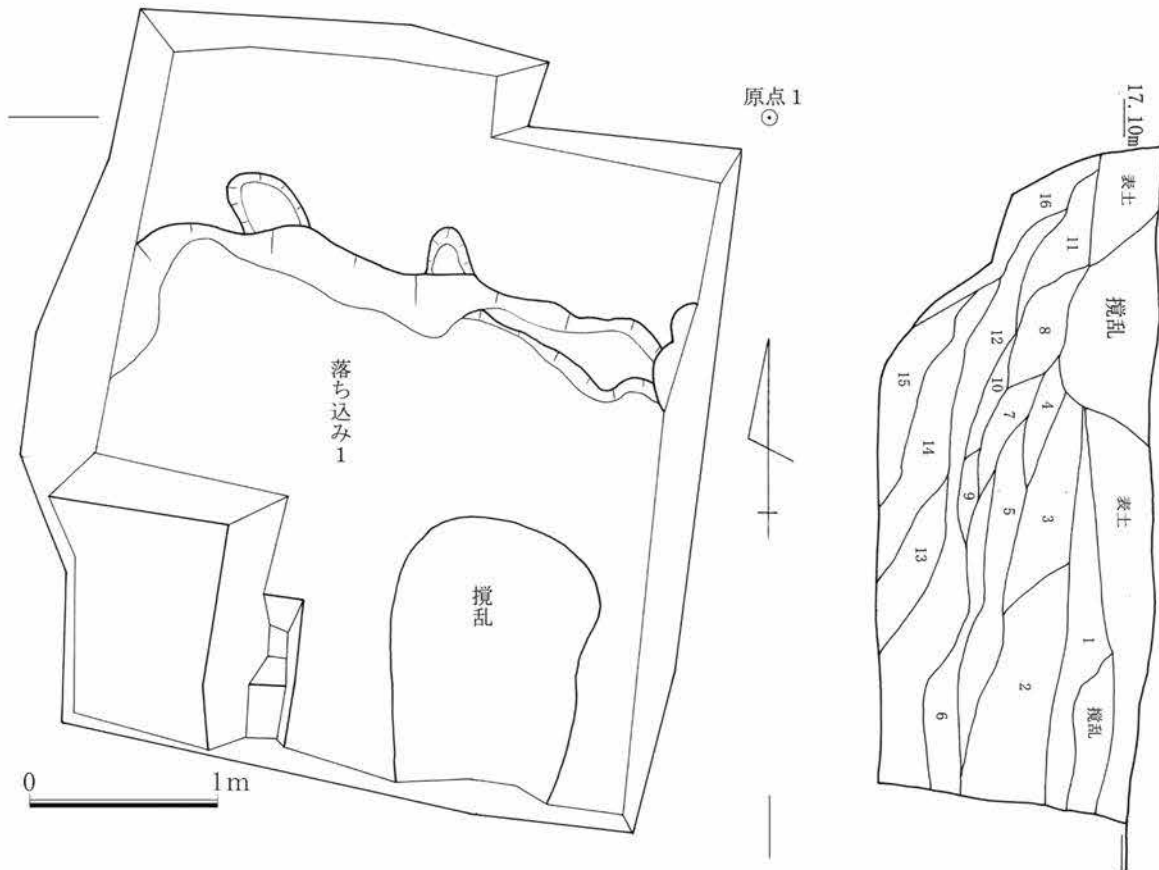


図2 調査区の設定

## 第2節 土層

現地表から遺構面までの間(34～90cm)はすべて盛土。ベースとなる基盤層は山際の岩盤～明黄褐色粘質土層(ローム層)。この基盤層からは古代の遺物(土器片)が出土する。古代の遺構の主体はやはり周辺の山際や谷の奥にあるものと推察される。



1. 黒褐色砂質土層(細かい土丹粒をごく少量含む)
2. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒、土師器片、炭を含む)
3. 茶褐色砂質土層(細かい土丹粒をごく少量含む)
4. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒含む、粘性有り)
5. 黒褐色砂質土層(焼土丹粒、炭をブロック状に含む)
6. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒、土師器片、炭を少量含む)
7. 茶褐色粘質土層(土丹粒、砂を含む)粘性強い
8. 灰茶色粘質土層(径1～3cm土丹粒をやや多く含む)
9. 茶褐色砂質土層(黄茶色粘質土がマーブル状に入る)
10. 茶褐色粘質土層(径1～5cmの土丹を少量含み、炭がブロック状に入る)
11. 淡茶灰色粘質土層(灰1～5cmの土丹を多く含む 締まり強く遺物無し)
12. 淡茶灰色粘質土層(径1～拳大の土丹を含む 締まり良い)
13. 淡茶灰色粘質土層(細かい土丹粒多く含み締まり良い)
14. 淡茶褐色粘質土層(径1～土丹を少量含み締まり強い 褐鉄含む)
15. 淡茶灰色粘質土層(径1～拳大の土丹含む)
16. 黄灰色粘質土層(人頭大の土丹多い 岩盤漸移層)
17. 茶褐色砂質土層、土坑1の覆土(炭、土師器片、径1～3cmの土丹粒を含む)
18. 茶褐色砂質土層、土坑2の覆土

図3 第1面全測図と調査区東壁の土層図

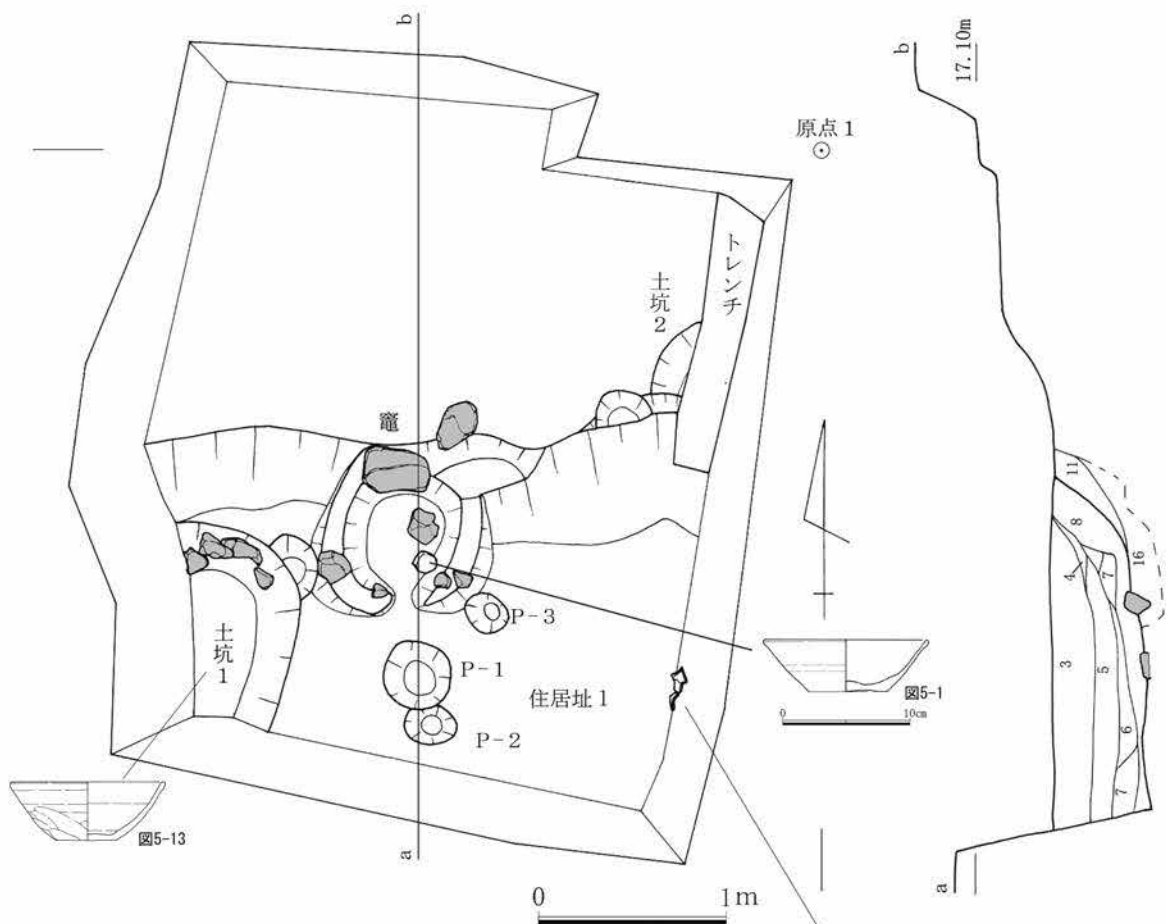
### 第三章 検出された遺構

#### 第1節 第1面の遺構と遺物 (図3・5)

##### a. 落ち込み

調査区の東西幅、約3mが南側に向かい段差約25～30cmで落ち込んでいるのが検出された。全体が大きく削平を受けているものと考えられ、土層を観察するといわゆるレンズ状堆積が見られた。比較的深結果的には、第2面で検出された竪穴住居址の廃絶後、埋没してゆく過程の窪みであることが判明した。

掘り下げる途中で、中世遺物(常滑甕 図5-19、かわらけ 図5-20、白磁口元皿 図5-21)と土師器片が出土している。



3. 茶褐色砂質土層(細かい土丹粒をごく少量含む)
4. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒含む、粘性有り)
5. 黒褐色砂質土層(焼土丹粒、炭をブロック状に含む)
6. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒、土師器片、炭を少量含む)
7. 茶褐色粘質土層(土丹粒、砂を含む)粘性強い
8. 灰茶色粘質土層(径1～3cm土丹粒をやや多く含む)
11. 淡茶灰色粘質土層(灰1～5cmの土丹を多く含む 締まり強く遺物無し)
15. 淡茶灰色粘質土層(径1～拳大の土丹含む)
16. 黄灰色粘質土層(人頭大の土丹多い 岩盤漸移層)
17. 茶褐色砂質土層、土坑1の覆土(炭、土師器片、径1～3cmの土丹粒を含む)
18. 茶褐色砂質土層、土坑2の覆土

図4 第2面全測図と住居址土層図

## 第2節 第2面の遺構と遺物（図4・5）

### a. 住居址1

第1面で検出した落ち込みの真下で、竪穴住居址の北辺を長さ3m分確認したものである。

調査範囲が狭いため、北辺のみの検出で規模を把握するには至らなかった。検出した住居址北辺のほぼ中央で竈を確認した。竈から北側に延びる煙道は、削平のために確認することができなかった。

確認した住居址の壁の残存高は最大で50cmである。

1面から住居の掘り下げ中で、土師器甕片69点、土師器坏2点、須恵器甕6点、須恵器坏11点が出土した。2面のそのほとんどが住居址内の床面である。2面・床面、竈周囲の土坑1、柱穴内から土師器甕16点、土師器坏3点、須恵器坏3点、鉄滓1点が出土している。

鉄滓としたものは、非常に重く、踏鞴製鉄の際にでる不純物である「ノロ」と云うよりも、金属塊と

表1 出土遺物点数表

	1面まで	1面	住居床まで	2面・住居床	土坑1	P-1	P-2	点数
土師器甕	8	3	69	5	1	7	3	96
土師器坏			2	2	1			5
須恵器甕			6					6
須恵器坏	1		11	2	1			15
鉄滓				1 (580g)				1
常滑甕	6							6
かわらけ	3	1						4
白磁碗	1							1
棧瓦	25							25
点数	44	4	88	10	3	7	3	計 159点

表2 遺物観察表

図番号	面・遺構	種別	法量（口径・底径・器高）	観察
1	2面・住居床面まで	須恵器坏	口13.0cm・底6.0cm・高4.1cm	南比企窯？口縁少し肥厚 9c中
2	〃	須恵器坏	口不明・底5.2cm・高不明	南比企窯 年代観不明
3	〃	土師器坏	口不明・底6.6cm・高不明	全体に摩滅 黒色粒含む精良土 年代観不明
4	〃	土師器台付甕	口18.0cm・底不明・高不明	武蔵型 口縁の屈曲が〔字9c以降
5	〃	〃	口22.0cm・底不明・高不明	武蔵型 口縁の屈曲が〔字9c以降
6	〃	〃	口23.8cm・底不明・高不明	武蔵型 口縁の屈曲が〔字9c以降
7	〃	土師器長胴甕	口不明・底不明・高不明	相模型 年代観不明
8	〃	土師器台付甕	口不明・底不明・高不明	脚台部 胎土精良金雲母含む 年代観不明
9	2面・住居床面	土師器台付甕	口13.2cm・底不明・高不明	武蔵型 4～6と同じか 9c以降
10	〃	〃	口不明・底10.6cm・高不明	武蔵型 脚台部 年代観不明
11	〃	須恵器坏	口12.5cm・底不明・高不明	南多摩窯 or 南比企窯 1と同じ頃か
12	〃	須恵器蓋？	口14.4cm・底不明・高不明	南比企窯か 口縁反りが無いので蓋とした
13	2面・土坑1	土師器坏	口12.2cm・底4.8cm・高4.6cm	甲斐型坏 体部ナメハズリ 9c後半代
14	〃	土師器台付甕	口不明・底不明・高不明	武蔵型か 年代観不明
15	〃	須恵器坏	口不明・底不明・高不明	南多摩窯か 御殿山59窯式以降 9c中葉以降



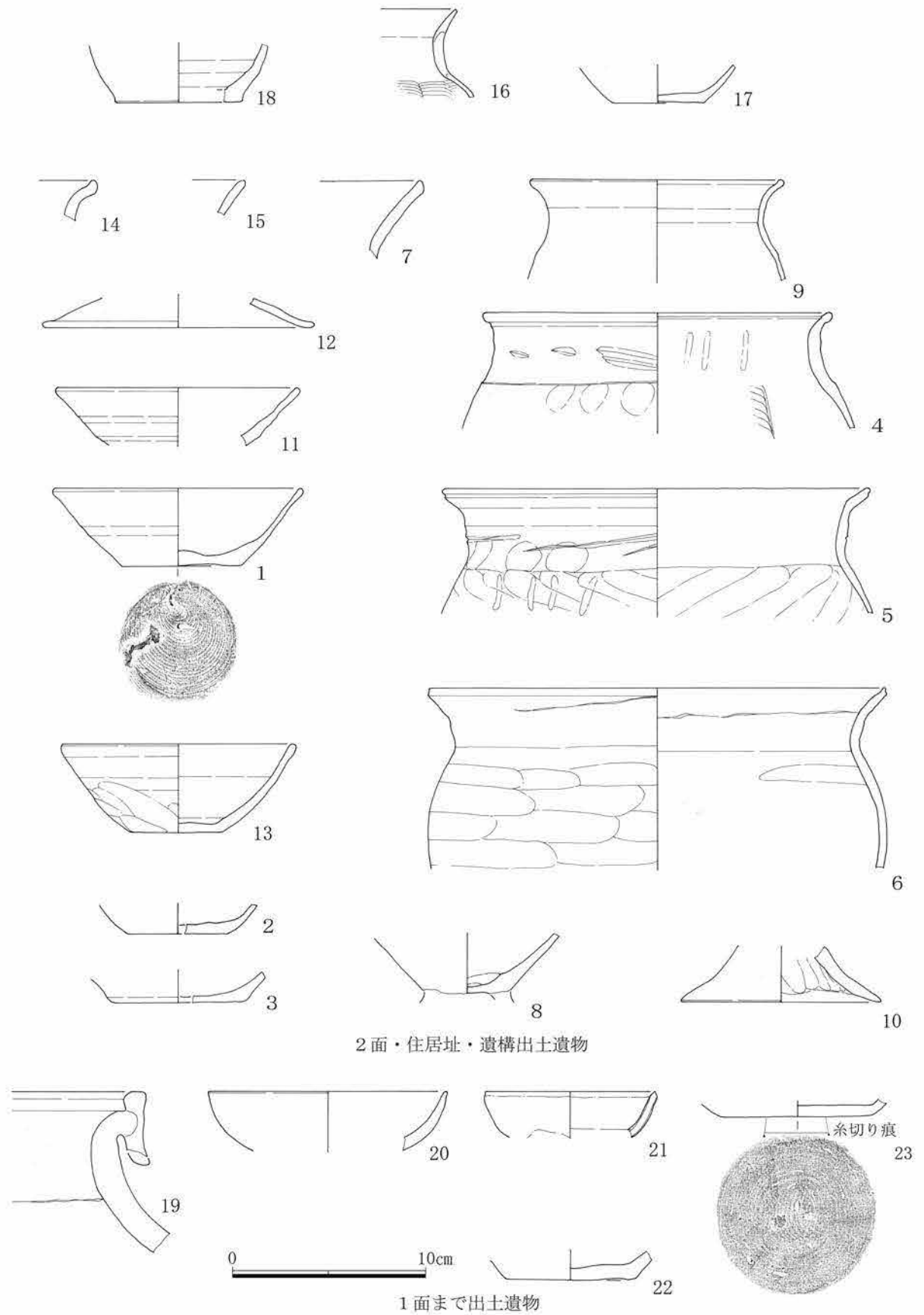


図5 出土した遺物

図番号	面・遺構	種別	法量(口径・底径・器高)	観察
16	2面P-2	土師器台付甕	口不明・底不明・高不明	武蔵型 4～6 と同じか 9c以降
17	2面土坑2	須恵器坏	口不明・底 4.8cm・高不明	南多摩窯か 年代観不明
18	2面Tr	須恵器坏	口不明・底 6.6cm・高不明	南比企窯 or 東金子窯か 年代観不明
19	1面まで	常滑甕	口不明・底不明・高不明	口縁部片 6b型式 13c後半
20	〃	かわらけ	口 12.6cm・底不明・高不明	白針含む精良土 焼成良好
21	〃	白磁口元皿	口 9.0cm・底不明・高不明	胎土きめ細かく乳白色の釉
22	〃	須恵器坏	口不明・底 7.0cm・高不明	南多摩窯 or 南比企窯 焼きが甘い 年代不明
23	〃	須恵器坏	口不明・底 8.0cm・高不明	南比企窯 底部糸切り→回転ヘラズリ 8c後葉
24	2面・住居床面	鉄滓(ケラ)	重さ 580g	底面形、碗状に丸みを帯びる

して残った「ケラ」の可能性はある。「ケラ」は打ち砕かれ、日本刀の原料である良質の玉鋼と鉄器の材料である「ずく」分けられるものである。谷戸の西側、約 50 m 離れた極楽寺三丁目 358 番外地点遺跡(図 1-5)の 13 世紀後葉の溝の中から砂鉄と思われる磁石に付着する黒砂が出土している。

#### b. 土坑

##### 土坑 1

竈の左側に位置する直径 60cm 程の落ち込みで、焼けた土丹が確認されている。出土した土師器坏と床面出土の土師器坏(図 5-13)が接合した。このことから土坑は囲炉裏等の住居に伴う遺構と考えられよう。遺物は土師器甕 1 点、土師坏 1 点が出土している。

##### 土坑 2

トレンチを開けたときに検出された。住居址を切って掘り込まれていることから、住居址 1 より新しいと考えられる。年代不明の須恵器坏小片出土。

#### c. 柱穴

##### 柱穴 2

土師器台付甕片出土。住居址床面出土の遺物と同じ武蔵型の台付甕である。住居に伴う遺構と考えられるが、深さは浅い。

## 第四章 まとめ

今回の調査で、中世の遺構は確認されなかったが、不完全ながら竪穴住居址を検出・確認することができた。

住居址から出土した遺物は武蔵型の土師器甕・甲斐型坏、南比企窯、南多摩窯の須恵器甕・坏の組合せで、床面や伴う遺構から出土した遺物の年代観は 9 世紀後半を前後するものが中心であった。1 点、1 面までの出土ではあるが、8 世紀後葉代の南比企窯の須恵器坏が出土している。

また床面からの「ケラ」の出土は、近在でたたら(鑪・踏鞴)が行われていた可能性を示唆するもので興味深い。周辺の山稜地は金山と呼ばれ砂鉄が産出し、極楽寺の谷戸から流れ出る極楽寺川、稲村ヶ崎脇の河口、七里ヶ浜では現在でも海岸線が黒く砂鉄を見ることができる。

周辺の終末期の横穴墓古墳群(市史考古編 1959)の存在から見ても、七里ヶ浜一帯から極楽寺周囲の谷戸奥まで古墳時代以降人々の生活が営まれ、調査地点は中心からは外れるかもしれないが、少なくとも 8 世紀以降には多くの集落があったことを伺わせるものである。



1. 針磨橋付近 (奥が月影ヶ谷)

2. 月影ヶ谷 水準点より北に向かって(谷奥に)



3. 月影ヶ谷 水準点より南に向かって(海方向)



調査地周辺

図版2



1. 調査区北壁



2. 調査区西壁



3. 調査区東壁



東壁際で検出した土師器甕  
図5-4

4. 調査区南壁



調査区セクション



1. 1面全景(南東から)

2. 1面全景(南から)



3. 1面全景(北から)

4. 1面全景(東から)



1面全景





1. 住居址1(東から)



2. 住居址1(南から)



3. 住居址1(北から)



鉄滓出土状況(図版7-24)



須恵器出土状況(図版7-1)



4. 住居址1(須恵器出土状況)

住居址1-1

1. 住居址1竈(正面)



2. 住居址1竈(セクション)



3. 住居址1竈(東から)



住居址1-2



1. 住居址 1 完掘 (南から)



2. 住居址 1 完掘 (北から)



3. 住居址 1 と土坑 1・2 (西から)



4. 住居址 1 と土坑 1・2 (東から)

住居址 1 - 3





出土した遺物



# 北条小町邸跡 (No. 282)

雪ノ下一丁目 427 番 2 外地点

## 例 言

1. 本報は、「北条小町邸跡」(No. 282)内、雪ノ下一丁目 427 番 2 外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間 2007 年(平 19) 6 月 25 日～2007 年(平 19) 8 月 23 日
3. 調査面積 51.00m<sup>2</sup>
4. 略 称 YYT1427
5. 調査体制
  - 担 当 者 馬淵和雄
  - 調 査 員 鍛冶屋勝二・鈴木弘太・松原康子・岩崎卓司(資料整理)・岡田慶子(同前)・沖元道(同前)・本城裕(同前)
  - 調査補助員 佐藤あおい・若松慶・佐藤千尋(資料整理)・田中聡(同前)
  - 作 業 員 鯉沼稔・佐野吉男・田島道夫・渡辺輝彦(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)
6. 本報作成分担
  - 遺構図整理 沖元
  - 遺物実測 岩崎・本城
  - 同墨入れ 岩崎
  - 同観察表 岡田・沖元
  - 同計量表 沖元・佐藤(千)
  - 同写真撮影 馬淵
  - 図版作成 岡田・沖元・佐藤(千)
  - 原稿執筆 沖元
  - 編 集 沖元
7. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下を参考にした。
  - 土師器皿：馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
  - 瓦 瓦：原 廣志 2002「第 4 章 出土瓦について」『永福寺跡－遺物・考察編－』鎌倉市教育委員会
  - 瀬 戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
  - 常 滑：中野晴久 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
  - 渥 美：安井俊則 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
  - 貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』

本報告作成に際し、次の方々の御教示を得た。記して感謝したい。

押木弘己・汐見一夫・原廣志・松島義章

## 目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	41
第1節. 位置と地勢	
第2節. 歴史的環境	
第二章 調査の概略	52
第1節. 調査にいたる経緯	
第2節. 調査の経過	
第3節. 調査方法	
第三章 調査結果	54
第1節 概要	
1. 層序と面の概要	
第2節 各説	
1. I a面	
2. I b面	
3. I c面	
4. II面	
5. 最終確認トレンチ	
6. 表採・攪乱坑出土遺物	
第四章 まとめと考察	96
第1節. 遺構の変遷と年代	
第2節. 調査地点周辺の土地造成について	

## 挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	42	図17 土坑6・11・14・20、同出土遺物	71
図2 明治15年頃の調査地点周辺	46	図18 土坑16・17、I a構築土出土遺物	72
図3 調査区設定図	53	図19 土坑16・17出土遺物	73
図4 調査区・土層断面図	55	図20 土坑18・19・I b面ピット・I b面 構築土出土遺物	74
図5 I a面遺構全図、I a面出土遺物(1)	59	図21 I c面遺構全図、同出土遺物、 溝2、同出土遺物	75
図6 I a面出土遺物(2)・土師器皿小片 集中部出土遺物	60	図22 建物5、同出土遺物	77
図7 建物1、同出土遺物	61	図23 建物6、同出土遺物	78
図8 建物2、同出土遺物	62	図24 土坑10・P.65、同出土遺物、 I c面ピット出土遺物	79
図9 建物3・4、同出土遺物	63	図25 II面遺構全図、溝状遺構	81
図10 落込み1、同出土遺物	64	図26 竪穴遺構・性格不明遺構・ 土坑21・22・23	82
図11 土坑1、同出土遺物	65	図27 最終確認トレンチ設定図、 表採・攪乱坑出土遺物	83
図12 土坑2・3・7・8・9・12、 同出土遺物	66	図28 遺構変遷図	97
図13 土坑13・P.12・13・14・34・75、 同出土遺物	67	図29 土地造成模式図	98
図14 I a面ピット出土遺物	68		
図15 I b面遺構全図、I b面出土遺物	69		
図16 柱穴列1・溝1・土坑4・P.29・ 土坑5、同出土遺物	70		

## 表 目 次

表 1 出土遺物観察表 (1) ..... 85	表 7 出土遺物観察表 (7) ..... 91
表 2 出土遺物観察表 (2) ..... 86	表 8 出土遺物観察表 (8) ..... 92
表 3 出土遺物観察表 (3) ..... 87	表 9 出土遺物観察表 (9) ..... 93
表 4 出土遺物観察表 (4) ..... 88	表 10 出土遺物計量表 (1) ..... 94
表 5 出土遺物観察表 (5) ..... 89	表 11 出土遺物計量表 (2) ..... 95
表 6 出土遺物観察表 (6) ..... 90	

## 図 版 目 次

図版 1 ..... 101	7 - 3 I b・I c 面土坑 6 (西から)
1 - 1 調査地点入口 (西から)	7 - 4 I b 面 P120 (南から)
1 - 2 調査地点へいたる路地	図版 8 ..... 108
1 - 3 調査地点周辺	8 - 1 I b・I c 面 P53 (南から)
1 - 4 若宮大路からのぞむ東西道	8 - 2 2 区 I c 面全景 (南から)
図版 2 ..... 102	8 - 3 2 区 I c 面全景 (西から)
2 - 1 2 区 I a 面全景 (西から)	8 - 4 2 区 I c 面全景 (北から)
2 - 2 I a 面土坑 1 (西から)	図版 9 ..... 109
2 - 3 I a 面土坑 2 (東から)	9 - 1 2 区 I c 面全景 (東から)
2 - 4 I a 面落込み 1 (北から)	9 - 2 2 区 II 面全景 (西から)
図版 3 ..... 103	9 - 3 2 区 II 面全景 (北から)
3 - 1 I a 面 P.42 (南西から)	9 - 4 2 区 II 面全景 (東から)
3 - 2 I a 面 P.75 掘削前 (東から)	図版 10 ..... 110
3 - 3 I a 面 P.75 安山岩 (伊豆石) 検出状況 (東から)	10 - 1 2 区 II 面全景 (南から)
3 - 4 I a 面 P.75 平瓦検出状況 (東から)	10 - 2 II 面溝状遺構 (東から)
図版 4 ..... 104	10 - 3 1 区 II 面西北隅 (北から)
4 - 1 I a 面 P.2 (南から)	10 - 4 II 面竪穴遺構 (西から)
4 - 2 1 区 I b・I c 面全景 (東から)	図版 11 ..... 111
4 - 3 1 区 I b・I c 面全景 (西から)	11 - 1 2 区土坑 22 (北から)
4 - 4 1 区 I b・I c 面全景 (南から)	11 - 2 1 区最終確認トレンチ南壁土層断面
図版 5 ..... 105	図版 12 ..... 112
5 - 1 2 区 I b 面全景 (南から)	12 - 1 1 区東壁土層断面
5 - 2 2 区 I b 面全景 (西から)	12 - 2 1 区南壁土層断面
5 - 3 I b・I c 面土坑 4 (西から)	図版 13 ..... 113
5 - 4 I b 面土坑 17 (西から)	13 - 1 2 区西壁土層断面
図版 6 ..... 106	13 - 2 1 区西壁 (調査区境界) 土層断面
6 - 1 I b 面土坑 16 (南から)	図版 14 出土遺物 1 ..... 114
6 - 2 I b 面土坑 16・17 土層断面 (南西から)	図版 15 出土遺物 2 ..... 115
図版 7 ..... 107	図版 16 出土遺物 3 ..... 116
7 - 1 I b 面土坑 18・P106 (南から)	
7 - 2 I b 面土坑 10・P65 土層断面 (北から)	

# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節. 位置と地勢

### 地勢

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにほぼ平行した東西2本の南北大路、および直交する何本かの東西道路により区画される。市街地のほとんどの地下には中世都市遺跡が存在するが、このうち若宮大路東側の鶴岡八幡宮前面（南）にある一辺約200mの方形区画が、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市No.282）として登録されている。この区画は西辺を若宮大路、東辺を小町大路、北辺は鶴岡八幡宮前の東西道路に囲まれ、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正亭のあった場所ともいわれるが（秋山1996・1997・2006）、この点については後述する。

調査地点は、鶴岡八幡宮前の東西道路から約160m南下し、若宮大路から東に約100m、小町大路から西に100mと、東西からはほぼ中心にある。現在の地番は鎌倉市雪ノ下一丁目427番2ほか。

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のようになる。鎌倉市東辺の山中に源を発した滑川は、西進しつつ、現在の十二所から浄明寺にかけての狭い谷を開析したあと、大倉の辺から南に向きを変えて市内中心部に沖積平野を形成しつつ、相模湾に流れ込む。この間中流域から下流では左岸の山裾を削り、右岸に河岸段丘が作られるが、調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。滑川までは約250m、現在の標高は前面の小町大路面で10.2m前後、中世期には、削平されて詳しいことは不明だが、中世基盤層はほぼ9.0～9.3m程度となっている。現況で西の若宮大路は標高8.2mほど、東の小町大路は標高9.0～9.5mほどとなっている。

## 第2節. 歴史的環境

### 縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地は全体的に水面下であったと考えられる。旧市内では荏柄天神社前の民家での井戸掘削時に諸磯式と阿玉台式（赤星1959）、15世紀以降に人為的に滑川を埋めた土中から加曾利E式と縄文晩期から弥生前期にかけての土器（馬淵2014）、現在の横浜国大付属小学校敷地内から称名寺式（赤星1959）の出土が知られる程度で、全体的にきわめて乏しい。

上本進二氏によれば、当初鎌倉中心部の沖積平野中心部を流れていた古滑川が、現在の位置に近い東の山裾に流路を変えるのは縄文時代晩期から弥生中期にかけてである（上本2000）。

調査地点一帯で人の生活痕跡が確認されるのは弥生時代中期後半からである。この時期以降、大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成され（馬淵1998・1999）、当地点付近でも中世層の中からはしばしば宮ノ台式や久ヶ原式の土器が出土する。

古墳時代の集落・住居址は、海岸部の砂丘上、二階堂付近の平坦な微高地で発見されているが、当地点付近ではまだ例がない。地点35において古墳時代土師器が出土する中世基盤層下層の粘土層内の花粉分析が行われている。この結果、イネ科のプラントオパールが検出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある（鈴木1996）。

### 律令期～平安時代後期

鎌倉の史料上の初出は、天平七年（735年）の裏書を持つ『相摸国封戸租交易帳』（『正倉院文書』正集十八『神奈川県史 資料編』1-58）に鎌倉郡鎌倉郷とあるものである。この『相摸国封戸租交易



図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡 (1/5000)



北条小町邸跡 (No. 282) 本調査地点 雪ノ下一丁目 427 番 2 外 1. 雪ノ下一丁目 377-6・7 (1994 調査) 馬淵ほか 1996「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-2」鎌倉市教育委員会 2. 雪ノ下一丁目 374-2 (1985 調査) 玉林ほか 1985「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2」鎌倉市教育委員会 3. 雪ノ下一丁目 407-3 の一部 (2002 調査) 原ほか 2005「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21-2」鎌倉市教育委員会 4. 雪ノ下一丁目 395 (1988 菊川) 菊川 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 5. 雪ノ下一丁目 372-7 (1984 調査) 馬淵 1985「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1」鎌倉市教育委員会 6. 雪ノ下一丁目 371-1 (1984 調査) 馬淵 1985「北条泰時・時頼邸跡」北条泰時・時頼邸跡発掘調査団 7. 雪ノ下一丁目 403-14 (2013 調査) 8. 雪ノ下一丁目 401-5 他 (2001 調査) 馬淵ほか 2003「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19」鎌倉市教育委員会 9. 雪ノ下一丁目 400-1 (2000 調査) 馬淵ほか 2002「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-2」鎌倉市教育委員会 10. 雪ノ下一丁目 370-1 (1996 調査) 土屋・宗臺富 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-1」鎌倉市教育委員会 11. 雪ノ下一丁目 369 他 (1989 調査) 12. 雪ノ下一丁目 369 (1990 調査) 瀬田 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7」鎌倉市教育委員会 13. 雪ノ下一丁目 369-1 (1996 調査) 原ほか 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-2」鎌倉市教育委員会 14. 雪ノ下一丁目 367-1・368-1 (1998 調査) 森ほか「北条小町邸跡 (泰時・時頼邸跡) 発掘調査報告書」北条小町邸跡発掘調査団 15. 雪ノ下一丁目 419-3 (1986 調査) 玉林 1987「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 3」鎌倉市教育委員会 16. 雪ノ下一丁目 432-2 (1988 調査) 菊川 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 17. 雪ノ下一丁目 440 の一部 (2004 調査) 馬淵ほか 2010「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26-1」鎌倉市教育委員会

史跡 鶴岡八幡宮境内 18. (1979 調査) 宮田ほか 1983「直会殿用地発掘調査報告書」鎌倉市鶴岡八幡宮 19. (1982 調査) 松尾 1985「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 20. (1981-1982 調査) 齋木ほか 1983「研修道場用地発掘調査報告書」鎌倉市鶴岡八幡宮

政所跡 (No. 247) 21. 雪ノ下三丁目 965 (1990 調査) 瀬田 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 22. 雪ノ下三丁目 966-1 (1990 調査) 瀬田 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 23. 雪ノ下三丁目 971-6 (1997 調査) 24. 雪ノ下三丁目 970-2 外 (1997 調査) 野本 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-2」鎌倉市教育委員会 25. 雪ノ下三丁目 989-4 (1999 調査) 宗臺秀ほか 2001「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-1」鎌倉市教育委員会 26. 雪ノ下三丁目 988 (1991 調査) 手塚・田畑 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3」鎌倉市教育委員会 27. 雪ノ下三丁目 987 - 1・2 (1990 調査) 手塚・宮田 1991「政所跡」政所跡発掘調査団

宇津宮辻子幕府跡 (No. 239) 28. 小町二丁目 366-1 (1990 - 1991 調査) 田畑 1991「第 1 回鎌倉市遺跡調査・発表会発表要旨」鎌倉考古学研究所・中世都市研究会 29. 小町二丁目 361-1 (1996 調査) 原ほか 1996「宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書」宇津宮辻子幕府跡発掘調査団 30. 小町二丁目 360-1 (2012 調査) 31. 小町二丁目 354-2 (1997 調査) 32. 小町二丁目 354-12 外 (1991 調査) 熊谷ほか 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3」鎌倉市教育委員会 33. 小町二丁目 374-1 (1998 調査) 原 1998「第 22 回神奈川県遺跡調査・研究会発表要旨」神奈川県考古学会 34. 小町二丁目 354-2 (1992 調査) 継 1993「第 3 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨」鎌倉考古学研究所・中世都市研究会 35. 小町二丁目 389-1 (1994 調査) 原・佐藤 1996「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-1」鎌倉市教育委員会 36. 小町二丁目 390-2 外 (2004 調査) 宇都 2010「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26」鎌倉市教育委員会

北条時房・顕時邸跡 (No. 278) 37. 小町一丁目 264-4 (2002 調査) 福田ほか 2005「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21-1」鎌倉市教育委員会 38. 雪ノ下一丁目 265-3 (1988 調査) 田代・原 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会、宗臺秀・宗臺富 1999「北条時房・顕時邸跡」東国歴史考古学研究所 39. 雪ノ下一丁目 267-2・4 (2010 調査) 熊谷 2014「北条時房・顕時邸跡発掘調査報告書」株式会社博通 40. 雪ノ下一丁目 269-1 (2006 調査) 41. 雪ノ下一丁目 271-1 (1987 調査) 原・田代 1989「北条時房・顕時邸跡」北条時房・顕時邸跡発掘調査団 42. 雪ノ下一丁目 271-3 (1998 調査) 馬淵 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-2」鎌倉市教育委員会 43. 雪ノ下一丁目 271-4 (1998 調査) 馬淵 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-2」鎌倉市教育委員会 44. 雪ノ下一丁目 272 (1996 調査) 宗臺秀・宗臺富 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-1」鎌倉市教育委員会 45. 雪ノ下一丁目 273 - ロ (1986 調査) 原ほか 1988「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4」鎌倉市教育委員会 46. 雪ノ下一丁目 273- イ (1997 調査) 瀬田ほか 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-1」鎌倉市教育委員会、齋木ほか 1999「北条時房・顕時邸跡」北条時房・顕時邸跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 47. 雪ノ下一丁目 236-1 (2004 調査) 原 2010「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26-1」鎌倉市教育委員会 48. 雪ノ下一丁目 233-9 (1986 調査) 馬淵 1987「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 3」鎌倉市教育委員会 49. 雪ノ下一丁目 274-2 (1986 調査) 原・福田 1988「北条時房・顕時邸跡」北条時房・顕時邸跡発掘調査団 50. 雪ノ下一丁目 234-3 (2008 調査)

北条高時邸跡 (No. 281) 51. 小町三丁目 451-1 (2004 調査) 菊川・森 2004「北条高時邸跡」株式会社齊藤建設 52. 小町三丁目 426-3 (1994 調査) 原 1996「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-1」鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 53. 小町三丁目 425-3 (2005 調査) 原・宇都 2013「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-1」鎌倉市教育委員会 54. 小町三丁目 425-1 外 (2005 調査) 原・宇都 2012「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28-1」鎌倉市教育委員会 55. 小町三丁目 422-2 外 (2005 調査) 伊丹ほか 2013「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-1」鎌倉市教育委員会 56. 小町三丁目 418-5 (2010 調査) 57. 小町二丁目 402-9 外 (2004 調査) 馬淵・伊丹 2007「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23-2」鎌倉市教育委員会 58. 小町二丁目 402-5 (1999 調査) 手塚・野本 2001「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-1」鎌倉市教育委員会 59. 小町二丁目 408-4 外 2 筆 (2008 調査) 熊谷 2009「若宮大路周辺遺跡群」鎌倉遺跡調査会 60. 小町二丁目 364-17 (2009 調査) 押木「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30-2」鎌倉市教育委員会 61. 小町二丁目 349-1 の一部 (2008 調査) 62. 小町二丁目 345-2 (1983 調査) 馬淵 1985「小町 2-345 番 2 地点遺跡発掘調査報告書」小町二丁目 345 番 -2 地点遺跡発掘調査報告書 63. 小町一丁目 321-1 (1993 調査) 宮田 1996「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群 (鎌倉警察署構内) 発掘調査団 64. 小町一丁目 322-2 (1987 調査) 1989「神奈川県埋蔵文化財調査報告 30」神奈川県教育委員会 65. 小町一丁目 325- イ (1992 - 1993 調査) 佐藤・原 1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10-3」鎌倉市教育委員会 66. 小町一丁目 319-2 (1978 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会 67. 小町一丁目 309-5 (1982 調査) 齋木 1983「小町一丁目 390 番 5 地点発掘調査報告」(推定) 藤内定員邸跡発掘調査団 68. 小町一丁目 309-4 (1978 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会 69. 小町一丁目 322-1 (1992 調査) 宮田 1997「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡発掘調査団 70. 小町一丁目 329-1 (2010・2011・2012 調査) 滝澤・安藤 2014「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社博通 71. 小町一丁目 329-7 (2013 調査) 72. 小町一丁目 331-1 (2012 調査) 73. 小町一丁目 333-15 (2010 調査) 74. 小町

一丁目 333-2 (2007 調査) 原「貿易陶磁研究 28」貿易陶磁研究会 75. 小町一丁目 891 (1979・1980 齋木) 齋木 1985「(推定) 藤内定員跡遺跡」鎌倉市教育委員会 76. 小町一丁目 305・308 (1975 齋木) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I」鎌倉市教育委員会 77. 小町一丁目 302 (1977 調査) 78. 小町一丁目 302 (1982 調査) 79. 小町一丁目 287-13 (1992 調査) 齋木 1992「鎌倉考古 22」鎌倉考古学研究所 80. 小町一丁目 276-18・22・38 (2005 調査) 宮田 2006「若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書」株式会社博通 81. 小町一丁目 1028-1 (1990 調査) 大河内 1997「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 82. 大町一丁目 1032-1 (1982 調査) 神奈川県教育委員会 1984「神奈川県埋蔵文化財調査報告 26」神奈川県教育委員会 83. 大町 1084-4 (2007 調査) 84. 大町一丁目 1034-9 (2010 調査) 85. 雪ノ下一丁目 148-4・190-1 (2013 宮田) 86. 雪ノ下一丁目 187-4 (2008 調査) 87. 雪ノ下一丁目 200-3 (2001 調査) 宗臺秀・宗臺富 2003「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19」鎌倉市教育委員会 88. 雪ノ下一丁目 210 (1988 調査) 馬淵 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会 89. 雪ノ下一丁目 198-1 (2002 調査) 神奈川県教育委員会 2003「神奈川県埋蔵文化財調査報告 45」神奈川県教育委員会 90. 雪ノ下一丁目 198-6 (1998 調査) 小林ほか 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-1」鎌倉市教育委員会 91. 小町二丁目 39-6 (1987-88 調査) 田代ほか 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 92. 小町二丁目 24-14 (2007 調査) 93. 小町二丁目 24-20 (2007 調査) 滝澤 2010「若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書」株式会社博通 94. 小町二丁目 43-2 (2008 調査) 95. 小町二丁目 54-3 (1998 調査) 原 2000「第 8 回鎌倉市内遺跡調査・研究発表会」96. 小町二丁目 276 他 (1987 調査) 神奈川県教育委員会 1990「神奈川県埋蔵文化財調査報告書 31」神奈川県教育委員会 97. 小町二丁目 279-2 (1989 調査) 神奈川県教育委員会 1991「神奈川県埋蔵文化財調査報告 33」神奈川県教育委員会 98. 小町二丁目 280-3・12 (1999 調査) 齋木・降矢 1999「鎌倉考古 45」鎌倉考古学研究所 99. 小町二丁目 280-2 (1989 調査) 田代・原 1990「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会 100. 小町二丁目 280-18 (1982 調査) 神奈川県教育委員会 1984「神奈川県埋蔵文化財調査報告 26」神奈川県教育委員会 101. 小町二丁目 48-10 外 (2003 調査) 原 2009「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25-1」鎌倉市教育委員会 102. 小町二丁目 281-2 (2012 調査) 103. 小町二丁目 281-1 (1989 調査) 神奈川県教育委員会 1991「神奈川県埋蔵文化財調査報告 33」神奈川県教育委員会 104. 小町二丁目 281 (1977 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I」鎌倉市教育委員会 105. 小町二丁目 28-3・5 (1996 調査) 原ほか 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-2」鎌倉市教育委員会 106. 小町二丁目 69-6 (1989 調査) 田代・原 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7」鎌倉市教育委員会 107. 小町二丁目 19 外 (2009 調査) 108. 小町二丁目 5-27・32・34・35 (2013 調査) 109. 小町二丁目 12-15 (1990 調査) 菊川 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 110. 小町二丁目 12-18 (1987 調査) 馬淵 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 111. 小町二丁目 11-2 (2005 調査) 森 2012「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28-1」鎌倉市教育委員会 112. 小町二丁目 12-10 (1991 調査) 大河内 1991「鎌倉考古 20」鎌倉考古学研究所 113. 小町二丁目 63-3 (1992 調査) 齋木ほか 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-1」114. 小町二丁目 5-8 (1997 調査) 福田ほか 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-1」鎌倉市教育委員会 115. 小町二丁目 5-7 (2012 調査) 116. 小町二丁目 281-16・26・36・283-9・10 (2013 調査) 117. 小町二丁目 4-19 (1990 調査) 118. 小町二丁目 4-4 (1989 調査) 119. 小町二丁目 283-6 (1997 宮田) 宮田 1998「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 120. 小町二丁目 5-23 (1989 福田) 福田 1990「鎌

倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会 121. 小町二丁目 4-6 (1986 調査) 神奈川県教育委員会 1989「神奈川県埋蔵文化財調査報告 30」神奈川県教育委員会 122. 小町二丁目 4-9 (1996 調査) 野本 1997「第 7 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨」123. 小町二丁目 4-1 (2005 調査) 菊川 2006「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社齊藤建設 124. 小町二丁目 283 の一部 (2003 調査) 滝澤・宮田 2007「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23-1」鎌倉市教育委員会 125. 小町二丁目 1-14 (1986 調査) 126. 小町二丁目 394 (2005 調査) 神奈川県教育委員会 2007「神奈川県埋蔵文化財調査報告 51」神奈川県教育委員会 127. 小町二丁目 1-15 (1986 調査) 神奈川県教育委員会 1989「神奈川県埋蔵文化財調査報告 30」神奈川県教育委員会 128. 小町二丁目 1-6 (2002 調査) 神奈川県教育委員会 2003「神奈川県埋蔵文化財調査報告 45」神奈川県教育委員会 129. 小町一丁目 120-1 (1986 調査) 手塚 1989「小町一丁目 120 番 1 地点」風門社ビル発掘調査団 130. 小町一丁目 116 (1985 調査) 馬淵 1986「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2」鎌倉市教育委員会 131. 小町一丁目 116-4 (1989 調査) 手塚 1999「若宮大路周辺遺跡群」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 132. 小町一丁目 117-3 他 4 筆 (2005 調査) 滝澤 2006「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」有限会社鎌倉遺跡調査会 133. 小町一丁目 106-1 (1987 調査) 手塚 1999「若宮大路周辺遺跡群」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 134. 小町一丁目 107-7 (2010 調査) 滝澤 2013「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社博通 135. 小町一丁目 65-26 (2009 調査) 136. 小町一丁目 65-30 (2005 鈴木) 神奈川県教育委員会 2007「神奈川県埋蔵文化財調査報告 51」神奈川県教育委員会 137. 小町一丁目 65-10 (1977 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会 138. 小町一丁目 66-3 (1977 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I」鎌倉市教育委員会 139. 小町一丁目 66-5 (1996 調査) 神奈川県教育委員会 1997「神奈川県埋蔵文化財調査報告 39」神奈川県教育委員会 140. 小町一丁目 67-2 (1987 調査) 福田 1994「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 141. 小町一丁目 65-21 (1979 調査) 齋木ほか 1982「小町 2 丁目 65 番地 21 号地点・小町 1 丁目 75 番地 1 号地点」鎌倉考古学研究所 142. 小町一丁目 75-1 (1979 調査) 齋木 1982「小町 2 丁目 65 番地 21 号地点・小町 1 丁目 75 番地 1 号地点」鎌倉考古学研究所 143. 小町一丁目 75-1 (1979 調査) 齋木 1982「小町 2 丁目 65 番地 21 号地点・小町 1 丁目 75 番地 1 号地点」鎌倉考古学研究所 144. 小町一丁目 103-9 (1982 調査) 服部 1984「蔵屋敷遺跡」鎌倉駅舎改築にかかると遺跡調査会 145. 小町一丁目 81-18 (1998 調査) 宮田 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-1」146. 小町一丁目 81-23 (1988 調査) 神奈川県教育委員会 1990「神奈川県埋蔵文化財調査報告 32」神奈川県教育委員会 147. 小町一丁目 81-8 (1991 調査) 森 1995「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 - 鎌倉市小町一丁目 81 番 8 地点 -」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 148. 雪ノ下一丁目 161-33 (2003 調査) 馬淵 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22-2」鎌倉市教育委員会 149. 扇ガ谷一丁目 110-8 (2009 宮田) 滝澤 2012「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社博通 150. 御成町 123-5 (1997 調査) 汐見 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-1」鎌倉市教育委員会 151. 御成町 123-3 (2004 調査) 福田 2009「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25-1」鎌倉市教育委員会 152. 御成町 11-15 (1981 調査) 手塚ほか 1983「蔵屋敷東遺跡」江ノ電鎌倉ビル発掘調査団 153. 小町一丁目 83-1 (1990 調査) 佐々ほか 1993「鎌倉市早見芸術学園改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」株式会社四門 154. 小町一丁目 83-3・32 (2007 調査) 宮田 2008「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」株式会社博通 155. 御成町 872-11 (2012 齋木) 156. 御成町 872-14 (1991 調査) 木村ほか 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 157. 御成町 884-6

(1997 調査) 宮田ほか 1999「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 宮田事務所  
上杉定正邸跡 (No. 188) 158. 扇ガ谷二丁目 195-2 (2009 調査) 山口・松吉 2014「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30-2」鎌倉市教育委員会  
華光院跡やぐら群 (No. 101) 159. 扇ガ谷二丁目 191 (2002 調査) 汐見・田畑 2003「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19」鎌倉市教育委員会  
巨福呂坂周辺遺跡 (No. 256) 160. 雪ノ下二丁目 144-1 (2011 調査) 滝澤 2011「巨福呂坂周辺遺跡 (No. 256) 発掘調査報告書」株式会社博通  
大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49) 161. 雪ノ下三丁目 606-1 (1991 調査) 菊川 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3」鎌倉市教育委員会 162. 雪ノ下三丁目 607 外 (1992 調査) 菊川 1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10-1」鎌倉市教育委員会 163. 雪ノ下三丁目 607-1 (2004 調査) 降矢・小島 2004「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20-2」鎌倉市教育委員会 164. 雪ノ下四丁目 600 (1980 試掘) 165. 雪ノ下四丁目 610-2 (1983-84 調査)  
東勝寺跡 (No. 246) 166. 小町三丁目 538-3 (2004 調査) 原 2011「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27-1」鎌倉市教育委員会 167. 小町三丁目 538-8 (2004 調査) 原 2011「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27-1」鎌倉市教育委員会 168. 小町三丁目 523-14 (1999 調査) 汐見ほか 2001「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-2」鎌倉市教育委員会 169. 小町三丁目 468-2 外 (1999 調査) 滝澤・宮田 2000「東勝寺跡発掘調査報告書」東勝寺跡発掘調査団 170. 小町三丁目 468-10 (2000 調査) 宮田 2002「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-1」鎌倉市教育委員会 171. 小町三丁目 497 (1975・76 調査) 赤星ほか 1977「東勝寺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会  
妙本寺遺跡 (No. 232) 172. 大町一丁目 1146 (1992 調査) 継ほか 1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10-1」鎌倉市教育委員会 173. 大町一丁目 1158-5 (1990 調査) 宗臺秀 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7」鎌倉市教育委員会 174. 大町一丁目

1158-1 (1987 調査) 福田 1988「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4」鎌倉市教育委員会  
小町大路東遺跡 (No. 233) 175. 大町一丁目 1147 (2013 調査) 176. 大町一丁目 1181 (1980 調査) 原 1980「鎌倉考古 2」鎌倉考古学研究所  
下馬周辺遺跡 (No. 200) 177. 大町二丁目 1001-4 (2005 調査) 馬淵 2011「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27-1」鎌倉市教育委員会 178. 大町二丁目 975-6 (2003 調査) 森 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22」鎌倉市教育委員会  
米町遺跡 (No. 245) 179. 大町二丁目 993-1 外 (2008 調査) 山口 2013「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-2」鎌倉市教育委員会 180. 大町二丁目 992-7 外 (2003 調査) 滝澤・森 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22-2」鎌倉市教育委員会  
名越ヶ谷遺跡 (No. 231) 181. 大町三丁目 1230-4 外 (2006 調査)

帳』に見える郷名のうち、他に尺度郷、荏草郷が鎌倉郡内とされる。承平年間 (931 年 -938 年) に編纂された『和名類聚抄』(高山寺本『神奈川県史 資料編』1 - 490) には、鎌倉郡内の郷名として沼濱、鎌倉、埜立、荏草、梶原、尺度、大島が見える。この他に天平勝宝元年 (749 年) の『調庸布墨書』(東大寺正倉院御物『神奈川県史 資料編』1 - 102) に鎌倉郡方瀬郷の名が見える。これらの郷のうち荏草郷について、『新編相模国風土記稿』は、「荏草」は鎌倉市二階堂の荏柄天神社の「荏柄」の旧唱であり、「えがら」は「えがや」の転訛としている。また、現在の鎌倉市内中心部は鎌倉郷にあたとされ (鈴木・鈴木 1984)、調査地点も鎌倉郷内に含まれると考えられる。奈良時代の遺物の出土は市内各所で確認できるものの、層位的に良好な出土事例は少ない。

奈良から平安後期の鎌倉には二十近い寺社があり、12 世紀初頭までに都市神の勧請もおこなわれているので、このころすでにかかなりの都市的な集住形態が形成されていた可能性が指摘されている (野口 1993・馬淵 1994)。地点 43 では定窯白磁、地点 69 では渥美刻画文壺といった、鎌倉時代以前の遺物が出土しており、地点 19 では鶴岡八幡宮創建以前の層から板製五輪塔を伴う男女二体の合葬墓が検出されている。また地点 43・44・45 では、切り合いから見て最も古い若宮大路と異なる軸線を持つ溝が検出されており、平安後期には調査地点周辺でも人的営為の痕跡は確認できるが、鎌倉時代に大規模な削平を受けている可能性もあり、良好な検出事例は乏しい。

## 鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には大路をはさんで鶴岡八幡宮と政所跡 (No. 247)、



図2 明治15年頃の調査地点周辺（『迅速測図』）（1/20000）

東側には東勝寺跡（No. 246）、南側には宇津宮辻子幕府跡（No. 239）がある。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれ、北条高時邸跡（No. 281）として遺跡指定されている場所である。そして当遺跡は北条小町邸跡（No. 282）とも「若宮大路幕府」跡ともいわれる場所である（高柳 1959）。以下、『吾妻鏡』の記載に基づいて小町周辺の状況をみてみる。

『吾妻鏡』建久二年（1191年）三月四日条に「陰。南風烈。丑剋小町大路邊失火。江間殿（北条義時）。相模守。村上判官代。比企右衛門尉。同藤内。佐々木三郎。昌寛法橋。新田四郎。工藤小次郎。佐貫四郎已下人屋数十字焼亡。餘炎如飛而移于鶴岡馬場本之塔婆。此間幕府同災。即亦若宮神殿廻廊經所等悉以化灰燼。供僧房等少々同不遁此災云云。」とあり、小町大路辺りで出火した火災が、御家人の邸宅を巻き込みつつ大倉幕府や鶴岡八幡宮まで延焼したことがみえる。

『吾妻鏡』承元四年（1210年）十一月廿日条に「戌剋焼亡。北風甚利。相模太郎（北条泰時）殿小町御亭并近隣御家人宅等災。其後不及他所。」とあり、泰時邸が小町に所在したことがわかる。

『吾妻鏡』建保元年（1213年）五月二日条に「先囿幕府南門并相州御第（小町上）。西北両門。」とあり、和田合戦の際に、小町の義時邸の西門、北門が攻撃されたことがみえる。続く建保元年（1213年）五月

七日条に「今日。相州自大倉渡御若宮大路御亭。其後祇候人等蒙勲功之賞云云。」とある。秋山哲雄氏はこの「若宮大路御亭」を泰時の「小町御亭」とみており（秋山 2006）、北条義時小町邸の所在地は貫達人氏、秋山氏両名とも現在の宝戒寺あたりとみている（貫 1971・秋山 2006）。

『吾妻鏡』承久元年（1219年）正月廿七日条にも「右京兆（北条義時）俄有心神御違例事。讓御劔於仲章朝臣。退去給。於神宮寺。御解脱之後。令歸小町御亭給。」とあり、義時の小町御亭がみえる。

『吾妻鏡』承久二年（1220年）二月廿六日条に「亥刻。大町上失火。於武州（北条泰時）亭前火止訖。」とあり、大町から出火し泰時小町亭前まで延焼したと解釈することも可能。

『吾妻鏡』元仁元年（1224年）六月廿七日条に「依爲吉日。武州（北条泰時）被移鎌倉亭（小町西北）。日者所被加修理也。関左近大夫将監實忠。尾藤左近将監景綱兩人宅。在此郭内也。」とあり、泰時小町亭と同区画内に関左近大夫将監實忠、尾藤左近将監景綱の邸宅があったことがわかる。

『吾妻鏡』嘉禄元年（1225年）十月三日条に「雨降。相州（北条時房）。武州（北条泰時）參御所給。當御所可被移於宇津宮辻子之由。有其沙汰。又可被建若宮大路東頬歟之旨。同及群儀云云。」とあり、宇津宮辻子への御所移転が群議されている。翌十月四日条には「相州（北条時房）。武州（北条泰時）。相具人々而。宇津宮辻子并若宮大路等。令巡檢。而始被打丈尺。」とあり、候補地を巡検していることがわかる。同年十二月五日条に「新御所上棟也」とあり、新御所が完成している。その後、十二月廿日条に「今日若君御移徒之儀。」とあり、宇津宮辻子幕府への移転の儀が行われたことがわかる。

このときの御所移転について、須藤博史氏・貫達人氏らは『鎌倉市史 総説編』の考察の誤りを指摘している（須藤／貫 1963・貫 1989）。その指摘は、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という長さが、新御所の大きさではなく、方違えにもなる測距の数値である、というものである。また、松尾剛次氏は宇津宮辻子幕府の比定地を図示している。松尾氏によれば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道の北側東半部ということになる（松尾 1993）。しかし、松尾氏が図示しているものは実際の子午線によって東西南北が設定されていることと、基準となる伊賀朝行邸の位置が確定していないため、論理の補強ないし修正の必要がでてくる可能性もある。このうち子午線に関しては、川副武胤氏によって、中世鎌倉にあっては若宮大路が子午線とみなされていた可能性が指摘されている（川副 1980）。

松尾氏は『吾妻鏡』嘉禄元年（1225年）十月四日条の「而始被打丈尺。」という記載から、北条泰時が御所移転に際し、鎌倉にはじめて丈尺制を導入したことを指摘している。松尾氏によれば「丈尺制」は平城京や平安京で施行されていた家地用の単位である。また、松尾氏はこの時に連動して戸主制度と保の制度が導入されたと推測している。これらのことをまとめて、「宇津宮辻子への御所の移転は、丈尺制（戸主制度）・保制度という京都をモデルにした土地制度・行政制度の導入の契機となった。」と評している（松尾 1993）。

『吾妻鏡』嘉禄元年（1225年）十月十九日条「於武州（北条泰時）御亭。相州（北条時房）已下有御所御地定。小路（宇津宮辻子）東西間何方可被用哉之事。人々意見区々。」とある。秋山氏はこれを宇津宮辻子の東と西いずれかを採用するか人々によって意見が割れたためとし、『吾妻鏡』嘉禄元年（1225年）十月廿日条「若宮大路者。可謂四神相応勝地也。西者大道南行。東有河。北有鶴岡。南湛海水。可准池沼云云。依之此地可被用之旨。治定畢。但東西之事者。被聞食御占。西方最可爲吉之由。面々申之。信賢一人不同申之。東西共不吉也云云。」とあるのは、御所を若宮大路周辺へ移転することになったが、東西のいずれにするかはまだ決定されていないとし、宇津宮辻子が南北道路である可能性を示している（秋山 2006）。



『吾妻鏡』嘉禄二年(1226年)十二月十三日条に「自政所前失火。尾藤左近将監。平三郎左衛門尉。清右衛門志。彈正忠。大和左衛門尉。近藤刑部丞等家焼亡云云。」とあり、泰時小町亭と同区画内にある尾藤左近将監の邸宅も焼亡しているように解釈できる。

『吾妻鏡』安貞元年(1227年)二月八日条に「子一點。幕府東西人等并武州(北条泰時)納所一字焼亡。御所中。及相州(北条時房)。武州両亭。竹御所等殊令驚給。然而各無為云云。」とあることから、泰時邸、時房邸、宇津宮辻子幕府が近在していたことが読み取れる。

『吾妻鏡』寛喜二年(1230年)六月廿八日条に「於後藤判官大倉宅被評定。日來於武州(北条泰時)御亭被行之。依禁忌今及此儀。」とある。これに関して秋山氏は「御所との近い関係によって政治の中樞を担うようになった泰時邸の敷地は徐々に広がり、周辺の御家人宅を吸収して一区画を占拠するようになったと想像できる。」としている(秋山2006)。

『吾妻鏡』嘉禎二年(1236年)三月廿日条に「可被新造幕府并御持佛堂等於若宮大路東頼事。今日。於御所有其定。日次以下事。召陰陽道勘文。晴賢・文元等所令連署也。」とあり、再度の幕府の移転が決定されている。松尾氏によれば、『吾妻鏡』嘉禎二年(1236年)二月一日条「御不例余氣不令散給事。若土公奉成崇歟之由。有職人々依申之爲武州御沙汰。被行其祭。入夜。於御所。晴賢朝臣奉仕之云々。今日。上野入道日阿於御所進下若等。」とあることから、この移転は御所内の土公の崇りを避けるために行われたという。土公の崇りを避けることから同一区画内では意味がないという(松尾1992・1993)。

同年八月四日条に「將軍家若宮大路新造御所御移徙也。自武州(北条泰時)御亭渡御。〈御装束〉。御乗車。仰前大監物文元。參轅内勤反問入御自新御所南門。御車入門内經二丈余之後下御。」とあり、この日に若宮大路幕府への移転が行われている。

同年十二月十九日条に「亥刻。武州(北条泰時)御亭御移徙也。日來。御所北方所被新造也。被建檜皮葺屋并車宿。是爲將軍家入御云々。御家人等同構家屋。南門東脇尾藤太郎。同西平左衛門尉。同並西大田次郎。南角諏方兵衛入道。北土門東脇万年右馬允。同西安東左衛門尉。同並南篠左衛門尉宅等也云々。」とあり、新築された泰時亭の南側に他の御家人の邸宅があるように解釈できるが、貫氏は身内の宅と解釈する余地があることを指摘している(貫1971)。

『吾妻鏡』嘉禎三年(1237年)四月廿二日条に「天晴。申刻日色赤如蝕。今日。將軍家入御左京権大夫(北条泰時)亭。爲此御料被新造御所〈檜皮葺〉之間。渡御始也。御儲每事過差云々。」とあり、時頼元服のために新築された建物の存在が窺える。

『吾妻鏡』延応元年(1239年)四月廿五日条「未刻。前武州俄御違例。戌刻以後。御心神殊違亂云々。諸人群參。織部正光重爲將軍御使參入。于時匠作(北条時房)御亭〈前武州向顔〉酒宴亂舞折節也。」とある。秋山氏は「向顔」を「向頼」の誤りとし、北条時房邸が北条泰時亭の道を挟んだ向かい側、すなわち現在の宝戒寺あたりとしている(秋山2006)。

『吾妻鏡』延応元年(1239年)十二月廿七日条に「天晴。未刻。前武州(北条泰時)南御近隣有失火。人屋六宇災。」とあり泰時亭近くで火災が発生したことがわかる。

『吾妻鏡』寛元二年(1244年)十二月廿六日条「卯尅。武州(北条経時)并北条左親衛(北条時頼)等第依失火災。餘焰飛行。政所焼亡云々。」

『吾妻鏡』寛元三年(1245年)六月廿七日条「今日戌尅。武州(北条経時)花第〈故武州禅室(北条泰時)第北隣〉并左親衛(北条時頼)第各有移徙之儀云々。日來新造功已成云々。」

『吾妻鏡』宝治元年(1247年)七月十七日条「相州(北条重時)自六波羅參着〈去三日出京〉。以故入道武州経時小町上舊宅〈御所北面若宮大路也〉。爲居所。是前武州禅室(北条泰時)跡也。武州経時被相

傳之處。去寛元二年十二月焼亡。然而如元新造。於第被害取終之後。于今無其主云云。」とあり、経時邸、時頼邸が火災にあい、その後新造されたうちの経時邸に重時が入ったことがわかる。貫氏は御所北面若宮大路という割注から経時邸は若宮大路と鶴岡八幡宮前の東西道路に面するとしている（貫 1971）。

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）八月九日条「左親衛（北条時頼）令移住于檜皮寝殿給。以本御居所。依可被加修理也。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）十月十八日条「今日。左親衛（北条時頼）寝殿被曳移傍地。大略新造云々。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）十月廿一日条「左親衛（北条時頼）御第上棟。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）十一月十四日条「相州（北条重時）新造花亭有移徙之儀。評定所并訴訟人等着座屋。東小侍等。今度始所造加也。」とあり、時頼邸内で新造の建物が造られたことが窺える。

『吾妻鏡』建長二年（1250年）九月廿六日条「亥尅。相州（北条時頼）御亭失火。」

『吾妻鏡』建長二年（1250年）九月廿八日条「今日。奥州（北条重時）被進調度等於相州（北条時頼）依火事也。」とあり、北条時頼邸において火災があったことがわかる。

『吾妻鏡』建長三年（1251年）十月八日条「戌刻。相州（北条時頼）新造御第〈小町〉御移徙。」とある。貫氏はこれを焼跡への新築としている（貫 1971）。

『吾妻鏡』建長四年（1252年）四月一日条「中下馬橋東行。経小町口。入御相州（北条時頼）御亭〈于時申一點〉。」とあり、貫氏は將軍宗尊親王が小町大路から北条時頼邸に入ったと解釈している（貫 1971）。

『吾妻鏡』建長四年（1252年）五月十七日条「陰。奥州（北条重時）相州（北条時頼）并前転厩（北条政村）。前尾州（北条時章）以下。參會評定所。將軍御方違事。被経評議。以奥州亭可被用御本所云云。而自當御所〈相州御亭〉当西方。大將軍方可有憚之由。晴賢。晴茂。爲親。廣資。晴憲。以平。晴宗。等一同申之。仍被定出羽前司長村車大路亭云云。自當御所正方南也。」とある。貫氏は出羽前司長村の車大路亭が若宮大路にも面しているとし、北条時頼邸を北条重時邸の東隣としている（貫 1971）

『吾妻鏡』建長四年（1252年）七月九日条「今日、新御所門々上棟。亦當時御所〈相州御亭〉。壞南面平門。始被新造門。是相州（北条時頼）御沙汰也。」とあり、ここでも北条時頼邸内で建て替えがあったことがわかる。

『吾妻鏡』建長四年（1252年）十一月十一日条「天顔快晴。申尅。將軍家新御所御移徙也。時刻寄御車〈庇〉於寝殿〈相州御亭〉南面妻戸間。」

『吾妻鏡』康元元年（1256年）十一月廿二日条「今日。被讓執権於武彘〈北条長時〉。又武蔵國務。侍別當。并鎌倉第同被預申之。但家督（北条時宗）幼稚之程眼代也。」とあり、北条長時に執権を讓る際に「鎌倉第」も讓っていることがわかる。貫氏はこの「鎌倉第」を赤橋亭（経時旧宅）の東隣としている（貫 1971）。

『吾妻鏡』文応元年（1260年）三月廿一日条「天晴風静。戌尅御息所入御。先寄御輿於東御亭〈相州太郎（北条時宗）御亭檜皮寝殿妻戸。東御方被參儲。相州（北条政村）武州（北条長時）被候之。次自同西門〈平門〉出御。難色二人取松明前行。町大路南行。入御所東門〈棟門〉。経東北庭。將軍家於東侍密々御見物。土御門中納言。花山院中納言。一条少将雅有朝臣。弾正少弼業時。木工権頭親家。相模三郎時利。越後四朗時方。前陰陽少允晴宗朝臣等候其所。寄御輿於中御所南渡廊西向妻戸内。東御方一条局同前。」とあり、北条時宗の東御亭の西門から出御し、小町大路を南下し御所の東門から入っている。このことから、貫氏は東御亭は現在の宝戒寺あたりとしている（貫 1971）。

『吾妻鏡』文永三年（1266年）七月三日条「天晴。巳一點。甲冑軍士揚旗。自東西馳集。窺參相州（北条時宗）門外。次於政所南大路相。一同時音。」とあり、時宗邸の門と政所南大路とが近いことがわかる（貫

1971)。

このように、本地点周辺の状況を示す可能性のある記載が「吾妻鏡」中にみえるが、この点については貫達人氏、秋山哲雄氏が整理している（貫 1971・秋山 2006）。

貫氏によれば、北条義時小町邸は現在の宝戒寺のあたりに比定され、確実にこの地に邸宅を構えたのは時宗の東御亭と高時としている。それ以外は義時後に時房が、時宗後に貞時が継承した可能性を指摘しているのみである。また、北条小町邸跡(No.282)として遺跡指定されている区画のうち西側については、泰時から経時、重時と継承され、東側は時頼から長時へと継承された可能性を指摘している（貫 1971）。

一方、秋山氏によれば、建保元年（1213）頃、当遺跡方形区画の北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉禄元年（1225）に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉禎二年（1236）の幕府再移転まで当区画の大部分を泰時亭が占めるようになる。嘉禎二年（1236）に「若宮大路の東類」へ再移転した後、当遺跡方形区画は南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭と三つに分割される。宝治元年（1247）前後以降、経時亭および泰時亭は合わせて重時に相伝される。一方宝戒寺の地は義時から時房へと継承された後、宝治元年前後以降、時頼亭となり以後「執権第」となるという。時宗以後の当遺跡地方形区画については、南半部に幕府を想定し、北域は不明としている（2006 秋山）。

#### 近在の寺社

**宝戒寺** 金龍山積満院円頓宝戒寺と号す。天台宗。もと東叡山寛永寺末で現在は比叡山延暦寺末。『新編相模国風土記稿』によれば「古は四宗兼学という」。開山、恵鎮。開基、後醍醐天皇。開山は恵鎮であるが、実際の実務は二世惟賢が行っていたようである。また、寛永十一年（1634）付の『山門三院執行探題（天海）置文』（『寶戒寺文書』鎌倉市史史料編 1-474）に「於法勝寺諸末寺中、無止事勝地、代々將軍家并諸侍受戒靈場也」とあり、宝戒寺に対する近世における認識が把握できる。

建武二年（1335）三月廿八日付『足利尊氏寄進状案』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-3206）に「當今皇帝帝施仁慈之哀恤、爲度怨念之幽靈、於高時法師之舊居、被建圓頓寶戒之梵宇」とあり、宝戒寺は後醍醐天皇により北条高時の冥福を祈るために、北条高時邸跡に建立しようとしたものであることがわかる。

ただ、宝戒寺そのものができるのは遅く、慎重な検討が必要、としつつも文和二・三年（1353・4）頃であるという（貫・川副・佐脇 1959）。貞和四年（1348）十一月七日付『恵鎮書状』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-4003）に「當寺敷地白幡谷口四方各三十丈御寄附事、領主吉良左京大夫殿御状并施行如此候」、観応三年（1352）七月四日付『將軍（足利尊氏）寄進状案』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-4176）に「寄進 圓頓寶戒寺 上総国武射郡内小松村（工藤中務右衛門跡）、并出羽國小田嶋庄内（東根孫五郎跡）事 右、爲當寺造営料所」、文和元年（1352）十二月廿七日付『將軍（足利尊氏）御教書案』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-4211）に「圓頓寶戒寺造營事、木作始可爲明春之間、於下野・下総两国中、令取棟別拾文錢賃、可被終營作功之状如件」、『惟賢灌頂授与記』（『寶戒寺文書』鎌倉市史史料編 1-418）に「同（文和）三年甲午四月十三日巳辛（於塔辻宝戒寺始修之）」とあり、土地の寄進から造営にかかる費用の工面までの経緯が読み取れ、文和三年（1354）には宝戒寺において初めて灌頂受戒が行われていることがわかる。

**妙隆寺** 叡昌山妙隆寺と号す。日蓮宗。もと中山法華経寺末。開山妙親寺日英。開基は千葉大隅守胤貞と伝えられる。また、二世日親は鍋被日親と称せられる傑僧であった、という（貫・川副・佐脇 1959）。

「伝日蓮辻説法跡」とされる場所の北 100 m ほどにある。「寺地は千葉氏の屋敷跡とも伝える」という（鈴木・鈴木監修 1984）。万治元年（1658）の『妙隆寺由緒明細覚帳』（妙法寺蔵）によると、開山日英、開基千葉胤貞、至徳二年の創建という。しかし、「胤貞の存命は日英誕生以前であり、おそらく、本山の下



総中山法華経寺から胤貞が請負開基として祀られたのであろう」という（鈴木・鈴木監修 1984）。

境内には日親が荒行したという「行の池」がある。『新編鎌倉志』には「日親此池に手を浸し、一日に一指づゝ、十指の爪をはなし、百日の間に本の如く生復らば、所願成就と誓ひ、出る血を此池にて洗ひ、其水を滴で曼荼羅を書。爪切の曼荼羅と云て此寺に有しを、法理の異論に依て、住持退院の時、盗み去となり。」とある。

本覚寺 妙巖山本覚寺と号す。日蓮宗。もと身延山久遠寺末中本寺。開山、一乗日出。「創建は、宝永三年（1706）の寺々境内開基年数改帳（寺蔵）は応永二十八年（1421）と伝え、「石渡新造左衛門之碑銘」では永享八年（1436）の開創と伝え、」とある（鈴木・鈴木監修 1984）。また、「寺伝ではこの地に天台宗の夷堂があったのを日出が改宗したといひ、」とある（鈴木・鈴木監修 1984）。『新編相模国風土記稿』には「本尊三寶を安ず、又釋迦文殊普賢の像あり、元の本尊と云。」とあり、これが夷堂の本尊であったと認識されていたようである。

蛭子神社 ヒルコと読む。祭神大己貴尊<sup>おおなむちみこと</sup>。貫氏によれば、「本殿は明治七年八月、鶴岡八幡宮の末社今宮の社殿を金十円で譲りうけて建立したものである（『小町一村宝戒寺鎮守普請積立金連名帳』）。（貫・川副・佐脇 1959）。また、「この所にはもと小町下町の鎮守七面大明神が祀られていたが、神仏分離により本覚寺の鎮守であった夷三郎社をここに移し、かつ上町下町が一村に合され一村に鎮守は一社しかおかぬという達しによって、小町上町の宝戒寺鎮守山王大権現も合祀したという（『小町一村宝戒寺鎮守普請積立金連名帳』）。（貫・川副・佐脇 1959）。

蛇苦止堂 『吾妻鏡』文應元年（1260年）十月十五日条に「相州政村息女煩邪氣。今夕殊惱亂。爲比企判官女讚岐局靈崇之由。及自詫云々。件局爲大蛇。頂有大角。如火炎。常受苦。當時在比企谷土中之由發言。聞之人堅身毛云々。」、同十一月廿七日条に「相副政村被頓寫一日経。是息女惱邪氣。依比企判官能員女子靈詫。爲資彼苦患也。入夜有供養之儀。請若宮別當僧正爲唱導。説法最中。件姫君惱亂。出舌舐唇。動身延足。偏似蛇身之令出現。爲聽聞靈氣來臨之由云々。僧正令加持之後。惘然而止言。如眠而復本云々。」とあり、北条政村の娘が比企能員の娘、讚岐局の祟りにより苦しんだ様子が記されている。

『新編相模国風土記稿』には「是比企能員の女、讚岐局の靈を祀れるなり、文應元年其靈北條時村の女に着し、大蛇となりて常に苦を受る由自詫せし事【東鑑】に見えたり、故に此時其鬼崇を鎮めんが爲爰に崇祀し託言に因て此神號を授けしなるべし」とあり、近世後期には比企の女の祟りと関連づけられて認識されていたことがわかる。

巽神社 祭神は奥津日子神・奥津日女神・火産靈神<sup>ほむすび</sup>。天正十九年（1591）十一月日付『徳川家康社領寄進状案』（『巽荒神社文書』鎌倉市史史料編 1-406）には「寄進 荒神」とあり、『新編鎌倉志』及び『鎌倉攬勝考』は「巽荒神」としている。この他に「荒神社（『浄光明寺領荒神社領租税録』）」（貫・川副・佐脇 1959）という呼び名もある。「勧請年月未詳。延暦二十年、坂上田村麿が葛原岡に勧請したと伝えられている」という（貫・川副・佐脇 1959）。『新編鎌倉志』には「今小路の南、壽福寺の巽にあり。故に名く、本壽福寺の鎮守なり。今は浄光明寺の玉泉院の持分也。」とあり、もとは壽福寺の鎮守であり、その壽福寺の巽の方角に所在することが名の由来であることが示されている。なお、「明治二年の前掲『租税録』（『浄光明寺領荒神社領租税録』）」には、「当山鎮守、荒神社」とあり、浄光明寺の鎮守となっている。」とある（貫・川副・佐脇 1959）。

## 第二章 調査の概要

### 第1節. 調査にいたる経緯

雪ノ下一丁目 427 番 2 外で個人専用住宅建設の照会があった。当該地点は北条小町邸跡 (No. 282) として県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡であるため、2007 年 1 月 16 ~ 19 日に 1 × 3 m の試掘坑を設定して調査した。深さ 100cm まで掘削した結果、地表下約 50cm で遺構面を確認し、さらに下層に少なくとも 2 枚の遺構面があることが確認できた。

建築計画では鋼管杭の打設による基礎工事を伴い、遺構の損傷は避けられないが、強度維持の関係上設計変更は困難なため、国庫補助事業として本発掘調査が実施されることとなった。

あらかじめ同年 6 月 20 日に重機による表土掘削を行ない、調査は同年 6 月 25 日から開始された。

### 第2節. 調査の経過

#### 日誌抄

6月20日 (水)	重機による表土掘削	8月3日 (金)	2区 I a面全景写真撮影
6月25日 (月)	1区 I 面調査開始	8月7日 (火)	2区 I b面全景写真撮影
7月18日 (水)	1区 I c面全景写真撮影	8月14日 (火)	2区 I c面全景写真撮影
7月23日 (月)	1区 II 面全景写真	8月17日 (金)	2区 II 面全景写真撮影
7月24日 (火)	1区東壁際確認トレンチ	8月20日 (月)	2区調査区壁分層と写真撮影
7月25日 (水)	1区調査区壁分層と写真撮影	8月23日 (木)	機材撤収
7月26日 (木)	重機により調査区反転		

### 第3節. 調査方法

#### 掘削方法

掘削にあたって、残土は場内処理とし、置場を確保するため建設予定範囲 51 m<sup>2</sup> を南北に二分割し、前半を「1区」、後半を「2区」とした。作業効率を考慮して、分割は均等ではなく、前者を後者に比べいくらか広く取った。

#### 測量基準の設定

ここでは作業効率を考慮して、調査区長軸中心部を通る測量基準線と、それに直交する基準線を 5 m おきに配した。そして、のちこれらを世界測地系に座標変換するという方法を採用した。

調査区は以下の範囲内にある。

[エリア 9] X - 75 195.15 ~ X - 75 205.00  
Y - 25 285.17 ~ Y - 25 295.22

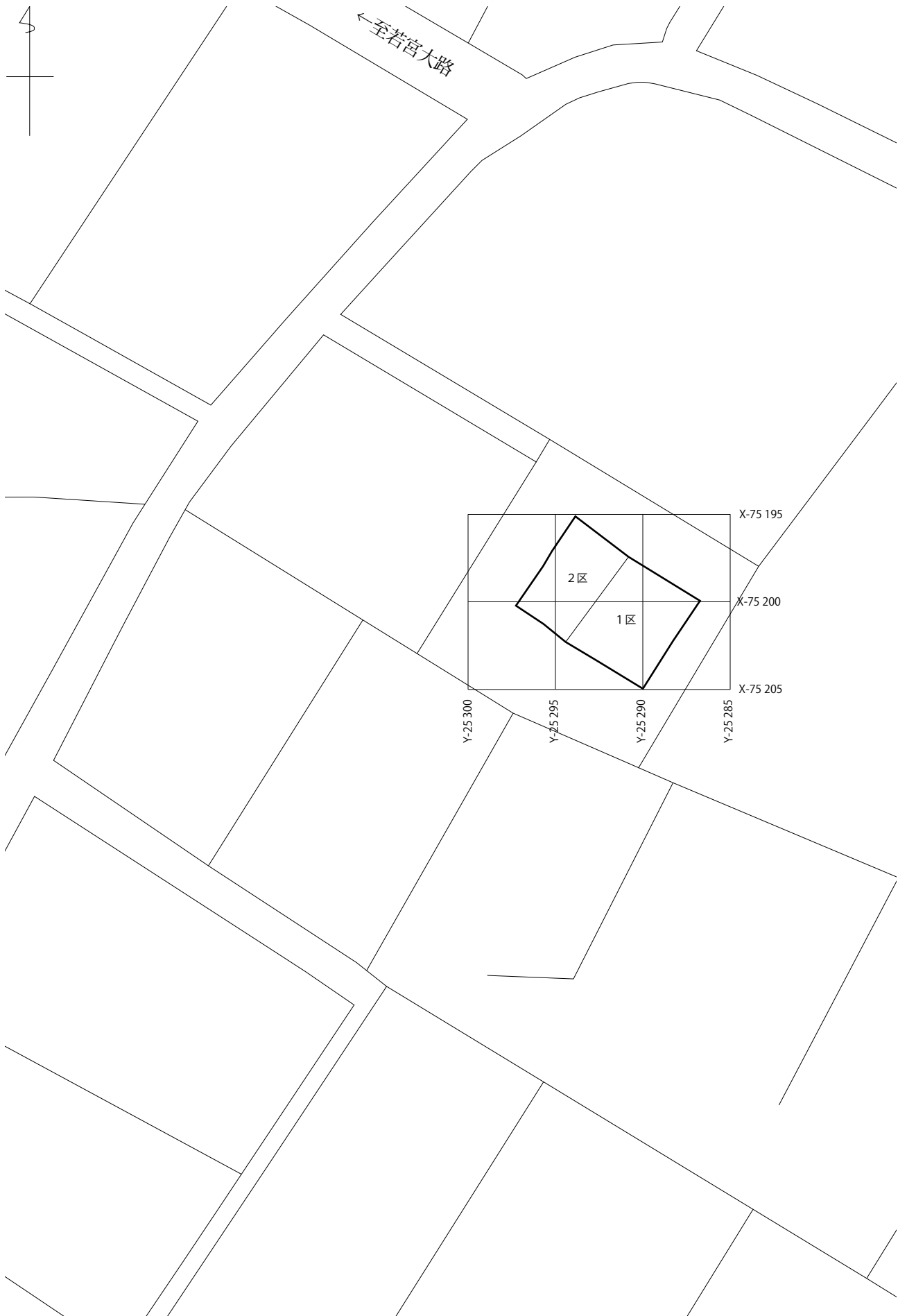


図3 調査区設定図 (1/300)

## 第三章 調査結果

### 第1節 概要

#### 1. 層序と面の概要

##### 地表面と表土

地表面の標高は 12.60 m～10.80 m ほどで、ほぼ平坦な面になっている。表土層は 50～70cm ほどあり、一部深くなっているものの、おおむね水平に堆積している。この表土層を除くとすぐに中世層が現われ、I a 面検出面となる。迅速測図では本地点周辺は畑となっており、後世の耕作や近現代以降の開発で I a 面より上層は削平を受けている。

##### I a 面

表土層の下に現われる最初の検出面。標高 9.56 m～9.77 m 程度で、後世の削平を受けている。

調査開始当初の 1 区調査時には、I 面遺構群として捉え、順次遺構検出を行っていたが、1 区調査時の土層断面の検討の結果、2 層に分けられることが判明した。さらに、2 区調査時に間にもう 1 枚遺構面があることが判明した。このため、整理時に I 面遺構群を I a 面、I b 面、I c 面として細分した。

調査の際に、1 区では I b 面に相当する 13 層上まで掘り下げた箇所もあるが、調査区壁土層とベルト土層、切り合い関係及び検出順序を元に上層遺構を抽出した。

後世の削平を受けているため、2 区調査時の I a 面の検出は I a 面構築土中での検出となっている。残存する I a 面構築土は暗灰色粘質土と黒灰色弱粘質土を中心とする。

直上が表土層であるため、検出面上では近代以降の遺物も混ざる状況となっている。

##### I b 面

I a 面を 5 cm～20cm 掘り下げると、調査区西側の 2 区側で暗茶褐色砂質土が現れる。2 区調査時には、ここで遺構検出を行っており、これを整理時に I b 面とした。調査区東側にあたる 1 区側では、I a 面の下層は 2 区側の I c 面に相当する暗灰色粘質土の 13 層となっており、I b 面と I c 面の二時期にわたって使用されたと考えられる。標高は 9.48 m～9.69 m。

##### I c 面

調査区西側の 2 区の I b 面を構成する砂質土を剥がすと、標高 9.23 m～9.53 m に暗灰色粘質土層が現われる。これを整理時に I c 面とした。前述したように、調査区東側の 1 区側では、2 区の I b 面に該当する層がなく、I b 面と I c 面の二時期にわたって同一の面が使用されたと考えられる。

##### II 面

I c 面下に 30～50cm ほどの厚さで堆積する暗灰色粘質土層を掘り下げ、黄灰茶色弱粘質土層で遺構検出を行った。その後の土層断面の検討の結果、暗灰色粘質土層の 15 層上面が本来の遺構面である可能性が高いと判断した。検出高は標高 8.94 m～9.13 m だが、実際の遺構面は標高 9.13 m～9.35 m になる。

##### 確認トレンチ

1 区調査の際に東壁際にトレンチを入れ、下層の土層堆積を把握した。

1 層より下層は遺物の出土が全くなく、土層堆積も水平堆積であるため、自然堆積と考えられるが、この堆積が形成された時期や堆積要因までは把握できなかった。

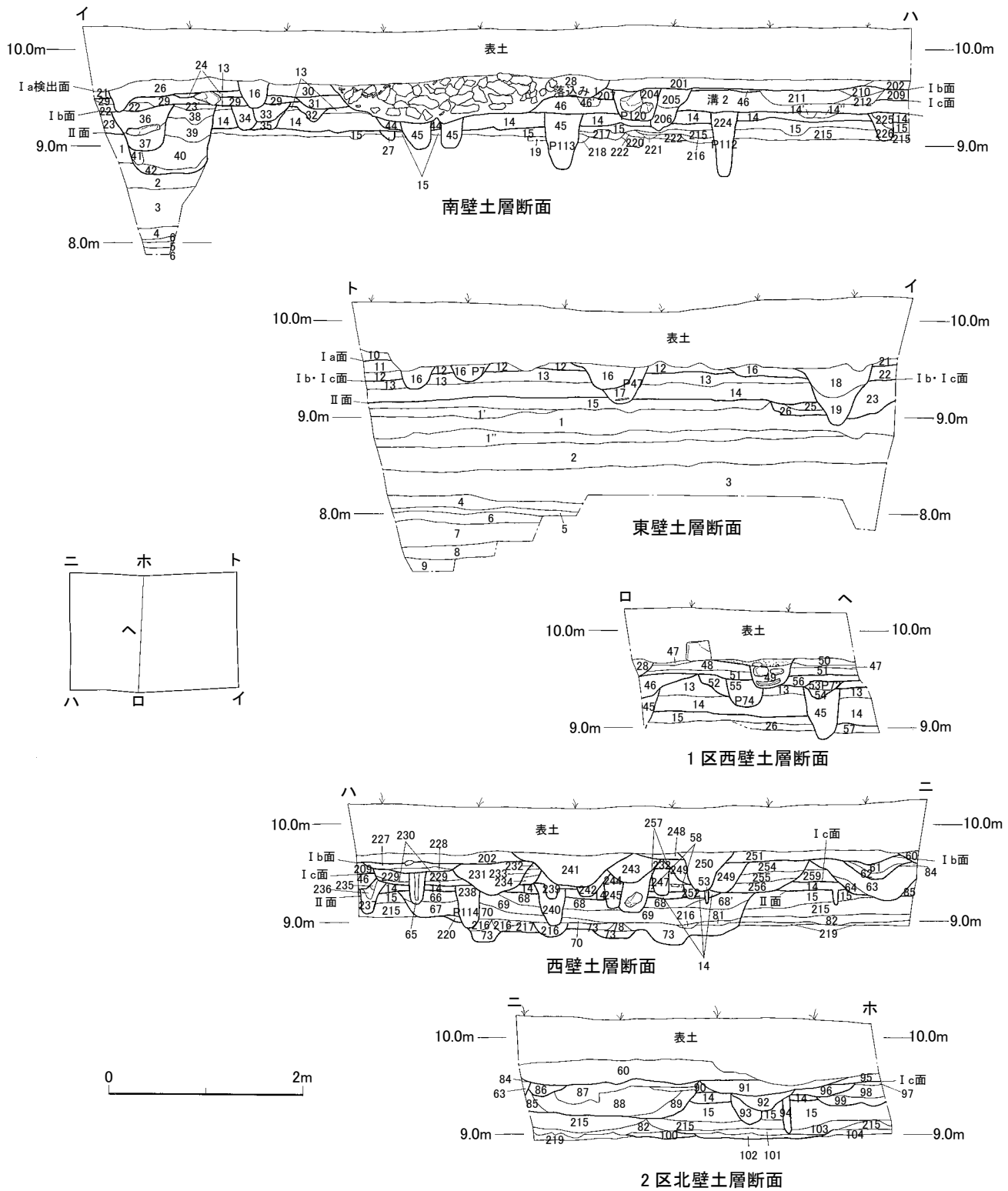


図4 調査区土層断面図

1. 黄茶灰色弱砂質土 炭化物・鉄分・暗灰色粘土粒混入
- 1' 1に多量の暗灰色粘土塊混入
- 1" 1と同質。灰色砂質土を少量含む
2. 黒灰色粘質土 炭化物・鉄分含む、灰色スコリア微量含む。粘性強
3. 明黄灰色粘質土 鉄分含む、ごく微量の炭化物含む
4. 黒灰色粘質土 火山灰の堆積層か？
5. 茶灰色粘土
6. 黒色粘土
7. 明灰色粘質土 微量の鉄分含む
8. 暗灰色粘質土
9. 青灰色弱粘質土 砂質土多く含む
10. 暗茶褐色弱砂質土 泥岩粒・土師器皿細片・炭化物・小礫多量に含む。しまり悪い
11. 暗灰色粘質土 粗質の白色粒子多量に含む、炭化物・土師器皿細片・鉄分含む
12. 暗灰色粘質土 11より含有量少なく、固くしまる
13. 暗灰色粘質土 鉄分・白色粒子やや多く含む、炭化物・土師器皿細片混入。固くしまる
14. 暗灰色粘質土 鉄分・白色粒子多量に含む、炭化物・土師器皿細片含む
15. 暗灰色粘質土 微量の鉄分・白色粒子・炭化物を含む。12～14に比べ粘性強い
16. 暗灰色弱粘質土 山砂・白色粒子・土師器皿細片・炭化物・遺物片含む。しまり弱い（遺構覆土）
17. 建物3、P.4覆土（図9 建物3参照）
18. 建物3、P.5覆土（図9 建物3参照）
19. 建物3、P.5覆土（図9 建物3参照）
20. 暗灰色粘質土 泥岩粒・土師器皿細片・炭化物・小礫・山砂を少量含む
21. 暗茶褐色弱砂質土 少量の炭化物・土師器皿細片を含む、山砂混入
22. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒を含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む
23. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒を含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む（遺構覆土）
24. 暗灰色粘質土 20と同質。含有物20より微量
25. 溝状遺構覆土（図25 溝状遺構参照）
26. 溝状遺構覆土（図25 溝状遺構参照）
27. 黒灰色粘質土 鉄分・白色粒子少量含む
28. 明灰褐色弱粘質土 多量の泥岩を含む、小礫・炭化物・鉄分・土師器皿細片多く含む、山砂含む（落込み1覆土）
29. 暗茶褐色弱粘質土 小石大の泥岩・山砂多く含む、小礫・炭化物を含む
30. 暗灰色粘質土 多くの炭化物を含む、拳大の泥岩・泥岩粒・土師器皿細片を含む、小礫・粘土粒混入
31. 暗灰色粘質土 30と同質土。30より多くの泥岩含む（遺構覆土）
32. 暗茶褐色弱粘質土 山砂・泥岩粒・炭化物を含む（遺構覆土）
33. 暗灰色粘質土 微量の山砂・炭化物・土師器皿細片・泥岩粒を含む（遺構覆土）
34. 暗灰色粘質土 ごく微量の土師器皿細片・炭化物を含む。粘性強。（遺構覆土）
35. 暗灰色粘質土 炭化物を含む（遺構覆土）
36. ビット覆土（図17 土坑6参照）
37. ビット覆土（図17 土坑6参照）
38. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
39. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
40. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
41. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
42. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
43. 暗灰色粘質土 粘性強
44. 暗灰色粘質土 微量の土師器皿細片・白色粒子・炭化物を含む（土坑10覆土）
45. 暗灰色粘質土 微量の炭化物・茶灰色粘土粒・白色粒子含む（遺構覆土）
46. 黒灰褐色粘質土 多量の炭化物・焼土・土師器皿細片含む、泥岩粒少量含む（溝2覆土、図21 溝2土層1と同じ）
47. 赤橙色粘土（焼土） 多量の炭化物・土師器皿細片含む
48. 暗茶褐色弱粘質土 多量の泥岩粒・炭化物・焼土粒を含む、小石大泥岩・山砂を含む
49. P.75（図13 P.75参照）
50. 暗茶褐色弱砂質土 10に似る
51. 暗茶褐色弱砂質土 炭化物多く含む、泥岩粒・焼土片含む
52. 暗灰色弱粘質土 山砂・炭化物・土師器皿細片やや多く含む（遺構覆土）
53. 暗灰色弱粘質土 山砂多く含む、炭化物・泥岩粒含む（遺構覆土）
54. 暗灰色粘質土 土師器皿細片多く含む、炭化物含む（遺構覆土）
55. 暗灰色粘質土 45と同質。炭化物やや多く含む（遺構覆土）
56. 暗茶褐色弱粘質土 山砂・炭化物・泥岩粒多く含む、貝殻片・焼土片含む
57. 暗灰色粘質土 15と同質だが、やや15より色調暗い
58. 暗褐色粘質土 257と同質。茶灰色粘土・山砂・炭化物・土師器皿細片を含む
59. 暗灰色粘質土 少量の焼土・炭化物・白色粒子・山砂・茶灰色粘土を含む
60. 明灰褐色砂質土 多量の山砂・茶灰色砂を含む、少量の土師器皿細片・炭化物・小礫・泥岩粒を含む
61. ビット覆土（図17 土坑14・20参照）
62. ビット覆土（図17 土坑14・20参照）
63. 土坑14覆土（図17 土坑14・20参照）
64. 土坑14覆土（図17 土坑14・20参照）
65. 暗灰色粘質土 白色粒子・炭化物を含む（遺構覆土）
66. 暗灰色粘質土 多量に鉄分を含む、白色粒子・炭化物を含む（遺構覆土）
67. 暗灰色粘質土 微量の白色粒子・炭化物を含む、鉄分を含む（遺構覆土）
68. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
- 68'. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
69. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
70. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
73. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
78. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
81. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
82. 暗灰色粘質土 微量の黄茶色粘土粒・鉄分・炭化物を含む
84. 土坑14覆土（図17 土坑14・20参照）
85. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
86. P.86覆土（図17 土坑14・20参照）
87. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
88. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
89. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
90. 暗茶褐色弱砂質土 多量の山砂・炭化物を含む、焼土粒・白色粒子含む、暗灰色粘土混入
91. 土坑11覆土（図17 土坑11参照）
92. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂・貝砂粒・小石大までの泥岩粒・小礫・炭化物を含む、土師器皿細片を含む（遺構覆土）
93. 暗灰色粘質土 微量の鉄分・炭化物・白色粒子を含む（遺構覆土）
94. 暗灰色粘質土 鉄分を多く含む（遺構覆土）
95. 暗灰褐色弱粘質土 黄茶色粘土小塊・土師器皿細片やや多く含む、山砂・炭化物・焼土粒を含む（Ia面構成土）
96. 暗灰褐色粘質土 やや多くの鉄分含む、微量の炭化物・白色スコリア・焼土粒を含む、粘性強（遺構覆土）
97. 暗灰褐色粘質土 やや多くの炭化物、少量の鉄分・山砂・白色粒子を含む

98. 暗灰褐色粘質土 多量の鉄分・白色粒子、少量の炭化物を含む（遺構覆土）
99. 暗灰褐色粘質土 98より多量の白色粒子を含む、多量の鉄分、少量の炭化物を含む、しまり良い、粘性強（遺構覆土）
100. 土坑22覆土（図26 土坑21・22参照）
101. 土坑21覆土（図26 土坑21・22参照）
102. 土坑21覆土（図26 土坑21・22参照）
103. 土坑21覆土（図26 土坑21・22参照）
104. 103と同質
201. 灰褐色弱粘質土
202. 黒灰色弱粘質土 焼土・炭化物・小礫多量に含む（I a面構成土）
203. 灰褐色粘質土 破碎泥岩多量に含む、炭化物含む。地行土
204. 灰褐色粘質土 泥岩塊・礫・炭化物多量に含む（遺構覆土）
205. 溝1覆土（図16 溝1参照）
206. 溝1覆土（図16 溝1参照）
207. 灰褐色粘質土 炭化物多量に含む
208. 黒灰褐色粘質土 多量の焼土・炭化物・土師器皿細片含む、少量の泥岩粒含む（1区南壁土層No.46と同じ）
- 208'. 炭化物・スコリア多く含む
209. 灰褐色粘質土 黄褐色粘質土塊・炭化物含む
210. 灰褐色粘質土 山砂・白色粒子・焼土粒・炭化物・土師器皿細片・泥岩粒やや多く含む
211. 灰褐色粘質土 46と同質だが含有物46より少なく粘性強、しまり良い
212. 灰褐色粘質土 炭化物多く含む、微量の山砂・白色粒子含む。粘性強
215. 暗灰色粘質土 14・15に比べ色調暗い。微量の炭化物・鉄分・白色粒子含む
216. 堅穴遺構（図26 堅穴遺構参照）
217. 堅穴遺構（図26 堅穴遺構参照）
218. 暗灰色粘質土 216と同質
219. 黄茶色強粘質土 微量の黒灰色強粘質土が混入
220. 土坑23覆土（図26 土坑23参照）
223. 暗灰色粘質土 炭化物・黄茶色強粘質土やや多く含む、白色粒子・小礫・土師器皿細片含む
224. 45と同質（遺構覆土）
225. 暗灰色弱粘質土 炭化物多く含む。しまり弱い（遺構覆土）
226. 暗灰色粘質土 炭化物・鉄分含む、粘性強（遺構覆土）
227. 茶褐色弱粘質土 拳大までの泥岩粒多く含む、炭化物・土師器皿細片含む（遺構覆土）
228. 黒灰色粘質土 多量の炭化物・土師器皿細片含む（遺構覆土）
229. 暗灰色粘質土 炭化物・鉄分・小石大までの泥岩粒・山砂多く含む（遺構覆土）
230. 暗灰色粘質土 炭化物・砂粒含む。粘性強（遺構覆土）
231. 暗茶褐色弱砂質土 山砂多く含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片やや多く含む
232. 茶褐色弱砂質土 山砂多く含む、炭化物・砂粒・土師器皿細片含む（遺構覆土）
233. 暗灰褐色弱砂質土 多くの炭化物含む、山砂・土師器皿細片含む（遺構覆土）
234. 暗灰色粘質土 炭化物・山砂・白色粒子を含む（遺構覆土）
235. 暗灰色粘質土 炭化物・白色粒子含む（遺構覆土）
236. 暗灰色粘質土 炭化物・焼土多く含む、山砂含む（遺構覆土）
237. 暗灰色粘質土 微量の炭化物・鉄分・白色粒子含む、粘性強（遺構覆土）
238. 暗灰色粘質土 237と同質（遺構覆土）
239. 暗灰色弱砂質土 多くの焼土粒・炭化物・砂粒を含む、山砂・土師器皿細片含む
240. 暗灰色粘質土 237・238と同質（遺構覆土）
241. 明茶褐色弱砂質土 多くの山砂含む、炭化物・小礫・土師器皿細片含む。下層部に拳大までの泥岩が集中する（遺構覆土）
242. 暗茶褐色弱砂質土 炭化物・山砂・砂粒多く含む、小石大の泥岩・土師器皿細片含む
243. 明茶褐色弱砂質土 241と同質。半人頭大までの泥岩塊・泥岩粒含む（遺構覆土）
244. 茶褐色弱砂質土 山砂・焼土粒・炭化物を多く含む（遺構覆土）
245. 暗褐色弱粘質土 山砂・炭化物やや多く含む、微量の焼土粒・小石大の泥岩粒含む（遺構覆土）
246. 暗褐色弱粘質土 245と同質。土師器皿細片・礫含む（遺構覆土）
247. 暗褐色弱粘質土 245と同質
248. 明褐色粘質土 少量の焼土粒・炭化物を含む、泥岩粒・土師器皿細片を含む
249. 明茶褐色弱砂質土 多量の泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む、小礫含む（遺構覆土）
250. 明茶褐色弱砂質土 241と同質（遺構覆土）
251. 明茶褐色弱砂質土 多量の山砂・泥岩粒含む、炭化物・小礫・土師器皿細片含む
252. 炭土
253. 暗灰色粘質土 鉄分により硬化
254. 茶褐色弱砂質土 焼土粒・炭化物・泥岩粒やや多く含む（遺構覆土）
255. 暗褐色粘質土 少量の山砂・炭化物・焼土粒を含む（遺構覆土）
256. 暗灰色粘質土 多量の炭化物・焼土を含む、茶灰色粘土・山砂含む（遺構覆土）
257. 暗褐色粘質土 多量の炭化物・山砂・白色粒子を含む、微量の焼土含む

## 第2節 各説

### 1. I a面

#### 面の概要（図5・6）

検出高：9.56 m～9.77 m 面構成土：暗灰色粘質土・暗茶褐色弱砂質土・灰褐色弱粘質土・黒灰色弱粘質土・明褐色粘質土・明茶褐色弱砂質土・明灰褐色砂質土 検出遺構：建物4棟・落込み1基・土坑10基・ピット66穴 I a面出土遺物：土師器皿T種小型（1～11）・土師器皿R種小型（11～20）・土師器皿R種大型（21・22）・伊勢系鍔鍋（23）・尾張山茶碗系片口鉢（24）・瓦器質火鉢（25）・常滑片口鉢I類（26）・

常滑甕 (27)・渥美甕 (28)・瀬戸卸し皿 (29)・青白磁小皿 (30)・同安窯系青磁皿 (31)・竜泉窯青磁画花文碗 (32・33)・竜泉窯青磁鉢 (34)・竜泉窯青磁折縁鉢 (35)・軒丸瓦 (36)・丸瓦 (37)・平瓦 (38・39)・砥石中砥 (40)・滑石鍋転用品 (41・42)・鉄釘 (43～47)・開元通宝 (48)・用途不明加工鹿角 (49)・用途不明加工骨 (50) 土師器皿小片集中部出土遺物：土師器皿 R 種大型 (51) 特記事項：上面を大きく削平されており、実際の I a 面は東壁土層断面 11 層上面にわずかに残るのみ。2 区調査時における遺構検出面は I a 面構築土中となっている。このため出土遺物は 13 世紀中葉以降 15 世紀代までのものが混在している。37 の丸瓦、38 の平瓦は永福寺Ⅱ期以降、39 の平瓦は永福寺Ⅲ期以降。23 の伊勢系鏝鍋は 14 世紀末以降のものである可能性が考えられる。

#### 建物 1 (図 7)

位置：X( - 75 200.70 ～ - 75 203.80) Y - 25 287.94 ～ - 25 292.43 規模：東西 1 間, 2.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 37° - E 重複関係：土坑 2・9 を切る 出土遺物：(P.2) 竜泉窯青磁櫛描蓮弁文碗 (1)・渥美・湖西片口鉢 (2) 特記事項：南東端は I b 面土坑 6 を先に検出したため、柱穴の有無は確認できず。また、南北方向と東方向は調査区外であるため、建物の正確な大きさは不明。1 の青磁碗は 13 世紀前半のもの、2 の渥美・湖西片口鉢は安井編年 2 b 期のもの。

#### 建物 2 (図 8)

位置：X - 75 197.94 ～ - 75 203.74 Y( - 25 288.44) ～ ( - 25 295.21) 規模：東西 3 間, 2.00 m × 南北 1 間, 2.00 m 主軸方位：N - 124° - E 重複関係：土坑 7・8・12 に切られる。建物 3・P.75 を切る。出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1・2)・青磁鎬蓮弁文碗 (3)・鉄製品かすがい (4) 特記事項：南北方向、東西方向ともに調査区外のため正確な規模は確定できない。P.2 は試掘坑内検出のため正確な掘り込み面は不明だが、柱穴が並んだため、当建物のものとした。P.2 東隣は土坑 7・8 構築の際に滅失か。北東隅の柱穴も検出できず。P.6 が非常に浅い構造となっており、東隅は礎石建ちの可能性もある。1・2 の土師器皿は 13 世紀前葉、3 の青磁碗は 13 世紀中葉から後半のもの。

#### 建物 3 (図 9)

位置：X( - 75 199.22) ～ ( - 75 204.41) Y( - 25 287.14) ～ ( - 25 291.48) 規模：東西 1 間, 2.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 36° - E 重複関係：建物 2・土坑 9 に切られる。建物 4 を切る。出土遺物：(P.2) 東遠型山茶碗 (1)・土師器皿 R 種小型 (2)・土師器皿 R 種大型 (3) 特記事項：北東隅の柱穴は調査区外のため検出できず。南北方向、東方向は調査区外のため、正確な規模を確定できず。2・3 の土師器皿は 13 世紀前半。

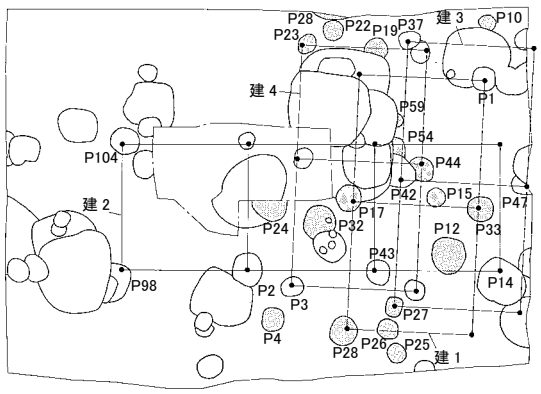
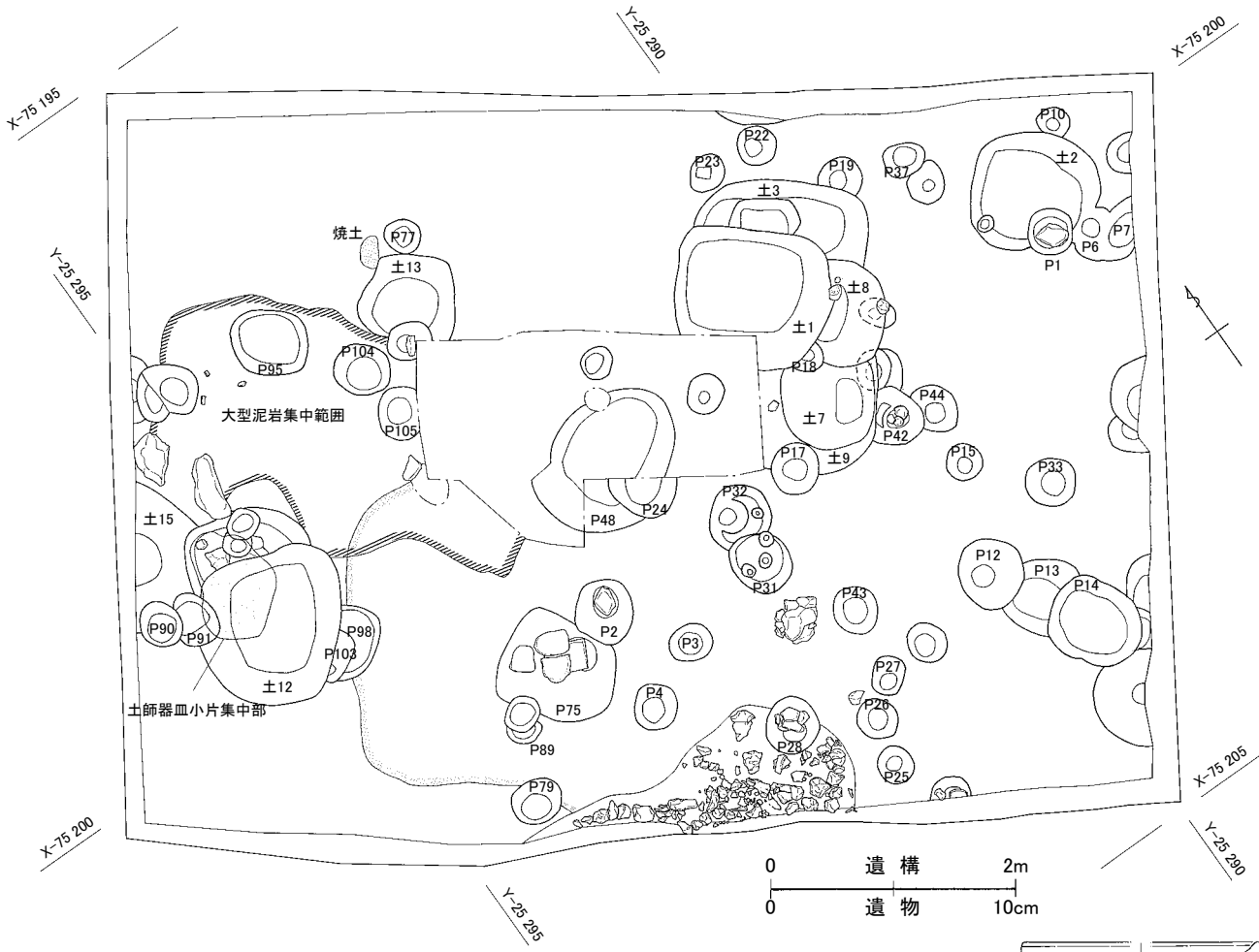
#### 建物 4 (図 9)

位置：X - 75 198.35 ～ - 75 202.84 Y - 25 288.57 ～ - 25 292.66 規模：東西 1 間, 2.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 35° - E 重複関係：建物 3 に切られる。出土遺物：(P.3) 土師器皿 T 種小型 (4) 特記事項：北東隅の柱穴は調査区外のため検出できず。南北方向、東方向は調査区外のため、正確な規模を確定できず。4 の土師器皿は 13 世紀前葉。

#### 落込み 1 (図 10)

位置：X - 75 202.20 ～ ( - 75 203.42) Y - 25 292.95 ～ ( - 25 294.55) 充填土：明灰褐色弱砂質土 平面形：涙滴型か 断面形：深鉢形 規模：最大幅 (0.98 m) × 長さ 2.73 m × 深さ 0.55 m 主軸方位：N-58° - W 重複関係：P.25 に切られる 出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1～5)・土師器皿 T 種大型 (6・7) 土師器皿 R 種中型 (8・9)・土師器皿 R 種大型 (10～12)・渥美・湖西片口鉢 (13～17)・渥美甕 (18～20)・常滑甕 (21・22)・青白磁合子身 (23)・鉄釘 (24) 特記事項：15～17 の渥美・湖西片口鉢は





0 遺構 2m  
0 遺物 10cm

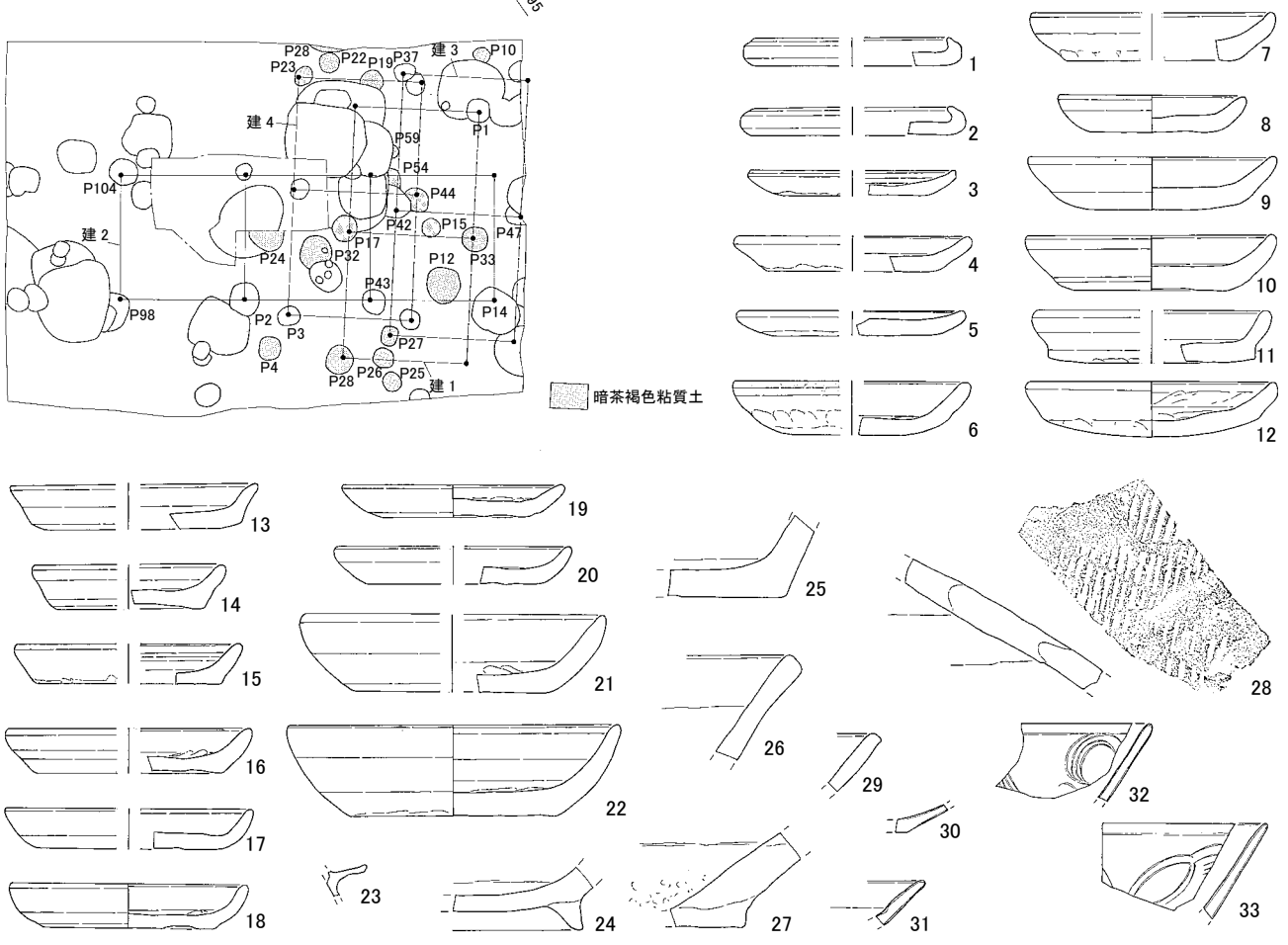


图5 I a面遺構全圖、I a面出土遺物(1)

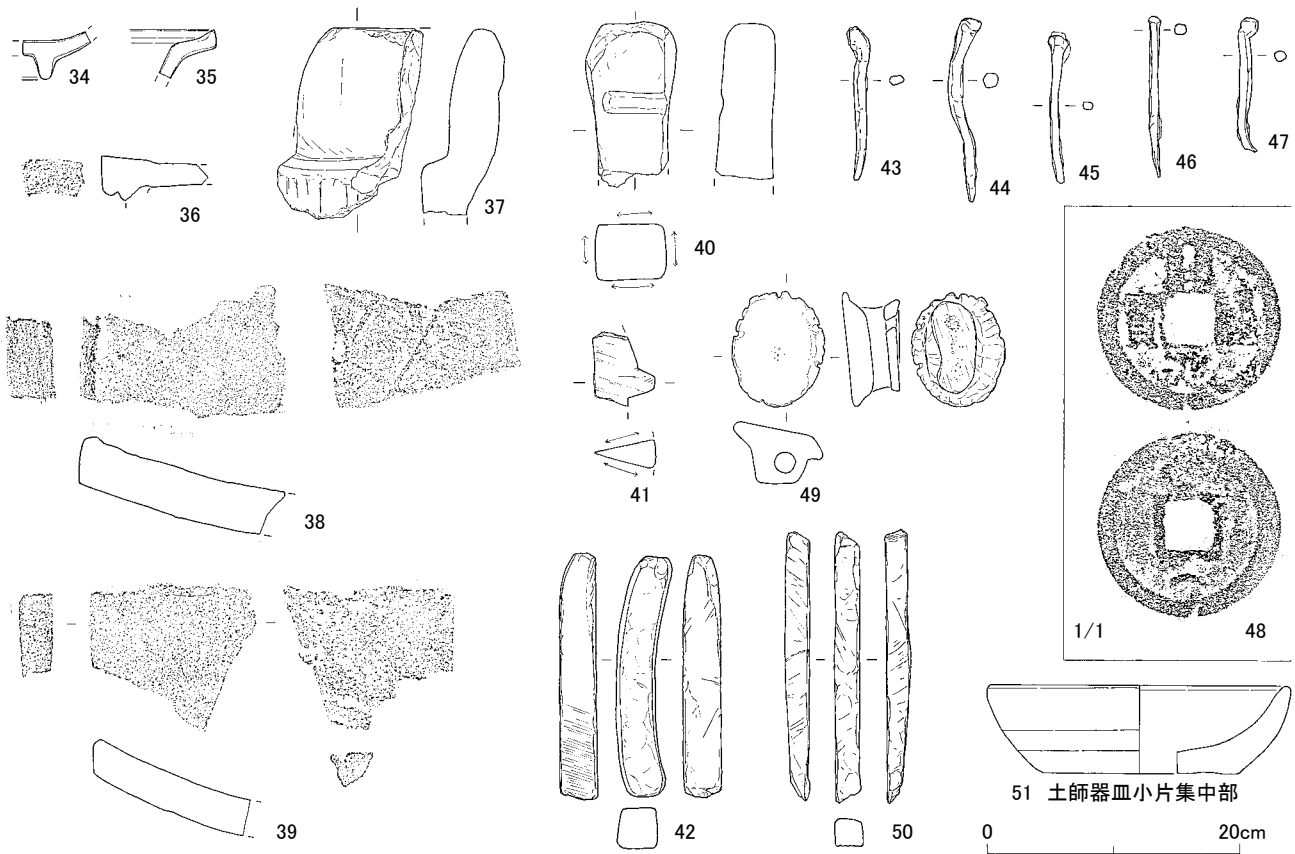


図6 I a 面出土遺物 (2)・土師器皿小片集中部出土遺物

安井編年 2 b 期。土師器皿は 13 世紀中葉から 13 世紀後葉以降のものが出土。13 世紀初頭までの渥美・湖西片口鉢も出土することから、客土によって埋められたと考えられる。

土坑 1 (図 11)

位置: X - 75 198.78 ~ - 75 200.18 Y - 25 289.75 ~ (- 25 291.09) 充填土: 暗茶褐色弱砂質土・暗褐色弱砂質土・暗灰色弱砂質土・暗灰色粘質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 深鉢形 規模: 長径 1.30 m × 短径 1.13 m × 深さ 0.56 m 主軸方位: N-50° -W 重複関係: 土坑 3・7・8・9・P.18 を切る 出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (1)・伊勢系鏝鍋 (2)・丸瓦 (3)・平瓦 (4)・鉄釘 (5) 特記事項: 3 の丸瓦は永福寺 II 期以降、4 の平瓦は永福寺 III 期以降。

土坑 2 (図 12)

位置: X - 75 199.62 ~ - 75 200.60 Y - 25 288.63 ~ - 25 287.48 充填土: 暗褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗褐色粘質土 平面形: 楕円形 断面形: 深皿形 規模: 長径 1.06 m × 短径 0.95 m × 深さ 0.20 m 主軸方位: N-55° -W 重複関係: P.1 に切られる、P.10 を切る 出土遺物: 土師器皿 R 種小型 (1・2)・土師器皿 T 種大型 (3) 特記事項: 1 は 13 世紀中葉、2・3 は 13 世紀前半のもの。

土坑 3 (図 12)

位置: X - 75 198.65 ~ (- 75 199.85) Y - 25 289.25 ~ (- 25 290.49) 充填土: 暗茶褐色粘質土 平面形: 隅丸方形か 断面形: 浅鉢形 規模: 長径 (0.98 m) × 短径 2.73 m × 深さ 0.58 m 主軸方位: N-50.5° -W 重複関係: 土坑 1・8 に切られる 出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (4・5)・土師器皿 R 種小型 (6)・土師器皿 R 種大型 (7) 特記事項: 5 は 13 世紀前葉、6、7 は 13 世紀中葉のもの。

土坑 7 (図 12)

位置: X (- 75 200.16) ~ - 75 201.11 Y - 25 289.96 ~ (- 25 290.71) 充填土: 茶褐色粘質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 浅皿形 規模: 長径 (0.77 m) × 短径 (0.70 m) × 深さ 0.10 m 主軸方位: N-36° -W 重複関係: 土坑 1・9・P.42・54 を切る、土坑 8 に切られる 特記事項: 土坑が群集するうちのひとつ。

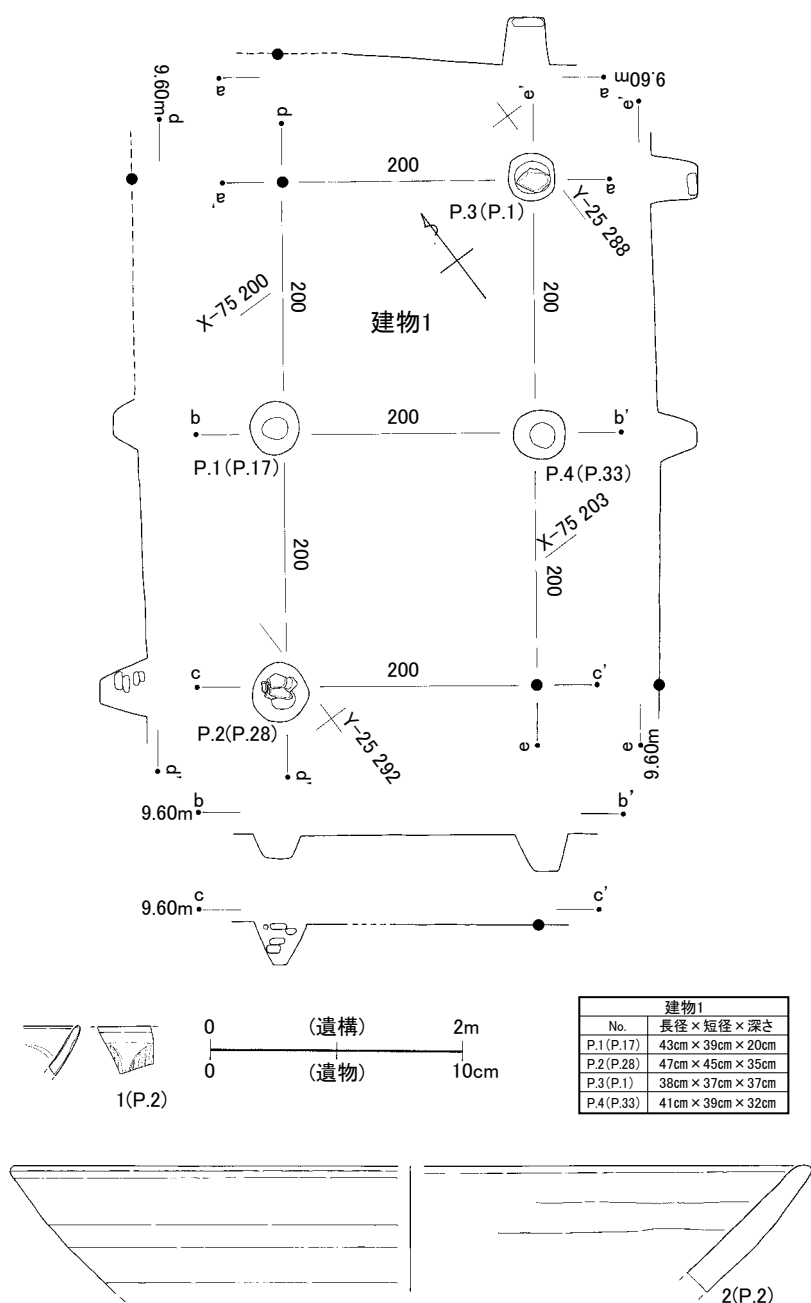


図7 建物1、同出土遺物

型(12)・竜泉窯青磁碗(13)・用途不明加工石(14)・東遠型山茶碗(15) 特記事項：土坑が群集するうちのひとつ。土師器皿は13世紀前葉から13世紀中葉のものが出土。13の青磁碗は13世紀中葉のもの。

土坑12(図12)

位置：X - 75 198.82 ~ - 75 200.14 Y - 25 294.49 ~ - 25 295.82 充填土：茶褐色弱砂質土・暗灰色粘質土・暗茶褐色弱粘質土・暗灰褐色粘質土・暗灰褐色弱粘質土・灰褐色弱砂質土 平面形：不整形 断面形：深鉢形 規模：長径1.33m×短径1.17m×深さ0.82m 主軸方位：N-33°-W 重複関係：P.91に切られる、P.98・P.102・P.103を切る 出土遺物：土師器皿T種小型(16・17)・土師器皿R種小型(18・19)土師器皿R種大型(20・21)・竜泉窯青磁碗(22)・軒丸瓦(23)・軒平瓦(24)・平瓦(25・26) 特記事項：土師器皿は13世紀前葉から13世紀末以降、21の青磁碗は大宰府分類I類。22~25の瓦は永福寺Ⅲ期併行のもの、精良な土を使用していることから同一工房の製品である可能性もある。

土坑8(図12)

位置：X (- 75 199.37) ~ - 75 200.51 Y - 25 289.51 ~ (- 25 290.25) 充填土：茶褐色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：深鉢形 規模：長径(0.87m)×短径(0.57m)×深さ0.26m 主軸方位：N-40°-W 重複関係：土坑3・7・9・P.54・59を切る、土坑1に切られる 出土遺物：土師器皿R種大型(10) 特記事項：土坑が群集するうちのひとつ。土師器皿は13世紀後葉以降のものが出土。

土坑7・8出土遺物(図12)

出土遺物：土師器皿R種小型(8・9) 特記事項：7・8ともに13世紀前葉のもの。

土坑9(図12)

位置：X (- 75 200.04) ~ - 75 201.11 Y - 25 289.89 ~ (- 25 290.15) 充填土：茶褐色粘質土・灰茶褐色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：深皿形 規模：長径(0.96m)×短径(0.95m)×深さ0.30m 主軸方位：N-32°-W 重複関係：土坑1・7・8・P.17・18に切られる、P.42・54を切る 出土遺物：土師器皿T種小型(11)・土師器皿R種大

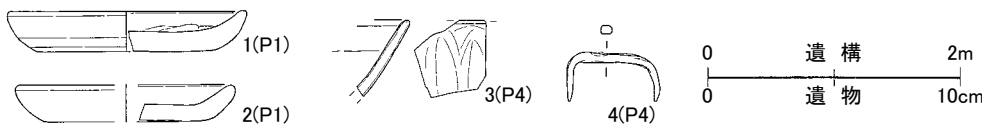
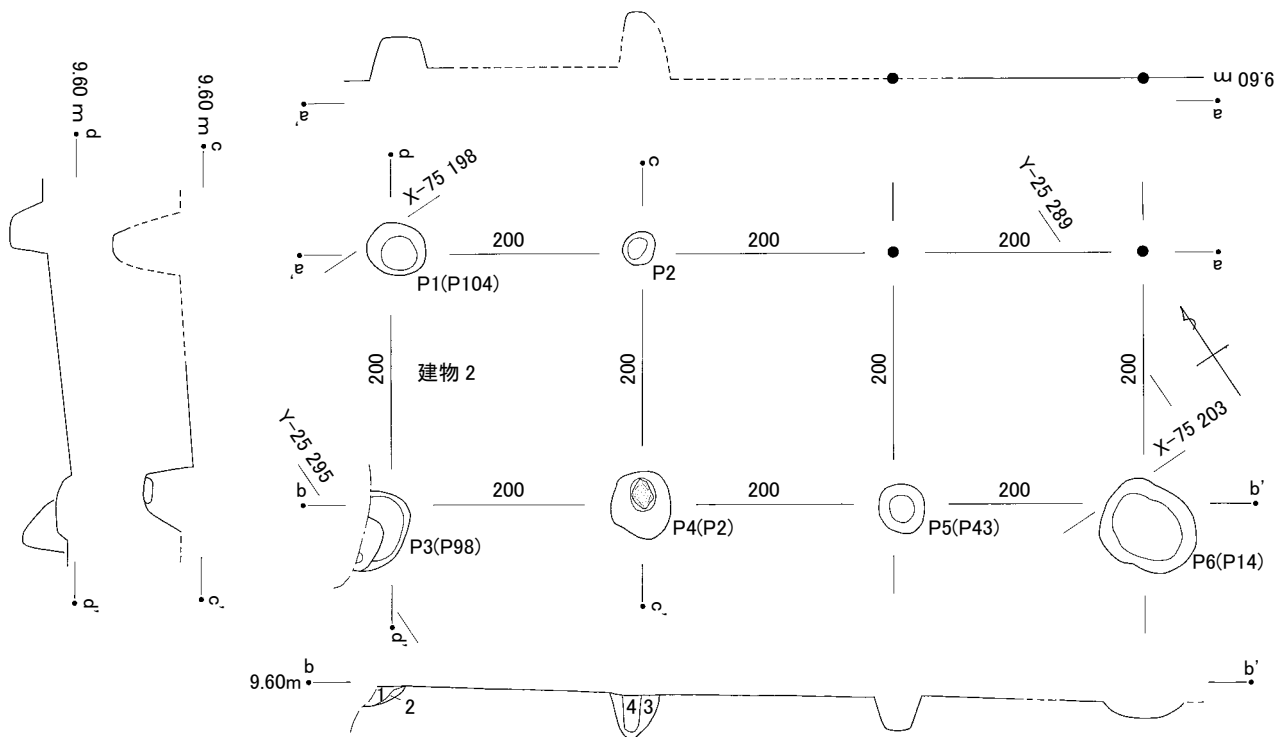


図8 建物2、同出土遺物

### 土坑 13 (図 13)

位置: X - 75 197.50 ~ (- 75 198.38) Y - 25 292.31 ~ (- 25 293.16) 平面形: 不整隅丸方形 断面形: 浅皿形 規模: 長径 (0.80 m) × 短径 0.68 m × 深さ 0.10 m 主軸方位: N-55.5° -W 重複関係: ピットに切られる 出土遺物: 土師器皿 T 種大型 (1) 特記事項: 土師器皿は 13 世紀前葉までのもの。

### P.12 (図 13)

位置: X - 75 262.21 ~ - 75 263.79 Y - 25 289.60 ~ - 25 290.14 充填土: 暗茶褐色粘質土 平面形: 不整円形 断面形: 深鉢形 規模: 長径 0.56 m × 短径 0.55 m × 深さ 0.50 m 主軸方位: N-32° -W 重複関係: P.13 を切る 出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (2・3)・土師器皿 T 種大型 (4) 特記事項: 土師器皿は 13 世紀前葉のもの。

### P.13 (図 13)

位置: X (- 75 262.60) ~ (- 75 263.19) Y (- 25 289.66) ~ (- 25 290.24) 充填土: 暗茶褐色粘質土 平面形: 不整円形 断面形: 深鉢形 規模: 長径 0.64 m × 短径 0.48 m × 深さ 0.13 m 主軸方位: N-32° -W 重複関係: P.12・14 に切られる 出土遺物: 図化可能遺物なし

### P.14 (建物2構成ピット) (図 13)

位置: X - 75 262.93 ~ - 75 263.72 Y - 25 289.95 ~ - 25 290.67 充填土: 明茶褐色弱砂質土 平面形: 不整楕円形 断面形: 浅皿形 規模: 長径 0.78 m × 短径 0.68 m × 深さ 0.17 m 主軸方位: N-32° -W 重複関係: P.34・他ピット 2 穴を切る 出土遺物: 図化可能遺物なし 特記事項: 建物 2 を構成する柱

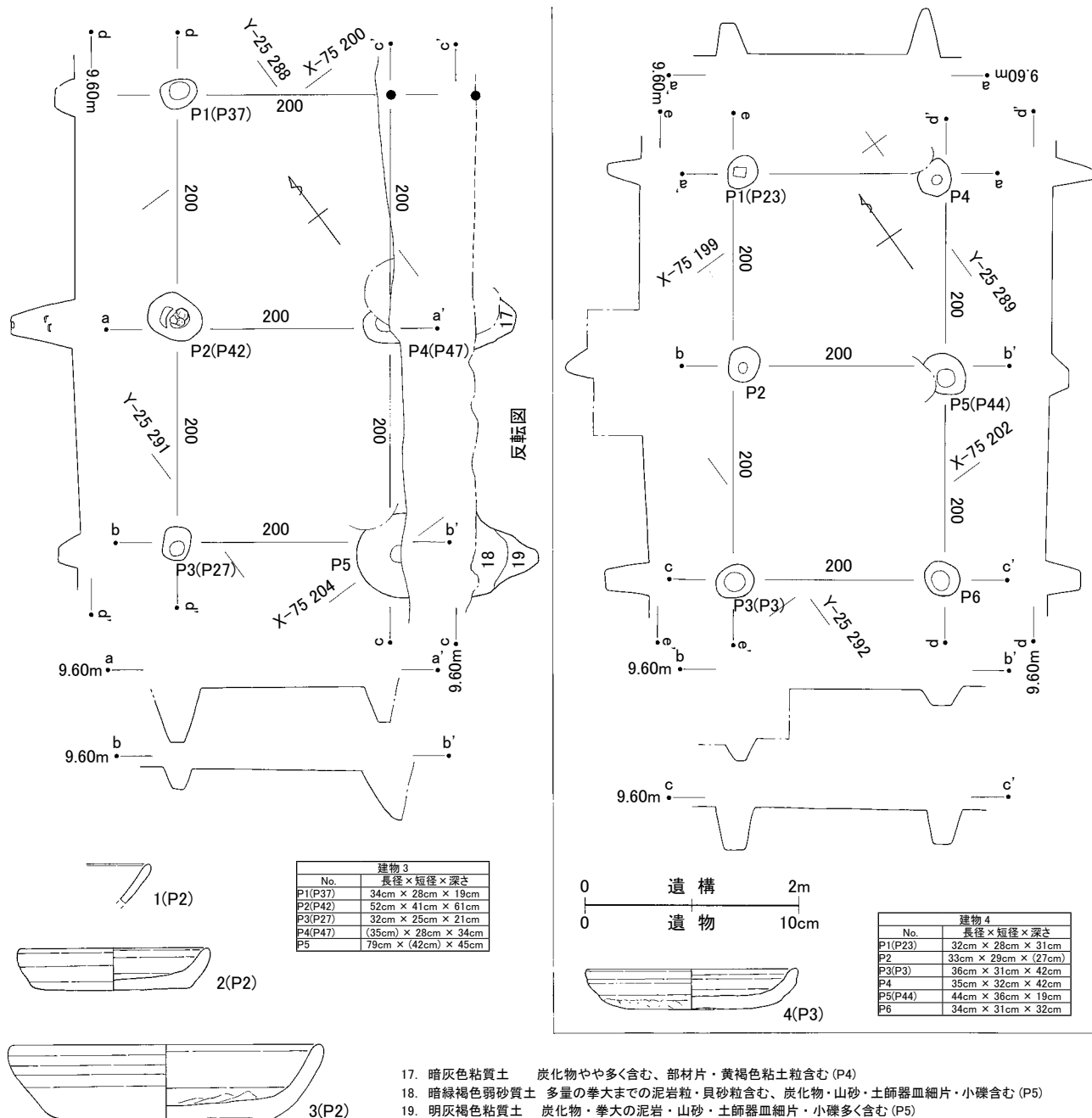


図9 建物3・4、同出土遺物

穴ないし礎石痕と判断したが、他ピットとの切合いを示すため再度提示した。

P.13・14 出土遺物 (図 13)

出土遺物：土製品土錘 (5)

P.34 (図 13)

位置：X (- 75 263.41 ~ - 75 263.77) Y (- 25 290.45 ~ - 25 290.73) 充填土：暗褐色粘質土・茶褐色弱砂質土 平面形：不明 断面形：漏斗形 規模：長径 (0.35 m) × 短径 (0.14 m) × 深さ (0.71 m) 主軸方位：N-32° -W 重複関係：P.14・他ピット 1 穴に切られる、他ピット 1 穴を切る 出土遺物：図化可能遺物なし

P.75 (図 13)

位置：X - 75 200.68 ~ - 75 201.69 Y (- 25 293.96) ~ - 25 294.03 充填土：暗茶褐色弱砂質土・暗茶褐色弱粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：深鉢形 規模：長径 0.98 m × 短径 0.82 m × 深さ 0.31 m

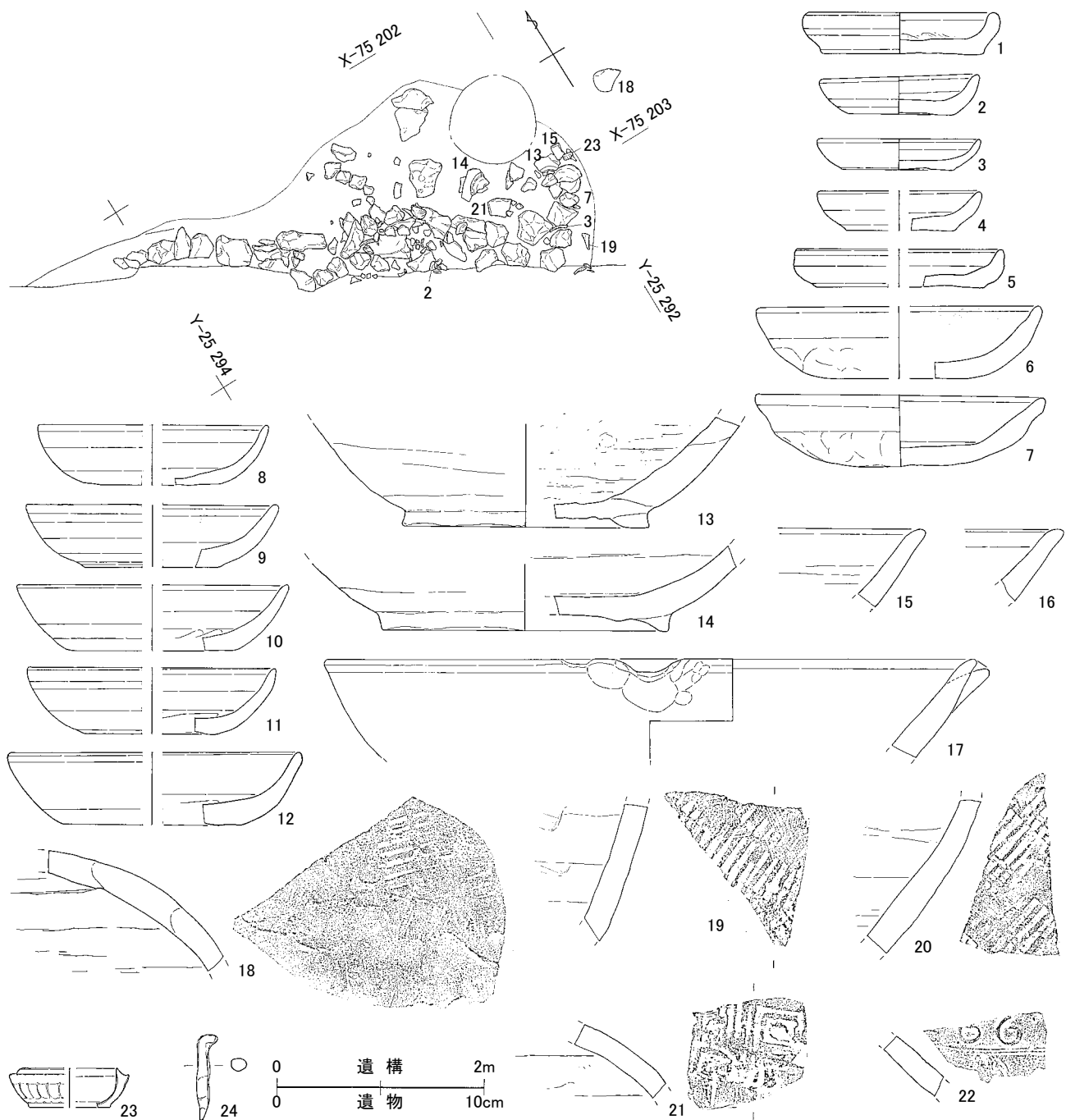


図 10 落込み 1、同出土遺物

主軸方位：N-36° -W 重複関係：P.2・他ピット 1 穴に切られる 出土遺物：平瓦 (1) 特記事項：完形の平瓦の上に伊豆石 (安山岩) を敷き、最上面は小礫を敷きつめた構造となっている。出土した瓦は永福寺Ⅲ期併行のもの。

I a 面ピット出土遺物 (図 14)

出土遺物：(P.7) 鉄釘 (1)・(P.54) 土師器皿 T 種大型 (2)・(P.79) 渥美・湖西片口鉢 (3)・(P.91) 平瓦 (4)・(P.92) 軒丸瓦 (5)・(P.105) 常滑片口鉢 I 類 (6)・鉄釘 (7) 特記事項：2 の土師器皿は 13 世紀前葉、3 の渥美・湖西片口鉢は安井編年 2 b 期、4 の平瓦は永福寺Ⅲ期、5 の軒丸瓦は永福寺Ⅲ期併行のもの。

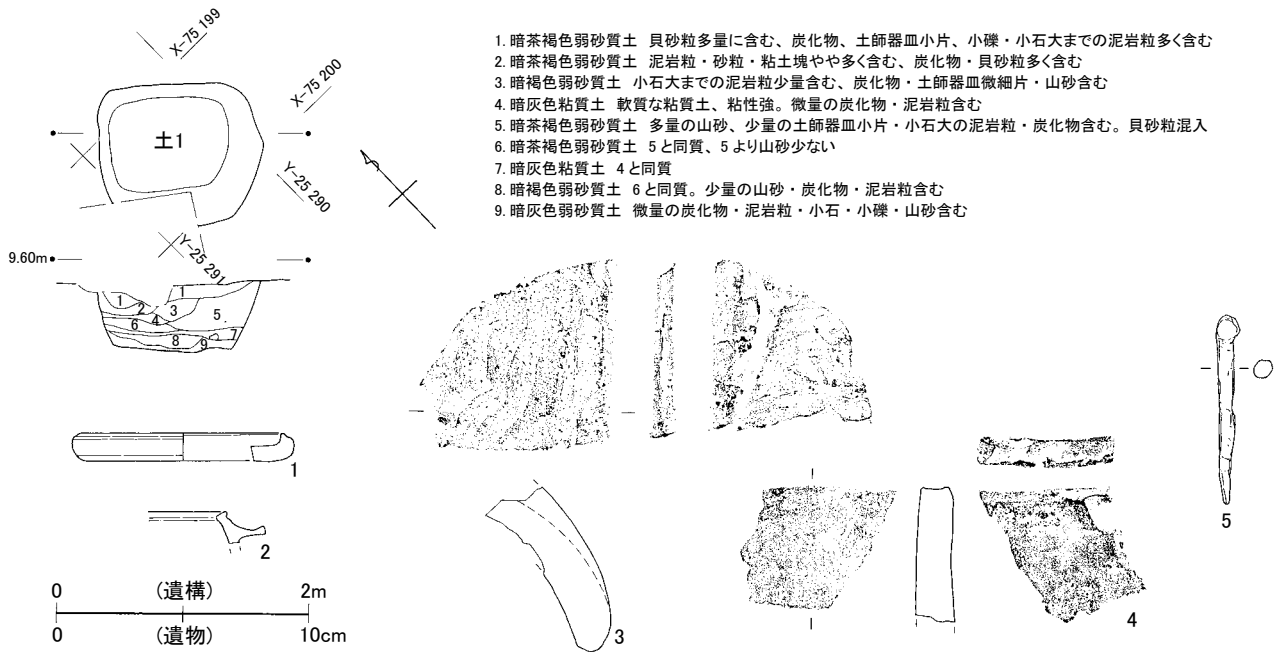


図 11 土坑 1、同出土遺物

## 2. I b 面

### 面の概要 (図 15)

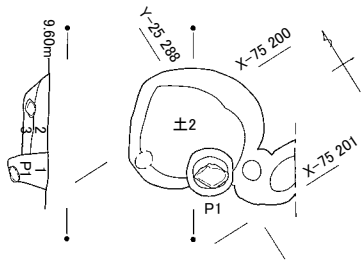
検出高: 9.48 m ~ 9.69 m 面構成土: 灰褐色粘質土・暗灰色粘質土・暗灰褐色粘質土・暗茶褐色弱粘質土・茶褐色弱砂質土・暗茶褐色弱砂質土 検出遺構: 溝 1・柱穴列 1 列・土坑 10 基・ピット 71 穴 I b 面出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (1・2)・土師器皿 R 種小型 (3)・土師器皿 R 種大型 (4)・白色系土師器皿 R 種大型 (5)・土製品羽口 (6)・渥美甕 (7・8)・軒平瓦 (9)・平瓦 (10)・鉄製品蓋 (11)・鉄釘 (12) 特記事項: 調査区東側の 1 区では調査区西側の 2 区に存在した下層面が存在しない。このため調査区東側の 1 区では I c 面と同一の面が I b 面として使用されたと考えられることから、調査区東側の 1 区に関しては I c 面と同一の遺構図を提示した。土師器皿は 12 世紀末～13 世紀初頭のものから 13 世紀後葉のものまで出土。9 の軒平瓦、10 の平瓦ともに永福寺 III 期以降のもの。

### 溝 1 (図 16)

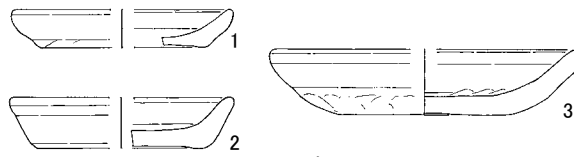
位置: X (- 75 198.70) ~ (- 75 201.75) Y (- 25 293.13) ~ (- 25 295.20) 充填土: 黒褐色粘質土 断面形: 逆台形 規模: 最大幅 (0.66 m) × 長さ (3.58 m) × 深さ 0.27 m 主軸方位: N-31° -E 重複関係: 土坑 17・19・P.120 に切られる 出土遺物: 砥石中砥 (1)・平瓦 (2) 特記事項: 2 の平瓦は永福寺 III 期か

### 柱穴列 1 (図 16)

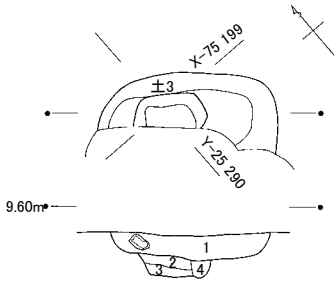
位置: X - 75 197.80 ~ - 75 201.37 Y - 25 287.84 ~ - 25 293.34 規模: 東西 3 間 (柱間距離 2.00 m) 主軸方位: N - 58° - W 重複関係: 土坑 18・P.36・80 他ピット 1 穴を切る 出土遺物: (P.1) 土師器皿 T 種小型 (3)・土師器皿 R 種大型 (4)・常滑片口鉢 II 類 (5)・常滑甕 (6)・元豊通宝 (7)・(P.2) 鉄製品刀子 (8)・(P.4) 竜泉窯青磁画花文碗 (9) 特記事項: 南東端は I b 面土坑 6 を先に検出したため、柱穴の有無は確認できず。また、南北方向と東方向は調査区外であるため、建物の正確な大きさは不明。3 の土師器皿は 13 世紀前葉のもの、4 の土師器皿は 13 世紀中頃までのもの。5 の常滑鉢は 6 b ~ 7 とされるバリエーションが豊富な時期のもの。9 の青磁碗は 13 世紀前葉までのもの。



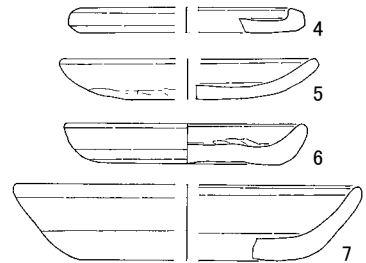
1. 暗褐色粘質土 泥岩粒・炭化物・土師器皿小片含む(P1)
2. 暗茶褐色粘質土 炭化物・土師器皿小片・黄褐色砂塊含む(土2)
3. 暗褐色粘質土 拳大泥岩・炭化物・黄褐色砂塊含む(土2)



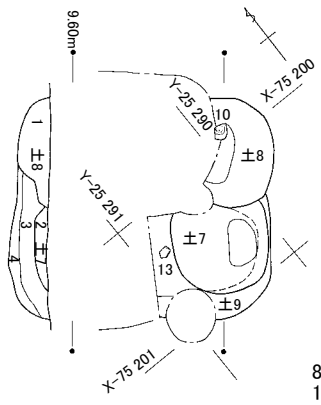
土坑 2



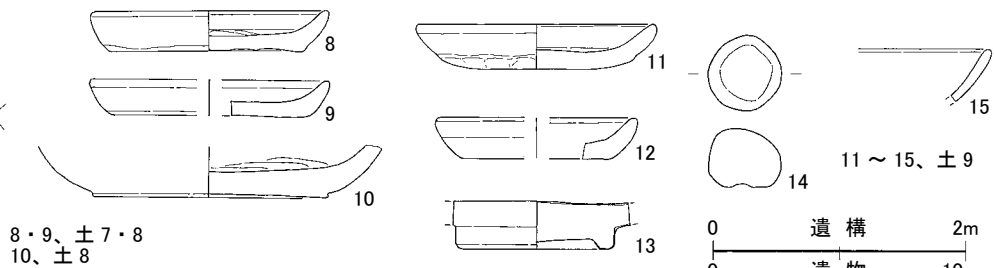
1. 暗茶褐色粘質土 大きめの炭化物や多く含む、泥岩粒・土師器皿小片・白色粒・黄褐色砂塊含む
2. 暗茶褐色粘質土 1より炭化物少ない
3. 暗茶褐色粘質土 微量の炭化物含む、白色粒・灰色砂含む
4. 暗茶褐色粘質土 微量の炭化物・土師器皿小片含む、白色粒・黄褐色砂塊含む



土坑 3

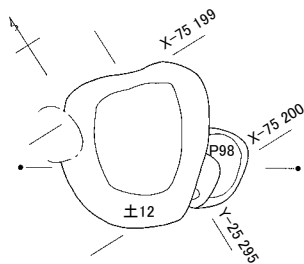


1. 茶褐色粘質土 大きめの炭化物・泥岩細粒・土師器皿小片・黄灰色砂質土塊含む。しまりやや悪い(土8)
2. 茶褐色粘質土 炭化物・黄灰色砂質土塊含む、土師器皿小片1より多い。しまり1より良い(土7)
3. 茶褐色粘質土 大きめの炭化物・土師器皿小片含む、黄褐色砂質土混ざる。1・2より粘性強い(土9)
4. 灰茶褐色粘質土 炭化物・泥岩粒・土師器皿小片を含む。粘性やや強(土9)

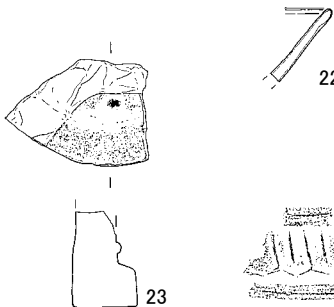
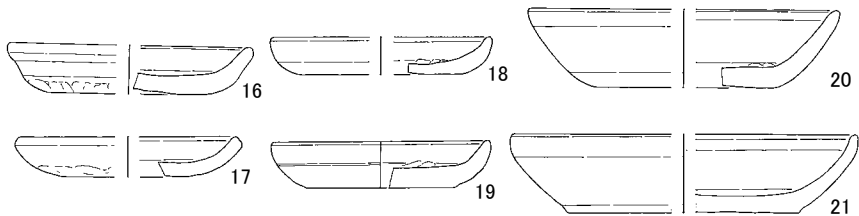
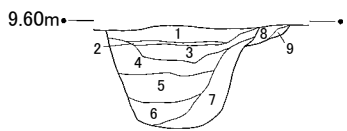


8・9、土7・8  
10、土8

土坑 7・8・9



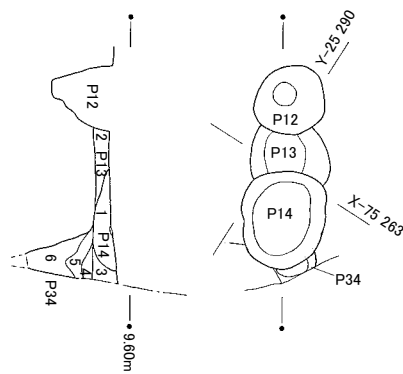
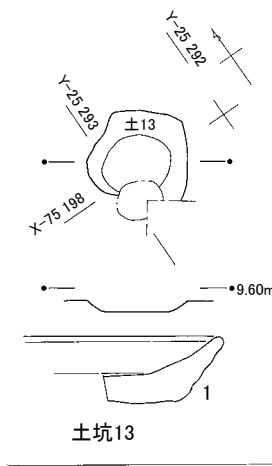
1. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒・炭化物・山砂・土師器皿小片・小礫・泥岩粒含む
2. 暗灰色粘質土 軟質。微量の炭化物含む。粘性強
3. 暗茶褐色弱粘質土 多量の泥岩粒含む、炭化物・貝砂粒・山砂・小礫含む、暗灰色粘土混ざる
4. 暗灰褐色粘質土 軟質。少量の炭化物・山砂・泥岩粒・鉄分含む。粘性強
5. 暗灰褐色弱粘質土 やや多くの炭化物・土師器皿小片・泥岩粒含む、微量の山砂含む
6. 暗灰色粘質土 2・4と同質。含有物は微量
7. 灰褐色弱砂質土 多量の炭化物・山砂含む、少量の土師器皿小片・泥岩粒・鉄分含む
8. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂含む、少量の炭化物・土師器皿小片含む
9. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、微量の山砂・鉄分含む



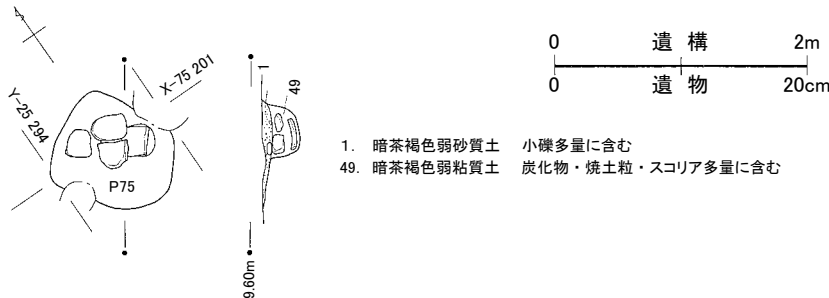
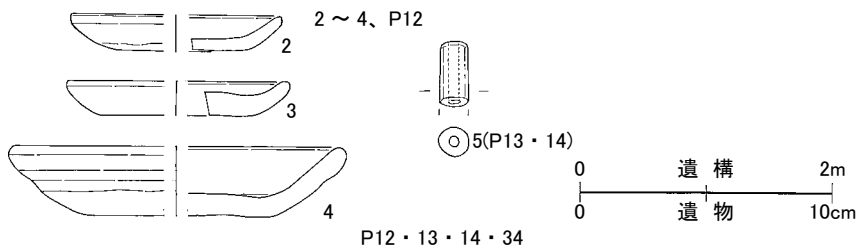
土坑 12

図 12 土坑 2・3・7・8・9・12、同出土遺物





1. 明茶褐色弱砂質土 貝砂・山砂・多量に含む、炭化物やや多く含む、小石大の泥岩・土師器血細片含む
2. 明灰褐色弱砂質土 炭化物・土師器血細片・泥岩粒含む。やや粘性あり
3. 暗褐色粘質土 炭化物・黄茶色粘土塊多量に含む
4. 暗褐色粘質土 微量の炭化物・泥岩粒含む、粘性強
5. 茶褐色弱砂質土 山砂多量に含む、炭化物・土師器血細片・泥岩粒やや多く
6. 暗褐色粘質土 泥岩粒含む、少量の炭化物・黄茶色粘土塊含む。しまり悪い、粘性強



1. 暗茶褐色弱砂質土 小礫多量に含む
49. 暗茶褐色弱粘質土 炭化物・焼土粒・スコリア多量に含む

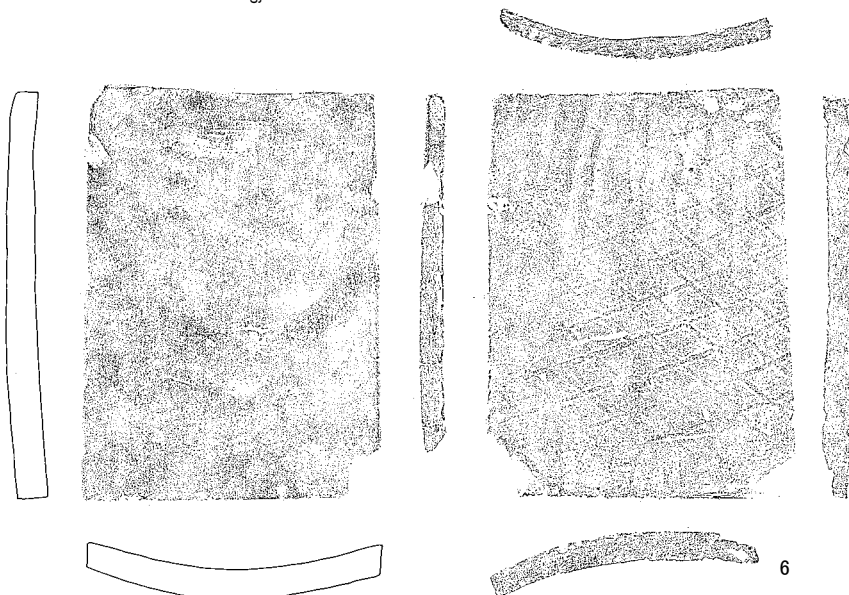


図 13 土坑 13・P.12・13・14・34・75、同出土遺物

### 土坑 4 (図 16)

位置：X - 75 200.68 ~ - 75 201.81 Y - 25 291.86 ~ - 25 292.99 充填土：暗茶褐色粘質土 平面形：楕円形 断面形：皿形 規模：長径 1.14 m × 短径 1.03 m × 深さ 0.13 m 主軸方位：N-56.5° -W 重複関係：P.29・30 に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし

### 土坑 5 (図 16)

位置：X (- 75 197.49) ~ - 75 198.45 Y (- 25 289.80) ~ - 25 290.76 充填土：暗茶褐色粘質土・暗茶褐色弱砂質土・茶褐色弱砂質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 1.12 m × 短径 0.28 m × 深さ 0.65 m 主軸方位：N-55° -W 出土遺物：図化可能遺物なし

### 土坑 6 (図 17)

位置：X - 75 203.38 ~ (- 75 204.56) Y (- 25 290.00) ~ (- 25 291.08) 充填土：暗灰色粘質土・暗茶褐色弱粘質土・暗茶褐色弱砂質土・暗灰褐色弱砂質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 (0.97 m) × 短径 0.98 m × 深さ 0.72 m 主軸方位：N-13° -E 重複関係：P.68・70 他ピット 1 穴を切る、ピット 1 穴に切られる 出土遺物：土師器皿 T 種小型 (1)・土師器皿 R 種小型 (2・3)・土師器皿 T 種小型 (4)・渥美甕 (5・6)・青白磁合子

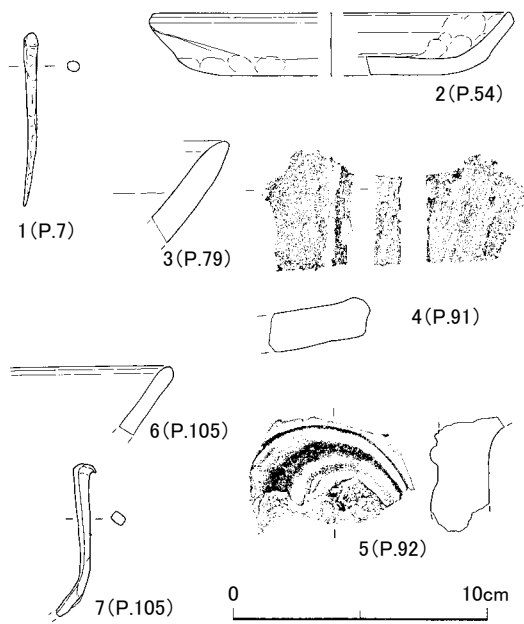


図14 I a面ピット出土遺物

身(7)・丸瓦(8)・平瓦(9)・鉄釘(10)・東遠型山茶碗(11) 特記事項:土師器皿は13世紀中頃までのもの。8の丸瓦は永福寺Ⅱ期以降、9の平瓦は永福寺Ⅲ期併行。

#### 土坑11(図17)

位置: X(-75 196.42) ~ -75 197.64 Y(-25 290.86) ~ -25 292.26 充填土: 茶褐色弱砂質土 平面形: 楕円形 断面形: 皿型 規模: 長径1.67m × 短径(0.49m) × 深さ0.16m

主軸方位: N-52° -W 出土遺物: 鉄製品刀子(12)

#### 土坑14(図17)

位置: X -75 195.59 ~ (-75 196.47) Y -25 293.38 ~ (-25 294.24) 充填土: 茶褐色弱粘質土・茶褐色弱砂質土・暗灰色粘質土

平面形: 楕円形か 断面形: 深鉢形 規模: 長径(1.68m) × 短径0.88m × 深さ0.35m 主軸方位: N-53° -W 重複関係: 土坑20・P.86を切る、ピット2穴に切られる 出土遺物: 土師器皿T種小型(13)・土師器皿R種小型(14)・土師器碗(15) 特記事項: 14の土師器皿は13世紀中頃までのもの、15の土師器碗の類例の出土事例は現時点では非常に少ない。

#### 土坑20(図17)

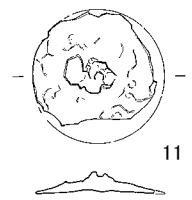
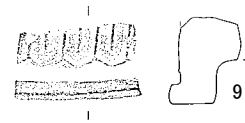
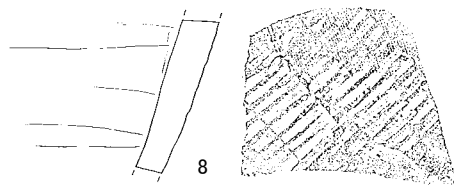
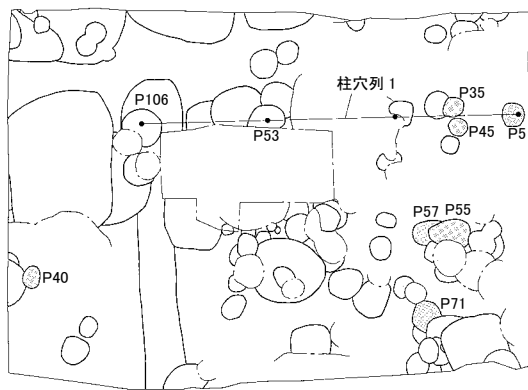
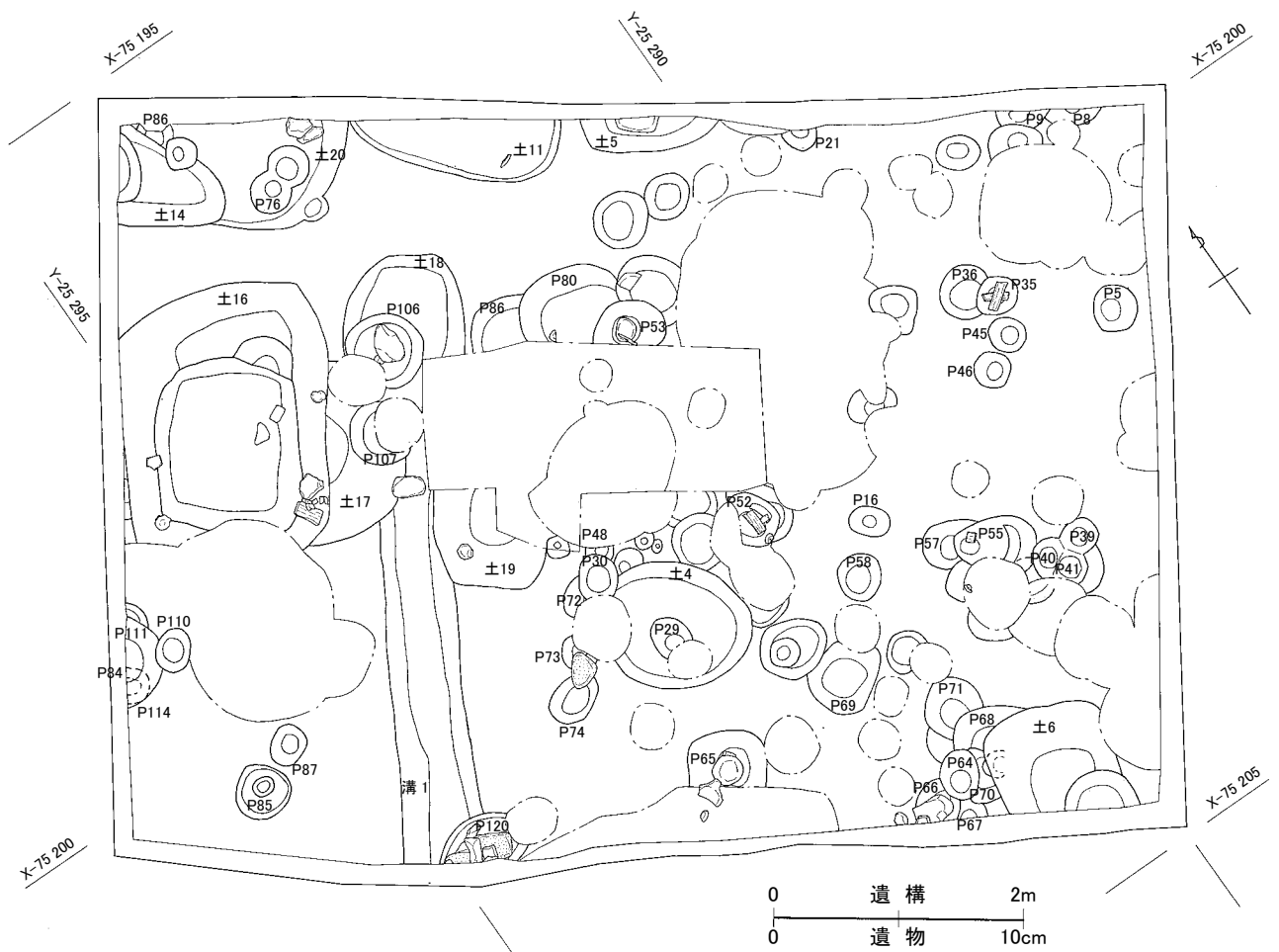
位置: X(-75 195.38) ~ -75 196.94 Y(-25 292.24) ~ (-25 293.64) 充填土: 暗灰色粘質土・明茶褐色弱粘質土・明茶褐色弱砂質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 逆台形 規模: 長径(0.88m) × 短径0.81m × 深さ0.48m 主軸方位: N-54.5° -W 重複関係: 土坑14・P.76・86に切られる 出土遺物: 凶化可能遺物なし

#### 土坑16(図18・19)

位置: X -75 196.77 ~ -75 199.04 Y -25 293.22 ~ -25 294.49 充填土: 暗灰色粘質土・黒灰色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗灰褐色弱砂質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 逆台形 規模: 長径2.20m × 短径1.70m × 深さ0.63m 主軸方位: N-28° -E 重複関係: 土坑17他ピット1穴を切る 出土遺物: 土師器皿T種小型(18)・土師器皿R種小型(19)・土師器皿T種大型(20)・渥美広口壺(21)・常滑甕(22)・不明木製品(23)・箸状木製品(24)・不明木製品(25)・棒状木製品(26) 特記事項: 形状と堆積土から方形の井戸枠をもつ井戸址の可能性が高いと判断したが、便槽の可能性もある。21の渥美広口壺は出土層位が多岐にわたるも、出土層位のうちで出土破片数が最も多く最下層にあたる遺構が土坑16であるため、土坑16出土遺物とした。土師器皿は13世紀前半、21の渥美広口壺は安井編年2b期のもの。

#### 土坑17(図18・19)

位置: X -75 198.00 ~ -75 199.21 Y -25 293.22 ~ -25 294.49 充填土: 暗茶褐色粘質土・灰茶褐色粘質土・黒褐色弱粘質土・青灰色粘質土・青灰色弱砂質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 深鉢形 規模: 長径1.45m × 短径0.84m × 深さ(1.65m) 主軸方位: N-27° -E 重複関係: 土坑16・P.107に切られる 出土遺物: (土坑17上層) 渥美・湖西片口鉢転用摩耗陶片(27)・(土坑17下層) 土師器皿T種小型(28・29)・土師器皿R種小型(30) 特記事項: 円形素掘りの井戸の可能性はある。



暗茶褐色粘質土

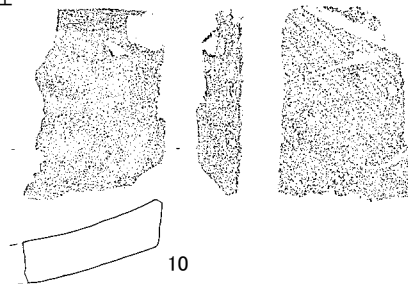
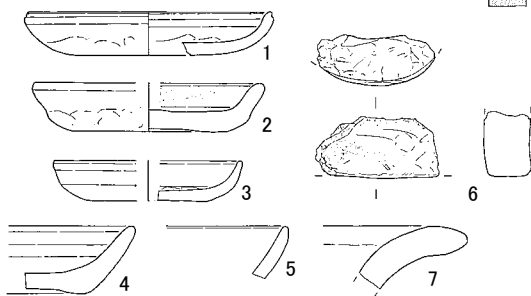
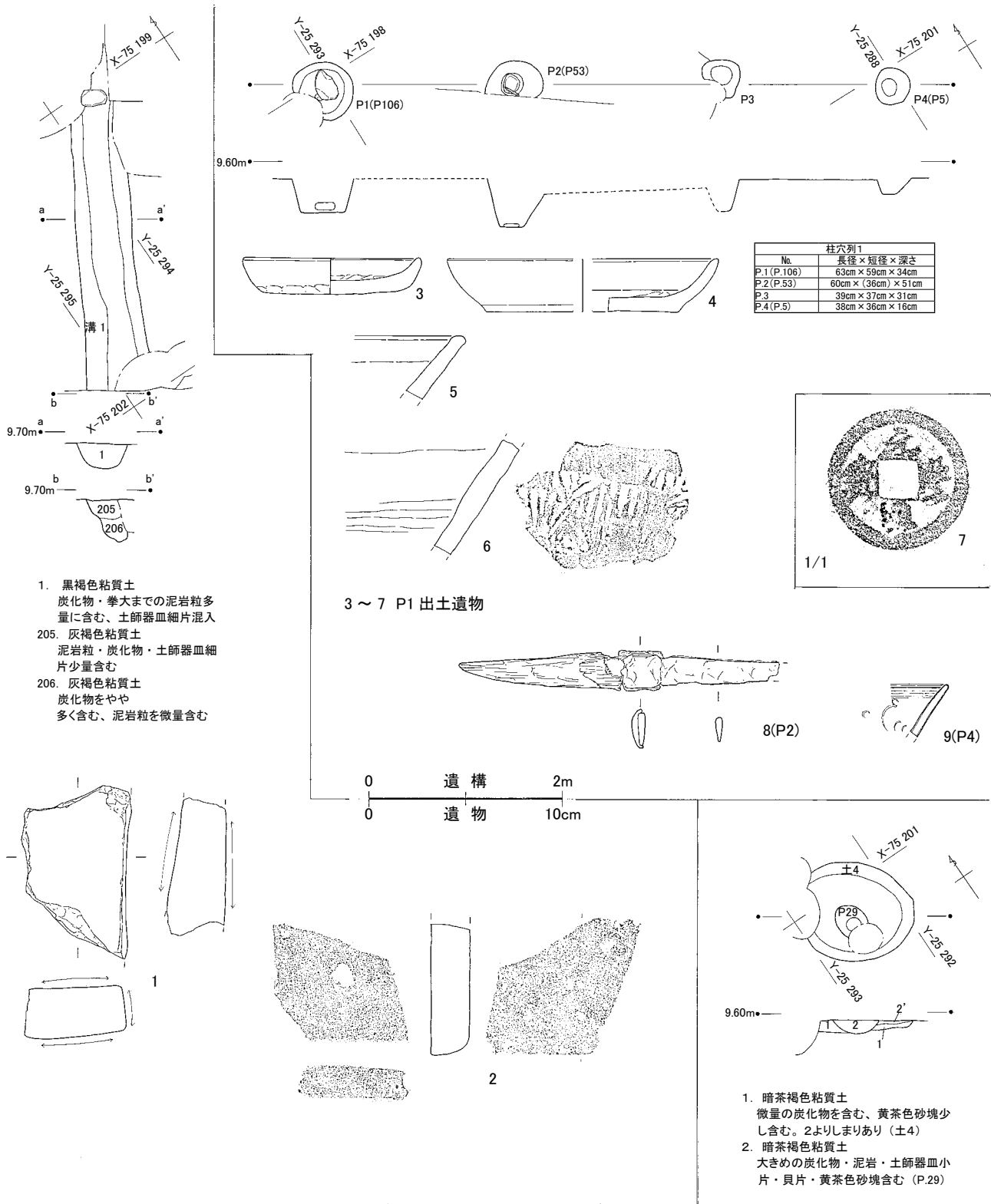


图 15 I b 面遺構全圖、I b 面出土遺物

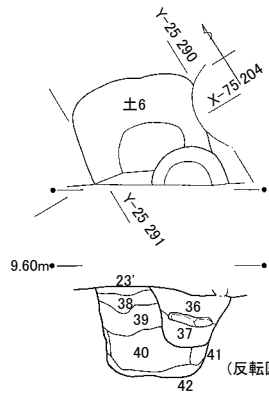


- 1. 黒褐色粘質土  
炭化物・拳大までの泥岩粒多量に含む、土師器皿細片混入
- 205. 灰褐色粘質土  
泥岩粒・炭化物・土師器皿細片少量含む
- 206. 灰褐色粘質土  
炭化物をやや多く含む、泥岩粒を微量含む

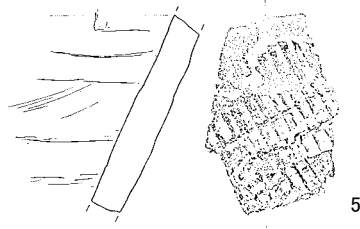
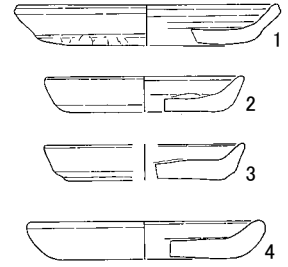
- 1. 暗茶褐色粘質土  
微量の炭化物を含む、黄茶色砂塊少し含む。2よりしまりあり(土4)
- 2. 暗茶褐色粘質土  
大きめの炭化物・泥岩・土師器皿小片・貝片・黄茶色砂塊含む(P.29)

- 1. 暗茶褐色粘質土 炭化物・土師器皿小片・2cm泥岩粒・茶褐色砂塊少量含むが、混入物は少ない
- 2. 茶褐色弱砂質土 炭化物・土師器皿小片・泥岩粒含む。しまり悪い
- 3. 茶褐色弱砂質土 玉砂利・炭化物・2cm大までの泥岩粒・土師器皿小片を多く含む、全体に貝細片含む。しまり悪い
- 4. 茶褐色弱砂質土 土師器皿小片・泥岩細粒を少し含む。しまり悪い
- 5. 暗茶褐色粘質土 炭化物・土師器皿小片少し含む
- 6. 暗茶褐色弱砂質土 炭化物・泥岩細粒・土師器皿小片少し含む。しまりやや悪い
- 7. 茶褐色弱砂質土 玉砂利・炭化物・泥岩細粒・土師器皿小片含む。石直上に貝細片ブロック状に集中。しまりやや悪い
- 8. 暗茶褐色粘質土 玉砂利やや多く含む、炭化物・卵大泥岩・土師器皿小片含む

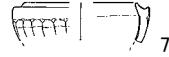
図 16 柱穴列1・溝1・土坑4・P29・土坑5、同出土遺物



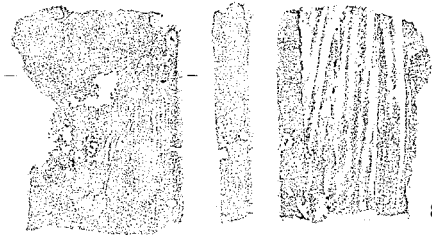
- 23. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒を含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む
- 36. 茶褐色弱砂質土 23'と同質。暗灰色粘土粒やや多く含む。
- 37. 暗茶褐色弱砂質土 山砂・泥岩粒・炭化物を含む、微量の貝砂粒を含む
- 38. 暗茶褐色弱粘質土 拳大の泥岩・泥岩粒・炭化物・土師器皿細片を含む
- 39. 茶褐色弱砂質土 23'と同質
- 40. 暗灰褐色弱砂質土 多量の貝砂含む、泥岩粒・炭化物・小礫・土師器皿片細片含む
- 41. 暗茶褐色弱砂質土 山砂・炭化物含む
- 42. 暗灰色粘質土 微量の山砂・炭化物・貝砂粒・土師器皿細片含む



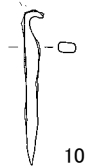
5



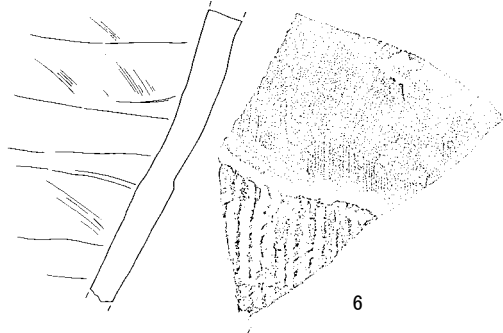
7



8



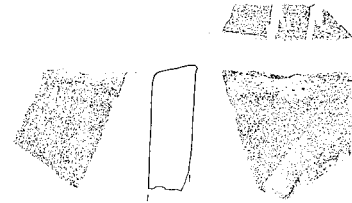
10



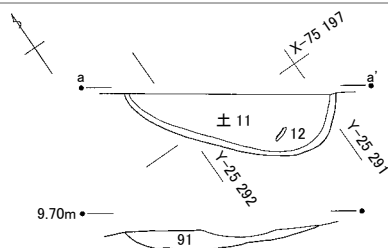
6



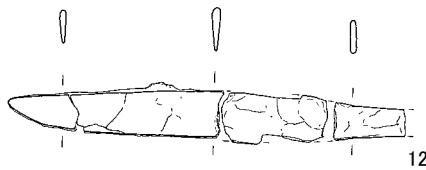
11



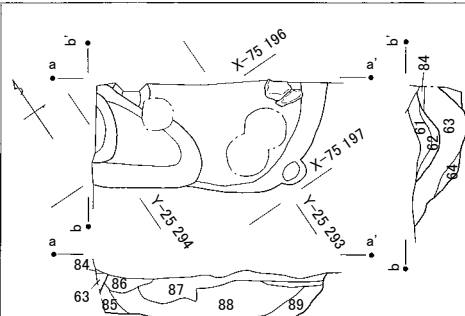
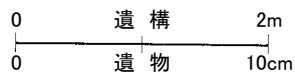
9



- 91. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂、やや多くの炭化物・焼土粒を含む、鉄分・泥岩粒・黄茶色粘土塊・小礫含む。下層は暗灰色粘土粒混入



12



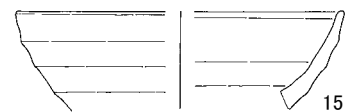
- 61. 茶褐色弱粘質土 拳大までの泥岩多量につまる、炭化物・土師器皿細片含む(ピット)
- 62. 茶褐色弱砂質土 山砂多量に含む、炭化物を含む(ピット)
- 63. 暗灰色粘質土 炭化物・茶色粘土・鉄分・土師器皿細片・焼土粒多量に含む、礫片含む(土14)
- 64. 暗灰色粘質土 炭化物・焼土粒少量含む(土14)
- 84. 暗灰色粘質土 炭化物・泥岩粒・黄茶色粘土含む、山砂・焼土粒・土師器皿細片少量含む(土14)
- 85. 暗灰色粘質土 85と同質。炭化物・焼土粒・土師器皿細片多く含む(土20)
- 86. 明茶褐色弱砂質土 多量の山砂・泥岩粒を含む、炭化物・土師器皿細片を含む(P.86)
- 87. 暗茶褐色弱粘質土 炭化物・山砂・拳大までの泥岩多量に含む、土師器皿細片・礫片混入(土20)
- 88. 暗灰色粘質土 炭化物・焼土粒多量に含む、山砂・黄茶色粘土塊・泥岩粒・土師器皿細片含む(土20)
- 89. 暗灰色粘質土 88と同質。山砂少量含む。88より色調黒い(土20)



13

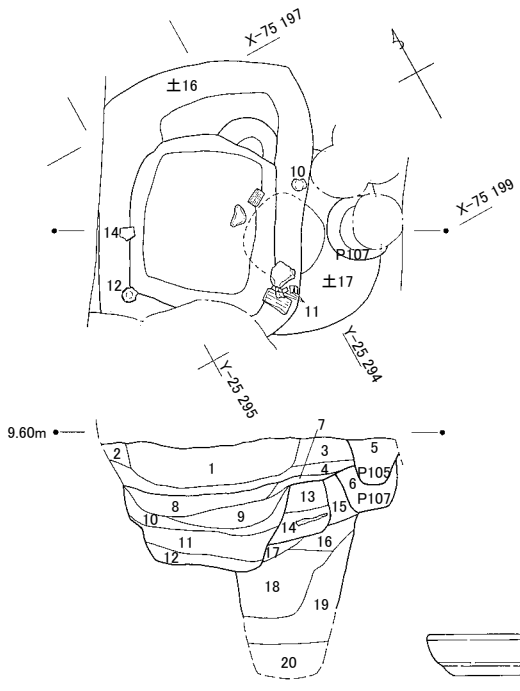


14



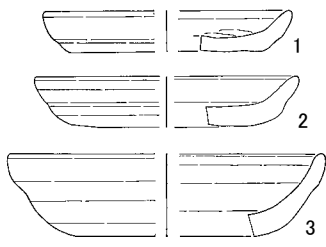
15

図 17 土坑 6・11・14・20、同出土遺物



1. 大型泥岩層 多量の炭化物含む (I a 面構築土)
2. 暗褐色粘質土 多量の炭化物・土師器皿小片含む (I a 面構築土)
3. 暗茶褐色弱粘質土 多量の半人頭大から粒子の泥岩含む、炭化物・山砂・土師器皿小片含む。半地行土 (I a 面構築土)
4. 明茶褐色砂質土 多量の山砂含む、炭化物・泥岩粒・土師器皿小片少量含む (I a 面構築土)
5. 茶褐色弱粘質土 拳大から粒子の泥岩多量に含む、炭化物・土師器皿小片含む (P.105)
6. 黒褐色粘質土 多量の炭化物含む、山砂・茶褐色粘土塊混入 (P.107)
7. 暗灰色粘質土 炭化物・山砂・土師器皿片含む。しまり悪い (土 16)
8. 暗灰色粘質土 7と同質。多量の炭化物、微量の山砂含む。粘性強 (土 16)
9. 黒灰色粘質土 炭土と茶褐色粘土 (腐植土) がつまる。木片・遺物片多量に含む。粘性強く、しまり悪い (土 16)
10. 暗茶褐色粘質土 炭化物・木片・遺物片含む。粘性強い、しまり弱い (土 16)
11. 暗茶褐色粘質土 軟質。繊維質腐植土多量に含む、炭化物・木片・泥岩混入 (土 16)
12. 暗灰褐色弱砂質土 小石大～拳大の泥岩やや多く含む (土 16)
13. 暗茶褐色粘質土 炭化物・黄茶色粘土塊混入。ややしる (土 20)
14. 暗茶褐色粘質土 軟質。粘性強い。13に比べ炭化物多く、粘土塊含まず (土 20)
15. 暗茶褐色粘質土 13と似る。炭化物・黄茶色粘土塊少量含む。ややしる (土 17)
16. 灰茶褐色弱粘質土 ぼそぼそとした土。山砂含む、腐植土が混入 (土 17)
17. 黒褐色弱粘質土 炭化物・木片多量に含む (土 17)
18. 黒褐色弱粘質土 木片・貝砂粒多量に含む、小石大～拳大の泥岩・遺物片含む (土 17)
19. 青灰色弱砂質土 炭化物・貝砂粒含む (土 17)
20. 青灰色粘質土 炭化物・鉄分混入。含有物少ない。ややしる (土 17)

6 ~ 17 4 層出土遺物



1 ~ 5 1・3 層出土遺物

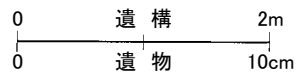
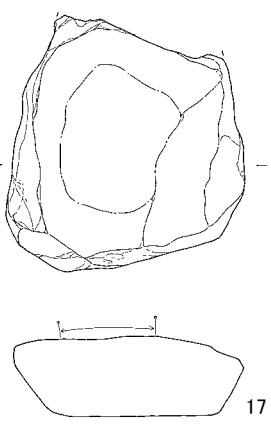
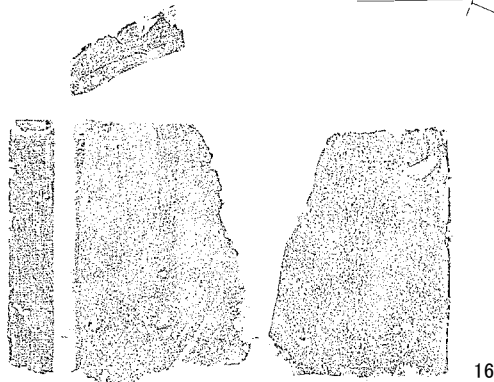
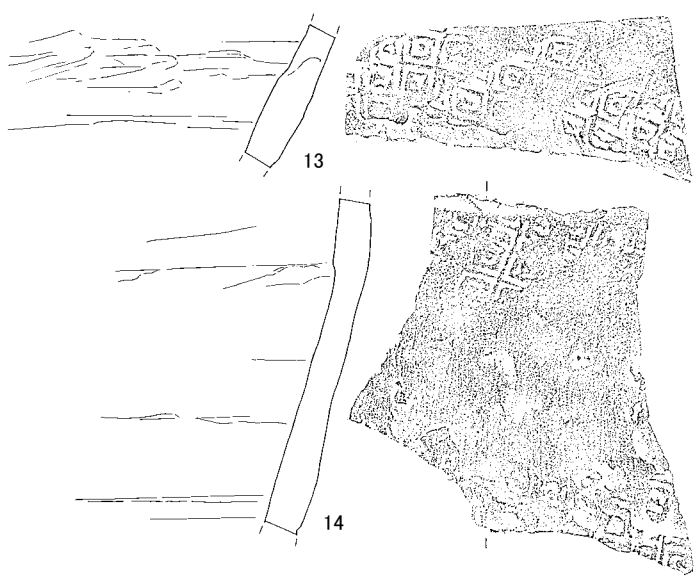
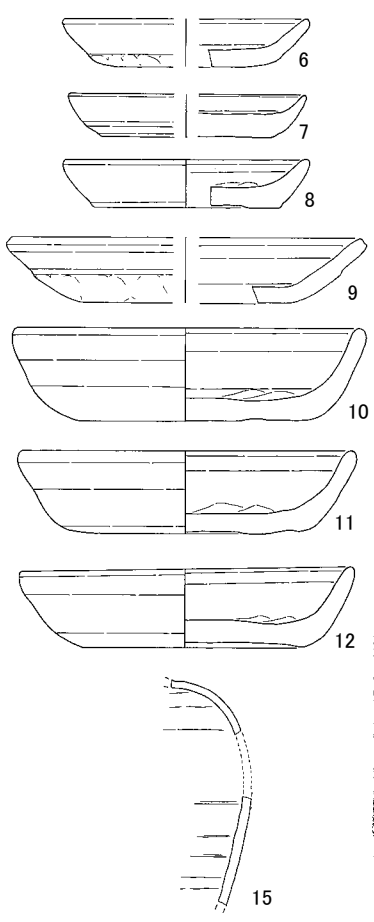
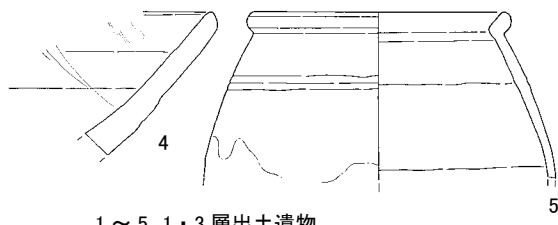


図 18 土坑 16・17、I a 構築土出土遺物

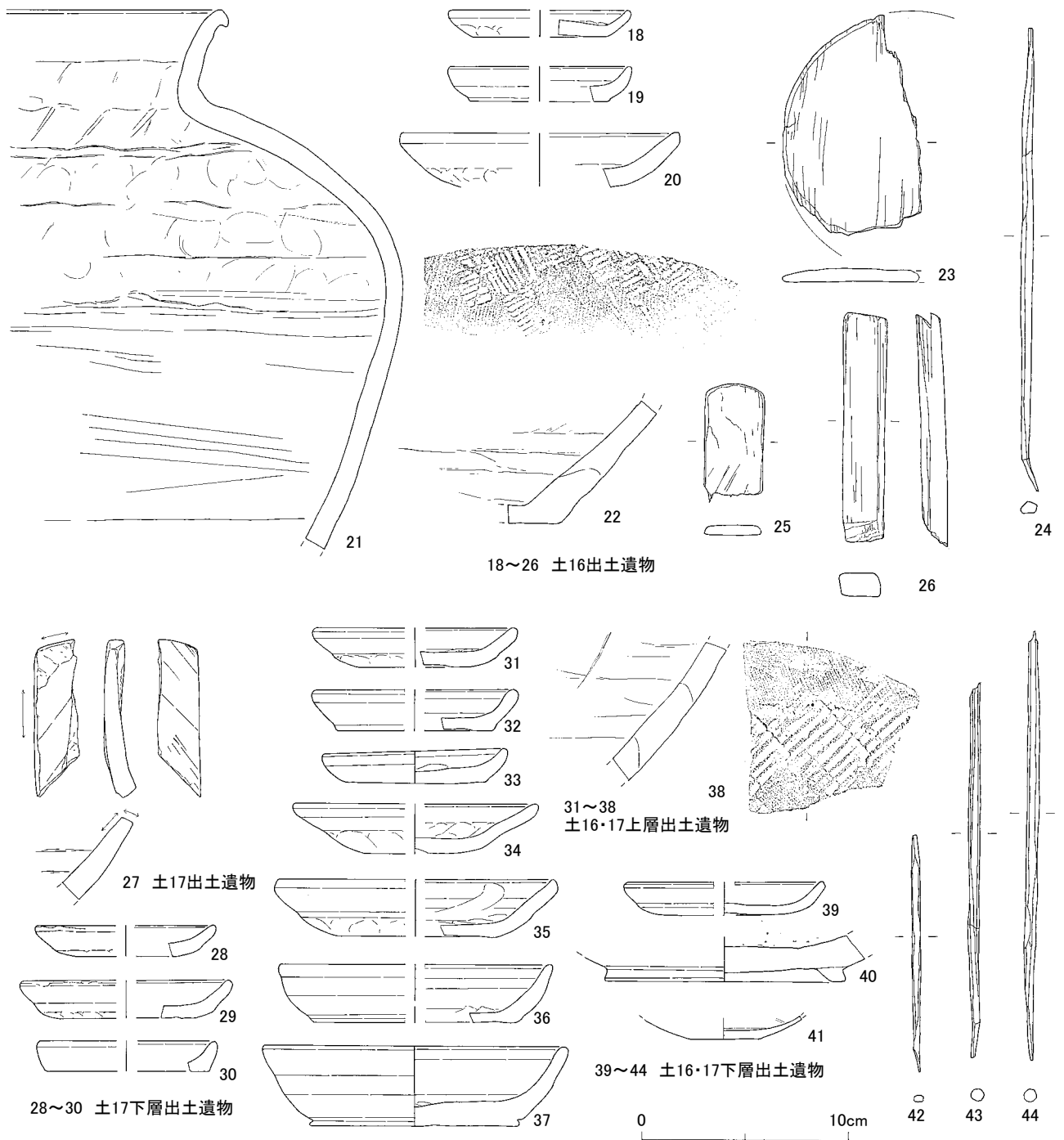


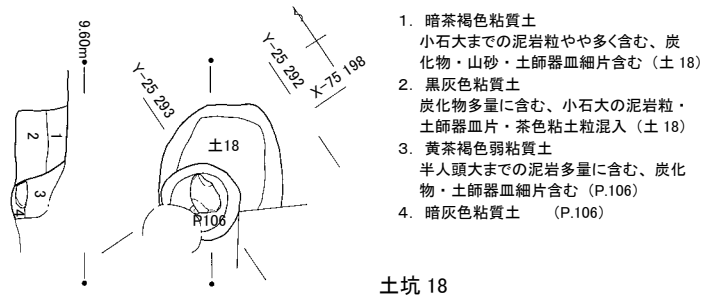
図19 土坑16・17出土遺物

土坑16・17ベルト土層図1・3層（I a面構築土）出土遺物（図18）

土師器皿R種小型（1）・土師器皿T種小型（2）・土師器皿R種大型（3）・常滑片口鉢I類（4）・舶載緑褐釉広口無頸壺（5） 特記事項：土坑16・17ベルト土層断面からI a構築土中の遺物と判断したが、構築土内の出土を明確にするためここに提示した。土師器皿は13世紀前半、4の常滑鉢は3型式～4型式のものか。

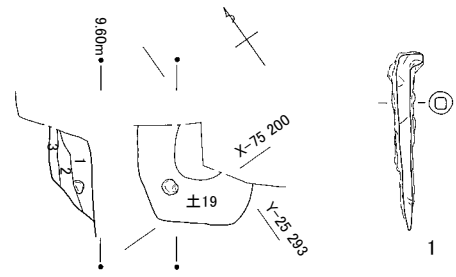
土坑16・17ベルト土層図4層（I a面構築土内）出土遺物（図18）

土師器皿T種小型（6）・土師器皿R種小型（7・8）・土師器皿T種大型（9）・土師器皿R種大型（10～12）・常滑甕（13・14）・舶載褐釉壺（15）・平瓦（16）・安山岩（17） 特記事項：土坑16・17ベルト土



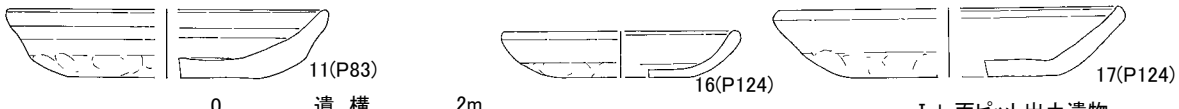
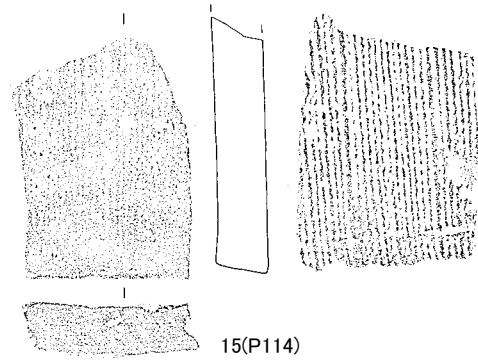
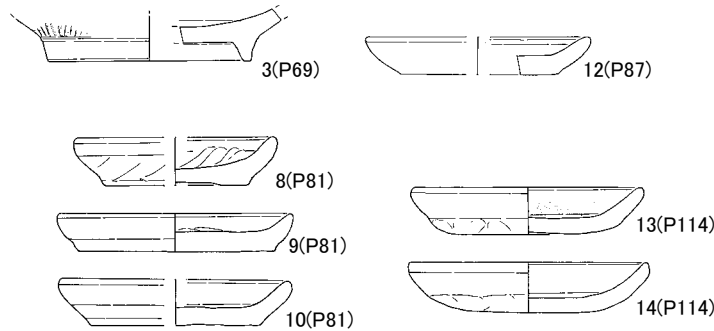
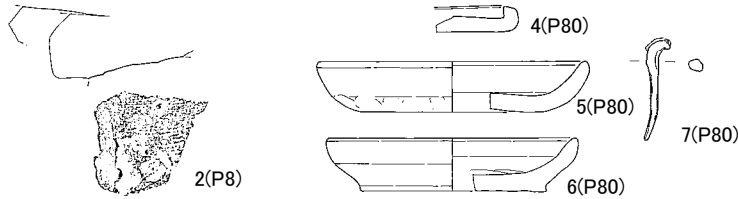
1. 暗茶褐色粘質土  
小石大までの泥岩粒やや多く含む、炭化物・山砂・土師器皿細片含む (土 18)
2. 黒灰色粘質土  
炭化物多量に含む、小石大の泥岩粒・土師器皿片・茶色粘土粒混入 (土 18)
3. 黄茶褐色弱粘質土  
半人頭大までの泥岩多量に含む、炭化物・土師器皿細片含む (P.106)
4. 暗灰色粘質土 (P.106)

土坑 18



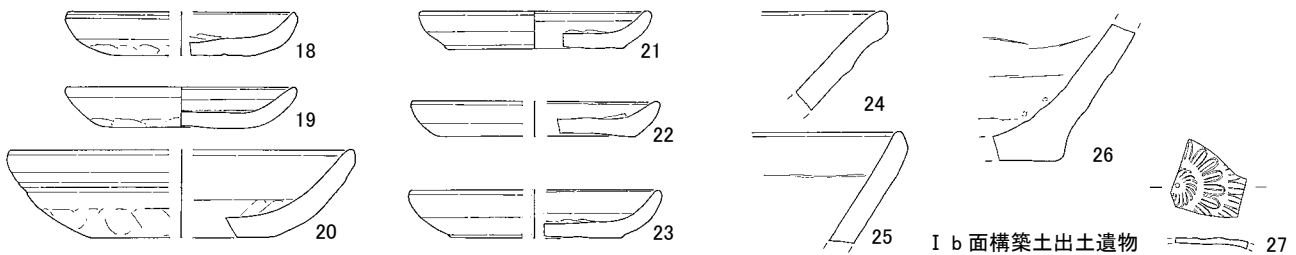
1. 暗茶褐色弱粘質土  
小石大～拳大の泥岩粒多量に含む、炭化物含む
2. 暗灰色弱粘質土  
炭化物多量に含む、焼土・山砂・泥岩粒・小礫を含む
3. 暗灰色粘質土  
少量の泥岩粒・スコリア・炭化物含む、微量の焼土含む

土坑 19



0 遺構 2m  
0 遺物 10cm

I b 面ピット出土遺物



I b 面構築土出土遺物

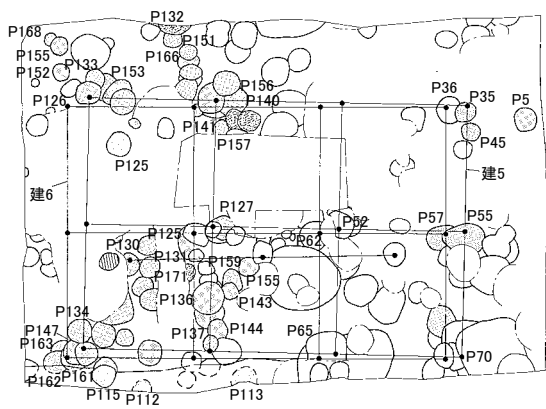
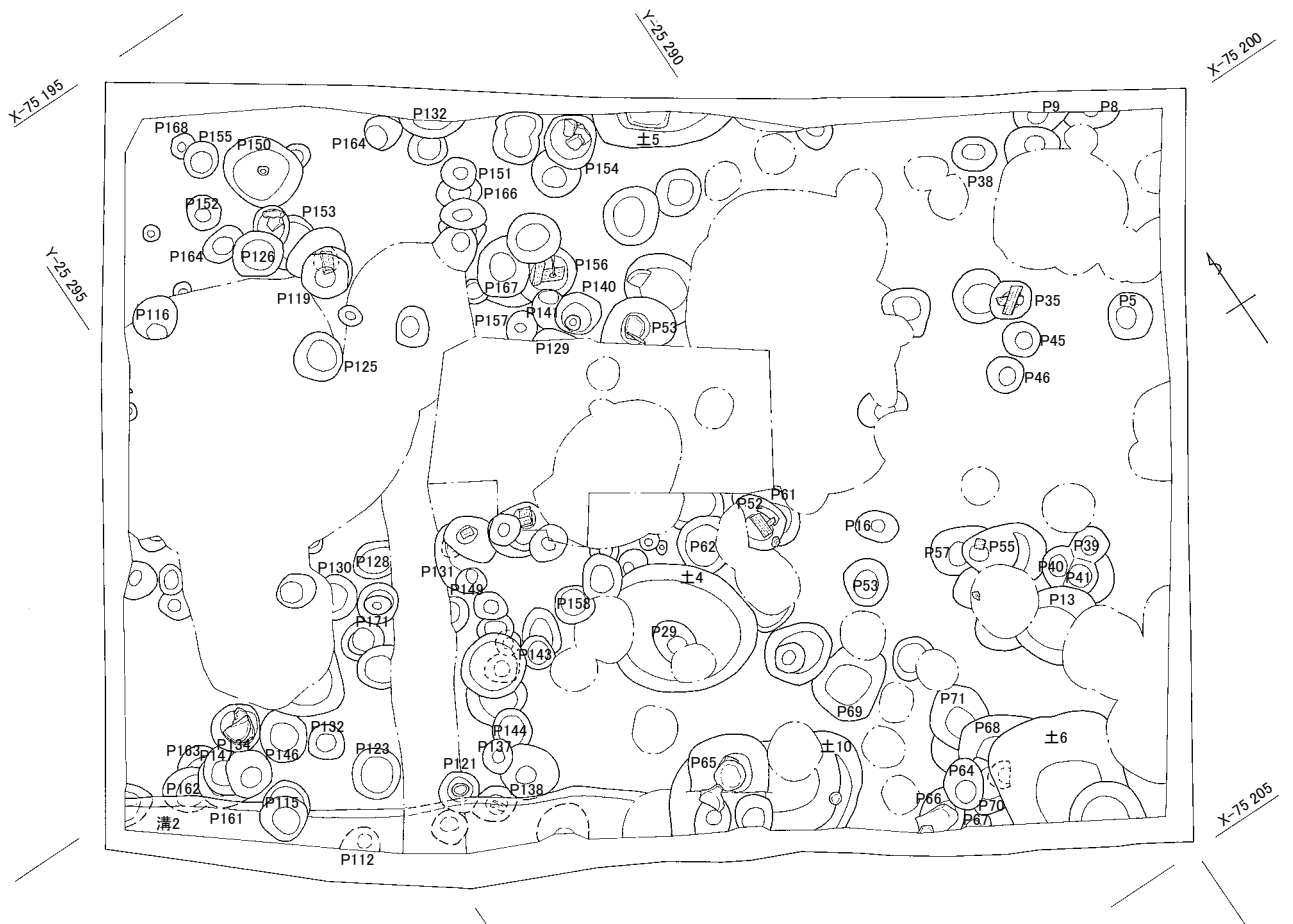
図 20 土坑 18・19・I b 面ピット・I b 面構築土出土遺物

層断面から I a 構築土中の遺物と判断したが、構築土内の出土を明確にするためここに提示した。土師器皿は 13 世紀前半、16 の平瓦は 13 世紀後半のもの。

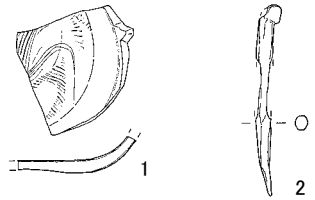
土坑 16・17 上層出土遺物 (図 19)

土師器皿 T 種小型 (31)・土師器皿 R 種小型 (32・33)・土師器皿 T 種大型 (34・35)・土師器皿 R 種大型 (36・37)・渥美甕 (38) 特記事項：土師器皿は 13 世紀前半のもの。

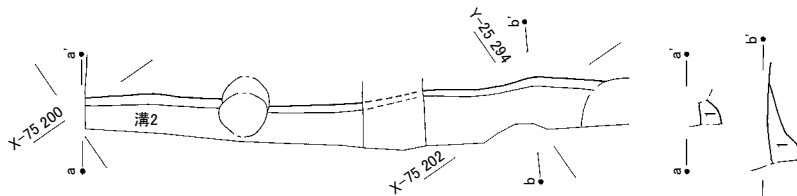
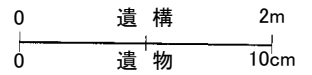




- 暗茶褐色粘質土
- 暗灰色粘質土
- 明茶褐色粘質土
- 暗黒褐色粘質土



I c面上出土遺物



1. 黒灰褐色粘質土 多量の炭化物・焼土・土師器皿  
細片含む、泥岩粒少量含む

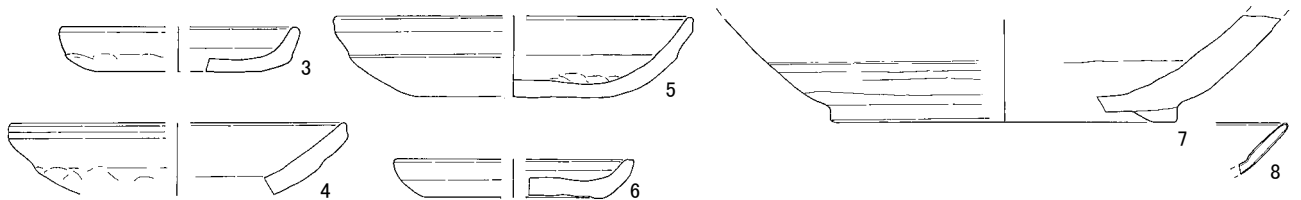


図 21 I c 面遺構全図、同出土遺物、溝 2、同出土遺物

### 土坑 16・17 下層出土遺物 (図 19)

土師器皿 T 種小型 (39)・渥美・湖西片口鉢 (40)・青白磁皿 (41)・箸状木製品 (42～44)

### 土坑 18 (図 20)

位置：X - 75 197.50 ～ - 75 198.50 Y - 25 292.25 ～ - 25 293.37 充填土：暗茶褐色粘質土・黒灰色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 (0.85 m) × 短径 0.98 m × 深さ 0.41 m 主軸方位：N-32° -E 重複関係：P.106 に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし

### 土坑 19 (図 20)

位置：X (- 75 199.25) ～ - 75 200.33 Y - 25 292.92 ～ - 25 293.69 充填土：暗茶褐色弱砂質土・暗褐色弱砂質土・暗灰色弱砂質土・暗灰色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 (0.80 m) × 短径 0.80 m × 深さ 0.33 m 主軸方位：N-35° -E 重複関係：溝 1 を切る 出土遺物：鉄釘 (1)

#### I b 面 Pit 出土遺物 (図 20)

出土遺物：(P.8) 軒丸瓦 (2)・(P.69) 白磁端反碗 (3)・(P.80) 土師器皿 T 種小型 (4・5)・土師器皿 R 種小型 (6)・鉄釘 (7) (P.81) 土師器皿 R 種小型 (8～10)・(P.83) 土師器皿 T 種大型 (11)・(P.87) 土師器皿 R 種小型 (12)・(P.114) 土師器皿 T 種小型 (13・14)・平瓦 (15)・(P.124) 土師器皿 T 種小型 (16)・土師器皿 T 種大型 (17) 特記事項：2 の平瓦は 13 世紀中頃の埼玉県児玉郡美里町周辺の瓦窯の製品か 13 世紀第 3 四半期頃に鎌倉周辺で生産されたもの。15 の平瓦は永福寺 I 期、土師器皿は 13 世紀前半のもの。

#### I b 面構築土出土遺物 (図 20)

出土遺物：土師器皿 T 種小型 (18・19)・土師器皿 T 種大型 (20)・土師器皿 R 種小型 (21～23)・常滑片口鉢 I 類 (24)・常滑片口鉢 II 類 (25)・常滑甕 (26)・青白磁合子蓋 (27) 特記事項：土師器皿は 12 世紀末から 13 世紀前葉のもの。24 の常滑鉢は 3 型式から 4 型式のもの。

### 3. I c 面

#### 面の概要 (図 21)

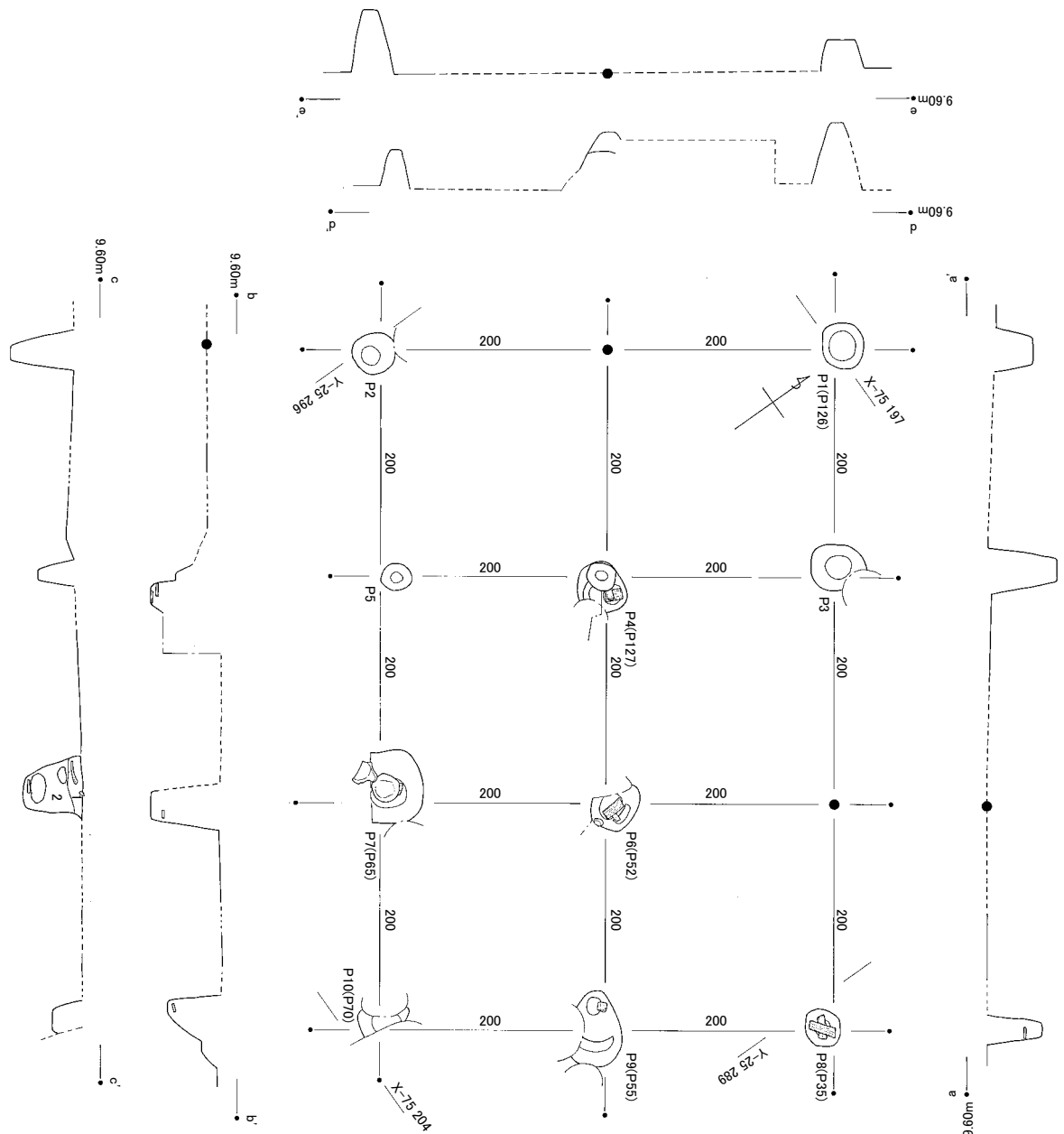
検出高：9.23 m～9.53 m 面構成土：暗灰色粘質土・茶褐色弱砂質土 検出遺構：建物 2 棟・土坑 4 基・ピット 137 穴 I c 面出土遺物：同安窯系青磁皿 (1)・鉄釘 (2) 特記事項：先述したように、調査区東側の 1 区では調査区西側の 2 区よりも遺構面の枚数が少ない。調査区東側の 1 区では I b 面と同一の面が I c 面として使用されたと考えられる。このため、調査区東側の 1 区に関しては I b 面と同一の遺構図を提示した。

#### 溝 2 (図 21)

位置：X (- 75 199.94) ～ (- 75 202.37) Y (- 25 293.38) ～ (- 25 296.97) 充填土：黒灰褐色粘質土 断面形：浅鉢形か 規模：最大幅 (0.45 m) × 長さ (4.10 m) × 深さ 0.25 m 主軸方位：N-57° -W 重複関係：P.112・121・138・162 他ピット 5 穴に切られる 出土遺物：土師器皿 T 種小型 (3)・土師器皿 T 種大型 (4・5) 土師器皿 R 種小型 (6)・渥美・湖西片口鉢 (7)・同安窯系青磁皿 (8) 特記事項：図化遺物は 12 世紀末から 13 世紀初頭。上層の落込み 1 に切られるため、構築時の長さは不明。

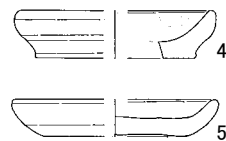
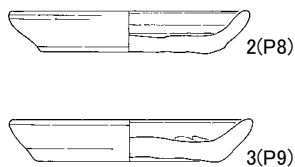
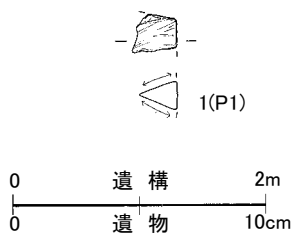
#### 建物 5 (図 22)

位置：X - 75 196.73 ～ - 75 203.90 Y - 25 289.41 ～ - 25 296.09 規模：東西 3 間, 6.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 36° - E 重複関係：建物 6・土坑 10・P.67・127・144・133・153・156・161 他 6 穴を切る、溝 2・土坑 6・P.40・61・134 他ピット 1 穴に切られる 出土遺物：(P.1) 滑石鍋転用加工品 (1)・(P.8) 土師器皿 R 種小型 (2)・(P.9) 土師器皿 R 種小型 (3)・(P.10) 土師器皿 R 種小型 (4)・



建物5	
No.	長径×短径×深さ
P.1 (P.126)	41cm×37cm×28cm
P.2	36cm×39cm×57cm
P.3	50cm×41cm×59cm
P.4 (P.127)	46cm×44cm×50cm
P.5	38cm×23cm×32cm
P.6 (P.52)	(43cm)×42cm×60cm
P.7 (P.65)	(47cm)×64cm×52cm
P.8 (P.35)	33cm×31cm×48cm
P.9 (P.55)	67cm×45cm×56cm
P.10 (P.70)	45cm×(25cm)×27cm

1. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、遺物片・泥岩粒含む。しまり悪い
2. 暗灰色粘質土 多量の炭化物含む、微量の遺物片・木片・泥岩粒含む。しまり悪い



4～6  
P10出土

図22 建物5、同出土遺物

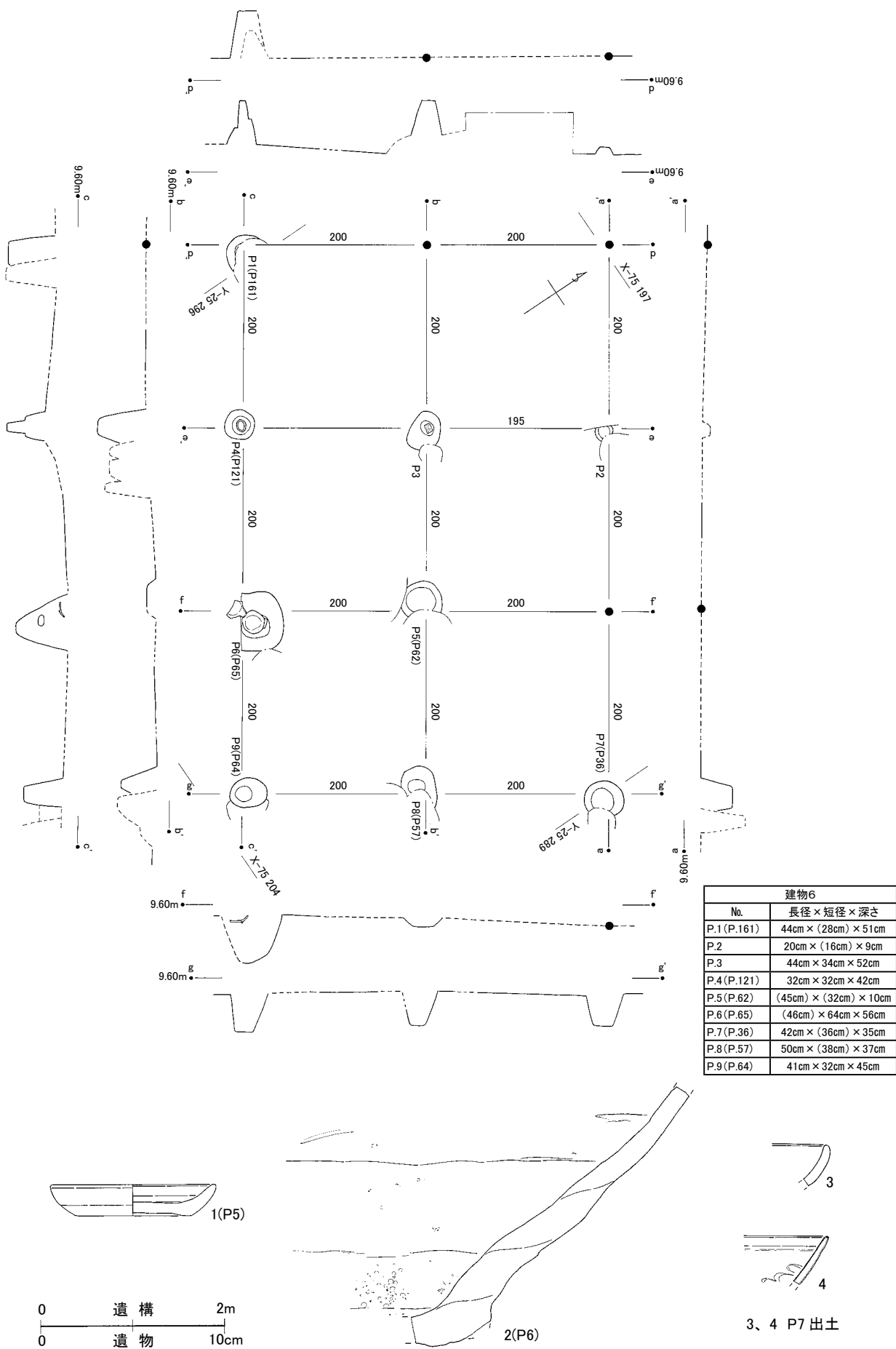
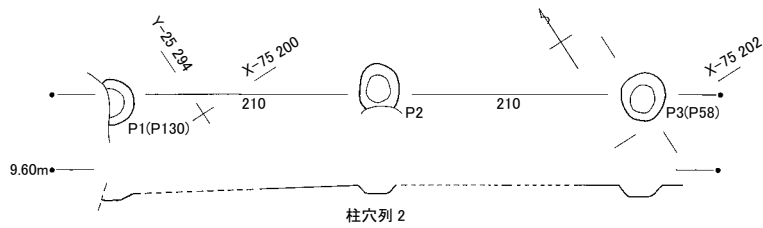
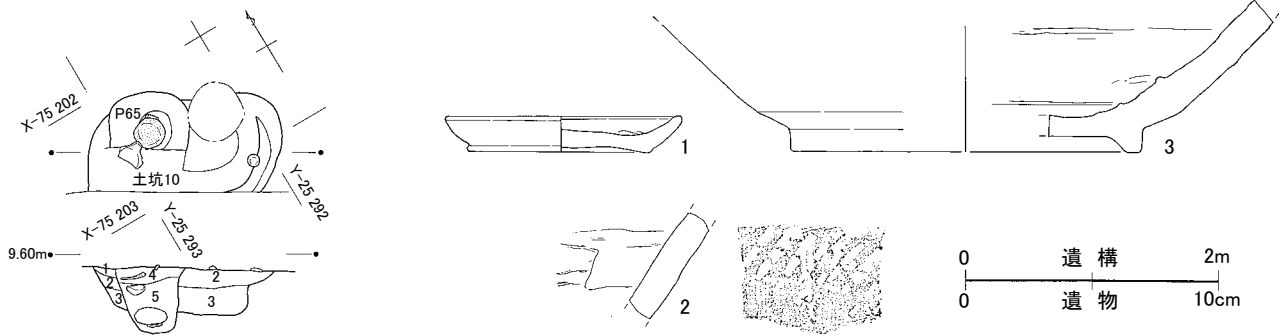


図 23 建物6、同出土遺物



柱穴列2	
No.	長径×短径×深さ
P.1(P.130)	37cm×(36cm)×7cm
P.2	(37cm)×31cm×8cm
P.3(P.58)	39cm×35cm×10cm



1. 黒灰色粘質土 多量の炭化物・土師器皿小片・泥岩粒含む (土 10)
2. 黒灰色粘質土 上層に多量の炭化物、下層にいくにつれ固くしまる。白色スコリア多く含む。粘性強 (土 10)
3. 暗茶灰色粘質土 鉄分やや多く含む、微量の白色スコリア・炭化物・泥岩粒含む。固くしまる (土 10)
4. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、遺物片・泥岩粒含む。しまり悪い (P.65)
5. 暗灰色粘質土 多量の炭化物含む、微量の遺物片・木片・泥岩粒含む。しまり悪い (P.65)

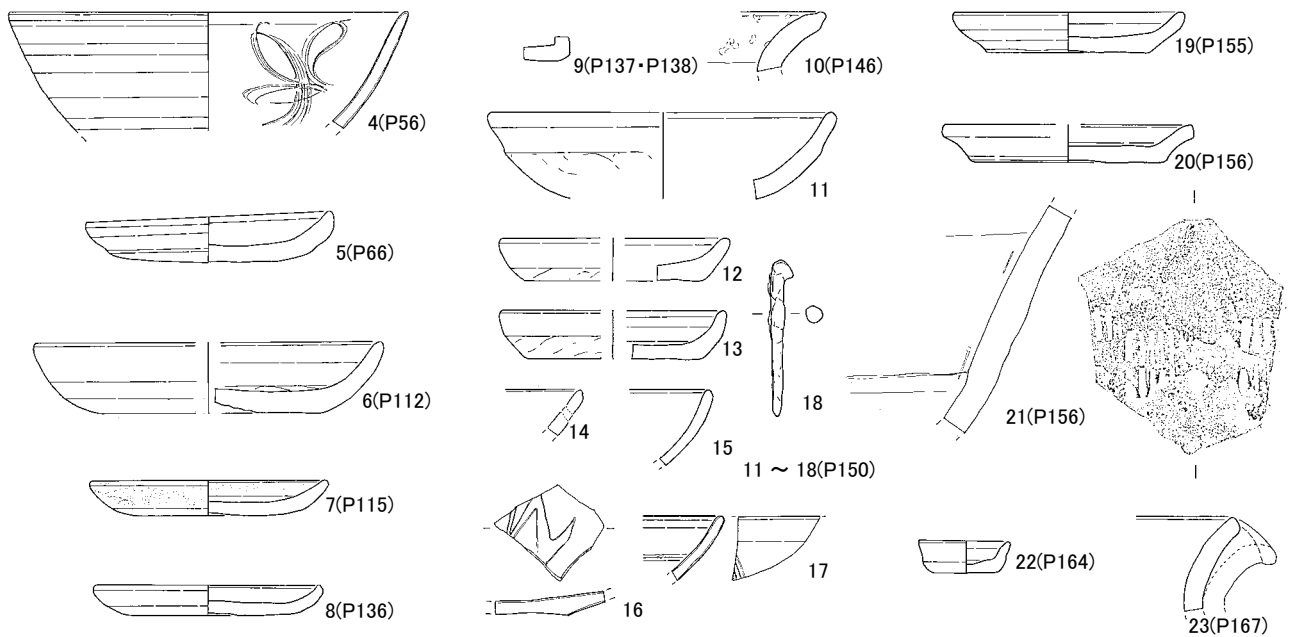


図 24 土 10・P.65、同出土遺物、I c 面ピット出土遺物

5)・土師器皿 T 種小型 (6) 特記事項：P.10 のみ建物 6 との切合い関係が逆転している。これは検出ミスか同様の位置に新しくピットが掘り込まれたかのいずれかであろう。上層で井戸状の土坑等大型の遺構が検出された地点では、ピットが確認できず。図化した土師器皿は 12 世紀末～13 世紀初頭のもの。  
建物 6 (図 23)

位置：X - 75 196.87 ~ - 75 203.36 Y - 25 288.76 ~ - 25 296.31 規模：東西 3 間，6.00 m × 南北 2 間，4.00 m 主軸方位：N - 34.5° - E 重複関係：土坑 10・P.66・67・68・131・161・163 他ピット 2 穴を切る、溝 2・建物 6・土坑 4・P.134 他ピット 2 穴に切られる 出土遺物：(P.5) 土師器皿 R 種小型 (1)・(P.6)

常滑甕 (2)・(P.7) 白色系土師器皿 T 種大型 (3)・竜泉窯青磁画花文碗 (4) 特記事項：前述したように P.9 のみ建物 5 との切合い関係が逆転している。これは検出ミスか同様の位置に新しくピットが掘り込まれたかのいずれかであろう。上層で井戸状の土坑等大型の遺構が検出された地点では、ピットが確認できず。図化した土師器皿は 12 世紀末～13 世紀初頭のもの。

#### 柱穴列 2 (図 24)

位置：X - 75 199.36 ~ - 75 201.97 Y - 25 290.79 ~ - 25 294.67 規模：東西 2 間 (柱間距離 2.10 m)  
主軸方位：N - 57° - W 重複関係：土坑 4・P.158 を切る 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：  
南東西方向・北方向ともに関連するピットは確認できなかったが、3 穴が並んだので提示した。

#### 土坑 10 (図 24)

位置：X - 75 202.17 ~ - 75 203.71 Y - 25 291.78 ~ - 25 293.39 充填土：黒灰色粘質土・暗茶灰色粘質土 平面形：楕円形 断面形：深皿形 規模：長径 1.53 m × 短径 (0.79 m) × 深さ 0.37 m 主軸方位：  
N-59.5° -W 重複関係：ピット 2 穴を切る、P.65 に切られる 出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1) 特記事項：  
土師器皿は 13 世紀初頭までのもの。

#### 土坑 10・P.65 出土遺物 (図 24)

渥美甕 (2)・渥美・湖西片口鉢 (3) 特記事項：3 の渥美・湖西鉢は安井編年 2 b 期のもの。

#### I c 面ピット出土遺物 (図 24)

出土遺物：(P.56) 竜泉窯青磁画花文碗 (4)・(P.66) 土師器皿 T 種小型 (5)・(P.112) 土師器皿 R 種大型 (6)・  
(P.115) 土師器皿 T 種小型 (7)・(P.136) 土師器皿 T 種小型 (8)・(P.137・138) 土師器皿 T 種小型 (9)・(P.140)  
常滑甕 (10)・(P.150) 土師器皿 T 種大型 (11)・土師器皿 R 種小型 (12・13)・穿孔土師器皿 T 種大型  
(14)・白色系土師器皿 T 種大型 (15)・同安窯系青磁皿 (16)・同安窯系青磁碗 (17)・鉄釘 (18)・(P.155)  
土師器皿 R 種小型 (19)・(P.156) 土師器皿 T 種小型 (20)・常滑甕 (21)・(P.164) 瀬戸入子か (22)・  
(P.167) 瀬戸片口小瓶 (23) 特記事項：土師器皿は 12 のみが 13 世紀前半のもので、他は 12 世紀末から  
13 世紀初頭のもの。

## 4. II 面

### 面の概要 (図 25)

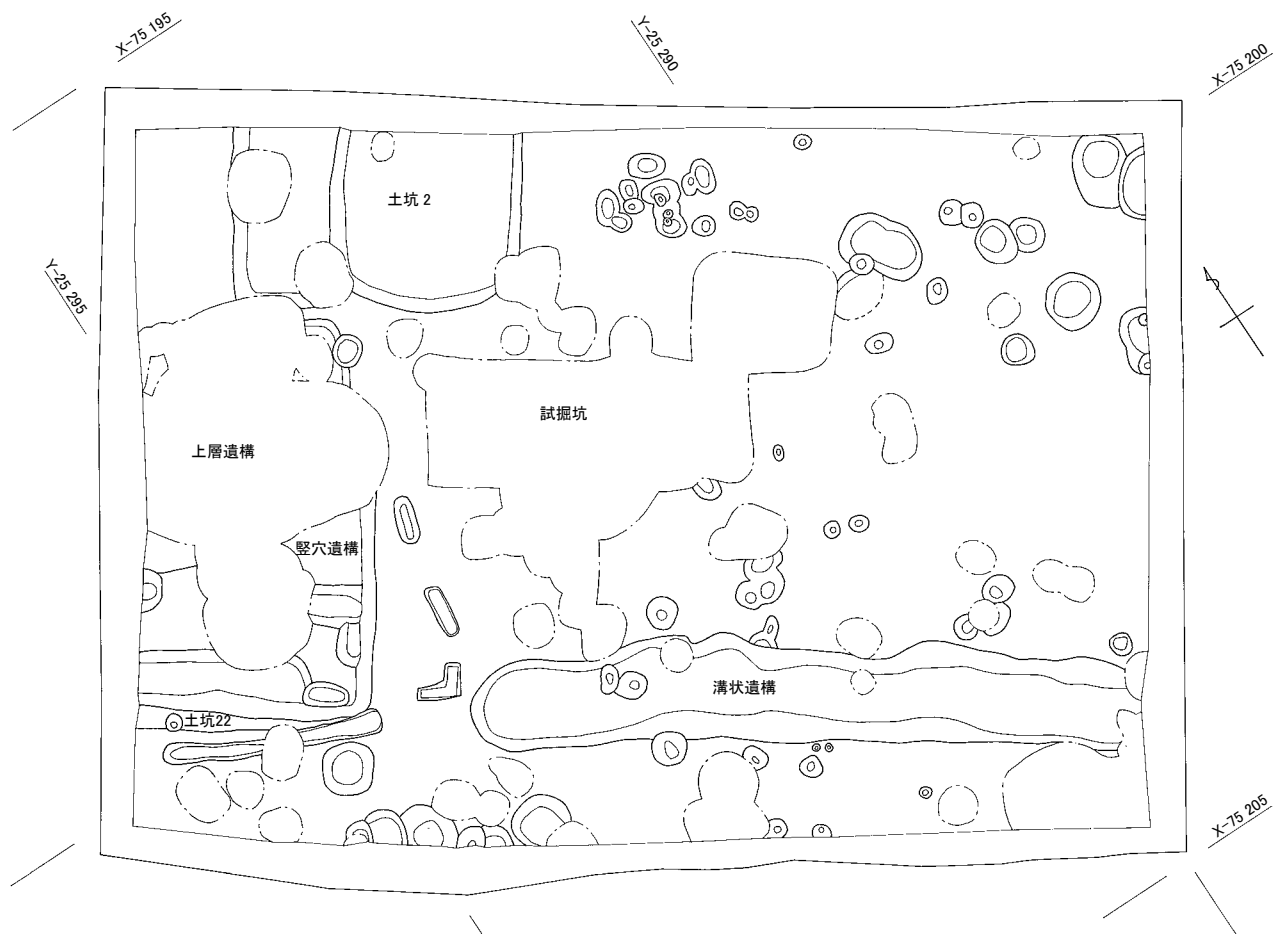
検出高：8.94 m ~ 9.13 m 面構成土：暗灰色粘質土 検出遺構：溝状遺構 1 条・竪穴 1 基・土坑 2 基・  
性格不明遺構 1 特記事項：黄茶灰色弱粘質土層である 1 層上面で遺構検出を行ったが、土層断面の検  
討から標高 9.13 m ~ 9.35 m にあたる暗灰色粘質土の 15 層上面が実際の遺構面である可能性が高い。

### 溝状遺構 (図 25)

位置：X - 75 200.68 ~ - 75 203.95 Y - 25 289.57 ~ - 25 296.16 充填土：暗灰色粘質土 断面形：  
逆台形 規模：最大幅 0.82 m × 長さ (5.34 m) × 深さ 0.14 m 主軸方位：N-57° -W 特記事項：黄茶  
灰色弱粘質土層である 1 層上面で検出したため非常に浅くなっているが、土層断面の検討結果、暗灰色  
粘質土の 14 層上面から掘り込まれているため、本来の深さとは異なる。

### 竪穴遺構 (図 26)

位置：X - 75 197.54 ~ - 75 202.38 Y - 25 293.31 ~ - 25 296.27 充填土：暗灰色粘質土・黄茶色粘質土・  
明灰色粘質土・黄灰色弱砂質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長軸 3.17 m × 短軸 (1.84 m)  
× 深さ 0.51 m 主軸方位：N-33.5° -E 特記事項：黄茶灰色弱粘質土層である 1 層上面で検出したため  
非常に浅くなっているが、土層断面の検討結果、暗灰色粘質土の 14 層上面から掘り込まれているため、



1. 暗灰色粘質土 炭化物・黒色粘土塊含む、微量の鉄分含む。軟質で粘性強い
2. 暗灰色粘質土 1の土に3の粘土少量混入。鉄分含む
3. 茶灰色弱粘質土 鉄分・1の土が若干混入。
25. 暗灰色粘質土 炭化物・黄灰色粘土粒含む
26. 暗灰色粘質土 26より黄灰色粘土多く含む

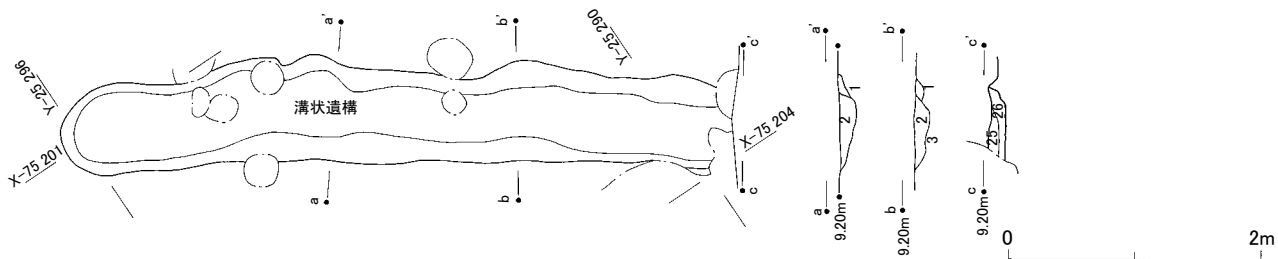


図 25 II面遺構全図、溝状遺構

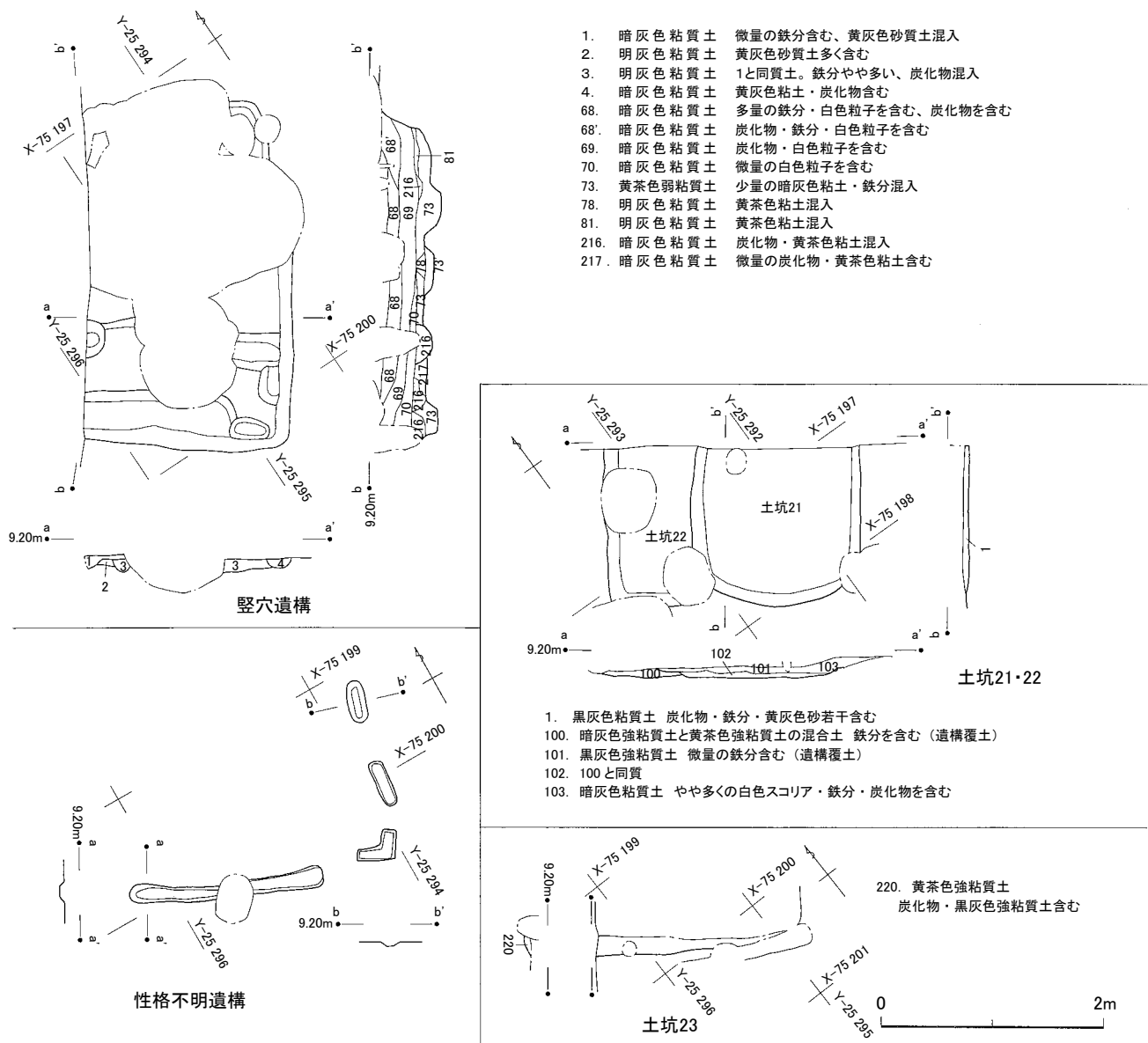


図 26 竖穴遺構・性格不明遺構・土坑 21・22・23

本来の深さとは異なる。

性格不明遺構 (図 26)

位置：X - 75 199.12 ~ - 75 200.71 Y - 25 293.58 ~ - 25 296.35 充填土：暗灰色粘質土 平面形：L字型か 断面形：逆台形 規模：長軸 (2.44 m) × 短軸 (1.84 m) × 深さ 0.05 m 主軸方位：N-67°-W ) 特記事項：黄茶灰色弱粘質土層である 1 層上面で検出したため非常に浅くなっており、全容は不明。このため性格等の判断は出来ないが、規則的に並んだため提示した。

土坑 21 (図 26)

位置：X - 75 196.41 ~ - 75 198.21 Y - 25 291.22 ~ - 25 293.05 充填土：黒灰色粘質土・黒灰色強粘質土 平面形：隅丸方形か 断面形：皿形 規模：最大幅 1.53 m × 長さ (1.43 m) × 深さ 0.06 m 主軸方位：N-34°-E 特記事項：他の遺構と違い、検出面である黄茶灰色弱粘質土層から掘り込まれている。水中での堆積の際に、窪みに見える堆積が形成された可能性もある。

土坑 22 (図 26)

位置：X - 75 196.95 ~ - 75 197.48 Y - 25 292.52 ~ - 25 293.86 充填土：暗灰色強粘質土と黄茶色強粘質土の混合土 平面形：隅丸方形か 断面形：皿形 規模：最大幅 (0.81 m) × 長さ (1.45 m) ×



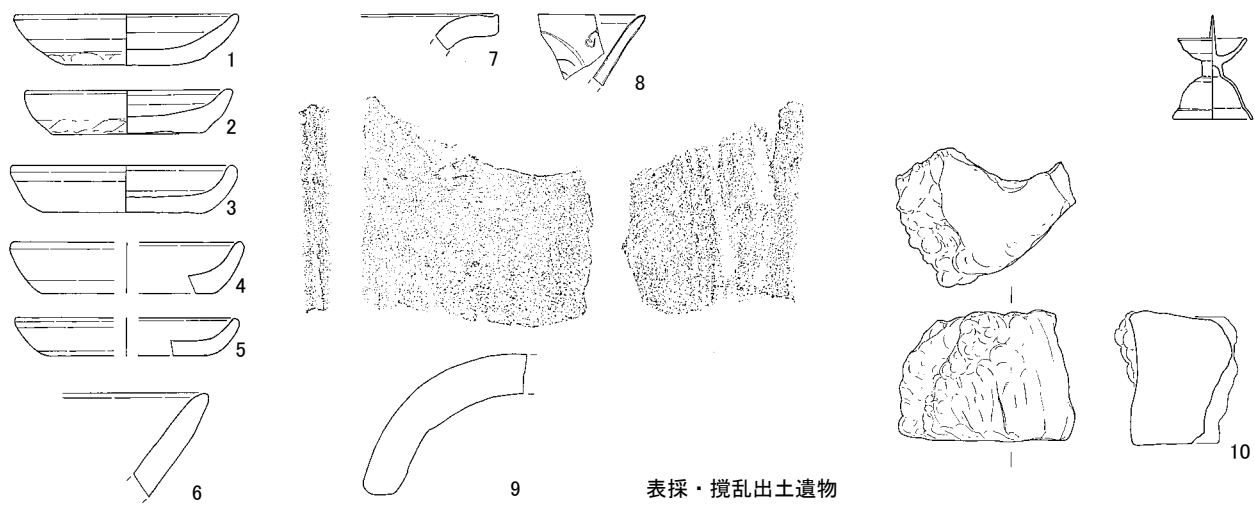
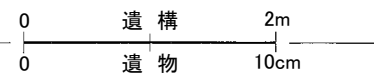
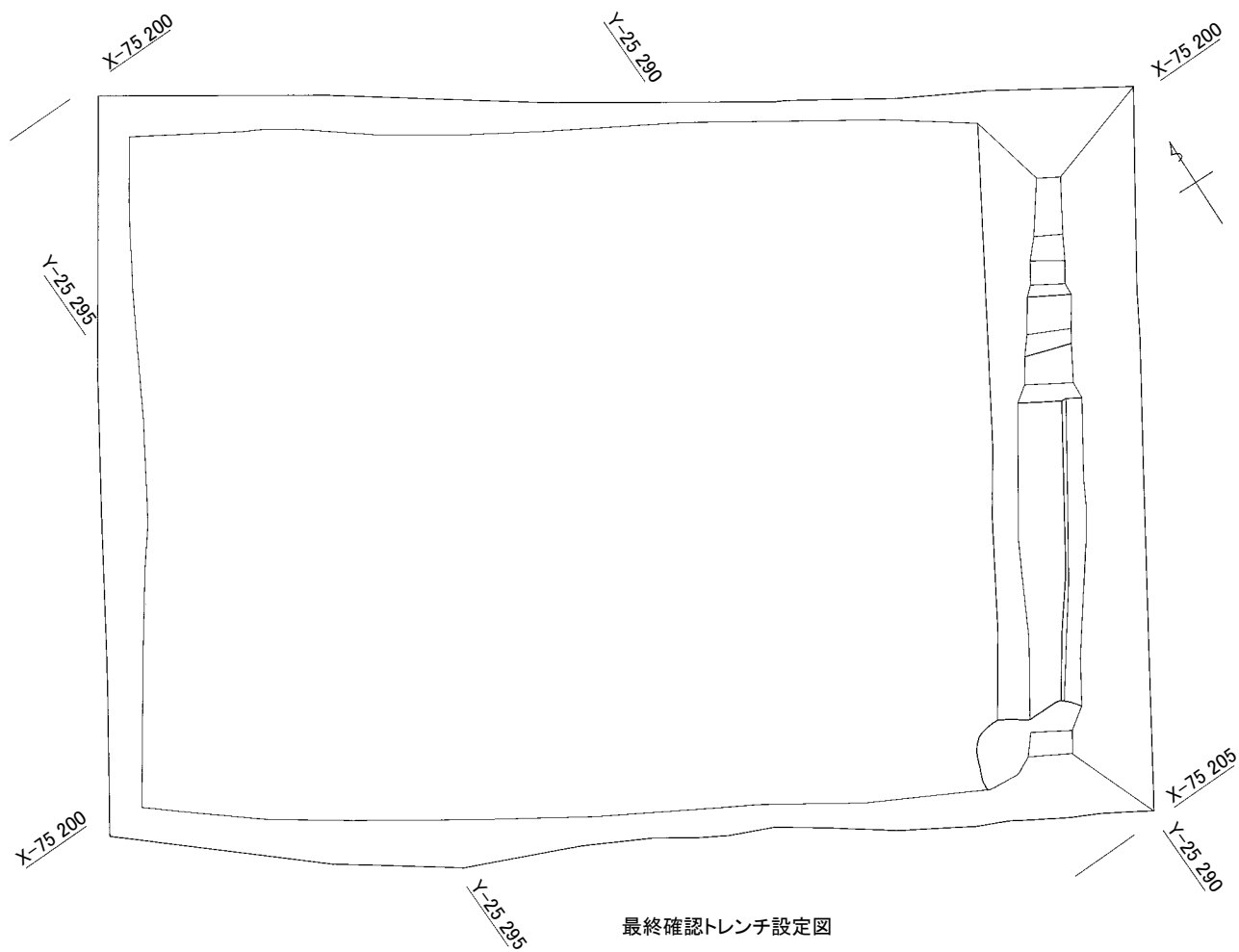


図 27 最終確認トレンチ設定図、表採・攪乱坑出土遺物

深さ 0.08 m 主軸方位：N-35.5° -E 特記事項：他の遺構と違い、検出面である黄茶灰色弱粘質土層から掘り込まれている。水中での堆積の際に窪みが形成された可能性もある。

#### 土坑 23 (図 26)

位置：X - 75 199.36 ~ - 75 200.28 Y - 25 294.89 ~ - 25 296.40 充填土：黄茶色粘土に炭化物・黒灰色粘土混入 平面形：形状不明 断面形：皿形か 規模：最大幅 0.19 m × 長さ (1.71 m) × 深さ 0.06 m 主軸方位：N-55° -W 特記事項：上層の 66・67 層と同一の遺構の可能性もあるが、別遺構として提示。

#### 4. 最終確認トレンチ

##### 概要 (図 4・27)

標高 9.10 m ほどのⅡ面検出面から 1 区東壁際に幅 70cm ほどで確認トレンチを開け、標高 7.40 m (深さ 1.70 m) ほどまで掘り下げた。1 層より下層は遺物の出土が全くなく、土層堆積も水平堆積であるため、自然堆積とみて問題ないであろう。

#### 5. 表採・攪乱坑出土遺物 (図 27)

土師器皿 T 種小型 (1)・土師器皿 R 種小型 (2～5)・渥美・湖西片口鉢 (6)・常滑甕 (7)・竜泉窯青磁画花文碗 (8)・丸瓦 (9)・材質不明鋳物 (10)・銅製品ロウソク立て 特記事項：10 の鋳物は材質・製品ともに不明である。攪乱坑からの出土であるため、近現代の所産である可能性も充分にある。11 のロウソク立ては台座と受皿をネジ式で結合しているため、近現代の製品。

(沖元)

表1 遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(7.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.1cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(7.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.1cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(8.1)cm 底径(5.8)cm 器高1.0cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子を含む
4	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.2)cm 底径(6.8)cm 器高1.4cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は黄橙色で赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.0)cm 底径(5.9)cm 器高1.0cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は黄橙色で赤色粒子・赤色礫片・泥岩粒・海綿骨芯を含む
6	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.2)cm 底径(5.2)cm 器高2.2cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は褐橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む 口縁部外側に煤付着
7	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.6)cm 底径(6.8)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
8	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(7.3)cm 底径(5.3)cm 器高1.5cm 手づくね後、内底部に渦状ナデ・口縁部ナデ 胎土は黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
9	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.8)cm 底径(7.2)cm 器高2.1cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・金雲母・黒色光沢粒子・赤色粒子・赤色礫片・海綿骨芯を含む
10	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.8)cm 底径(6.5)cm 器高2.1cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は黒色光沢粒子・海綿骨芯を含む 二次焼成を受けた為か黒褐色に変色
11	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.2)cm 底径(7.9)cm 器高2.1cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
12	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.7)cm 器高2.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 器表は暗褐色 胎土は黄橙色で金雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
13	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 外底部外周・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・赤色礫片・海綿骨芯を含む
14	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.9)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨針を含む
15	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(8.9)cm 底径(7.5)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は赤褐色(一部黄褐色)で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
16	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.6)cm 底径(7.3)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 強い板状圧痕 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
17	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.8)cm 底径(7.5)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・赤色礫片・海綿骨芯を含む
18	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.4)cm 底径(6.9)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・礫片・海綿骨芯を含む
19	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.0)cm 器高1.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
20	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.0)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
21	I a面	土師器Ⅲ R種大型	口径(12.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・礫片・海綿骨芯を含む
22	I a面	土師器Ⅲ R種大型	口径(13.2)cm 底径(8.4)cm 器高3.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子・礫片・海綿骨芯を含む
23	I a面	伊勢系 鍔鍋	器表は白橙色 胎土は暗灰色で金雲母・白色粒子・赤色粒子を含む
24	I a面	尾張山茶碗系 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・石英・黒色粒子を含む堅緻なもの 内底部：使用により摩耗
25	I a面	瓦器質 火鉢	底部片 胎土は灰白色 白色粒子・黒色粒子を含む 器表は縦方向と横方向の磨きと黒色処理 内面はナデ調整
26	I a面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は黄灰色で長石・白色粒子・礫片を含む
27	I a面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で長石・礫片を含む 器表内面に黄灰白色の降灰
28	I a面	渥美 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は暗褐色で石英・白色粒子を含む 内面に指頭痕とヨコナデあり 器表に工具による叩き目あり
29	I a面	瀬戸 卸し皿	口縁部小片 器表に灰白色の灰釉ハケ塗り 胎土は灰色 前Ⅱ期か
30	I a面	青白磁 小皿	底部小片 ロクロ成形 素地は黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は青白色半透明 内底面に櫛描き文あり
31	I a面	同安窯系青磁 皿	口縁部片 ロクロ成形 素地は青灰色 黒色粒子を含む 釉薬は灰緑色半透明
32	I a面	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色 釉薬は灰緑色不透明
33	I a面	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色粒子を含む 釉薬は灰緑色半透明

表2 遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図6-34	I a面	竜泉窯青磁鉢か	底部小片 ロクロ成形 素地は灰白色で黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は緑灰色半透明 高台畳み付き釉薬ケズリとりにより露胎
35	I a面	竜泉窯青磁折縁鉢	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は緑灰色不透明、釉層厚い
36	I a面	軒丸瓦	縁部小片 胎土は灰褐色で黒色粒子・白色粒子・礫を含む 丸瓦との接合部分で剥離 永福寺Ⅲ期併行
37	I a面	丸瓦	玉縁部片 外面は淡橙白色 胎土は白色で白色粒子・赤色粒子・礫多く含む 永福寺Ⅲ期
38	I a面	平瓦	胎土は灰色 白色粒子・礫多く含む 凸面は細目斜格子、凹面は離れ砂 側面へラ削りの後ナデ 永福寺Ⅲ期併行
39	I a面	平瓦	胎土は灰色 黒色粒子・白色粒子・1cm大の礫含む 凸面凹面とも離れ砂付着 側面へラ削り後ナデ 永福寺Ⅲ期併行
40	I a面	砥石中砥	残存長(6.0)cm 残存幅(3.5)cm 厚さ2.3cm 灰緑色 上野砥 四面使用、内一面に溝状の研痕あり
41	I a面	滑石鍋転用品	器表は黒灰色 加工面は灰白色 両面に研磨痕
42	I a面	滑石鍋転用品	残存長(9.5)cm 残存幅(1.6)cm 厚さ1.6cm
43	I a面	鉄釘	残存長(6.1)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.4cm 重量4.7g
44	I a面	鉄釘	残存長(7.3)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重量5.3g
45	I a面	鉄釘	残存長(6.0)cm 残存幅(0.4)cm 厚さ0.4cm 重量3.4g
46	I a面	鉄釘	残存長(6.4)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重量2.8g
47	I a面	鉄釘	残存長(6.4)cm 残存幅(0.4)cm 厚さ0.4cm 重さ4.5g
48	I a面	開元通寶	唐621年 隸書 背文字「下月」
49	I a面	用途不明加工鹿角	残存長(4.5)cm 残存幅(3.7)cm 厚さ2.2cm 鹿角の付根部分を使用 中央部と上部に穿孔
50	I a面	用途不明加工骨	残存長(10.8)cm 残存幅(1.1)cm 厚さ1.1cm
51	土師器皿小片集中部	土師器皿R種大型	口径(11.7)cm 底径(7.8)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
図7-1	I a面建物1・P2	竜泉窯青磁榭描蓮弁文碗	口縁部小片 素地は白色で黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は灰緑色透明 内・外面に文様あり 内面画花文・外面榭描き蓮弁文
2	I a面建物1・P2	渥美・湖西片口鉢	口径(31.6)cm 口縁部片 輪積み成形後、ロクロ整形 残存内面下部に剥離するほどの使用痕
図8-1	I a面建物2・P1	土師器皿R種小型	口径(9.3)cm 底径(7.0)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・海綿骨芯を含む
2	I a面建物2・P1	土師器皿R種小型	口径(8.5)cm 底径(6.3)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・赤色粒子を含む
3	I a面建物2・P14	竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は白灰色で黒色粒子を含む 釉薬は青緑灰色不透明
4	I a面建物2・P4	鉄製品かすがい	幅3.8cm 高1.9 径0.4~0.3 重さ2.1g
図9-1	I a面建物3・P2	東遠型山茶碗	口縁部片 輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子(微量)を含む
2	I a面建物3・P2	土師器皿R種小型	口径(8.6)cm 底径(7.4)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面建物3・P2	土師器皿R種大型	口径(14.4)cm 底径(9.6)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	I a面建物4・P3	土師器皿T種小型	口径(9.8)cm 底径(6.5)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を僅かに含む
図10-1	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(8.9)cm 底径(7.6)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 白色粒子以外は微量
2	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径(5.2)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.3)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯(微量)を含む
4	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(7.8)cm 底径(5.2)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・赤色粒子を含む
5	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(9.8)cm 底径(8.2)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
6	I a面落ち込み1	土師器皿T種大型	口径(13.5)cm 器高3.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
7	I a面落ち込み1	土師器皿T種大型	口径(13.8)cm 器高3.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色光沢粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
8	I a面落ち込み1	土師器皿R種中型	口径(11.1)cm 底径(6.7)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・黒色光沢粒子・赤色粒子を含む

表3 遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図10-9	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種中型	口径(12.0)cm 底径(6.6)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部煤付着
10	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(8.4)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 黒色光沢粒子・赤色粒子・礫片を含む
11	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種中型	口径(11.8)cm 底径(6.5)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
12	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種大型	口径(13.8)cm 底径(8.9)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
13	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で白色粒子・小石粒・礫片を含む 残存内面上部:摩耗 内面下部:著しく剥離 付高台(台形) 外面下部:回転ヘラケズリ 2b期
14	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 下部:回転ヘラケズリ確認出来ず 2b期
15	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は暗灰色で白色粒子・小石粒を含む 2b期
16	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は暗灰色で白色粒子を含む 2b期
17	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	口径(31.0)cm 口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 器表は灰黒色 胎土は暗灰色で黒色粒子・小石粒を含む 2b期
18	I a面 落ち込み1	渥美 甕	肩部片 輪積み成形 器表面一部に灰白色の降灰あり 胎土は灰色で赤色粒子・小石粒を含む 器表面に叩き目、内面に指頭痕あり
図10-19	I a面 落ち込み1	渥美 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で混入物ほとんど無し 器表面に叩き目あり
20	I a面 落ち込み1	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で白色粒子ごく微量・礫片を含む 器表面に叩き目あり
21	I a面 落ち込み1	常滑 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 器表面に暗灰色の自然釉、叩き目あり
22	I a面 落ち込み1	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰茶色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 器表面は茶色でスタンプあり 裏面は黄灰白色の降灰
23	I a面 落ち込み1	青白磁 合子・身	口径(4.5)cm 底径(3.9)cm 器高1.9cm 型入れ成形 胎土は灰白色で黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は青白色透明 内外面施釉 胴部下部から底部にかけては釉なし
24	I a面 落ち込み1	鉄釘	残存長(5.3)cm 幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重量4.1g
図11-1	I a面 土坑1	土師器皿 T種小型	口径(8.0)cm 底径(7.8)cm 器高1.1cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
2	I a面 土坑1	伊勢系 鍔鍋	鍔部片 器表面は白橙色 胎土は暗灰色で黒色粒子・赤色粒子を含む
3	I a面 土坑1	軒丸瓦	残存長(7.7)cm 残存幅(7.2)cm 厚さ2.7cm 胎土は淡灰橙色で赤色粒子・白色粒子・礫片 多く含む 凸面ナデ、凹面布目痕・ナデ 側面ヘラケズリ後、ナデ 永福寺Ⅲ期か
4	I a面 土坑1	平瓦	残存長(5.4)cm 残存幅(5.6)cm 厚さ1.4cm 胎土は灰色で黒色粒子・赤色粒子を含む 凹凸面ともに灰茶色 離れ砂 永福寺Ⅲ期併行
5	I a面 土坑1	鉄釘	残存長(7.6)cm 幅(0.7)cm 厚さ0.7cm 重量4.7g
図12-1	I a面 土坑2	土師器皿 R種小型	口径(8.6)cm 底径(6.6)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面 土坑2	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.6)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面 土坑2	土師器皿 T種大型	口径(12.0)cm 器高2.6cm 手づくね後、口縁部・底ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	I a面 土坑3	土師器皿 T種小型	口径(8.3)cm 器高1.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I a面 土坑3	土師器皿 T種小型	口径(10.0)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
6	I a面 土坑3	土師器皿 R種小型	口径(9.4)cm 底径(7.2)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を非常に多く含む
7	I a面 土坑3	土師器皿 R種大型	口径(13.4)cm 底径(8.6)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
8	I a面 土坑7・8	土師器皿 R種小型	口径(9.1)cm 底径(7.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
9	I a面 土坑7・8	土師器皿 R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.8)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は灰橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
10	I a面 土坑8	土師器皿 R種大型	底径(9.2)cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
11	I a面 土坑9	土師器皿 T種小型	口径(9.3)cm 器高2.7cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
12	I a面 土坑9	土師器皿 R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.8)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む

表4 遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図12-13	I a面 土坑9	竜泉窯青磁 碗	底径5.8cm ロクロ成形 素地は白灰色で黒色粒子を含む 釉薬は青緑灰色半透明
14	I a面 土坑9	用途不明 泥岩加工品	残存長(3.0)cm 残存幅(2.8)cm 厚さ2.3cm 底部中央に0.6cmの浅いくぼみあり 泥岩(土丹)を加工
15	I a面 土坑9	東遠型 山茶碗	口縁部片 輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子を僅かに含む
16	I a面 土坑12	土師器皿 T種小型	口径(9.6)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
17	I a面 土坑12	土師器皿 T種小型	口径(8.5)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む
18	I a面 土坑12	土師器皿 R種小型	口径(8.6)cm 底径(6.8)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
19	I a面 土坑12	土師器皿 R種小型	口径(8.5)cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を覆含む
20	I a面 土坑12	土師器皿 R種大型	口径(12.1)cm 底径(7.0)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
21	I a面 土坑12	土師器皿 R種大型	口径(13.6)cm 底径(9.2)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
22	I a面 土坑12	竜泉窯青磁 碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色粒子を含む精良土 釉薬は青緑灰色で半透明、釉層薄い
23	I a面 土坑12	軒丸瓦	残存長(5.5)cm 残存幅(4.2)cm 厚さ2.6cm 胎土は淡橙色で黒色粒子・小石粒・礫片を含む 永福寺Ⅲ期併行
24	I a面 土坑12	軒平瓦	残存長(3.7)cm 残存幅(5.5)cm 厚さ2.5cm 胎土は灰褐色で白色粒子・礫片を含む 下向き剣頭文 永福寺Ⅲ期併行
25	I a面 土坑12	平瓦	残存長(4.2)cm 残存幅(3.5)cm 厚さ1.5cm 胎土は灰茶色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・小石粒を含む 凹凸面ともに離れ砂 側面ヘラケズリ後、ナデ 永福寺Ⅲ期併行
26	I a面 土坑12	平瓦	残存長(5.0)cm 残存幅(2.8)cm 厚さ1.5cm 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・小石粒を含む 凸面縄目ナデ消し、凹面離れ砂 側面ヘラケズリ 永福寺Ⅲ期併行
図13-1	I a面 土坑13	土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面 P12	土師器皿 T種小型	口径(8.3)cm 器高1.4cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
3	I a面 P12	土師器皿 R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.0)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕不明瞭 胎土は灰橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
4	I a面 P12	土師器皿 T種大型	口径(13.0)cm 器高2.8cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は灰黄色で雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む 二次焼成を受けている
5	I a面 P13・14	土製品 土錘	残存長(2.7)cm 最大径1.2cm 孔径0.4cm 胎土は橙色で赤色粒子・白色粒子を含む
6	I a面 P75	平瓦	残存長(32.0)cm 残存幅(23.0)cm 厚さ2.4cm 胎土は暗灰色で黒色粒子・小石粒・礫片を含む均質土 凸面は斜格子の叩き目と、文字・記号等が組み込んである 永福寺Ⅱ期 水殿瓦窯産
図14-1	I a面 P7	鉄釘	残存長(7.0)cm 残存幅(0.5)cm 厚さ0.4cm 重さ3.1g
2	I a面 P54	土師器皿 T種大型	口径(14.0)cm 器高2.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む
3	I a面 P79	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み形成の後、ロクロ整形 器表は黒灰色 胎土は暗灰色で黒色粒子・小石粒・礫片を含む、緻密で混入物の少ない均質土
4	I a面 P91	平瓦	残存長(4.8)cm 残存幅(4.2)cm 厚さ1.5cm 胎土は白橙色で赤色粒子・白色粒子・礫片を多く含む 側面ヘラケズリ後、ナデ 永福寺Ⅲ期
5	I a面 P92	軒丸瓦	残存長(5.5)cm 残存幅(6.5)cm 厚さ2.3cm 胎土は灰褐色で白色粒子・小石粒・礫片を含む 三巴文 永福寺Ⅲ期併行
6	I a面 P105	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片、輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・黒色粒子を含む 器表にごく薄く自然釉がかかる
7	I a面 P105	鉄釘	残存長(6.1)cm 残存幅(0.5)cm 厚さ0.4cm 重さ4.2g
図15-1	I b面	土師器皿 T種小型	口径(9.6)cm 器高1.7cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
2	I b面	土師器皿 T種小型	口径(8.9)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 器表は暗褐色 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 二次焼成を受け煤付着
3	I b面	土師器皿 R種小型	口径(7.2)cm 底径(5.0)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	I b面	土師器皿 R種大型	ゆがみ著しい 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 器表は暗灰褐色 胎土は暗黄橙色で黒色粒子を含む 二次焼成を受けている
5	I b面	白色系土師器皿 R種大型	回転ロクロ 胎土は乳白色で黒色粒子を含む

表5 遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図15-6	I b面	フイゴ羽口	残存長(2.5)cm 残存幅(4.8)cm 厚さ1.5cm 胎土は灰橙色で赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・礫片を含む
7	I b面	渥美甕	口縁部片 輪積み成形 器表は黒灰色 黄緑白色の降灰 胎土は灰色で小石粒・礫片を含む良土
8	I b面	渥美甕	胴部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で白色粒子を含む均質土 器表に叩き目あり
9	I b面	軒平瓦	残存長(3.5)cm 残存幅(5.0)cm 厚さ1.5cm 胎土は灰橙色で赤色粒子・白色粒子・礫片を含む 下向き剣頭文 永福寺Ⅲ期併行
10	I b面	平瓦	残存長(7.7)cm 残存幅(5.5)cm 厚さ1.9cm 胎土は灰橙色で黒色粒子・白色粒子を含む 凸面に離れ砂、叩き目による溝状痕跡 凹面に布目痕 側面ヘラケズリ 狭端部ヘラケズリ 永福寺Ⅲ期併行
11	I b面	鉄製品蓋	直径5.2cm 高0.9cm 重さ10.4g
12	I b面	鉄釘	残存長(5.0)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重さ1.7g
図16-1	I b面溝1	砥石中砥	残存長(9.0)cm 残存幅(5.3)cm 厚さ2.5cm 天草産 3面使用
2	I b面溝1	平瓦	胎土は灰色で黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・小石粒を多く含む 側面部ヘラケズリ、ナデ 永福寺Ⅲ期併行
3	I b面柱穴列1P1	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.1)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を僅かに含む
4	I b面柱穴列1P1	土師器Ⅲ R種大型	口径(10.9)cm 底径(7.0)cm 器高2.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I b面柱穴列1P1	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 口縁部ナデ 表記面は茶褐色、内面は黄灰色の降灰 胎土は暗灰色で黒色粒子・白色粒子・小石粒を含む
6	I b面柱穴列1P1	常滑甕	胴部片 器表は淡褐色～淡黄褐色 胎土は黄灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 叩き目あり
7	I b面柱穴列1P1	元豊通宝	北宋 初鑄1078年 行書
8	I b面柱穴列1P2	鉄製品刀子	残存長(16.6)cm 残存幅(2.0)cm 最大厚(0.8)cm 重さ36.8g 中茎を納める木製の板部が不完全ではあるが残っている
9	I b面柱穴列1P4	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色 釉薬は灰緑色透明、釉層薄い
図17-1	I b面土坑6	土師器Ⅲ T種小型	口径(10.2)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄灰色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
2	I b面土坑6	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.7)cm 底径(6.0)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I b面土坑6	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.9)cm 底径(6.0)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・海綿骨芯を含む
4	I b面土坑6	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高1.5cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨針を含む
5	I b面土坑6	渥美甕	胴部部片 輪積み成形 胎土は灰色で白色粒子を含む 器表に叩き目あり
6	I b面土坑6	渥美甕	胴部部片 輪積み成形 胎土は灰色で白色粒子・礫片を含む 器表に叩き目あり
7	I b面土坑6	青白磁合子・身	口縁部片 型入れ成形 素地は乳白色で黒色粒子を含む 釉薬は青白色透明 口縁部及び胴部下部は無釉
8	I b面土坑6	丸瓦	残存長(6.5)cm 残存幅(9.0)cm 最大厚(2.0)cm 胎土は灰白色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫片を含む 凸面：縄目痕、凹面：布痕 側面ヘラケズリ・ナデ 永福寺Ⅱ期以降
9	I b面土坑6	平瓦	器表は黒灰色 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 凹凸面ともに離れ砂 端面ヘラケズリ 永福寺Ⅲ期併行
10	I b面土坑6	鉄釘	残存長(6.3)cm 残存幅(0.7)cm 厚さ0.4cm 重さ3.9g
11	I b面土坑6	東遠型山茶碗	口縁部小片 輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で白色微粒を含む
12	I b面土坑11	鉄製品刀子	残長(15.9)cm 最大幅(2.0)cm 最大厚(0.3)cm 重さ27.2g
13	I b面土坑14	土師器Ⅲ T種小型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
14	I b面土坑14	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.3)cm 底径(6.8)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
15	I b面土坑14	土師器碗	口径(12.9) 胎土は暗灰色で長石・黒色粒子・白色粒子を含む 土師器より硬質な焼き 回転ロクロを使用 12c中葉以前か
図18-1	I a面構築土	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面構築土	土師器Ⅲ T種小型	口径(10.7)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む

表6 遺物観察表(6)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 18-3	I a 面 構築土	土師器皿 R種大型	口径(12.6)cm 底径(8.6)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
4	I a 面 構築土	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰橙色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫片を含む
5	I a 面 構築土	舶載緑褐釉 無頸広口壺	口縁部片 ロクロ成形 胎土は暗灰色で黒色粒子・白色粒子を含み、若干の気泡が入る 釉薬は灰褐色不透明
6	I a 面 構築土	土師器皿 T種小型	口径(7.9)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む
7	I a 面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.3)cm 底径(6.7)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
8	I a 面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.5)cm 底径(7.4)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄灰色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)を含む
9	I a 面 構築土	土師器皿 T種大型	口径(13.9)cm 器高2.6cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・海綿骨芯を含む
10	I a 面 構築土	土師器皿 R種大型	口径(13.7)cm 底径(9.3)cm 器高3.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内 底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
11	I a 面 構築土	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(10.2)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
12	I a 面 構築土	土師器皿 R種大型	口径(13.1)cm 底径(8.9)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内 底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
13	I a 面 構築土	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は黄灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 粒子の細かい均質な胎土を使用
14	I a 面 構築土	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で黒色粒子・白色粒子・長石・礫片を含む 器表に叩き
15	I a 面 構築土	舶載陶器 褐釉壺	肩部・胴部小片 ロクロ成形 素地は暗灰色で黒色粒子・白色粒子を含む精良土 釉薬は黒褐色不透明
16	I a 面 構築土	平瓦	残存長(10.5)cm 残存幅(7.0)cm 厚さ1.7cm 表面は灰褐色 胎土は橙色～灰褐色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 凹凸面ともに離れ砂付着 側面部ヘラケズリの後、ナデ 永福寺Ⅲ期以降
17	I a 面 構築土	安山岩	長(20.4)cm 幅(18.4)cm 厚さ6.4cm 中心部に壊滅痕 礎石として使用か
図 19-18	I b 面 土坑 16	土師器皿 T種小型	口径(8.7)cm 器高1.3cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は灰褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 混入物少ない
19	I b 面 土坑 16	土師器皿 R種小型	口径(8.6)cm 底径(6.7)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
20	I b 面 土坑 16	土師器皿 T種大型	口径(13.4)cm 手づくね青、口縁部ナデ 胎土は淡褐色で黒色粒子泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部～胴部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片が混入 多数の指頭痕あり 粒子の細かい均質な胎土を使用 釉薬は灰釉ハケ塗り 体部は緑灰色及び白灰色の自然釉が広くかかっている為、施釉の有無は確認出来ない 頸部内面は自然釉が厚くかかり、肩部内側にはナデにより二条一単位の不規則な溝がつく
21	I b 面 土坑 16	渥美 広口壺	底部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で長石・石英・礫片を含む 器表は褐色 内面は緑褐色の自然釉が薄くかかる
22	I b 面 土坑 16	常滑 甕	残存長(12.8)cm 残存幅(6.4)cm 厚さ0.6cm 円盤状 柃目
23	I b 面 土坑 16	不明 木製品	残存長(22.5)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 両口
24	I b 面 土坑 16	箸状 木製品	残存長(5.5)cm 残存幅(2.9)cm 厚さ0.5cm 端部曲線状に加工
25	I b 面 土坑 16	不明 木製品	残存長(11.2)cm 残存幅(20.0)cm 厚さ10.1cm 両端部刃物による切れ込み
26	I b 面 土坑 16	棒状 木製品	
27	I b 面 土坑 17 上層	渥美・湖西片口鉢 転用摩耗陶片	渥美湖西片口鉢胴部片 端部・側面部が摩耗 回転ヘラケズリあり 胎土は灰白色で混入物なし 二次焼成のためか器表面は灰黒色を呈する
28	I b 面 土坑 17 下層	土師器皿 T種小型	口径(8.5)cm 器高1.5cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む
29	I b 面 土坑 17 下層	土師器皿 T種小型	口径(10.1)cm 器高1.8cm 手づくね後、口縁部ナデ 板状圧痕 胎土は橙色、胎芯は灰黒色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
30	I b 面 土坑 17 下層	土師器皿 R種小型	口径(8.4)cm 底径(7.9)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は赤褐色、胎芯は灰黒色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
31	I b 面 土坑 16・17 上層	土師器皿 T種小型	口径(9.7)cm 器高2.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む
32	I b 面 土坑 16・17 上層	土師器皿 R種小型	口径(9.6)cm 底径(7.7)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
33	I b 面 土坑 16・17 上層	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(7.1)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
34	I b 面 土坑 16・17 上層	土師器皿 T種大型	口径(11.7)cm 器高2.3cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む



表7 遺物観察表(7)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図19-35	I b面 土16・17 上層	土師器皿 T種大型	口径(13.3)cm 器高2.8cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
36	I b面 土16・17 上層	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(9.8)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
37	I b面 土16・17 上層	土師器皿 R種大型	口径(14.5)cm 底径(10.2)cm 器高3.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・海綿骨芯を含む
38	I b面 土16・17 上層	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で白色粒子・礫片を含む 叩き目あり
39	I b面 土16・17 上層	土師器皿 T種小型	口径(9.4)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
40	I b面 土16・17 下層	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で白色粒子・小石粒・礫片を含む 2b期
41	I b面 土16・17 下層	青白磁 皿	底部片 素地は乳白色で黒色微粒を含む良土 釉薬は青白色半透明 外底部は無釉 内面に圈線あり
42	I b面 土16・17 下層	箸状 木製品	残存長(11.7)cm 残存幅(0.4)cm 厚さ0.3cm 両口
43	I b面 土16・17 下層	箸状 木製品	残存長(18.3)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.7cm 両口
44	I b面 土16・17 下層	箸状 木製品	残存長(20.8)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 両口
図20-1	I b面 土坑19	鉄釘	残存長(6.4)cm 残存幅(0.9)cm 厚さ0.8cm 重さ8.5g
2	I b面 P.8	軒丸瓦	残存長(6.4)cm 残存幅(5.0)cm 厚さ1.9cm 表面は橙色 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫片を含む 凸面：ナデ 凹面：布目痕
3	I b面 P.69	白磁 端反碗	底部片 ロクロ成形 素地は灰白色で黒色粒子を含む 釉薬は淡灰緑不透明 みこみ部分のみ施釉 内底面に環状釉ハギ
4	I b面 P.80	土師器皿 T種小型	手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I b面 P.80	土師器皿 T種小型	口径(10.4)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
6	I b面 P.80	土師器皿 R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.3)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
7	I b面 P.80	鉄釘	残存長(4.1)cm 残存幅(0.5)cm 厚さ0.4cm 重さ1.4g
8	I b面 P.81	土師器皿 R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.4)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
9	I b面 P.81	土師器皿 R種小型	口径(9.1)cm 底径(7.7)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
10	I b面 P.81	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(6.6)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
11	I b面 P.83	土師器皿 T種大型	口径(12.5)cm 器高2.7cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良い
12	I b面 P.87	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.2)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒れている
13	I b面 P.114	土師器皿 T種小型	口径(9.1)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 板状圧痕 焼成非常に良い 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 内面は灰色(焼成ムラ?)
14	I b面 P.114	土師器皿 T種小型	口径(9.4)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 板状圧痕 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
15	I b面 P.114	平瓦	残存長(9.8)cm 残存幅(7.2)cm 厚さ2.0cm 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 凸面：縄目痕 凹面：布目痕 離れ砂 側面・端面ヘラケズリ 永福寺1期 水殿瓦窯産
16	I b面 P.124	土師器皿 T種小型	口径(9.3)cm 器高1.8cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子を僅かに含む粉質精良土 焼成非常に良い
17	I b面 P.124	土師器皿 T種大型	口径(13.5)cm 器高2.7cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
18	I b面 構築土	土師器皿 T種小型	口径(8.5)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒れている
19	I b面 構築土	土師器皿 T種小型	口径(9.0)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成良い
20	I b面 構築土	土師器皿 T種大型	口径(13.6)cm 器高3.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良い
21	I b面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は灰橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
22	I b面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.9)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を僅かに含む 焼成良い
23	I b面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.9)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い

表8 遺物観察表(8)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図20-24	I b面 構築土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・石英・礫片を含む 4型式
25	I b面 構築土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 器表は赤褐色 胎土は茶褐色で白色粒子・礫片を含む 内面は灰白色の降灰 鉄分の吹き出しあり
26	I b面 構築土	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰白色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 粒子の細かい精良土を使用 器表は灰茶色 内面は灰緑色の自然釉
27	I b面 構築土	青白磁 合子蓋	蓋上面部片 型入れ成形 素地は乳白色で黒色微粒を含む 釉薬は青白色半透明、釉層ごく薄い
図21-1	I c面	同安窯青磁 画花文皿	底部片 ロクロ成形 外底部へラケズリ 素地は灰白色で黒色微粒を含む 釉薬は青灰緑色透明で、釉層ごく薄い 底部無釉
2	I c面	鉄釘	残存長(7.2)cm 残存幅(0.7)cm 厚さ0.5cm 重さ5.4g
3	I c面 溝2	土師器皿 T種小型	口径(9.2)cm 器高1.8cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成良い
4	I c面 溝2	土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
5	I c面 溝2	土師器皿 T種大型	口径(14.2)cm 器高3.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	I c面 溝2	土師器皿 R種小型	口径(9.3)cm 底径(7.1)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒い
7	I c面 溝2	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 内面著しく剥離
8	I c面 溝2	同安窯系青磁 皿	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰緑色で黒色粒子・気泡を含む 釉薬は灰緑色半透明
図22-1	I c面 建物5 P1	滑石鍋 転用品	器表は黒灰色 加工面は灰白色 2面に研磨痕
2	I c面 建物5 P8	土師器皿 R種小型	口径(9.3)cm 底径(6.8)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒い
3	I c面 建物5 P9	土師器皿 R種小型	口径(9.6)cm 底径(7.2)cm 器高2.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
4	I c面 建物5 P10	土師器皿 R種小型	口径(7.5)cm 底径(6.3)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良い
5	I c面 建物5 P10	土師器皿 R種小型	口径(8.0)cm 底径(5.6)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
6	I c面 建物5 P10	土師器皿 T種大型	口径(15.5)cm 器高3.0cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は灰橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 二次焼成により大きく変形
図23-1	I c面 建物6 P5	土師器皿 R種小型	口径(8.9)cm 底径(6.3)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い 13c第1四半期
2	I c面 建物6 P6	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で黒色粒子・白色粒子・長石・礫片を含む 粒子の細かい胎土使用 器表は褐色の自然釉に黄灰色の降灰、叩き目あり 裏面は緑白色の降灰が全体に広がる 内底部に窯クソ付着
3	I c面 建物6 P7	白色系土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は乳白色、胎芯は灰黒色で黒色粒子を含む良土
4	I c面 建物6 P7	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒・気泡を含む 釉薬は灰緑色半透明で釉層ごく薄い
図24-1	I c面 土坑10	土師器皿 R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.1)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
2	I c面 土坑10	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 器表に叩き目あり
3	I c面 土坑10	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫を含む 胴部下、回転へラケズリ確認できず 内面上部摩耗 内底部剥離
4	I c面 P.56	竜泉窯青磁 画花文碗	口径(15.6)cm ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒・白色微粒を含む 釉薬は灰緑色半透明で、釉層ごく普通
5	I c面 P.66	土師器皿 T種小型	口径(9.5)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子(多)・赤色粒子を含む
6	I c面 P.112	土師器皿 R種大型	口径(13.6)cm 底径(8.8)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
7	I c面 P.115	土師器皿 T種小型	口径(9.2)cm 器高1.4cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 二次焼成の為に大部分が黒く変色
8	I c面 P.136	土師器皿 T種小型	口径(8.9)cm 器高1.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む良土 焼成非常に良い
9	I c面 P.137 P.138	土師器皿 T種小型	残存長(1.8)cm 残存幅(2.2)cm 厚さ0.6cm 胎土は灰褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
10	I c面 P.140	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰緑色で白色粒子を含む 緑灰色の自然釉 窯クソ付着
11	I c面 P.140	土師器皿 T種大型	口径(13.5)cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む

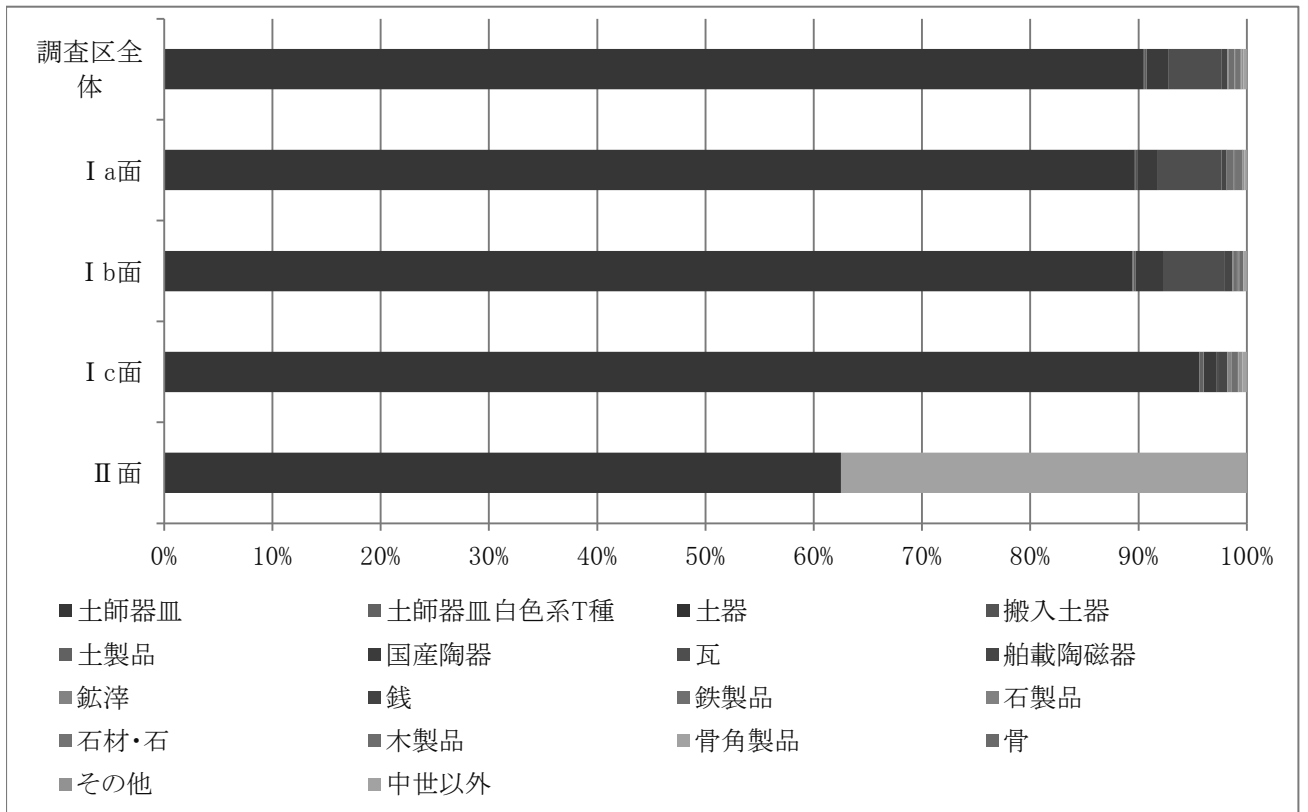
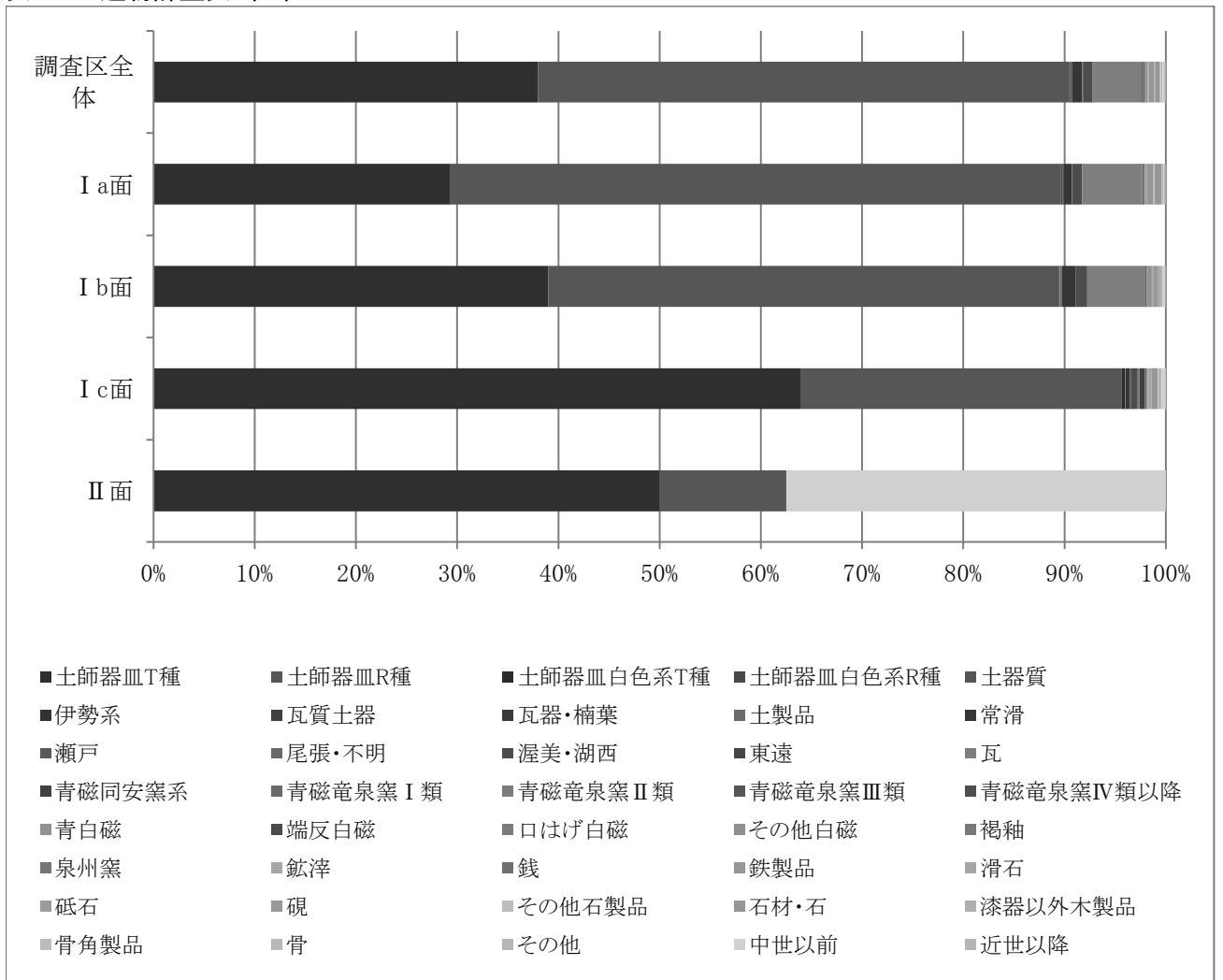
表9 遺物観察表(9)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図24-12	I c面 P.140	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
13	I c面 P.140	土師器皿 R種小型	口径(8.7)cm 底径(7.1)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子(多)・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
14	I c面 P.140	穿孔土師器皿 R種大型	残存長(1.9)cm 残存幅(2.3)cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 口縁部片 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
15	I c面 P.140	白色系土師器皿 T種大型	口縁部片 胎土は乳白色で黒色粒子を含む粉質土
16	I c面 P.140	同安窯系青磁 皿	底部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒を含む 釉薬は緑灰色半透明、釉層ごく薄い 底部無釉 外底部：回転ヘラケズリ後、ヘラケズリ
17	I c面 P.140	同安窯系青磁 碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒・白色微粒を含む 釉薬は灰緑色半透明、釉層ごく薄い 外面に櫛描き文
18	I c面 P.140	鉄釘	残存長(6.2)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.7cm
19	I c面 P.155	土師器皿 R種小型	口径(8.9)cm 底径(6.4)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を多く・泥岩粒を含む
20	I c面 P.156	土師器皿 T種小型	口径(9.6)cm 器高1.5cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を非常に多く・海綿骨芯を含む 口縁部が二次焼成の為に黒く変色 焼成良い
21	I c面 P.156	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色で白色粒子・長石・礫を含む、粒子の細かい均質土を使用 器表は灰褐色で叩き目あり
22	I c面 P.164	瀬戸 入子か	口径(3.4)cm 底径(2.6)cm 器高1.3cm 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 尾張型山茶碗に使用される土と似たものを使用
23	I c面 P.167	瀬戸 片口小瓶	口縁部片 胎土は灰色で黒色粒子を含む均質土 頸部は黄灰白色の灰釉をハケ塗り 内面は灰白色の灰釉ハケヌリ 器表面は二次被焼の為に淡褐色に変色
図27-1	表採・攪乱	土師器皿 T種小型	口径(8.8)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む良土 焼成非常に良い
2	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(8.0)cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 内面に煤
3	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.4)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を多く・泥岩粒を含む 焼成良い
4	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む良土 焼成非常に良い
5	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.4)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む 口縁部に煤付着 焼成良い
6	表採・攪乱	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は暗灰色で白色粒子・礫を含む
7	表採・攪乱	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・長石・礫を含む 口縁内面に白灰緑色の自然釉
8	表採・攪乱	竜泉窯系青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は黄灰色で黒色微粒を含む精良土 釉薬は黄灰緑色に窯変、釉層ごく薄い
9	表採・攪乱	丸瓦	残存長(8.5)cm 残存幅(8.5)cm 厚さ1.6cm 凹面に布痕 側面ヘラケズリ後ナデ 胎土は灰白色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・礫を含む 永福寺Ⅲ期
10	表採・攪乱	材質不明 鋳物	残存長(5.0)cm 残存幅(7.0)cm 厚さ3.7~1.7cm 重さ313.3g 上下両端切断面、胴部面の一部に泡状の突起した集合物が見られる
11	表採・攪乱	銅製品 ロウソク立て	高さ4.1cm 底径3.3cm 重さ23.3g 台部と皿部はネジ式で結合 近現代

表 10 遺物計量表 (1)

		I a 面	I b 面	I c 面	II 面	表採	総計		
中世以前	弥生土器	3 0.06%	5 0.20%	1 0.07%	3 37.50%	1 0.24%	13 0.13%		
	古墳土師器	0 0.00%	1 0.04%	5 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	6 0.06%		
土器	土師器皿	T種	大	1380 25.56%	841 33.98%	806 55.93%	4 50.00%	203 49.15%	3234 33.21%
			特殊小型	6 0.11%	2 0.08%	114 7.91%	0 0.00%	20 4.84%	455 4.67%
		R種	大	2862 53.00%	1063 42.95%	364 25.26%	1 12.50%	126 30.51%	4416 45.35%
			中	4 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%
			小	388 7.19%	185 7.47%	93 6.45%	0 0.00%	24 5.81%	690 7.09%
		T種白色系	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		R種白色系	1 0.02%	1 0.04%	5 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	7 0.07%	
	土器質	火鉢	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%	
	伊勢系	鏝鍋	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	瓦質土器	鍋	7 0.13%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	7 0.07%	
		火鉢	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
	土製品	瓦器	桶葉	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%
輪花碗			0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	
羽口		0 0.00%	4 0.16%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.05%		
球状土製品		0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%		
土錘		1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
常滑		壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		甕	38 0.70%	26 1.05%	6 0.42%	0 0.00%	7 1.69%	77 0.79%	
		片口鉢	4 0.07%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.97%	12 0.12%	
瀬戸		I類	天目茶碗	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%
			御皿	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%
	II類	御目付大皿	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		入子	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	片口小瓶	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	器種不明	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
尾張	山茶碗系片口鉢	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
渥美・湖西	壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	甕	40 0.74%	20 0.81%	7 0.49%	0 0.00%	3 0.73%	70 0.72%		
	大口壺	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	片口鉢	10 0.19%	6 0.24%	2 0.14%	0 0.00%	1 0.24%	19 0.20%		
東遠	片口鉢転用摩耗陶片	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	山茶碗	2 0.04%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%		
瓦	平瓦	233 4.31%	101 4.08%	3 0.21%	0 0.00%	9 2.18%	346 3.55%		
	軒平瓦	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
	丸瓦	49 0.91%	28 1.13%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.48%	79 0.81%		
	軒丸瓦	12 0.22%	9 0.36%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	21 0.22%		
	不明	22 0.41%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	23 0.24%		
	搬入瓦(東遠か)	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	碗	0 0.00%	0 0.00%	3 0.21%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%		
	皿	1 0.02%	0 0.00%	4 0.28%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.05%		
船載陶磁器	青磁同安窯系	太宰府I類	9 0.17%	5 0.20%	3 0.21%	0 0.00%	2 0.48%	19 0.20%	
		太宰府II類	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
	青磁竜泉窯系	太宰府III類	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		太宰府IV以降	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
	青白磁	梅瓶	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%	
		合子	1 0.02%	3 0.12%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%	
		碗	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	白磁	皿	1 0.02%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%	
		端反	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		口はげ	0 0.00%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
碗		1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
褐釉	不明	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	壺	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
	小壺	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
泉州窯	緑褐釉壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	洗	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	器種不明	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
鍍滓	鍍滓	1 0.02%	2 0.08%	6 0.42%	0 0.00%	0 0.00%	9 0.09%		
金属製品	銭	中国銅銭	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		釘	29 0.54%	5 0.20%	7 0.49%	0 0.00%	4 0.97%	45 0.46%	
	鉄	刀子	1 0.02%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%	
		皿	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		かすがい	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		蓋	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
石製品	滑石	器種不明	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	1 0.01%		
		鍋	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
	鍋転用品	1 0.02%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
砥石	鳴滝	3 0.06%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.05%		
	天草	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	上野	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	硯	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
その他	泥岩加工品	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
石材・石	玉石	36 0.67%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	36 0.37%		
	安山岩(伊豆石)	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
	安山岩質凝灰岩(搬入)	0 0.00%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%		
木製品	漆器以外木製品	簀(両口)	0 0.00%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%	
		用途不明	0 0.00%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
骨角製品	加工骨	棒状	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		加工鹿角	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
自然遺物	骨	加工骨	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		獣骨	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
その他	不明	産地不明陶器	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		器種不明土器	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		焼粘土塊	5 0.09%	1 0.04%	5 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	11 0.11%	
		材質不明鋳物	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%	
近世以降	近代	近世	8 0.15%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	9 0.09%	
		近代	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	3 0.03%	
合計		5400 100%	2475 100%	1441 100%	8 100%	413 100%	9737 100%		

表 11 遺物計量表 (2)



## 第四章 まとめと考察

### 第1節. 遺構の変遷と年代

#### 1期

Ⅱ面が相当する。実際の遺構面よりも下層で検出を行ったため、全ての遺構を検出できたとは言えない。溝状遺構と竪穴遺構の軸方位は上層遺構とほぼ同様のため、上層遺構と同じような規制の下に構築されたことが考えられる。

遺物は小破片がわずかに出土したのみで、年代を推測するにはいたらない。

#### 2期

I c面が相当する。調査区西側でピットが多く検出され、特に建物5・6の柱穴周辺に群集する状況が窺える。このことから、同様の位置で複数回の建て直しが行われた可能性が考えられる。調査区内のほとんどを建物が占めることから、屋敷地の1区画を検出した可能性があるが、調査区の狭小さから建物の正確な規模を確認するまでには至っていない。

出土遺物は13世紀第1四半期までのものが多いが、13世紀前葉と評価できるものも含まれる。このことから、本期の年代は12世紀末から13世紀前葉であろう。

#### 3期

I b面が相当する。調査区西側において井戸の可能性のある深い土坑が2基検出された。この土坑の東隣に溝が検出されている。この溝の主たる性格が区画を示すものか、排水を目的とするものかは不明であるが、井戸の可能性のある深い土坑とは出土遺物からみると時期が違うと言える。

本期は2期の建物が建つ区画から、井戸の可能性のある深い土坑を中心とする区画に変化したと言える。ただ、広大な屋敷地内の一部を検出した可能性もあるので、調査地点内での土地利用に変化があることによって、場の性格が変化したとは言いきれない。

13世紀前半までの遺物しか出土しない遺構と、13世紀第4四半期の遺物が含まれる遺構とがある。このことから、複数の時期の遺構を同一検出面で検出したと言える。これが、同一の遺構面を長期間に渡って使用した結果であるのか、複数回の盛土と削平を行った結果、同一の検出面での検出となったかは定かではない。

#### 4期

I a面が相当する。建物を四棟検出しているが、いずれの建物も調査区外へと広がる可能性がある。ピットは調査区東半分集中することから、建物を建てる位置が変化していることは読み取れるが、調査区が狭小なため詳細は不明である。

遺構の軸方位は1期から全く変化していないため、区画利用の基準は変化していないと考えられる。

上層を後世に大きく削平されているため、検出面上の出土遺物には近現代までの遺物が含まれるが、遺構内の出土遺物は13世紀末14世紀中頃までのもので収まる。層位的にみて、本期は13世紀後葉以降となるが、14世紀前半代の出土遺物は非常に少ない。14世紀以降の遺構面は削平された可能性があると言える。

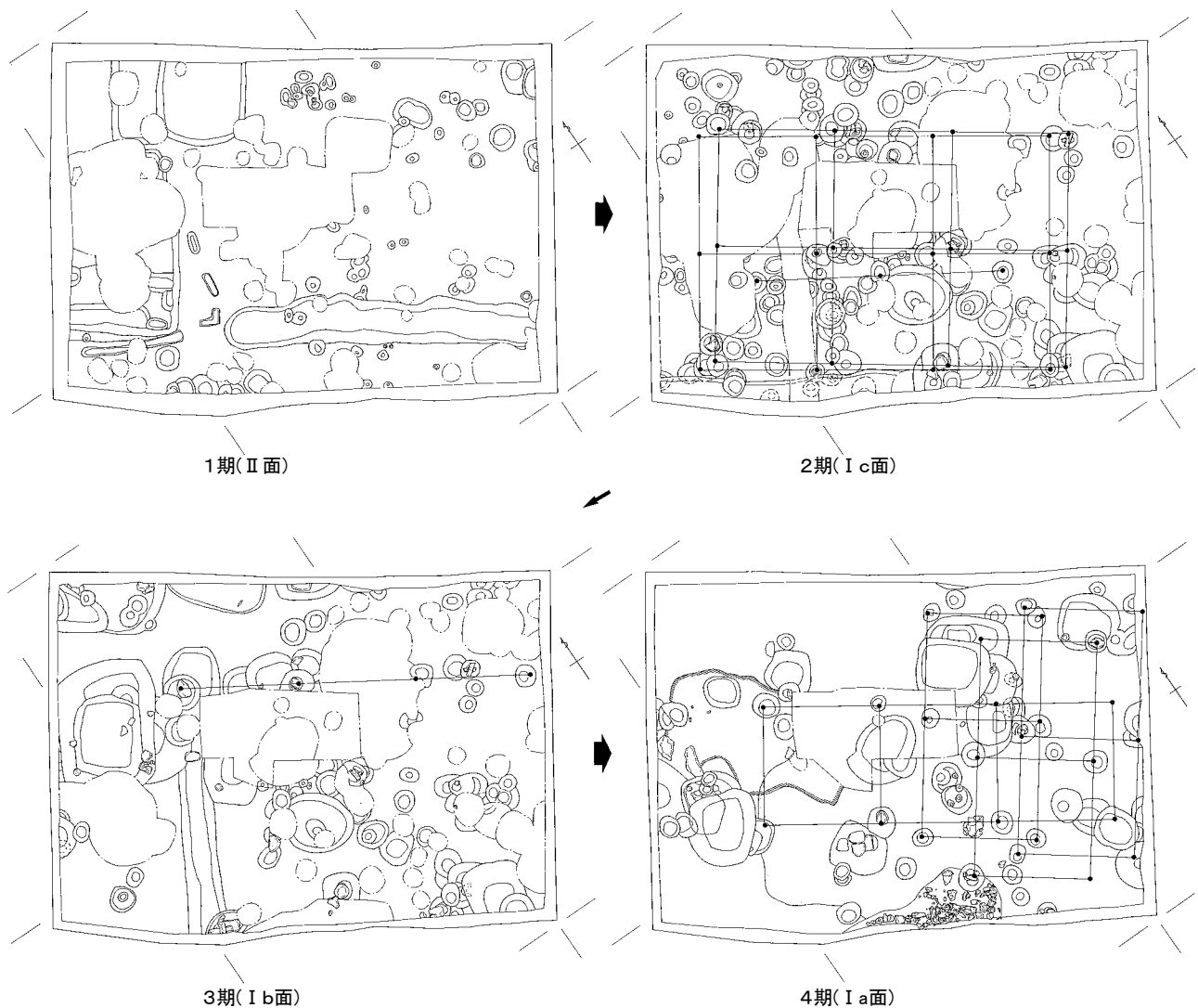


図 28 遺構変遷図

## 第 2 節. 調査地点周辺の土地造成について

II 面・I c 面までは 13 世紀前葉までの遺構で構成されている。一方、I b 面は 13 世紀前半の遺構と 13 世紀第 4 四半期の遺構とが併存している状況であり、I b 面の上層にあたる I a 面は 13 世紀後葉以降の遺構のみとなっている。層位的な矛盾があるとは言えないが、13 世紀中葉と確実に判断できる遺構の存在を確認することができなかった。また、I b 面では同一の検出面で 13 世紀前半と 13 世紀後葉の遺構を検出している。第 1 章で示した通り本調査地点周辺は幕府や北条氏邸が存在していた区画内であり、鎌倉幕府開府当初から少なくとも鎌倉幕府滅亡までは人の活動は盛んであったと考えられる。また、『吾妻鏡』の記事から、付近で頻繁に火災が起きていた様子が窺えるが、良好な火災面を検出することはできなかった。これらの状況を、実際の遺構面と遺構の検出状況と『吾妻鏡』に記載のある火災や建て替え、建物の新造を手掛かりに、当地で行われていた土地造成について若干の考察を行ってみたい。

まず、『吾妻鏡』に記載のみられる火災記事の中で、調査地点周辺まで延焼した可能性のあるものを抽出してみたい。

建久二年（1191 年）三月四日条 「小町大路边」から失火し、大倉幕府、鶴岡八幡宮まで延焼

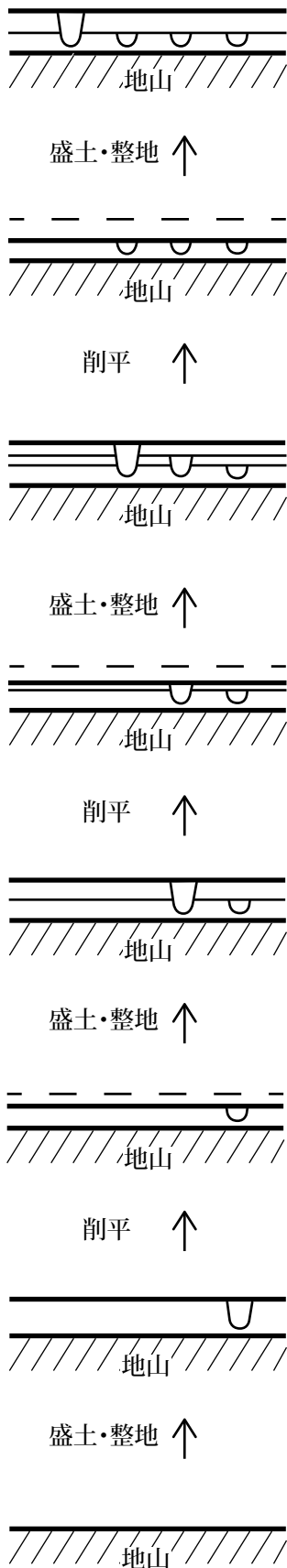


図 29 土地造成模式図

承元四年（1210年）十一月廿日条

北条泰時小町邸と近隣御家人宅焼亡

承久二年（1220年）二月廿六日条

大町で失火、北条泰時邸前まで延焼か

嘉禄二年（1226年）十二月十三日条

政所前から失火、北条泰時小町邸と同一区画内まで延焼か

安貞元年（1227年）二月八日条

幕府東西人と北条泰時納所一字焼亡。宇津宮辻子幕府近くでの火災

延応元年（1239年）十二月廿七日条

北条泰時邸南から失火、六字焼亡か

寛元二年（1244年）十二月廿六日条

北条経時邸、北条時頼邸から失火、政所まで延焼

建長二年（1250年）九月廿六日条 北条時頼邸失火

次に調査地点周辺で建物の建築が確認できるもの抜き出す。

元仁元年（1224年）六月廿七日条 北条泰時小町邸内で修理

嘉禄元年（1225年）十月卅日条

御所（宇津宮辻子幕府）予定地で大土公祭

嘉禎二年（1236年）二月十九日条 北条泰時邸新築

嘉禎二年（1236年）四月二日条 若宮大路御所の造営開始

嘉禎三年（1237年）四月廿二日条 北条泰時邸内で新造の建物

寛元三年（1245年）六月廿七日条

北条経時邸、北条時頼邸火災後の新築か

宝治元年（1247年）八月九日条に始まる記載

北条時頼邸内で修理及び新築

建長三年（1251年）十月八日条

北条時頼邸で新築、火災が原因か

建長四年（1252年）七月九日条 北条時頼邸内で建て替え

筆者は文献史学の専門ではないため、全てを抽出できた、とは言えないが、13世紀中頃の建長年間までで、火災は8件、新造・修理は9件確認できる。

火災や建物の新造・修理のたびに区画の変更や盛土・整地層が形成された、とは断言できず、また『吾妻鏡』に記載された出来事が本調査地点でのこと、とは言えないが、本調査地点周辺では火災、新造・修理は頻繁に起こること、とも言える。

特に嘉禄元年（1225年）と嘉禎二年（1237年）には将軍御所の造営が行われており、大規模な土木工事が行われた可能性を指摘できる。



これらの史料上の記載と調査結果を照らし合わせてみると、I c面が13世紀前葉までで、二回の將軍御所の造営と時期が重なる可能性もあるが、地行層は1層しか確認できていない。また、I b面で13世紀前半までの遺物しか出土していない遺構もあるため、I b面までが將軍御所の造営に伴うという解釈も不可能ではない。ただし、I b面には13世紀後葉まで存続する遺構があることや、さらに上層での地行層が確認できることも確実である。また、火災の記録を最低8回は確認できたが、遺構覆土や面構築土（含地行層）に炭化物をよく含むものの、明確な火災痕跡と判断できる状況は確認できていない。I a面は確実に13世紀後葉以降となるので、今回抽出した史料上の出来事以後と言える。いずれにしろ、史料上で確認できる火災や建物の新築・修理の回数に比べると、I b面までで確認できた地行層の枚数は少ない。

このことから、史料にみられる大規模土木工事が想定される事象と、発掘調査における成果を即結びつけることは不可能である、と言える。当然、大規模な区画変更を伴う土木工事があったとしても、盛土・整地を行わず、同一遺構面を継続的に使用していた可能性も十分ありえるが、削平による前代の盛土・整地層の消失の可能性も考慮に入れておかなければならない。少なくとも本調査地点を含めて、周辺の調査において、明確な火災痕跡は確認されていないため、火災後に清掃を行っている可能性もあり、その際に削平を伴う可能性も捨てきれないことは事実である。

図29は削平を伴う整地が行われた際に、おこりえる遺構検出状況を模式図化したものである。あくまで、模式図として提示するため、煩雑さを避ける目的で地山までの削平を伴うモデルケースは呈示しなかった。本調査地点においては13世紀中葉と明確に限定できる遺構は検出されていないため、鎌倉時代における削平により、13世紀中葉の遺構群が消滅した可能性を指摘できる。また、本調査地点における最上層遺構群に含まれるI a面落込み1において、13世紀前葉までに限定できる遺物が接合する状況で多く確認できることから、本地点においては大規模な土の移動が行われ、落込み1を埋めるために使われた可能性を指摘できる。

削平を受けていることを想定した場合、遺構の切り合いや出土遺物の年代により、時期の違いを明確にすることが求められるので、現地調査・整理時によりいっそうの丁寧な分析が必要となってくる。この丁寧な分析が鎌倉前期の様相を知る上で、重要な作業になってくるであろう。

引用・参考文献（本報全体に共通）

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
- 蘆田伊人編 1958『大日本地誌大系（二十一） 新編鎌倉志 鎌倉攬勝考』雄山閣
- 蘆田伊人編 1998『大日本地誌大系 22 新編相模国風土記稿』
- 神奈川県史編纂室編 1971『神奈川県史 資料編 1 古代・中世（1）』神奈川県史編纂室
- 神奈川県史編纂室編 1979『神奈川県史 資料編 3 古代・中世（3下）』神奈川県史編纂室
- 鎌倉教育研究所編 1979『かまくら子ども風土記（改訂九版）』鎌倉市教育委員会
- 川副武胤 1980「鎌倉時代鎌倉の方位の観測」『日本歴史』第 382 号 日本歴史学会
- 黒板勝美編 1933『新訂増補国史大系 吾妻鏡』吉川弘文館
- 鈴木茂 1996「宇津宮辻子幕府跡の花粉化石」（「宇津宮辻子幕府跡」附編）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12（第 1 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 鈴木棠三・鈴木良一監修 1984『神奈川県地名』平凡社
- 須藤博史／貫達人 1963「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11 鎌倉文化研究会
- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 貫達人・川副武胤・佐脇栄智 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
- 貫達人 1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要 第 8 号』神奈川県立金沢文庫
- 貫達人 1989「第二章 古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史 近世通史編』吉川弘文館
- 野口実 1993「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45（財）古代学協会
- 野本賢二 2001「若宮大路周辺遺跡群一小町二丁目 402 番 5 地点一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17（第 1 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 原廣志 1996「北条高時邸跡一小町三丁目 426 番 3 地点一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会
- 原廣志 1998「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第 22 回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会・鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1994「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）  
新人物往来社
- 馬淵和雄ほか 1996「北条小町邸跡（泰時・時頼邸） 雪ノ下一丁目 377 番 7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12（第 2 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1998「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目 620 番 5 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14（第 2 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1999『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目 620 番 5 地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
- 馬淵和雄 2014「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目 570 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30（第 1 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 松尾剛次 1993『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館



1-1 調査地点入口（西から）



1-2 調査地点へいたる路地



1-3 調査地点周辺



1-4 若宮大路からのぞむ東西道

図版2



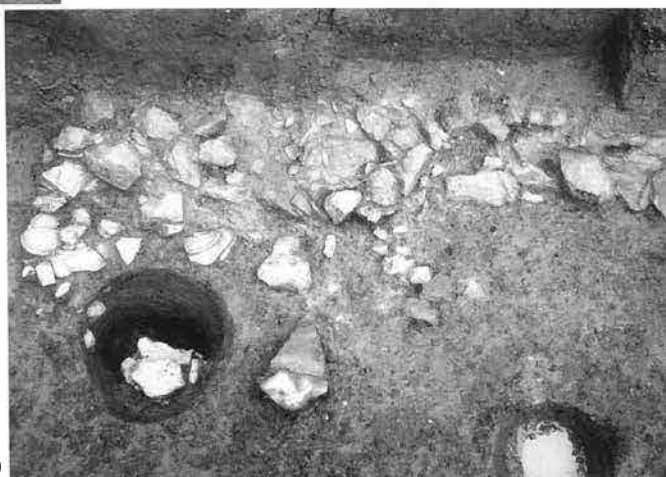
2-1 2区I a面全景 (西から)



2-2 I a面土坑1 (西から)



2-3 I a面土坑2 (東から)



2-4 I a面落込み1 (北から)



3-1 I a面 P.42 (南西から)



3-2 I a面 P.75 掘削前 (東から)



3-3 I a面 P.75 安山岩 (伊豆石) 検出状況 (東から)



3-4 I a面 P.75 平瓦検出状況 (東から)

図版4



4-1 I a面P.2 (南から)



4-2 1区I b・I c面全景 (東から)



4-3 1区I b・I c面全景 (西から)



4-4 1区I b・I c面全景 (南から)





5-1 2区I b面全景 (南から)



5-2 2区I b面全景 (西から)



5-3 I b・I c面土坑4 (西から)



5-4 I b面土坑17 (西から)

図版6



6-1 I b面土坑 16 (南から)

6-2 I b面土坑 16・17 土層断面 (南西から)







7-1 I b面土坑 18・P.106 (南から)



7-2 I b面土坑 10・P.65 土層断面 (北から)



7-3 I b・I c面 土坑 6 (西から)



7-4 I b面 P.120 (南から)

図版8



8-1 I b・I c面 P.53 (南から)



8-2 2区I c面全景(南から)



8-3 2区I c面全景(西から)



8-4 2区I c面全景(北から)



9-1 2区I c面全景(東から)



9-2 2区II面全景(西から)



9-3 2区II面全景(北から)



9-4 2区II面全景(東から)

図版 10



10-1 2区Ⅱ面全景（南から）



10-2 Ⅱ面溝状遺構（東から）



10-3 1区Ⅱ面西北隅（北から）



10-4 Ⅱ面堅穴遺構（西から）

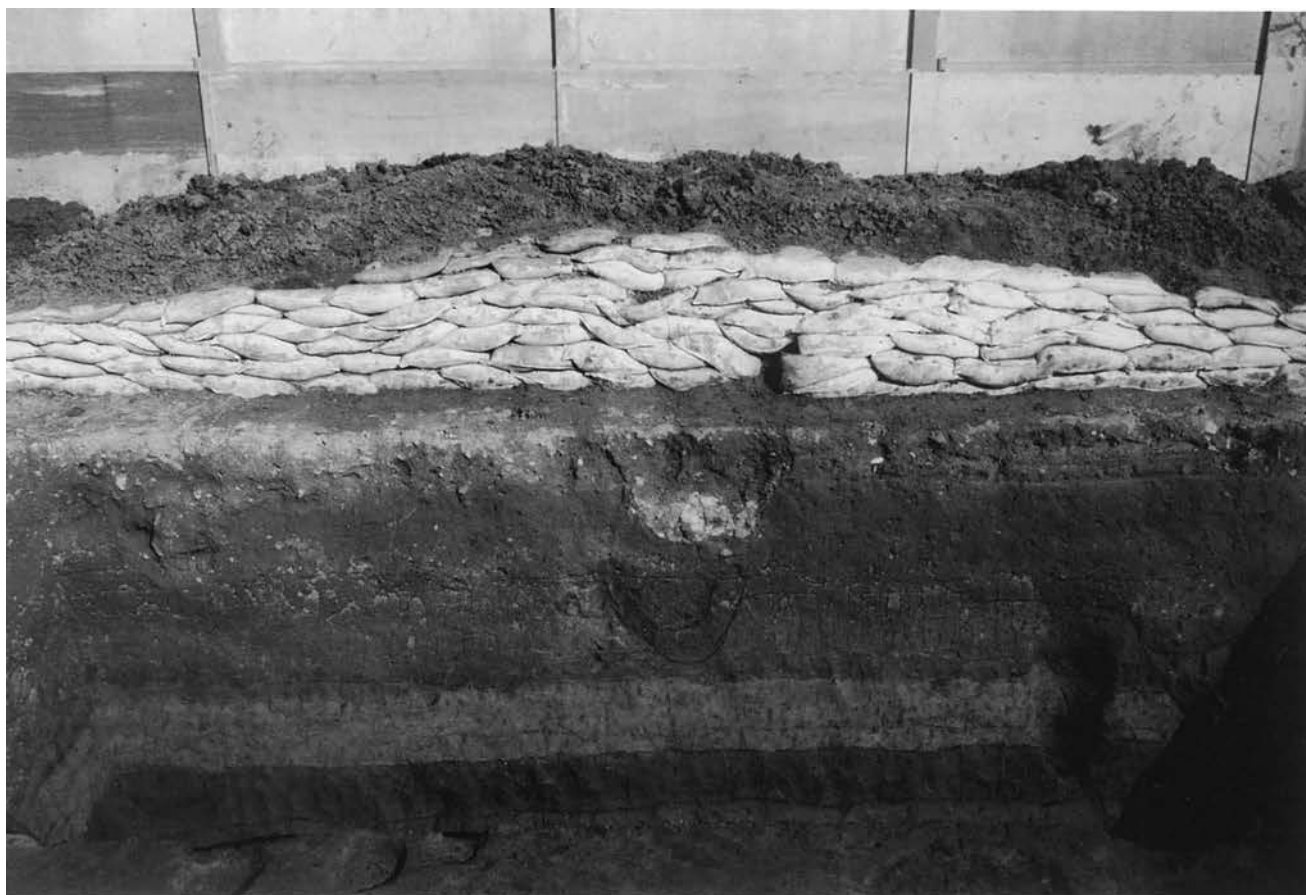


11 - 1 II区土坑 22 (北から)



11 - 2 1区最終確認トレンチ  
南壁土層断面





12-1 1区東壁土層断面

12-2 1区南壁土層断面



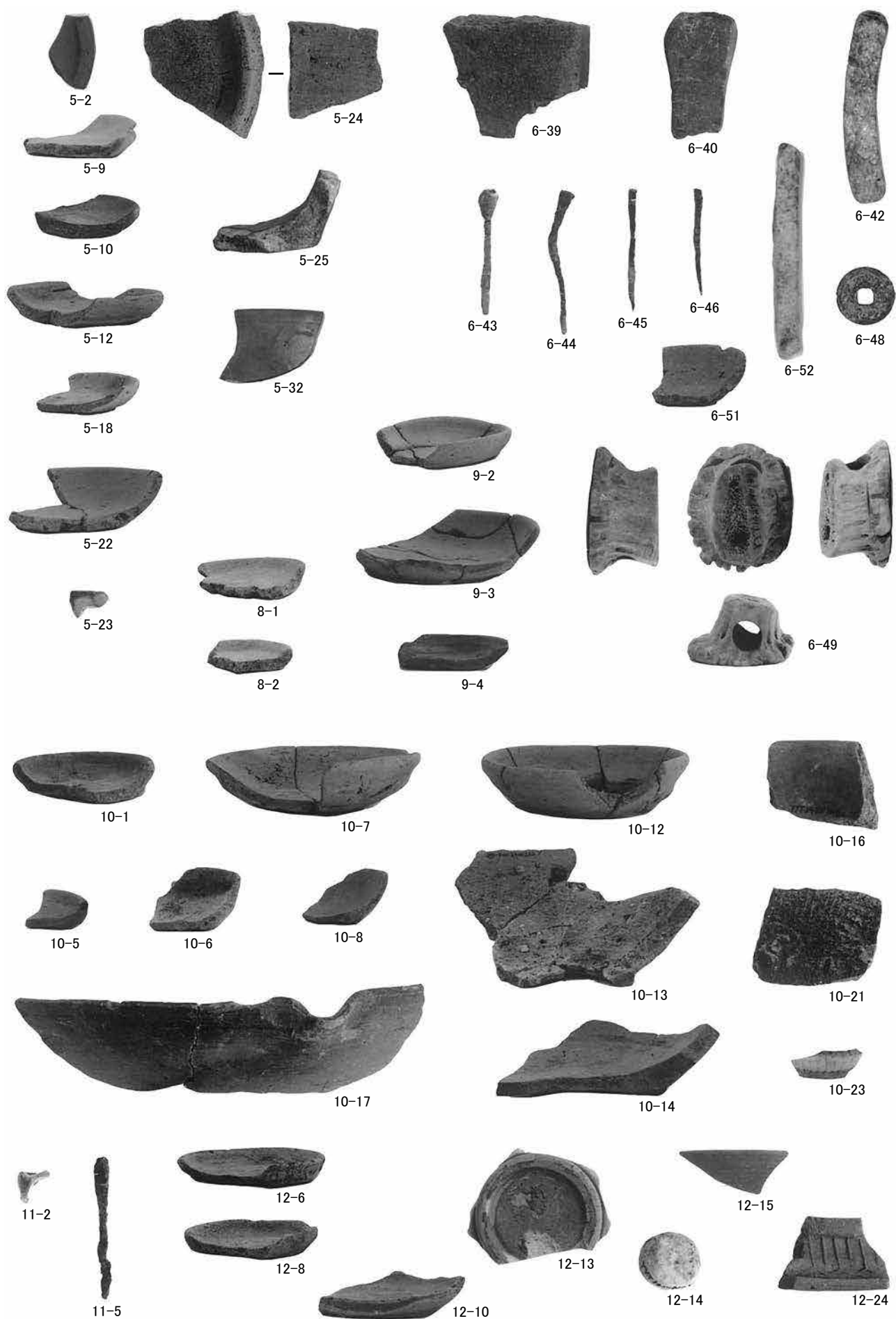


13-1 2区西壁土層断面

13-2 1区西壁(調査区境界)土層断面

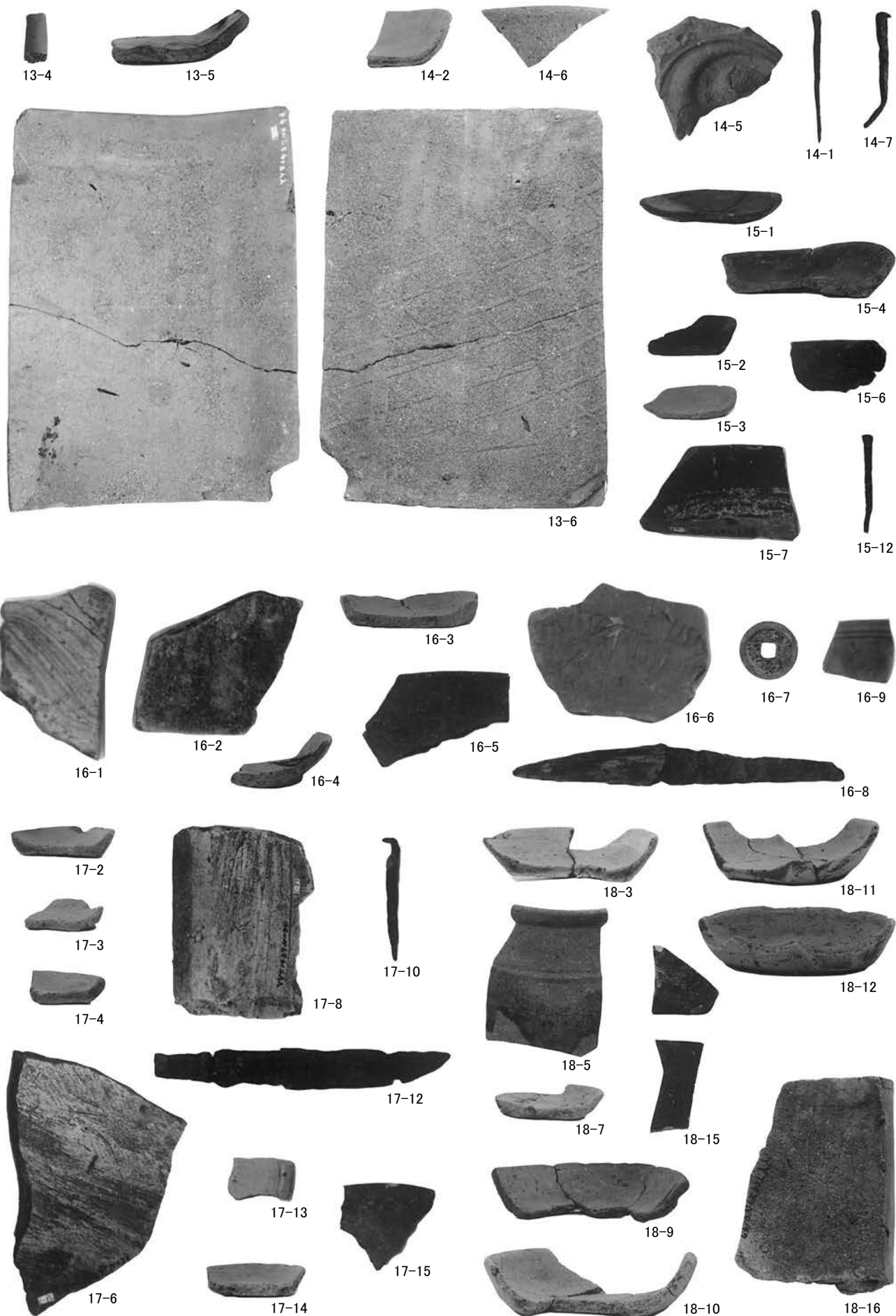


图版 14

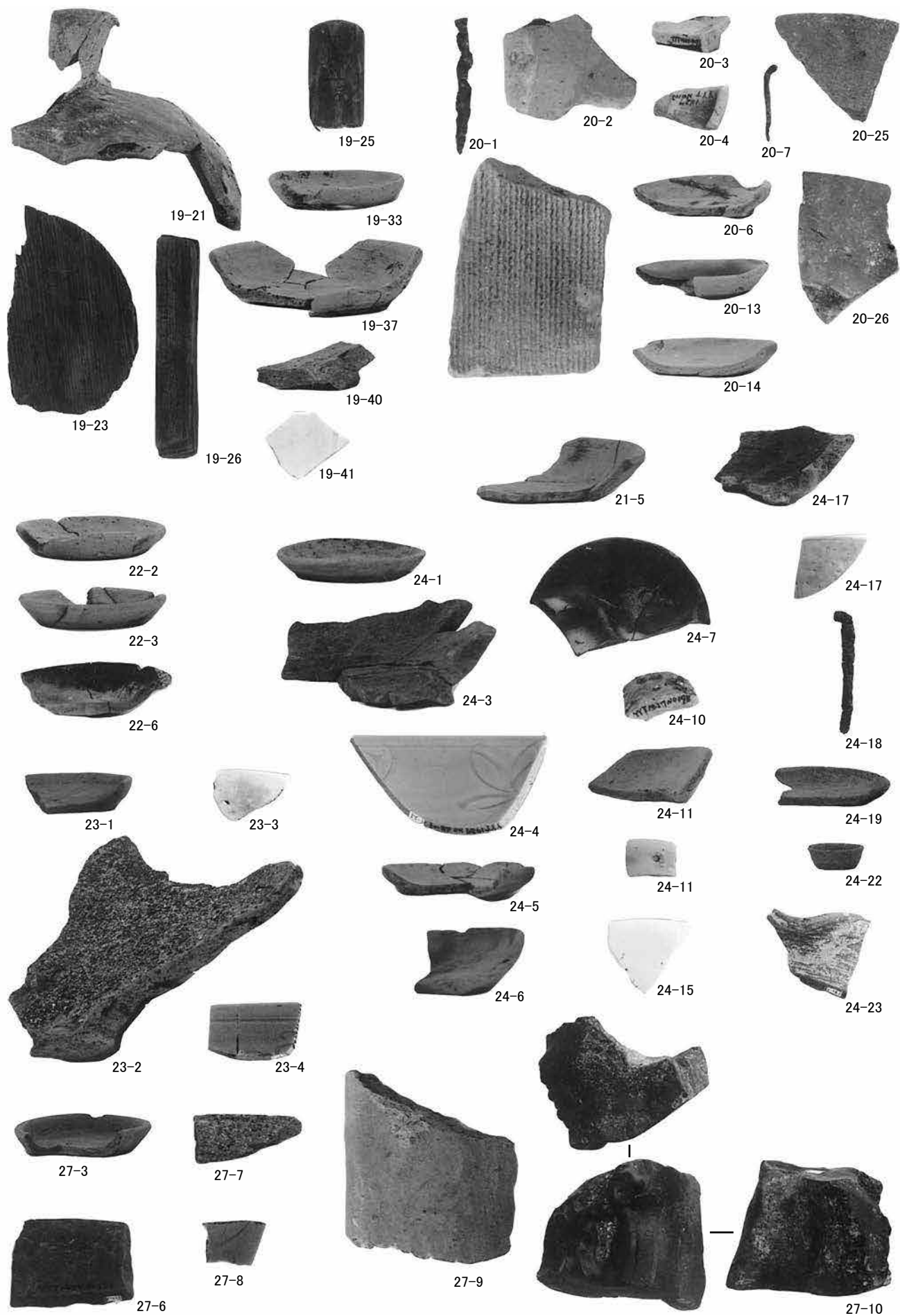


出土遺物 1





出土遺物 2



出土遺物 3

# 弁ヶ谷遺跡 (No. 249)

材木座六丁目 640 番 2・3 地点

## 例 言

1. 本報告は「弁ヶ谷遺跡」内、材木座六丁目 640 番 2・3 における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
  2. 調査期間 2009 年 6 月 15 日～同年 8 月 28 日  
調査面積 49.5㎡
  3. 本調査地点の略称は調査時は BZ6640 とし、整理作業時に ZM0905 とした。
  4. 担 当 者 馬淵和雄  
調 査 員 本城裕 椎木達哉 高橋亮 根本志保  
作 業 員 沼上三代治 倉澤六郎 小口輝男 片山直文 渡辺保夫
  5. 本報告作業分担  
遺構図整理 根本志保  
遺物実測 森谷十美 岩崎卓治 小野夏奈 根本志保  
同墨入れ 森谷十美 岩崎卓治 根本志保  
同観察表 森谷十美  
同写真撮影 須佐仁和 根本志保  
写真図版 遺構 根本志保  
遺物 森谷十美  
原稿執筆 根本志保  
編 集 根本志保
  6. 出土遺物、図面、写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管する。
  7. 本報の凡例は以下の通りである。
- 挿図 縮尺：全側図：1/60 遺構図：1/60・1/40 遺構図：1/1・1/3・1/6  
数 値：文章中の（ ）数値は復元径を示す。  
遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。  
遺 物 図：黒塗りは土器に付着した油煙煤を表現している。  
編 年：常滑 中野晴久 2012『愛知県史』による。  
：瀬戸 藤沢良祐 2008『愛知県史』による。  
：貿易陶磁 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 15』による。

# 目 次

## 本 文 目 次

第一章	調査地点の概観	121
	1. 位置と立地	
	2. 歴史的環境	
第二章	調査の概要	128
	1. 調査の経過	
	2. 測量軸の設定	
	3. 堆積土層	
第三章	検出された遺構と出土遺物	133
	1. 第Ⅰ面の遺構と出土遺物	
	2. 第Ⅰb面の遺構と出土遺物	
	3. 第Ⅱ面の遺構と出土遺物	
	4. 第Ⅲ面の遺構と出土遺物	
	5. 第Ⅲb面の遺構と出土遺物	
	6. 第Ⅳ面の遺構と出土遺物	
	7. 表採遺物	
第四章	まとめと考察	179
	1. 遺構の変遷	
	2. 出土遺物と計量比について	

## 挿 図 目 次

図1 周辺の遺跡	122	図22 第Ⅱ面 落ち込み2	153
図2 中世鎌倉地形図	124	図23 第Ⅲ面全体図	154
図3 明治15年頃の調査地点周辺	125	図24 第Ⅲ面 建物4	155
図4 調査区設定図	129	図25 第Ⅲ面 建物4の柱と礎板	156
図5 堆積土層図	131	図26 第Ⅲ面 柱穴列	157
図6 第Ⅰ面 全体図	132	図27 第Ⅲ面 木樋出土状況	158
図7 第Ⅰ面 常滑据甕	134	図28 第Ⅲ面 落ち込み3	159
図8 第Ⅰ面 建物概念図	135	図29 第Ⅲ面 柱穴	160
図9 第Ⅰ面 建物1	136	図30 第Ⅲ面 直上出土遺物	160
図10 第Ⅰ面 建物2	138	図31 第Ⅲ面 出土遺物	161
図11 第Ⅰ面 礎石列	139	図32 第Ⅲb面 全体図	162
図12 第Ⅰ面 落ち込み1	140	図33 第Ⅲb面 井戸1	163
図13 第Ⅰ面 土坑・柱穴	142	図34 第Ⅳ面 全体図	166
図14 第Ⅰ面 直上遺物	144	図35 第Ⅳ面 池1(1)	167
図15 第Ⅰ面 出土遺物	144	図36 第Ⅳ面 池1(2)	168
図16 第Ⅰb面 全体図	147	図37 第Ⅳ面 暗渠・落ち込み4	169
図17 第Ⅰb面 土坑	148	図38 第Ⅳ面 暗渠	170
図18 第Ⅰb面 出土遺物	150	図39 第Ⅳ面 溝1	171
図19 炭化層出土遺物	150	図40 第Ⅳ面 出土遺物	171
図20 第Ⅱ面 全体図	151	図41 表採遺物	172
図21 第Ⅱ面 建物3	152	図42 遺構変遷図	180

## 表 目 次

表1 周辺の遺跡	123	表7 遺物観察表(3)	175
表2 第Ⅰ面遺構観察表	145	表8 遺物観察表(4)	176
表3 第Ⅰb面遺構観察表	149	表9 遺物観察表(5)	177
表4 第Ⅲ面遺構観察表	164	表10 遺物観察表(6)	178
表5 遺物観察表(1)	173	表11 出土遺物計量表(1)	181
表6 遺物観察表(2)	174	表12 出土遺物計量表(2)	182

## 図 版 目 次

<p>図版 1 ..... 184 海を望む（弁ヶ谷の北の山上から） 和賀江島を望む（弁ヶ谷の北の山上から）</p> <p>図版 2 ..... 185 新善光寺の谷戸を望む（南から） 近景（南から）</p> <p>図版 3 ..... 186 第1面全景（北西から） 常滑据甕（北から）</p> <p>図版 4 ..... 187 常滑据甕 上層（南西から） 常滑据甕 下層（北東から） 常滑据甕 掘り方（北東から）</p> <p>図版 5 ..... 188 第 I 面建物 1（北西から） 第 I 面土坑 1（南西から） 第 I 面土坑 11（北西から） 第 I 面土坑 4（北から） 第 I 面土坑 5（東から）</p> <p>図版 6 ..... 189 第 I 面土坑 5 土層堆積状況（南西から） 第 I 面土坑 4 土層堆積状況（南から） 第 I 面土坑 2（南東から） 第 I 面土坑 7（東から） 第 I 面柱穴 24（南から） 第 I 面落ち込み 1（東から）</p> <p>図版 7 ..... 190 第 I b 面全景（北東から） 第 I b 面部分（北から） 第 I b 面方形土坑（南東から）</p> <p>図版 8 ..... 191 第 II 面全景（根太木痕・南から） 第 II 面全景（南から）</p> <p>図版 9 ..... 192 第 II 面全景（南東から） 遺物出土状況 作業風景 第 II 面礎石列（南から）</p> <p>図版 10 ..... 193 第 III 面全景（南から） 第 III 面落ち込み 3（東から） 第 III 面落ち込み 3（南西から）</p> <p>図版 11 ..... 194 第 II 面の礎石建物と第 III 面の掘立柱建物が 踏襲されている様子（P 137・南東から） 第 III 面柱穴 140（南から） 第 III 面柱穴 150（北西から） 第 III 面柱穴 146（南西から） 第 III 面柱穴 241（南から）</p> <p>図版 12 ..... 195 第 III 面柱穴 152（南西から） 第 III 面柱穴 160（南西から） 第 III 面柱穴 137（南から） 第 III 面木樋（南から） 第 III 面木樋（北から） 第 III b 面井戸 1（南西から）</p>	<p>図版 13 ..... 196 第 IV 面全景（南西から） 第 IV 面全景（北西から）</p> <p>図版 14 ..... 197 暗渠周辺（池・暗渠・溝・川・南から） 第 IV 面溝 1（北から） 第 IV 面池 1 土層堆積状況（南から）</p> <p>図版 15 ..... 198 第 IV 面池 1 遺物出土状況・櫛（南から） 第 IV 面池 1 遺物出土状況・羽子板（南から） 第 IV 面暗渠（南から） 第 IV 面池 1 遺物出土状況・縄 作業風景</p> <p>図版 16 ..... 199 第 IV 面暗渠（南西から） 第 IV 面暗渠（蓋を取った状況・南西から） 調査区北壁堆積土層（西半部・南西から） 調査区北壁堆積土層（東半部・南西から） 調査区南壁堆積土層（東半部・北東から） 調査区南壁堆積土層（西半部・北東から）</p> <p>図版 17 ..... 200 図 7 第 I 面据甕</p> <p>図版 18 ..... 201 図 9 第 I 面建物 1 図 10 第 I 面建物 2 図 12 第 I 面落ち込み 1 図 13 第 I 面土坑・柱穴</p> <p>図版 19 ..... 202 図 14 第 I 面直上 図 15 第 I 面出土遺物 図 17 第 I 面出土遺物 図 18 第 I b 面出土遺物</p> <p>図版 20 ..... 203 図 19 炭化層出土遺物 図 20 第 II 面出土遺物 図 21 第 II 面礎石 図 22 第 II 面落ち込み 図 24 第 III 面建物 4</p> <p>図版 21 ..... 204 図 25 建物 4 柱・礎板</p> <p>図版 22 ..... 205 図 28 第 II 面落ち込み 図 29 第 III 面柱穴 図 30 第 III 面上出土遺物</p> <p>図版 23 ..... 206 図 31 第 III 面出土遺物 図 33 第 III b 面井戸 1 出土遺物 図 35 第 IV 面池 1 出土遺物</p> <p>図版 24 ..... 207 図 35 第 IV 面池 1 出土遺物 図 36 第 IV 面池 1（2）出土遺物 図 39 第 IV 面溝 1 出土遺物 図 40 第 IV 面出土遺物</p> <p>図版 25 ..... 208 図 41 表採遺物</p>
--	---

# 第一章 調査地点の概観

## 1. 位置と立地

調査地点は「弁ヶ谷遺跡 (NO.249)」の範囲内、鎌倉市材木座六丁目 640 番 2・3 に所在する。材木座海岸に程近い浄土宗光明寺の北側、東側は逗子市小坪との境の山裾に開析された谷戸「弁ヶ谷」の開口部の中央付近に位置する。上本進二の「鎌倉・逗子地形発達史」によると鎌倉時代この辺りは谷底平野・山麓平野にあたる (上本 2000)。現在は住宅により視野が遮られているが海岸は 200～250 m 程の近くにある。かつては浜地の縁辺とされていた位置ではなかっただろうか。

「材木座」は市街地東南部に位置し、北辺は JR 横須賀線を境に大町と、西辺は滑川を隔てて由比ガ浜と、東辺は名越山塊を挟んで逗子市と、南は材木座海岸と接する。

近世以前の材木座地域西側は海岸の砂堆を除いて滑川河口に近くに形成された沼沢地もしくは低湿地であった。明治時代に名越隧道掘削に伴う土砂で埋め立てられ、現在のような居住可能な環境となった。

## 2. 歴史的環境

### 鎌倉時代以前の鎌倉東南部一帯

今回の調査では縄文時代土器 1 片、古墳時代後期の土器片、奈良・平安時代の土器片が多数出土している。周辺の遺跡からは縄文時代土器は地点 18 から出土している。他に地点 39 からは縄文時代後期の土器の出土がある。地点 43 からは弥生時代後期から古墳前期、奈良・平安時代の土器の出土がある。古代の遺物は地点 2・3・5・17・19・23・33・44 からの出土があり、このうち地点 17 では古代の大型掘立柱建物の検出がある。報告者から水陸両方の交通・運送に関わる機関とそれに付随する建物 (居館等) と指摘されている。この遺跡の東隣には康平六年 (1063) に源頼義により京都の石清水八幡宮を勧請した八幡宮若宮 (元八幡) がある。

宝亀二年 (771) に改編されるまで東海道は鎌倉を通過していた。ルートは諸説あり、鎌倉に入るまでには二説ある。まず相模湾の海岸べりを東進し、稲村ガ崎を通過するルート (野口 1993・馬淵 1994)。と、藤沢市北部から南下し大仏坂付近から入ってくるルート (木下 1997)。鎌倉に入ってから、下馬四ツ角で若宮大路を横断し現県道鎌倉・葉山線を進むとする説 (高柳 1959)。とその一本南の断続的に残る東西道を指摘するルートがあり、その先は大町四ツ角から東に直進して名越山塊に至る道、大町四ツ角から南に折れて小坪に向かう道などの説がある。後者だとすれば、調査地点にもほど近い弁ヶ谷の谷開口部を通過することになり興味深い。また、鎌倉に入ってからルートでいえば、地点 17 や、元八幡の存在などからこれらの前面を通る道は鎌倉幕府の都市整備以前から存在する主要な道路と考えられ、東海道の一部と踏んでもよからう。

### 鎌倉時代以降の様相

弁ヶ谷はかつての名越の領域に含まれる。「名越」は貞享二年 (1685 年) 刊の『新編鎌倉志』に「大町の四辻より、山随て南の材木座に至るまでの東方を、皆名越という」とあり「名越」は市街地の西側一帯を指す「甘縄」に対するように東側一帯を含む広い範囲を指している。後述するが弁ヶ谷には「新善光寺」という寺院があった。この寺院に関連して、『吾妻鏡』正嘉二年 (1258) 五月五日条に、尾張前司 (名越時章) の「名越山庄」が「新善光寺辺」にある、と割注があり、また延慶三年 (1310) には金沢実時の「名越新善光寺下毘沙門堂入地」が確認されている (『東寺百合文書』リ)。このことからみても、弁ヶ谷が名越に属していたことは確実である。





表 1 周辺の遺跡

## 弁ヶ谷遺跡 (NO. 249)

地点	地番	報告書 / 他
1	材木座六丁目 640-2	調査地点
2	材木座四丁目 336-7	宮田真・諸星真澄 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会
3	材木座六丁目 643-4・5	馬淵和雄 2009『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会
4	材木座四丁目 594	田代郁夫・原廣志 1991『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩落対策事業に伴う発掘調査報告書』弁ヶ谷遺跡内やぐら群発掘調査団
5	材木座四丁目 332-1	宮田真・森孝子 2007『弁ヶ谷遺跡発掘調査報告書』(株)博通
6	材木座六丁目 643-3	齋木秀雄 2009『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会

## 弁ヶ谷やぐら群 (NO. 085)

7	材木座四丁目 542	鈴木庸一郎 2000『かながわ考古学財団調査報告 94 弁ヶ谷東やぐら群』(財)かながわ考古学財団
8	材木座四丁目 10-14	依田亮一・他 2000『かながわ考古学財団調査報告書 98 弁ヶ谷やぐら群』(財)かながわ考古学財団
9	材木座四丁目 594-14	滝沢亮 1986『相武古代研究Ⅱ』相武考古学研究所

## 材木座町屋遺跡 (NO. 261)

10	材木座六丁目 647-8 他	齋木秀雄 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21 鎌倉市教育委員会
11	材木座四丁目 260-1	松尾宣方・田代郁夫 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6 鎌倉市教育委員会
12	材木座一丁目 890-7	汐見一夫 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
13	材木座六丁目 760-1	大河内勉・伊丹まどか 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会
14	材木座二丁目 217-6	瀬田哲夫 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会
15	材木座四丁目 256-1	野本賢二・汐見一夫 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会
16	材木座一丁目 144-3	木村美代治 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会
17	材木座一丁目 910	森孝子 2001『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』材木座町屋遺跡発掘調査団
18	材木座三丁目 364-1	馬淵和雄 1997『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会
19	材木座一丁目 921-5	齋木秀雄・根本睦子 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
20	材木座三丁目 62-19	齋木秀雄・瀬田哲夫 2008『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会
21	材木座一丁目 889-4・5	齋木秀雄 2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』24 鎌倉市教育委員会
22	材木座三丁目 164	齋木秀雄・熊谷満 2011『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会
23	材木座五丁目 462-2	宮田真・滝沢晶子 2012『材木座町屋遺跡 (NO. 261) 発掘調査報告書』(株)博通

## 新善光寺跡 (NO.279)

24	材木座四丁目 573-1	福田誠 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会
25	材木座四丁目 579-8	原廣志・山口正紀 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』29 鎌倉市教育委員会
26	材木座四丁目 579-4	山口正紀 2014『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』30 鎌倉市教育委員会

## 長勝寺遺跡 (NO. 313)

27	材木座二丁目 2162-2	大三輪龍彦 1978『長勝寺遺跡』(株)かまくら春秋社
28	材木座二丁目 2168-3	田代郁夫・土屋浩美 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 鎌倉市教育委員会

## 能蔵寺 (NO.314)』

29	材木座二丁目 303	大三輪龍彦 1993『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』2 鎌倉市教育委員会
30	材木座二丁目 287-1	大河内勉・伊丹まどか 2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会
31	材木座二丁目 274-4	馬淵和雄 1995『能蔵寺跡』鎌倉市教育委員会
32	材木座二丁目 294-3	原廣志・福田誠 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
33	材木座二丁目 293-2	齋木秀雄 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会

## 光明寺旧境内遺跡 (NO.316)

34	材木座六丁目 854	齋木秀雄 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
35	材木座六丁目 846-1	齋木秀雄 1980『光明寺裏遺跡』東京都北区教育委員会
36	材木座六丁目 846-1	齋木秀雄 1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺』大本山光明寺
37	材木座六丁目 855-21	福田誠 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会

## 新善光寺跡内やぐら (NO.335)

38	材木座四丁目 542-16	田代郁夫・原廣志・福田誠 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書 —中世墓の発掘調査—』新善光寺跡内やぐら発掘調査団
----	---------------	--

## 名越方谷遺跡 (NO. 231)

39	大町四丁目 1901-16	宮田真 2003『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・(有) 博通
40	大町四丁目 1888	原廣志・山口正紀 2012『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 鎌倉市教育委員会
41	大町四丁目 2395-2	宮田真・滝沢晶子 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会

## 米町遺跡 (NO. 245)

42	大町二丁目 2404	福田誠 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
43	大町二丁目 2235-3	馬淵和雄 2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』24 鎌倉市教育委員会

## 感応寺跡 (NO. 225)

44	材木座四丁目 594	汐見一夫 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21 鎌倉市教育委員会
----	------------	---------------------------------------



図2 中世鎌倉地形図（上本 2000 図7に加除筆）

「材木座」の地名は中世に材木を販売した座に由来するとみていい。ただし、「座」自体が何時一帯の地名になったかは不明であるが、鎌倉末期と思われる史料で金沢貞顕の被官と推定される宗清なる人物の、前浜における資材調達を語るもので年不詳二月一日の極楽寺に宛てた書状の中に「一日さいもくさに五六候ハ候しあいた」とある。貞治六年（1367）九月五日と十日の足利義詮御教科書案では「鎌倉材木座」が佐々木高氏（道誉）に返付されている。南北朝の動乱を経てこの頃には佐々木氏の所有するところになっていたらしい。17世紀半ばの「正保国絵図」には「材木座村」の記述があり、その頃には確立していたようである。

また材木座海岸の一帯（滑川河口東側）は吾妻鏡等によると「飯島」「西浜」「和賀江」と呼ばれていたことが窺える。その内の「飯島」「和賀江」の地名は現存する。『吾妻鏡』による「飯島」の初見は寿永元年（1182）十一月十日条に見られる。「西浜」「和賀江」は承元三年（1209）五月二十八日条に見られる。「和賀江」はこの頃まだ築島されていないが、「江」が付くことからそれ以前から港湾として機能していた様相を示す（伊藤 1994）。和賀江周辺、いわゆる鎌倉海岸の東側をなぜ「西浜」と呼んでいたかについては「和賀江」を起点とした「西」の意味があるとの指摘がある（馬淵 2009）。貞応二年（1223）九月五日条の「和賀江辺有火」の記事では鎌倉中期に和賀江付近には火事が起きるほどの家が立ち並んでいたととれ、そこが「飯島」であったろう。貞永元年（1232）七月十二日の往阿弥陀仏による築島進言時に「和賀江島」は初見する。以来「島」「津」が付くようになる。和賀江島の築島は先の貞永元年七月から工事が開始され、26日後の八月九日には完成している。弁ヶ谷からは豆腐川という名の独立



図3 明治15年頃の調査地点周辺（『迅速測図』加除筆）

河川が海に流れ込む。「東風川」の転訛ともいわれるこの川はかつて幅が三間（5.4m）以上あり、飯島から船が入ってきたと伝えられている。豆腐川に橋を架けるためボーリング調査をした際には五間（9m）も下へ入っても底にあたらなかったとも言う。またこの川に沿って小道が海岸通りから通じており、これを「高御倉小路」と呼んだ可能性がある。

「高御倉」、あるいはそれに相当するとみられる名称はしばしば史料に現れる。「御」がつくので幕府もしくは將軍家に関わる高床式の倉庫に由来する可能性がある。『吾妻鏡』では建長五年（1253）十二月二十二日条に「浜高御倉」が見られ、寛元三年（1245）五月二十二日条には「浜御倉」が見られる。いずれも場所の確定は難しいが「浜」であること、どうやら名越の内であることが窺える史料である。承久元年（1219）九月二十二日条では、「上は永福寺惣門に延び、下は浜庫倉の前に至り、東は名越山の際に及び、西は若宮大路を限る。鎌倉中焼亡す。」との記事がある。北限の永福寺に対する南限の表示は浜であり、弁ヶ谷至近を充ててもいいのではないか。この「浜御倉」は13世紀中葉から顕著に浜に現れる竪穴建物とは時代が合わない。よって、「高御倉」に相当すると考えるべきだろう。また、過去の調査事例から弁ヶ谷以南から竪穴建物の検出がないのも特徴的である。周辺は地点6、44を省き柱穴、土坑、掘立柱建物の検出事例ばかりである。時代は下るが史料の紹介に戻ると、明德四年（1393）

十二月六日の最宝寺文書、京極高詮安堵状では「鎌倉最宝寺高御蔵前敷地内太子堂立事」とみられ、享徳元年（1452）十一月九日の最宝寺文書、京極持清書下では「鎌倉辨谷高御蔵最宝寺寺領事」が見られる。「最宝寺」は弁ヶ谷の入り口近くの東側にあったとされる寺である。「浜庫倉」「浜御倉」「浜高御倉」「高御蔵」は同一のもので、また同一の地点を示している可能性が高い。すなわち浜の一角の弁ヶ谷の入り口に幕府の管理する高床式倉庫の建ち並ぶ場所があった。そこは最宝寺に極めて近い場所である。

弁ヶ谷の山裾にはやぐらが多い。これは今や全て廃寺となったり、移転したりして現存しないが、この谷戸に寺院が多く存在し独自の宗教空間が形成されていたことを物語る。このことは鎌倉時代の宗教・政治動静のなかで、水上交通の拠点としての弁ヶ谷が果たした役割の大きさを示している。それについては高橋慎一郎が詳細に論じている（高橋 1995）。また、古代の水上交通の拠点と指摘される地点 17 の掘立柱建物群との関係は注視すべきである。

以下弁ヶ谷あったとされる寺院について若干触れたい。新善光寺は『鎌倉廃寺辞典』では弁ヶ谷の谷奥北側の枝谷にあるとされているが、正確な場所は不明である。現在葉山町山口にある不捨山撰取院新善光寺は、この新善光寺が移ったとされる。

弁ヶ谷は法然の弟子証空を派祖とする浄土宗西山派の関東における拠点であった。法然滅後教団は四分五裂し、その多くが度重なる弾圧によって潰滅的状态となる。その中で唯一西山派は六波羅を介し北条氏と結び、関東に進んで、弁ヶ谷に新善光寺を開いたと高橋は指摘する（高橋 1995）。『鎌倉年代記裏書』仁治三年（1242）六月十五日条の記事で、鎌倉に於ける西山派の確たる地位を示す史料がある。北条泰時の死去の際に新善光寺の智導という僧が念仏を勧めている。鎌倉の寺院の中でも新善光寺は相当高位を占めていたことが分かる。智導は、西山派の分流である東山派の派祖証入の弟子で、証空の孫弟子にあたる。寺の開創時期は明確ではないが念仏と対立していた日蓮の「名越の一門の善覚（光）寺、長楽寺、大仏殿立させ給いてその一門のならせ給事をみよ」（「兵衛志殿御返事」『昭和定本日蓮上人遺文』）に見られるように名越北条氏の力によるところが大きく、また、六波羅以来の北条氏との関係が背後にあったとの見方もあり、北条一門により建立したと考えられる。『吾妻鏡』には頼朝以来北条氏が度々信濃善光寺に参詣した記事が載る。一門あげての善光寺信仰、すなわち阿弥陀信仰を行い、この熱心な信仰は大仏建立という形でも現れている。幕府及び北条氏と浄土宗西山派（特に東山流）は京都六波羅という空間での交流を基とし、共に持つ善光寺信仰を媒介として鎌倉の新善光寺という寺院で合流したといえると高橋は指摘している（高橋 1996）。新善光寺は鎌倉時代後期以降大いに盛んになる。鎌倉時代最末期の史料として元徳元年（1329）に比定される年末詳十二月三日付嵩頭（金沢貞頭）書状に、翌春に発遣される関東大仏造営料船の大勧進を新善光寺長老が努めたことが見られる。新善光寺の鎌倉の政治社会における地位の高さを示す史料であろう。

地点 38 の新善光寺やぐらでは火葬骨の入った白磁四耳壺を中央に埋めた長方形区画が発見されている（原・田代 1988）。この区画は天井部を失ったやぐらであろう。やぐらとしては最も大きい部類に入る。区画の左右には小規模なやぐらを伴う。田代郁夫はやぐらの配置が祖師とその弟子・寺の世代という僧侶の位置関係を現すという（田代 1999）。であれば、この区画に葬られた人物こそこの地に存在したと想定される寺院の長老級であり相当重要な地位にあった人物であろう。遺構の年代は 14 世紀前半頃があてられる。

最宝寺は先の史料で触れたように弁ヶ谷の東側の枝谷にあったとされる。現在は横須賀市野比に所在する。不明な点は多い。『新編鎌倉志』に「五明山高御蔵と号す、浄土真宗、京西六条本願寺末」とある。同書は寺伝を引いて、「源頼朝始め鎌倉扇ヶ谷に創建し、僧明光を延いて開山とす、建久六年弁ヶ谷

鎌倉材木座村属に寺を移し、薬師を本尊となす、此頃は天台宗なり」という。『大谷遺跡録』<sup>ゆいせき</sup>によって、明光は正和五年（1316）31歳であり、また真宗の僧であるから寺伝とは大いに異なれり、とする。建久六年は1195年。明光（了円）は親鸞の弟子光信（源海）の法流に属する僧で、鎌倉時代末期に鎌倉の甘縄道場で指導者として活動していたというから、寺伝とは確かに合わない。しかし鎌倉時代末期に弁ヶ谷に親鸞流の念仏系寺院として最宝寺が存在したことは間違いない。

弁ヶ谷から横須賀市野比に移転した時期は明確ではない。先に触れた享徳元年（1393）十一月九日付京極持清書下から、この頃までは弁ヶ谷に最宝寺があったことは確かである。『鎌倉廃寺辞典』によれば、寺伝にその前正慶二年（1333）の兵火で扇ヶ谷にも最宝寺が移ったとある。大永元年（1521）、扇ヶ谷の最宝寺は焼亡したという。『廃寺辞典』は大永元年兵火にかかり、時の住僧九世明心が野比に遁れ来た。という。

崇寿寺は山号金剛（『新編相模国風土記稿』所引の梵鐘銘）、元享元年（1321）北条高時開創、開山は南山土雲。寺の名は崇鑑北条高時に因んだものだろう。寺格の高さがうかがえる。『廃寺辞典』によると、その位置は谷奥近くの東側、最宝寺跡比定地の北側の谷になっているが根拠はない。『風土記稿』所引の鐘銘によると、鐘は嘉暦二年（1327）高時（崇鑑）寄進、鑄工は物部道光（大工沙弥道光）とある。物部姓鑄物師は、鎌倉大仏造立のため鎌倉時代中期に畿内河内から関東に招請され、大仏完成後は主に幕府系の臨濟宗寺院に梵鐘を寄せた（馬淵1998）。道光は鎌倉時代末期に鎌倉近辺でいくつかの作品を残している。元享三年（1323）の北条貞時十三年忌供養の際、崇寿寺の僧衆13人が参加していると『鎌倉市史』にある。その頃かなりの寺勢であったことがわかる。『鎌倉廃寺辞典』によれば応永三十一年（1424）までは存在していたようである。

この谷のやぐらもすでに7基が調査されている。最大のもので幅6.6mの規模の大型やぐらもあり、また、14世紀前半の常滑の甕に人骨が改葬されていた。

最後に北条時政の名越亭、別名「浜の御所」について触れる。『吾妻鏡』建久三年（1192）七月十八日の記事に「名越御所」には「浜の御所と号す」と割注が付き、また正嘉二年（1258）五月五日条の「尾張前司名越山荘」には「新善光寺辺」の割注が付く。「尾張前司」とは時政の曾孫名越時章である。現在名越亭跡とされている釈迦堂隧道東側山中の平場（名越大谷戸最奥部山腹に位置する）に根拠はないこと、また浜地より直線距離で1km以上あること、から考えて史料に見える「名越御所」「名越山荘」は考えにくい。さらに言うならば、名越山中に名越亭があったとして、北条得宗家と対立関係にあった時章が時政邸を受け継ぐとは考えにくく、名越亭とは別のものであった可能性は高い。とすれば名越の内の浜と呼ばれる範囲内のしかも新善光寺付近に北条時章の「名越御所」「名越山荘」と呼ばれる屋敷があったと考えられる。



## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経過

調査地点は鎌倉市の南東部に位置し、東側は逗子市小坪との境の山裾に開析された谷戸、「弁ヶ谷」の開口部中央付近に位置する。鎌倉市材木座6丁目640番2・3である。今回の発掘調査は個人専用住宅建設計画があったため、工事の実施により掘削深度が260cmであり埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのあることが予想された。このため鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地地表下30cmで表土が終わり、遺物包含層となった。それ以下は南北朝時代から鎌倉時代の3面以上の遺構面とそれに伴う遺物が出土し、具体的に埋蔵文化財が存在することが判明した。これにより、当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業主と協議を行ったところ当初の計画に基づき建築工事を行いたいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成21年6月15日から約2か月の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は6月15日に重機により試掘データに基づき遺構面まで表土掘削を行い、翌16日に機材搬入後、遺構の確認・検出を行った。

調査面積は49.5㎡である。調査の結果、建物址、井戸、池、常滑の据甕、土坑、柱穴などにより構成された遺構群が検出された。出土遺物はかわらけを始め、国産陶器、貿易陶磁器、石製品、銭、木製品など12世紀から14世紀後半の所産である。

調査は平成21年8月28日までの間に必要な記録作業を行い、同時に機材を撤去して現地調査を終了した。調査の経過については以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

#### 日誌抄

- 6月15日(月) 調査区を設定して現地地表下30cmまで重機により表土掘削を実施。
- 6月16日(火) 機材の搬入。環境整備。
- 6月17日(水) 第Ⅰ面の遺構確認作業を開始。遺構掘削と共に遺構図面作成開始。
- 6月18日(木) 測量用の海拔高を鎌倉市三級基準点から敷地内に移動。
- 7月14日(火) 第Ⅰ面全景写真撮影。
- 7月16日(木) 第Ⅰb面まで掘り下げ。
- 7月22日(水) 常滑据甕写真撮影。遺構確認作業及び掘削、常滑据甕、第Ⅰb面図面作成開始。
- 7月31日(金) 第Ⅰb面全景写真撮影。
- 8月3日(月) 第Ⅱ面検出。
- 8月4日(火) 第Ⅱ面全景写真撮影。図面作成。
- 8月5日(水) 第Ⅲ面まで掘り下げ。
- 8月6日(木) 第Ⅲ面検出作業
- 8月7日(金) 第Ⅲ面遺構掘削及び図面作成。
- 8月14日(金) 第Ⅲ面全景写真撮影。第Ⅲb面まで掘削。
- 8月17日(月) 第Ⅲb面遺構掘削、写真撮影、図面作成。
- 8月18日(火) 第Ⅳ面まで掘り下げ、遺構検出及び掘削。
- 8月26日(水) 第Ⅳ面全景写真、図面作成。

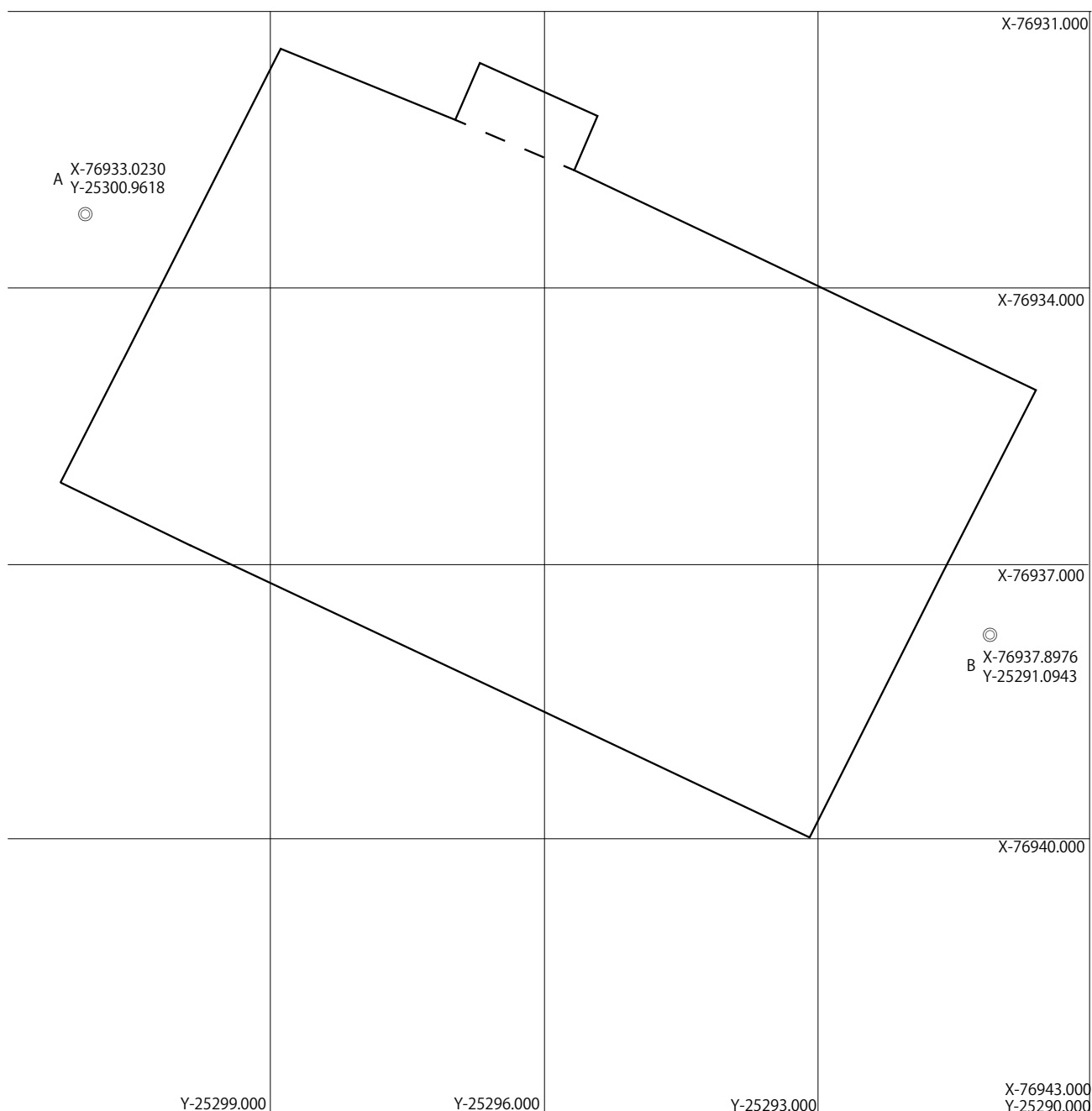


図4 調査区設定図

8月27日（木）北・南壁土層堆積状況写真撮影、図面作成。

8月28日（金）機材の撤収。鎌倉市4級基準点を基に座標移動。

## 2. 測量軸の設定

調査時における測量は調査区に沿った任意の4m方眼軸を設けたため国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量開始に先行して調査区の東西にそれぞれA杭・B杭を調査測量基準点として設定した（図4）。鎌倉市4級基準点C111・C112を用いて、調査測量基準点に国土座標上の数値を移動した。

国土座標数値は、現地座標数値において日本測地系（座標系AREA9）を用いて測量を行った。整理

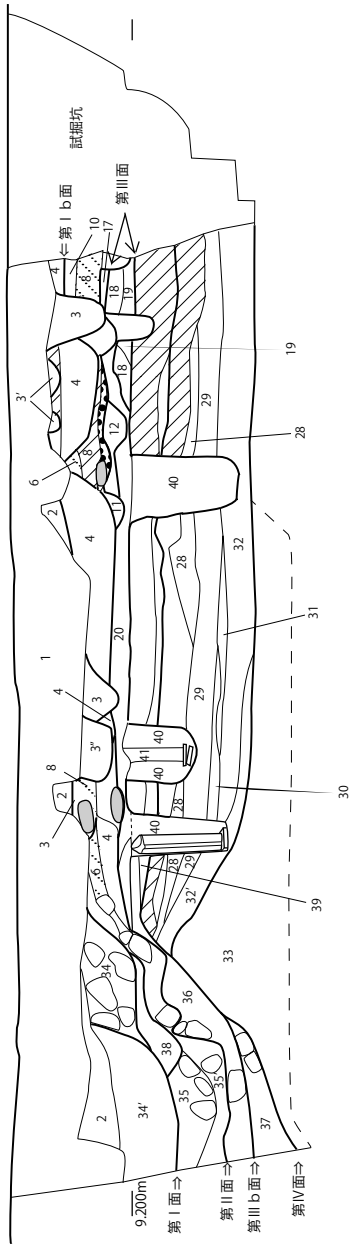
作業段階において世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図4に示した。標高値は、調査地点より北へ100mほどの位置に設置してある鎌倉市3級基準点C-003=標高11.652mを基に移設した。

### 3. 堆積土層

調査区の南壁・北壁の土層観察を行い、図5に示した。調査区は現地表面の高さは10.300mを測る。概ね平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査を基に、現地表下30cmまで堆積していた近現代の客土を重機により掘削し、その後人力により遺構検出面まで掘り下げ遺構の確認を実施した。土層堆積は表土以下の第6層の粗い泥岩層で構成される第I面から現地表下200cmの間に7枚の生活面を確認した。

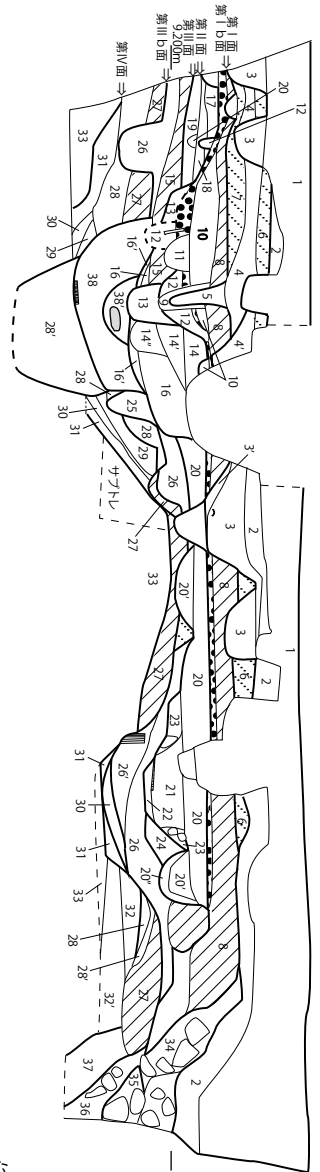
表土の堆積土を除去すると粗い泥岩により版築された第6層が検出されこれを第I面とした。海拔は概ね9.700mを測る。遺構は建物2軒と常滑の据甕、東側落ち込みの護岸、土坑、柱穴等である。第1面を構成する地形層は10～20cmの厚みを持ち、これを掘り下げると緻密に泥岩を版築した地形層、第8層が検出されこれを第I b面とした。海拔は9.500mである。第I b面は調査区東端で1面と共通する。また全体に炭化層、焼土の広がりも見せ、その様子は調査区西方で顕著である。長方形土坑、土坑、柱穴が検出された。第I b面の炭化層、焼土を取り除き、それを第II面とし、海拔9.400mで礎石建物を検出した。第II面から細かい泥岩を多量に含む暗褐色粘質土を10～20cm掘り下げると海拔9.300mで泥岩による暗黄褐色粘質土の地形層が検出され、これを第III面とした。第III面では第II面の礎石建物の礎石の下から柱を持つ柱穴が検出され、その並びから掘立柱建物となった。第III面から第IV面まで掘り下げる間に脆弱な面があり、これを第III b面とした。海拔は9.25mを測り、部分的に泥岩による粗い地形がなされていたようである。井戸の検出がある。第IV面は暗褐色粘質土による中世基盤層であり、海拔は9.200mを測る。池と溝が検出され、その間を地中に埋設された木組の暗渠によりつなぐ。暗渠近くの池の縁で羽子板、縄などが出土した。また、第I面から第IV面までの間に調査区の東では落ち込みが認められ、護岸や修復の痕跡が土層堆積から見られる。豆腐川の西壁ではないかと思われる。








調査区南壁土層図

1. 表土
2. 灰褐色砂質土 耕土
3. 暗灰褐色粘質土 半拳大の泥岩を含む
- 3' 暗灰褐色粘質土 3に比べ泥岩が少ない。
- 3'' 暗茶褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土 泥岩が細かい。
- 4' 暗灰褐色粘質土 やや暗い。
5. 黄褐色粘質土 拳大の泥岩を含む。(柱根部)
6. 暗黄褐色粘質土 拳大の泥岩の粗い地形層
7. 暗黄褐色粘質土 拳大の泥岩の粗い地形層
8. 明黄褐色粘質土 泥岩を版築した地形層
9. 暗青黒色粘質土 柱穴の掘り方
10. 暗褐色粘質土 数センチ大の泥岩、炭化物、遺物片を含む
11. 暗黄褐色粘質土
12. 暗黒褐色弱粘質土 数センチ大の泥岩を含む
13. 暗青灰色粘質土 炭化物と数センチ大の泥岩含む
14. 暗褐色弱粘質土 貝殻を含む。
- 14' 暗褐色弱粘質土 14とほぼ同土だが粘性が弱い
- 14'' 暗褐色弱粘質土 砂質、締り弱い
15. 明黄褐色泥岩層
16. 暗褐色砂質土 炭化物を含む
- 16' 暗褐色砂質土 粘質土塊を含む
17. 黄褐色強粘質土
18. 黒褐色強粘質土
19. 暗黄褐色強粘質土
20. 暗褐色粘質土 細かい泥岩粒子を多量に含む
- 20' 暗褐色粘質土 細かい泥岩粒子を20より多量に含む
- 20'' 暗褐色粘質土
21. 黄褐色粘質土 溝覆土
22. 暗黄褐色弱粘質土 溝掘り方
23. 暗黄褐色弱粘質土 拳大の泥岩含む 溝枳裏込め
24. 黄灰褐色強粘質土 溝覆土
25. 暗黒褐色土 かわらけ片含む
26. 暗黄褐色粘質土
- 26' 暗灰褐色粘質土 拳大の泥岩と木製品含む
27. 明黄褐色泥岩版築層
28. 黄褐色泥岩版築層
- 28' 黄褐色泥岩版築層 やや泥岩が少ない
29. 黒褐色粘質土
30. 黒褐色粘質土 細かい泥岩粒子含む
31. 黒褐色粘質土 木製品含む
32. 黒褐色粘質土
- 32' 暗灰黒色粘質土 やわらかい粘土含む
33. 黒褐色粘質土 数センチ大の泥岩を含む 中世期基盤層
34. 暗灰色粘質土 人頭大の泥岩を含む
35. 灰色粘質土 人頭大の泥岩を含む
- 35' 灰色粘質土 粘性が非常に強い
36. 灰黒色粘質土 半人頭大の泥岩含む
37. 暗灰黒色粘質土 数センチ大の泥岩を多量に含む
38. 暗褐色砂質土 貝殻、炭化物、遺物片、木製品を多量に含む
- 38' 暗黒褐色砂質土 多量の炭化物を含む 礎石をもった柱穴
39. 黒色粘質土 半拳大の泥岩を含む
40. 暗褐色粘質土 柱穴の裏込め
41. 暗黒褐色粘質土 柱穴 柱根部



調査区北壁土層図

-  : 粗い泥岩層
-  : 緻密な泥岩版築層
-  : 炭化層

0 2m

図5 堆積土層図

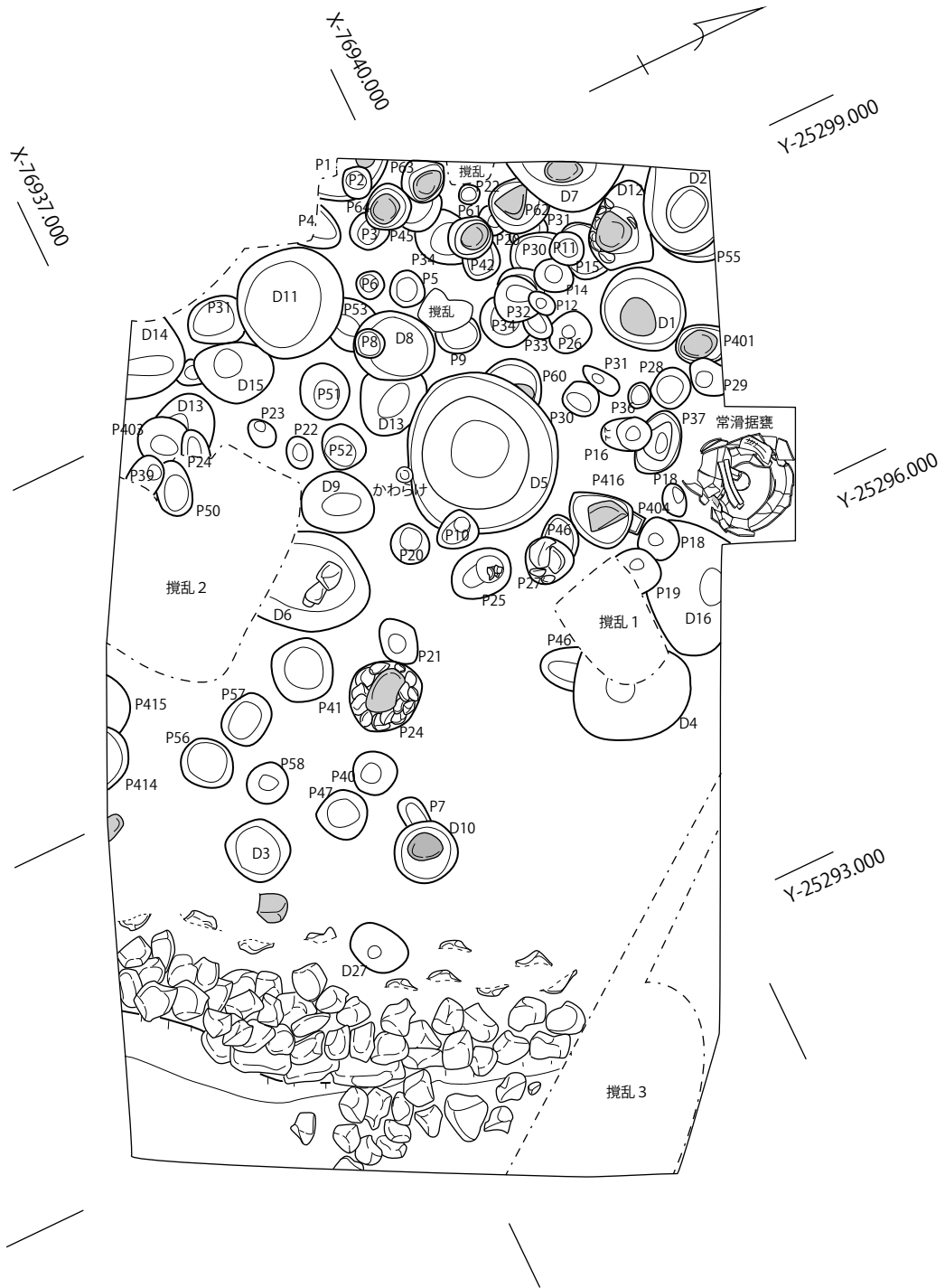


図6 I面全体図

## 第三章 検出された遺構と出土遺物

### 1. 第 I 面の遺構と出土遺物

第 I 面は粗い泥岩による地形をなされた層で海拔は概ね 9.7m を測る。検出された遺構は建物 2 軒、常滑の据甕 1 基、礎石列 1 列、落ち込み 1 箇所、土坑 16 基、柱穴 67 個である。出土した遺物は須恵器、土師器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、白かわらけ、東海系かわらけ、火鉢、瓦器質の燭台、瓦器、土器質の蒸籠、土錘、常滑産の甕と鉢、瀬戸産の深皿、小皿、碗、壺、渥美産の甕、青磁碗、白磁皿、褐釉壺、銭、釘等がある。

#### 常滑据甕（図 7）

調査区の北壁にかかり検出したため一部調査区を拡張し調査をした。第 I 面の遺構検出時に調査区北壁にかかる状況で幅 40cm 程の泥岩塊が 2 個出土した。それを取り除くと常滑の大甕の一部が出土し、据甕の可能性が考えられ、これにより調査区北側を幅 1m20cm、奥行き 70cm 程拡張し掘り下げると、やはり一個体の甕が検出された。甕は 50cm 位の泥岩塊 3 個により肩部辺りから潰されていた。甕が用途を失い廃棄される際に 5 つの大型泥岩塊により潰されたとみられる。甕は幅 80cm の円形の掘り方に据えられたようであるが、掘り方南壁に石の突起があり、これにより甕は割られている。この石は甕を据えた後に地殻変動等で突起したのであろうか。当初には障害ではなかったのだろうか。

甕の底部の径は 21.4cm と小さく高さ 65cm のところで肩は張りその径は 90cm 程に及ぶ。2cm 程の傾きがあるが高さは 92cm を測り、口径は 51.4cm である。また縁帯幅は 4.5cm であり、体部と肩部には格子目の押印が一周する。内面、輪積み成形の跡が顕著であり指頭痕はそれに沿って残る。外面底部はヘラ状工具によるナデ上げ、口縁から肩部にかけて茶褐色の自然降灰がかかる。器表は褐色である。甕の内面には付着物は見られない。生産地編年の第 2 段階 7 型式にあたる。

#### 建物 1（図 9）

調査区西半分で検出されている。比較的しっかりした土坑から構成される建物で、中央に大きな土坑を持ち四方に土坑・柱穴が配置される。この構造は他の建築例からみて小規模な「塔」の基礎との見方も出来る。土坑はいずれも根固めの泥岩が密に入る様相を示した。土坑 5 を中心に土坑 1 と土坑 11 は芯々距離で 2m の距離をもち、土坑と柱穴 41 は 2.5m の距離を持つ。建物の主軸方位は N - 20° - E である。

土坑 1 は北西に位置し、平面形は円形を呈する。規模は 86cm × 71cm で断面は箱型を呈し埋土は建築用材の栗石と中央に凝灰質砂岩の礎石を持つ。遺構の底面標高は 9.600m である。

土坑 4 は北東に位置し、西半部を攪乱に切られる。平面形は不整円形で、規模は 100.4cm × (50) cm で断面は U 字型を呈し、埋土は底部に栗石による根固め土が堆積する。底面標高は 9.330m である。出土遺物の 1 は小型のロクロ成形かわらけで底部には板状圧痕があり、内底面にナデが入る。体部は緩やかに内湾する。胎土は泥岩粒を含むやや粗土である。2 も小型のロクロ成形かわらけで口径、底径比があまりない。底部に板状圧痕があり、内底面には弱いナデが入る。胎土は砂を多く含み泥岩粒も見られるやや粗土である。3 は砥石の中砥である。伊予産で砥面は 2 面ある。4 は南宋銭の「紹熙元寶」である。初鑄年は 1190 年、真書。裏面の文字は腐食していて判読できない。「元」もしくは「五」か。

柱穴 41 は南西に位置する。平面形はほぼ円形で規模は 58cm × 58cm である。断面形は箱型で底面標

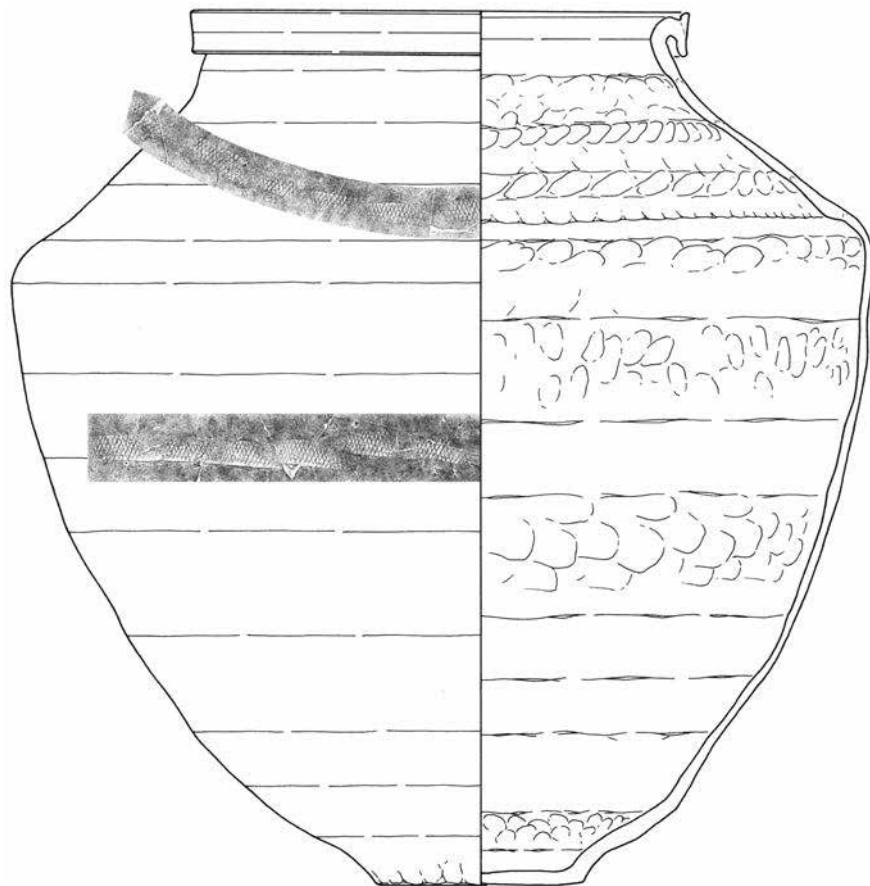
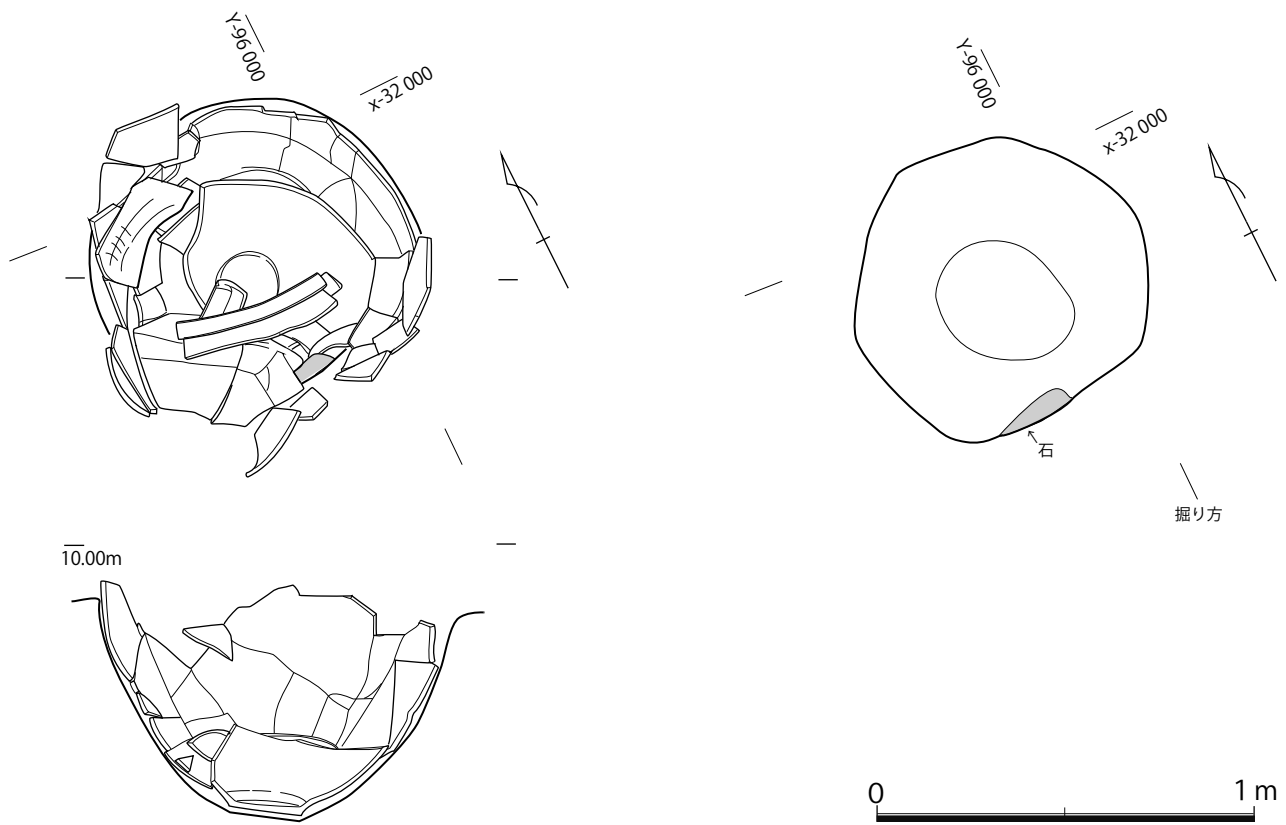


図7 第I面常滑据甕

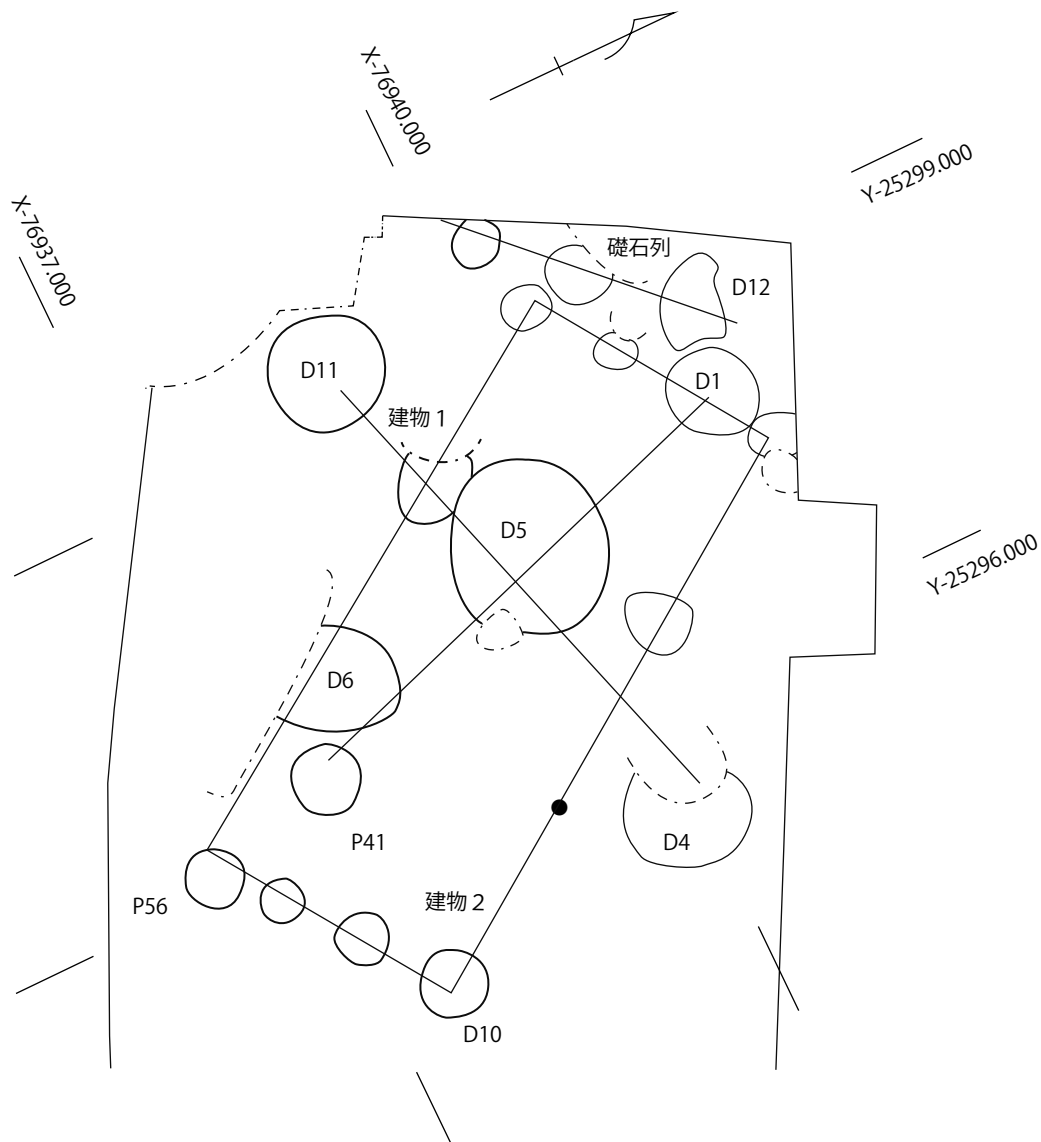


図8 第1面建物概念図

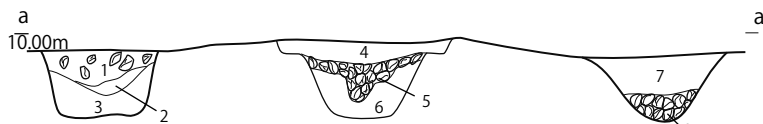
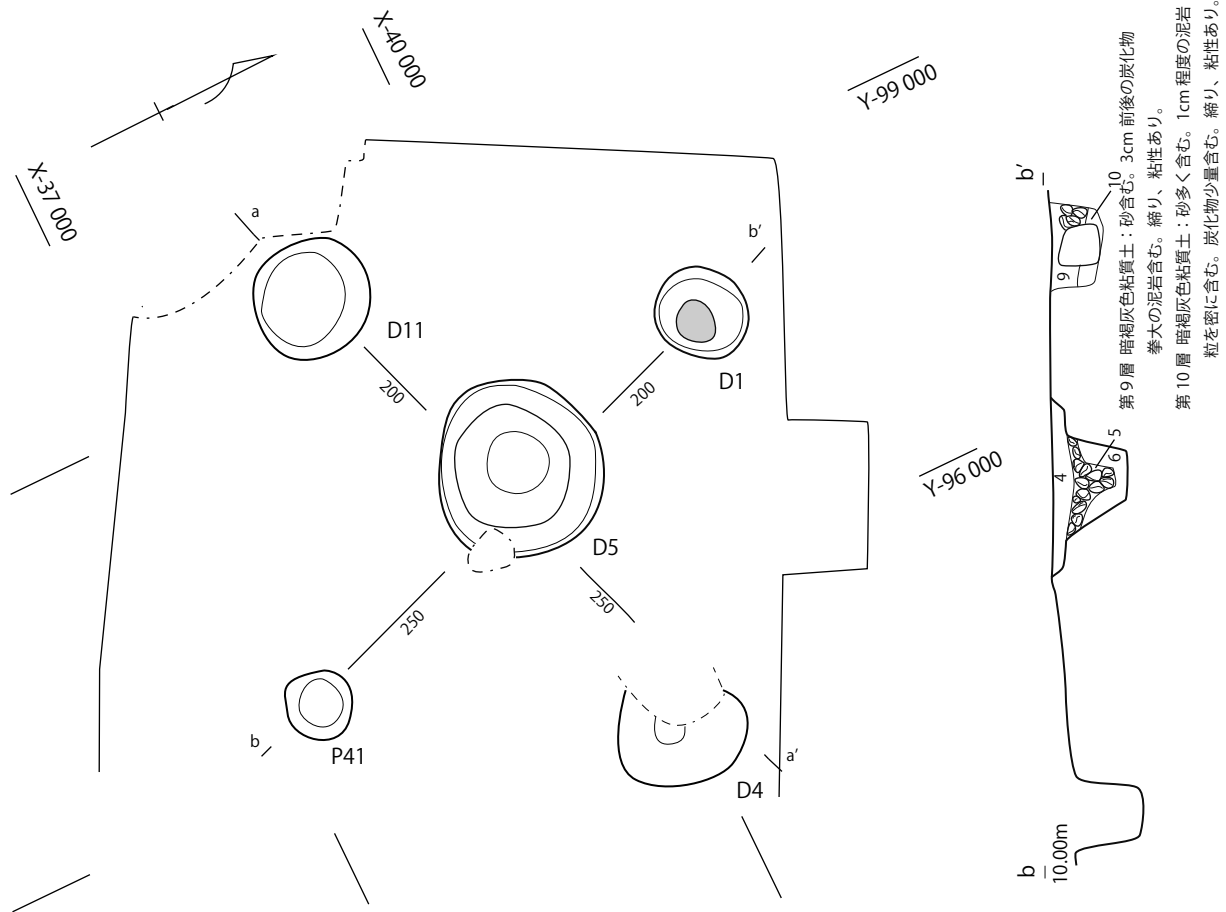
高は9.605mである。6の東海系のかわらけ底部が出土している。胎土は灰白色で白色粒、小石粒を含む。

土坑11は北西に位置する。平面形は円形で規模は93cm × 93cmである。断面形は箱型で埋土は上層に栗石が入る。底面標高は9.315mである。出土遺物の6はロクロ成形かわらけの大皿で、口縁部に油煙煤が付着する灯明皿として使用したものか。体部は内湾し、胎土はやや粗い。7は瀬戸・美濃製品の端反皿である。灰緑色の灰釉がかかる。口唇部は外反する。大窯期の第1段階前半に相当しようか。

土坑5は中央に位置しもっとも大きい土坑である。平面形は円形で断面は中段を持つ逆台形である。規模は138cm × 138cmで、埋土は中層に泥岩による栗石が密に入る。底面標高は9.335mである。出土遺物は5の鉄釘である。

### 建物2 (図10)

調査区全体に展開し検出された。一部礎石を持った柱穴により構成される。規模は北西から南東に3間(柱間距離北西から1.75m - 1.75m - 1.65m) × 北東から南西に1間(柱間距離2.23m)を確認したが全容は調査区の外に展開するので掴めない。しかし、北東、南西には延びない様相を示している。柱穴14はそれなりの深さを持ち柱穴401と柱穴61との間に並ぶが建物に伴うものかは若干疑問が残る。



	D1	D4	D5	D11	P57
長径	86	10.4	138	93	38
短径	71	(50.5)	138	93	35
底海拔	9.600	9.330	9.335	9.315	9.580

単位 cm/海拔m

第1層 暗灰褐色粘質土：3mm～拳大の泥岩やや入る。炭化物、かわらけ片少量含む。  
 第2層 暗灰褐色粘質土：5cm大の泥岩、炭化物、かわらけ片少量含む。  
 第3層 暗灰褐色粘質土：5cm大の泥岩入る。炭化物非常に多い。締りなし、粘性あり。

第4層 暗灰色土：砂多く含む。拳大の泥岩をやや含む。粘性、しまりあり。  
 第5層 暗褐色粘質土：拳大の泥岩を密に含む。粘性、締りあり。(ネガタメ土)  
 第6層 暗褐色粘質土：炭化物、3cm大の泥岩粒やや多く含む。粘性、締りあり。

第7層 暗褐色粘質土：炭化物、6cm大の泥岩粒含有。粘性、締りあり。  
 第8層 暗褐色粘質土：少量の炭化物と拳大の泥岩が密に入る。粘性、締りあり。(ネガタメ土)

1~4：土坑4 土坑5：5 土坑11：6~7 柱穴41：8

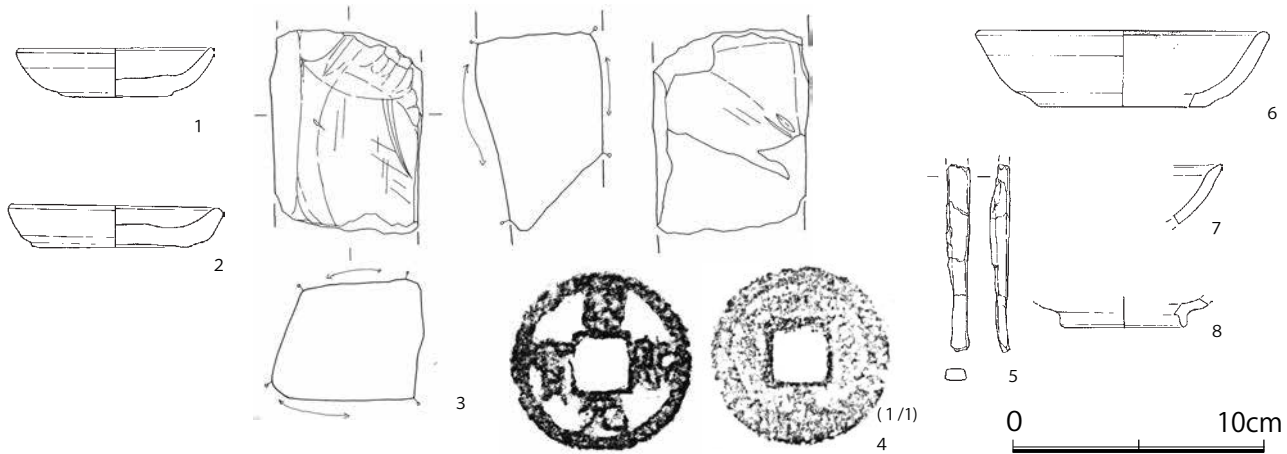


図9 第1面建物1

南東限の柱穴は確認されただけで5口が並びその柱間距離は北東 0.75 m - 0.70 m - 0.60 m - 1.0 m と一定していない。主軸方位は N - 37.5° - E である。

柱穴 401 は平面形、楕円形で安山岩の礎石を伴う。断面形は箱型で規模は (46)cm × 36cm を測り、底面標高は 9.710 m である。

柱穴 416 は平面形、楕円形で、安山岩の礎石を伴い、断面形は箱型である。規模は 60cm × 48cm を測り底面標高は 9.730 m である。

土坑 10 は平面形、円形。やはり安山岩による礎石がある。断面形は逆台形を呈し、規模は 55cm × 55cm を測る。底面標高は 9.590 m である。

柱穴 61 の平面形は円形で、断面形は U 字型を呈する。安山岩による礎石を伴う。規模は 39cm × 38 cm で底面標高は 9.615 m である。

土坑 13 は土坑 5 と土坑 8 に切られる。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。埋土は泥岩がやや入り炭化物の多い暗褐灰色粘質土である。底面標高は 9.900 m を測る。

土坑 6 は南東側を攪乱に切られる。平面形はおそらく楕円形であろう。断面形は逆台形であり、埋土は 3 層に分層された。規模は 83cm × (79) cm を測り、底面標高は 9.585 m である。

柱穴 56 は平面形円形で断面形は逆台形を呈する。埋土は泥岩粒が多めに入る明るめの暗褐灰色粘質土で規模は 44cm × (39) cm である。底面標高は 9.600 m を測る。

柱穴 415 は柱穴 414 に切れ過半部が調査区の外にあるため全貌は明らかではないが、平面形は円形か楕円形であろう。断面形は不明。規模は (53) cm × (22) cm で確認出来た底面標高は 9.310 m である。

柱穴 58 の平面形はほぼ円形で、断面形が逆台形を呈する。埋土は泥岩粒がやや多めに入る明るめの暗褐灰色粘質土である。規模は 38cm × 35cm を測り底面標高は 9.580 m である。

柱穴 47 の平面形は不整形円で断面は U 字型を呈する。埋土は泥岩の密に入る暗褐灰色粘質土である。規模は 43cm × 41cm、底面標高を 9.610 m 測る。出土遺物 1 は北宋銭の「聖宋元寶」篆書。初鑄年代は 1101 年である。

柱穴 14 は柱穴 11 に切られる。平面形は楕円形で断面形は U 字型である。規模は 35cm × 32cm であり、底面標高は 9.785 m である。

## 礎石列 (図 11)

調査区の北西隅で検出した。いずれも安山岩の礎石を伴う柱穴 3 個が並ぶがそれ以上は調査区内では展開せず建物として捉えられなかった。しかし、調査区外に展開する建物の一部であろう。主軸方位は N - 45° - W であり、柱間距離は北東の柱穴 12 から 100cm - 75cm である

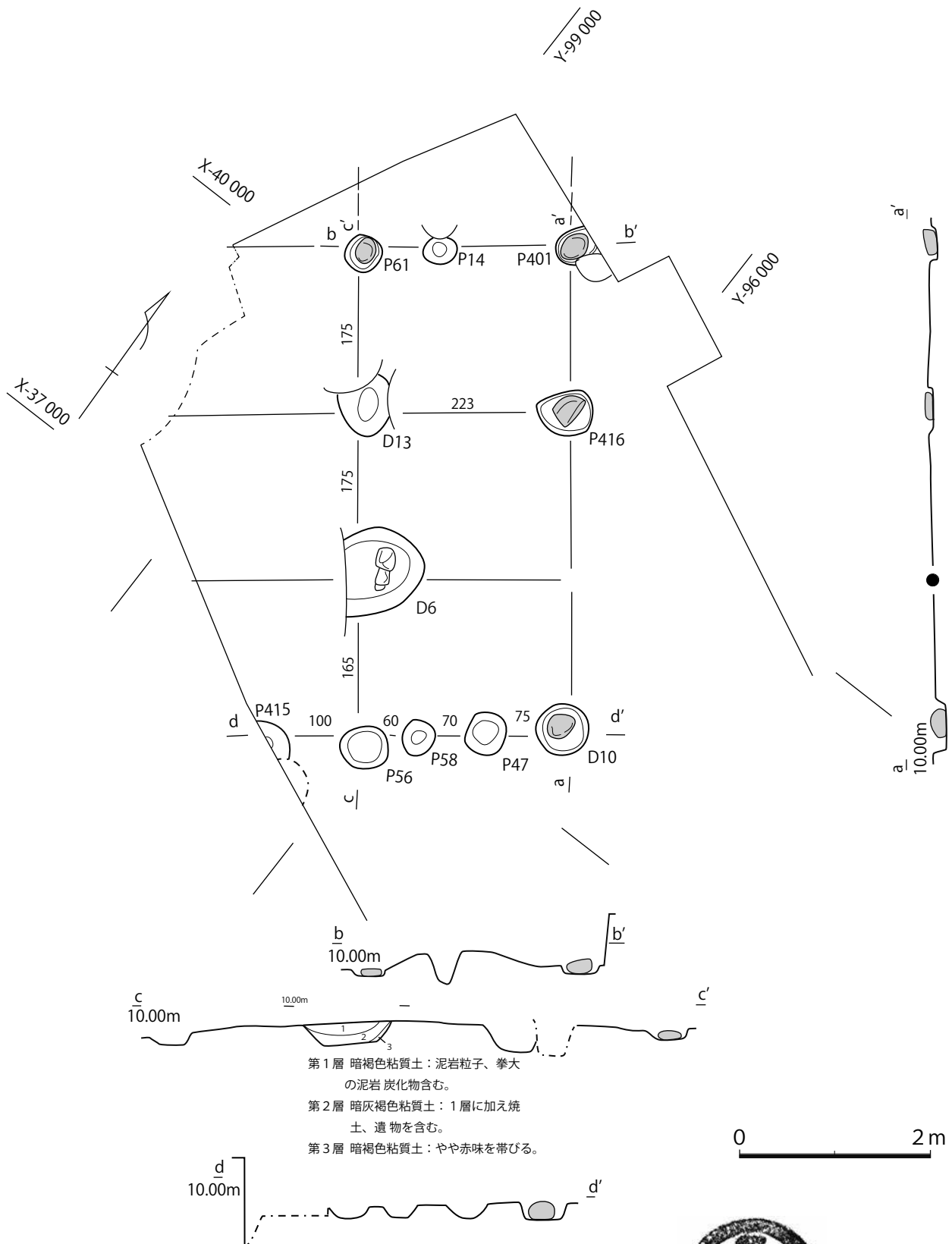
土坑 12 は北側を土坑 2 に切られる。礎石の周りには泥岩の栗石がやや密に入る。平面形は不整形で、断面は箱型を呈する。規模は 80cm × 64cm を測り、底面標高は 9.770 m である。

柱穴 62 は北側を土坑 7 に切られる。平面形はほぼ円形で、断面形は浅い逆台形である。規模は 55cm × 48cm を測り、底面標高は 9.700 m である。

柱穴 63 は調査区西壁に若干引っかかるが平面形は概ね円形と見られる。断面形は逆台形を呈する。埋土は炭化物の多く入る暗褐灰色粘質土である。規模は 41cm × 36cm で、底面標高は 9.635 m を測る。

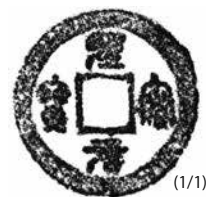
## 落ち込み 1 (図 12)

調査区の東端は大きく落ち、大小の泥岩を重ね護岸されている。調査地点の東側には豆腐川が流れる。



	D6	D10	D13	P14	P47	P56	P58	P61	P401	P415	P416
長径	83	55	60	35	43	44	38	39	(46)	(53)	60
短径	79	55	(48)	32	41	(39)	35	38	36	(22)	48
底海拔	9.585	9.590	9.900	9.785	9.610	9.600	9.580	9.6	9.710	9.310	9.730

単位 / cm: 以外海拔m



柱穴 47

(1/1)

図 10 第 I 面建物 2



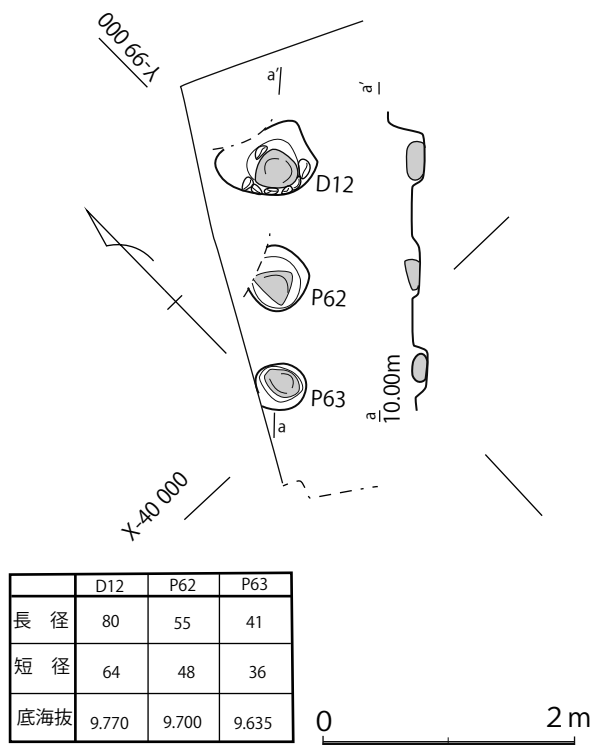


図 11 第 I 面礎石列

川の護岸と見ていいだろう。泥岩は概ね人頭大であるが、落ち込みの中段に幅 50～70cmの大型の泥岩を 3 個横並びに据えている。泥岩は中央で落ち込みの底部に散らばるが、泥岩で何かしらの施設を設けたと見るよりも護岸施設の崩れと見てとれる。落ち込みの北側は攪乱により破壊されているが、調査区北壁の堆積土層を見る限り落ち込みはほぼ真直ぐに北方へ延びていたようである。落ち込みの幅は最大で 1.4 m を測り、深さは 1.2 m ほど確認出来ている。

出土遺物は図 12 の 1～7 までが護岸からの出土であり、8～15 が落ち込みからである。1 は小型のロクロ成形かわらけである。口径、底径比があり、やや直線的に開く、内底部にナデがあり、外底部は板状圧痕が残る。胎土は含有物の多い粗土である。2 は大型のロクロ成形かわらけである。体部下方に稜が入り、内底部には強くナデが入る。胎土は泥岩粒を含むやや粗土である。3 は瓦質の燭

台の脚部である。表面は黒色処理されミガキが入る。胎土は灰白色で小石粒を含む。4 は備前の播鉢である。小片であるが 7 条以上の播り目が見られる。5 は備前産播鉢の底部である。5 条以上の播り目を確認できる。6 は常滑片口鉢の I 類である。第 4 段階 1 型式か。7 は瀬戸の大平鉢。三足の脚が付くであろう。底部は回転ヘラ削り、灰緑色の灰釉を刷毛塗りする。以下 8 から 15 までは落ち込みから出土した遺物である。8 はロクロ成形かわらけの小型皿。体部中段に稜を持つ。器表摩滅するが内底面はナデ、底部は板状圧痕残る。胎土は含有物の多い粗土である。9 はロクロ成形のかわらけ中型の皿である。底部から体部にかけて油煙煤が付着するが内部には付着してない。10 は鍔付火鉢 IV c 類である。鍔部上面に菊花文が押印され、外面体部に菱形文が押印される。胎土は瓦器質で器表は黒色処理されている。鍔の大きさからかなり大型の火鉢と思われる。11 は常滑片口鉢の II 類。口縁部外側に強いヨコナデが入る。第 2 段階 7 型式あたりか。12 は常滑の甕口縁である。第 3 段階 9 型式。13 は常滑鉢の体部片を使った摩耗陶片。四辺くまなく使用し摩耗している。14 は常滑甕転用摩耗陶片である。二等辺三角形を呈し、その二等辺部分が摩耗している。15 も常滑甕転用摩耗陶片であり、一辺が摩耗する。16 は瀬戸の縁釉小皿、口縁に緑色の透明釉を漬け掛けする。17 は瀬戸の天目茶碗である。釉薬を掛け分けしている。古瀬戸後期様式 I 期に比定。18 は瀬戸の播鉢で 1 条に 8 本の播り目を確認できる。大窯期である。19 は瀬戸の灰釉碗の底部片を打ち欠き円盤状にしている。底部はロクロ回転糸切り。

### 土坑 (図 13)

土坑 2 は調査区の北西隅で検出された。中段に平場を持つ。このため断面形は段を持った箱型である。主軸方位は N - 33° - E であり、規模は (81) cm × (59) cm、底面標高は 9.525 m を測る。出土遺物は 1～5 で、1 はロクロ成形のかわらけ小皿である。体部上方に稜が入る。内底面に強いナデが見られ、底部には板状圧痕が残る。胎土はやや粗土である。2 は常滑甕片押印部分、縦 3 本横 2 本に × 文である。

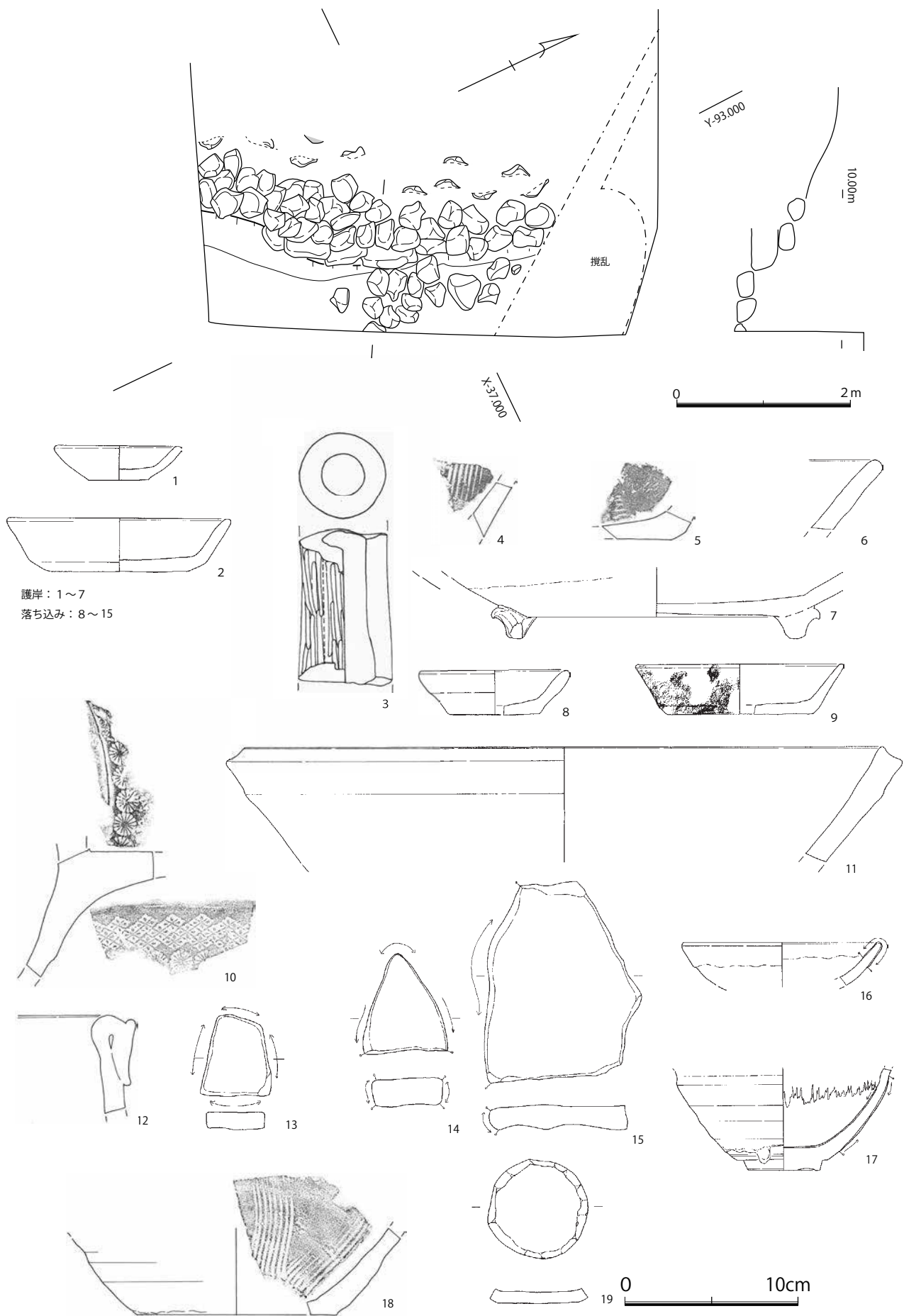


図12 第I面落ち込み1

3は瀬戸片口鉢、第8型式か。胎土は灰色で長石、礫をやや多く含有する。4は北宋銭の「熙寧元寶」。篆書で初鑄年代は1068年である。5は砥石、鳴滝産の仕上砥である。砥面は三面である。

土坑15は調査区南西域で検出された。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-30°-Wであり、規模は71cm×54cmで底面標高は9.480mを測る。出土遺物の6は鉄釘、7は北宋銭の「聖宋元寶」行書。初鑄年代は1101年である。

土坑16は調査区中央、北壁にかかって検出した。柱穴18・19に切られる。平面形は不整円形で断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-101°-Wであり、規模は137cm×76cmで底面標高を10.265m測る。出土遺物は8～11で、8はロクロ成形の大型かわらけで、体部上方が膨らみ内湾する。内底面に弱いナデがある。9は鉄釘。10は、北宋銭の「政和通寶」隸書、初鑄年は1111年である。11も北宋「咸平元寶」の真書で初鑄年は998年である。

### 柱穴 (図13)

柱穴10は調査区中央西側で検出し、建物1の土坑5を切る。平面形は不整円形で断面形は逆台形を呈する。規模は36cm×33cmで、底面標高は9.740mを測る。出土遺物は12～13である。12は須恵器の甕口縁部。口縁部の内側に沈線が走る。緻密な良土である。13は滑石の温石の破片。2次的に火を受けたようで部分的に黒い。

柱穴24は調査区の中央で検出した。中央に安山岩の礎石を持ち、周りを栗石で密に固める。建物としての広がり確認できなかった。平面形は不整円形で断面は緩い逆台形である。規模は95cm×90cmで底面標高は9.620mを測る。

柱穴25は調査区の中央で検出した。平面形は楕円形であり、北側が一段深くなる。断面形は段を持った箱型を呈する。規模は55cm×40cmで底面標高は9.430mを測る。埋土は拳大の泥岩の入る暗褐色粘質土である。出土遺物として14・15のかわらけがあげられる。両方ともロクロ成形の大皿である。内底面にナデがあり、底部に板状圧痕が残る。胎土はやや粗土。15は若干作りが粗雑で体部に二段の稜を持つ。内底面に強いナデ痕を残し、底部は板状圧痕が強く残る。口縁部を打ち欠いている。

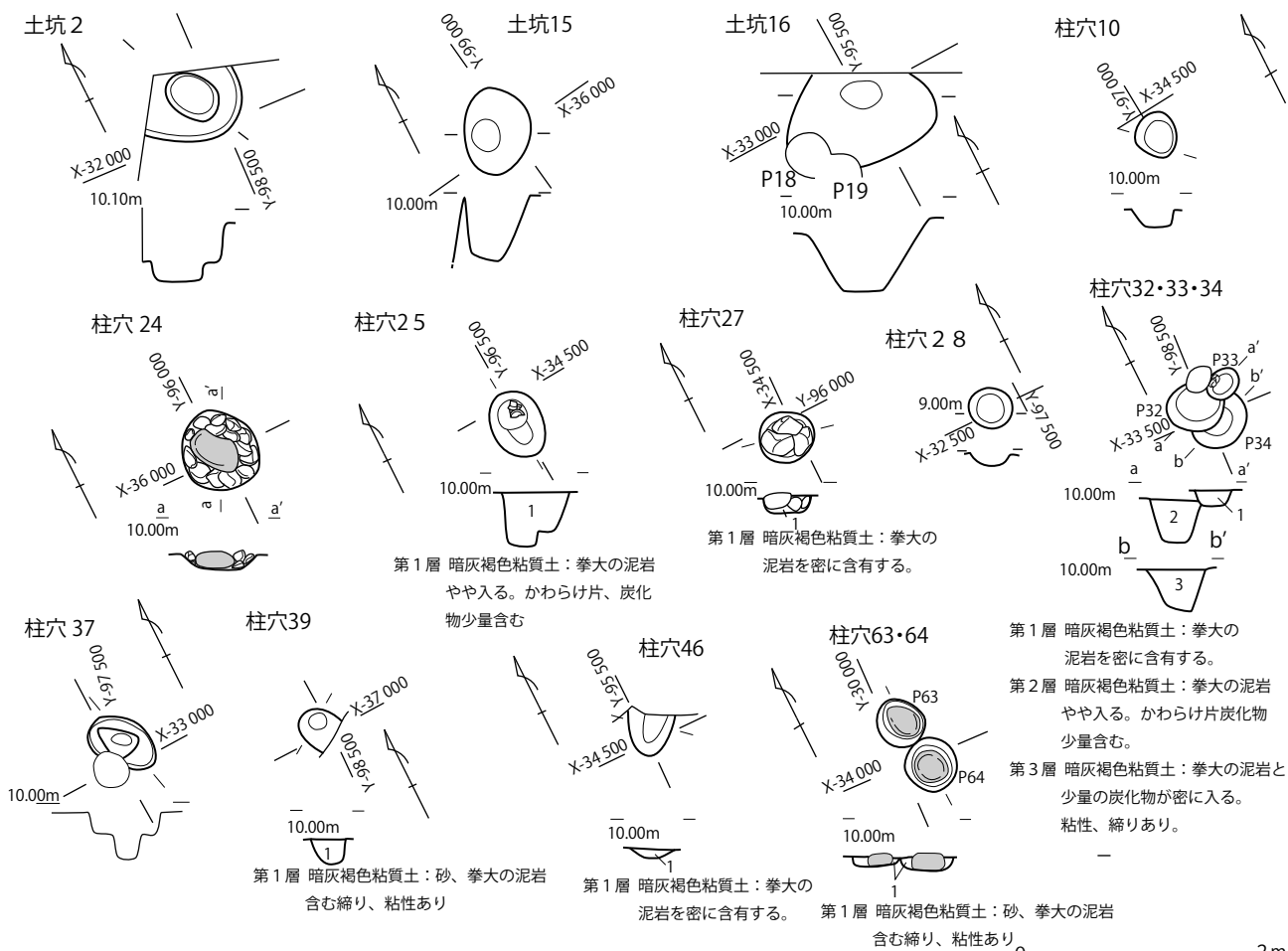
柱穴27は調査区中央北西寄りで検出した。大きめの泥岩塊と拳大の泥岩が密に入る。平面形は円形で断面形はU字型を呈する。規模は42cm×40cm、底面標高は9.790mを測る。出土遺物は16・17で、16は瀬戸の縁釉小皿である。外面は露胎し、口縁に油煙煤が付着する。内面は灰緑色の透明釉が施釉される。17は自然石だが摩耗し、使用した可能性がある。

柱穴28は調査区北で検出した。平面形は円形、断面形は浅い皿状である。規模は38cm×33cmで底面標高は9.800mを測る。出土遺物は18の鉄釘である。

柱穴32は調査区西側で検出した。周辺は柱穴が密集する。柱穴12・33に切られる。平面形は不整円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は43cm×(40)cmで底面標高は9.505mを測る。埋土は拳大の泥岩を含有する暗灰褐色粘質土である。

柱穴33は調査区西側で検出した。柱穴12に切られる。平面形は楕円形で断面形は逆台形を呈する。規模は30cm×23cmで底面海拔は9.825mを測る。埋土は拳大の栗石を密に包含する。出土遺物は19の鉄釘である。

柱穴34は調査区西側で検出した。柱穴が密集する中でも最も古い部類に入る。柱穴32・33に切られる。平面形はおそらく円形、断面形は、逆台形である。規模は49cm×(30)cmで底面標高は9.580mを測る。埋土は拳大の泥岩が密に入る暗灰褐色粘質土である。



0 2m

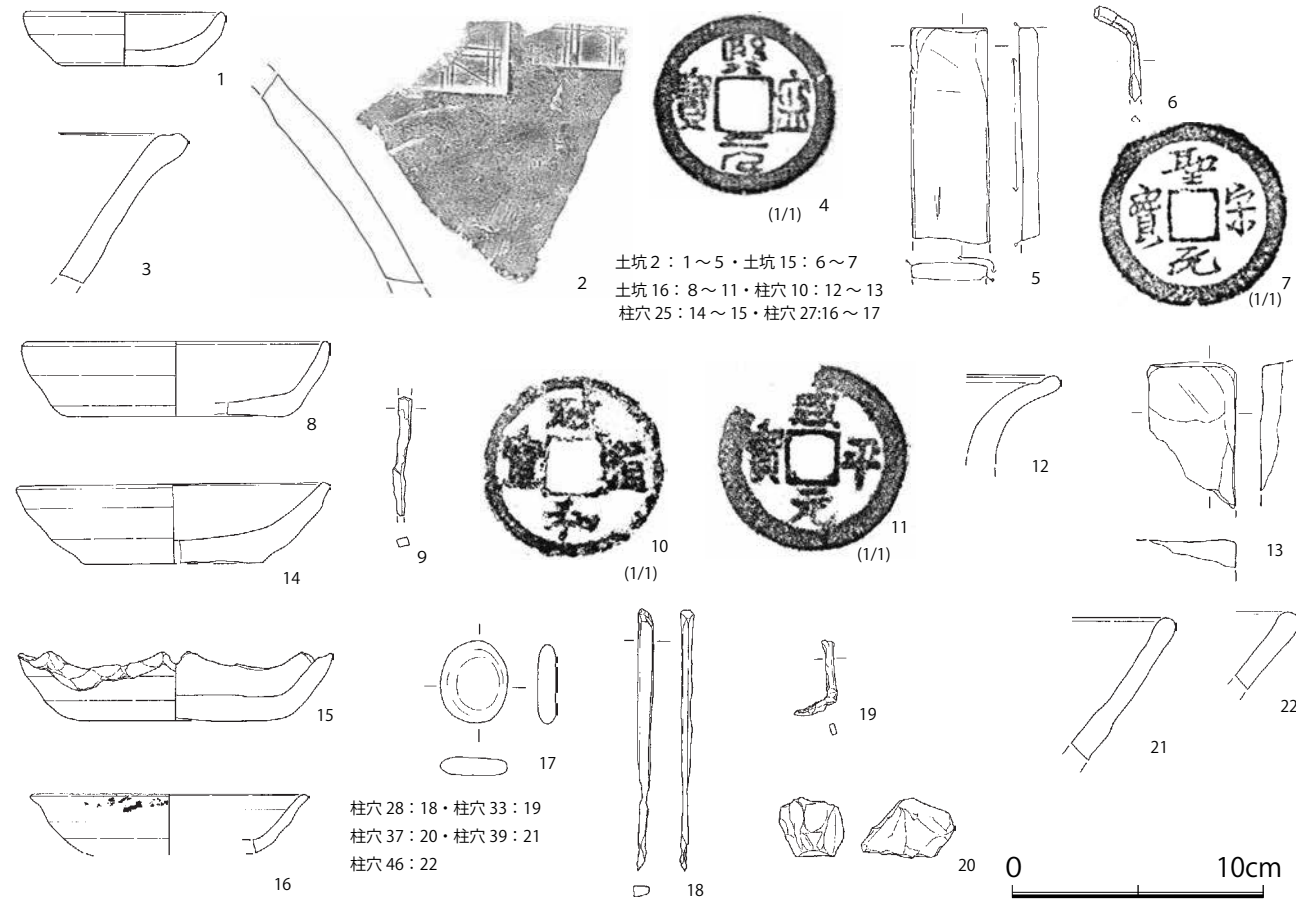


図13 第I面土坑・柱穴

柱穴 37 は調査区北側にある据甕の前で検出した。柱穴 14 に切られる。中段に平場を持つ深くてしっかりした柱穴である。平面形は楕円形で中に柱部分と見られる半分ほどの直径の穴がある。規模は 56cm × (37)cm で底面標高は 9.570 m を測る。埋土は炭化物の多い、暗灰褐色粘質土である。出土遺物は 20 のチャートである。

柱穴 39 は調査区の南で検出した。南半部を攪乱に切られる。平面形はおそらく楕円形で断面形は U 字型を呈する。規模は 32cm × (31)cm で底面海拔は 9.600 m を測る。埋土は炭化物を多く含んだ暗灰褐色粘質土である。出土遺物は 21 の常滑片口鉢で第 2 段階 5 ～ 6a 型式か。

柱穴 46 は調査区中央北側で検出した。建物 1 の土坑 4 に切られる。平面形はおそらく楕円形で断面形は浅い皿状を呈する。規模は 43cm × (31)cm で底面海拔は 9.600 m を測る。埋土は泥岩が密に入る暗灰褐色粘質土である。出土遺物は 22 の常滑片口鉢 I 類、胎土はやや粗土で含有物が目立つ。第 2 段階 5 ～ 6a 型式。

柱穴 63 は調査区西端で検出した。安山岩の礎石を伴う。平面形は楕円形で断面形は U 字型を呈する。規模は 41cm × 36cm で底面海拔は 9.635 m を測る。埋土は砂、拳大の泥岩を含有する暗灰褐色粘質土である。

柱穴 64 は調査区西端、柱穴 63 と並んで検出した。安山岩の礎石を持つ。平面形はほぼ円形で断面形は緩い U 字を呈する。規模は 43cm × 40cm で底面海拔は 9.635 m を測る。埋土は柱穴 63 同様の暗灰褐色粘質土である。

出土遺物では写真のみの掲載であるが火を受けた泥岩に熔着痕のあるものが土坑 16 から出土している。

#### 第 I 面直上出土遺物 (図 14)

1 はロクロ成形かわらけ小皿、口縁が開き内底面はナデが入り、底部は強く板状圧痕が残る。胎土は土丹粒を含むやや粗土である。2 はロクロ成形のかわらけ大皿、口径、底径比があまりない。口縁の下に稜を持つ。内底面には強いナデがはいり、底部の板状圧痕は顕著である。胎土は含有物の多い粗土である。3 は常滑片口鉢の II 類。口縁ヨコナデし体部は指頭痕をナデ消している。胎土は含有物少なく精良である。第 3 段階 8 型式。4 は常滑甕片の押印部分である。単線 + × 文 + 縦線 7 本で構成されている。5 は白磁の壺である。底部近くか。胎土は精良堅緻。釉薬は内外面とも薄い。13 世紀前半までのものだろう。福建産。6 は銅製品の馬具で野沓の先端部分である。内側に繊維が若干残っているので、木製の野沓を銅製品で被せたものであろう。7 は北宋銭の「元豊通寶」行書。初鑄年は 1078 年である。8 は北宋銭の「景德元寶」真書。初鑄年は 1004 年である。9 は砂岩の加工石である。ちょうど掌に乗るくらいに球形に播られている。

#### 第 I 面出土遺物 (図 15)

1 は須恵器転用の摩耗陶片である。器表面と断面の一部を使用している。2 ～ 9 はロクロ成形のかわらけ皿であり、その内 2 ～ 7 は小型である。2 は体部真中あたりに稜が入り、内底面にナデが入る。口唇部に油煙煤が付着する。灯明皿である。胎土は砂のやや多く入るやや粗土である。3 は歪みが大きい。内底面は強くナデが入り底部は板状圧痕が残る。焼成が良く、砂がやや多い。4 は内底面にナデが入り、底部の板状圧痕強い。胎土は白色粒子が目立つ。5 は口径、底径比があまりなく直線的に立ち上がる。内底面に強いナデが入り底部に板状圧痕が強く残る。胎土は比較的精良と言えようが幾つかの泥岩粒が

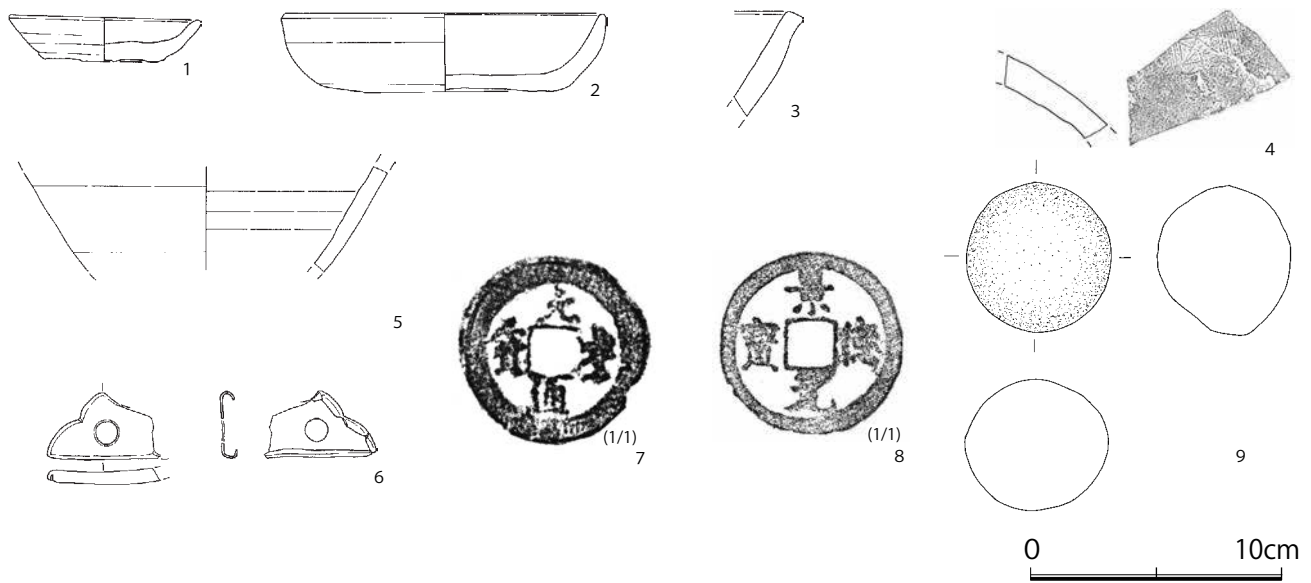


図14 第I面直上出土遺物

見られる。6はやや湾曲して立ちあがる。7は粗雑な作りである。内底面にナデが入り底部の板状圧痕も強い。胎土は含有物の多い粗土である。8・9は大皿である。8はやや開き気味に立ち上がり、若干の歪みを持つ。胎土は砂が多い。9は器高が高い。体部には二本のロクロ目が残る。焼成はやや甘く、胎土の芯が黒灰色である。10は瀬戸内系かわらけの底部片である。内底面に焼成時の黒斑が見られる。貼り付け高台である。11は常滑片口鉢Ⅱ類である。外体部は指頭痕をナデ消している。第2段階5型式。12は常滑甕の押印部分である。部分的だが格子に×か。13は青磁の端反碗口唇部の小片。胎土は精良堅緻、釉は不透明な淡水色で厚い。14は白磁の四耳壺の肩から頸部部分の破片。繋ぎ目であり、釉のかかった突起が見える。釉はやや青味がかった透明釉である。15・16は鉄釘である。

## 2. 第I b面の遺構と出土遺物

第I b面は泥岩による緻密な地形をなされた層で海拔は概ね9.5mを測る。調査区東側では第I面と共通する。調査区北西では炭化物が広がる。方形土坑2基、土坑3基、柱穴70個、落ち込み1個所である。遺構は第I面の遺構の掘り残しのものが多いようである。出土した遺物は須恵器、土師器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、火鉢、土器質の蒸籠、土錘、常滑産の甕と鉢、瀬戸産の深皿、渥美産鉢、青磁碗、石製品、銭、釘等がある。

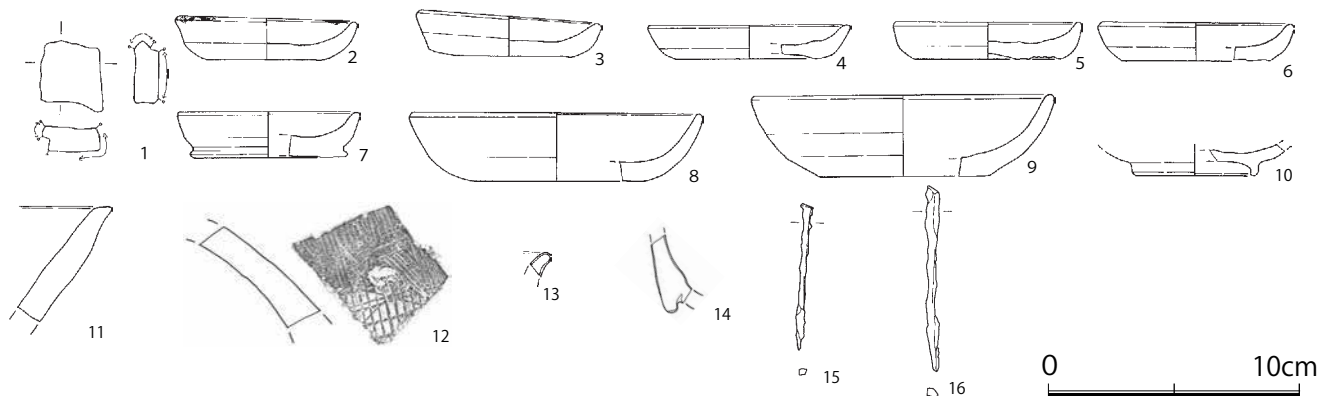


図15 第I面出土遺物

表2 第I面遺構観察表

遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考	遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考
P-1	(51.5)	(2.8)	7.5	9.835		P-52	40.0	37.0	30.0	9.530	A
P-2	27.0	27.0	5.1	10.42	P1を切る	P-53	43.0	(3.3)	42.5	9.565	A
P-3	3.5	3.2	5.7	9.835		P-54	29.0	(20.0)	2.0	9.797	D
P-4	34.0	32.0	6	9.875		P-56	44.0	(39.0)	12.0	9.600	E
P-5	34.0	32.0	6.0	9.875		P-57	47.0	38.0	11.0	9.620	E
P-6	25.0	24.0	4.0	9.865		P-58	38.0	35.0	21.5	9.580	E/ 建2
P-7	(3.0)	24.0	20.0	9.58	A/D10に切られる	P-59	45.0	(29.0)	60.0	9.300	A
P-8	26.0	26.0	16.0	9.715	D8を切る	P-60	58.0	50.0	6.5	9.655	A
P-9	41.0	(21)	3.5	9.880		P-61	39.0	38.0	10.5	9.615	建2
P-10	36.0	33.0	13.0	9.740	D5を切る	P-62	55.0	48.0	4.5	9.700	
P-11	35.0	32.0	12.0	9.785	P14・15を切る	P-63	41.0	36.0	7.5	9.635	A
P-12	26.0	16.0	—	—	P32・33を切る	P-64	43.0	40.0	6.5	9.635	A
P-14	35.0	32.0	10.5	9.785	P30を切る / 建2	P-401	(46.0)	36.0	2.5	9.710	礎石を持つ / 建2
P-15	51.0	51.0	14.0	9.780		P-402	40.0	36.0	17.0	9.370	
P-16	30.0	30.0	26.5	9.705	A/P37を切る	P-403	47.0	46.0	12.0	9.550	
P-18	36.0	(36.0)	12.0	9.800		P-404	17.0	14.0	22.0	9.700	
P-19	44.0	(2.9)	13.5	9.800	P18を切る	P-414	(53.0)	(24.0)	25.0	9.350	
P-20	36.0	35.0	31.5	9.540		P-415	(53.0)	(22.0)	28.0	9.310	建2
P-21	45.0	34.0	10.0	9.700		P-416	60.0	48.0	3.5	9.730	建2
P-22	29.0	24.0	21.5	9.620	A	D-1	86.0	71.0	40.0	9.600	建1
P-23	29.0	21.0	32.0	9.780	A	D-2	(81.0)	(59.0)	42.5	9.525	
P-24	(95.0)	(90.0)	23.5	9.620	A'	D-3	53.0	49.0	10.5	9.685	
P-25	55.0	40.0	44.0	9.430	A'	D-4	104.0	(50.0)	50.5	9.330	P46を切る / 建1
P-26	42.0	35.0	26.0	9.680	A	D-5	138.0	138.0	62.0	9.335	建1
P-27	42.0	40.0	6.0	9.790	B/P49を切る	D-6	83.0	(79.0)	24.5	9.585	建2
P-28	38.0	33.0	16.0	9.800		D-7	100.0	(46.0)	18.0	9.755	A
P-29	32.0	31.0	27.5	9.680		D-8	74.0	66.0	36.0	9.570	A'/P13・53を切る
P-30	(46.0)	(30.0)	35.0	9.590	A'	D-9	66.0	54.0	22.9	9.596	A
P-31	(33.0)	(20.0)	28.5	9.650		D-10	55.0	55.0	17.0	9.590	P7を切る / 礎石を持つ / 建2
P-32	43.0	(40.0)	38.0	9.505	A/P34を切る	D-11	93.0	93.0	55.0	9.315	P31・53を切る / 建1
P-33	30.0	23.0	12.0	9.825	B/P32・34を切る	D-12	80.0	64.0	15.0	9.770	礎石を持つ
P-34	49.0	(30.0)	34.5	9.580	B	D-13	60.0	(48.0)	38.0	9.900	A/ 建2
P-35	31.0	29.0	11.5	9.865	A	D-14	(75.0)	(60.0)	42.0	9.480	A
P-36	23.0	20.0	13.0	9.820	A	D-15	71.0	54.0	42.0	9.480	
P-37	56.0	(37.0)	38.0	9.570	A	D-16	137.0	76.0	42.5	10.265	
P-38	18.0	15.0	16.0	9.620							
P-39	32.0	(31.0)	15.5	9.600	A						(単位: 海拔m / 以外 cm) (P: 柱穴 D: 土坑)
P-40	41.0	41.0	12.5	9.605	B						
P-41	58.0	58.0	15.5	9.605	建1						
P-42	42.0	31.0	4.5	9.855							
P-45	39.0	25.0	9.5	9.825							
P-46	43.0	(31.0)	11.0	9.660	B						
P-47	43.0	41.0	10.0	9.660	B/ 建2						
P-48	31.0	23.0	24.5	9.750	A						
P-49	34.0	(23.0)	17.5	9.705	B						
P-50	48.0	36.0	39.0	9.335							
P-51	47.0	43.0	31.0	9.560	A						

土層注記

- A類 暗褐灰色粘質土: 直径3cm前後の泥岩がやや入る。炭化物が多く黒っぽい土
- A'類 暗褐灰色粘質土: A層に似るが泥岩粒が細かく炭化物が少ない
- B類 暗褐灰色粘質土: 泥岩がみっしりの泥岩層やや砂っぽい
- C類 暗灰色土: 泥岩やや入る。砂の多い灰色の土
- D類 暗黒褐色粘質土: 炭化物の少量入る粘性のある土。1cm未満の泥岩粒が少量混入
- E類 暗褐灰色粘質土: 明るい土、炭化物少量、4cm前後の泥岩粒やや多めに入る。



## 土坑 (図 17)

土坑 17 は調査区北東で検出した。平面形は楕円形に近い不整円形で断面は箱型を呈する。規模は 79 cm × 61cm で底面標高は 9.170 m を測る。遺物は上層で集中して出土した。以下が図示しえたものである。1 はロクロ成形のかわらけ大皿、体部中ほどに弱く稜が入り、器高が高い。内底面に強くナデが入り、底部は板状圧痕が残る。胎土は含有物多く、粉質である。2 は常滑片口鉢の I 類の口縁部片である。胎土は礫を若干含有する。第 2 段階 5 ~ 6a 型式。3 は緑褐釉の壺である。口縁の内側に灰色の付着物がある。これは重ね焼きの際の熔着を防ぐものであろう。短頸で肩は張らず、体部と肩の間に沈線が二条施される。釉葉は淡灰緑色で不透明。内外に薄く施釉される。胎土は精良堅緻だがやや気孔も見られる。4 は砥石、鳴滝産の仕上砥である。砥面は三面使用している。

土坑 18 は長方形の土坑。調査区の北西隅で土坑 19 と並んで検出した。土坑 19 はほぼ同形態の遺構と思われる。遺構の周辺は炭化層が広がる。柱穴 96・97 に切られる。主軸方位は N - 7° - W であり、平面形は長方形で断面形は箱型を呈する。規模は (17.1) cm × (13.4) cm、底面標高は 9.371 m を測る。出土遺物は 5・6 で、5 は常滑甕の押印部分である。押印は四角に丸文か。胎土が含有物少なく精良である。6 は土製品の土錘片。

土坑 19：土坑 18 同様、方形もしくは長方形の土坑であり、土坑 19 と並んで検出した。遺構の周辺は炭化層が広がる。主軸方位は N - 7° - W であり、平面形は方形もしくは長方形で断面形は箱型を呈する。規模は (12.9) cm × (12.4) cm で底面標高 9.435 c m を測る。

## 第 I b 面出土遺物 (図 18)

1 は手捏ねかわらけ小型皿。底部は薄く、体部の稜は強く入る。全体にぼってりした器形である。2 から 4 はロクロ成形の小型かわらけである。2 は内底面の外周にナデが入り、中央部が盛り上がる。胎土は砂の多いやや粗土である。3 は直線的に立ち上がり、口縁部僅かに外反する。4 も口縁部が外反する。内底面にナデあり、底部に板状圧痕残る。胎土は含有物が少ないが泥岩粒が入る。5 はロクロ成形かわらけの大皿の口縁部片である。全体にぼってりとし、口縁部はやや外反する。6 は瀬戸内系白かわらけである。ロクロ成形で薄手の大皿であり、体部下方に強い稜を持ち、胎土は長石を多く含む。7 は常滑の片口鉢 I 類。体部のロクロ目がややきつい。胎土は灰色で長石、礫を含む。第 2 段階 5 型式が比定できよう。8 は常滑の甕の体部、押印部分である。格子目の押印がランダムに押印される。9 は常滑の甕、転用摩耗陶片、1 角が摩耗する。10 も常滑の甕、転用摩耗陶片である。頸部あたりか、2 辺が摩耗している。11 は甌等の底に敷く土製の篋である。円盤に複数の穿孔がある。小片であるが 3 穴が確認できる。胎土は瓦器質で粗く、二次焼成を受け、底部は灰色である。12・13 は土製品の土錘であり、指頭圧痕が僅かに残る。14 は鉄製品の釘か。15 は滑石鍋である。直径 8mm の穿孔が確認できる。鏝の上下は鑿により成形した後、木口状工具のようなもので掻き削った痕跡を残す。鏝幅は 1.8cm を測り、断面は台形を呈する。16 は砥石の中砥、伊予産である。白灰色で使用面は 3 面ある。17 はチャートであるが使用痕は不明。拳大の凝灰質砂岩を写真のみ掲載した。

## 炭化層出土遺物 (図 19)

ここで扱う炭化層とは I b 面を構成する泥岩地形層の下に堆積した炭化層を指す。この炭化層を剥ぐと II 面が現れる。

1・2 は炭化層上層から出土のロクロ成形のかわらけである。1 は小型で、胎土は砂を多く含む。内



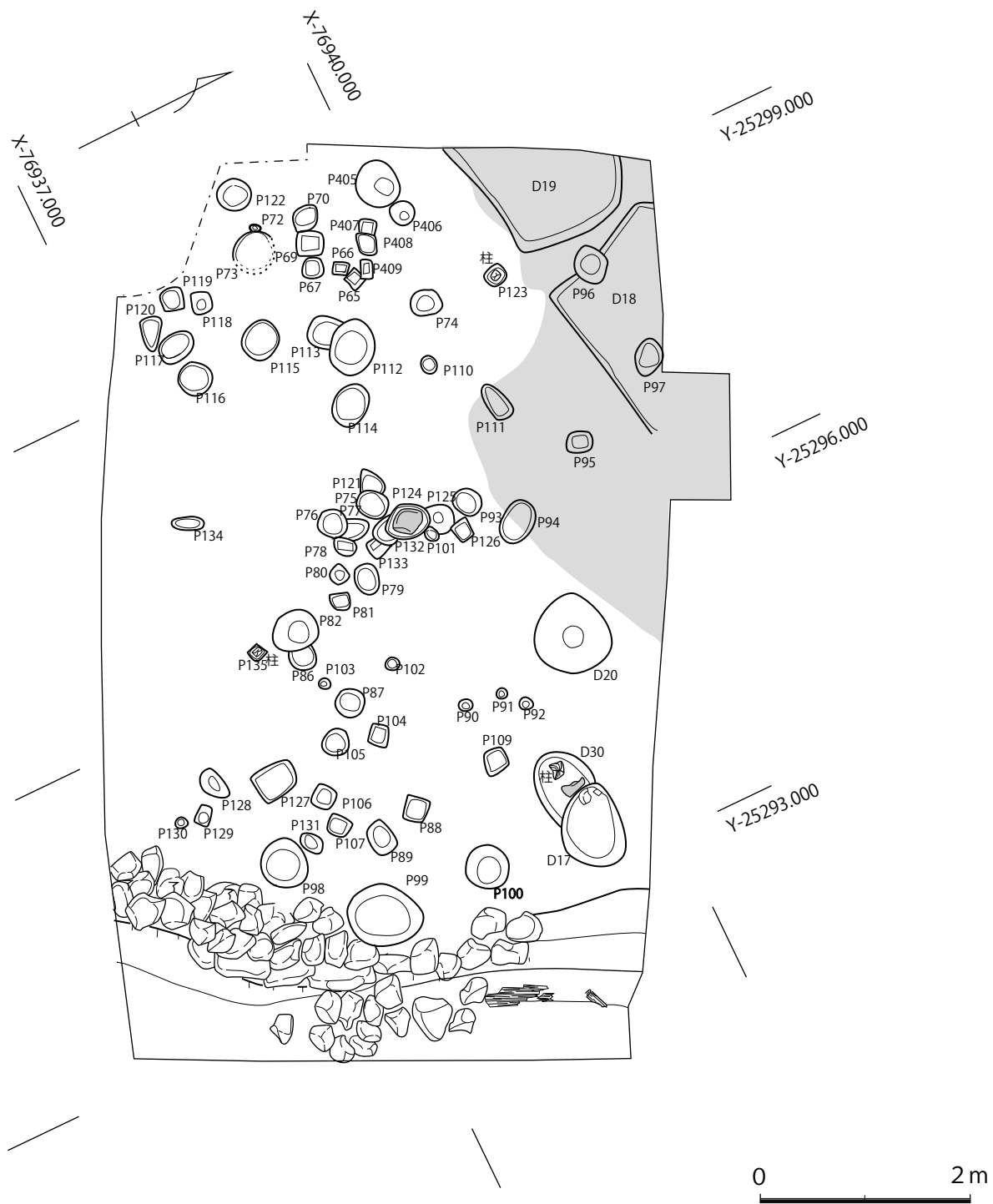


图 16 第 I b 面全体图

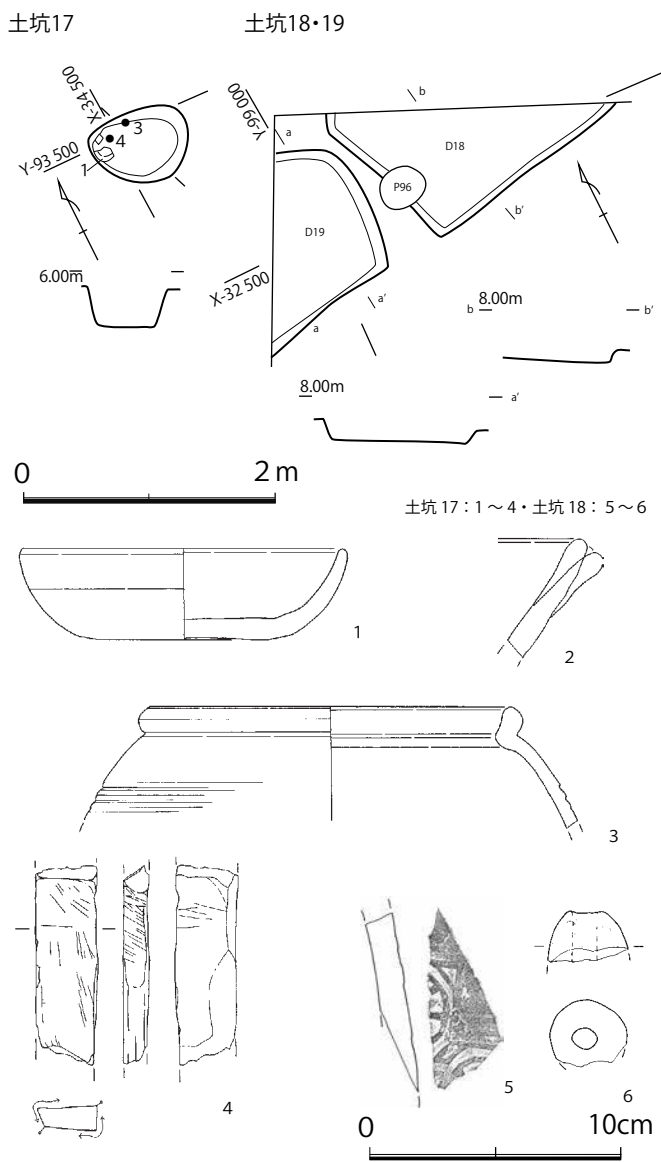


図17 第1b面土坑

胎土は白灰色で精良堅緻であり、釉は水青色の透明釉が内外面に薄く施釉されており、文様は牡丹唐草である。2は土製品の土錘で表面が摩滅しているが、指頭痕が僅かに残る。

### 建物3 (図21)

建物3は礎石により構成され、調査区の全体で検出されるが東側以外三方に広がる様相を示している。礎石は安山岩を主体とし、泥岩、凝灰質砂岩も混ざる。中には火を受け焼けた礎石もある。また柱当たりを面取りし加工した礎石も見られた(図21)。建物は南北に3間(柱間距離北から2.13m - 1.80m - 1.85m)、東西に2間(柱間距離1.94m - 1.94m)の確認である。3間3間の方形を成さないで御堂ではない。先にも述べたが東側以外は調査区外に広がる。主軸方位はN - 10° - Eであり、礎石間の石の配列に規則性が認められる。床束であろう。また、D - D'線上の礎石は石が複数伴って検出されている。A - A'線は平坦面の東限であり、南に延びない構造を持つようである。

1は礎石で柱座部分と底面を鑿で削り加工している。柱座部分は20cm × 12.5cmをやや窪ませるように削る。底部は平坦に削り礎石を安定させている。

底面にナデがあり、底部は板状圧痕が残る。口縁がやや開く器形である。2は大型で、胎土は砂を若干含有する良土。内底面に弱いナデが入り、底部は板状圧痕が残る。器壁薄く器高が高い。3から5は炭化層中からの出土である。3はロクロ成形の大型かわらけ皿。内外面に油煙煤が付着する。灯明皿であろう。口縁部片であるがぼってりした器形である。4・5は鉄製品の釘であろう。

### 3. 第II面遺構と出土遺物

先にも述べたように第I b面の地形の下に炭化層、焼土が堆積する。炭化層は厚いところで14cmを測った。その炭化層を取り除き、それを第II面とし、海拔9.400mで礎石建物を検出した。礎石建物を検出する段階で、礎石の上に轍状の遺構が渡った。埋土は炭化物をふんだんに含む。建物の基礎である可能性が高い。他に調査区の東側では落ち込みが確認されている。

出土遺物は手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、常滑産甕、瀬戸の深皿、皿、渥美産甕、青白磁の梅瓶、褐釉、鉄製品、土製品などである。

#### 第II面出土遺物 (図20)

第II面上から出土し図示しえた遺物は図20の1・2である。1は青白磁の梅瓶胴部片である。

表3 第I b面遺構観察表

遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考	遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考
P-65	17.0	15.0	3.0	9.500		P-109	24.0	21.0	6.5	9.440	
P-66	14.0	14.0	45.0	9.485		P-110	16.0	15.0	12.5	9.375	
P-67	19.0	16.0	16.5	9.350		P-111	38.0	19.0	18.0	9.385	
P-69	22.0	22.0	7.0	9.440		P112	51.0	44.0	15.0	9.410	P113 を切る
P-70	25.0	21.0	8.0	9.440		P113	31.0	26.0	5.0	9.510	
B-3	10.0	6.0	3.0	9.470		P-114	41.0	35.0	15.5	9.390	
P-73	(42.0)	(19.0)	5.0	9.200	P72 を切る。	P-115	38.0	36.0	16.5	9.355	
P-74	30.0	26.0	9.0	9.450		P-116	34.0	34.0	14.0	9.350	
P-75	31.0	26.0	24.0	9.290	P 1 2 1 を切る。	P-117	38.0	25.0	13.0	9.330	
P-76	31.0	27.0	20.5	9.310	P 77 を切る	P-118	20.0	20.0	16.5	9.315	
P-77	33.0	20.0	23.0	9.310		P-119	23.0	20.0	8.5	9.375	
P-78	21.0	14.0	20.0	9.300		P-120	34.0	21.0	10.5	9.335	
P-79	30.0	14.0	24.0	9.310		P-121	25.0	15.0	13.0	9.400	
P-80	17.0	16.0	7.5	9.425		P-122	33.0	28.0	7.5	9.395	
P-81	19.0	15.0	23.5	9.300		P-123	23.0	21.0	7.5	9.455	柱が残る
P-82	38.0	32.0	20.5	9.265	P84・85	P-124	42.0	34.0	21.0	9.370	P125 を切る / 礎石が残る
P-86	24.0	(20.0)	19.5	9.285		P-125	29.0	(25.0)	22.5	9.300	
P-87	29.0	26.0	23.5	9.265		P-126	19.0	18.0	8.0	9.440	
P-88	24.0	23.0	8.5	9.350		P-127	41.0	31.0	14.5	9.265	
P-89	32.0	23.0	17.0	9.300		P-128	34.0	21.0	7.0	9.340	
P-90	13.0	13.0	4.5	9.455		P-129	20.0	14.0	7.5	9.300	
P-91	11.0	10.0	4.5	9.470		P-130	15.0	10.0	5.5	9.315	
P-92	14.0	12.0	5.0	9.480		P-131	26.0	11.0	15.0	9.225	
P-93	25.0	24.0	15.0	9.360		P-132	25.0	(15.0)	25.1	9.370	
P-94	44.0	30.0	25.0	9.290		P-133	18.0	(18.0)	14.0	9.400	
P96	39.0	32.0	13.5	9.385		P-134	31.0	12.0	15.0	9.350	
P97	29.0	25.0	8.0	9.375		P-135	16.0	16.0	23.0	9.185	柱が残る
P-98	46.0	46.0	10.0	9.290		P-405	45.0	37.0	54.0	8.970	方形土坑
P-99	72.0	56.0	12.0	9.265		P-406	24.0	20.0	6.5	9.460	方形土坑
P-100	44.0	44.0	14.5	9.300		P-407	16.0	14.0	2.5	9.480	
P-101	15.0	12.0	8.0	9.450		P-408	22.0	15.0	12.5	9.475	
P-102	14.0	14.0	7.5	9.415		P-409	17.0	12.0	11.5	9.485	
P-103	10.0	10.0	6.5	9.390		D-17	79.0	61.0	32.0	9.170	
P-104	20.0	13.0	6.5	9.440		D-30	56.0	(48.0)	33.0	9.170	
P-105	17.0	16.0	17.5	9.260		D-20	71.0	68.0	21.5	9.340	
P-106	20.0	20.0	17.0	9.290		D-18	(17.1)	(13.4)	11.0	9.370	
P-107	20.0	19.0	10.0	9.330		D-19	(12.9)	(12.4)	28.5	9.435	

(単位：海拔 m / 以外 cm)  
(P：柱穴 D：土坑)

## 土層注記

- A類 暗褐灰色粘質土：直径3cm前後の泥岩がやや入る。  
炭化物が多く黒っぽい土
- A'類 暗褐灰色粘質土：A層に似るが泥岩粒が細かく炭化物が少ない
- B類 暗褐灰色粘質土：泥岩がみੱしりの泥岩層やや砂っぽい
- C類 暗灰色土：泥岩やや入る。砂の多い灰色の土
- D類 暗黒褐色粘質土：炭化物の少量入る粘性のある土。  
1cm未満の泥岩粒が少量混入
- E類 暗褐灰色粘質土：明るい土、炭化物少量、4cm前後の  
泥岩粒やや多めに入る。

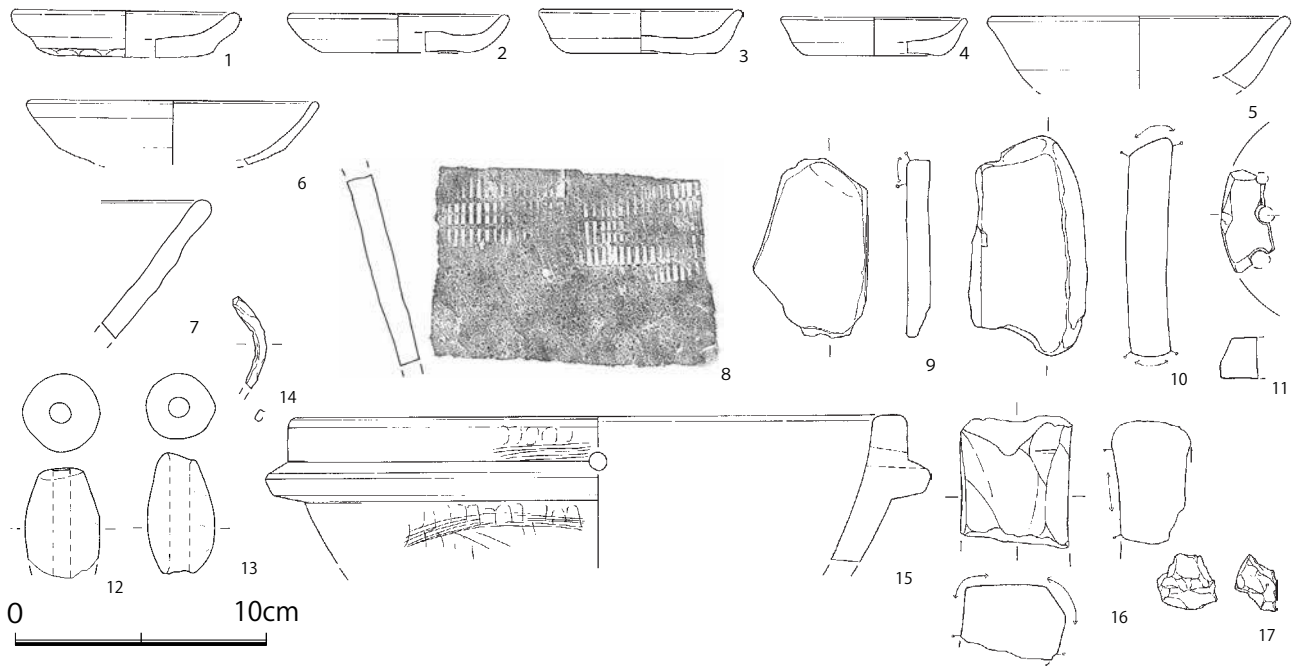


図18 第Ⅰb面出土遺物

落ち込み2 (図22)

第Ⅱ面での調査区東側の落ち込みは調査区南壁、北壁の土層堆積図から図面を起こした。泥岩による護岸施設を外すと、途中段差を持つがゆるやかな傾斜を呈する。確認出来た幅は北壁で1.95m、南壁で2.00mを測る。70cmで底面が確認できたがさらに東側には下がっていく様相を示す。

出土遺物は護岸を取り外し第Ⅰ面から第Ⅱ面までのものを採取した。1はロクロ成形の小型かわらけであるが、内底面の隅に直径5mmの穿孔がある。胎土は砂、含有物を多く含む粗土であり、器形は体部下半がやや張る。口縁は僅かに外反する。2は渥美産甕の押印部分である。胴部片であろう。押印は格子目が二段見て取れる。3は常滑甕の転用打ち欠き陶片である。二辺の端が打ち欠けている。4は瀬戸の緑釉小皿である。胎土は砂を含む硬質土であり、口縁に緑色の透明釉がかかる。貫入が見られる。5は褐釉の小片の転用摩耗陶片である。側面はかなり摩耗している。

4. 第Ⅲ面遺構と出土遺物

第Ⅱ面から細かい泥岩を多量に含む暗褐色粘質土を10～20cm掘り下げると海拔9.300mで泥岩による暗黄褐色粘質土の地形層が検出され、これを第Ⅲ面とした。第Ⅲ面では第Ⅱ面の礎石建物の礎石の下から柱を持つ柱穴が検出され、掘立柱建物となった。

遺構は他に土坑が2基、柱穴114個、木樋1箇所、落ち込み1箇所である。出土遺物は土師器、須恵器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、火鉢、常滑甕、鉢、瀬戸皿、四耳壺、鉢、渥美甕、備前鉢、瓦、

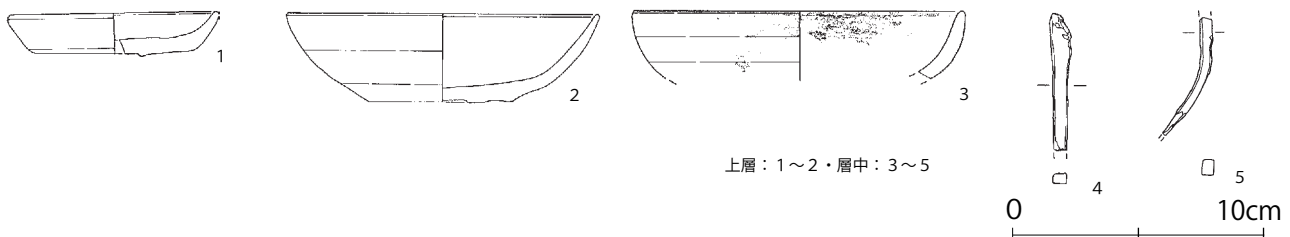


図19 炭化層出土遺物

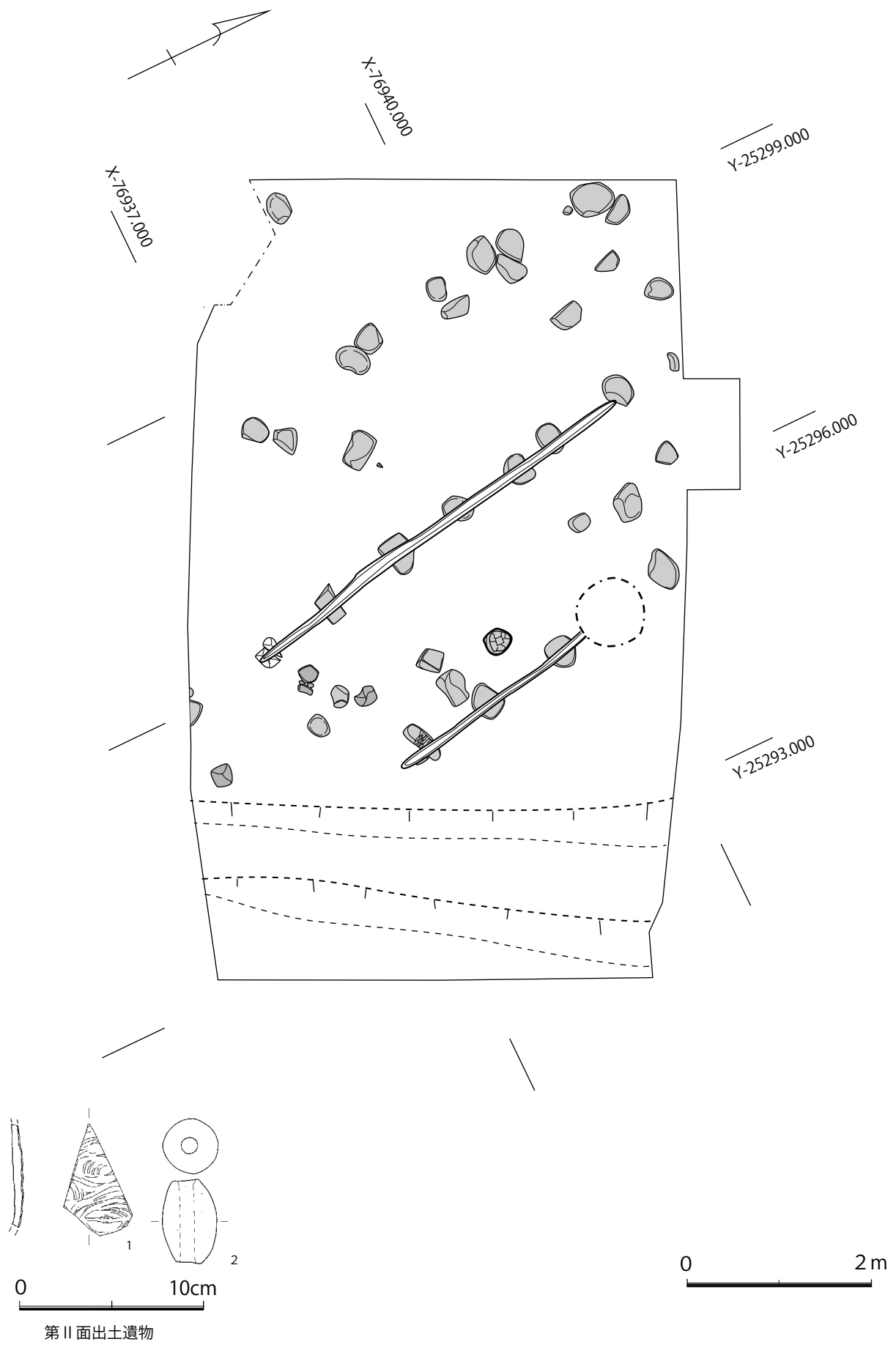


图 20 第 II 面全体图

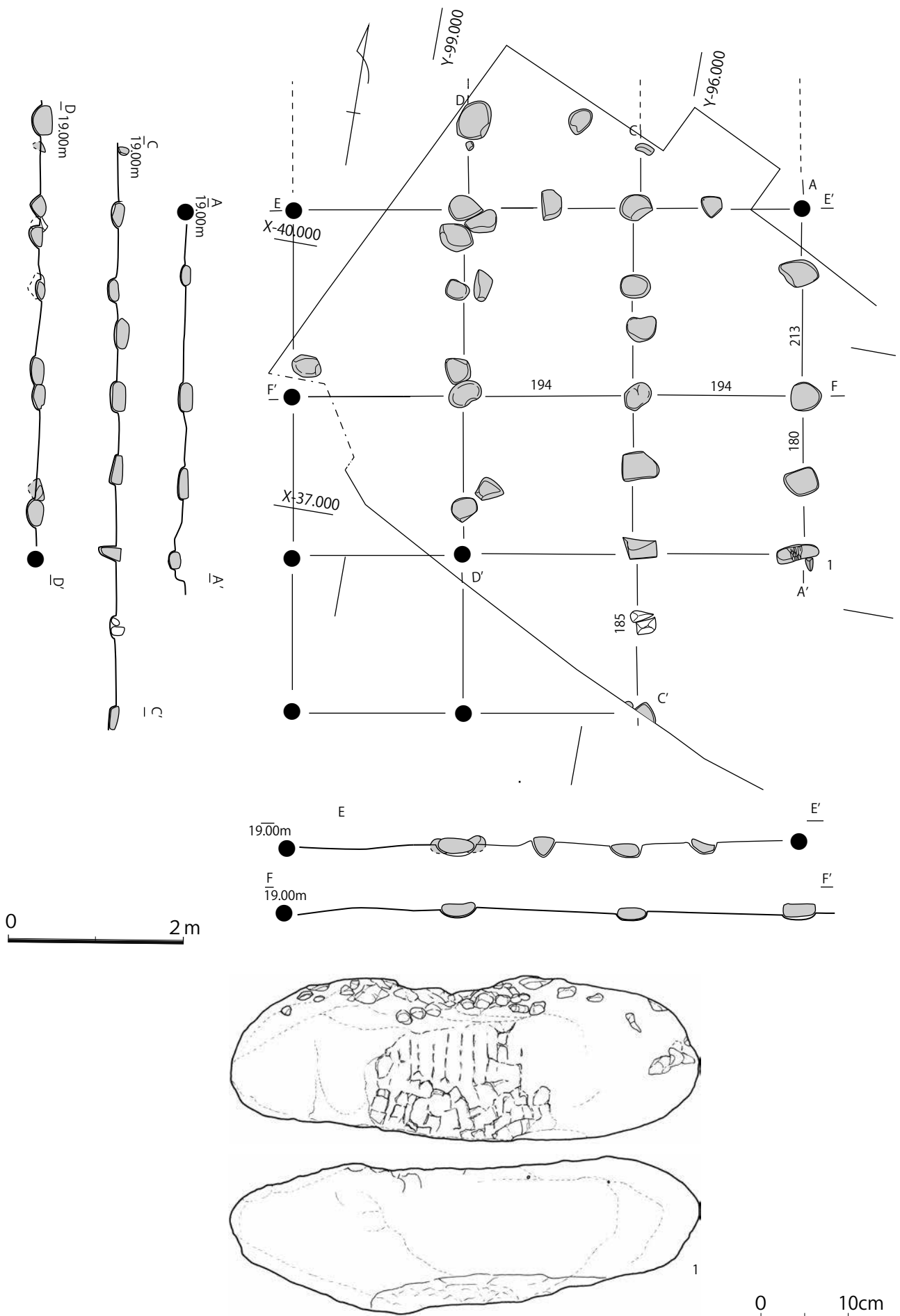


图 21 第 II 面建筑物 3

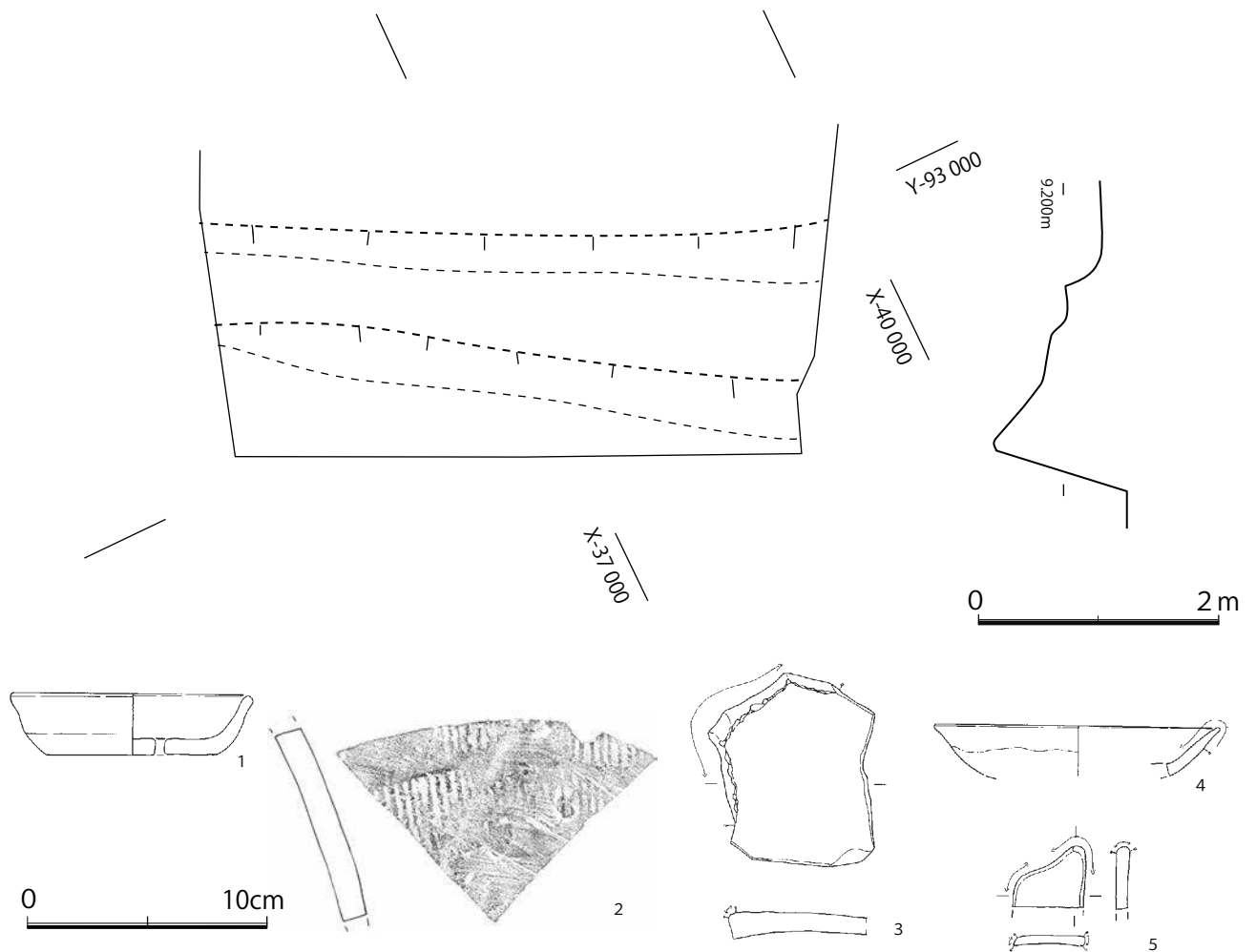


図22 第Ⅱ面落ち込み2

土製品、鉄製品、銭、木製品等である。

#### 建物4 (図24・25)

第Ⅱ面の礎石を取り上げ、掘り下げると礎石のあった場所に柱を持つ柱穴が検出され1棟の掘立柱建物となりこれを建物4とした。建物は調査区全体に展開し検出された。規模は南北に3間(柱間距離北から2.10m - 2.06m - 2.06m)。東西に3間(柱間距離西から1.97m - 2.05m - 1.90m)を確認したが全容は調査区の外に展開するので掴めない。しかし東側には木樋が検出されており、東限が示される。東の柱穴列は第Ⅱ面の礎石建物同様南に1間延びず柱穴はどれも浅い上に幅10cm程の小さな柱しか持たない。底的な施設になるのだろうか。また束柱とおぼしい柱穴も確認された(柱穴195・161・244・247)。主軸方位は建物3と同じN - 10° - Eである。埋土は半拳大の泥岩を含む非常に粘性の強い黒褐色強粘質土である。柱はいずれも礎板を持つ。柱の残存長は50cmから80cmで幅は15cmから20cmであり、丁斧痕が残り、四隅を面取りしているため厳密には八角形である。

柱穴137は調査区西の試掘坑にかかった柱穴である。しっかりした柱と礎板を持つ。柱穴は試掘坑に切られるが平面形はおおよそ円形であろう。断面形は逆台形を呈し、規模は65cm × (54)cm、深さは49.7cm、底面標高は8.733mを測る。柱の規模は残高59cm、幅16cm。礎板は柱当たりの痕跡を残す。規模は27.5cm × 16cmである。出土遺物は手捏ねかわらけの小型である。口縁に油煙煤が付着しており灯明皿であろう。内底面は剥離し荒れている。

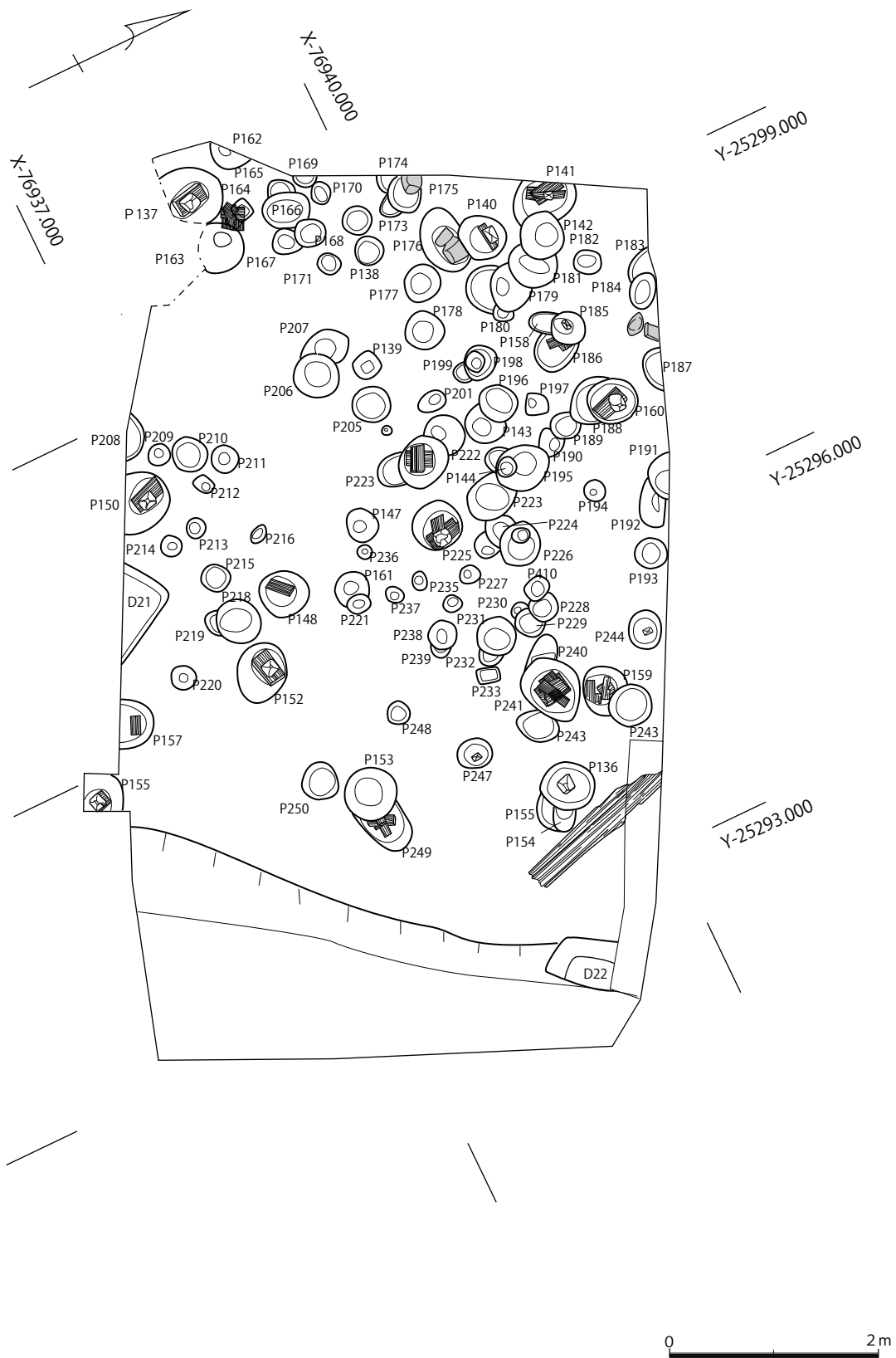
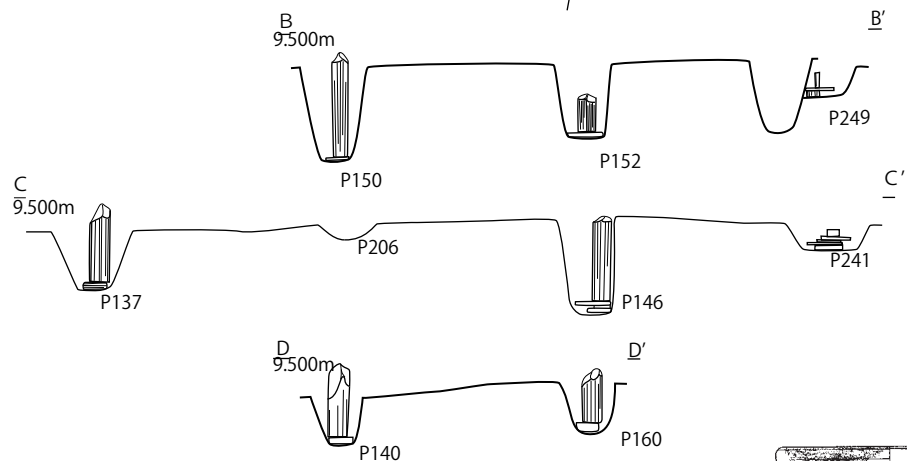
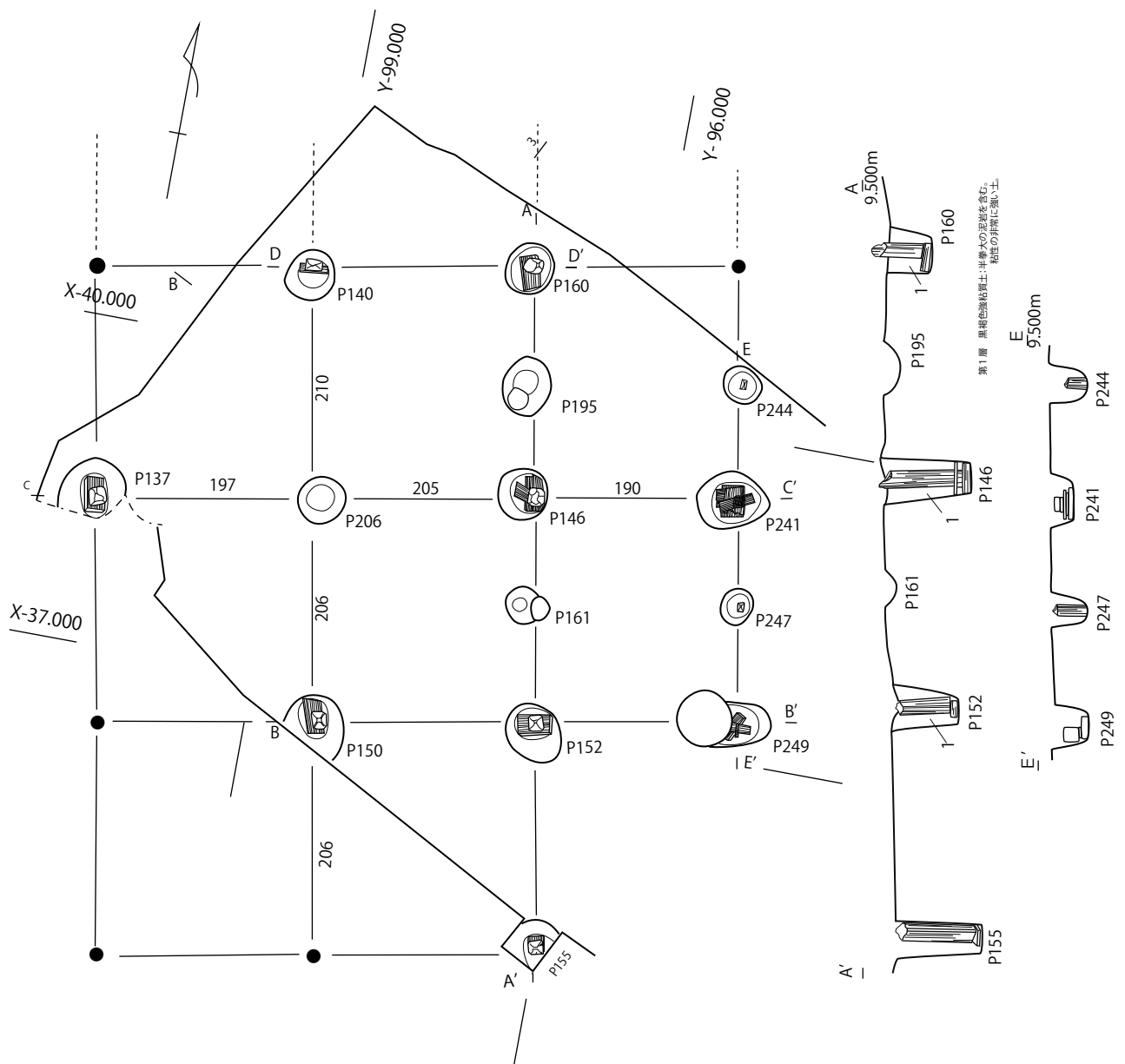


図 23 第三面全体図





	P195	P144	P146	P161	P152	P155	P150	P249	P137	P206	P241	P140	P244	P247
柱間	53.0	19.0	47.0	33.0	14.0	(43.0)	59.0	(40.0)	65.0	44.0	68.0	47.0	37.0	33.0
柱高	45.0	19.0	46.0	33.0	10.7	(19.0)	43.0	38.0	(54.0)	44.0	52.0	44.0	32.0	30.0
海抜	9.155	9.335	8.515	9.220	8.670	9.150	8.490	8.970	8.733	9.190	9.050	8.830	9.025	8.990

単位: 海抜m/ 以外cm

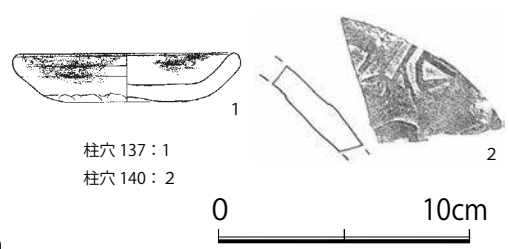


図 24 第三面建物 4

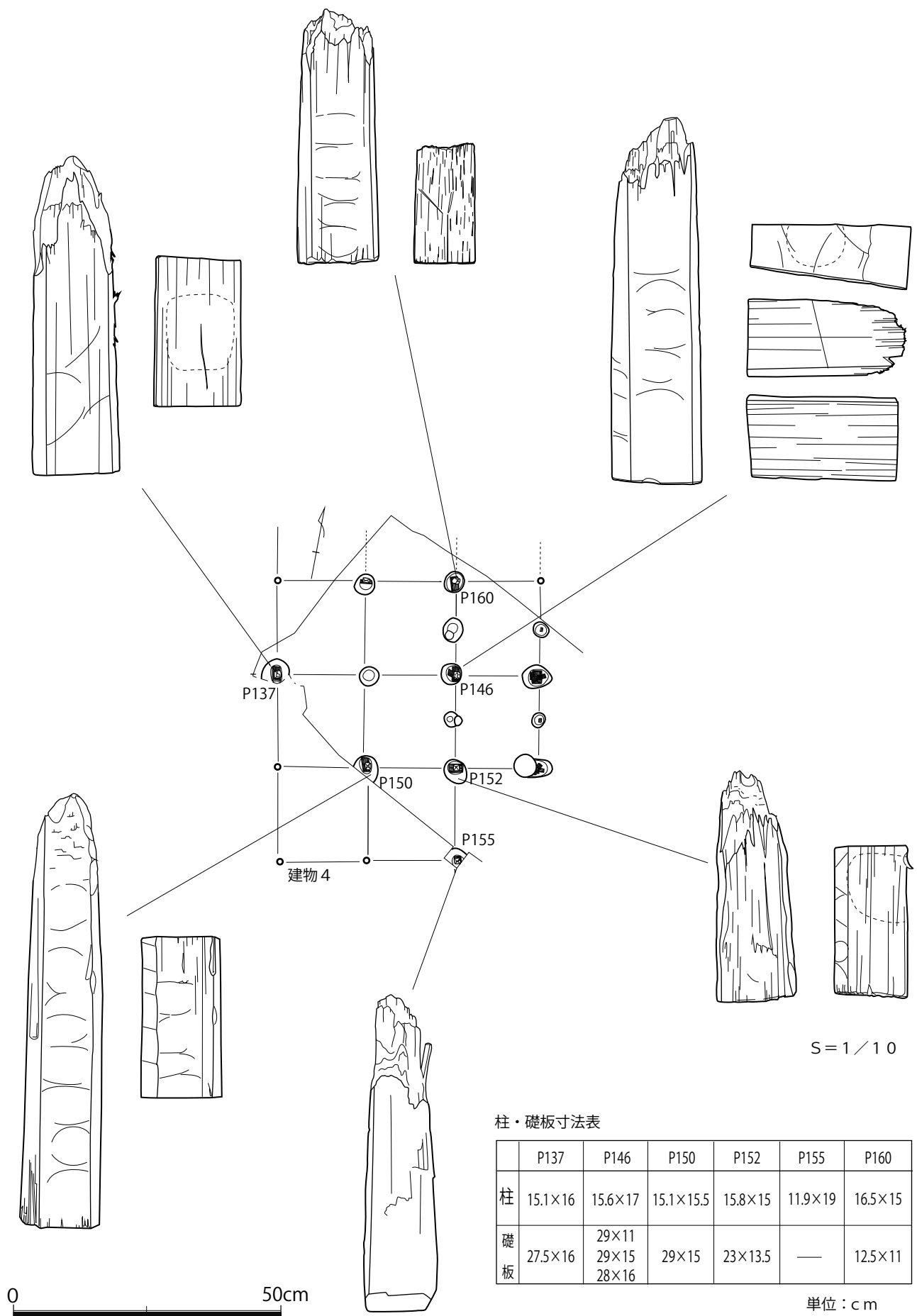


図 25 第三面建物 4 の柱と礎板詳細図

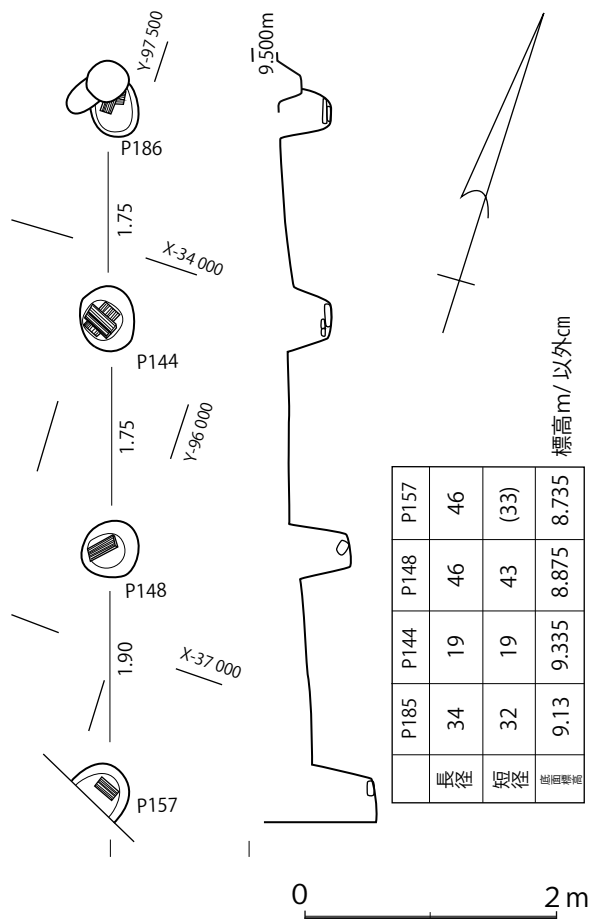


図 26 第三面柱穴列

柱穴 146 は平面形は円形、断面形はU字型を呈する。規模は 47cm × 46cm で深さ 83cm、底面標高は 8.515 m を測る。柱は礎板を三枚伴い出土した。礎板は雑然と重ねられ一番上の礎板には柱当たりの痕跡を残す。柱の残高は 68cm で幅は 17cm、礎板は上から、29cm × 11cm、29cm × 15cm、28cm × 16cm である。

柱穴 161 は柱穴 221 に切られる。束柱であろう。平面形は円形で断面形は皿状を呈する。規模は 33cm × 33cm で、深さは 8cm、底面標高が 9.22 m を測る。

柱穴 152 の平面形は楕円形で断面形は箱型を呈する。規模は 14cm × 10.7cm で深さは 57cm、底面標高は 8.670 m を測る。柱は残高 43cm で幅 15cm。礎板は柱当たりの痕跡を残す。寸法は 23cm × 13.5cm である。

柱穴 155 は建物の柱穴の並びを想定して調査区を一部拡張した。拡張を最小限に抑えたため、遺構全体は掴めなかったが柱を持つ柱穴の検出があった。平面形はおそらく円形で断面形は箱型を呈する。規模は (43) cm × (19)cm、深さ 120cm で底面標高が 9.150 m を測る。柱は底部を面取りしてあった。長さは 59cm で幅は 19cm を測る。

柱穴 244 は束柱であろう。幅 10cm 位の小さな柱を持つ。平面形は円形で断面形はU字型である。規模は 37cm × 32cm、深さは 27.5cm で底面標高は 9.025 m である。

柱穴 241 は柱は腐敗し原型を留めないが礎板は四枚重なり出土した。平面形は不整形で断面形は逆台形を呈する。規模は 68cm × 52cm で、深さは 25cm と浅い。底面標高は 9.050 m である。

柱穴 247 は束柱である。幅 10cm の柱を持つ。平面形は楕円形で断面形はU字形である。深さは 28cm、底面標高は 8.990 m を測る。

柱穴 140 は調査区北西で検出した。平面形はほぼ円形で断面U字型を呈し、規模は 47cm × 44cm、深さは 48cm で底面標高 8.830 m を測る。出土遺物は常滑の甕胴部の押印部分である。押印は四角に車輪・菊花文。

柱穴 206 は調査区東で検出した。平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。規模は 44cm × 44cm、深さ 11cm、底面標高 9.190 m を測る。

柱穴 150 は調査区南で検出した。調査区南壁に切られるが、平面形は概ね円形で断面はU字型を呈し、規模は 59cm × 43cm、深さは 76.5 cm であり、底面標高は 8.490 m を測る。柱は礎板を伴う。残存状態良好で残高が 79cm、幅は 15.5cm を測り、四隅を面取りしている。また、丁斧痕も顕著である。礎板は 29cm × 15cm を測る。

柱穴 160 は調査区北東で検出した。平面形は円形で、断面形はU字形を呈する。規模は 51cm × 41cm で深さは 38cm。底面標高は 8.920 m を測る。柱の残高は 48cm で幅が 15cm。礎板は 12.5cm × 11cm である。柱穴 195 は束柱か。平面形は楕円形で断面形は皿状を呈する。規模は 53cm × 45cm で深さは 16.5cm と浅く、底面標高は 9.155 m を測る。

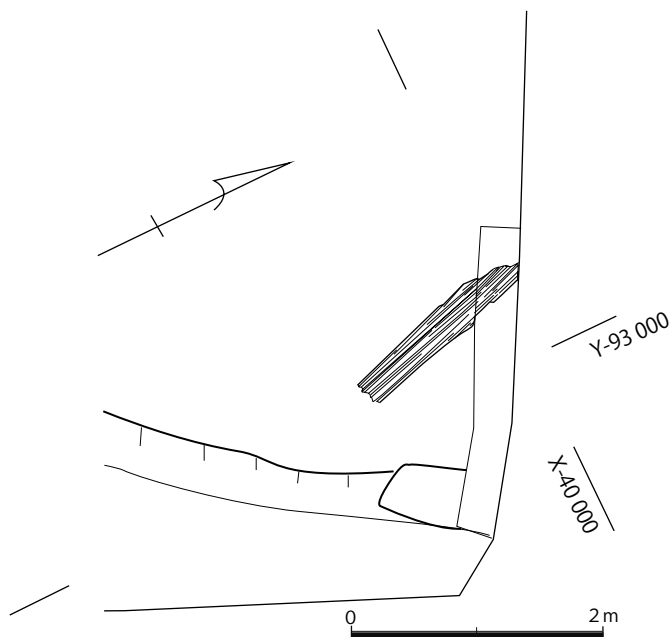


図 27 第三面木樋出土状況

柱穴 249 は柱穴 153 に切られる。平面形は楕円形で断面形はU字型である。規模は (40) cm × 38cm、深さは 29cm、底面標高、8.970 m である。柱は幅 10cm のもので、礎版は 2 枚組み合わせる。

柱穴列 (図 26)  
調査区中央で建物 4 とは軸を異にする柱穴列を検出した。建物としての規則的な展開は掴められず、柱穴列とした。柱は残らないがいずれも礎版を伴う。規模は南北に 3 間 (北から柱間距離で 1.75 m - 1.75 m - 1.90 m) で、主軸方位は N - 18° - E である。柱穴 186 は柱穴 185・158 に切られる。平面形は楕円形で断面形はU字型を呈する。規模は 34cm × 32cm で底面標高は 9.13 m である。柱穴 144 は、平面形は円形で断面は逆台形を呈する。規模は 19cm × 19cm。底面標高は 9.335 m を測る。柱穴 148 は平面形不整円形で断面は箱型を呈する。規模は 46cm × 43cm、底面標高は 8.875 m を測る。埋土は 1 ~ 3cm の泥岩と炭化物が多く入る黒褐色強粘質土である。柱穴 157 は調査区南壁に切られる。平面形は概ね円形を呈すると思われる。断面形は箱型か。規模は 46cm × (33)cm で底面標高は 8.735 m を測る。

### 木樋出土状況 (図 27)

調査区の北東隅で木樋の底部を検出した。調査時には捉えられなかったが、調査区北壁の土層堆積を観察すると木樋の周囲は窪み、溝状の掘り込みが見られた。第IV面まで掘り下げると木樋と同じ位置で溝が検出されているため、以前からの溝に第三面段階で木樋が設けられたのだろう。木樋の厚さは 3cm で幅は 30cm。確認出来た長さは 1.6 m であるが、調査区北壁より先に延びる。

### 落ち込み3 (図 28)

調査区の東端で検出した。遺構は傾斜を持って落ち込んでいき、現地表下 2 m 以下にもぐり底部は掴めなかった。確認した最大幅は 2.2 m である。出土遺物は 1 ~ 4 までが上層からで、5 ~ 8 が下層からの出土である。1 はろくろ成形のかわらけ大皿である。内底面に強いナデが入る。胎土はきめ細かくて焼成はやや甘い。2 は常滑の甕口縁部片である。縁帯幅 4cm である。第3段階 9 型式であろう。3 は常滑片口鉢 II 類。胴部の指頭痕はナデ消されている。胎土は精良で含有物少ない。第2段階 5 型式か。4 は常滑の甕の押印部分で格子文様である。5 はろくろ成形の小型のかわらけである。内底面のナデが強く残る。胎土は含有物が多くやや粗い。6 はろくろ成形の大型のかわらけである。体部は直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する。内底面はナデが強く入り、底部の板状圧痕は強く残る。胎土は含有物が少なくきめが細かい。7 は瀬戸の四耳壺の胴部片である。内面に強く指頭が見られる。胎土は硬質の精良土である。外面は緑灰色の釉がかかる。8 は瀬戸の卸皿底部片。内底面はへらによる卸目が付く。黄緑色の釉がかかり、底部は糸切りである。胎土は砂を含む軟質の精良土。9 は手捏ねかわらけの大皿

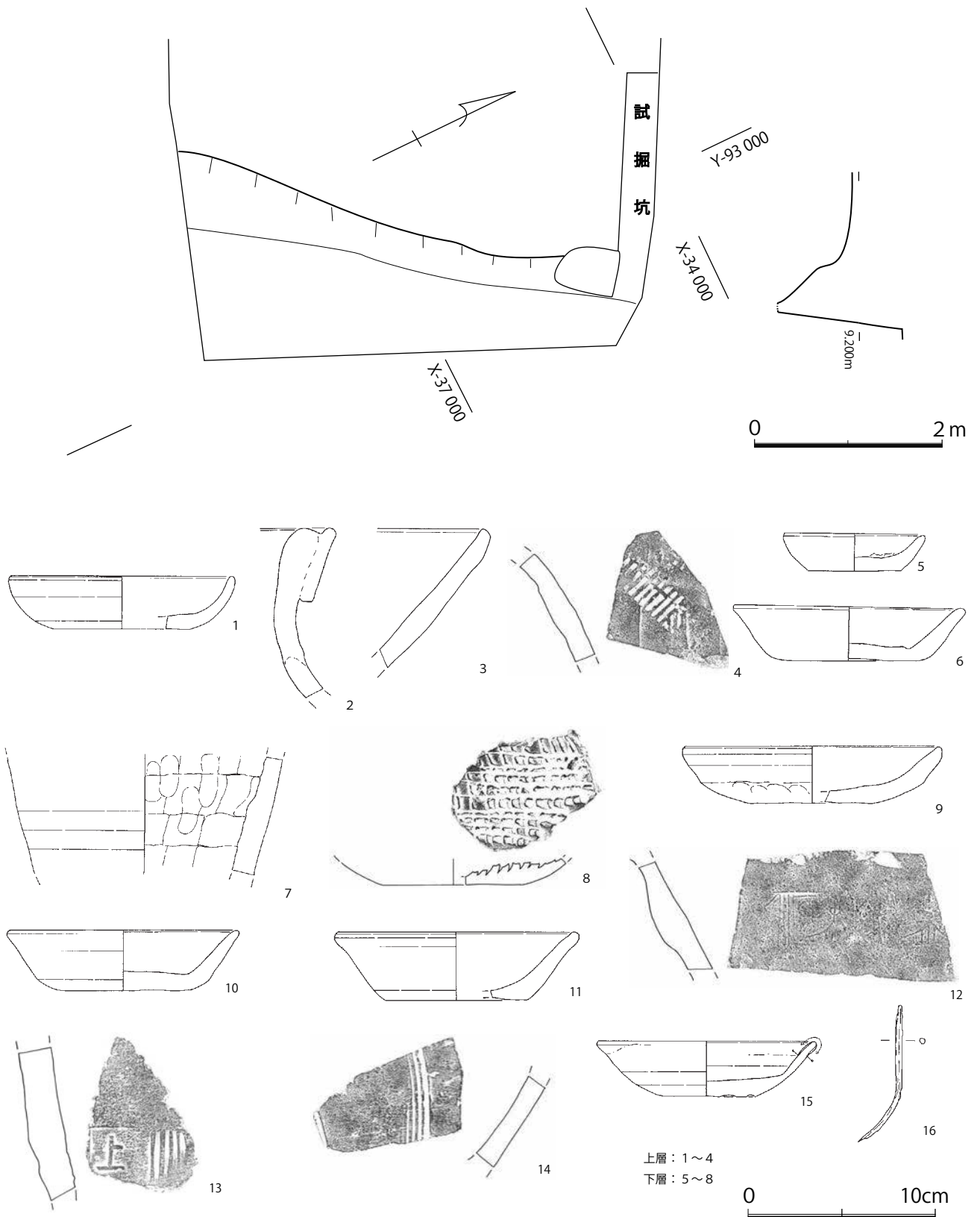


図28 第三面落ち込み3

である。指頭は無数に残り、体部に稜が巡る。胎土はやや良土。10はロクロ成形かわらけ大型。ぼってりとしている。内底面にナデが入り、底部は板状圧痕が残る。胎土は含有物を含むやや粗土である。

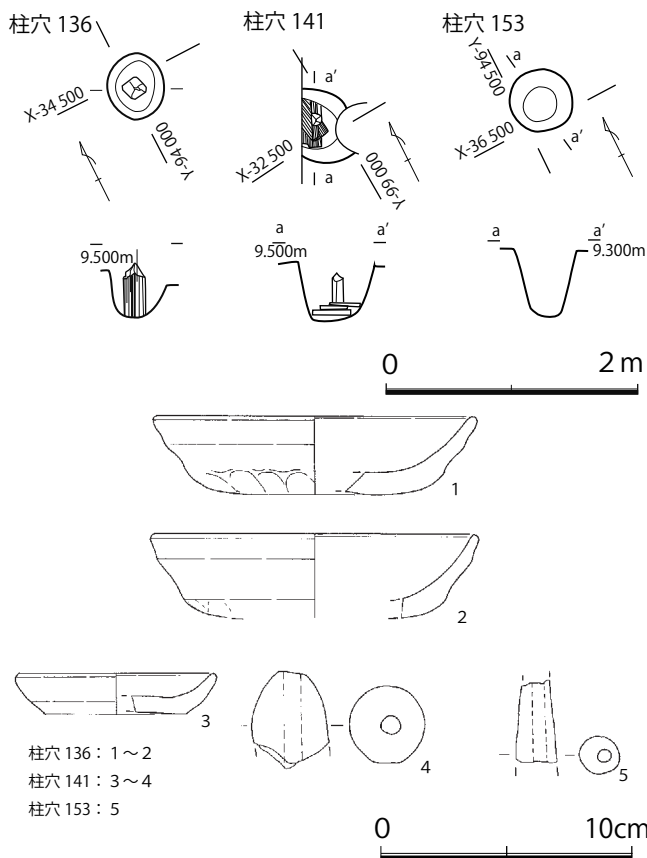


図 29 第Ⅲ面柱穴

柱穴 136 は調査区北東の木樋の近くで検出した。柱穴 154・155 を切る。20cm角の柱を持つ。平面形は楕円形で断面形はU字型である。規模は 51cm×46cmで底面標高が 8.980 mを測る。埋土は炭を多く含む黒褐色強粘質土である。出土遺物の 1 と 2 は手捏ねかわらけ大皿、指頭痕が顕著であり、口縁のヨコナデが強い。柱穴 141 は調査区の北西で検出した。三枚の礎板と幅 10cmに満たない杭のような柱を持つ。柱穴 142 に切られ、平面形は楕円形、断面形はU字型である。規模は 61cm×(26)cmで底面標高は 8.955cmを測る。埋土は 10cm大の泥岩と炭化物が入る黒褐色粘質土である。出土遺物は 3・4で、3はロクロ成形のかかわらけ皿小型。体部に稜が巡りやや内湾する。内底面弱くナデが入り、底部に板状圧痕が残る。4は土製品の土錘片で微かに指頭痕が残る。柱穴 153 は調査区の東側で検出した。柱穴 249 を切る。平面形は円形で断面形はU字型である。規模は 52cm×51cmで底面標高は 8.715 mである。出土遺物は 5の土製品の土錘である。柱穴 152からは鉄滓が出土し写真のみ掲載した。

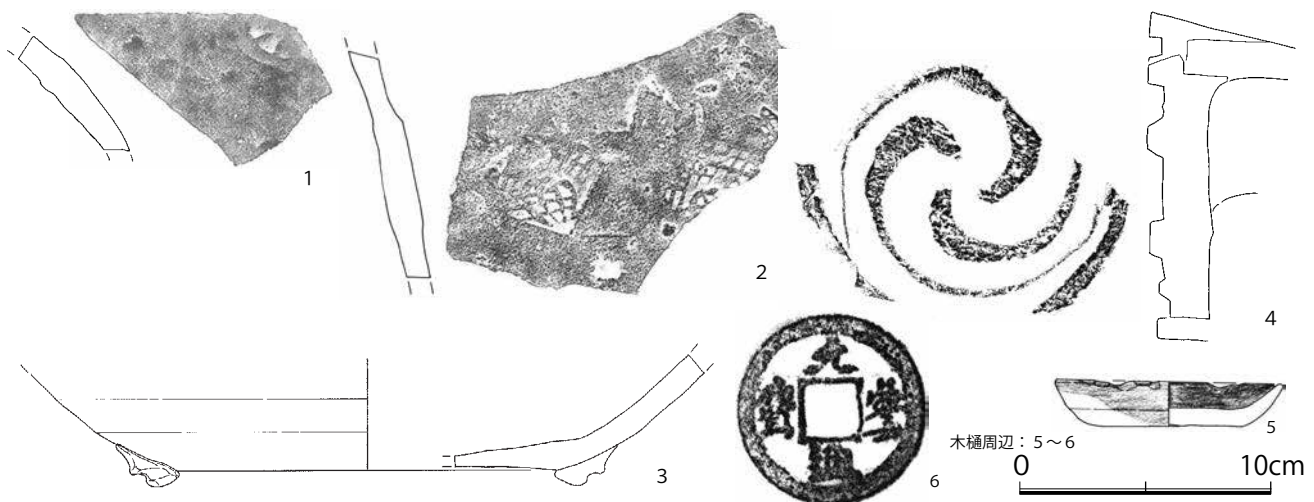


図 30 第Ⅲ面直上出土遺物

11はロクロ成形かわらけ皿大型。器高が高く口縁部外反する。内底面はナデが入る。胎土はやや良土である。12は常滑、甕胴部の押印部分。薄くてあまり判然としない。13は常滑甕の肩辺りの押印部分で、「上」という文字に縦の4本線が加わる。14は備前の播鉢である。5条の播り目が見られる。かなり摩滅している。15は瀬戸の縁釉小皿、回転ヘラ削りによる簡易的な削り出し高台が付く。口縁部には緑色の透明釉がかかる。胎土は硬質な良土である。内底面が摩耗している。

柱穴 (図 29)

柱穴 136 は調査区北東の木樋の近くで検出した。柱穴 154・155 を切る。20cm角の柱を持つ。平面形は楕円形で断面形はU字型である。規模は 51cm×46cmで底面標高が 8.980 mを測る。埋土は炭を多く含む黒褐色強粘質土である。出土遺物の 1 と 2 は手捏ねかわらけ大皿、指頭痕が

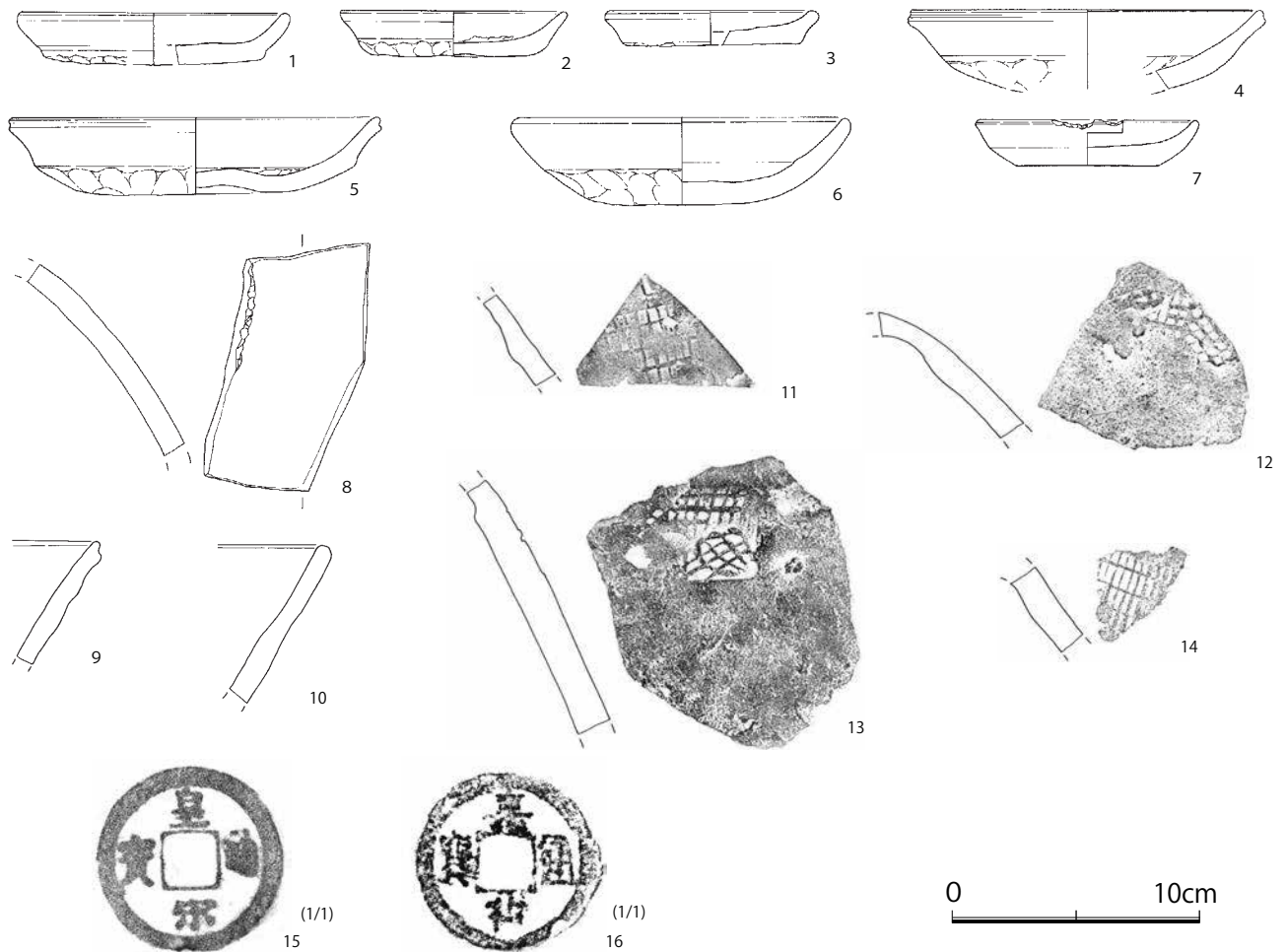


図 31 第Ⅲ面出土遺物

第Ⅲ面直上出土遺物（図 30）

1 は常滑の甕肩部片の押印部分で、文様は車輪・菊花である。2 は常滑の甕胴部片の押印部分である。文様は方形に斜格子である。3 は瀬戸の折縁深皿の底部片である。底部、体部外面は回転ヘラ削りで、脚が付く。内面は淡灰緑色の灰釉を刷毛塗りしている。胎土は軟質のやや良土である。4 は東海尾張系の軒丸瓦である。文様は左回りの三つ巴文である。巴文は断面が台形状で、頭（先端部）がとがり気味、尾の末端は周縁と連なる。周縁の幅は狭い。瓦当は離れ砂が付き背面は横位のナデで粗く整形される。丸瓦部径と瓦当径がやや異なり、横長にいびつである。5・6 は木樋の周辺から出土した面上遺物である。5 はロクロ成形の小型かわらけである。特に内面にくまなく油煙煤が付着している。また口縁の一部を打ち欠いている。内底面にナデがはいり、底部は板状圧痕が残る。6 は北宋銭「元豊通寶」行書。初鑄年は 1078 年である。

第Ⅲ面出土遺物（図 31）

1 から 3 は手捏ねかわらけの小型である。1 は粉質の良土で、1 段の指頭が見られる。2 は口縁の稜が弱い。内底面にナデが入り、底部に板状圧痕が僅かに残る。胎土は砂をやや多く含むが良土である。3 は作りがやや粗雑で底部が扁平である。胎土は砂を含む良土。4 から 6 は大型の手捏ねかわらけである。4 は口唇部に沈線が走る。内底面のナデは口縁部のヨコナデにより切られる。小片ながら二段の指頭痕が確認できる。胎土は含有物の少ない良土である。5 は口唇部に沈線巡り、内底面中央は盛り上がる。体部に口縁のヨコナデによる強い稜が入る。内底面のナデは口縁部のヨコナデに切られる。指頭痕

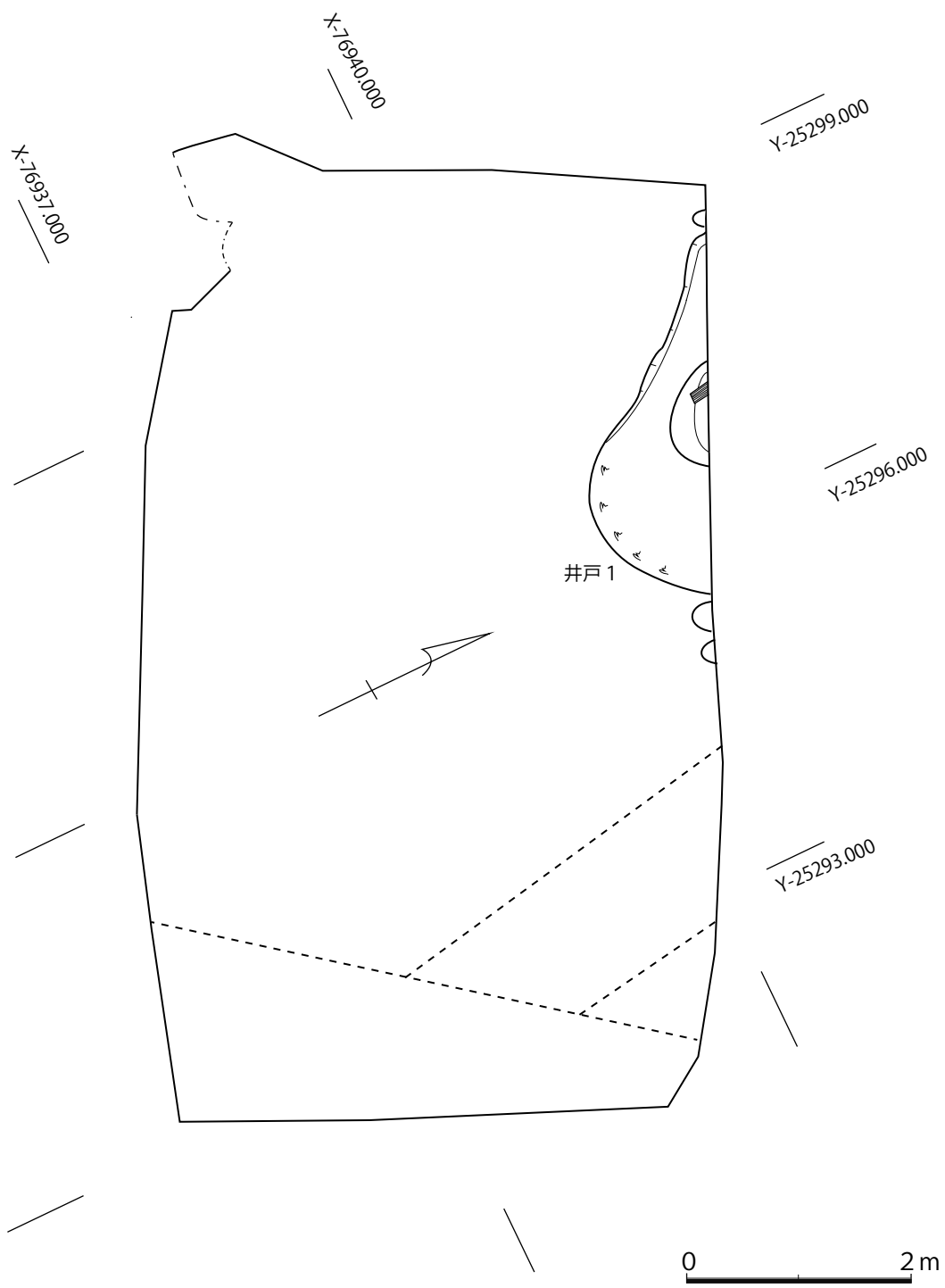


图 32 第Ⅲb 面全体図



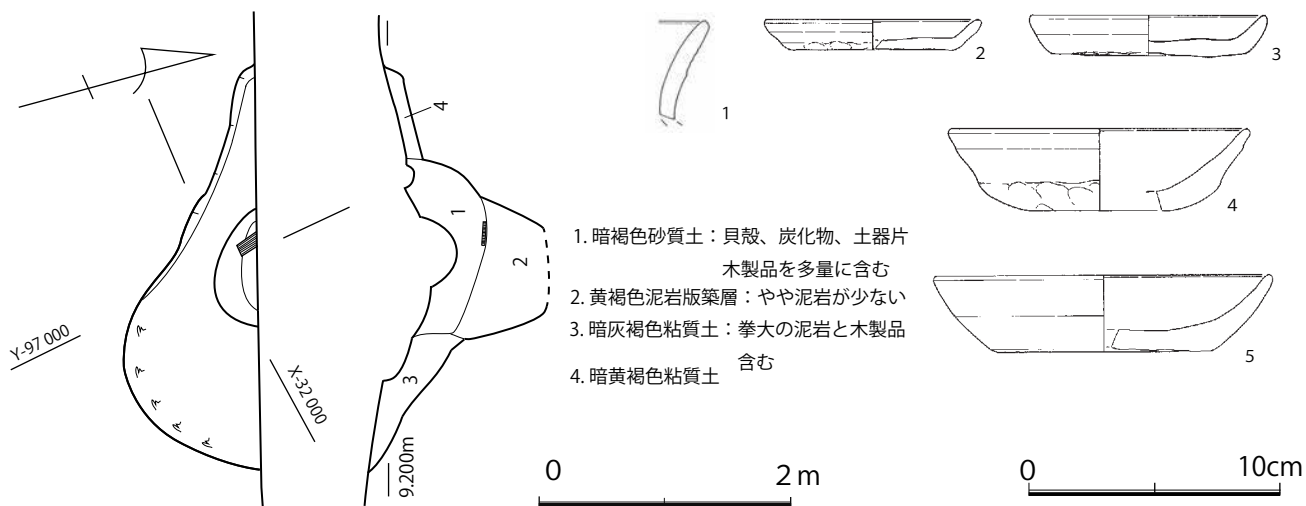


図 33 第Ⅲ b 面井戸 1

は二段確認できる。胎土は砂を少量含む良土である。6 は全体に摩滅しているが体部に二段の指頭痕が確認できた。口縁部のヨコナデによる体部の稜は弱い。胎土は粉質の良土である。7 は小型のロクロ成形かわらけである。口縁部の一部が打ち欠かされている。内底面にナデが入り、外体部の中央に稜が巡る。胎土は含有物の多いやや粗土である。8 は渥美の甕胴部片、転用打ち欠き陶片である。1 辺の角が打ち欠かされている。9 は常滑片口鉢 I 類の小片である。口唇部に沈線が巡る。1 段階 3 型式が比定出来よう。10 は常滑片口鉢 II 類の小片である。体部はナデ上げ、内面はやや摩滅している。胎土は小石粒等の含有物が多い。第 2 段階 5 型式であろう。11 は渥美の甕胴部片、格子文の押印部分である。12 は常滑の甕肩部片、斜格子の押印部分である。13 は常滑の甕胴部片で格子 + 斜格子の押印部分である。14 は常滑の甕胴部片の格子の文様部分である。15 は北宋銭「皇宋通寶」真書で、初鑄年は 1056 年である。16 は判読が難しく「嘉□通寶」としか見えないがおそらく、北宋銭の「嘉祐通寶」の真書であろう。初鑄年は 1056 年である。

## 5. 第Ⅲ b 面遺構と出土遺物

第Ⅲ面から第Ⅳ面まで掘り下げる間に面としては非常に捉えにくく調査が不完全となった、第Ⅲ b 面の検出がある。海拔は 9.25m を測り、部分的に泥岩による粗い地形がなされていたようである。井戸の検出がある。遺物は土師器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、渥美甕、常滑甕の出土があるがいずれも井戸 1 からの出土である。

### 井戸 1 (図 33)

調査区北西で北壁に切られて検出した。このため遺構は底部まで掘り上げることが出来なかった。埋土は貝殻、炭化物、遺物片、木製品を多量に含む。掘り方は浅く不整形である。掘り方の規模は 320cm × 104cm、井戸は (93)cm × 35cm で深さは (1.5)m である。出土遺物の 1 は土師器壺の口縁小片である。三条の沈線が巡るようである。2、3 は小型の手捏ねかわらけである。底部が扁平であるが 2 はヨコナデがきつく指頭痕との間の稜がはっきりしている。4 は大型の手捏ねかわらけである。体部は二段の指頭痕が顕著であり作りが丁寧である。胎土は砂の多いやや良土。5 はロクロ成形かわらけの大型である。内底面弱いナデが入る。底部は乾燥台から剥がした時の棒状の圧痕がある。写真のみの掲載で桃の種の出土がある。掘り方からは (18)cm × 12.5cm、厚さ 3.5cm の加工岩の出土がある。(写真のみの掲載)

表4 第三面遺構観察表

遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考	遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考
P136	51.0	46.0	32.0	8.980	A/P154・155を切る柱残る	P197	22.0	20.0	11.0	9.220	A
P137	65.0	(54.0)	49.7	8.733	A/建物3/柱が残る	P198	34.0	28.0	36.5	8.975	A/P199を切る
P138	28.0	27.0	6.0	9.215	A	P199	19.0	(13.0)	6.0	9.275	A
P139	26.0	26.0	23.5	9.075	A	P200	40.0	39.0	10.5	9.195	A
P140	47.0	44.0	48.0	8.830	A/P176を切る/建物3/柱残る	P201	28.0	16.0	6.0	9.275	A
P141	61.0	(26.0)	38.5	8.955	A/柱が残る	P202	42.0	(29.0)	9.0	9.240	
P142	46.0	42.0	23.0	9.090	D	P204	33.0	(24.0)	10.0	9.225	A
P143	38.0	(25.0)	24.5	9.090	B	P205	38.0	35.0	9.5	9.215	A
P144	19.0	19.0	6.5	9.335		P206	44.0	44.0	11.0	9.190	A/P207を切る/建物3
P145	51.0	43.0	34.0	8.985	A/P202・204/礎版残る	P207	52.0	35.0	85.0	9.205	A
P146	47.0	46.0	83.0	8.515	建物3/柱残る	P208	(46.0)	(17.0)	3.0	9.200	B
P147	34.0	29.0	26.5	9.055	A	P209	23.0	21.0	34.0	8.925	A
P148	46.0	43.0	41.0	8.875	A	P210	41.0	35.0	8.0	9.195	A
P150	59.0	43.0	76.5	8.490	A/建物3/柱残る	P211	25.0	25.0	4.0	9.220	A
P152	14.0	10.7	57.0	8.670	A/建物3/柱残る	P212	19.0	15.0	3.0	9.230	A
P153	52.0	51.0	53.5	8.715	P249を切る	P213	19.0	19.0	4.5	9.225	A
P154	(23.0)	22.0	35.5	8.945	P55を切る	P214	20.0	20.0	6.0	9.205	A
P155	(43.0)	(19.0)	120.0	9.150	A/建物3	P215	26.0	26.0	10.0	9.170	B
P157	46.0	(33.0)	47.5	8.735	A	P216	20.0	13.0	8.0	9.220	A
P158	24.0	(21.0)	10.0	9.200	P186を切る	P218	45.0	43.0	17.0	9.100	P219を切る
P159	50.0	43.0	44.5	8.830	礎版残る	P219	(30.0)	(9.0)	8.5	9.185	D
P160	51.0	41.0	38.0	8.920	A/建物3/柱残る/P188を切る	P220	25.0	25.0	7.0	9.180	A
P161	33.0	33.0	8.0	9.220	A/建物3	P221	21.0	16.0	9.0	9.210	A/P161を切る
P162	(43.0)	(19.0)	29.0	8.950		P222	28.0	(12.0)	3.5	9.285	B
P163	50.0	43.0	33.0	8.945	A	P223	(41.0)	37.0	4.5	9.270	B/P224を切る
P164	17.0	17.0	14.0	9.110	E	P224	31.0	(22.0)	7.5	9.220	D/P225を切る
P165	28.0	(14.0)	20.0	9.070	E	P225	24.0	(19.0)	8.5	9.250	
P166	48.0	38.0	24.5	9.015	A/P165を切る	P226	45.0	38.0	8.5	9.245	A/P224を切る
P167	29.0	26.0	24.5	9.035	A/P166を切る	P227	21.0	18.0	12.0	9.220	
P168	30.0	29.0	20.5	9.065	D/P166・167を切る	P228	30.0	25.0	6.0	9.260	A/P229を切る
P169	25.0	(12.0)	7.0	9.235	E	P229	29.0	(19.0)	3.0	9.290	B/P230を切る
P170	23.0	19.0	15.0	9.135	B	P230	18.0	(10.0)	0.5	9.325	A
P171	23.0	22.0	9.5	9.175	A	P231	39.0	39.0	10.0	9.220	B/P232を切る
P172	39.0	38.0	3.0	9.220	A	P232	25.0	11.0	5.0	9.240	A
P173	23.0	(15.0)	9.5	9.170	B	P233	21.0	14.0	6.5	9.225	A
P174	(24.0)	(20.0)	15.5	9.135	B	P234	18.0	17.0	4.0	9.280	B
P175	37.0	34.0	10.0	9.190	D	P235	18.0	15.0	5.0	9.260	A
P176	65.0	40.0	15.5	9.130	B	P236	14.0	14.0	14.5	9.225	A
P177	40.0	34.0	4.5	9.240	A	P237	13.0	13.0	6.0	9.250	B
P178	47.0	(24.0)	16.5	9.135	A	P238	29.0	27.0	17.0	9.140	P239を切る
P179	46.0	(30.0)	23.5	9.070	A/P178・P180を切る	P239	21.0	(8.0)	7.0	9.240	A/P238を切る
P180	21.0	(11.0)	10.5	9.200	B/P178を切る	P240	24.0	(24.0)	25.0	9.050	A
P181	45.0	(30.0)	24.0	9.070	B/P179を切る	P241	68.0	52.0	25.0	9.050	A/P242切る/建物3/柱残る
P182	27.0	22.0	4.0	9.270	E	P242	41.0	30.0	4.5	9.255	
P183	25.0	(24.0)	10.5	9.205		P243	43.0	41.0	16.5	9.095	A/P159を切る
P184	36.0	24.0	8.5	9.230	P183を切る	P244	37.0	32.0	27.5	9.025	柱残る/建物3
P185	34.0	32.0	17.5	9.130	A	P247	33.0	30.0	28.0	8.990	A/柱残る/建物3
P186	38.0	(29.0)	38.5	8.930		P248	22.0	21.0	16.0	9.120	A
P187	41.0	(21.0)	20.5	9.090		P249	(40.0)	38.0	29.0	8.970	A/建物3
P188	51.0	44.0	39.0	8.920	P189を切る	P250	37.0	36.0	5.5	9.140	B
P189	20.0	19.0	7.5	9.225	P190を切る	P251	20.0	(11.0)	5.5	9.205	A
P190	25.0	20.0	8.5	9.225		P252	60.0	45.0	57.0	9.240	建物3/柱残る
P191	34.0	(21.0)	7.5	9.225		P410	26.0	20.0	6.5	9.255	P228を切る
P192	48.0	24.0	31.5	8.775		P411	25.0	23.0	20.8	8.882	
P193	32.0	30.0	6.5	9.230		P412	52.0	45.0	17.5	8.945	
P194	12.0	12.0	11.0	9.180		P413	51.0	(32.0)	35.0	8.800	
P195	53.0	45.0	16.5	9.155	A/P190・223を切る/建物3	D21	(82.0)	(48.0)	3.0	9.230	B/方形土坑
P196	36.0	34.0	2.5	9.315	A	D22	(56.0)	(48.0)	20.5	8.985	A/方形土坑

土層注記

- A類 黒褐色強粘質土：1～3cmの泥岩粒、炭化物の多く入る黒い土
- B類 暗褐色粘質土：1～2cmの細かい泥岩がやや入る。  
赤色粒子が見られる赤っぽい土（A類に切られる。）
- C類 黒褐色粘質土：泥岩が少なく、炭化物が多く入る黒々した土  
（B類に切られる）
- D類 黒褐色粘質土：10cm大の泥岩、炭化物が入る。（A類を切る）
- E類 黒褐色粘質土：1cm大の泥岩を極少量含み、炭化物を含む黒い土。

（単位：海拔m / 以外 cm）  
（P：柱穴 D：土坑）

## 6. 第Ⅳ面の遺構と出土遺物

第Ⅳ面は暗褐色粘質土による中世基盤層であり、海拔は 9.200m を測る。池と溝の検出があり、その間を暗渠によりつなぐ。また、溝の先には落ち込みがある。暗渠近くの池の縁で羽子板、縄などの出土がある。全体ではほかに縄文土器、土師器、須恵器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、白かわらけ、青磁、渥美、常滑、瀬戸、銭、土製品、木製品の出土がある。

### 池 1 (図 35・36)

池は調査区中央やや東寄りて弧を描き南西に広がるように検出した。調査区北西隅では微高地がある。池の落ち込みは急な勾配である。深さは 1 m を掘ったが、掘りきれしていない。土層の観察により第一次堆積、第二次堆積と池の底が二時期あったことは掴めた。池は最長で幅 5.8 m を確認している。東岸では木組の暗渠を検出しており池の水位は暗渠により調節していたことが推測できる。出土遺物は 1 から 3 は土師器の甕である。1 は古墳時代後期の駿東型の甕である。口唇部に折り返しが付き頸部は九の字に曲がる。2、3 は奈良・平安時代の相模型の甕である。4、5 は小型の手捏ねかわらけである。4 は一段の指頭痕が巡る。強くヨコナデが入り、稜線がくっきり入る。比較的丁寧なつくりである。5 は 4 に比べると粗雑なつくりである。6 は大型の手捏ねかわらけである。二段の指頭痕が顕著にみられ、内底部中央はやや盛り上がる。指頭痕とヨコナデの間は強く稜が入る。作りはとても丁寧で、形がよく、胎土も含有物の少ない良土である。7 は東幡の甕胴部片である。胴部の外面は斜格子の叩き目がくまなく残る。内面は指頭痕が顕著である。8 は東幡の捏ね鉢底部片。内外面とも糸切りする。円盤状に底部を糸切りして輪積み成形するのだろう。9 は常滑甕の転用摩耗陶片である。一辺の一部が摩耗している。10 は同安窯系青磁櫛搔き文皿である。体部下方に稜を持ち外反しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ削りで露胎する。内底面は細かい櫛点描文を有する。釉は緑色の透明釉でやや薄く施釉する。胎土は精良堅緻である。I 類 2 b に比定出来よう。11 は土製品の土錘である。12 は漆器の椀の底部。内外漆が塗られる。無文である。13 は草履芯片、わらの圧痕が残る。14、15 は櫛である。漆が塗ってある。14 は櫛目が疎である。15 は密であり、意匠が施してある。16 は羽子板である。暗渠の近くで出土した。柄の部分は短い、長さ 38.1cm、厚さは 1.0cm を測る。形代というよりは実用向きである。後述するが、現段階で日本最古の羽子板である。17 は縄、羽子板の近くで出土した。両端はちぎれているが長さ 19.5cm、幅は 3.8cm である。素材は藁とみられる。縄は右向きに縋われている。縄はより合わせる時にほぐれない様に捩って搓るがその様相は見取れた。

### 暗渠 (図 37・38)

暗渠は調査区の東側で検出した。池 1 と溝 1 を繋いでいる。海拔は 9.30 m である。傾きは見られずほぼ水平のようだ。暗渠は池の水位を調節するため池から溝 1 に水を流し、溝 1 は落ち込みに水を流したと見られる。暗渠の中央は第Ⅲ面の柱穴に壊されていた。規模は長さ 151.0cm、幅は 15cm、高さは 18cm を測る。底板の両端に角材を打ちつけ水路を作り、蓋は鉄釘で固定して地中に埋めた。掘り方であるが完掘には至らなかった。

### 落ち込み 4 (図 37)

落ち込み 4 は調査区東端で検出した。現地地表下 2 m を掘っても底は検出されなかった。確認出来た最

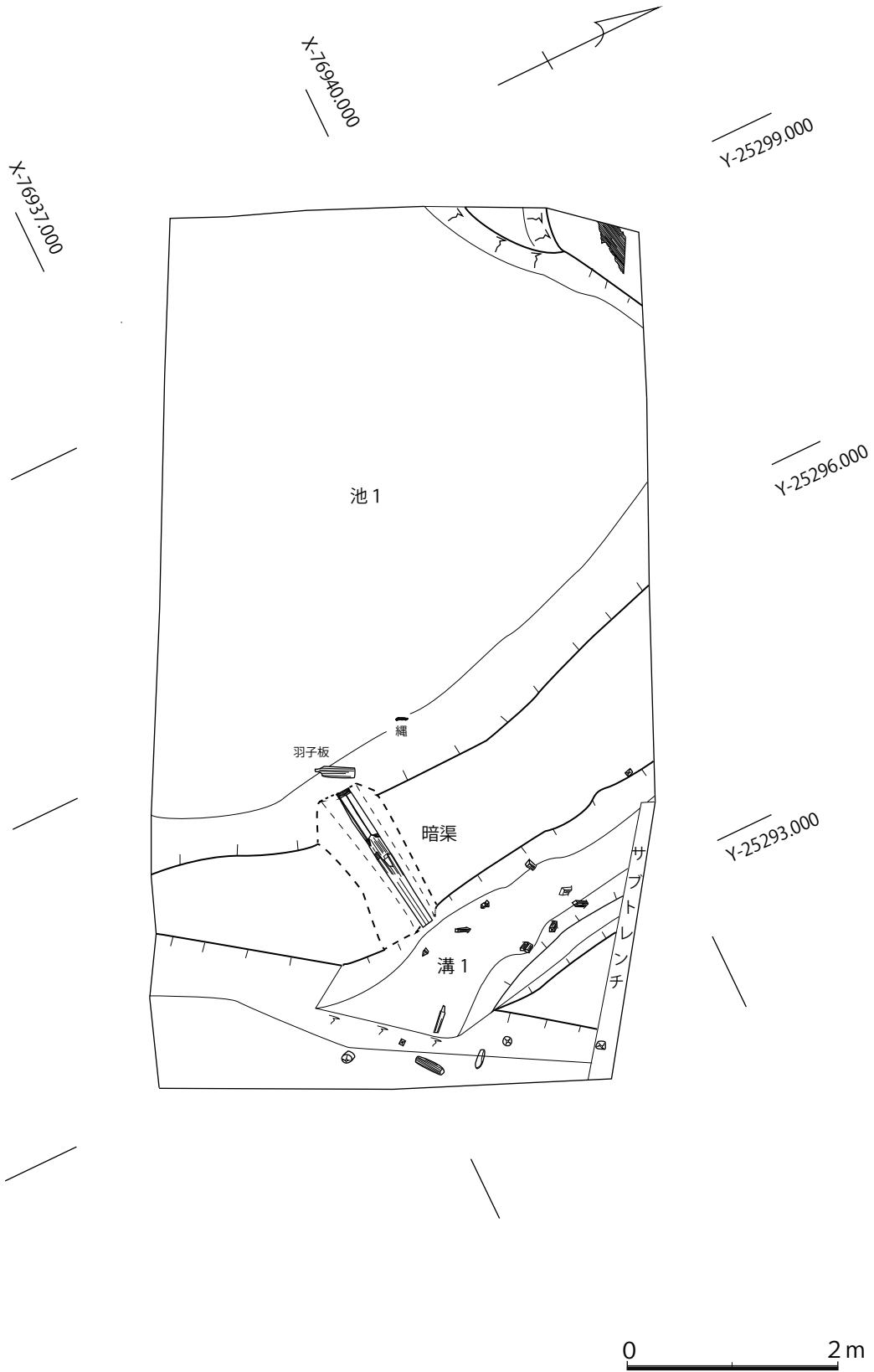
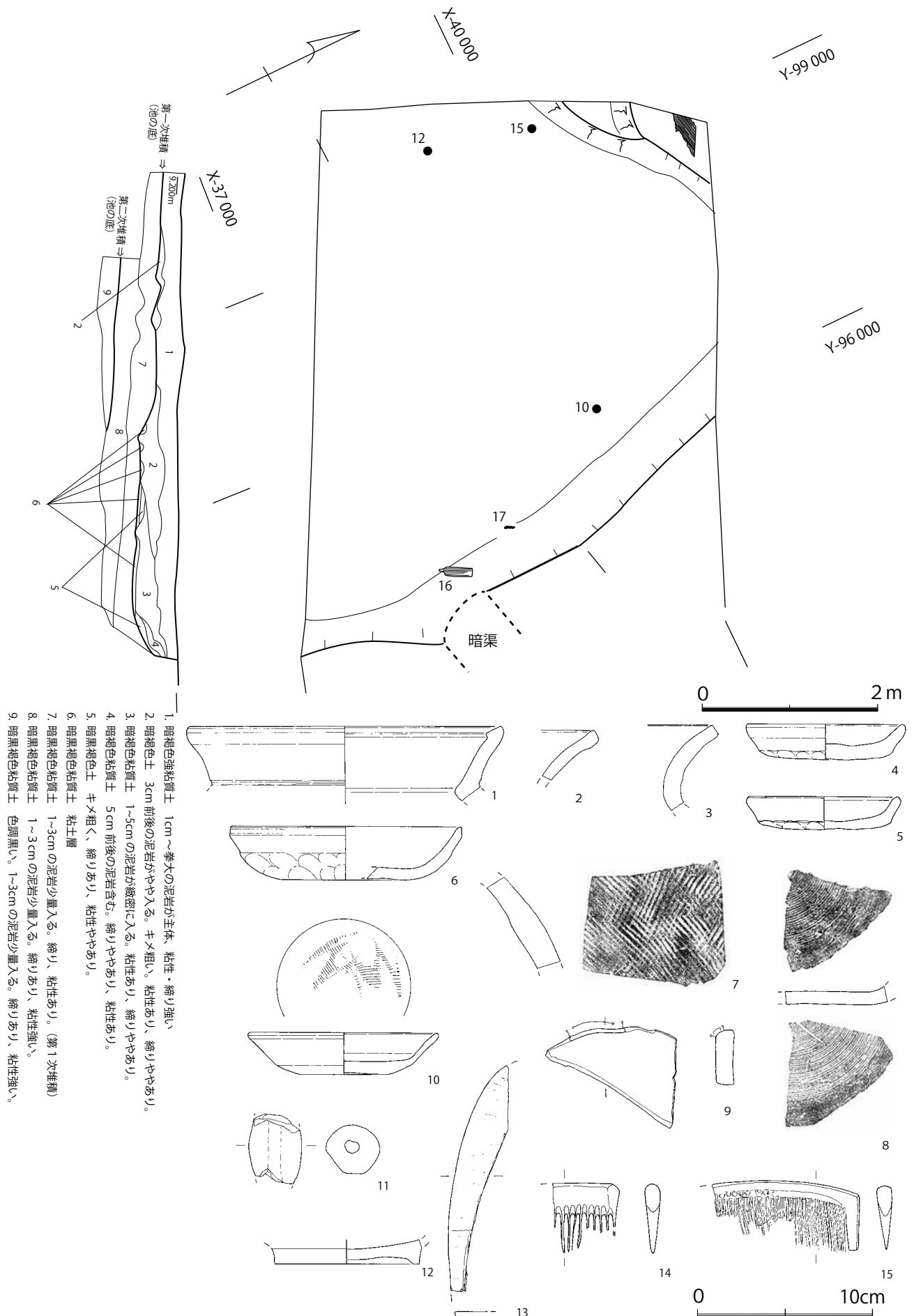
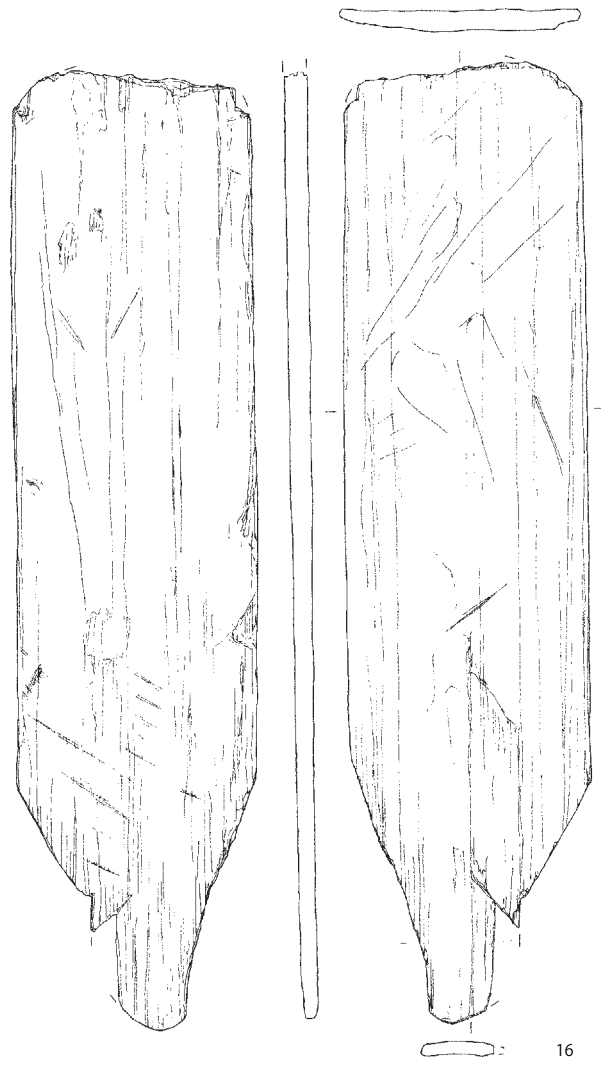


図 34 第IV面全体図



- 1. 暗褐色強粘質土 1cm～拳大の泥岩が主体 粘性・締り強い
- 2. 暗褐色土 3cm 前後の泥岩がやや入る。キメ粗い。粘性あり、締りややあり。
- 3. 暗褐色粘質土 1～5cmの泥岩が緻密に入る。粘性あり、締りややあり。
- 4. 暗褐色粘質土 5cm 前後の泥岩含む。締りややあり、粘性あり。
- 5. 暗黒褐色土 キメ粗く、締りあり、粘性ややあり。
- 6. 暗黒褐色粘質土 粘土層
- 7. 暗黒褐色粘質土 1～3cmの泥岩少量入る。締り、粘性あり。(第1次堆積)
- 8. 暗黒褐色粘質土 1～3cmの泥岩少量入る。締りあり、粘性強い。
- 9. 暗黒褐色粘質土 色調黒い。1～3cmの泥岩少量入る。締りあり、粘性強い。

図35 第IV面池1 (1)



0 10cm



0 10cm

图 36 第IV面池 1 (2)

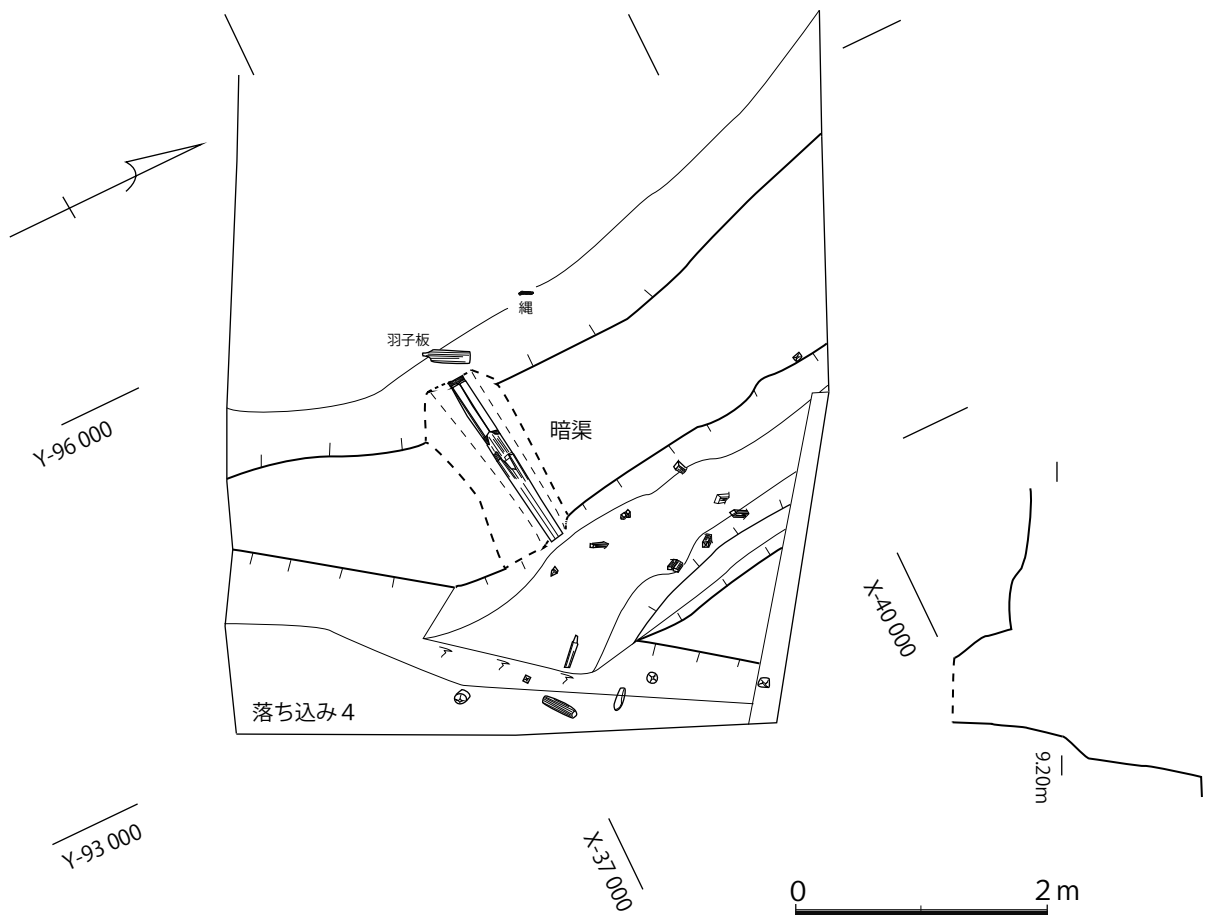


図 37 第Ⅳ面暗渠・落ち込み 4

大幅は 1.50 m である。溝 1 は落ち込みに注ぎこむ様相を示しており、これにより、第Ⅰ面より続いた落ち込みは溝、もしくは現在調査地の東に流れる豆腐川の可能性がある。また溝 1 との接点付近では杭が何本か見られ施設があったことをうかがわせる。

#### 溝 1 (図 39)

調査区北東隅で検出した。東側に段差を持ちながら 118.0cm の幅を持ち、確認された長さは 305.0cm である。深さは 50cm から 60cm であり緩やかに落ち込み 4 に流れ込む。底には流路に沿って杭が検出されている。後に第Ⅲ面では先述したように木樋を伴う溝となる。出土遺物は 1 が古墳時代の坏である。全体に摩滅をしているがヘラ削りされている。2 は土師器の相模型のか甕の口縁部片、砂を多く含む胎土である。3・4 は小型の手捏ねかわらけである。3 は底部が平坦で指頭痕も分かりにくい。4 は胎土は良土で作りも丁寧である。5 は「開元通寶」の隸書である。

#### 第Ⅳ面出土遺物 (図 40)

1 は上層で出土したロクロ成形の大型かわらけである。体部はやや内湾して立ち上がり、二本の稜線が巡る。底部は板状圧痕が残る。2 は須恵器の壺の口縁片である。胎土は含有物の少ない精良な土である。3、4 は手捏ねかわらけの大型である。3 は指頭痕とヨコナデの間の稜線が弱い。4 は胎土が粉質の良土であり、作りが丁寧で稜線がはっきりしている。5、6 はロクロ成形小型かわらけである。5 は全体に摩滅している。6 は油煙煤を付着させた灯明皿である。内底面のナデがきつく、作りがやや粗雑。7 はロクロ成形大型かわらけである。内底面のナデが強く残る。二次焼成を受け灰色に変色している。

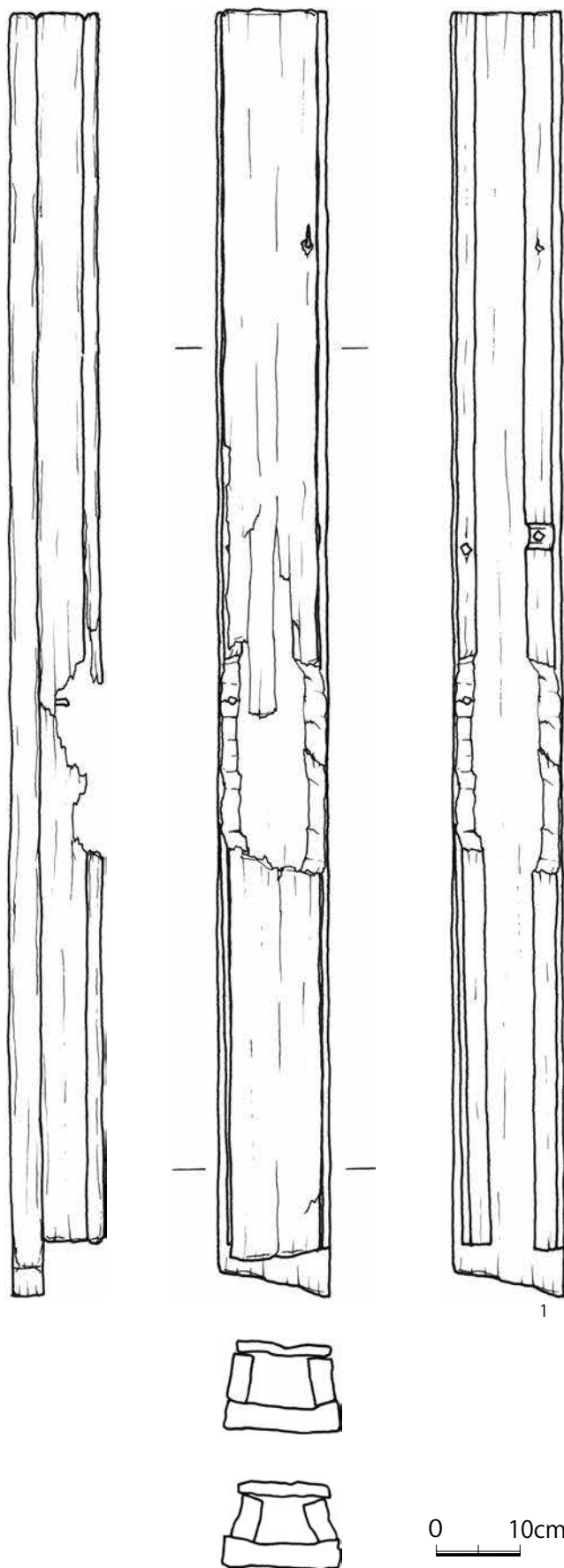


図 38 第IV面暗渠

8はロクロ成形かわらけの底部に直径9mmの窪みがある。9は渥美の甕の格子の押印部分である。10は常滑甕の肩のあたり、押印部分である。文様は格子である。11は常滑の甕の転用摩耗陶片である。二辺を使用している。12は常滑片口鉢I類である。口唇部に沈線が巡る。第1段階3型式あたりか。13は山茶碗窯系の無頸壺である。肩部に指頭による文様を施す。口縁の端がやや歪みを見せるのは片口の部分か。14は竜泉窯鎬蓮弁文碗、胎土は精良堅緻である。釉薬は緑灰色で透明。薄く施釉され貫入が入る。II-b類であろう。

## 7. 表採遺物 (図 41)

1は古墳時代後期の甕、口縁部片。頸部の内側をへら調整している。2は手捏ねかわらけの小型である。底部は平坦で口縁のヨコナデと指頭の境は緩く稜が入る。3から5は手捏ねかわらけの大型である。3は二段の指頭痕が見られる。内面に白色の付着物がある。4は内底面に爪の痕が残る。5は粉質の良土である。内底面が盛り上がる。6と7はロクロ成形かわらけの小型である。6は内底面がナデにより中央が盛り上がる。7は内底面のナデが強く入る。8は常滑片口鉢I類である。口縁は丸く膨らむ。第2段階5～6a型式。9、10は常滑片口鉢I類の底部片である。内面は両方とも摩滅している。底部は砂底で貼り付け高台の上は横位のへら削りである。11は常滑片口鉢のI類口縁部片、口唇部に沈線が巡る。第1段階3型式か。12、13は常滑の甕の口縁部片である。12は縁帯が下に延びない。第1段階4型式。



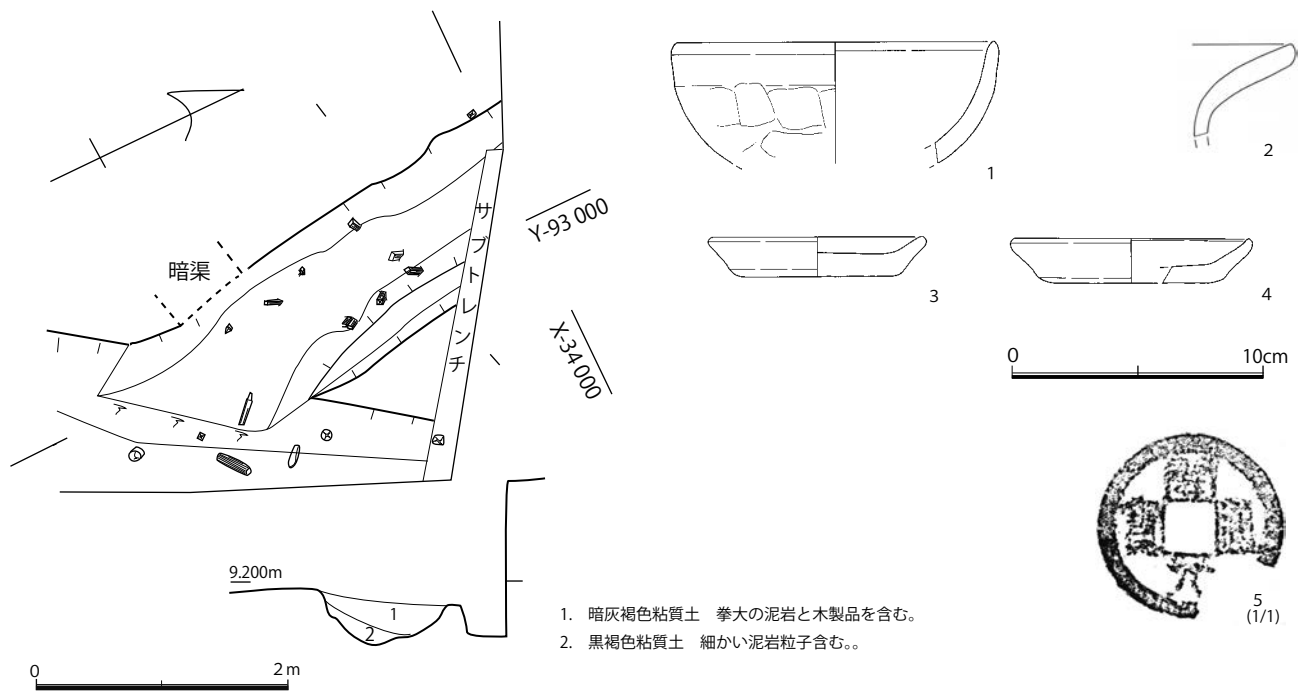


図 39 第IV面溝 1

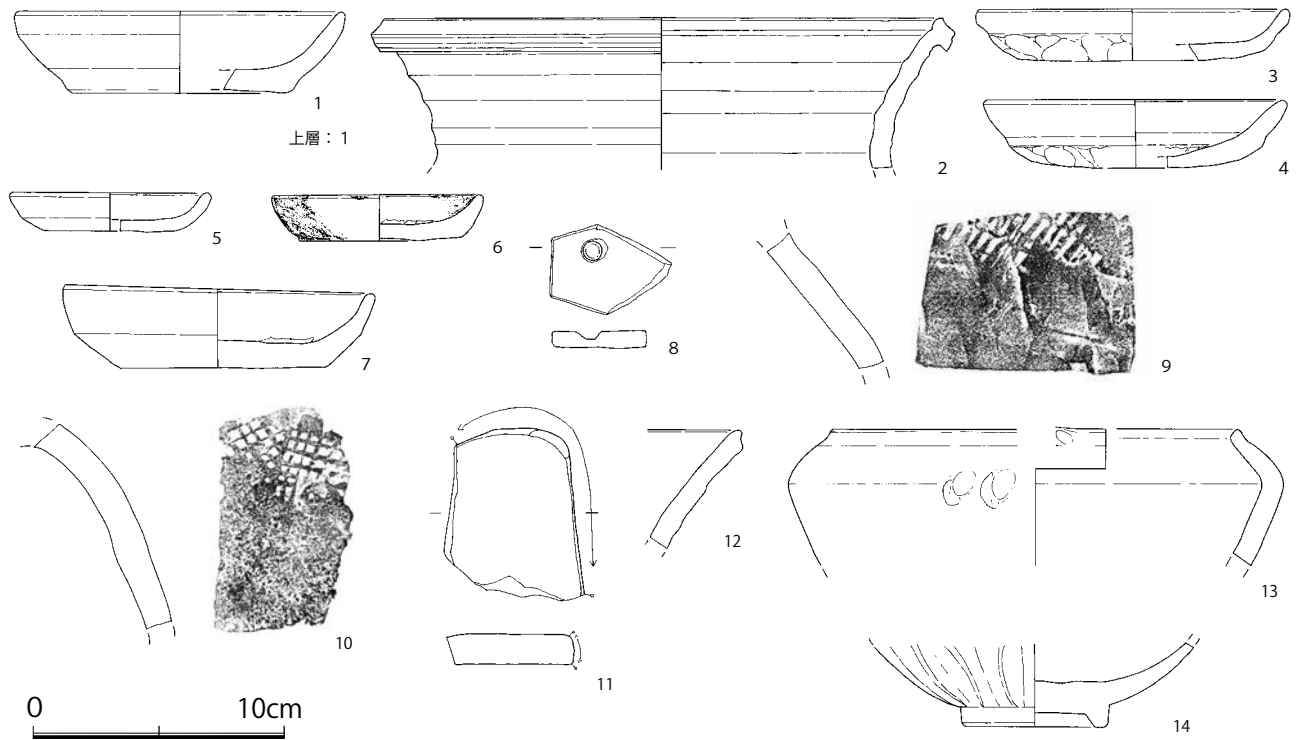


図 40 第IV面出土遺物

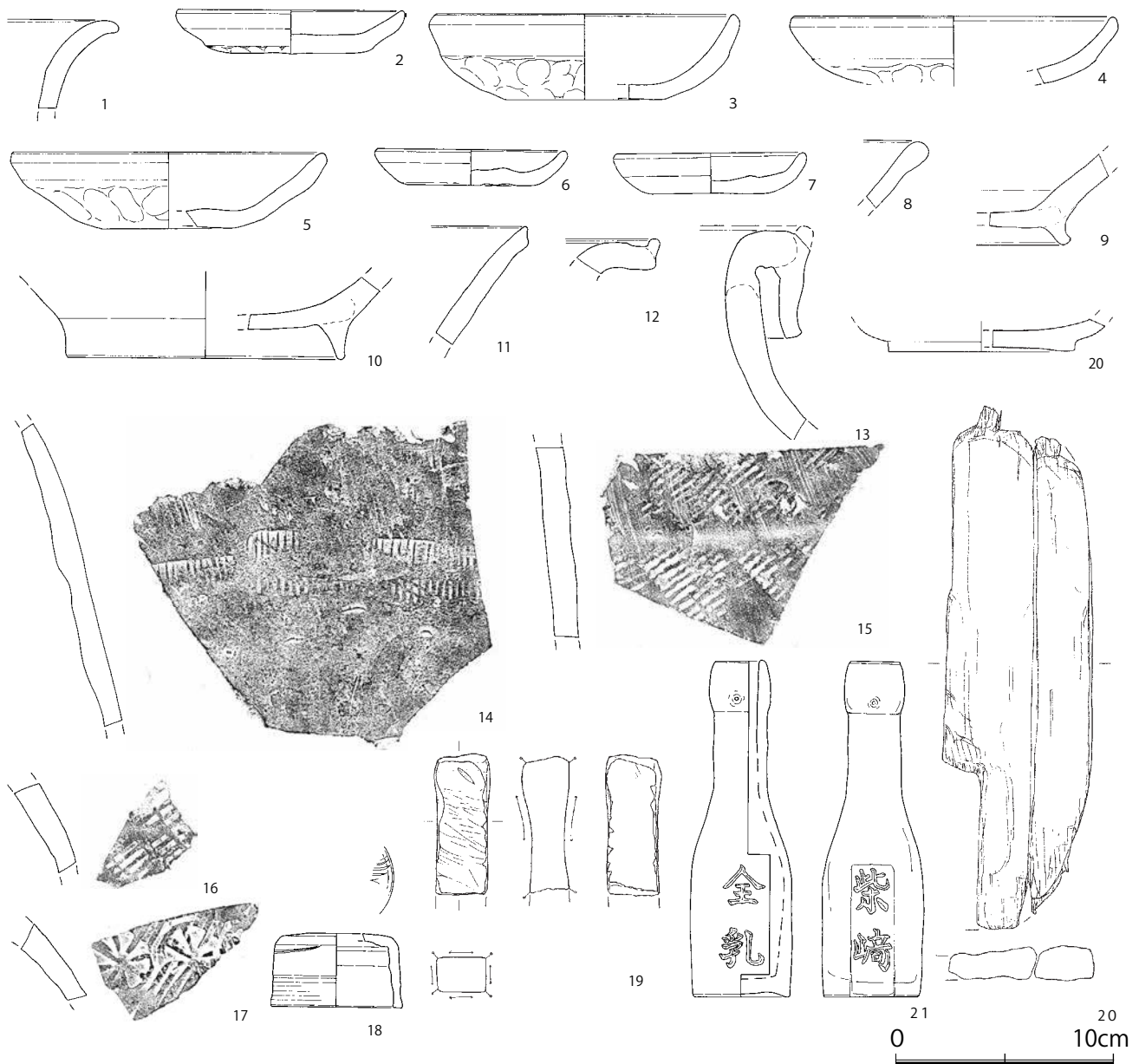


図 41 表採遺物

13は縁帯の上部が欠損している。第3段階8型式。14～17は常滑甕の胴部で14・15・16は格子文の押印が施される。17は車輪・菊花文の押印である。18は青白磁、梅瓶の蓋である。胎土は精良堅緻で、釉薬は淡青水色である。頂部の文様は不明、裾部には4条の沈線が巡る。19は中砥で上野産。砥面は4面全て使用している。20は木製鍋蓋である。21はガラス瓶である。牛乳の瓶とみられ、「全乳」「柴崎」の文字が読み取れる。鎌倉市由比ガ浜に所在する柴崎牛乳店のものであろう。なお、写真のみの掲載であるが、鉄宰の出土がある。

表5 遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図7-1	I面 掘甕	常滑 甕	口径51.4cm 底径21.4cm 器高92.1cm 輪積み成形 内面に指頭痕、ヨコナデ 外面肩・胴上部に押印有り 胎土は灰色で長石・礫、小石粒をやや多く含む 器表は褐色 口縁～外面肩に茶褐色の自然降灰
図9-1	I面 建物1土坑4	かわらけ 小型	口径(7.5)cm 底径(4.4)cm 器高1.85cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む やや粗土 焼成良好
2	I面 建物1土坑4	かわらけ 小型	口径8.1cm 底径6.3cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
3	I面 建物1土坑4	砥石 中砥	残長[8.1] cm 幅5.4cm 厚5.1cm 砥面2面 伊予産
4	I面 建物1土坑4	銭	紹熙元寶 南宋 1190年 真書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.7cm ※裏文字があるはずだが腐食していて解読できない、元もしくは五カ
5	I面 土坑5	鉄釘	残長[7.1] cm 幅0.7cm 厚0.4cm 重さ6.4g
6	I面 土坑11	かわらけ 大型	口径(11.0)cm 底径(6.4)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
7	I面 土坑11	瀬戸 端反皿	口縁部片 回転ヨコナデ 胎土は灰色で精良土 釉薬は灰緑色の灰釉
8	I面 柱穴41	東海系 かわらけ	底径(4.8)cm 胎土は灰白色で白色粒・小石粒・雲母を含む、やや粗土
図10-1	I面 建物2柱穴47	銭	聖宋元寶 北宋 1101年 篆書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.6cm
図12-1	I面 落ち込み1護岸	かわらけ 小型	口径(7.0)cm 底径(3.5)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で海綿骨針・砂粒・赤色粒・小石粒を含む粗土 焼成良好
2	I面 落ち込み1護岸	かわらけ 大型	口径(12.5)cm 底径7.8cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面強いナデ 胎土は橙色で海綿骨針・赤色粒・砂粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
3	I面 落ち込み1護岸	瓦質 燭台	残長[8.7] cm φ4.9cm 胎土は灰白色で小石粒を含む 器表は黒色処理されている ミガキ
4	I面 落ち込み1護岸	備前 播鉢	胴部片 ヨコナデ 胎土は暗灰色で長石・礫・赤色粒を含む 器表は暗褐色 内面に7条以上の播り目あり
5	I面 落ち込み1護岸	備前 播鉢	底部片 ヨコナデ 胎土は赤橙色で長石・赤色粒、礫をやや多く含む 器表は赤橙色 内面に播り目あり
6	I面 落ち込み1護岸	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石、白色粒を多く含む 器表は灰色 5以前か
7	I面 落ち込み1護岸	瀬戸 大平鉢	底径(16.5)cm 回転ヘラ削り 内面～外面上部まで灰緑色の灰釉を刷毛塗り 胎土は灰黄色で長石・小石粒・白色粒を含む、やや粗土 器表は橙色～淡黄白色
8	I面 落ち込み1	かわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(5.1)cm 器高2.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は黄橙色で海綿骨針・白色粒・赤色粒・砂粒・小石粒を含む、含有物の多い粗土 焼成良好 内底面ナデ
9	I面 落ち込み1	かわらけ 中型	口径(11.6)cm 底径(8.3)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は黄橙色で海綿骨針・砂粒・泥岩粒を含む、含有物の多いやや粗土 焼成良好 外体部油煙煤付着 内面磨滅
10	I面 落ち込み1	鍔付火鉢	胴部片 鍔部に菊花押印あり 外体部菱形文が押印 胎土は橙色で砂粒・白色粒を含む瓦器質 器表は黒色処理されている IVc類
11	I面 落ち込み1	常滑 片口鉢Ⅱ類	口径(36.4)cm 胎土は小石粒、砂粒を多く含む 器表は赤褐色 焼成良好
12	I面 落ち込み1	常滑 甕	口縁部片 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は赤褐色 焼成良好 第3段階9型式
13	I面 落ち込み1	常滑鉢 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長4.6cm 幅4.0cm 厚1.0cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は赤褐色 焼成良好
14	I面 落ち込み1	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長5.6cm 幅4.8cm 厚1.5cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は茶褐色 焼成良好
15	I面 落ち込み1	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長11.3cm 幅9.0cm 厚1.4cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
16	I面 落ち込み1	瀬戸 緑釉小皿	口径(11.2)cm 胎土は黄灰色で砂粒を極少量含む精良軟質土 釉薬は緑釉で透明 焼成良好
17	I面 落ち込み1	瀬戸 天目碗	底径(4.2)cm 削り出し高台、ヘラケズリ 古瀬戸後期様式Ⅰ期 胎土は明黄灰色で砂粒・小石粒を含む軟質土 釉薬は掛け分けしている
18	I面 落ち込み1	瀬戸 鬼板の播り鉢	底径(11.4)cm ヨコナデ 一部ナデアゲ 胎土は明黄色で砂粒を含む軟質土 釉薬は黒褐色 焼成良好 内面に1条8本の播り目、施釉
19	I面 落ち込み1	瀬戸灰釉碗 底部の円盤	底部片 直径5.6cm 厚0.6cm 外底部回転系切り 胎土は暗黄灰色で砂粒を少量含む軟質土 釉薬は暗灰色
図13-1	I面 土坑2	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.5)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
2	I面 土坑2	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面に押印あり 胎土は淡灰橙色で長石・白色粒子、礫をやや多く含む 器表は暗茶褐色
3	I面 土坑2	瀬戸 片口鉢	口縁部片 輪積み成形のちロクロ整形 ヨコナデ 胎土は灰色で長石、礫をやや多く含む 器表は灰色、口縁頂部～内面上部に薄く灰色の自然降灰
4	I面 土坑2	銭	熙寧元寶 北宋 1068年 篆書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.6cm
5	I面 土坑2	砥石 仕上砥	残長[8.5] cm 幅3.0cm 厚0.8cm 側面に切出し痕 砥面3面 鳴滝産
6	I面 土坑15	鉄釘	残長[3.8] cm 重さ2.4g
7	I面 土坑15	銭	聖宋元寶 北宋 1101年 行書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.6cm
8	I面 土坑16	かわらけ 大型	口径(11.8)cm 底径(8.6)cm 器高2.95cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
9	I面 土坑16	鉄釘	残長[4.6] cm 重さ1.6g

表6 遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 13-10	I面 土坑 16	銭	政和通寶 北宋 1111年 隸書 外径 2.4cm 内径 2.0cm 孔径 0.7cm
11	I面 土坑 16	銭	咸平元寶 北宋 998年 真書 外径 2.4cm 内径 1.9cm 孔径 0.6cm
12	I面 柱穴 10	須恵器 甕	口縁部片 ヨコナデ 胎土は灰黄色で長石、小石粒を多く含む緻密土 器表は灰色
13	I面 柱穴 10	滑石 温石	残長 [5.6] cm 残幅 [3.4] cm 残厚 [0.7] cm
14	I面 柱穴 25	かわらけ 大型	口径 (12.0)cm 底径 (7.0)cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡黄橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒、黒色粒やや多く含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
15	I面 柱穴 25	かわらけ 大型	底径 (7.2)cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡黄橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・小石粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 口縁部を打ちかいている
16	I面 柱穴 27	瀬戸 緑釉小皿	口径 (10.7)cm 口縁頂部～内面に施釉 外面は露胎、油煙煤付着 胎土は灰色で白色粒を含む、やや良土 釉薬は淡く薄い灰緑色で透明の灰釉
17	I面 柱穴 27	石加工品	最大長 3.2cm 幅 2.6cm 厚 0.7cm
18	I面 柱穴 28	鉄釘	長 10.3cm 幅 0.6cm 厚 0.4cm 重さ 8.6g
19	I面 柱穴 33	鉄釘	残長 [2.9] cm 幅 0.4cm 厚 0.2cm 重さ 0.8g
20	I面 柱穴 37	チャート	最大長 3.6cm 幅 2.5cm 厚 2.3cm
21	I面 柱穴 39	常滑 片口鉢 I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で礫、長石を多く含む 器表は灰色 5～6a期
22	I面 柱穴 46	常滑 片口鉢 I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石・白色粒・5mm 大の小石粒を含む 器表は灰色 5～6a期
写真のみ	I面 土坑 16	石	長 4.2cm 幅 5.8cm 厚 3.0cm 溶接痕
図 14-1	I面直上	かわらけ 小型	口径 7.3cm 底径 4.7cm 器高 1.7cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
2	I面直上	かわらけ 大型	口径 12.5cm 底径 9.4cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・1～3mm 大の泥岩粒を含む粗土 焼成良好 内底面ナデ
3	I面直上	常滑 片口鉢 II類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色で長石・白色粒を含む 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕をナデ消している 器表は褐色、口縁頂部～内面に薄く暗緑灰色の自然降灰 8期
4	I面直上	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に押印あり 胎土は灰色で長石・礫・白色粒子を含む 器表は褐色
5	I面直上	白磁 壺類	胴部片 素地は白色で精良堅緻 釉薬は淡く薄い灰緑色で半透明、細かい気泡が少量ある、内外面に薄く施釉
6	I面直上	銅製品 野舎	長 2.6cm 残幅 [4.4] cm 厚 0.6cm
7	I面直上	銭	元豐通寶 北宋 1078年 行書 外径 2.4cm 内径 1.8cm 孔径 0.6cm
8	I面直上	銭	景德元寶 北宋 1004年 真書 外径 2.4cm 内径 1.9cm 孔径 0.6cm
9	I面直上	加工石	砂岩 長 5.8cm 幅 5.8cm
図 15-1	I面出土	須恵器 転用磨耗陶片	最大長 2.5cm 最大幅 2.5cm 最大厚 1.0cm 表面が一部磨滅している 胎土は灰色で長石・石英・小石粒・白色粒を含む、やや粗土
2	I面出土	かわらけ 小型	口径 6.9cm 底径 4.8cm 器高 1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 焼成良好 胎土は淡橙色で雲母やや多い、海綿骨針・小石粒・赤色粒・泥岩粒を含むやや粗土
3	I面出土	かわらけ 小型	口径 7.0cm 底径 5.6cm 器高 1.6cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
4	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.7)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.3cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
5	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.2)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.45cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・6mm 大の石粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
6	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.4)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.45cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
7	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.2)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、粗土 焼成良好
8	I面出土	かわらけ 大型	口径 (11.3)cm 底径 (6.6)cm 器高 2.7cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・泥岩粒、砂粒をやや多く含む、やや粗土 焼成良好
9	I面出土	かわらけ 大型	口径 (11.7)cm 底径 (6.6)cm 器高 3.2cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
10	I面出土	瀬戸内系 かわらけ	底部 (4.8)cm ヨコナデ 貼り付け高台 胎土は淡橙白色で雲母・小石粒・白色粒・赤色粒を含む、やや粗土
11	I面出土	常滑 片口鉢 II類	口縁部片 輪積み成形 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕をナデ消している 胎土は灰色で長石を含む 器表は褐色 2段階 5型式
12	I面出土	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消し 外面には押印・工具によるナデ痕あり 胎土は灰色で長石・礫・白色粒子を含む 器表は淡橙色
13	I面出土	青磁 端反り碗	口縁部片 素地は灰白色で精良土 釉薬は淡水色で不透明、気泡あり、施釉やや厚い
14	I面出土	白磁 四耳壺	口径 (11.6)cm 頸部～肩片 素地は灰白色で精良土 釉薬は淡い灰水色で半透明、気泡あり、施釉薄い
15	I面出土	鉄釘	残長 [5.7] cm 重さ 4.2g

表7 遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図15-16	I面出土	鉄釘	残長 [7.3] cm 重さ 4.6g
図17-1	I b面 土坑17	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(6.8)cm 器高3.55cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む粉質土、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
2	I b面 土坑17	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石・礫・白色粒を含む 器表は灰色 5~6a期
3	I b面 土坑17	緑褐釉 壺	口径(14.2)cm 胎土は灰色で小石粒・白色粒を含む緻密土 釉薬は淡灰緑色で不透明、内外面に薄く施釉
4	I b面 土坑17	砥石 仕上砥	残長 [7.8] cm 幅2.4cm 厚1.0cm 砥面2面 側面にも使用痕あり 鳴滝産
5	I b面 土坑18	常滑 甕	胴部片 胎土は暗灰色で白色粒・小石粒を含む 器表は暗灰色で押印有
6	I b面 土坑18	土錘	残長 [2.0] cm 最大φ3.0 孔φ1.0cm
図18-1	I b面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.6)cm 底径(5.0)cm 器高1.8cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む粉質の良土 焼成良好
2	I b面出土	かわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(5.8)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は淡赤橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
3	I b面出土	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.6)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・泥岩粒・赤色粒を少量含む、やや粗土 焼成良好
4	I b面出土	かわらけ 小型	口径(7.2)cm 底径(5.4)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は薄い橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
5	I b面出土	白かわらけ 大型	口径(11.3)cm 回転ロクロ 胎土は橙白色で長石・礫をやや多く含む粗土 焼成良好 瀬戸内系
6	I b面出土	かわらけ 大型	口径(11.6)cm ヨコナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
7	I b面出土	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形胎土は灰色で長石・礫・黒色粒を含む 内面~外面口縁下まで灰色の自然降灰が薄くかかる 器表は灰色 5~6a
8	I b面出土	常滑 甕	胴部片 内面は指頭痕をナデ消している 外面に格子目の押印有 胎土は淡灰黄色で長石・礫を含む 器表は暗褐色
9	I b面出土	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用長7.2cm 幅4.4cm 厚0.9cm 輪積み成形 胎土は灰色で長石、白色粒を多く含む緻密土 器表は灰色
10	I b面出土	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用長8.6cm 幅4.6cm 厚1.7cm 輪積み成形 胎土は灰色で長石、小石粒を多く含む 器表は褐色、灰緑色の自然降灰がかかる
11	I b面出土	土製品 蒸籠の簧	φ(9.0)cm 厚1.6cm 孔φ0.5cm 胎土は橙色で雲母・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む 二次焼成か一部が薄く灰色になっている
12	I b面出土	土錘	残長4.4cm 最大φ3.1cm 孔φ0.8cm 胎土は淡橙色で雲母・白色粒を含む、やや良土
13	I b面出土	土錘	長4.8cm 最大φ2.6cm 孔φ0.8cm 胎土は淡橙色で雲母・白色粒・黒色粒を含む、やや良土
14	I b面出土	鉄釘	残長 [3.6] cm 幅0.3cm 厚0.5cm 重さ1.3g
15	I b面出土	滑石 鍋	口径(24.0)cm 孔φ0.7cm ノミ痕の上から木口状工具でヨコナデしている
16	I b面出土	砥石 中砥	残長 [5.1] cm 幅4.1cm 残厚 [3.2] cm 側面に切り出し痕 砥面3面 伊予産
17	I b面出土	チャート	最大長2.1cm 最大幅2.2cm
写真のみ	I b面出土	岩石	凝灰質砂岩 長12.0cm 幅9.0cm 厚7.6cm
図19-1	I b面 炭化層上層	かわらけ 小型	口径(8.0)cm 底径(5.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む粗土 焼成良好 内底面ナデ
2	I b面 炭化層上層	かわらけ 大型	口径12.2cm 底径5.6cm 器高3.4cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒を含む良土 焼成良好 内底面ナデ
3	I b面 炭化層中	かわらけ 大型	口径(13.0)cm 灯明皿 胎土は淡橙色で雲母・白色粒・黒色粒を含む 焼成良好 内外面油煙煤付着
4	I b面 炭化層中	鉄釘	残長 [5.4] cm 幅0.5cm 厚0.4cm 重さ3.2g
5	I b面 炭化層中	鉄釘	残長 [4.6] cm 幅0.45cm 厚0.6cm 重さ2.8 g
図20-1	II面出土	青白磁 梅瓶	胴部片 ヨコナデ 素地は白色で白色粒・黒色粒を含む精良土 釉薬は水青色で半透明、気泡あり 内外面に薄く施釉
2	II面出土	土錘	長4.6cm 最大φ3.0cm 孔φ0.8cm 胎土は淡橙白色で雲母・白色粒・黒色粒・赤色粒を含む、やや良土
図21-1 写真のみ	II面 建物3	礎石	長52.0cm 幅18.0cm 厚14.0cm 柱座に鑿状工具による加工痕あり
図22-1	II面 落ち込み2	穿孔かわらけ 小型	口径(9.6)cm 底径(7.0)cm 器高2.55cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は橙色で海綿骨針・赤色粒・泥岩粒、砂粒を多く含む粗土 焼成良好 中底面に穿孔あり
2	II面 落ち込み2	渥美 押印	胴部片 残長 [13.2] cm 残幅 [8.3] cm 厚1.5cm 砂・黒色粒子を含む 黒灰色 焼成良好 押印・格子2段
3	II面 落ち込み2	常滑甕 転用打ち欠き陶片	常滑甕胴部片を使用長7.9cm 幅6.8cm 厚0.8cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
4	II面 落ち込み2	瀬戸 緑釉小皿	口径(11.6)cm 内面~外面口縁部下まで施釉 胎土は黄灰色で砂粒を少量含む硬質土 釉薬は緑色で透明、貫入あり
5	II面 落ち込み2	褐釉 転用磨耗陶片	褐釉壺を使用長2.9cm 幅2.5cm 厚0.5cm 側面がかなり磨減している 素地は赤褐色で砂粒を少量含む精良堅緻 釉薬は黄褐色 焼成良好
図24-1	III面 建物4柱穴137	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(4.8)cm 器高1.9cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 灯明皿 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・泥岩粒、赤色粒を含む、やや粗土 焼成良好
2	III面 建物4柱穴140	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 外面には押印あり 胎土は暗灰色で白色粒子・礫を含む 器表は暗灰色

表8 遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考	
図 28-1	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(7.2)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む良土 焼成やや甘い 二次焼成カス付着	
	2	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 胎土は灰色で礫・小石粒、長石を多く含む 器表は赤褐色で長石が吹き出している 縁部より下に暗緑灰色の自然降灰
	3	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕をナデ消している 胎土は灰色で礫・白色粒を含む 器表は茶褐色 口縁頂部～内面に暗緑灰色の自然降灰が薄くかかる 第2段階5型式
	4	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 ヨコナデ 外面に格子押印あり 胎土は暗灰色で礫・小石粒を含む 器表は暗灰色
	5	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 小型	口径7.4cm 底径4.8cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・砂粒を含む、やや粗土 焼成良好
	6	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(11.5)cm 底径(7.3)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は暗橙色で海綿骨針・砂粒を含む、やや良土 焼成良好 内底面ナデ
	7	Ⅲ面 落ち込み3	瀬戸 四耳壺	胴部片 内面に指頭痕 外面ヨコナデ 胎土は灰色で砂粒を含む硬質の精良土 釉薬は緑灰色の不透明 焼成良好
	8	Ⅲ面 落ち込み3	瀬戸 鉤皿	底径(7.5)cm ヨコナデ 外底部回転糸切り 胎土は黄灰色で砂粒を含む軟質の精良土 釉薬は黄色で透明 焼成良好
	9	Ⅲ面 落ち込み3	手捏ねかわらけ 大型	口径(13.5)cm 底径(6.4)cm 器高3.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む、やや良土 焼成やや甘い
	10	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(12.0)cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含むやや粗土 焼成良好 内底面ナデ
	11	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(7.4)cm 器高3.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
	12	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面に指頭痕 外面には押印あり 胎土は灰色で礫・長石・白色粒を含む粘質のやや粗土 器表は茶褐色
	13	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面に指頭痕 外面には押印あり 胎土は暗灰色で礫・長石、小石粒を多く含む粗土 器表は茶褐色
	14	Ⅲ面 落ち込み3	備前 播り鉢	胴部片 輪積み成形 ヨコナデ 胎土は淡赤褐色で礫・小石粒・赤色粒を含む 器表は暗灰色 内面に5条の播り目あり
	15	Ⅲ面 落ち込み3	瀬戸 緑釉小皿	口径(11.4)cm 底径(5.1)cm 器高2.9cm 回転ヘラ削り 削り出し高台 貫入あり 胎土は灰黄色で小石粒・白色粒を含む良土 釉薬は灰緑色で透明の灰釉を漬けかけ
	16	Ⅲ面 落ち込み3	鉄釘	長7.0cm φ0.3cm 重さ2.7g
図 29-1	Ⅲ面 柱穴136	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.5)cm 底径(5.6)cm 器高3.1cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒を含む良土 焼成良好	
	2	Ⅲ面 柱穴136	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.6)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒、黒色粒を多く含む良土 焼成やや甘い
	3	Ⅲ面 柱穴141	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒、赤色粒をやや多く含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
	4	Ⅲ面 柱穴141	土錘	残長[3.8]cm 最大φ3.0cm 孔φ0.7cm 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針を含む良土 指頭
	5	Ⅲ面 柱穴153	土錘	残長[3.3]cm 最大φ1.6cm 孔φ0.5cm 胎土は淡褐色で雲母・白色粒・赤色粒を含む、やや良土
写真のみ	Ⅲ面 柱穴152	鉄滓	長6.2cm 幅5.1cm 厚1.4cm	
図 30-1	Ⅲ面上	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面に車輪・菊花の押印あり 胎土は暗灰色で礫、白色粒を多く含む 器表は暗緑灰色の降灰釉がかかる	
	2	Ⅲ面上	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面には押印・工具ナデ痕あり 胎土は黄灰色で長石・赤色粒、白色粒を多く含む粘質の粗土 器表は褐色
	3	Ⅲ面上	瀬戸 折縁深皿	底径(16.8)cm 回転ヘラ削り 内面は淡灰緑色の灰釉を刷毛塗り 胎土は灰黄色で礫・白色粒を含む、やや良土
	4	Ⅲ面上	軒丸瓦 東海尾張系	外径12.6cm 周縁内径11.2cm 左回りの三つ巴文、断面が台形状、先端部がとがり気味、尾の末端は周縁と連なる 周縁の幅は狭い 瓦当は離れ砂が付く、背面は横位のナデで粗く調整されている 丸瓦部径と瓦当径がやや異なり横長にいびつ 胎土は砂粒を多く含む 色調は灰色 焼成良好 12末～13c頃、鎌倉初期も
	5	Ⅳ面上 木樋周辺	かわらけ 小型	口径8.8cm 底径6.0cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・白色粒、赤色粒を含む、やや粗土 焼成良好 灯明皿
	6	Ⅳ面上 木樋周辺	銭	元豊通寶 北宋 1078年 行書 外径2.5cm 内径2.0cm 孔径0.7cm
図 31-1	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(10.5)cm 底径(5.0)cm 器高2.2cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は淡褐色で海綿骨針・砂粒を少量含む粉質の良土 焼成良好	
	2	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.9)cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 外底部に板状圧痕 胎土は暗黄色で海綿骨針、砂粒をやや多く含む良土 焼成良好
	3	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(7.8)cm 底径(6.9)cm 器高1.3cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は淡褐色で海綿骨針、砂粒を少量含む良土 焼成良好
	4	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 大型	口径(13.6)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で海綿骨針、砂粒を少量含む良土 焼成良好
	5	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 大型	口径(14.2)cm 底径(7.8)cm 器高3.1cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は橙色で海綿骨針、砂粒を少量含む良土 焼成良好
	6	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.9)cm 底径(5.3)cm 器高3.5cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は淡褐色で海綿骨針・砂粒を含む粉質の良土 焼成良好 内底面が磨滅
	7	Ⅲ面出土	かわらけ 小型	口径(8.7)cm 底径(5.7)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は淡黄色で砂粒・海綿骨針・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 口縁一部が打ち欠け
	8	Ⅲ面出土	渥美甕 転用打ち欠け陶片	胴部片 胎土は砂粒を含む 器表は暗茶褐色 焼成良好
	9	Ⅲ面出土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で砂粒・小石粒を多く含む 器表は灰色 焼成良好 1段階3型式
	10	Ⅲ面出土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部はナデアゲ 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好 内面やや磨滅 第2段階5型式

表9 遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 31-11	Ⅲ面出土	渥美甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は砂粒を含む 器表は暗灰色 焼成良好
12	Ⅲ面出土	常滑甕	胴部片 外面に押印あり(斜格子) 胎土は小石粒を多く含む 器表は褐色 焼成良好
13	Ⅲ面出土	常滑甕	胴部片 外面に押印あり(格子+斜格子) 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
14	Ⅲ面出土	常滑甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
15	Ⅲ面出土	銭	北宗銭 皇宋通寶 初 1038年 真書 外径2.4cm 内径2.0cm 孔径0.7cm
16	Ⅲ面出土	銭	北宗銭 嘉祐通寶 北宋 1056年 真書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.7cm
図 33-1	Ⅲ面 井戸1	土師器 壺	口縁部片 ヨコナデ 口縁に三条の沈線 胎土は淡橙色で雲母・白色粒・赤色粒・小石粒をやや多く含む粗土
2	Ⅲ面 井戸1	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.3)cm 底径(6.3)cm 器高1.2cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや良土 焼成良好
3	Ⅲ面 井戸1	手捏ねかわらけ 小型	口径(9.1)cm 底径(7.7)cm 器高1.6cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒を含む、やや良土 焼成良好
4	Ⅲ面 井戸1	手捏ねかわらけ 大型	口径(11.7)cm 底径(5.6)cm 器高3.2cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒を含む粉質土、やや良土 焼成良好
5	Ⅲ面 井戸1	かわらけ 大型	口径(13.0)cm 底径(8.5)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ 棒状圧痕
写真のみ1	Ⅲ面 井戸1	桃の種	
写真のみ2	Ⅲ面 井戸1 裏込め	岩石	最大残存長(18.0)cm 幅13.4cm 厚3.7cm 四角に加工してある
図 35-1	Ⅳ面 池1	土師器	口径(17.6)cm 二次焼成か全体にスス付着 胎土は淡赤橙色で雲母・赤色粒・白色粒・小石粒を多く含む粗土
2	Ⅳ面 池1	土師器	胎土は橙色で雲母・赤色粒・小石粒を多く含む粗土 二次焼成か全体にスス付着
3	Ⅳ面 池1	土師器	胎土は橙色で雲母・白色粒・小石粒を多く含む粗土 二次焼成か全体にスス付着
4	Ⅳ面 池1	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.8)cm 底径(4.8)cm 器高2.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・黒色粒を多く含む、やや良土 焼成甘い
5	Ⅳ面 池1	手捏ねかわらけ 小型	口径8.3cm 底径5.4cm 器高1.8cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや良土 焼成甘い 二次焼成か全体にスス付着
6	Ⅳ面 池1	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.9)cm 底径(7.2)cm 器高3.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・白色粒・黒色粒を含む良土 焼成良好
7	Ⅳ面 池1	東播 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面にタタキ目あり 胎土は灰色で礫、白色粒を含む粘質の良土 器表は暗灰色
8	Ⅳ面 池1	東播 捏ね鉢	底部片 外底部回転糸切り 輪積み成形 胎土は暗灰色で長石・石英・小石粒・白色粒を含む 器表は暗灰色
9	Ⅳ面 池1	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長5.2cm 幅7.4cm 厚1.0cm 輪積み成形 胎土は黄褐色で長石、白色粒・赤色粒を含む 器表は茶褐色
10	Ⅳ面 池1	同安窯系青磁 櫛書き文皿	口径(10.5)cm 底径5.0cm 器高2.35cm 底部のみ露胎 内底面に櫛描き模様あり 素地は灰色で精良堅緻 釉薬は淡灰緑色で透明、施釉薄い I類2b
11	Ⅳ面 池1	土錘	残長[3.8]cm 最大φ3.0cm 孔径0.7cm 二次焼成か全体にスス付着 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒を多く含む、やや良土
12	Ⅳ面 池1	木製品 漆皿	底径(8.2)cm
13	Ⅳ面 池1	木製品 草履芯	残長[12.8]cm 残幅[2.1]cm 厚0.3cm 藁の圧痕が残る
14	Ⅳ面 池1	木製品 櫛	1cm幅に歯が3枚あり
15	Ⅳ面 池1	木製品 櫛	1cm幅に歯が12枚あり 意匠が施してある
16	Ⅳ面 池1(2)	木製品 羽子板	長38.1cm 幅9.7cm 厚1.0cm
17	Ⅳ面 池1(2)	縄	残長[19.5]cm 幅3.8cm
図 38-1	Ⅳ面 暗渠	木製品	長152.7cm 幅13.5cm 厚10.7cm 鉄釘4箇所あり
図 39-1	Ⅳ面 溝1	土師器 坏	口径(12.6)cm ヨコナデ 外面に工具による削り痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土
2	Ⅳ面 溝2	土師器 甕	口縁部片 ヨコナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒・黒色粒・砂粒を多く含む
3	Ⅳ面 溝2	かわらけ 小型	口径(8.2)cm 底径(5.6)cm 器高1.55cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒を含む粉質、やや良土 焼成良好
4	Ⅳ面 溝2	かわらけ 小型	口径(9.2)cm 底径(6.0)cm 器高1.75cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡黄灰色で海綿骨針を含む粉質、良土 焼成やや甘い
5	Ⅳ面 溝2	銭	開元通寶 隸書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.7cm
図 40-1	Ⅳ面上	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(8.5)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
2	Ⅳ面上	須恵器 壺	口径(22.0)cm 胎土は砂粒を少量含む 色調灰色 焼成良好
3	Ⅳ面上	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.0)cm 底径(6.6)cm 器高2.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で海綿骨針、砂粒を少量含むやや良土 焼成やや良好

表 10 遺物観察表 (6)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 40-4	Ⅳ面上	手捏ねかわらけ 大型	口径 (11.2)cm 底径 (5.8)cm 器高 (2.7)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で海綿骨針・砂粒を含む粉質の良土 焼成良好
5	Ⅳ面上	かわらけ 小型	口径 (7.6)cm 底径 (5.1)cm 器高 1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面磨滅 胎土は淡黄色で海綿骨針・赤色粒・砂粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
6	Ⅳ面上	かわらけ 小型	口径 8.0cm 底径 6.4cm 器高 1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で海綿骨針・砂粒を含む、やや良土 焼成良好 灯明皿
7	Ⅳ面上	かわらけ 大型	口径 12.0cm 底径 8.2cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色 + 灰色で海綿骨針・砂粒・泥岩粒を含む、やや粗雑 焼成良好 内底面強いナデ 二次焼成を受ける
8	Ⅳ面上	かわらけ 加工品	底部片 外底部回転糸切り 胎土は暗橙色で海綿骨針・砂粒を含む、やや良土 焼成良好
9	Ⅳ面上	渥美 甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は砂粒・白色粒を含む 器表は暗灰色 焼成良好
10	Ⅳ面上	常滑 甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
11	Ⅳ面上	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 胎土は砂粒・小石粒を少量含む 器表は明褐色 焼成良好
12	Ⅳ面上	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は灰色 焼成良好 第1段階3型式
13	Ⅳ面上	無頸壺 (山茶碗)	口径 16.0cm 底径 8.2cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外面に自然釉がかかる、爪による模様を施し 胎土は砂粒・小石粒を含む 色調は灰色 焼成良好 口縁の一部が指頭され、もしかしたら片口の部分かもしれない
14	Ⅳ面上	青磁 鎗蓮弁文碗	底径 5.6cm 高台内側が露胎 素地は灰色で精良堅緻 釉薬は緑灰色で透明、貫入あり 焼成良好 II -b
図 41-1	表採	土師器	口縁部片 ヨコナデ 頸部内側へ整形 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒、白色粒を多く含む
2	表採	手捏ねかわらけ 小型	口径 10.2cm 底径 6.2cm 器高 1.95cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒を含む良土 焼成やや甘い
3	表採	手捏ねかわらけ 大型	口径 (13.9)cm 底径 (6.8)cm 器高 3.9cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で雲母・海綿骨針・砂粒を多く含む、やや良土 焼成良好
4	表採	手捏ねかわらけ 大型	口径 (14.4)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 内底面に爪の痕が残る 胎土は淡灰橙色で雲母・海綿骨針・砂粒を多く含む良土 焼成やや甘い
5	表採	手捏ねかわらけ 大型	口径 (14.0)cm 底径 (6.0)cm 器高 3.5cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒を含む良土 焼成やや甘い
6	表採	かわらけ 小型	口径 (8.4)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒を含む良土 焼成良好
7	表採	かわらけ 小型	口径 (8.4)cm 底径 (5.4)cm 器高 1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む、やや粗土 焼成良好
8	表採	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で礫・黒色粒・小石粒を多く含む 器表は灰色 5～6a 期
9	表採	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 内面は使用により磨滅している 胎土は灰色で2～3mm 大の小石粒を含む、やや粗土 器表は灰色
10	表採	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で礫・長石・小石粒を多く含む粗土 器表は灰色 外底部に離れ砂付着
11	表採	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石・小石粒を多く含む 器表は灰色 第1段階4型式
12	表採	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 ヨコナデ 胎土は灰色で長石・小石粒を含む 器表は褐色 口縁～内面に緑灰色の自然降灰
13	表採	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 内面に指頭痕・ヨコナデ 外面に緑灰色の自然降灰 胎土は暗灰色で礫・長石・白色粒、小石粒を多く含む粗土 器表は褐色 第3段階8型式
14	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面に指頭痕・ヨコナデ 外面に格子の押印あり 胎土は灰色で礫・長石・白色粒、小石粒を多く含む粗土 器表は灰色
15	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に格子の押印あり 胎土は灰色で礫・長石・白色粒、小石粒を多く含む粗土 器表は灰色
16	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に格子の押印あり 胎土は暗灰色で礫・白色粒、小石粒を含む 器表は暗灰色
17	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に車輪・菊花の押印あり 胎土は暗灰色で礫・白色粒、小石粒を含む 器表は暗灰色
18	表採	青白磁 梅瓶蓋	径 (6.0)cm 器高 3.3cm 素地は灰白色で精良土 釉薬は淡青水色で透明、貫入あり 施釉薄い 内面は露胎
19	表採	砥石 仕上砥	遺存長 [6.4] cm 幅 2.6cm 厚 2.2cm 淡灰緑色 上部に切出し痕 砥面 4面 上野産
20	表採	木製品 漆椀	底径 (8.5)cm 内外に漆が塗られる
21	表採	木製品 鍋蓋	残長 [23.4] cm 残幅 [6.6] cm 厚 1.5cm
22	攪乱	ガラス瓶	口径 2.2cm 底径 4.3cm 器高 13.3cm 明治～大正
写真のみ	表採	鉄滓	長 4.8cm 幅 3.6cm 厚 0.7cm



## 第四章 まとめと考察

### 1. 遺構の変遷 (図 42)

今回の調査では計 6 面の生活面を検出し、これを 6 時期に分けることが出来た。

第 1 期：第 IV 面が相当する。池、溝、暗渠、落ち込み等の検出があるがそれらは全て連動している。これらの遺構は黒褐色粘質土の中世基盤層を掘り窪めている。池は調査区西側全面に広がる。水位の調節をするため東岸に暗渠は設けられる。その存在からみて池は中央部というより縁辺あたりであろう。調節された水は北から流れる溝 1 に流れ込み、溝 1 から落ち込み 4 に注がれる。落ち込み 4 は現在調査区の東側を流れる「豆腐川」と思われる。「豆腐川」は前述したようにかつては幅が 3 間以上、深さも 5 間以上あって、飯島から船が入ってきたと言われている(『としよりのはなし』)。かつて「高御倉」・「浜御倉」・「浜の庫倉」などと呼ばれる倉庫群のあったととれる調査地点一帯の土地柄に深く関係しないだろうか。

出土遺物として、池 1 からは暗渠に吸い寄せられるように羽子板、縄が出土している。羽子板に関しては後述する。この時期、この土地は宗教的な要素が強い。第 1 期の年代は 12 世紀末から 13 世紀前半である。

第 2 期：第 III b 面が相当する。調査区の北西で井戸が検出されている。第 III 面から第 IV 面の間の面だがこの時期の土地利用として調査区一帯は、前代の池をつぶし、生活空間を造成した。しかし、調査区内に、井戸以外の遺構の検出は乏しい。いふなれば居住空間の「はずれ」であろう。第 2 期の年代は 13 世紀前半である。

第 3 期：第 III 面が相当する。柱の遺存状態のよい掘立柱建物が一棟建つ。柱穴は他にも数多くあり建物の建て替えが窺える。柱穴は北側に多く検出した。建物 4 は調査区全体に広がるが、層位的にみてより古い建物は調査区の北側に展開するようである。調査区北東隅で検出された木樋は第 1 期の溝 1 を踏襲しており、この時期に木樋を伴う構造に改修されたのだろう。建物の東限はこの木樋までとみられる。規模からして、大規模な建物が想定でき、武家屋敷級のものと見られるのではないだろうか。第 3 期の年代は第 2 期と変わらず 13 世紀前半である。

第 4 期：第 II 面が相当する。第 3 期の掘立柱建物とほぼ同位置に重なる礎石建物を 1 軒検出した。この建物は火災とみられる炭化層に覆われていた。年代は 13 世紀後半である。

第 5 期：第 I b 面が相当する。調査区北西隅で長方形の土坑が並び、他の柱穴・土坑も調査区中央から北に片寄る傾向が見られることから、これも居住区間のやや「はずれ」ではないだろうか。また調査区北西を中心に、焼土・炭化物が堆積していたことから第 5 期にも火災は発生したと見られる。年代は第 4 期と変わらず 13 世紀後半であろう。

第 6 期：第 I 面が相当する。建物は 2 軒建ち、その内 1 棟は塔の可能性がある。比較的しっかりした土坑から構成される建物(建物 1)で、中央に大きな土坑(土坑 5)を持ち、四隅に土坑・柱穴(土坑 1・4・11・柱穴 57)が配置される。この構造は他の建築例(法起寺三重塔・當麻寺東塔など)からみて「塔」の基礎との見方もある。土坑はいずれも根固めの泥岩が密に入る様相を示した。豆腐川は護岸され、調査区の北側には常滑の甕が安置される。据甕の年代は 14 世紀前半であるから鎌倉後期から末期あたり、塔は 13 世紀後半があてられる。第 6 期の中でも年代幅があり、土地利用の変化が窺える。年代は 13 世紀後半から 15 世紀前半である。

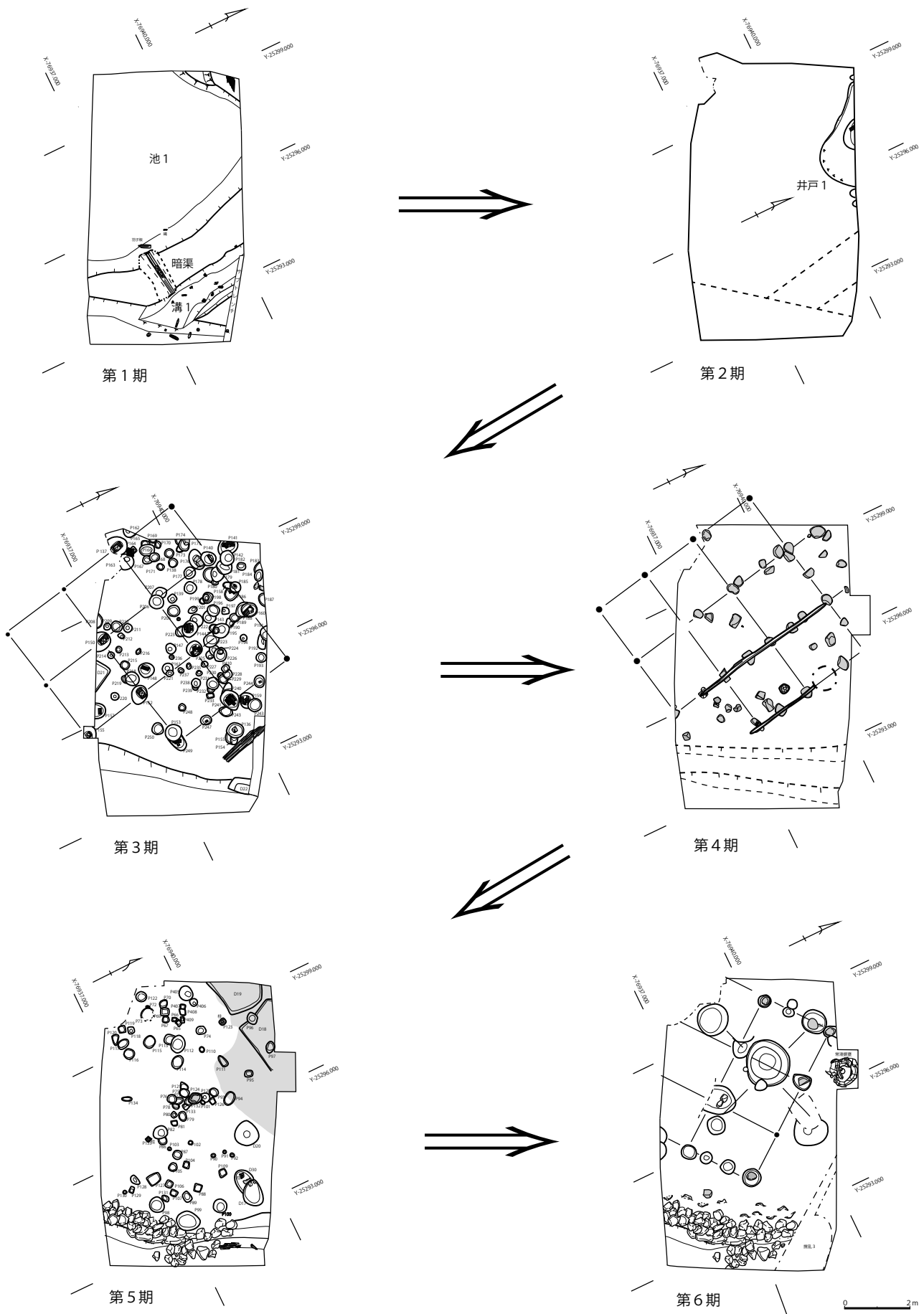
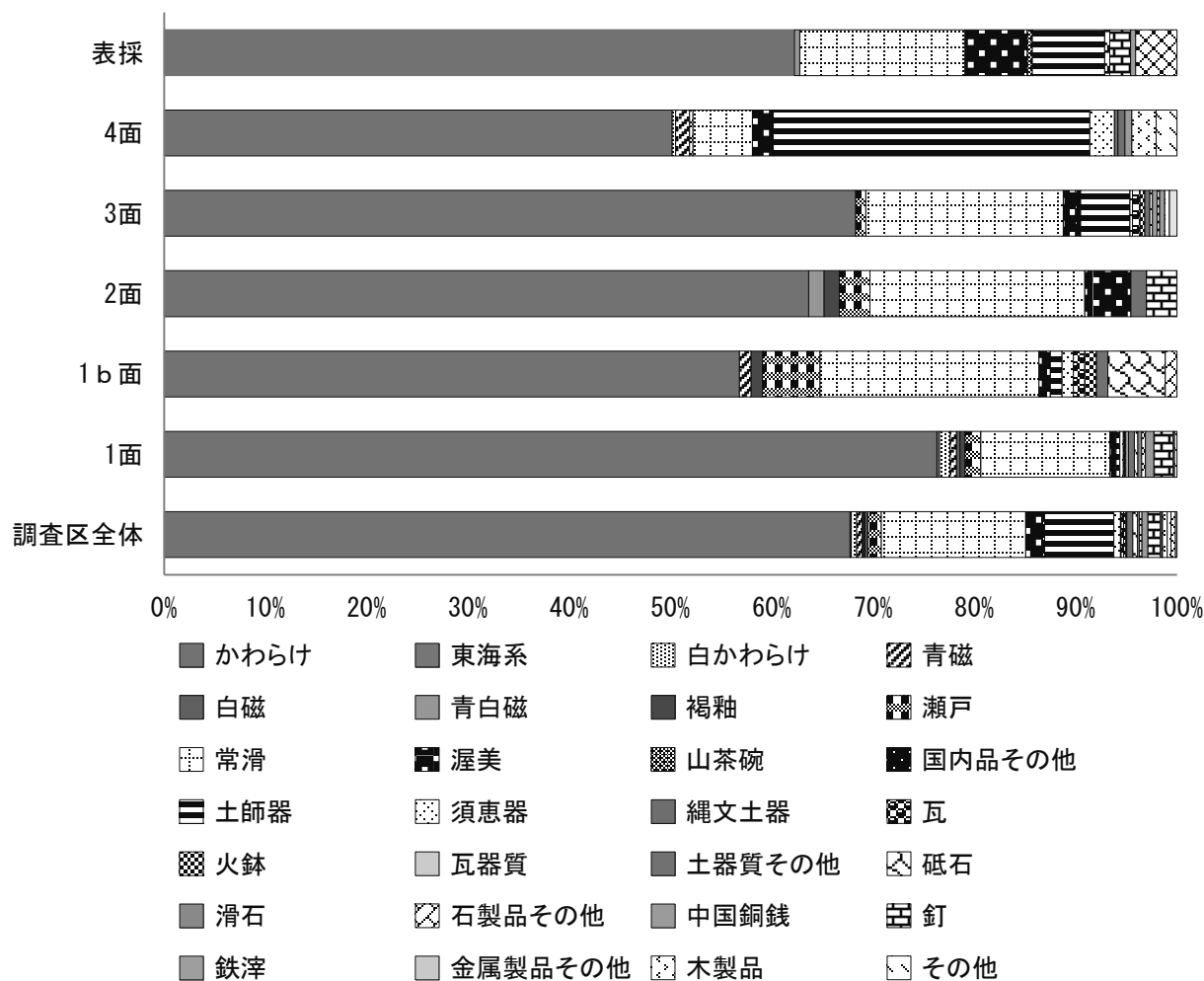


図 42 遺構変遷図

表 11 出土遺物計量表 (1)

			1面	1b面	2面	3面	4面	表採	総計								
土器	かわらけ	手捏ね	21	2.53%	3	3.41%	8	12.12%	113	27.56%	101	34.71%	39	19.90%	285	15.14%	
		ロクロ	612	73.65%	47	53.41%	34	51.52%	167	40.73%	45	15.46%	83	42.35%	988	52.50%	
	白かわらけ	穿孔	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		大	9	1.08%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	10	0.53%	
	東海系	かわらけ	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%	
	土師器		3	0.36%	1	1.14%	0	0.00%	20	4.88%	91	31.27%	14	7.14%	129	6.85%	
	須恵器		2	0.24%	1	1.14%	0	0.00%	1	0.24%	7	2.41%	0	0.00%	11	0.58%	
	須恵器		1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
	縄文土器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%	
	火鉢	Ⅲ類	1	0.12%	1	1.14%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%	
		土風呂	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
瓦器質	燭台	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
	瓦器	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
土器質	伊勢系鍋	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	2	0.11%		
土製品	土器質	蒸籠	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		土錘	2	0.24%	1	1.14%	1	1.52%	2	0.49%	1	0.34%	0	0.00%	7	0.37%	
国産陶器	常滑	甕	91	10.95%	18	20.45%	14	21.21%	75	18.29%	12	4.12%	27	13.78%	237	12.59%	
		片口碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%	
		片口鉢Ⅰ類	8	0.96%	1	1.14%	0	0.00%	4	0.98%	2	0.69%	5	2.55%	20	1.06%	
		片口鉢Ⅱ類	4	0.48%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.27%	
		すり常滑	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.69%	0	0.00%	5	0.27%	
	瀬戸	折れ縁深皿	1	0.12%	2	2.27%	1	1.52%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%	
		縁小皿	3	0.36%	0	0.00%	1	1.52%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.27%	
		卸皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		平碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		天目碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		灰釉碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		四耳壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		壺類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%	
		大平鉢	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%	
		近世	1	0.12%	3	3.41%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%	
	転用円盤	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
	渥美	甕	4	0.48%	0	0.00%	3	4.55%	5	1.22%	5	1.72%	11	5.61%	28	1.49%	
		壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	1	0.05%	
	片口鉢	0	0.00%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
	山茶碗(皿)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	1	0.05%		
	備前	播鉢	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%	
	肥前系	碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
	東幡	壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%	
	瓦	平	1	0.12%	1	1.14%	0	0.00%	2	0.49%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%	
		軒丸	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
	舶載	青磁	無文碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
			蓮弁文碗	3	0.36%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.37%	0	0.00%	8	0.43%
			端反り碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		青白磁	梅瓶	0	0.00%	0	0.00%	1	1.52%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	2	0.11%
			口兀皿	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%
白磁		托	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		緑褐釉壺	0	0.00%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
褐釉	壺	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%		
	すり褐釉	0	0.00%	0	0.00%	1	1.52%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
甕	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%			
鉄	鉄滓	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	0	0.00%	1	0.51%	3	0.16%		
金属製品	中国銅銭	7	0.84%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	2	0.69%	0	0.00%	11	0.58%		
	鉄釘	16	1.93%	0	0.00%	2	3.03%	1	0.24%	0	0.00%	4	2.04%	23	1.22%		
	銅製品	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
石製品	滑石	温石	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		鍋	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%	
		加工石	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
	砥石	荒砥	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
		中砥 上野産	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	1	0.05%	
仕上砥 鳴滝産	2	0.24%	5	5.68%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.37%			
石	チャート	1	0.12%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%		
	岩石	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%		
木製品	製 品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	7	2.41%	0	0.00%	9	0.48%		
	縄	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%		
自然遺物	動物骨	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.69%	0	0.00%	4	0.21%		
	貝	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	1.03%	0	0.00%	3	0.16%		
	近世遺物	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	8	4.08%	8	4.08%	8	0.43%		
不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.73%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%			
合計		831	100%	88	100%	66	100%	410	100%	291	100%	196	100%	1882	100%		

表 12 出土遺物計量表（2）



### 池について

鎌倉の永福寺、京都の法勝寺、平泉の毛越寺の大泉池の等の取水口の位置から推測される池の水流の方向は本堂を背に左後ろから水を入れて右手前方向に流していたとされる。第1期の池で考えるならば寺院もしくは屋敷か、主体は不明であるが、調査区外南西にあるのではないだろうか。そして第3期の掘立柱建物、次いで第4期の礎石建物はこの時に空間の主体が調査区に及んできたのであろう。掘立柱建物から礎石建物への軸方向を同じくする建物の変遷は屋敷地から寺への変化を指摘したい。

### 炭化層について

第4期、第5期の炭化層について、『吾妻鏡』等の文献からそれにあたる記事を三例抜き出してみた。出土遺物が少なく、詳細な年代は掴めないが第4期、第5期とも、13世紀後半とみている。第4期の上に堆積していた炭化層は厚いところで10cmにもおよび大火であったことが窺われ、相応の記事になっていることが推測される。いずれかに当てはまるであろう。

建長四年（1252）二月八日条 大火事、西は寿福寺の前、東は山王堂の前、南は和賀江、北は若宮大路の上、その内残るところなしと云々。『吾妻鏡』

建長五年（1253）経師ヶ谷口より出火、浜の高御倉まで延焼し、十数人焼死する。『吾妻鏡』

永仁四年（1296）十二月十一日条 大焼亡、名越大小諸堂屋舎不残一字、焼死者五百余人云々『随聞私記』

### 出土遺物と計量比について

出土遺物は縄文時代土器が1片出土しているほか、古墳時代後期の土器が出土し、奈良・平安時代、

鎌倉時代に及ぶ。鎌倉時代では、12世紀末の手捏ねかわらけの出土がある。出土した遺物の総破片数は表14にまとめた。やはりかわらけ、常滑の出土は多いが、3b面より下層では土師器の出土も目立つ。

特記すべき遺物として、第IV面の池1の暗渠付近で木製品の羽子板の出土がある。羽子板は「こぎいた」ともいい、「こぎ」は「胡鬼」と書きすなわち西方胡国の鬼の意で、羽は鬼の目玉であり、胡鬼板にはそれを打って鬼を払う呪意が込められている。文献上の羽子板の初見は貞成親王の『看聞日記』永享四(1432)正月5日条の記事であり、同六年にも「こぎ板」の名が見える。考古学資料としては、鎌倉市蔵屋敷東遺跡や佐助ヶ谷遺跡の鎌倉時代後期(13世紀後半頃)の例、広島市草戸千軒町遺跡の鎌倉時代末期から南北朝にかけて(14世紀前半～中葉)の出土例がある。それらを鑑みると今回の羽子板の出土は現時点で、日本最古と言えよう。貴重な発見である。

羽子板の近くでは縄が出土している。太さから、日常使うものよりはやや太めであり、注連縄の可能性も視野に入れたい。注連縄は編む向きにより体現するものが違う。出土した縄は右方向に編んだ右絢えであり、これは太陽の巡行に逆行し、水(女性)を表している。池1からの出土は興味深い。材質は藁とみていいだろう。

1997年に馬淵が試みた総破片数計量による中世都市鎌倉の食器消費の状況から論じた食文化のあり方(1997馬淵)をふまえ、遺跡の傾向を見ていきたい。

馬淵は市内を都市中核部・武家屋敷・町屋地区・海岸部の四つ分け、とりわけ、「土師器皿」(かわらけ)の消費のあり方に注目して比較検討している。今回の遺跡の位置は地理的には海岸部と言えようか。遺跡の傾向としては寺院的でもあり、屋敷的でもある。遺物の量比を見ていきたい。かわらけ、国産陶器、中国陶磁器の順で68.78:17.17:1.06である。遺物の全体の出土傾向は馬淵の分類によれば「町屋的」というに近いが、決め手に欠く。

今回の調査では主軸を同じくする礎石建物と掘立柱建物、浄土庭園を彷彿させる暗渠を伴う池の発見、日本最古の羽子板も出土している。

調査地点は鎌倉の東の端であり、和賀江島に近いことや、谷戸全体が宗教的区間でありながら名越氏の屋敷があったとされること、また「高御蔵」という地名の残る、非常に歴史的な意味合いを含む谷戸である。今後十分な検討が必要とされよう。

## 引用参考文献

- 上本進二 2000 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所  
高橋慎一郎 1996 『都市と武士』吉川弘文館  
伊藤一美 1994 「鎌倉の内湊町「飯島」と和賀江津」『歴史の中の都市と村落社会』恩文閣出版  
上横手雅敬 2009 『権力と仏教の中世史』法蔵館  
赤星直忠 1980 『中世考古学の研究』有隣堂  
1990 『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会  
1070 『新編鎌倉志』雄山閣  
松吉大樹 『災害考古学』  
馬淵和雄 1997 「食器から見た中世鎌倉の都市空間」『国立民族博物館研究報告』71 国立民族博物館  
馬淵和雄 2008 「羽子板」『歴史考古学大辞典』  
貫志正造・永原慶二 1989 『全譯 吾妻鏡』新人物往来社  
1975 『神奈川県史』3 神奈川県  
貫達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺辞典』有隣堂  
仲隆裕 2010 「浄土庭園の系譜」『浄土庭園の変遷』足利市教育委員会  
八重樫忠郎 2010 「浄土庭園の広がり－平泉－」『浄土庭園の変遷』足利市教育委員会



▲海を望む（弁ヶ谷の北の山上から・矢印は調査地点）



▲和賀江島を望む（弁ヶ谷の北の山上から・矢印は調査地点）



▲新善光寺の谷戸を望む（南から・矢印は調査地点）



▲近景（南から・矢印は調査地点）



▲ 第Ⅰ面全景（北西から）

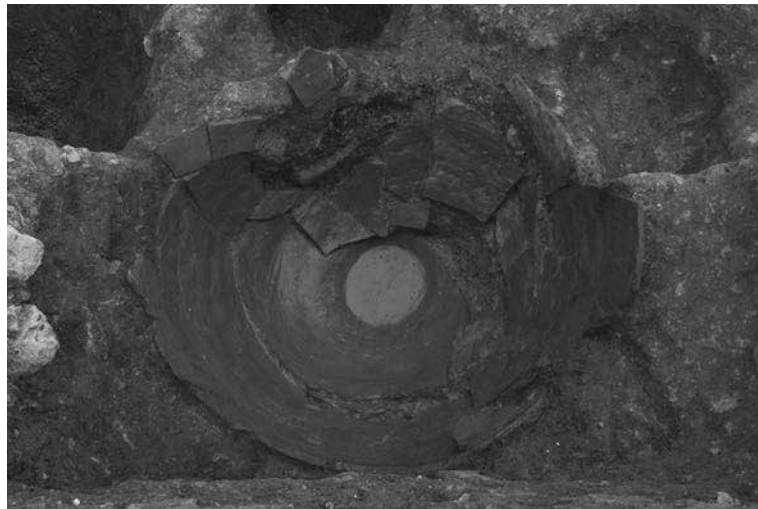


▲ 第Ⅰ面常滑据甕（北から）

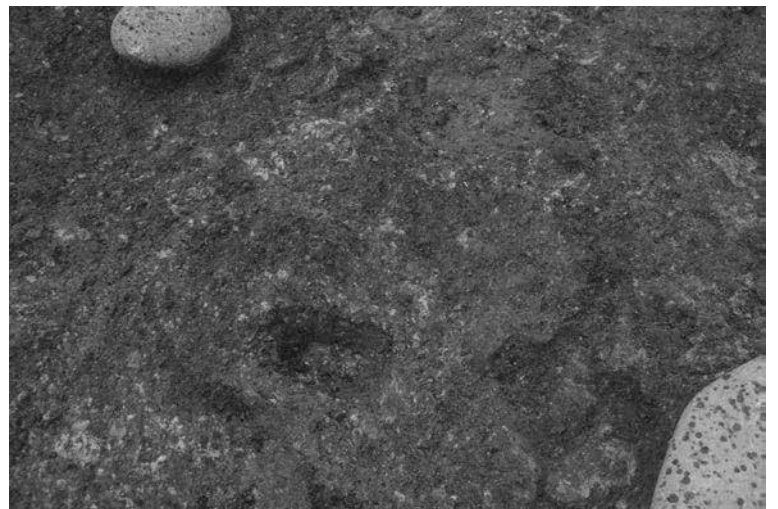




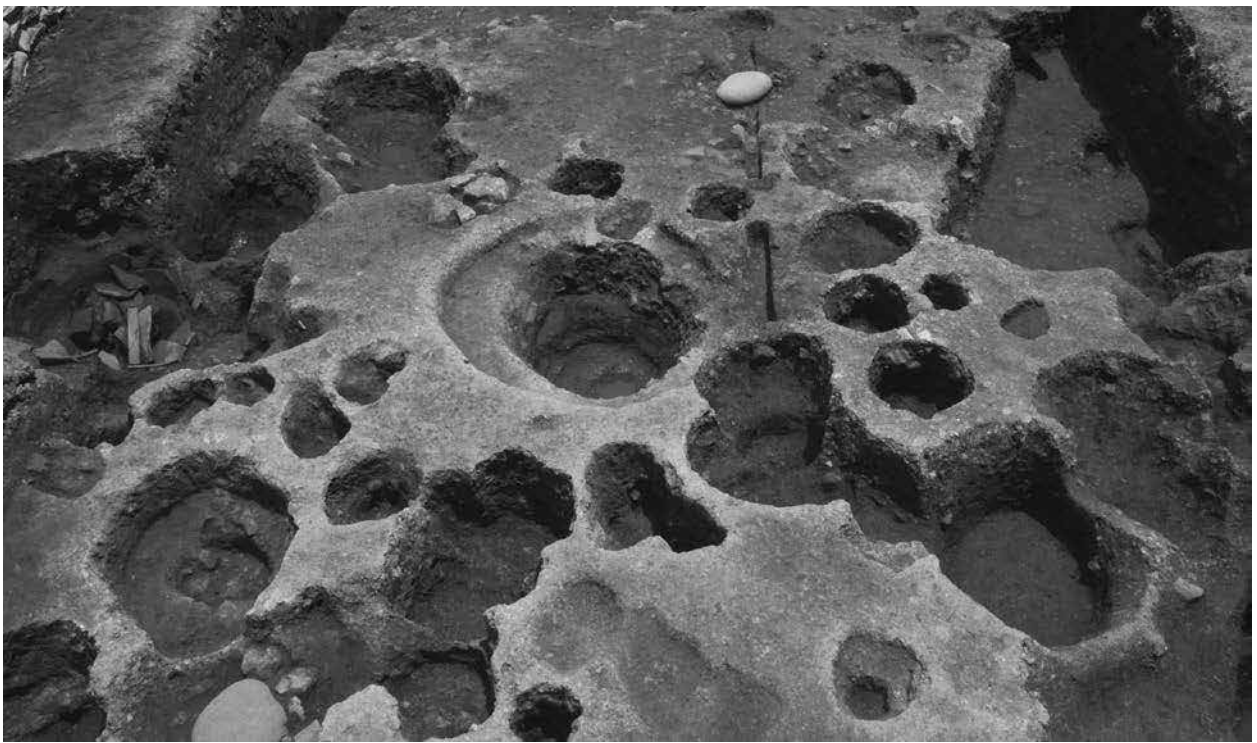
▲ 第1面 常滑据甕 上層 (南西から)



▲ 第1面 常滑据甕 下層 (北東から)



▲ 第1面 常滑据甕 掘り方 (北東から)



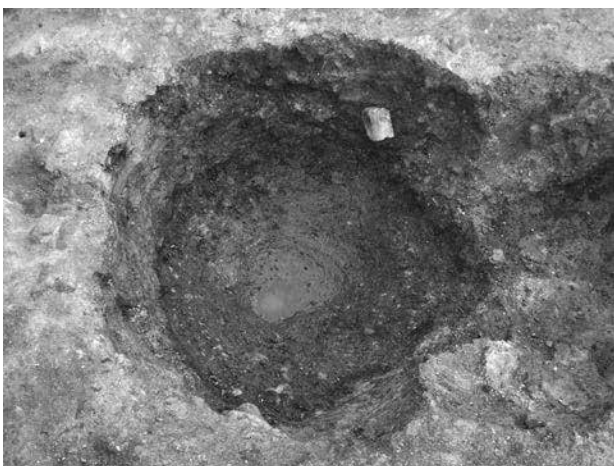
▲ 第1面 建物1 (北西から)



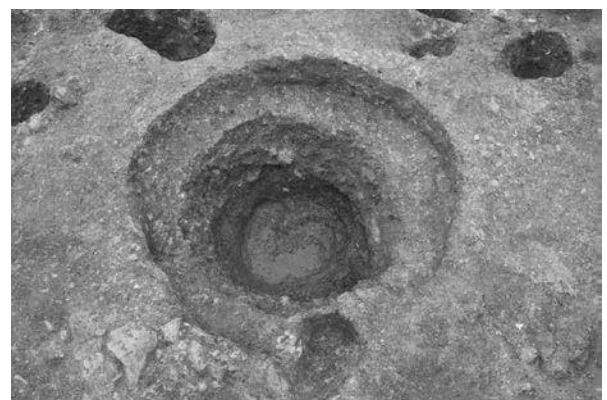
▲ 第1面 土坑1 (南西から)



▲ 第1面 土坑11 (北西から)



▲ 第1面 土坑4 (北から)



▲ 第1面 土坑5 (東から)



▲ 第1面 土坑5 土層堆積状況(南西から)



▲ 第1面 土坑4 土層堆積状況(南から)



▲ 第1面 土坑2(南東から)



▲ 第1面 土坑7(東から)



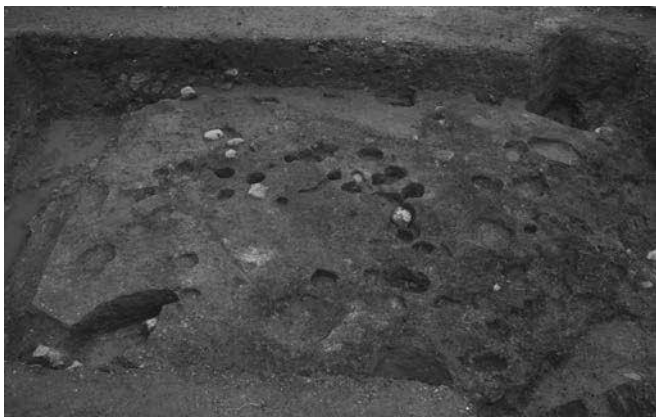
▲ 第1面 柱穴24(南から)



▲ 第1面 落ち込み1 護岸(東から)



▲ 第1b面 全景（北西から）



▲ 第1b面 部分（北から）



▲ 第1b面 方形土坑（南東から）





▲ 第II面 全景 (根太木痕・南から)



▲ 第II面 全景 (南から)



▲ 第Ⅱ面 全景 (南東から)



▲ 遺物出土状況



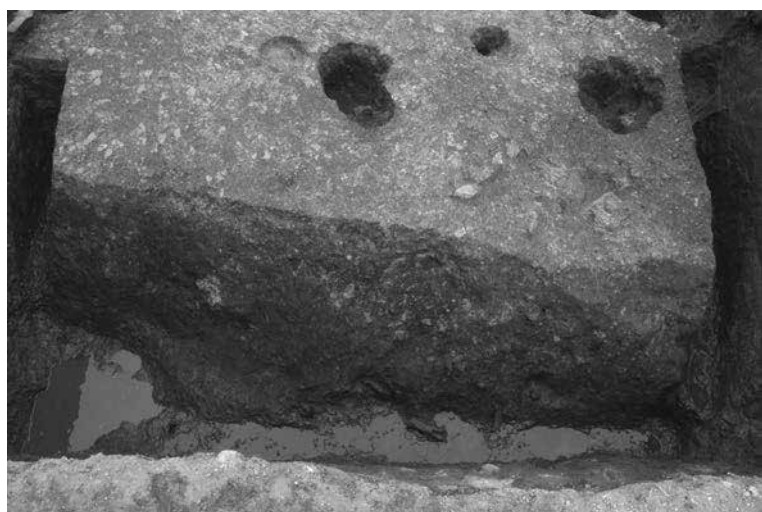
▲ 第Ⅱ面 礎石列 (南から)



▲ 作業風景



▲ 第Ⅲ面 全景（南から）



▲ 第Ⅲ面 落ち込み3（東から）



▲ 第Ⅲ面 落ち込み3（南西から）



▲ 第II面の礎石建物と第III面の掘立柱建物が踏襲されている様子  
(柱はP137・南東から)



▲ 第III面建物4 柱穴 140 (南から)



▲ 第III面建物4 柱穴 150 (北西から)



▲ 第III面建物4 柱穴 146 (南西から)



▲ 第III面建物4 柱穴 241 (南から)





▲ 第Ⅲ面建物4柱穴152 (南西から)



▲ 第Ⅲ面建物4柱穴160 (南西から)



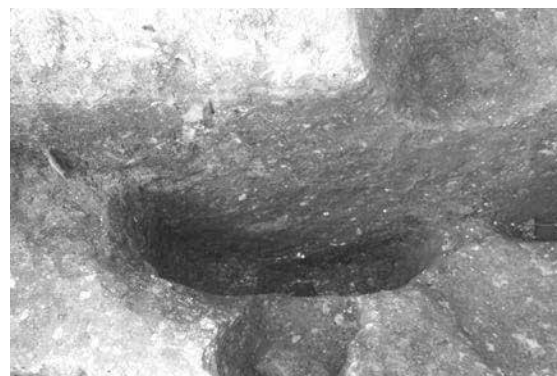
▲ 第Ⅲ面建物4柱穴137 (南から)



▲ 第Ⅲ面 木樋 (南から)



▲ 第Ⅲ面 木樋 (北から)



▲ 第Ⅲb面井戸1 (南西から)



▲ 第IV面 全景 (南西から)



▲ 第IV面 全景 (北西から)



▲ 第IV面 暗渠周辺 (池・暗渠・溝・川・南から)



▲ 第IV面 溝1 (北から)



▲第IV面 池1 土層堆積状況 (南から)



▲ 第IV面 池1 遺物出土状況・櫛（南から）



▲第IV面 池1 遺物出土状況・羽子板（南から）



▲ 第IV面 暗渠（南から）

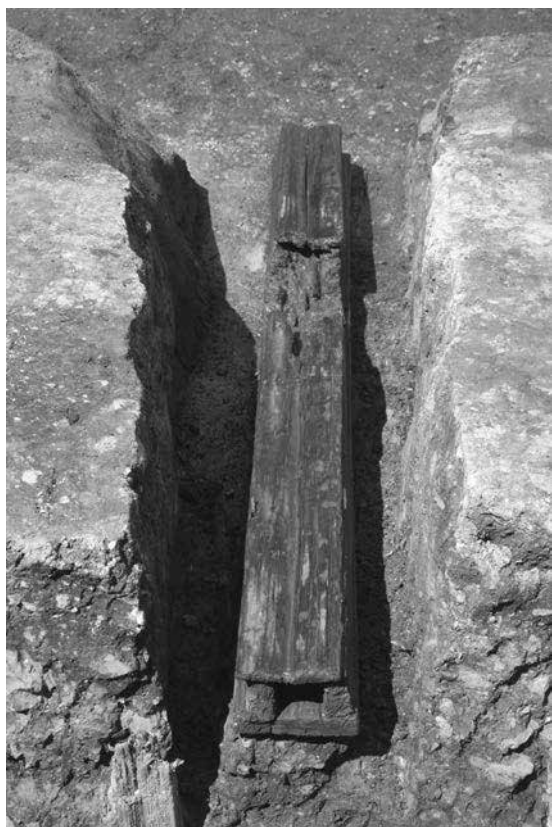


▲ 第IV面 池1 出土遺物・縄



▲作業風景





▲ 第IV面 暗渠 (南西から)



▲ 第IV面 暗渠 (蓋を取った状況・南西から)



▲ 調査区北壁堆積土層 (西半部・南西から)



▲ 調査区北壁堆積土層 (東半部・南西から)



▲ 調査区南壁堆積土層 (東半部・北東から)



▲ 調査区南壁堆積土層 (西半部・北東から)



調整痕



押印



作業風景

图7 常滑据甕

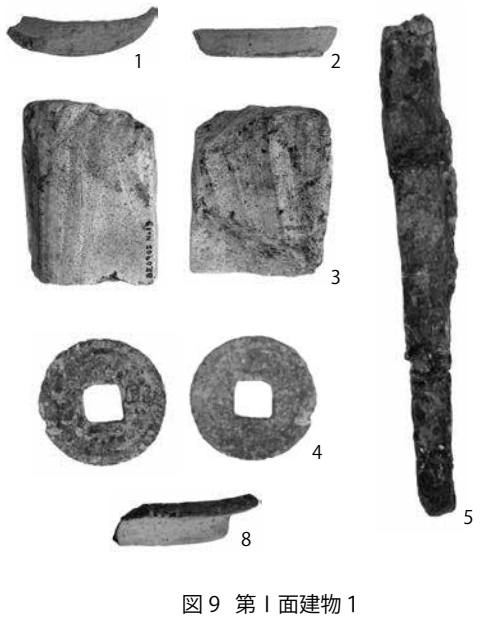


図9 第I面建物1



図10 第I面建物2

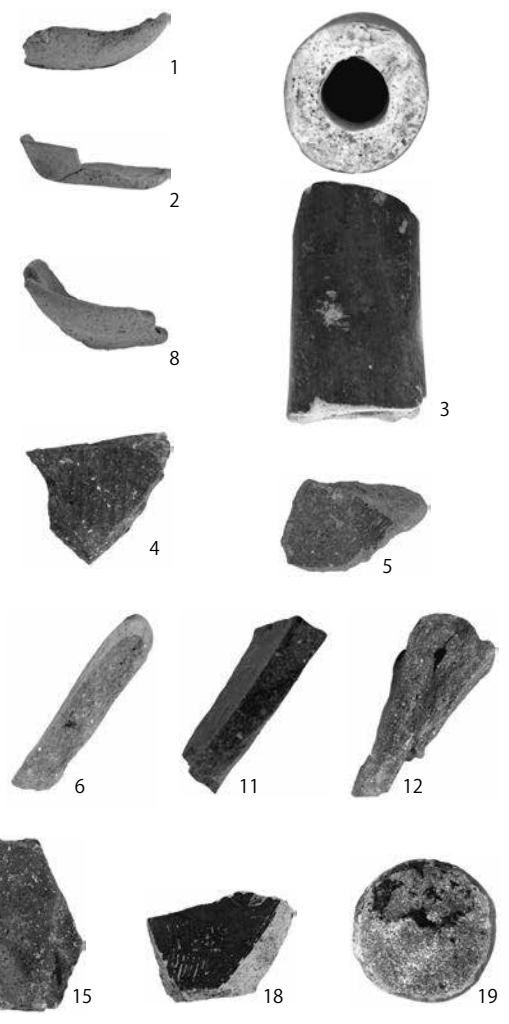


図12 第I面落ち込み

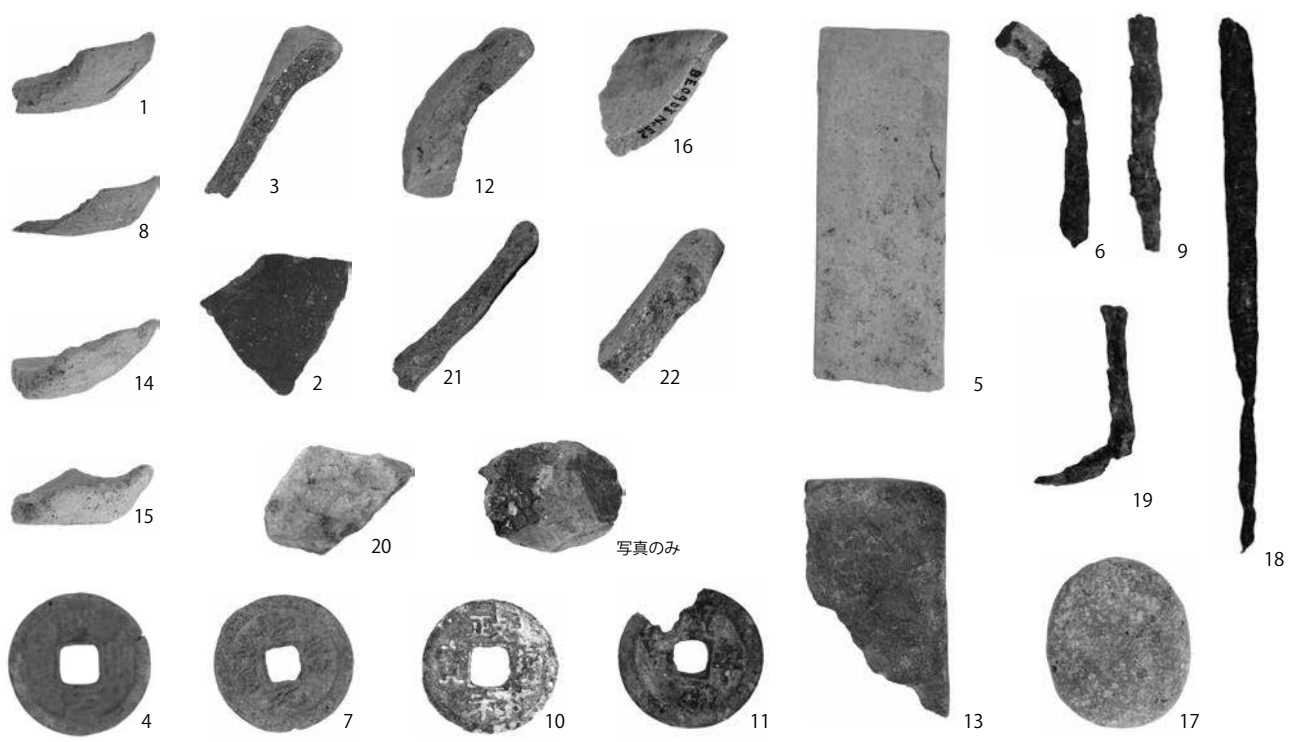


図13 第I面土坑・柱穴

図版 19

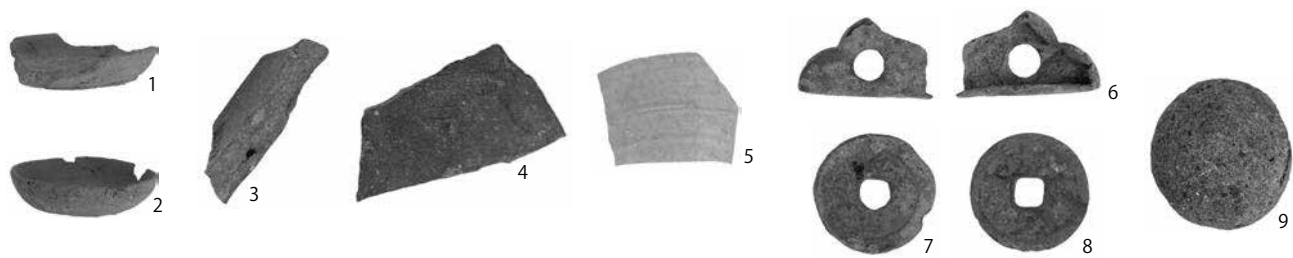


図 14 第 I 面直上

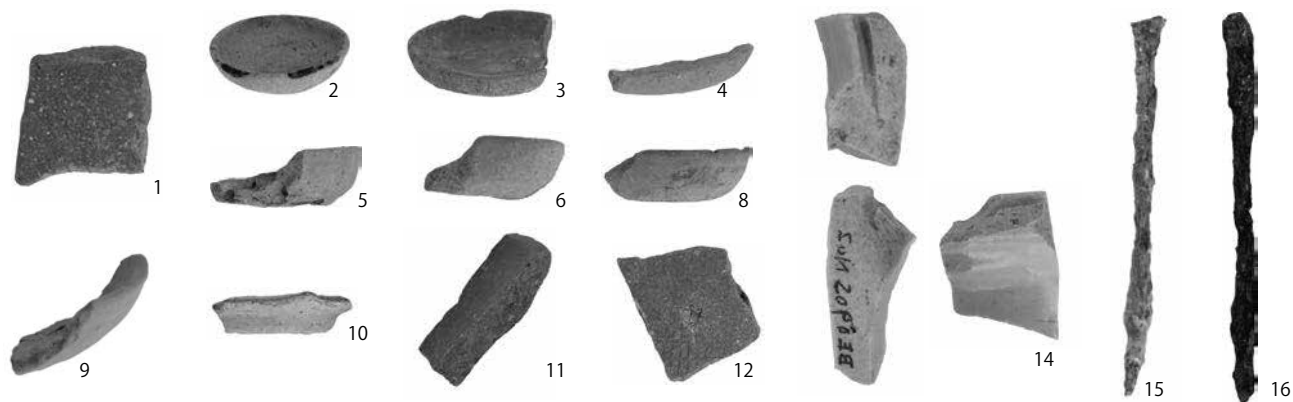


図 15 第 I 面出土遺物

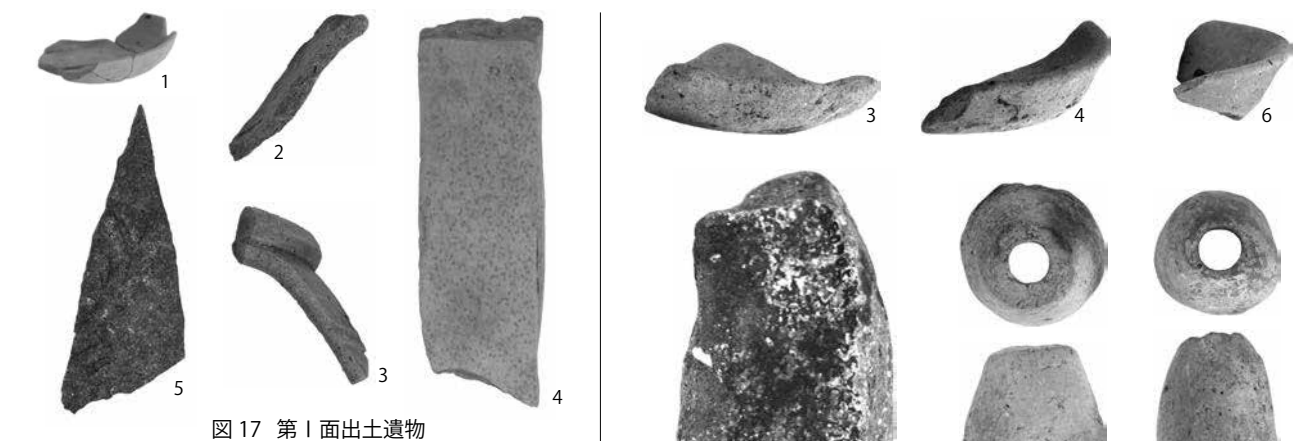


図 17 第 I 面出土遺物

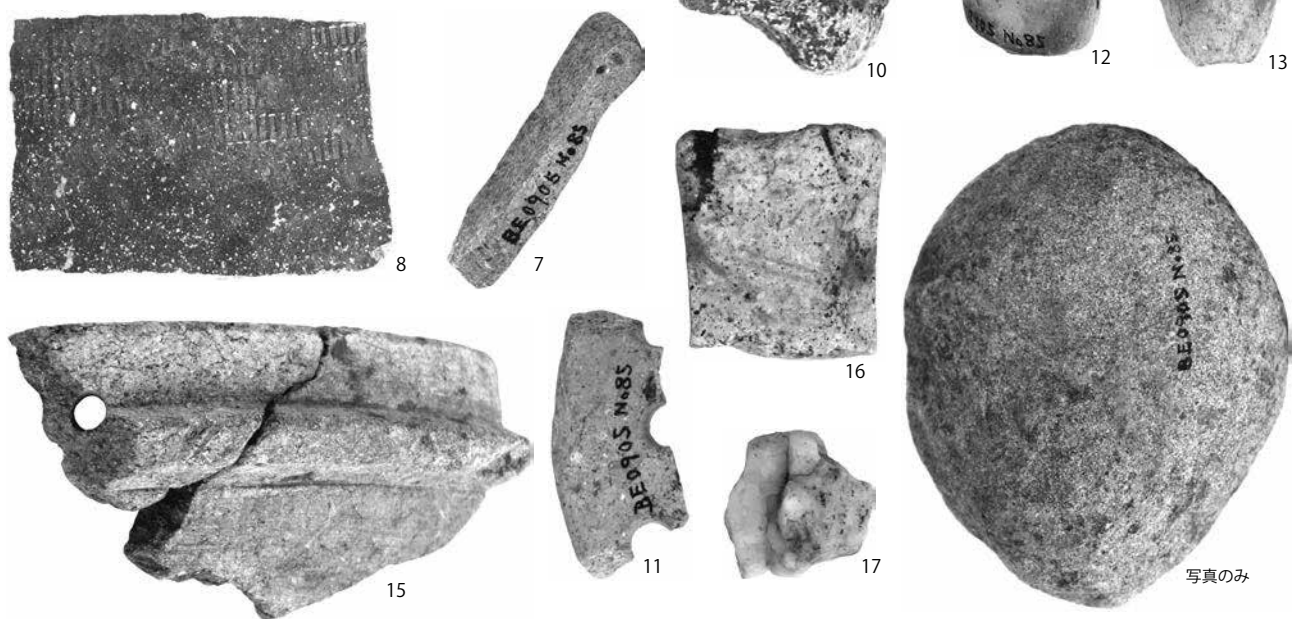


図 18 第 I 面から第 I b 面まで出土遺物

写真のみ



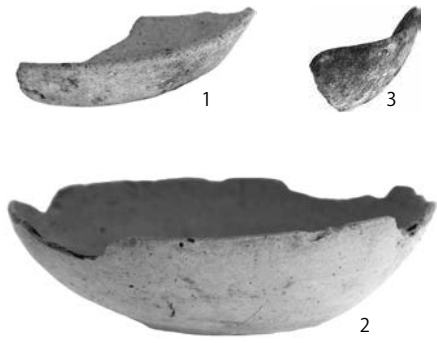


图 19 炭化層出土遺物

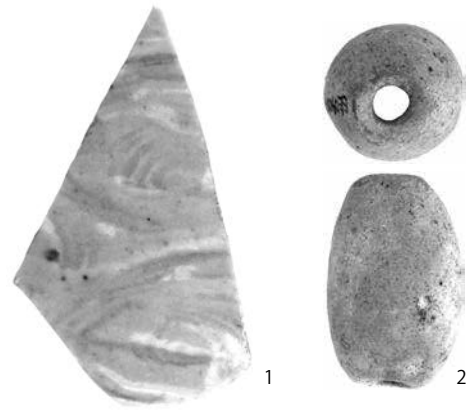


图 20 第Ⅱ面出土遺物



图 21 第Ⅱ面礎石

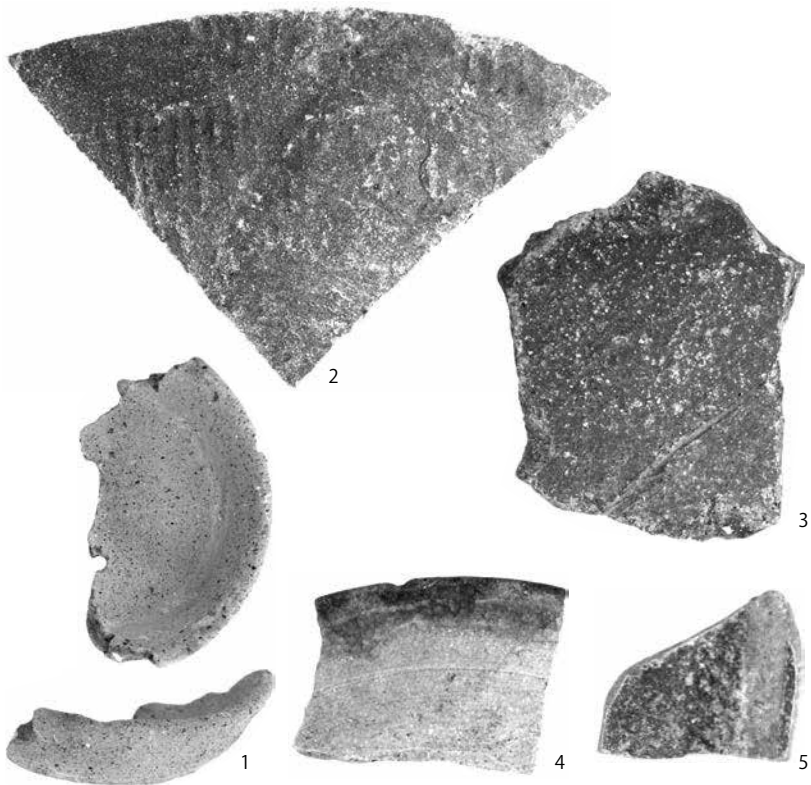


图 22 第Ⅱ面落ち込み出土遺物

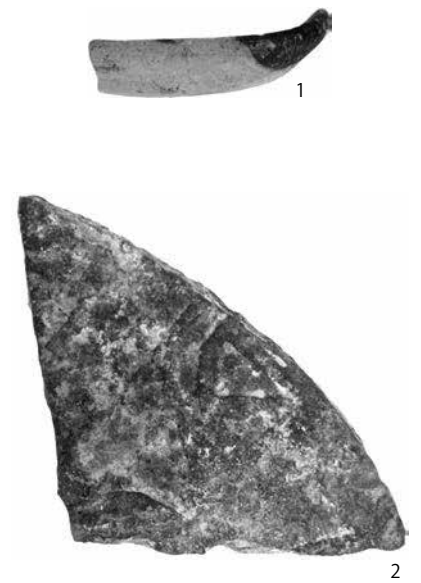
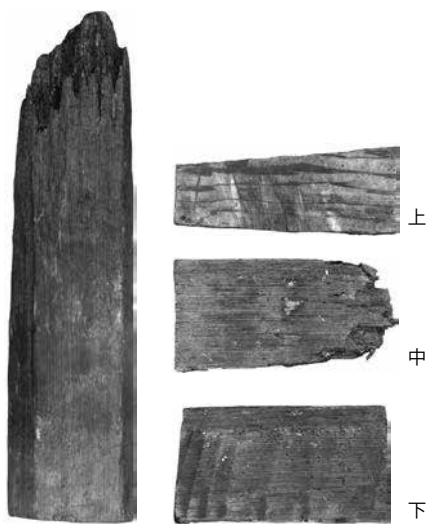


图 24 第Ⅲ面建物 4 出土遺物



柱穴 137



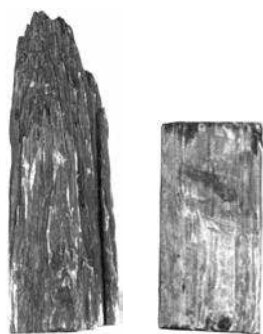
柱穴 146



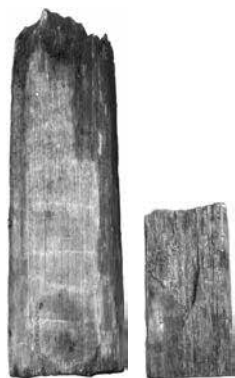
柱穴 150



柱穴 155



柱穴 152



柱穴 160



图 25 柱·礎板



図 28 第三面落ち込み出土遺物

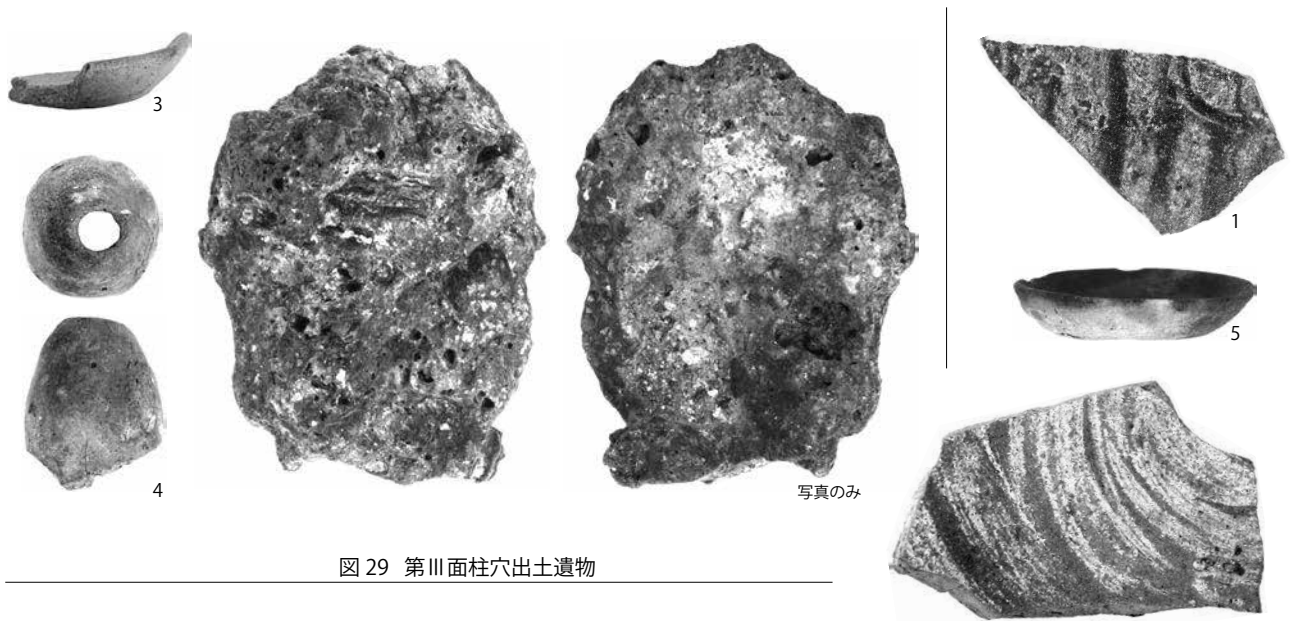


図 29 第三面柱穴出土遺物

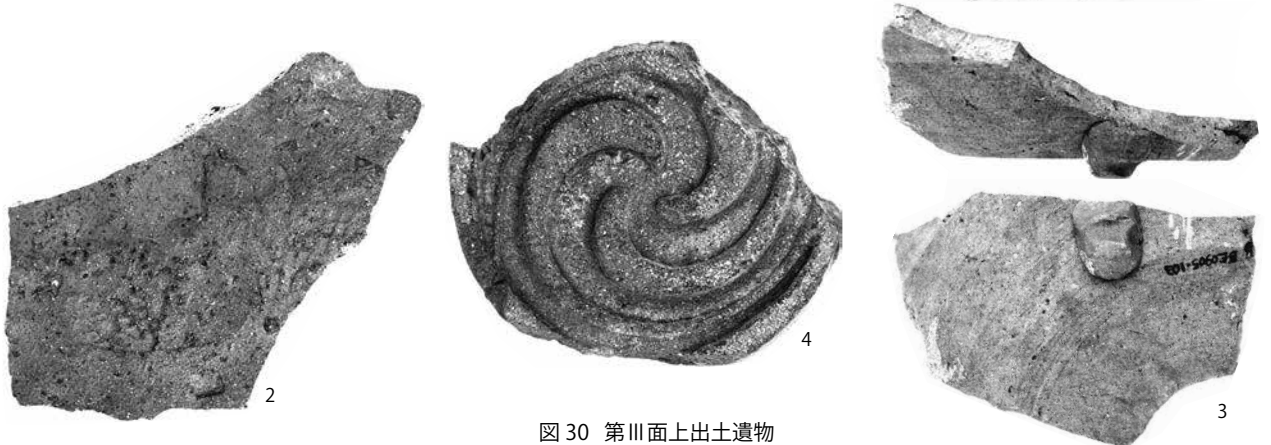


図 30 第三面上出土遺物

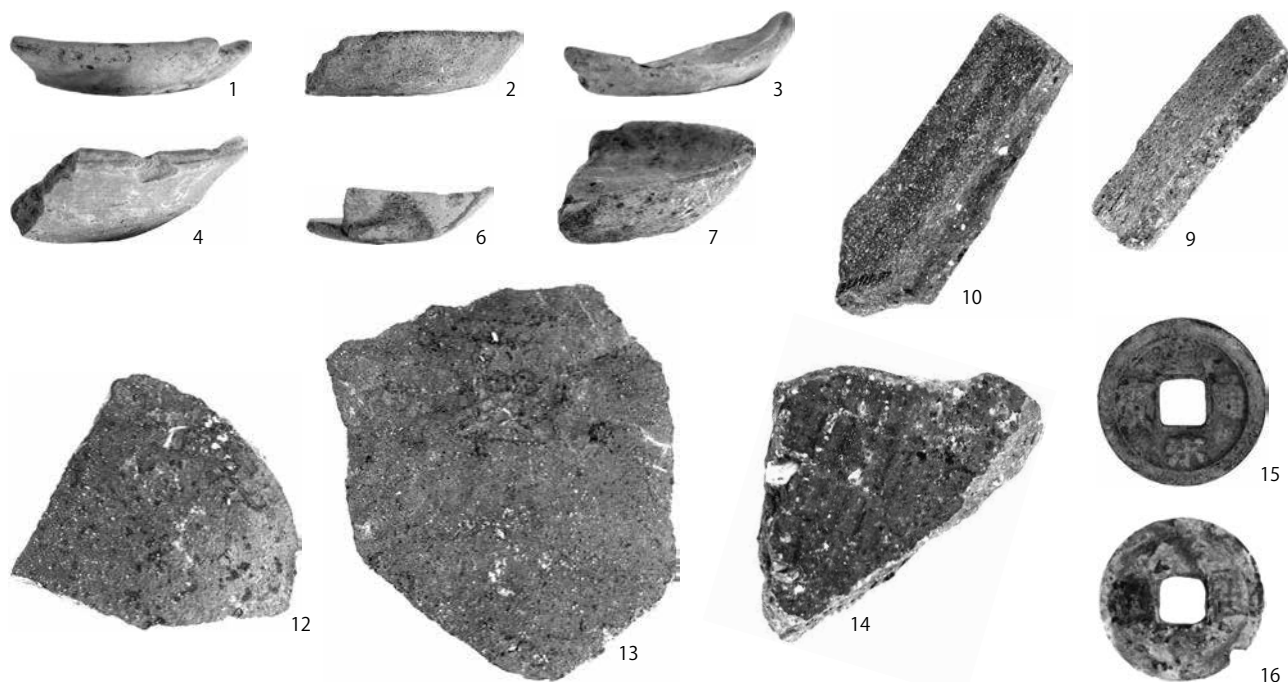


図 31 第III面出土遺物

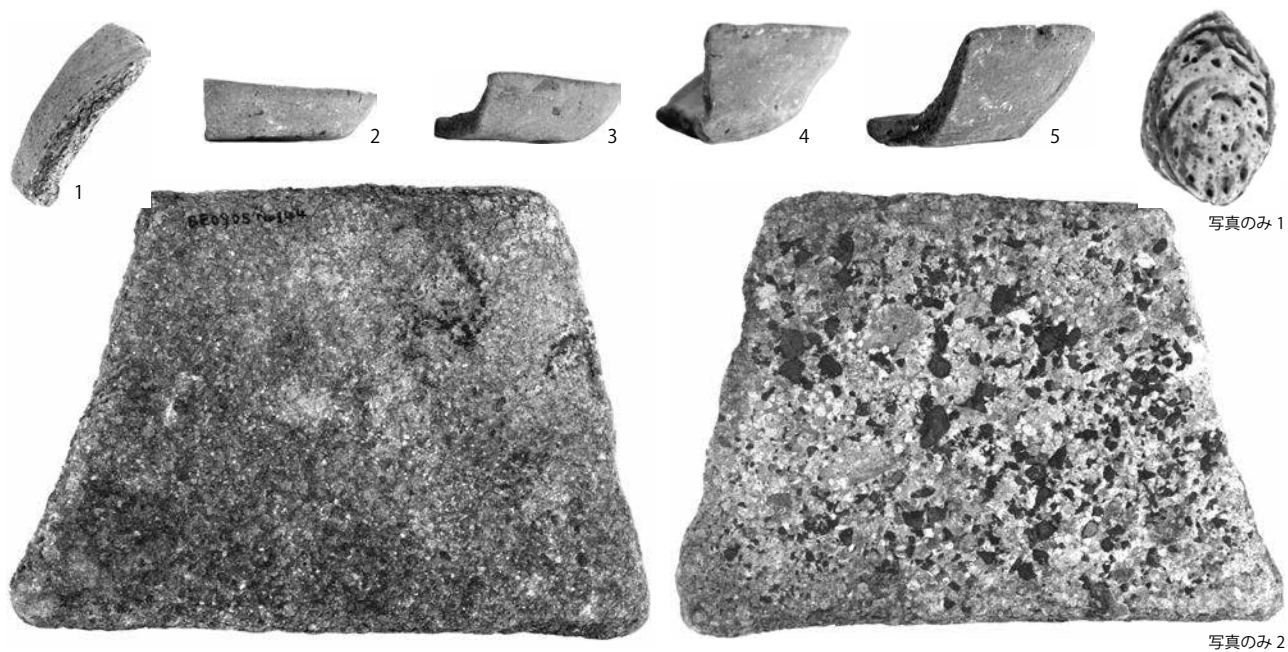


図 33 第IIIb面井戸1出土遺物

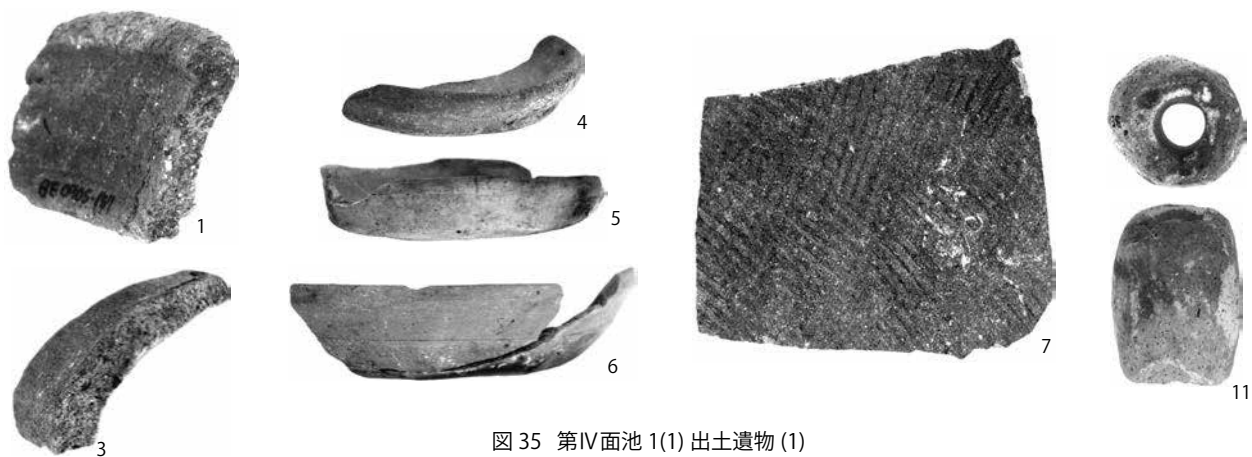


図 35 第IV面池1(1)出土遺物(1)

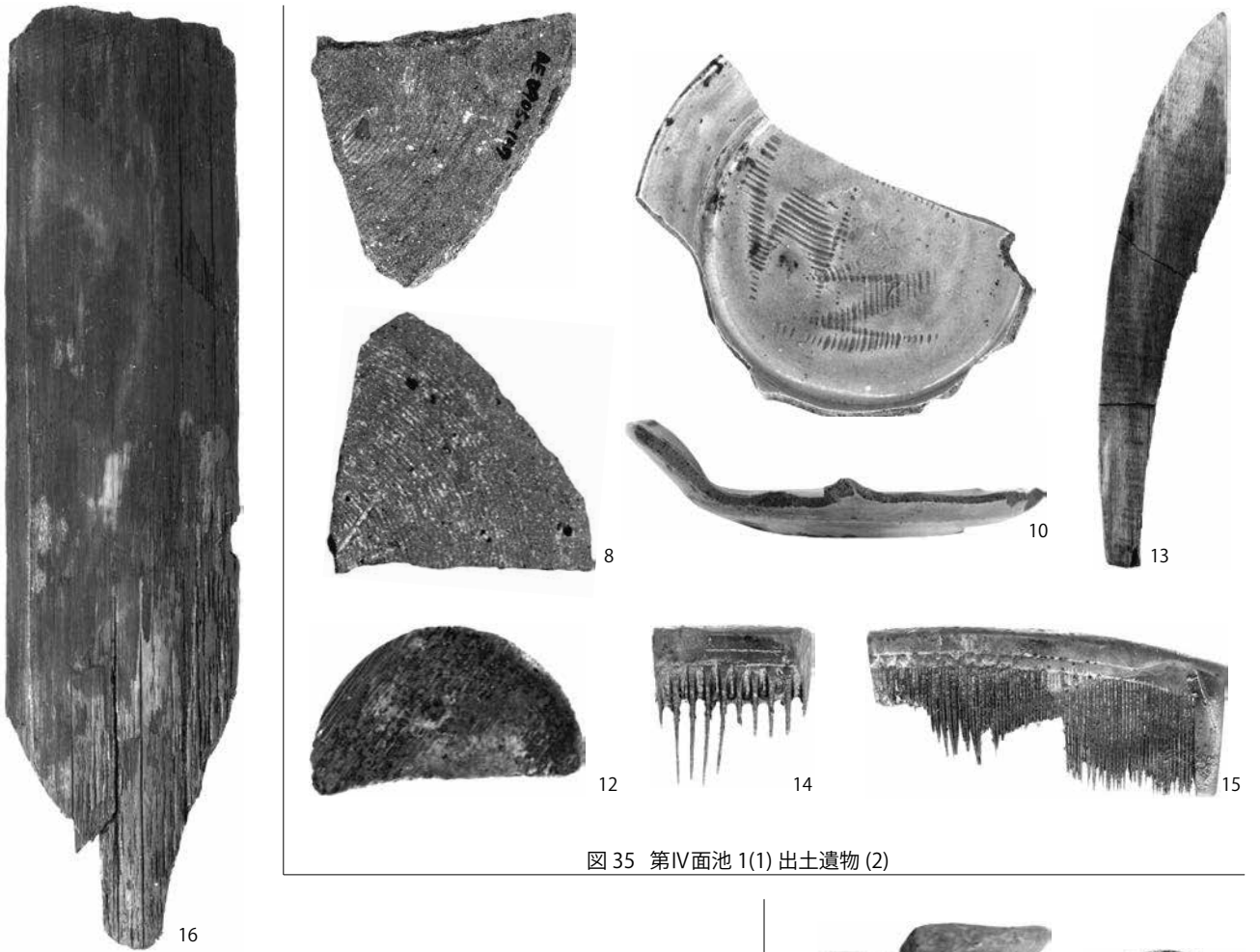


图 35 第IV面池 1(1) 出土遺物 (2)



图 35 第IV面池 1(2) 出土遺物

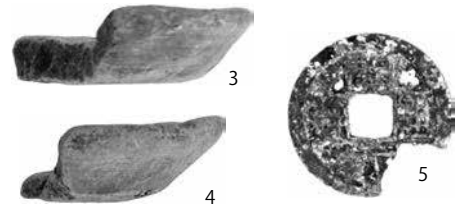


图 39 第IV面溝 1 出土遺物

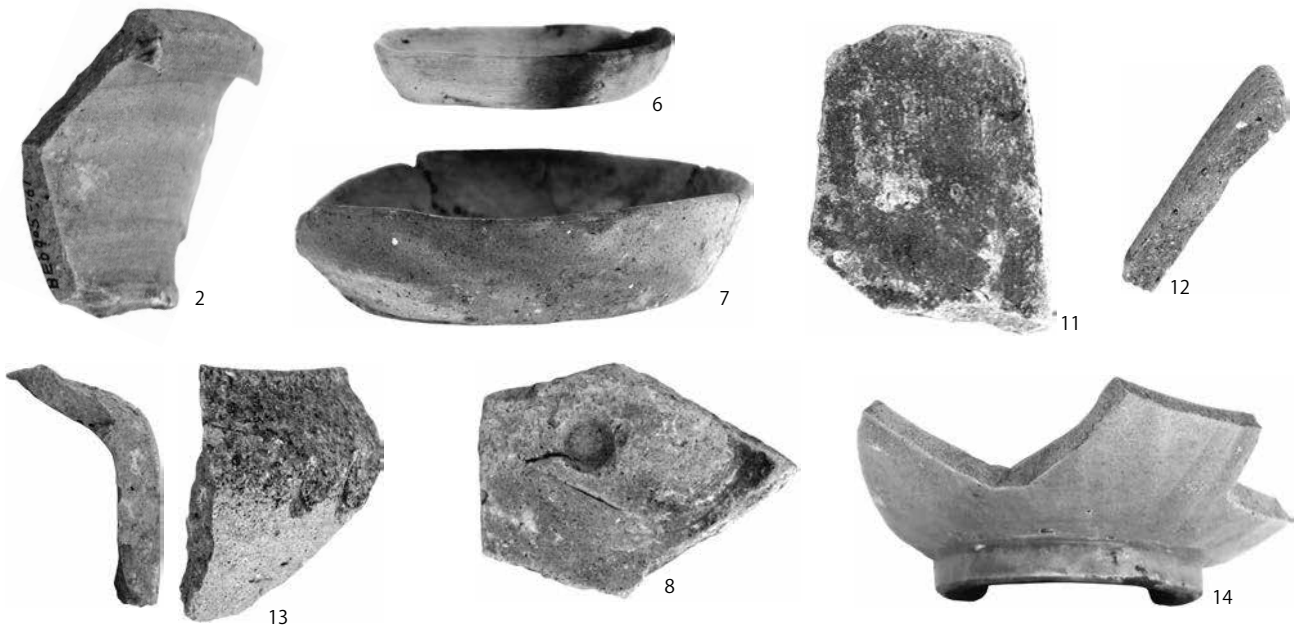


图 40 第IV面上出土遺物



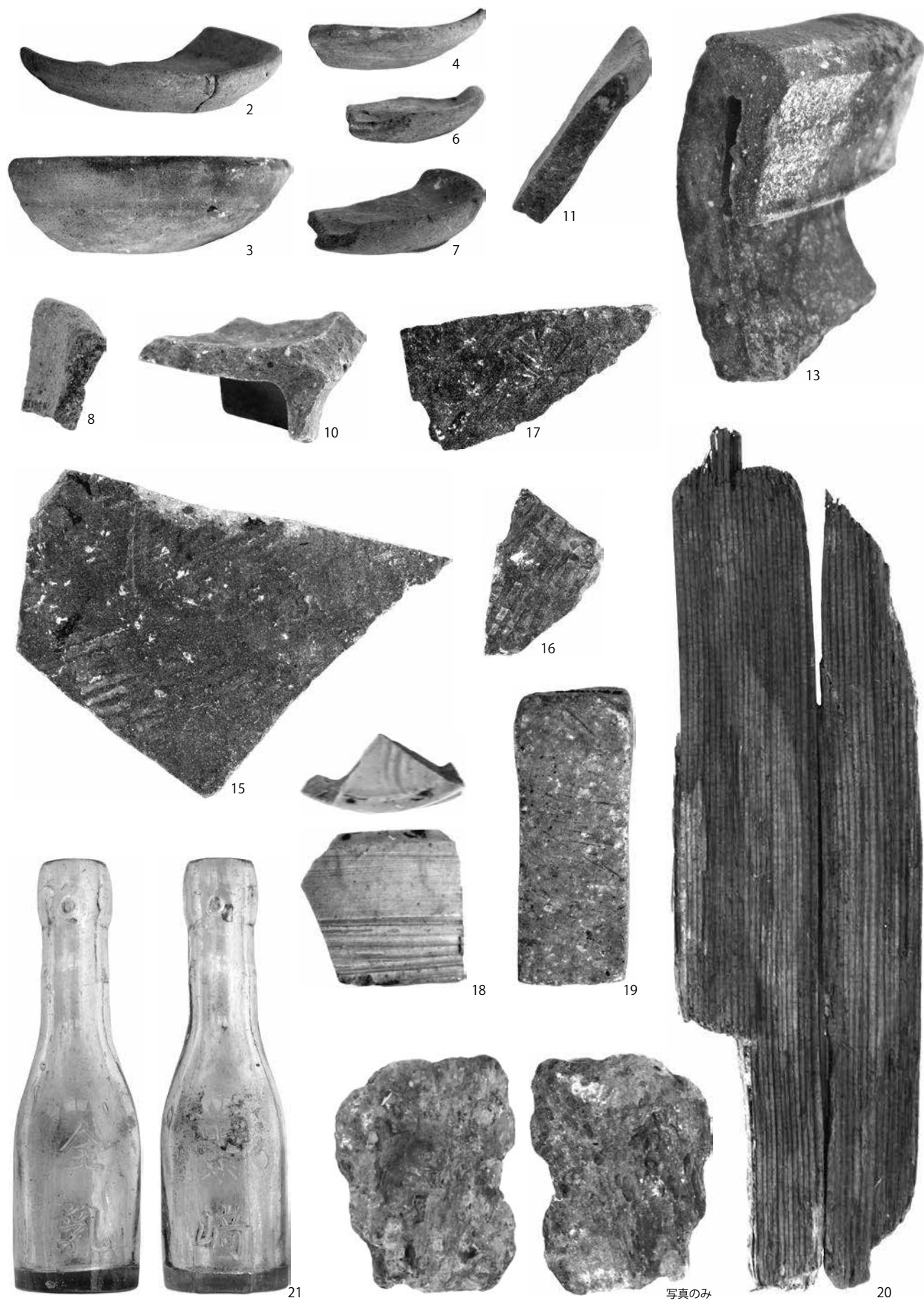


図 41 表採遺物

写真のみ

# 大倉幕府跡 (No.253)

雪ノ下三丁目 693 番 8 地点

## 例 言

1. 本報告は、鎌倉市雪ノ下三丁目 693 番 8 地点における大倉幕府跡（鎌倉市遺跡 No.253）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 21 年 9 月 14 日から同年 11 月 20 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は、33㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

調査員 岡田慶子、高橋 亮、平山千絵（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

作業員 安達越郎、伴 一明、永井隆三郎、根市真古人

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

整理作業参加者 岡田慶子、押木弘己、本城 裕、吉田桂子

（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

秋田公佑、天野隆男、串田健一、倉澤六郎、高橋こう子、松岡信喜

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報告では世界測地系（第Ⅸ系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前の測量基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
5. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「OB0909」とし、出土品への注記その他に使用した。



## 本文目次

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	213
第二章	調査の方法と経過	216
第1節	調査に至る経緯	
第2節	調査の方法	
第3節	調査の経過	
第三章	基本土層	217
第四章	発見された遺構と遺物	220
第1節	検出遺構	
第2節	出土遺物	
第五章	調査成果のまとめ	255

## 挿図目次

図1	調査地の位置	214	図20	2面遺構14出土遺物	236
図2	調査区配置図	216	図21	2面下出土遺物	237
図3	調査区東壁・西壁土層断面図	218	図22	2面下炭層出土遺物	238
図4	Ⅱ区北壁・南壁土層断面図	219	図23	3面出土遺物	239
図5	1・2面全体図	221	図24	3面下出土遺物	241
図6	1・2面個別遺構図	222	図25	3面下ほか出土遺物	242
図7	3面全体図	223	図26	4a面遺構15出土遺物	243
図8	3面遺構3	223	図27	4a面遺構15 ・4b面遺構15b出土遺物	244
図9	4a・4b面全体図	224	図28	4面下・4b面下出土遺物①	245
図10	4a面遺構15	225	図29	4面下・4b面下出土遺物②	246
図11	4b面遺構15b	226	図30	4面下・4b面下出土遺物③	247
図12	5面全体図	227	図31	4c面遺構17・4c面下出土遺物	248
図13	6a・6b面全体図	228	図32	4c面下最下層・5面遺構9出土遺物	249
図14	7・8面全体図	230	図33	5面下出土遺物①	250
図15	9・10面全体図	231	図34	5面下出土遺物②	251
図16	1面遺構13出土遺物	232	図35	5面下出土遺物③	252
図17	1面遺構1出土遺物①	233	図36	6面下～10面 ・10面遺構11出土遺物	253
図18	1面遺構1出土遺物②	234			
図19	1面下出土遺物	235			



## 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

大倉幕府跡は鎌倉低地の北東部に位置する。神奈川県遺跡台帳では鎌倉市の No.253 遺跡として登載され、県道 204 号（金沢・鎌倉線）沿いの「関取場」碑を南東の起点として西に 270 m、北に 215 m の範囲を持つ（図 1）。遺跡西限は横浜国立大学付属小・中学校の東辺だが、かつては現県道の「筋替橋」から西御門一丁目の谷戸方面に直向する道路が存在しており、これが幕府西限の名残であったと考える理解が有力である（馬淵ほか 2005 など）。これに従えば、大倉幕府の東西規模は最大で 380 m を測ることになる。

治承四年（1180）十月に鎌倉へ入った源頼朝は、同年十二月十二日には大倉郷に構えた新亭に移ったことを『吾妻鏡』は伝える。以後、頼家・実朝と続く源氏三代の将軍御所が当地に置かれ、承久元年（1219）の焼亡に伴い北条義時大倉亭南へ仮移転するまで幕府政治の中核を担った。この間の第一次将軍御所を「大倉御所（大倉幕府）」と呼び、本遺跡名の元となっている。

嘉禄元年（1225）の宇津宮辻子御所への正式移転後、大倉御所の跡地はどうなったのか。嘉禎元年（1235）には頼朝法華堂前の湯屋からの出火・延焼を防ぐために湯屋から法華堂までの民家数十字が破却されたこと、また、寛元五年（1247）正月には頼朝法華堂前の人家数十字が火災に遭い、その中には金沢実時の邸宅も含まれていたことを『吾妻鏡』は伝えている。これらの記事からは、嘉禄元年の正式移転から早くも 10 年後には人家が密集していたさまが読み取れる（高橋 2005）。建長三年（1251）には鎌倉中の町屋免許地 7ヶ所の一つに「大倉辻」も含まれていることから、御所移転後の当地周辺は武家の邸宅や寺社が点在する一方で、庶民階層の経済活動によって都市鎌倉を支える側面も合わせ持っていたと考えられる。

「大倉幕府跡」では現在までに 19 地点で発掘調査が実施され（註 1）、今回は 13 地点目での調査となる。概ね 100 m<sup>2</sup>未滿の狭小な範囲が調査対象であり、広範囲に亘り遺跡状況を把握できた例は少ない。太田静六氏は『吾妻鏡』の記載内容をもとに建久二年（1191）の焼亡後に再建された「第二期大倉御所」の復元を試み、南に苑池をもつ寝殿造りを想定しているが（太田 1992）、今のところ、発掘調査によって検証するだけの材料は得られていない。ただ、**地点 6**では中世基盤層上面とされる 10c 面で礎板を持つ柱間距離 2.49 m の東西柱穴列が検出され、報告では大倉御所存続期間中の遺構とされている（馬淵ほか 2005）。同一面では他に、やはり礎板持ちで掘方プランの直径が 1.5 m を超えると推定される大型の柱穴も発見されており、南北柱穴列を構成する可能性も示唆されている。今回の調査でも中世最下面である 10 面ないし一段階新しい 9 面で南北径 1.1 m を超え垂直に掘り込まれた大型の土坑が検出され、中世基盤層が覆土のベースとなる点など**地点 6**の事例と共通する要素が見て取れる。**地点 8**では中世基盤層上での遺構の検出には及んでいないが、報告では 6 面までの 5 時期の遺構面が嘉禄元年以前の大倉御所時代と推定されている。6・7・8 面上には混貝砂が敷かれ、8 面上では礎石や雨落ち溝と見られる南北溝などが検出されている（福田 2011）。このように、遺跡範囲の中心 = 大倉御所の中核であったかを実証するためには、なお調査の蓄積を待たなければならない。

他方、大倉御所の外郭線がどのような形態をなしていたかも重要な問題である。**地点 4**では、下層で上幅 1.5 m 以上、深さ 1.15 m の断面 V 字状を呈する東西溝（溝 3）が検出され、これと同一面、ないし 1 層上位では幅 25 ～ 60 cm、深さ 20 ～ 30 cm の南北溝 11 条が検出されている。この上位には少なくとも 3 段階に及ぶ東西道路路面が構築されており、報告者は慎重を期しながらも南北溝群から上層道路路面への連続性を想定している（汐見・山上 2002）。溝群について、平面図からは道路基礎としての波板状



図1 調査地の位置

痕跡といった印象も受ける。最上位の東西道路は北側溝を伴い、ここから概ね 15 世紀代に下るかわらけが一定量出土している。下層の東西溝 3 については県道を挟んだ南側の地点 a で検出された溝 9 を類例に挙げることができ、報告では平安時代末の 11 世紀後半～12 世紀前半という所産時期が想定されている（馬淵 1998）。底面レベルは溝 9 の方が 60cm ほど高いが、走行軸は N80° W 前後と共通している。なお、2014 年度に調査された地点 19 では、中世の東西道路面と北側溝とも目される遺構が検出され、道路面の下位では断面 V 字状の東西溝が確認されている（註 2）。詳細は今後の報告を待ちたいが、上記二例との関連が注目される成果といえる。これらは、六浦方面へと抜ける主要な東西道として現在まで踏襲されるとともに、鎌倉時代初期に限れば大倉御所の南限を画す役割も担ったであろう。中世の六浦道は仁治二年（1241）の朝夷奈切り通しの開通に伴い整備されたというが、平安時代末期には主に房総半島を睨んだ軍事的要請から前身道路が整っていたとする見解もある（馬淵 1994）。この段階の道路規模や構築状況は明らかでないが、東方には古代の遺跡も点在していることから、滑川岸の狭い段丘上を縫うように古くからの交通路があったことは頷ける。

地点 9 では、標高 11.3 m ほどの中世基盤層上で上幅 5.1 m、深さ 2.7 m と大規模で断面形が V 字状と見られる南北溝（遺構 91）が検出されている。13 世紀中頃には埋没したと見られ、流下方向の軸線は東接する現東御門川よりも荏柄天神社の参道に近いという。この 2 m ほど東では、ほぼ同時期に埋没したとされる推定幅 2.2 m、深さ 0.5～0.8 m の南北溝（遺構 96）も検出され、こちらは現東御門川に近い軸線で延びるといふ（熊谷 2011）。現時点では両溝が同時存在したものか確証がなく、この延伸部での新たな調査知見を待ちたい。断片的ではあるが、今のところ大倉御所の東限と見なせる遺構は同例だけである。

これに対し地点 b では、13 世紀初頭～中葉に比定される南北柱穴列が確認されている（菊川 1993）。前述した筋替橋から西御門方面に抜ける南北旧道に東接する地点でもあり、存続期間と併せて御所西限の境界施設であった可能性が指摘されている（馬淵ほか 2005）。

現時点では、御所の北限と見なしうる遺構の発見には及んでいない。冒頭で述べた大倉御所推定域が後代の宇津宮辻子御所や若宮大路御所の推定範囲の倍以上に及ぶという指摘（馬淵ほか 2005）を受け、清泉小学校南辺の東西道路を北限と仮定した場合の広さ（約 37000 m<sup>2</sup>）が、後続する二御所の合算面積（約 72000 m<sup>2</sup>）の半分近くになるという試算も行われている（熊谷 2011）。

以上、本章では大倉御所時代の遺跡概要を中心に述べてきた。同御所の実態把握は、中世都市鎌倉の研究を行う上で最重要テーマといっても過言ではないだろう。学術発掘も含めた調査成果の蓄積を期待したい。

【図 1 に番号を付した調査地点と所収文献、他の参考文献は 288 頁に掲げた】

#### 【註】

註 1 地点 1 について、報告書名は『大倉幕府周辺遺跡群』（馬淵 1990）となっているが、「大倉幕府跡」の包蔵地内にあることから、本報告では後者に含むものとした。

註 2 調査担当者である宮田 眞氏のご教示による。現地調査の終了から間もないため、事例紹介に留めたい。

## 第二章 調査の方法と経過

### 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、個人住宅の建設に伴う事前の記録保存を目的として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。平成21年4月7日・8日に実施した確認調査の結果、現地地表下30cmほどで中世の遺構面が検出され始め、地表下150cmまでに少なくとも3枚の中世遺構面の遺存する状況が確認された。さらに下位にも文化層が続くことが予測されたため、地盤の柱状改良を伴う建設計画の実施に先立っては発掘調査を行う必要があるとの判断に至った。

これを受け、平成21年9月14日から同年11月20日までの約3ヶ月間、現地での発掘調査を行った。

### 第2節 調査の方法

表土の除去は重機によって行い、遺構面（1面）に近付いたところで人力での掘削作業に移行した。掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査区は二分割し、先行して着手した北部2/3をⅠ区、南部をⅡ区として、各々調査を進めた。調査範囲は東西約3m、南北約11mと細長いもの



図2 調査区配置図

であったが、この中で現地表下 3.0 m まで文化層が累々と重なる状況が確認された。このため、安全面への配慮から下層での調査ほど対象面積を狭める必要があり、中世基盤層 (10 面) の調査は 1.2 m<sup>2</sup> ほどしか対象にできず、Ⅱ区では 5 面以下の調査を行うことができなかった。現地表面から中世基盤層までが非常に深い状況は大倉幕府跡における他の調査地点に共通しており、個人住宅の建設に起因する小規模調査では鎌倉初期 (大倉幕府期) における遺跡様相の把握を困難にしている。

Ⅰ・Ⅱ区とも順次下層への掘り下げと写真撮影・測量図作成の記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に即した座標軸を設定し、光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。座標移動は市道上に設置された鎌倉市 4 級基準点「E059」と「E085」二点間の関係をもとに開放トラバースで行った。現地では 4 級基準点の成果簿に基づき旧測地系の座標値を用いたため、本報告の作成に当たって世界測地系の座標値に表記を改めた (図 2)。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web 版 TKY2JGD」を使用した。変換値は東日本大震災後の補正值とはなっていない。

なお、図 2 では隣接する二地点の調査区も提示したが、両地点の調査報告書では旧測地系の座標値を用いていたので、これも併せて上記ソフトで座標変換した後、合成を行った。

### 第 3 節 調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成 21 年 9 月 14 日に開始した。重機によるⅠ区の表土掘削を行い、測量基準軸の設定や残土置場の整備を行った後、人力による遺構面の精査と調査区壁面の整形に移行した。順次、遺構掘削と記録作業を進め、下層遺構面でも同様の作業を繰り返し行った。

10 月 27 日にⅠ区の埋め戻しとⅡ区の表土掘削を重機で行い、11 月 19 日までⅡ区の調査を進めた。11 月 20 日には調査器材の搬出を行い、現地での調査工程を全て終了した。

出土品などの整理作業は平成 25 年度に着手し、同年度末までには遺物の実測とトレースを終えた。平成 26 年度には挿図および写真図版を作成し、次いで表組みの作成と本文の執筆を進めた。整理作業は、鎌倉市文化財課分室で行った。

## 第三章 基本土層

本地点の現地表面は標高 13.6 ~ 13.7 m で、南側がやや低い。

前述したように、本地点では 10 枚に上る中世遺構面を検出した。部分的な広がりも含めればさらに多くの遺構面が確認されており、中世における本地点での土地利用が、整地を繰り返しつつ連綿と続けられた状況を見て取ることができた。

中世最上層の 1 面が標高 13.3 m で、中世基盤層の上面である 10 面が標高 10.7 m で確認されている。この間、泥岩屑による平らな整地面が繰り返し造成され、各整地面の間には、比較的軟質な粘質土層の堆積が見られた。標高 12.0 m 前後の 3 面 - 5 面間では有機質腐植土層 (まぐそ層) の堆積が確認された。

1 面と 2 面の構築土は人頭大の泥岩ブロックを主体とする層厚な造成土となっており、3 面以下とは様相を異にしている。3 面上には 5cm ほどの厚さで炭層が堆積していることから、3 面の構築物が火災により焼失した後、当地点における土地利用の在り方が大きく変わった状況が想定される。

10 面以下の中世基盤層は黒色粘質土で、奈良~平安時代の土師器相模型坯の小片 3 点が出土した他、中世遺物の混入は見られなかった (表 2)。

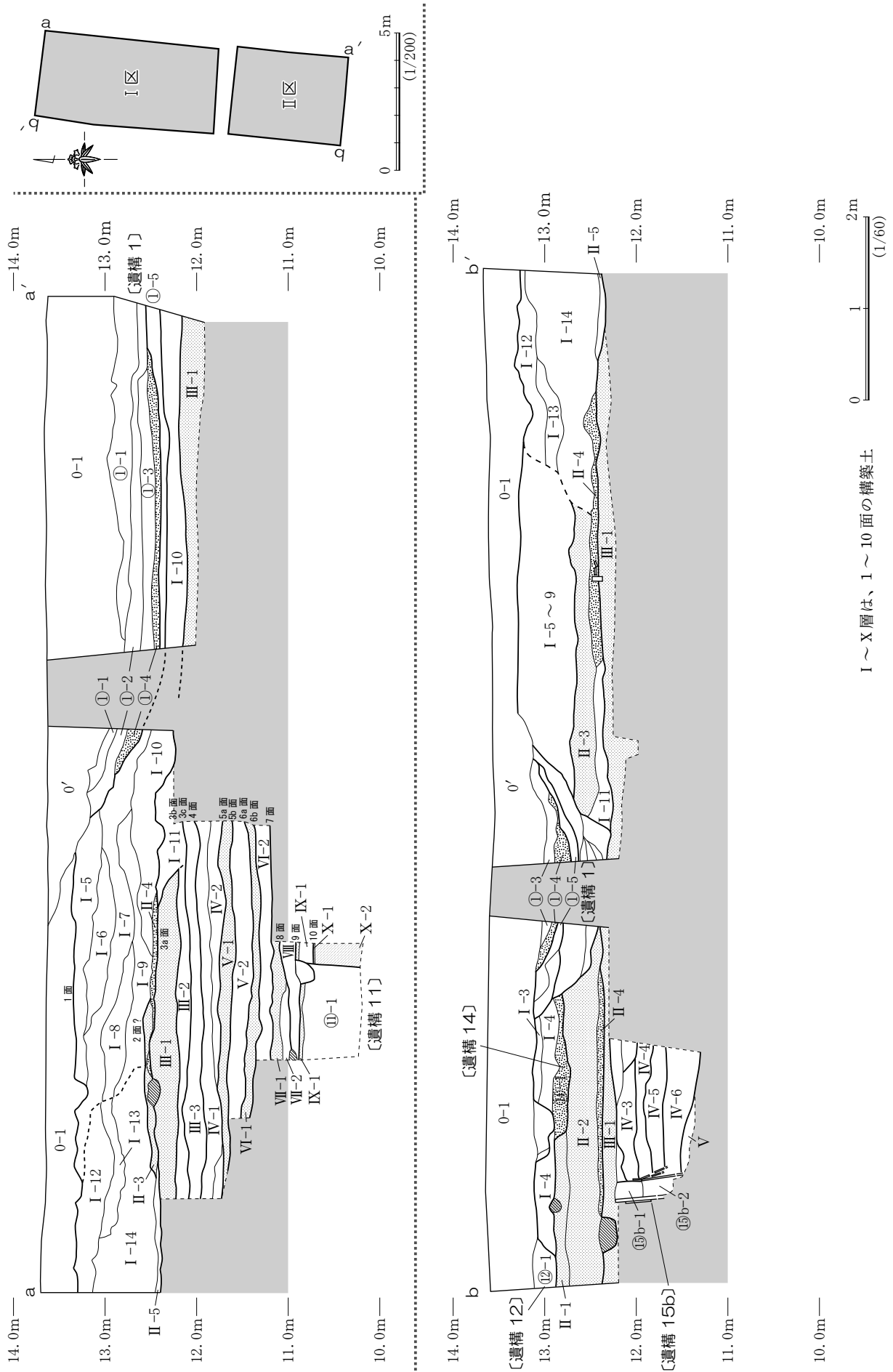


図3 調査区東壁・西壁土層断面図





## 第四章 発見された遺構と遺物

### 第1節 検出遺構

本地点では10枚の遺構面が検出され、全て中世に帰属するものであった。Ⅱ区では安全面の配慮から、5面までの調査しかできなかった。

以下、上層の遺構面から順に、発見された遺構について説明する。

#### 1面(図5・6)

Ⅰ区では標高13.3m前後、Ⅱ区では13.05m前後で確認した。全体的に拳～人頭大の泥岩ブロックで造成され、部分的に上面が細かな泥岩粒で整地されていた。Ⅰ区の北半と南半とでは泥岩の大きさが異なるなど整地状況に差異が見られたことから、造成は二段階に分けて行われたものと考えられる。Ⅰ区北半部では泥岩ブロックが特に大きく、その南辺は人頭大の泥岩塊で縁取りされていたように見て取れた(泥岩盛土)。この点、確証はないものの東西方向の土塁または道路といった構築物が一定期間存在した可能性を示しておきたい。

泥岩の盛土が次段階の造成土で埋没した後、Ⅰ区南端～Ⅱ区のほぼ全域で南から東に向けて落ち込む炭層が検出され、Ⅱ区の南端付近ではこの落ち込みを切るかわらけ集積土坑が検出された。

**遺構13(かわらけ集積土坑)**：Ⅱ区の南端で検出され、遺構1より新しい。長径140cm、短径120cmを測り、確認面からの深さは40cmを測る。土坑内では多量のかわらけが出土している。総じて遺存状況が良好で、完形資料も多く見られた。二次的被熱のためか器表が暗褐色～黒褐色に変色した個体が多く、また覆土に炭化材が多く混入していた状況から、火災後の処理などに伴い一括廃棄された可能性が考えられる。

出土遺物は図16に掲げた。様相については第2節で説明する。

**遺構1(炭層落ち込み)**：Ⅰ区南端部では南に、Ⅱ区では東に向けて落ち込む。確認面からの深さは90cmほどで、Ⅱ区では標高12.4m付近で東と南に続く平坦面が確認できた。炭層は落ち込みの最下層に堆積し、斜面部で5～10cm、平坦面では20cmほどの層厚があった。炭層への土粒の混入は殆どなく、ほぼ細粒炭化物の純層であった。

本遺構の機能・用途については、現時点では明確にしえない。現地調査時には池の可能性も考慮したが、滞水の痕跡が明瞭でなかったため積極的には肯定できない。平面的な広がりに関して、東に接する図1-地点16では標高13.0m前後の第1面で最大比高差12.5cmの段差が確認されているが、本地点の落ち込みと関連するものかは定かでない。出土遺物は15世紀前半が主体で、本遺構と近似した様相を呈している。

炭層中からは完形に近いかわらけが一定量出土しており、他に古瀬戸の天目碗や瓦質風炉などの小片も少量出土している。図17・18に掲げた。

#### 2面(図5・6)

Ⅱ区では標高12.9m前後で確認した。Ⅰ区では良好な平坦面を確認できなかったが、12.6～12.8m前後で広がる整地層上面を2面と捉えた。1面で説明した泥岩盛土は、2面の整地後に行われている。

Ⅰ区南端からⅡ区北東部にかけては1面遺構1(落ち込み)の削平が及んでおり、2面整地層は失われていた。削平を免れたⅡ区の西部で、土坑1基が検出されている。

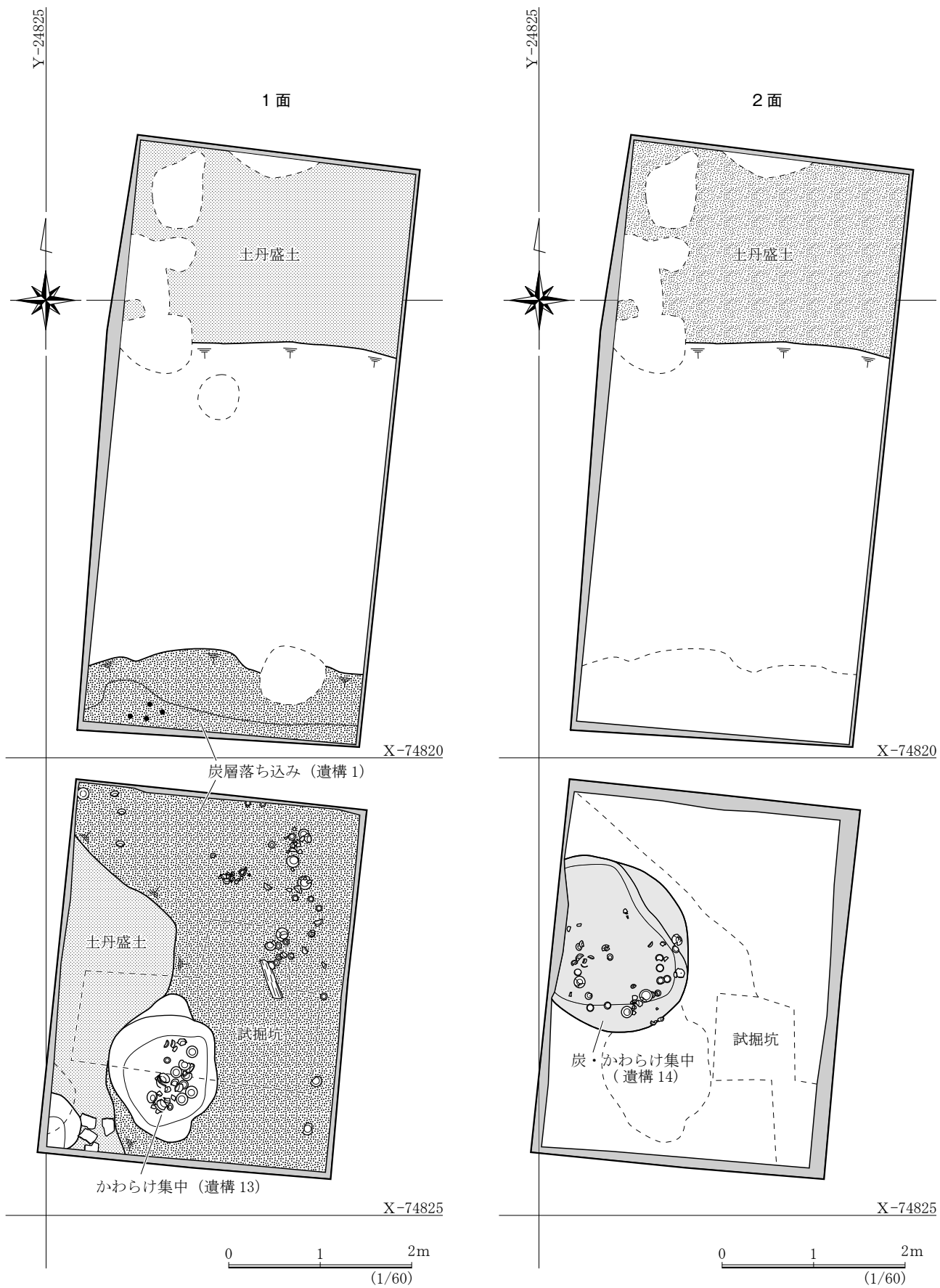


図5 1・2面全体図

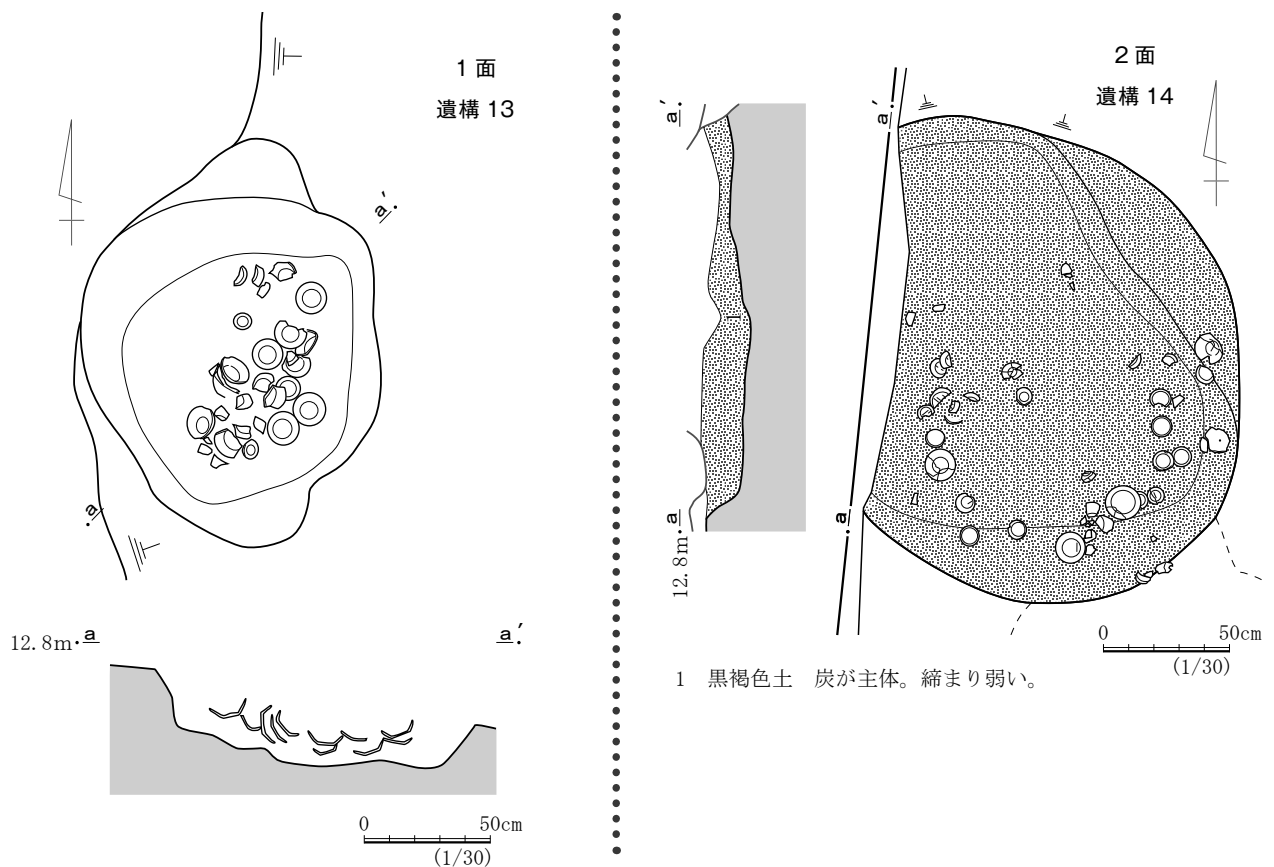


図6 1・2面 個別遺構図

**遺構 14 (土坑) :** II 区の南西部で検出された。西縁が調査区外に続くため全体形は不確定であるが、円形もしくは楕円形の平面プランを呈すると考えられる。南北径は 200cm を測り、東西径は 150cm までを計測しえた。確認面からの深さは 20cm と浅く、覆土は炭化物を主体とする黒褐色土の単層であった。

土坑内からは遺存状態の良好なかわらけが多く出土しており、完存する資料も数多く見られた。出土遺物は図 20 に示した。様相の説明は、次節で行う。

### 3面 (図 7・8)

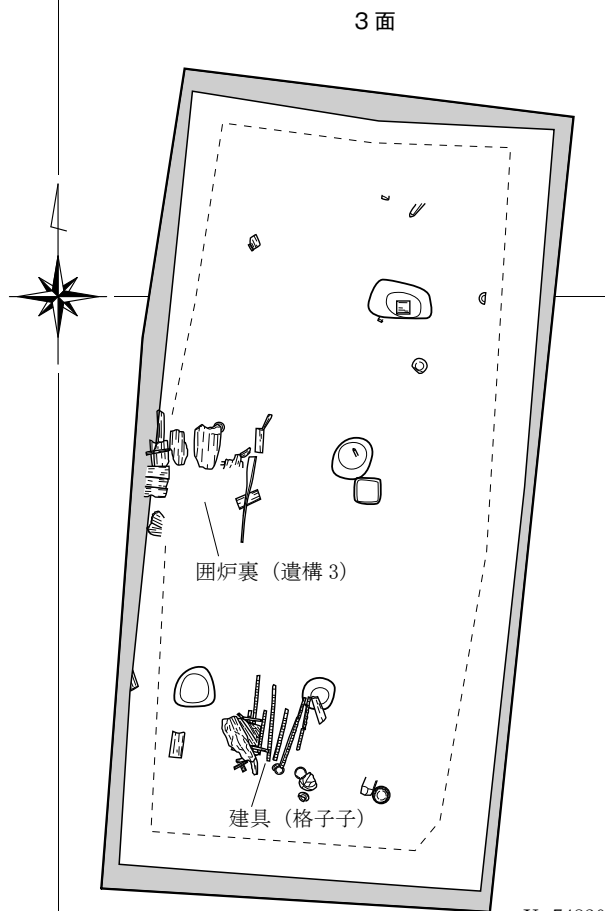
I 区で標高 12.35 ~ 12.5 m、II 区では 12.3 m 前後で確認した。拳大の泥岩塊が主体の整地表面上に層厚 5 ~ 10cm の炭層が検出された。I 区では細粒炭化物の純層で、II 区では粘質土が混入していた。

炭層を取り除いた面上で板囲いの囲炉裏 1 基と小穴 5 基が検出され、I 区の南端付近では建具の格子 (戸板か) が倒れた状態で出土している。

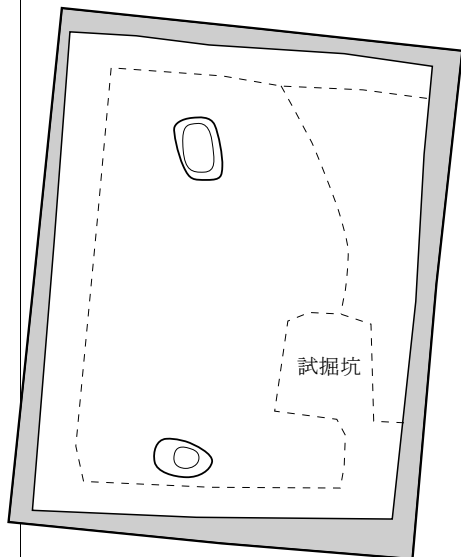
I 区は囲炉裏が検出されたことから、この段階には床板貼りの建物内部であったと考えられる。また小穴には底面に礎板を据えたものもあるため柱穴と見なせようが、限られた調査区内では柱列を復元・提示するには至らなかった。

**遺構 3 (囲炉裏) :** I 区の北部で検出された。西側辺の一部が調査区外に掛かるものの、囲炉裏内部の平面規模は把握することができた。内寸は 60cm 四方で、西辺および北辺は縦板で、東辺は横板で囲われていた。南辺では囲い板が残っていなかったが、外方から泥岩粒主体の整地土を寄せ集めて板材の裏込めにしたと見られる痕跡が確認できた。囲い板は整地表面上に据えており、縦板には浅く突き立てているものも見られた。各辺とも外方へ倒れた状態であった。板材は 30 ~ 50cm の長さを測ることから、本来あった床板も整地表面上から 50cm ほど高い位置に貼られていた

Y-24825



X-74820



X-74825

0 1 2m  
(1/60)

図7 3面全体図



水平ラインは  
標高 12.5m

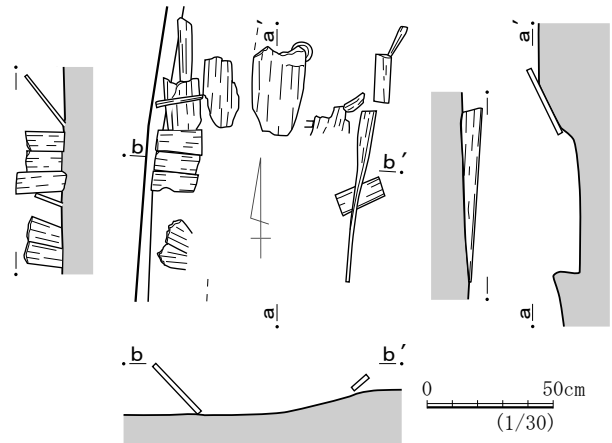


図8 3面遺構3

と考えられる。西辺・北辺の縦板には、上端が焼け焦げているものも見られた。

検出状況から考えると、囲炉裏は附属建物の火災に伴って上屋建築物の焼失炭化層に覆われたのであろう。囲い板も焼亡するか、火災後処理の際に撤去され、然る後に2面整地面が形成されたものと考えられる。

図23には、3面整地面の直上で出土した遺物を示した。説明は次節を参照されたい。

#### 4面 (図9～11)

I・II区とも標高11.75～12.2mで確認した。II区南辺で東西方向の木組み溝が検出され二段階の造り替えが認められたこと、また5面までの掘り下げに当たり数層に亘って落ち込みが確認された。平面図は上下相前後するが、4a・4c面と4b面の2枚集約した。

4a面は軟質な有機質腐植土層の上部に形成され、泥岩による良好な整地面はII区木組み溝の北辺に幅120cmのエリアで確認できたのみである。I区では標高12.0～12.1mで30～40cm間隔で並ぶ杭列と、杭で横板を抑えた東西方向の木組みを確認している。遺存状態が悪いため明言できないが、30cm上層の3面で囲炉裏など建物痕跡が残されていたことから、直下の4a面においても簡素な建物が存在していた可能性がある。

4b面の木組み溝は4a面木組み溝よりも20cmほど低い位置で検出された。有機質腐植土の堆

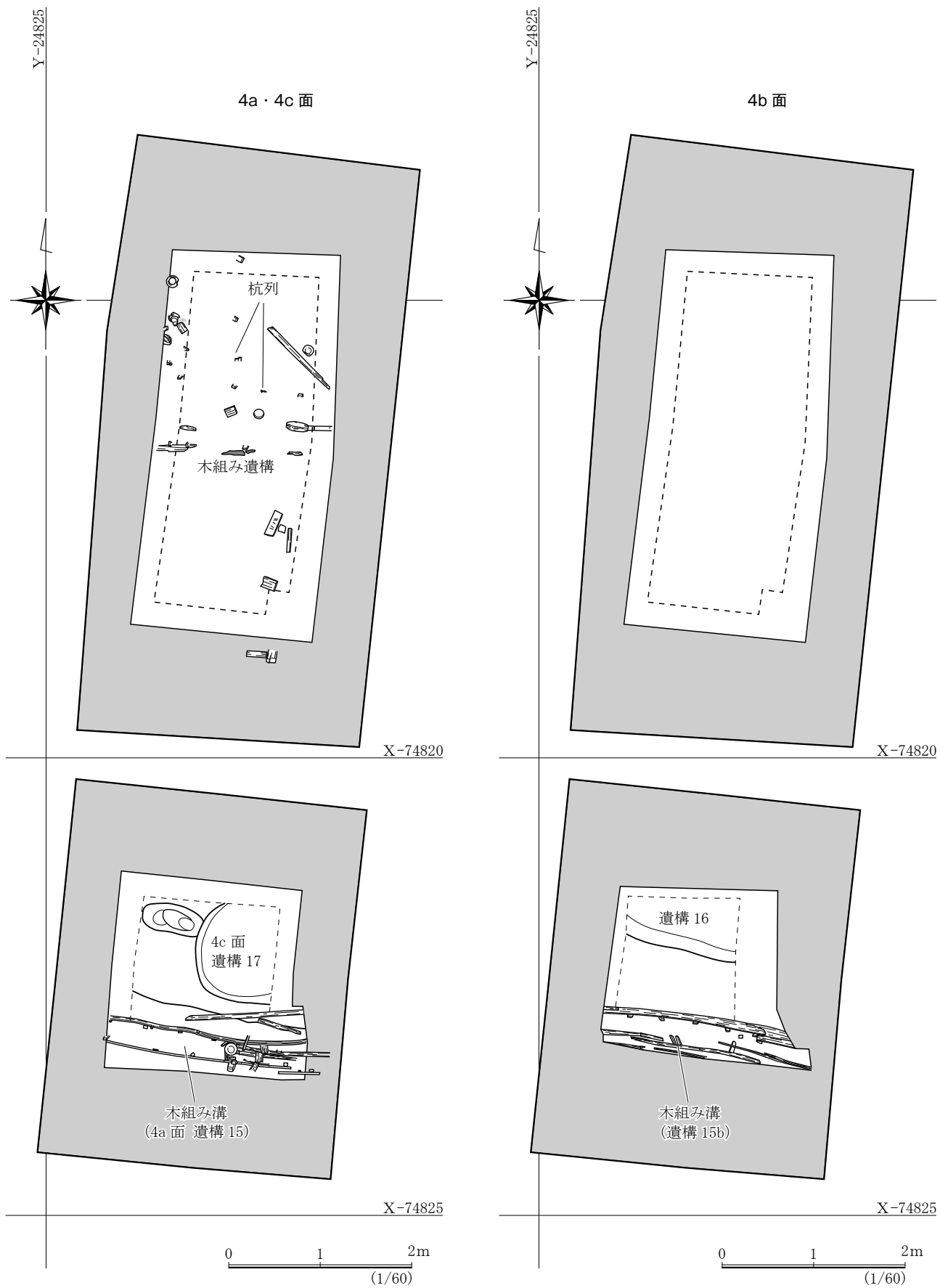


図9 4a・4b 面全体図

積層中に構築され、明確な整地層に伴う遺構ではなかった。平面図（図9右）にはⅡ区木組み溝の北側に土坑や落ち込みを描き込んであるが、これらは有機質腐植土層を掘り下げている際、標高12.05～11.75 mで確認された。本報告では4c面の遺構として扱うが、いずれも明確な整地面に伴うものではなかったため、有機質腐植土の堆積層中に異質土が紛れ込んだ痕跡とも考えられる。従って、後述する4c面などは厳密な意味での生活面とはいえないかもしれない。

#### 4a面 遺構 15（木組み溝）：

Ⅱ区南端部で検出された。東西方向に延び、両端とも調査区外に続く。確認できた長さは250cmで、N81° Wで延びる。確認面からの深さは35cmで、底面標高は11.84～11.88 mを測り、東端部が低い。

両岸ともに横板を縦杭で抑えて護岸材とし、両岸間の幅は25cmを測る。縦杭は30～60cm間隔で打たれ、北岸では10cmスパンの箇所もあった。横板は厚さ2cm、幅15～30cm、長さは50cm～2 mを測る。規格性はなく、転用材や端材を利用しながら構築と補強が繰り返されたのであろう。

南岸の護岸材に沿った20～30cm北側では粘質土で埋没した落ち込みが検出されたが、深さ10

cmと非常に浅く、木組み溝の掘り方・裏込めといえる状況ではなかった。

木組み内の覆土からは完存品を含むかわらけや折敷などの木製品が出土している。図26に図示した。

#### 4b面 遺構 15b（木組み溝）：

Ⅱ区の南端、遺構15の直下で検出された。

木組みの構造・軸方位とも遺構15と同じで、両岸間は18～27cmを測る。両端とも調査区外へ続き、検出できた長さは215cmを測る。横板材を抑える縦杭は30～40cm間隔で打ち込まれ、横板は厚さ2cm、幅5～25cmで、南岸の護岸には幅が狭く粗末な板材が使われていた。深さは35cmで、底面標高は11.63～11.66 mを測り、東端部が最も低い。

木組みの覆土中からは完存品を含むかわらけの他、箸を主体とする数多くの木製品が出土している。図27に図示した。

掘り方・裏込めは確認されなかった。

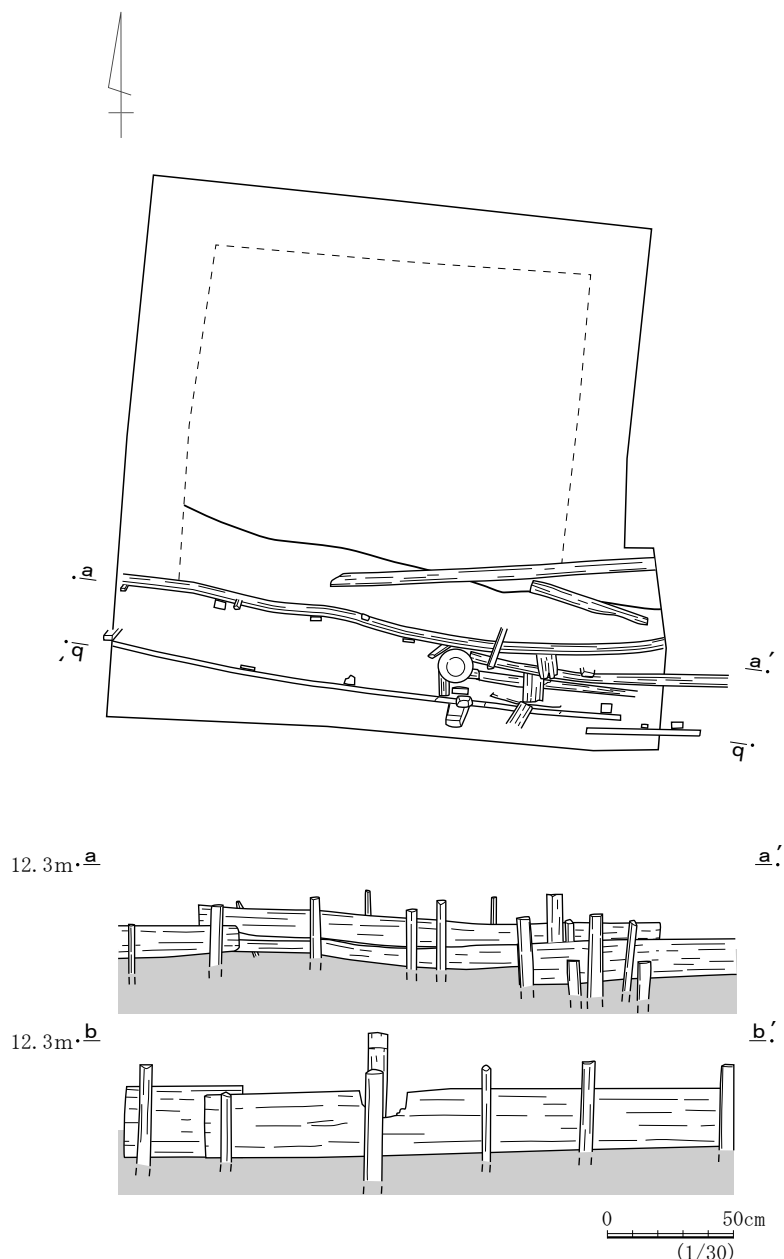


図10 4a面 遺構 15

4b面 遺構 16 (土坑) : 遺構 15b の北側、標高 12.05 m で検出された。北と東が調査区外に続くため全体の規模は不明。検出できた範囲で南北 105cm、東西 90cm までを計測しえ、概ね円形基調の平面プランであったと考えられる。深さは 10cm と非常に浅く、明確な整地面に伴うものではなかったため、堆積層中の窪みといった可能性も考えられる。埋土は、周囲の堆積土より泥岩塊をやや多く含む。

本遺構ではロクロかわらけや常滑甕などの小片が少量出土しているが、図示すべき資料はなかった。

4c面 遺構 17 (土坑) : 遺構 15b の北側を掘り下げている際、標高 11.9 m 近くで検出された。東西 70cm、南北 35cm の長楕円形を呈し、深さは 10cm と非常に浅い。坑内は泥岩ブロックが密に詰まっており、明確な整地面から掘り込まれた遺構ではないことから、腐植土の堆積中に泥岩が投棄されただけの痕跡とも考えられる。

本遺構からは、泥岩のブロックに混じってロクロかわらけの小片 1 点が出土している。図 31 に示した。



### 5面 (図 12)

I 区で標高 11.7 ~ 11.75 m、II 区では 11.35 ~ 11.5 m で検出された。泥岩ブロックを主体とする堅緻な整地層が形成され、I 区では浅い土坑 1 基が検出された。II 区では平坦面が確認できず、整地層の上面が北へ落ち込む状況が見て取れた。

遺構 9 (土坑) : I 区北部で検出された。西側調査区外へ続くため、全体の形状・規模は不明。確認できた範囲では南北 115cm で、東西は約 50cm までを計測した。確認面からの深さは最大でも 10 cm と浅く、覆土は有機質腐植土(まぐそ)の単層であった。土坑埋没後の確認面レベルで木製の折敷が出土している。

この他、整地面上で厚さ 2 ~ 4cm の板材が数枚出土しているが、礎板など建築部材であったかは、調査できた範囲も狭く不明である。

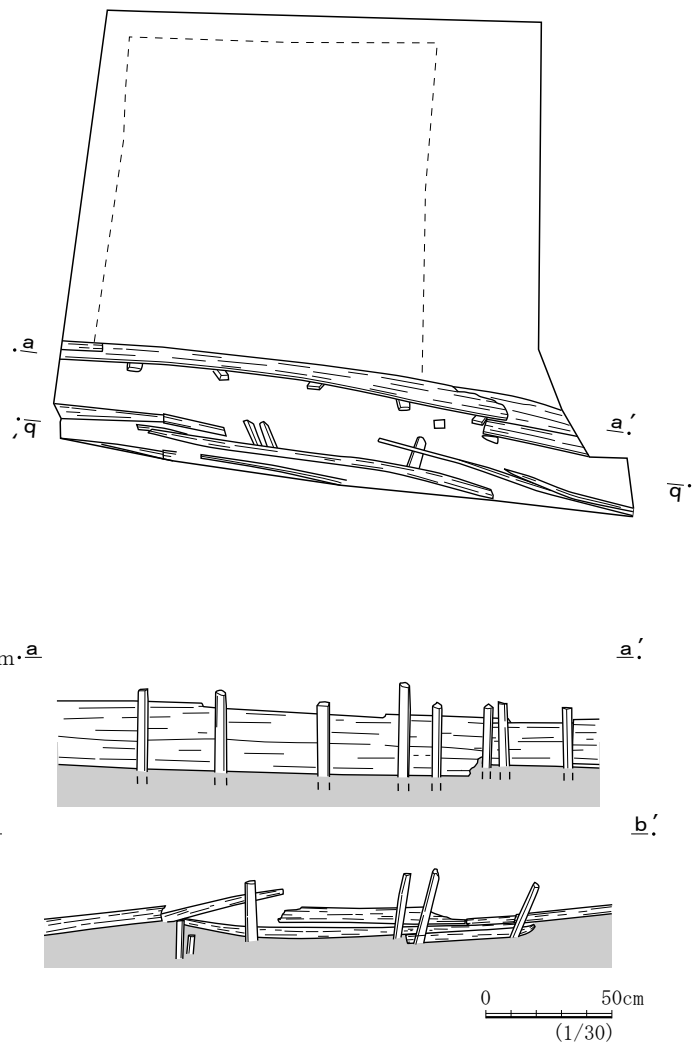


図 11 4b面 遺構 15b

### 6面 (図 13)

I 区では標高 11.40 ~ 11.50 m



で検出された。Ⅱ区では安全面を考慮して6面以下の掘削・調査を行わなかった。泥岩粒を主体とする比較的堅緻な整地層が形成され、この上面では縦杭や小穴が確認された。また、同面を掘り下げた標高 11.30～11.40 m 前後では明確な整地面に伴わない小穴数基が確認されたことから、上層を 6a 面、下層を 6b 面として平面図を2枚に分けて提示した。

**6a 面**の検出遺構は小穴1基のみで、長径 30cm、短径 25cm の楕円径プランを呈する。確認面からの深さは 20cm で、覆土は暗褐色粘質土の単層であった。出土遺物がなかったため遺構番号は付さなかった。

**6b 面**では小穴や落ち込みが5基ほど検出されている。いずれも確認面から数 cm～25cm の深さしかなく、明確な整地面から掘り込まれた遺構とは見なし難いことから、堆積層内の土質差と理解することもできるだろう。

I 区東部で確認された落ち込みは確認面からの深さが 5cm で、以西の堆積土に比べ泥岩粒の混入が少ないものであった。

#### 7 面 (図 14)

I 区において標高 11.2 m 前後で検出された。調査できたのは東西 100cm、南北 140cm である。泥岩のブロックを多用した堅緻な整地層が形成され、この上面で小穴1基を確認した。

**遺構 10 (小穴)**：北側が調査区外に続くため、全体の規模は不明。検出できた範囲では東西 40 cm、南北 30cm までを計測しえた。確認面からの深さは 20cm で、底面に泥岩塊を据えた上に厚さ 2cm の板材 3 枚を積み重ねていた。本遺構からの出土遺物はなかった。

#### 8 面 (図 14)

I 区において標高 11.0～11.1 m で検出され、上面が北側に向けて緩やかに落ち込む。調査ができたのは東西 100cm、南北 140cm のごく狭い範囲である。やや締まりの強い黒灰色土が面構成土であるが、泥岩粒を含まず人為的な整地層

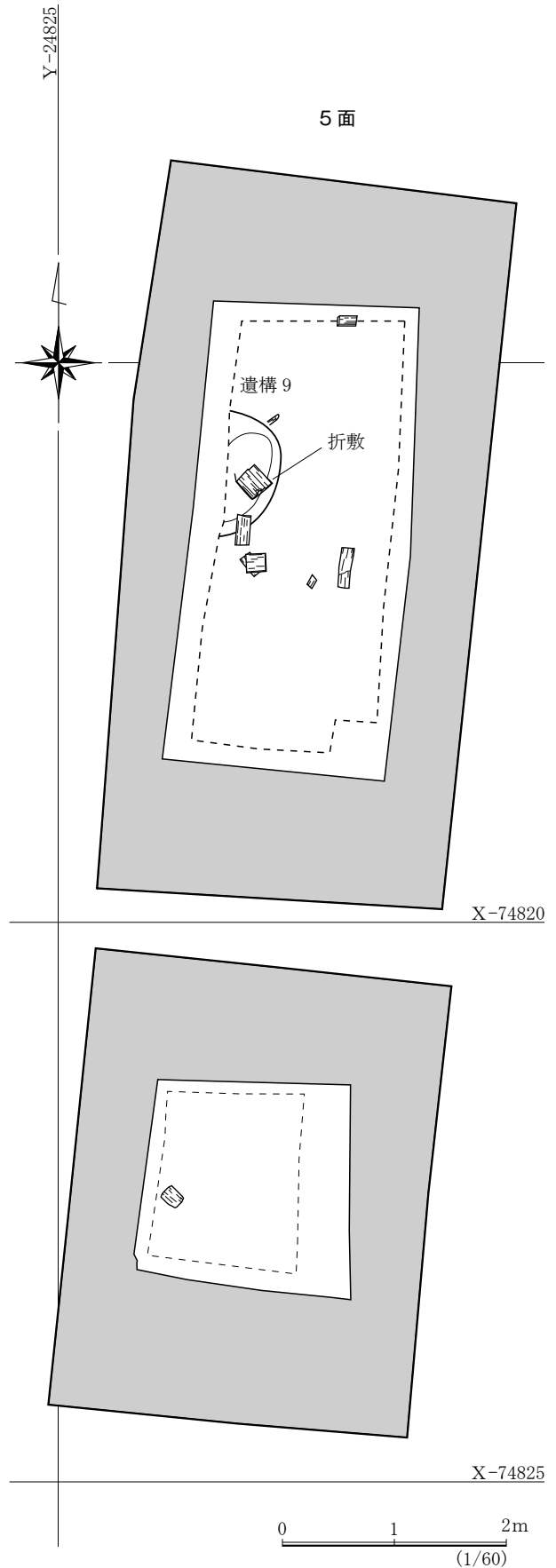


図 12 5 面全体図

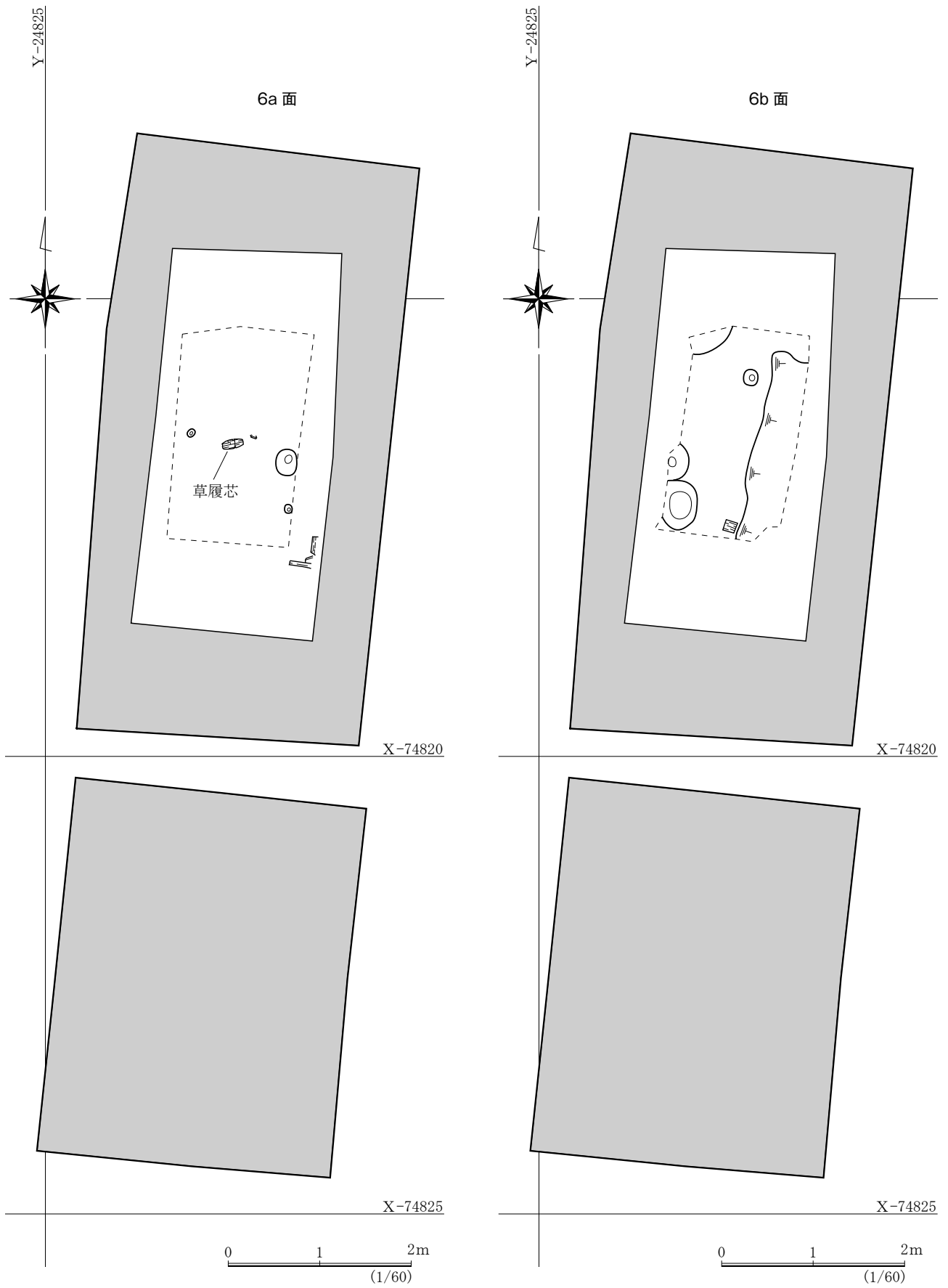


图 13 6a · 6b 面全体图

とはならない可能性もある。

### 9面 (図 15)

I 区において標高 10.9 m 前後で検出された。調査で検出できたのは東西 100cm、南北 140cm の範囲である。黒褐色粘質土層の上面に細密な泥岩粒を数 cm の厚さで敷いて整地が施されていた。この面上で検出できたのは小穴 1 基である。東側が調査区外に続くが、断面観察から直径 25cm ほどの円形プランを呈することが確認できた。確認面からの深さは 20cm で、覆土は暗灰褐色粘質土の単層であった。他に、調査坑の北東角で安山岩の扁平礫 (伊豆石) が載っていた。これは 8 面の構成土に埋め込まれた可能性もある。

### 10面 (図 15)

I 区において標高 10.7 m 前後で検出された。調査できたのは東西 100cm、南北 140cm の範囲である。中世基盤層である黒色粘質土層の上面に、細密な泥岩粒を薄く敷いた整地面が確認された。この面上で大型の土坑 1 基が検出されたが、断面観察の所見としては、9 面整地層の直下まで立ち上がる可能性が高いと考えている。

遺構 11 (土坑) : 調査坑のほぼ全面で検出され、上場は南西側のごく一部分が確認できたのみである。

検出できた限り、東西 60cm、南北 110cm 以上の規模となることは確実である。ほぼ垂直に立ち上がり、70cm 以上の深さを有する。覆土は灰黒色砂質土の単層であった。

覆土中からはロクロかわらけ・手づくねかわらけ、常滑甕などの小片が少量出土している。図 36 に 1 点のみを掲げた。

## 第 2 節 出土遺物

本地点では整理箱で 33 箱の遺物が出土した。本節では、それらの様相について説明する。面・遺構ごとの出土量は表 2 を、法量など個別の特徴については表 3 を参照されたい

### 1面 遺構 13 出土遺物 (図 16)

かわらけが一括廃棄された土坑で、出土遺物の殆どをロクロかわらけが占める。ロクロかわらけでは小皿が破片数 87 点で重量 1010 g、中皿も含めた大皿が 1221 点で 22480 g 出土している。完形または略完形の資料をもとに一個体当たりの平均重量を算出すると、小皿が約 45 g、大皿が約 210 g という数値が得られた。これで出土総重量を割ると小皿 27 点、大皿 107 点が出土したことになり、小 : 大の構成比は 2 : 8 となる。破片資料でも中皿を識別できれば大皿の比率は下がることになるが、相対的に中皿の構成比は低い印象がある。

1 は瓦質火鉢の口縁部片。口辺が外方へ直角に折れ、内縁部に突起を貼り付けている。

2 以下はロクロかわらけで、2 ~ 11 が小、12 ~ 15 が中、13 ~ 33 が大皿に類別できる。それぞれの口径は小皿が 7cm 前後、中皿が 10.5 ~ 11cm 前後、大皿は概ね 13cm 台にまとまりを見て取れる。器形の特徴としては、体部から口縁部にかけて外方へ直線的に開き、外面の体部下位に僅かな丸みを帯びている。底部は内面にナデを施し、外面に回転糸切り痕と板状圧痕を残すものが通例である。大皿の内面では、底部と体部境の屈曲が明瞭に見て取れた。胎土は微細で粉質といえるもので、総じて器壁は厚く口縁に向けて薄く整えられている。

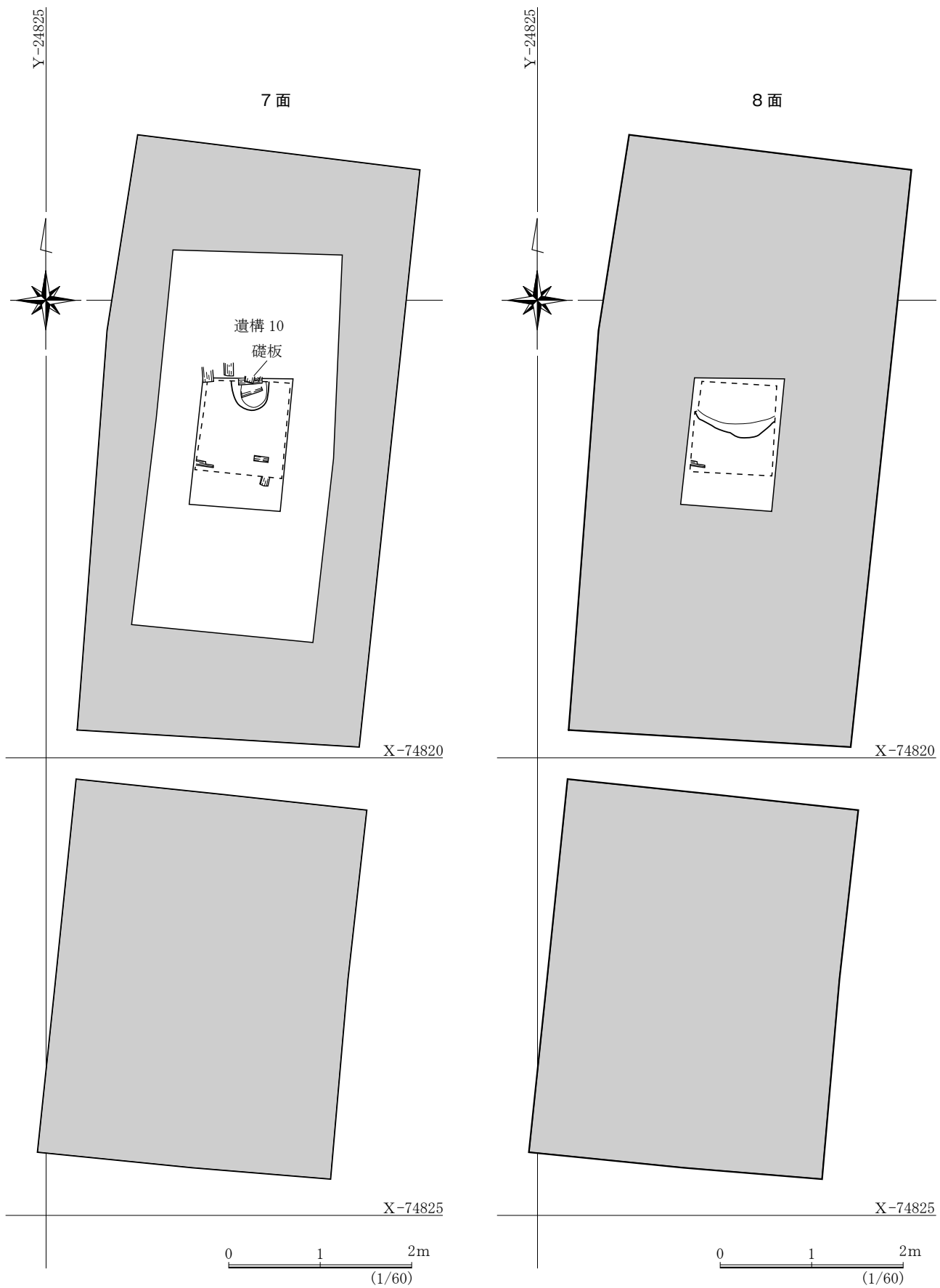


图 14 7·8面全体图

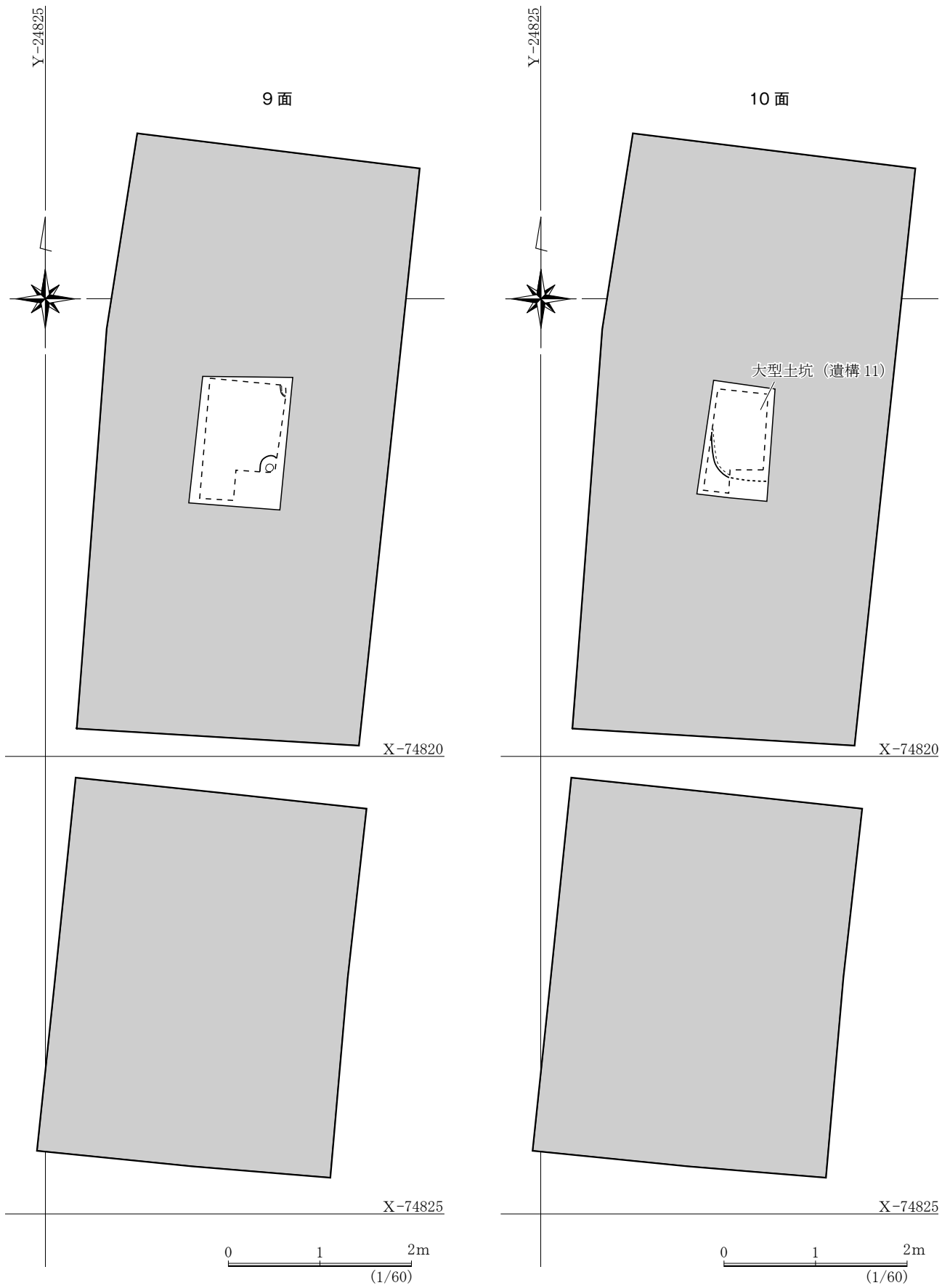


图 15 9·10面全体图

### 1面 遺構 1 出土遺物 (図 17・18)

I・II区で検出された炭層の落ち込みからの出土遺物で、完存品を多く含むロクロかわらけが一定量と常滑・瀬戸・瓦質土器などの小片がごく少数出土している。

ロクロかわらけは小皿が373点で4892g、中型品を含む大皿が635点で13580g出土している。完形資料を基準にした一団体当たりの平均重量は小皿が約49g、大皿が約165gで、これをもとに個体数を算出すると小皿が100個体、大皿が82個体となり、小皿:大皿の構成比は5.5:4.5となる。

34～104はロクロかわらけで、75までが小皿、76・77・80が中皿、80を除く78～104が大皿である。口径は小皿が6.5～7.5cm、中皿が11cm前後を中心としており、大皿には11.5～12cm台と14cm前後と二通りの中心分布域を見て取れる。小皿・大皿ともに遺構13出土資料に比べて器高が5mm程度低く、全体に低平となる印象を受ける。小皿には体部が外方へ直線的に開くものと丸みを持ちつつも口縁部が直線的に開く二種類の器形に分かれ、概して前者の方が厚い器壁を持つ。大皿

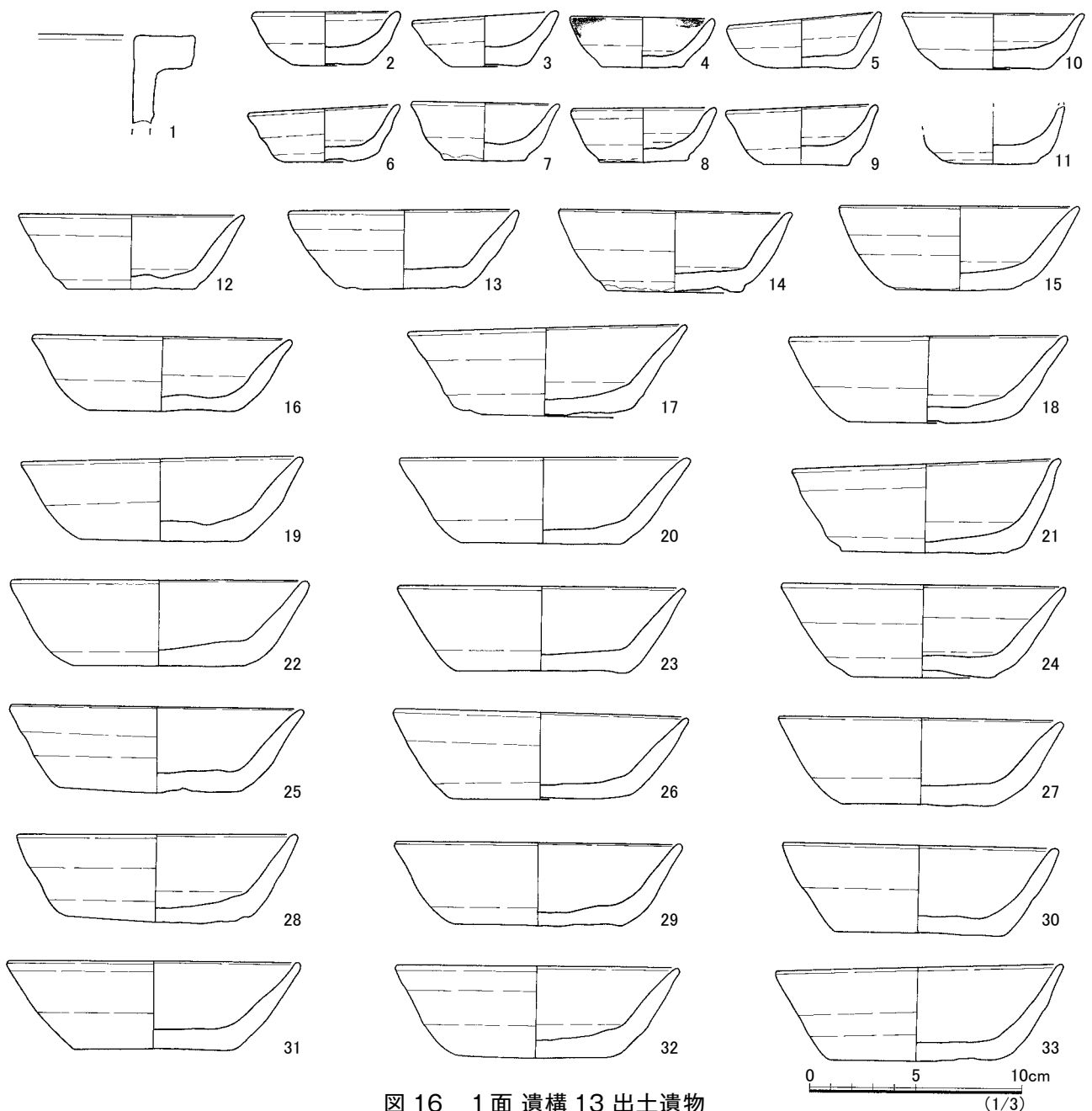


図 16 1面 遺構 13 出土遺物

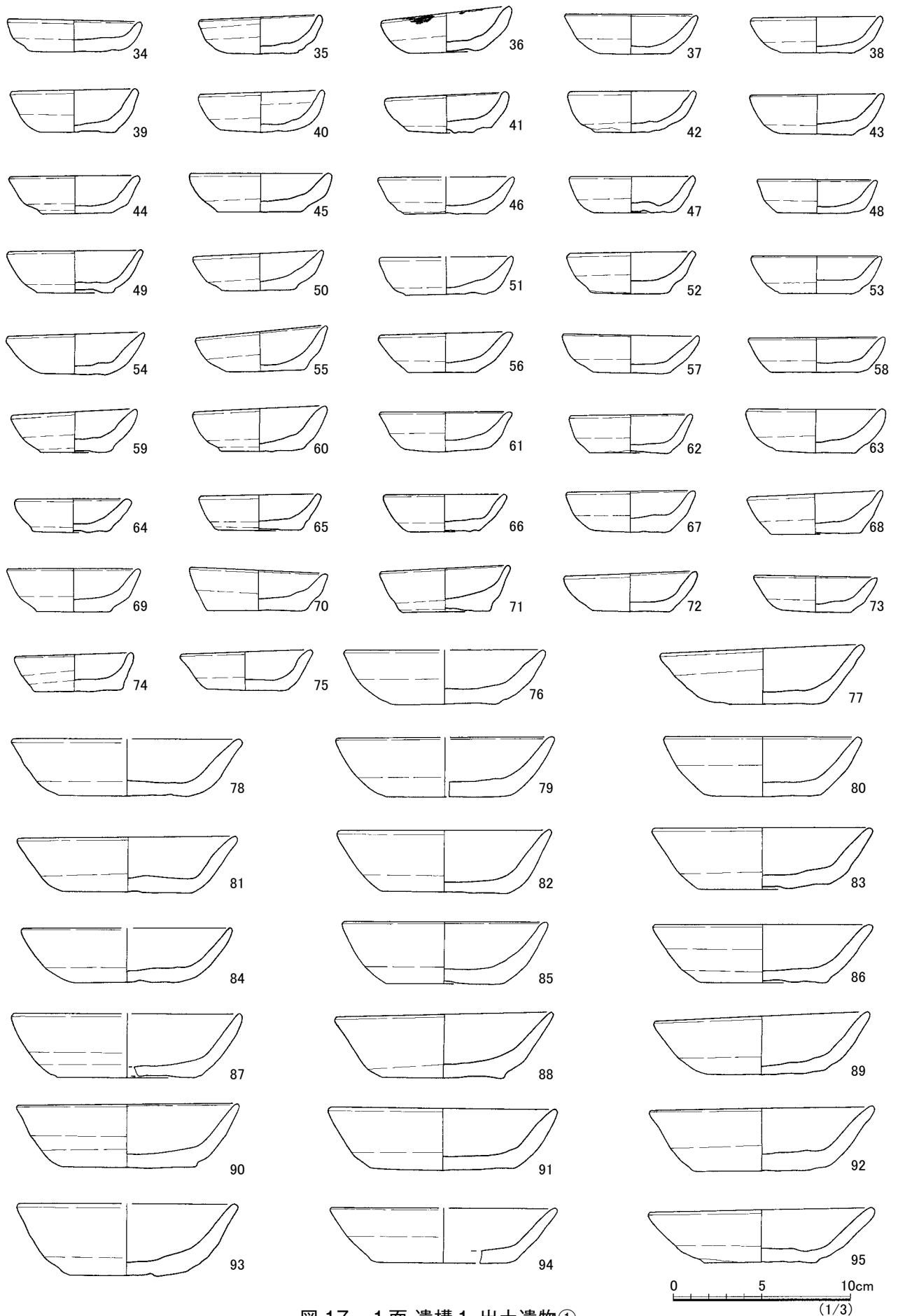


图 17 1面 遺構 1 出土遺物①

は外面の体部下位に丸みを持ち、口縁は外方へ直線的に引き延ばされている。小・中・大皿とも底部内面をナデ調整し、外底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。

105は常滑甕の胴部小片。外面に縄目状圧痕が残るが、叩き具の原体ではなく成形時に不慮に付いたものと見られる。106・107は瀬戸の鉄釉天目茶碗。鉄釉は浸け掛けで、外面体部下位には薄い鉄釉の化粧掛けが施される。口縁部の屈曲が弱く、古瀬戸中期後半以降の特徴を有する。

108は瓦質土器で土風炉の口縁部小片。109・110は銅銭。

### 1面下出土遺物（図19）

1面遺構の調査後、2面まで掘り下げる際に出土した遺物である。

111～136はロクロかわらけで、111は極小の内折れ皿、112～126が小皿、127以下が大皿である。小皿・大皿とも1面遺構で見られた厚手で直線的な体部を持つものと、やや浅手で体部が内湾して立ち上がるものとがあり、後者は古い様相といえる。

以下の小片資料については、観察表（表3）を参照されたい。

### 2面遺構14出土遺物（図20）

出土遺物の殆どをロクロかわらけが占め、完存資料も一定量が出土している。小皿が破片数162点で2560g、中型品を含む大皿が154点で2945g出土している。完存品を基準にした小皿一個体の平均重量は約58g、大皿は口縁を僅かに欠く191の残存重量が172gなので、一個体当たり180g前後になることが推測される。これで総重量を割ると小皿が44個体、大皿が16個体に換算でき、

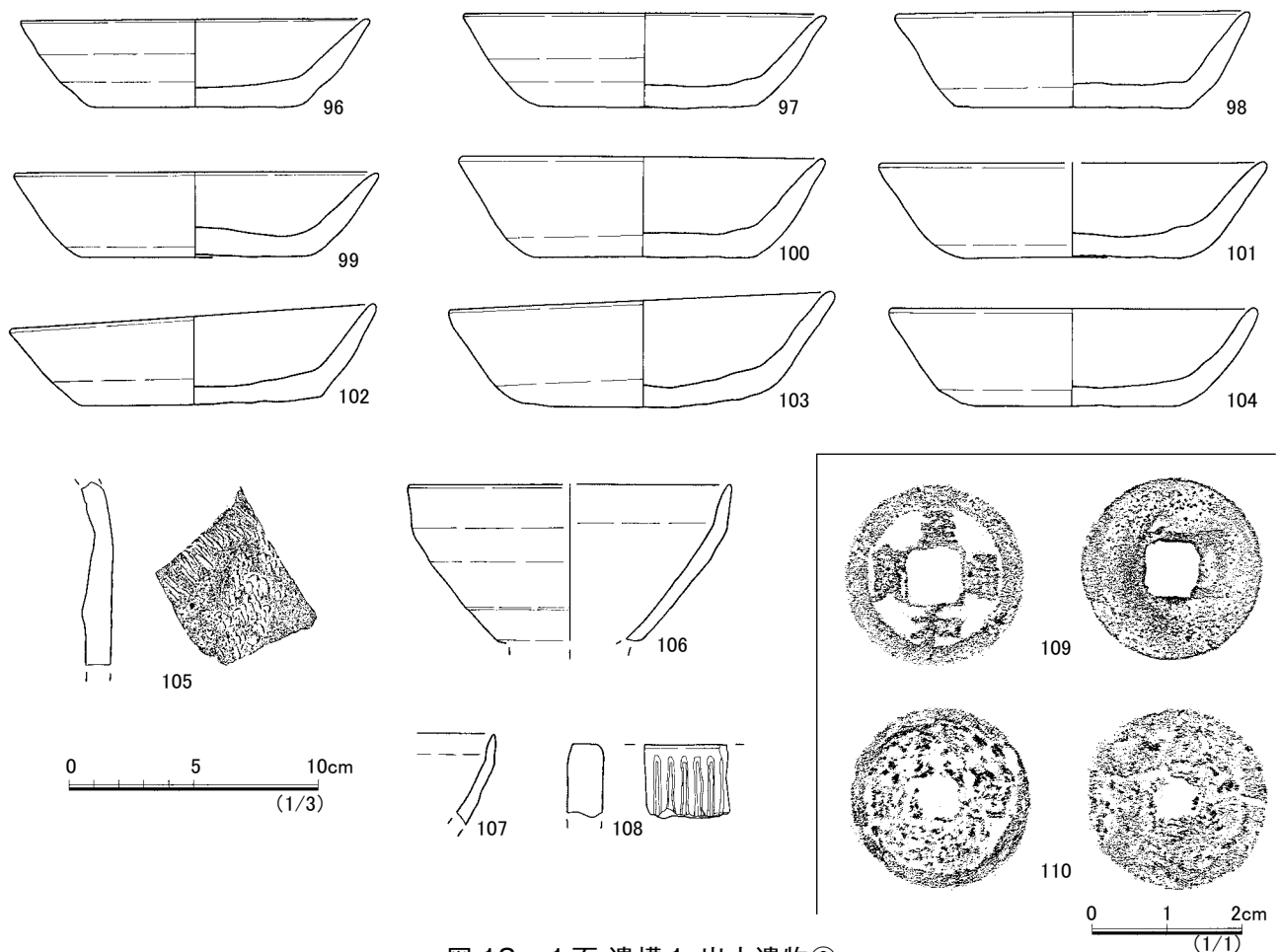


図18 1面遺構1出土遺物②



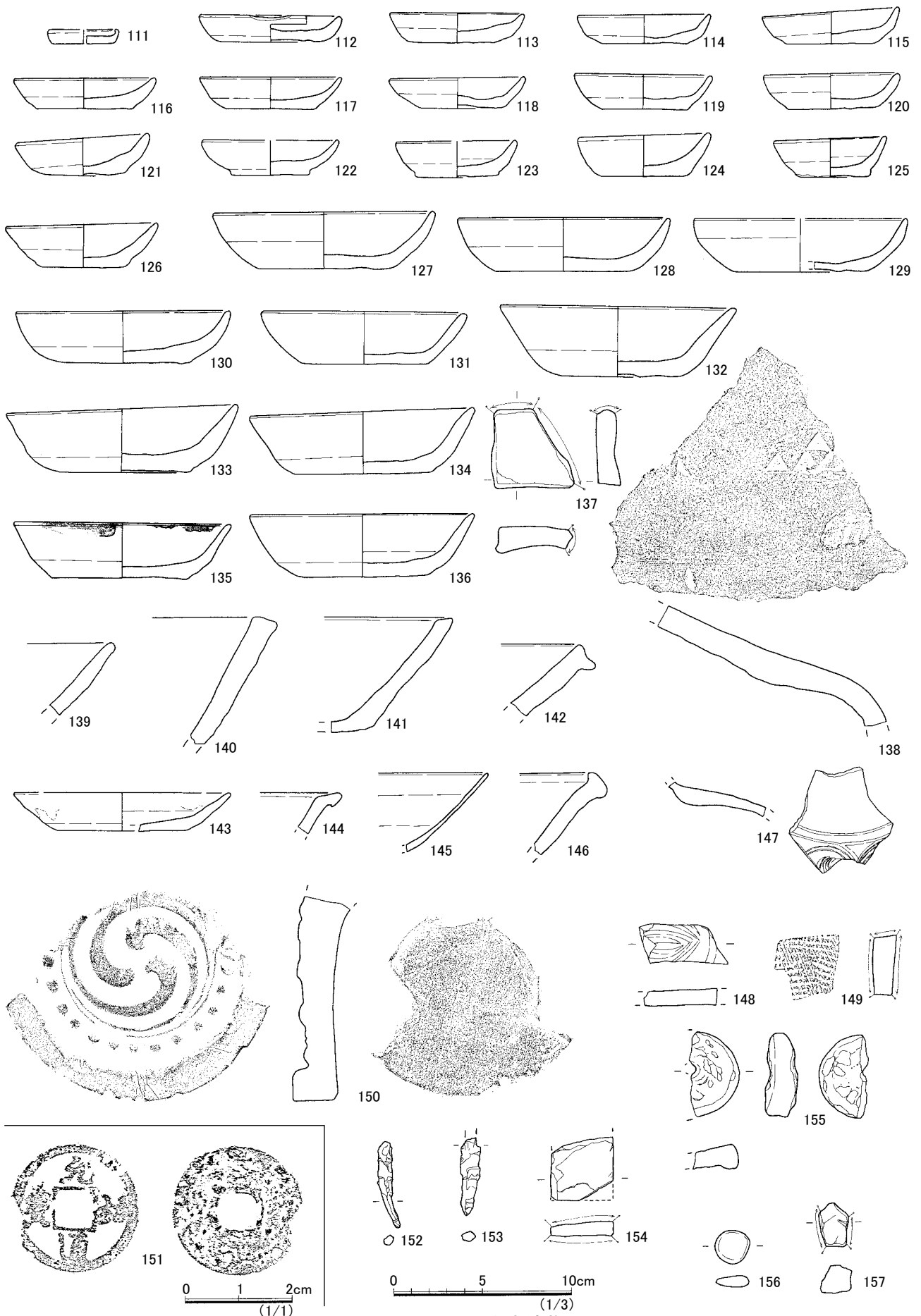


图 19 1 面下 出土遺物

小皿：大皿の構成比は7：3前後になる。

口径は小皿が7cm 台後半、中皿は1点のみだが11cm 前後、大皿は12cm 前後と13cm 前後の二通りの中心分布域が見て取れる。

163～192がロクロかわらけで、182までが小皿、183は中皿、184～192は大皿である。小皿には器高が2cm以下で口縁が直線的または僅かに内湾して開くものと、器高2.5cm前後でやや内湾気味の体部を持つものに体別できる。大皿は体部中位に膨らみを持ち、口縁が直線的に薄く収められる資料が主体となる。総じて1面遺構の資料と比較して器壁が薄くなる点、古相を備えているといえよう。内底面にナデ調整を施し、外底面には回転糸切り痕と板状圧痕を残す資料が通例といえる。188は外底面に40箇所以上の非貫通孔が穿たれているが、何を目的にしたものかは不明である。

194は瀬戸の入れ子。口縁に外方からヘラ押しを施し輪花形に整えている。195は仕上げ砥。

## 2面下 出土遺物 (図21)

2面下～3面検出時に出土した遺物を一括して掲げた。196～216はロクロかわらけで、小皿・大皿とも2面遺構14の出土資料と明瞭な様相差は見取れない。

217は常滑の片口鉢I類。粘土紐積み上げ後に回転ナデで整形されるが無高台である。口縁部はやや肥厚し玉縁状となる。

223は漆器の皿。内外面とも黒色漆塗で無文。224～228は木製品で箸。本地点では2面下より下層で木製遺物が遺存していた。

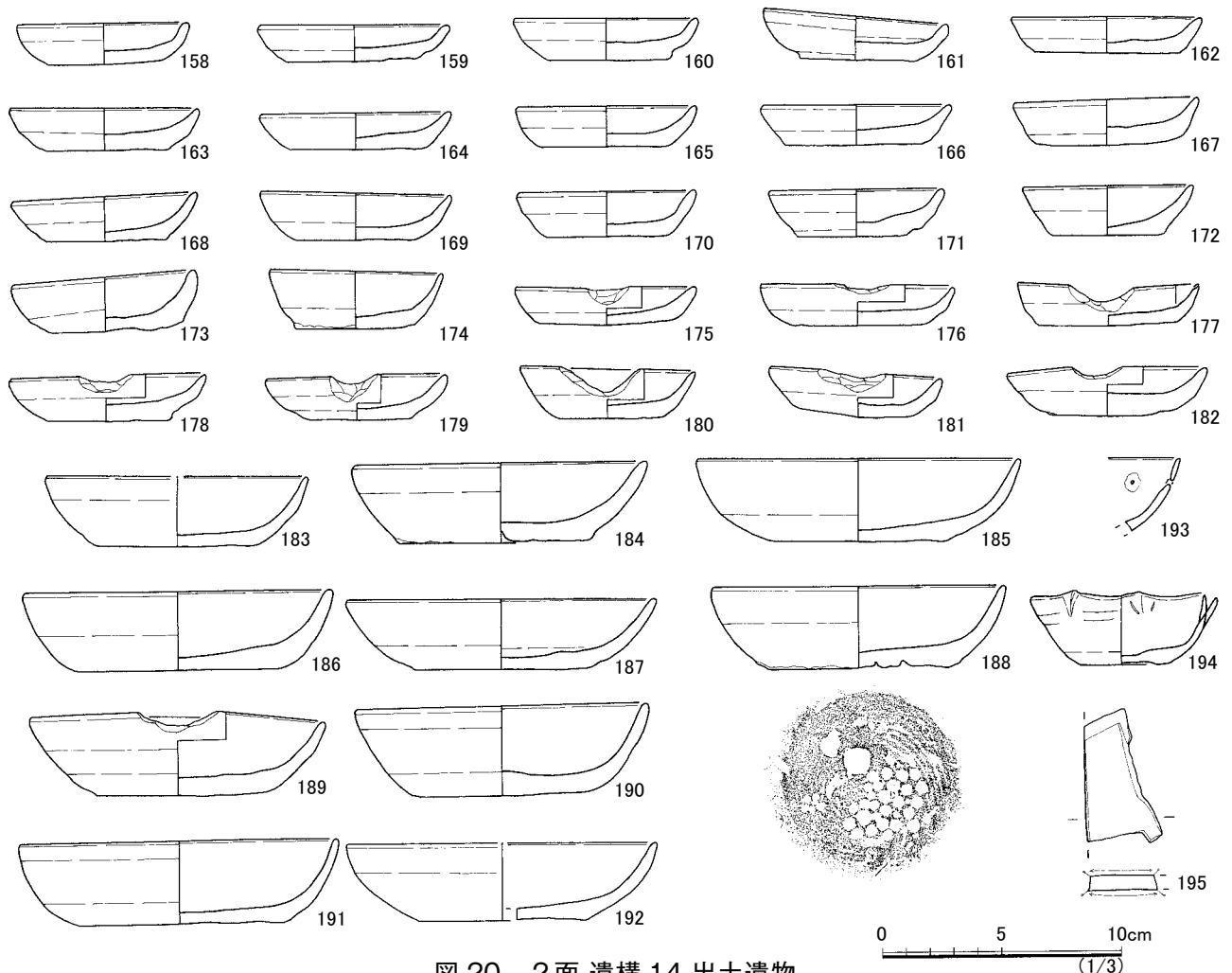


図20 2面遺構14出土遺物

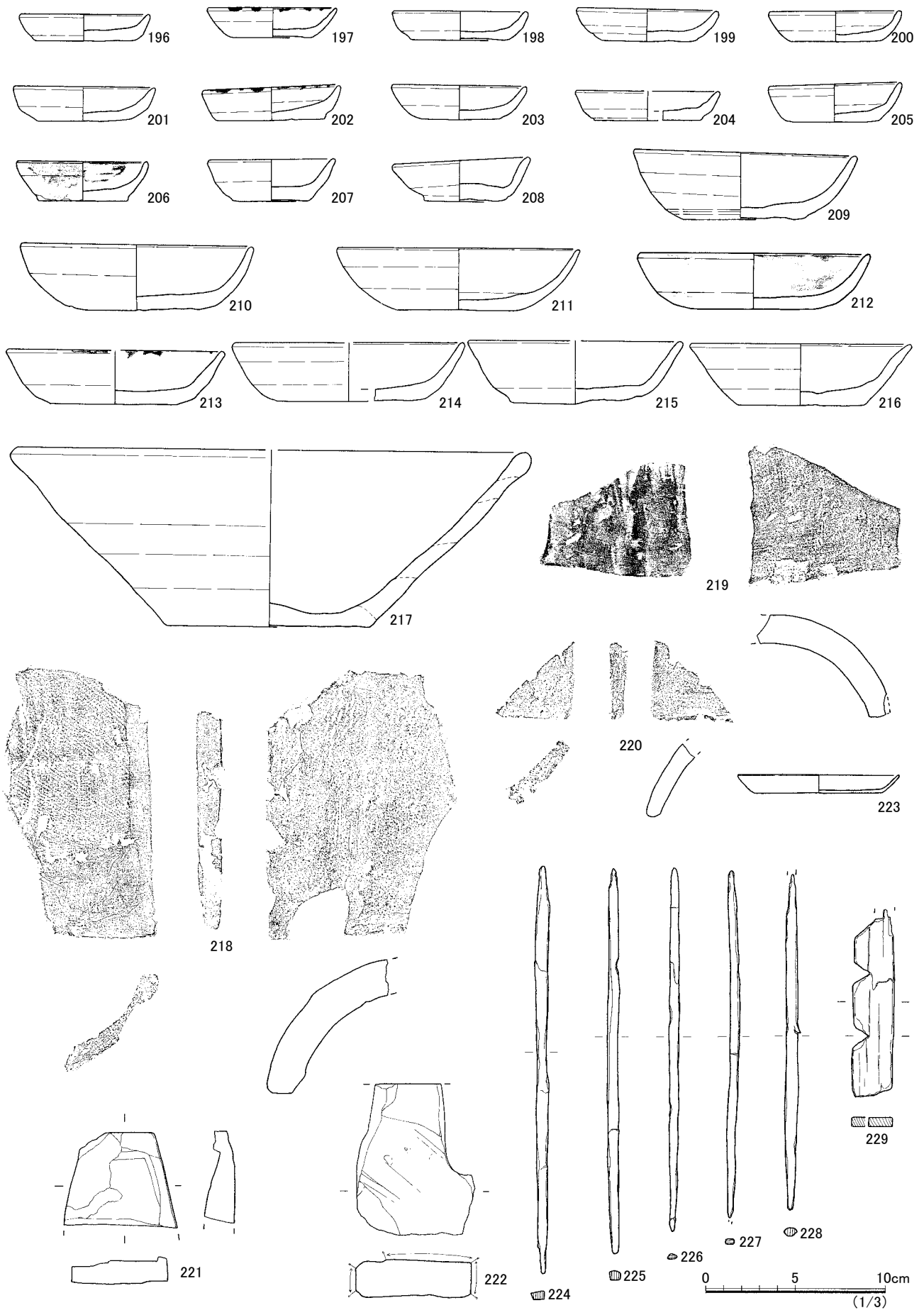


图 21 2面下 出土遺物

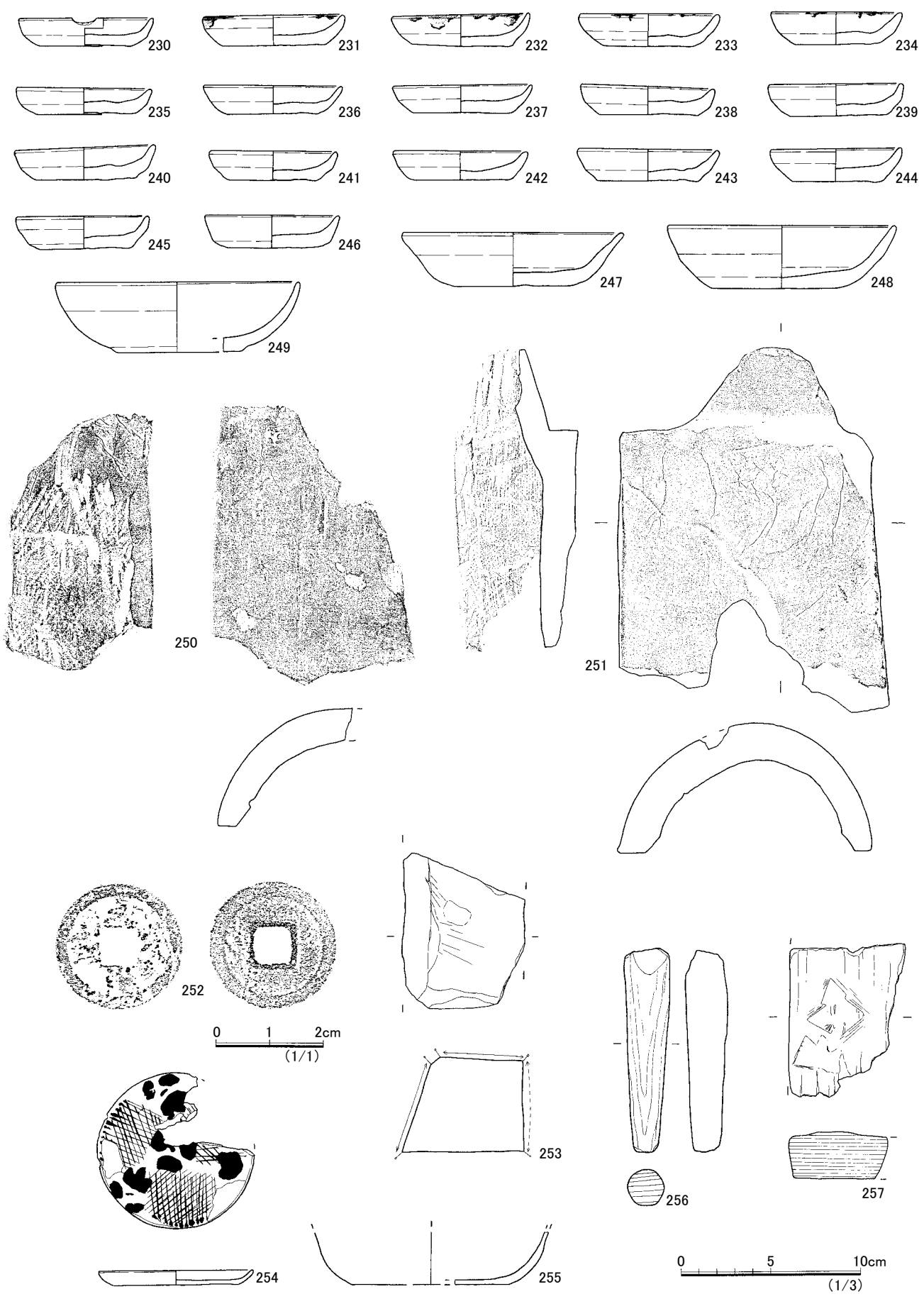


图 22 2 面下炭層 出土遺物

他の小片資料については観察表（表 3）を参照されたい。

### 2 面下炭層・3 面上出土遺物（図 22・23）

2 面下の炭層中と、3 面直上からの出土遺物を掲図した。出土点数は 2 面下を一括りでカウント・計量している。ロクロかわらけが主体で、瓦や木製品などが少量出土している。ロクロかわらけは小皿に遺存度の良好な資料が多く、完存品をもとに算出した一個体当たりの平均重量は、52 g となる。2 面下から 3 面までの出土かわらけは器形・法量ともに大きな様相差はなく、これら全体での一個体当たりの平均重量は 53g である。ここでの出土量は破片数 189 点で重量 6930 g であることから、小皿は約 131 個体分に相当する。大皿は 3 面上で略完存品が 1 点しており、残存重量は 155 g を測る。2 面下～3 面全体では 635 点で 7869 g が出土しているので、完存資料を 160 g とすると約 49 個体分に換算でき、小皿：大皿の構成比は約 7：3 となる。

230～249 と 258～267 はロクロかわらけ。小皿の口径は 7cm 台が主体で、器高は 2cm 以下と低平で、体部の外面中位に弱い膨らみまたは稜を有する。図示できた個体数は少ないが、大皿の口径は 12cm 台と 13cm 台と二通りに分布するようである。明確な中皿は見て取れず、存在するとしても構成比は低いと考えられる。小皿・大皿ともに底部内面にナデを施し、外底面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す資料が通例といえる。小・大皿を問わず灯明具として使用されたものも散見された。

図 23 - 269・270 は木製の格子子。凹部同士を縦横に組み合わせて骨組みを作り、これに縦板を貼り合わせた状態で出土している。（図版 3 - 1）。凹部には一ヶ所おきに直径 1mm 程度の貫通孔が見られ、ここで骨組みと板材とを固定していたのであろうが、鉄釘や木釘は遺存していなかった。細縄での固定も推測できようか。

その他の資料については、観察表（表 3）を参照されたい。

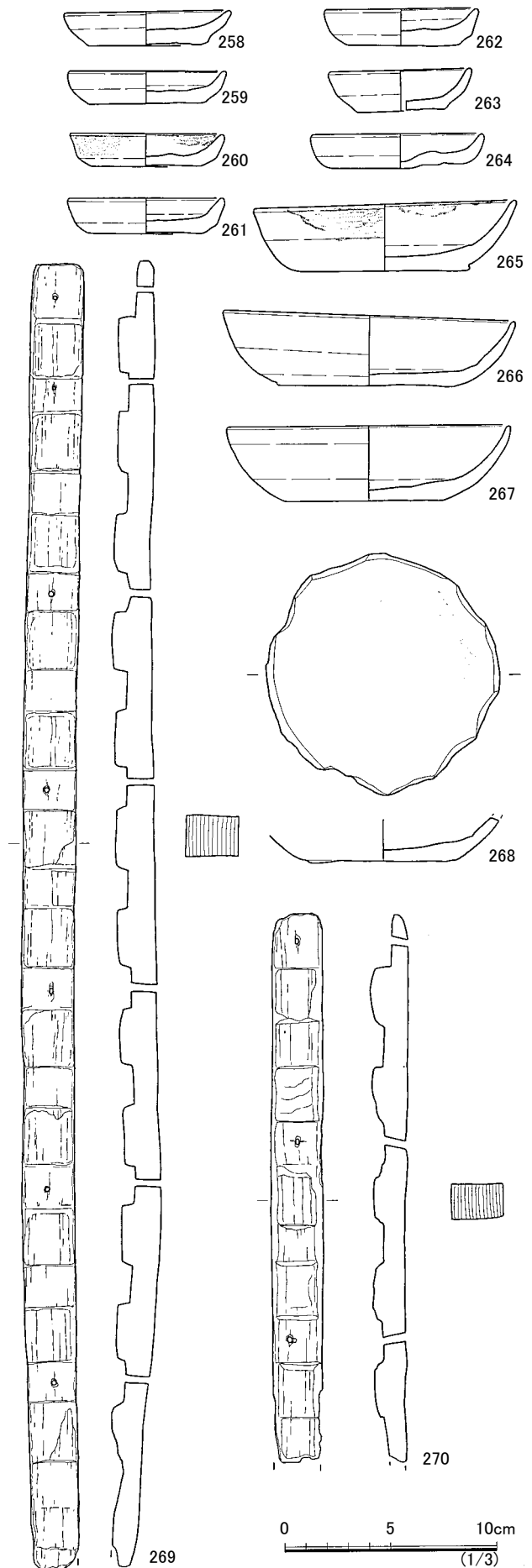


図 23 3 面 出土遺物

### 3面下出土遺物（図24・25）

3面以下、4面までの掘り下げ時に出土した遺物である。木製品が出土量・遺存度の良好な資料ともに目立ってくる。

271～282はロクロかわらけで、282の中皿以外は全て小皿である。小皿は完存品が277の1点のみで、重量は54gである。小皿は128点、1320gが出土しているので、大よそ24個体分に換算できる。法量・器形および調整技法とも、3面上出土資料との明確な様相差を見出せない。

287は丸瓦の凸面を二次的に加工して箱形の窪みを作り出している。断定はできないが形状から硯として転用された可能性がある。

290～292は漆器の皿。いずれも黒色系漆を下地とし、内面に赤色漆で筆描き文様を施している。290は線描きと周囲の赤色漆塗りで車輪文を描き出している。

293・294は木製品で連歯下駄、295～314は箸。

316以下には3面下でも下層から出土した資料を図示した。316は明確な遺構とはならなかったが、I区の泥岩がややまとまった範囲で出土した。ロクロかわらけの大皿で、器壁が薄く体部の内湾が顕著である。317～326もロクロかわらけで320までが小皿、321・323が中皿で、他は大皿に類別できる。小皿は口径7cm台後半で器高2cm未満の低平な資料が主体となる。中皿と大皿は内湾傾向が強い。大皿の口径は12cm前後にまとまりを持つ。この段階、破片資料であっても薄手丸深系に類別できる資料が比率を増してくる。

328は亀山の甕で胴部の小片。割れ口の数ヶ所を研磨に用いている。

### 4a面遺構15出土遺物（図26・27）

東西木組み溝の覆土中から出土した遺物である。ロクロかわらけと木製品が主体となる。

335～349はロクロかわらけ。335は極小の内折れ皿、336・337は小皿、338は中皿、他は大皿に類別できる。提示資料は少ないが、小皿は口径7～8cmで器高2cm未満となり、器形の特徴も含めて3面の出土資料と明確な差を見出せない。本遺構では総量220gが出土しているので、一個体50g前後とすると4個体ほどに留まる。大皿は略完存品の341が163gなので、一個体当たり170g前後となろう。総量は1955gなので12個体分に相当する。中皿の数量は不明確だが、小皿：中・大皿の構成比は1：3となる。この他に薄手丸深系に類別できる資料も一定量が出土しており、全体として中・大皿とも体部の内湾する資料が主体となる。大皿は口径12cm台を主体に13cm台の資料も含まれる。底部内面にナデ、外面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す資料が通例である。

350～373は木製品。350は折敷の底板で4/5ほどが残存する。前後二辺に沿って各5穴の貫通孔が開く。また、左右に半切した箇所を樹皮で止め直してあり、別用途かもしれないが破損後に修復を受け、再び使用されたようである。表面には細かい条痕が無数に見て取れることから、俎板としても再利用されたのだろう。

12は一側辺を鋸歯状に切り抜いている。筆置きか。

357～369は箸。370～373は角棒状の製品で、用途は不明。

### 4b面遺構15b出土遺物（図27）

下層の東西木組み溝覆土中より出土した遺物である。ロクロかわらけと木製品が主体となる。

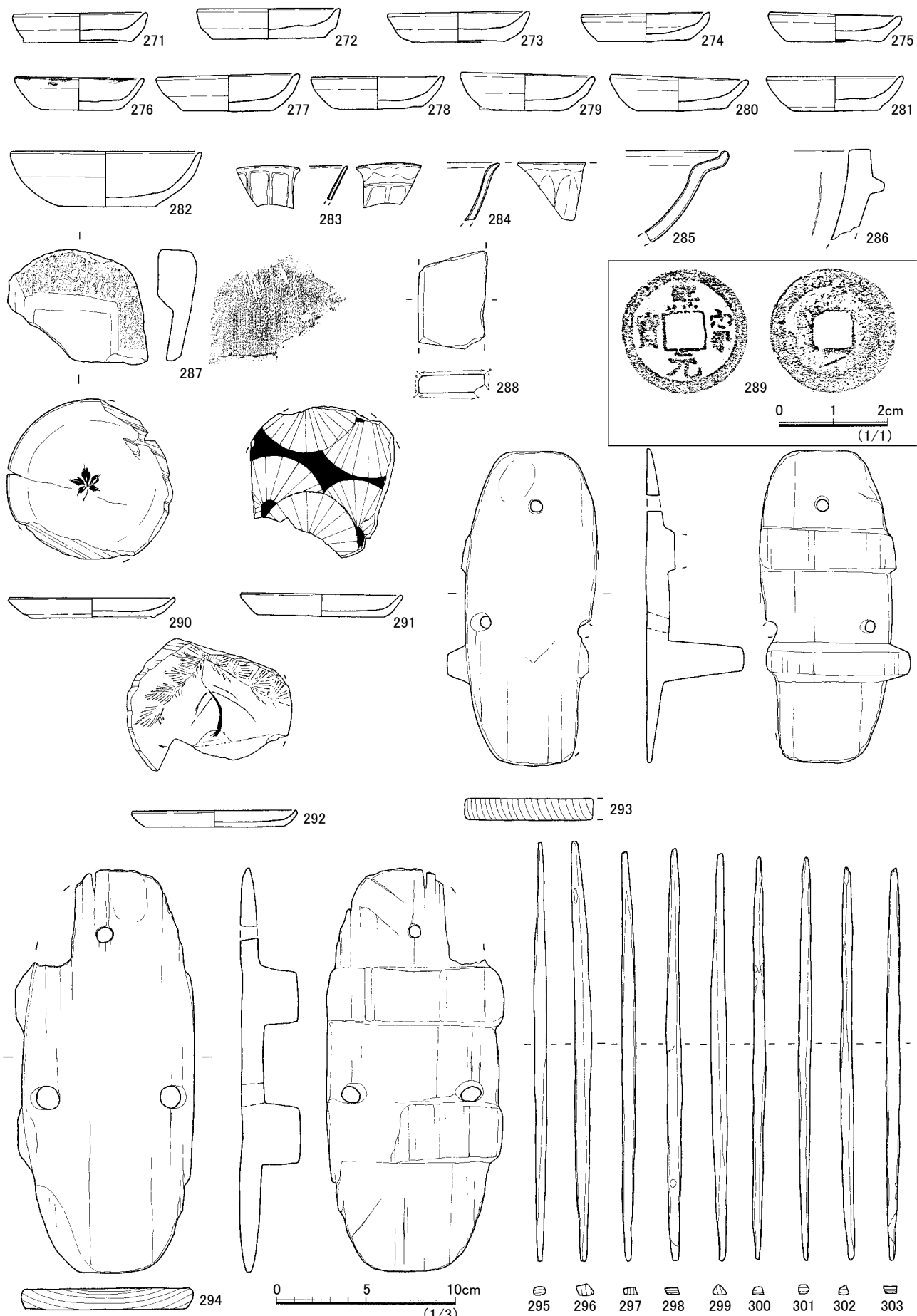


图 24 3面下出土遺物

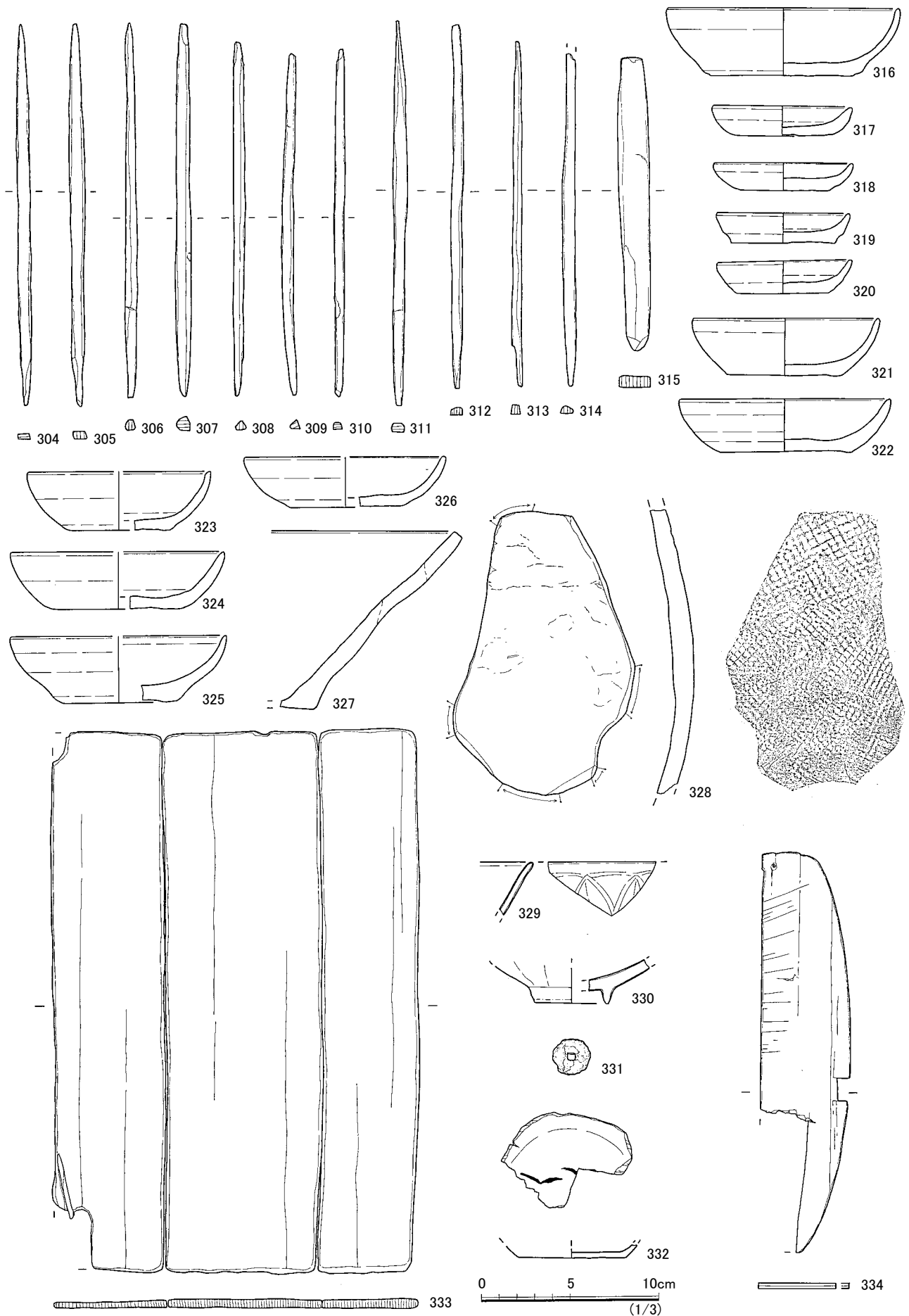


图 25 3面下ほか 出土遺物



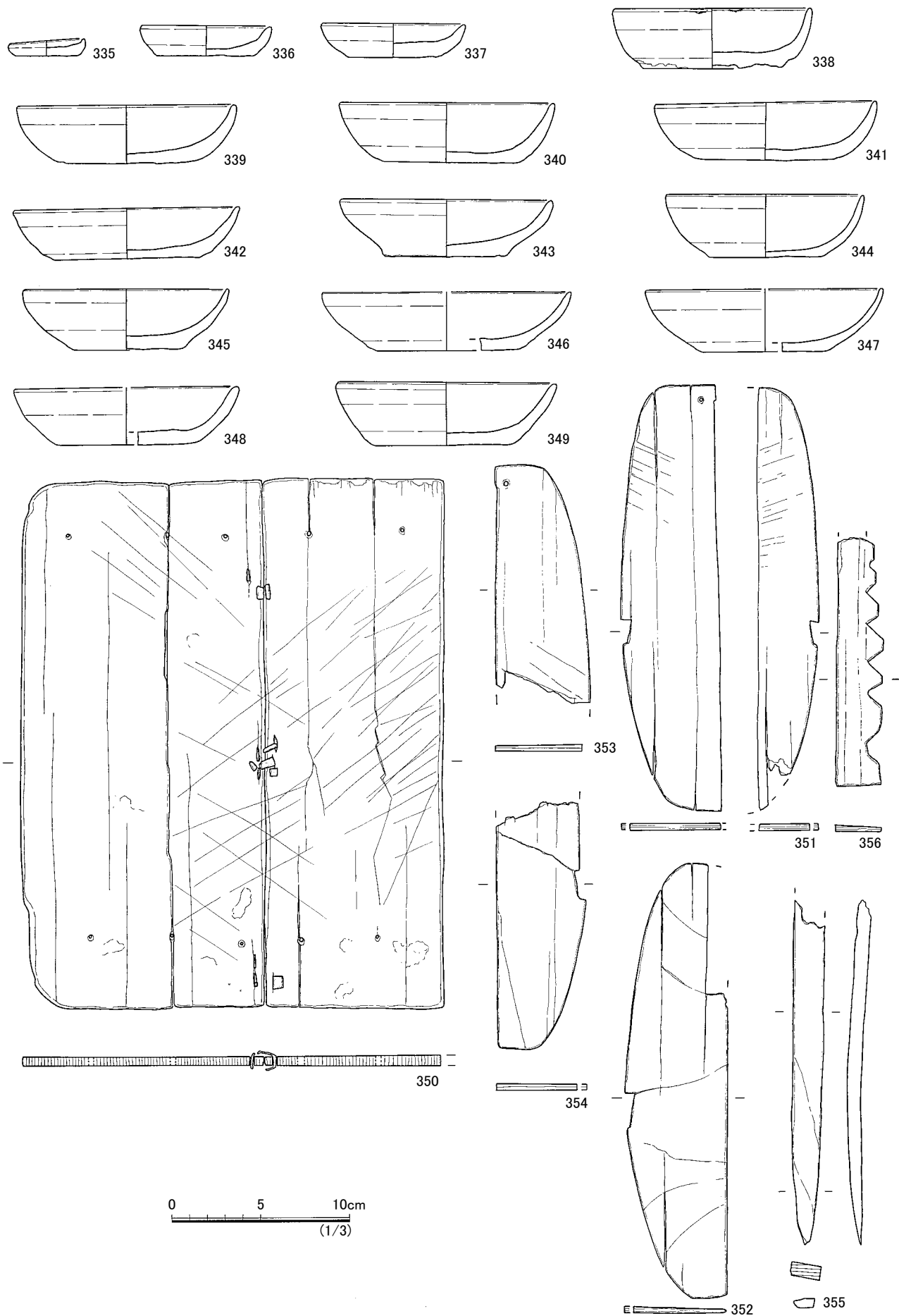


图 26 4a 面 遺構 15 出土遺物

374～378はロクロかわらけ。小皿・大皿ともに法量・器形の上で上層の木組み溝の出土資料と大差ない。完存する資料はなかったが、上層までの資料を参考として一個体当たりの平均重量を小皿50g、大皿170gと規定すると、小皿が4個体前後、大皿が7個体前後に換算できる。

379以下は木製品。385の棒状製品は上下両端付近に貫通孔を一ヶ所ずつ開けている。

#### 4面下・4b面下出土遺物（図28～30）

386のみ4面上の出土で、以下は4面下および4b面下の掘り下げ時に出土した遺物である。5面上には厚い有機質腐植土が堆積していたため、遺存状態の良好な漆器や木製品が多数出土した。

386は木製草履芯の完存品。表面に編み藁の繊維質が僅かに付着する。

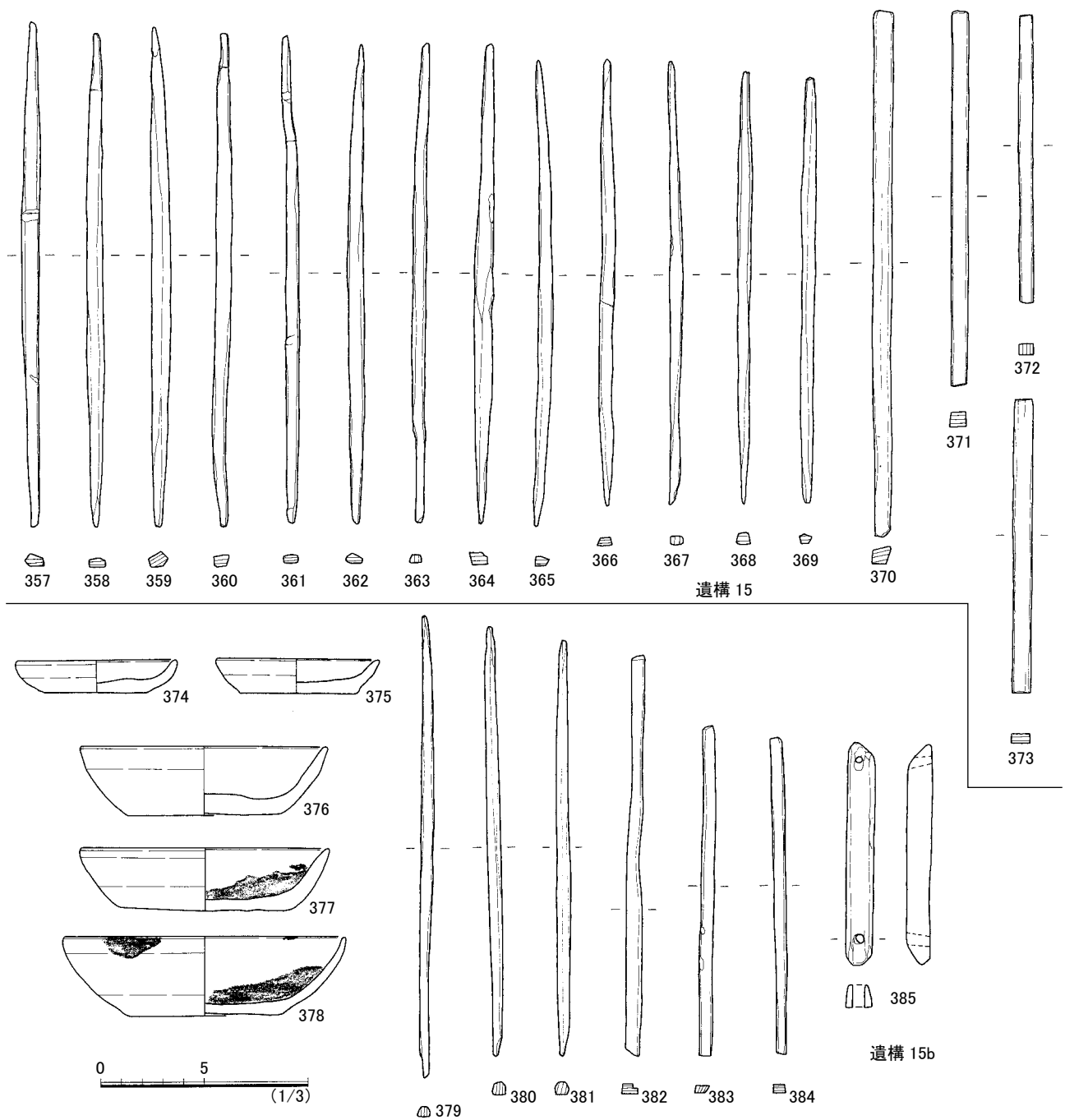


図27 4a面遺構15・4b面遺構15b出土遺物

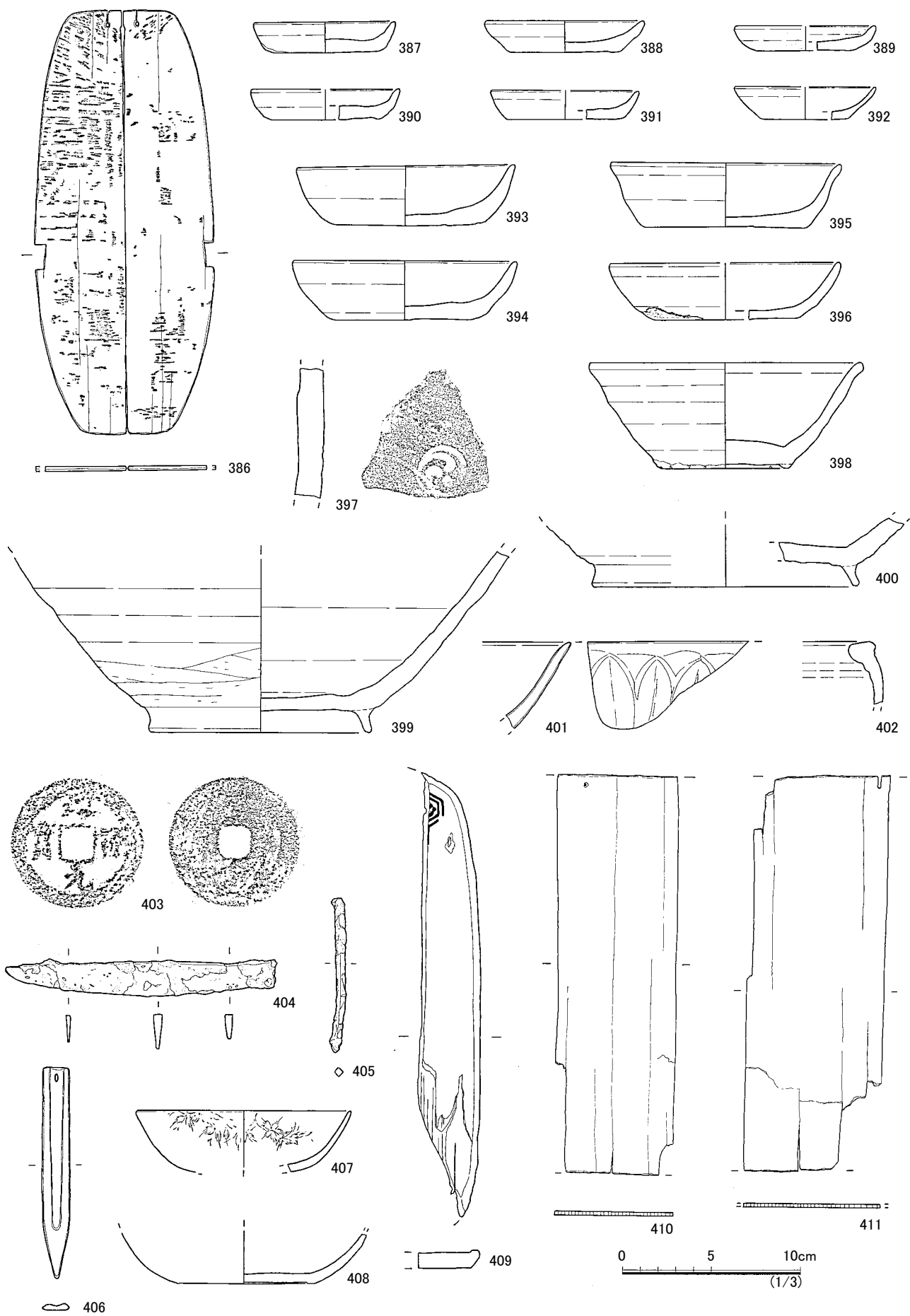


图 28 4 面下 · 4b 面下 出土遗物①

387～396はロクロかわらけ。小皿は口径7cm 台後半～8cm 前後の資料が主体で、体部外面の中位が膨らむものと、直線的に口縁へと至る二通りがある。大皿は口径12cm 台でまつまり、上層の出土資料に比べ体部の内湾傾向が弱い。通常、底部内面のナデと外面の回転糸切り痕・板状圧痕が見て取れる。

397は常滑甕の胴部片。外面に三つ巴文の押印が見える。

398は尾張型山茶碗。内面はコテを当てて整形されたことにより、底部と体部との境が明瞭である。常滑5型式。399・400は常滑の片口鉢I類。

407～409は漆器で、409は盆。ごく部分的な遺存だが、表面に赤色漆で亀甲文のスタンプを捺している。

410以下は木製品。415～436には箸の完存品を中心に示した。他の遺構面から出土した分も含め、箸の計測値は表1に示している。

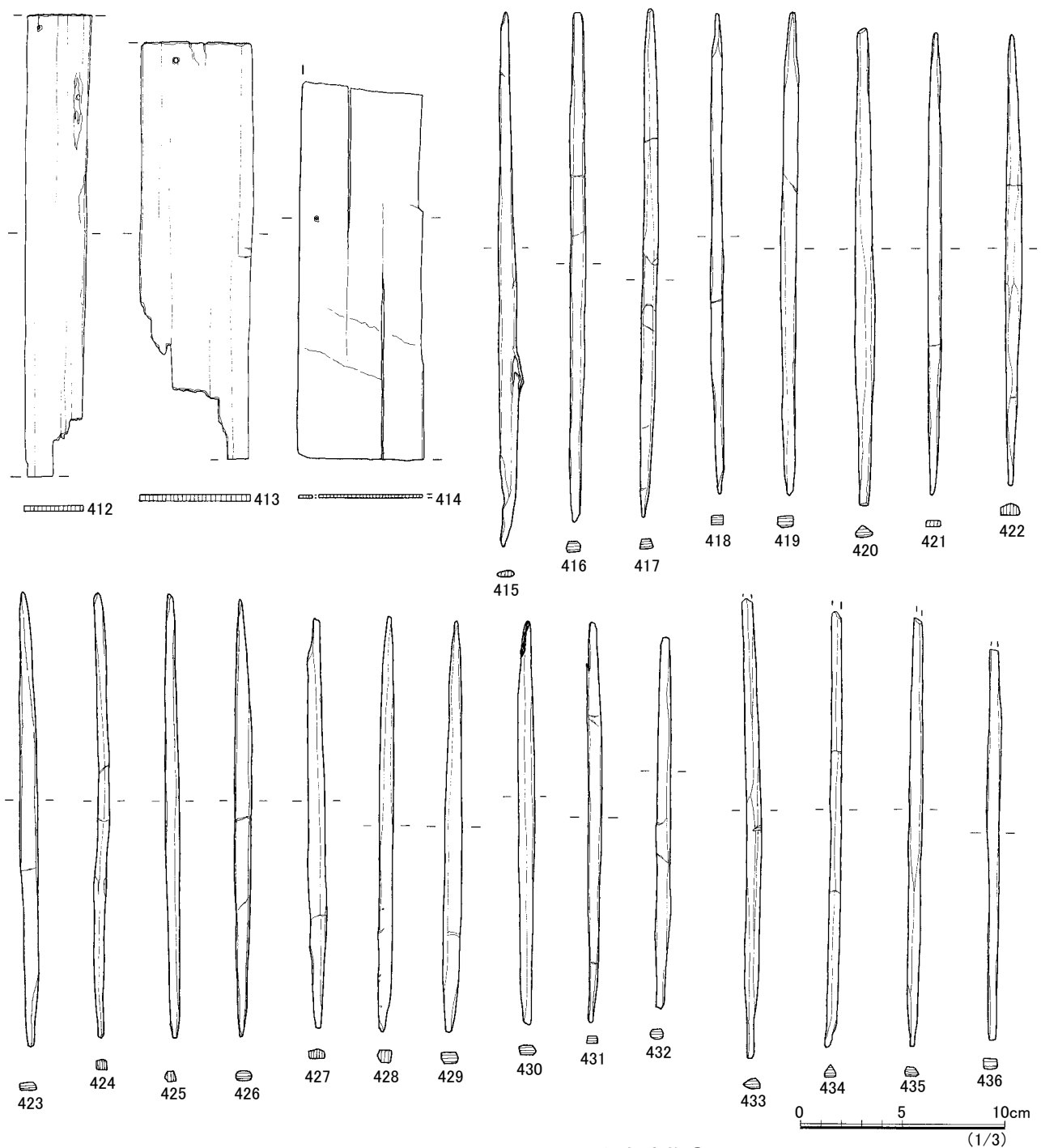


図29 4面下・4b面下 出土遺物②

444 は刀子の鞘。刀身を取める浅い凹部を彫り込んだ2枚の板を貼り合わせて作る。刀身の刃渡りは19cm 前後となろう。

4c 面 遺構 17・4c 面下出土遺物 (図 31)

453 のみ遺構 17 からの出土で、以下は全て 4c 面下から出土した遺物である。

453～457 はロクロかわらけ。個体数は少ないが、小皿・大皿とも上層出土分資料との様相差はない。

459～468 は木製品。466 は織機具の部材である「ツリガマチ」との類似性が指摘される資料である。側面に施された鋸歯状のキザミ目が、自在鉤よりも浅くなっている。

4c 面下 最下層出土遺物 (図 32)

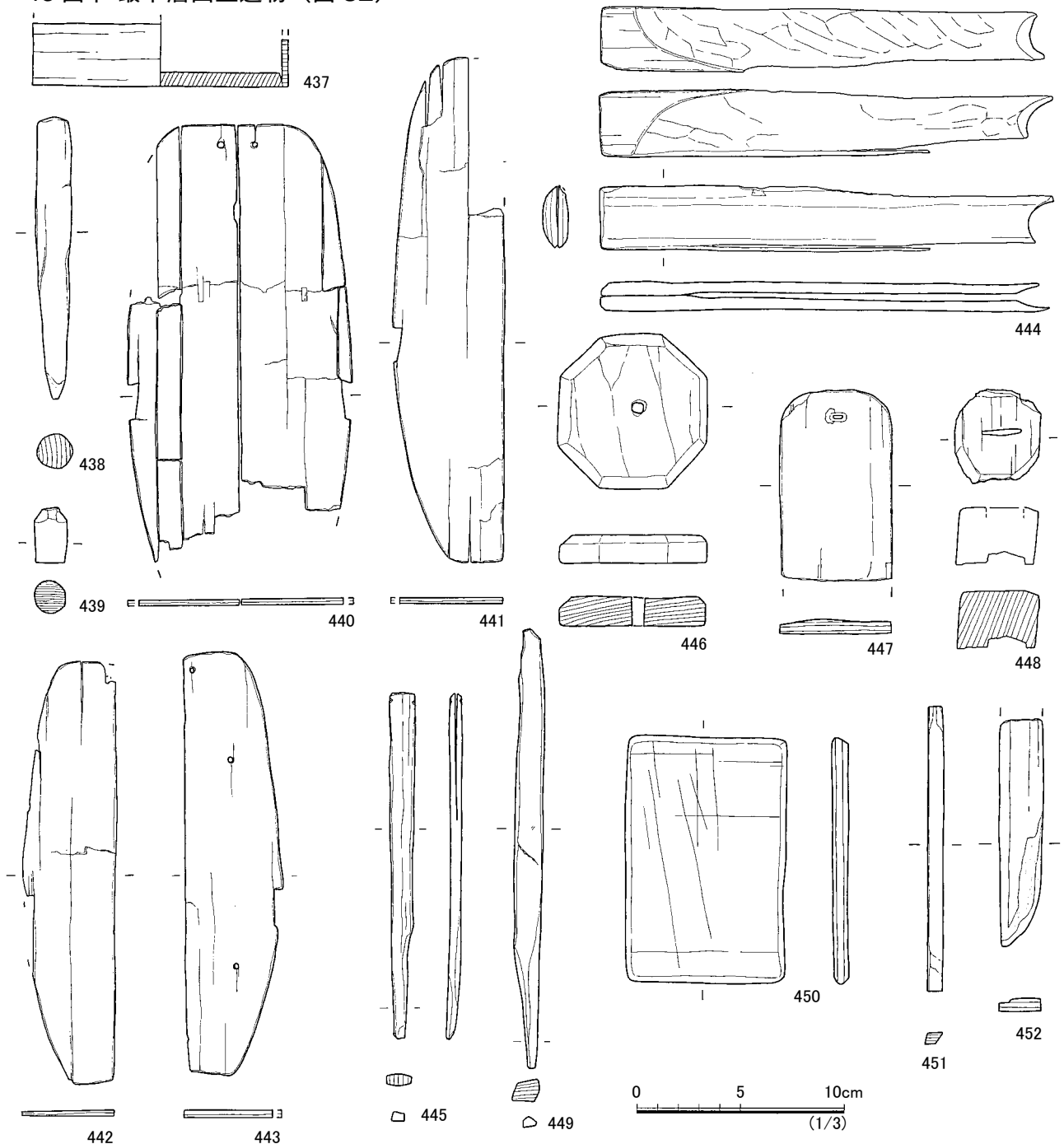


図 30 4 面下・4b 面下 出土遺物③

現地調査では4c面の下に4d面を設定して調査したが、不確実な要素が多いため、本報告では整地面として扱わないことにした。従って、「4d面下」で取り上げた遺物を「4c面下最下層」と呼称を変えて報告する。主体となるのは木製品で、これにロクロかわらけが次ぐ。

469～474はロクロかわらけ。小皿・大皿とも4面下全体の資料と比較して、法量・器形上の様相差はない。

476～487は木製品で、折敷や箸、草履芯などが見られる。

### 5面 遺構9 出土遺物 (図32)

488はロクロかわらけの中皿。薄手丸深系に類別できる。

489～491は木製品で折敷。489は側板の一部が欠損するが、概ね完形に近い。

### 5面下出土遺物 (図33～35)

5面～6面で出土した遺物である。出土量としては、ロクロかわらけと常滑甕が多い (表3)。

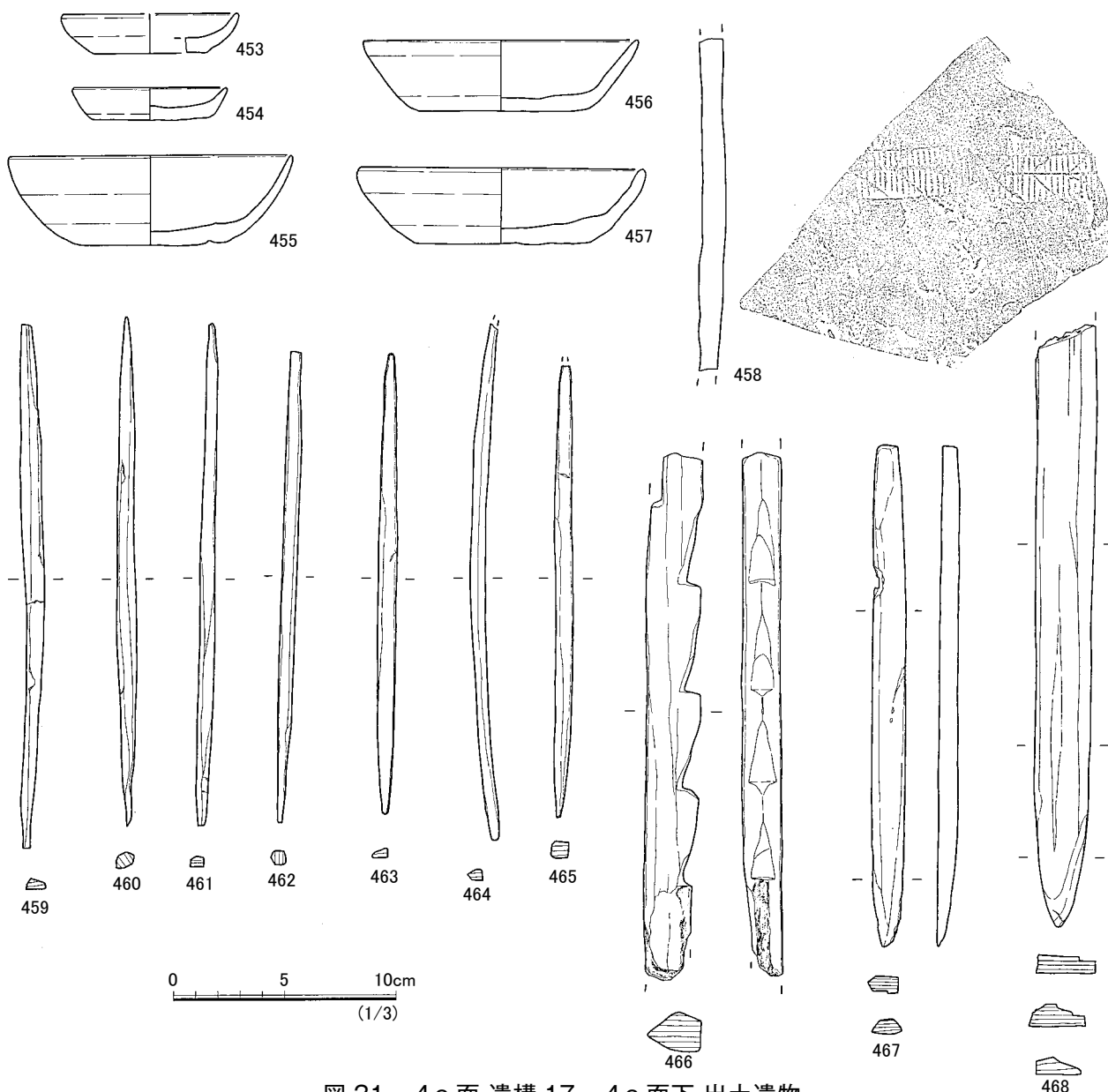
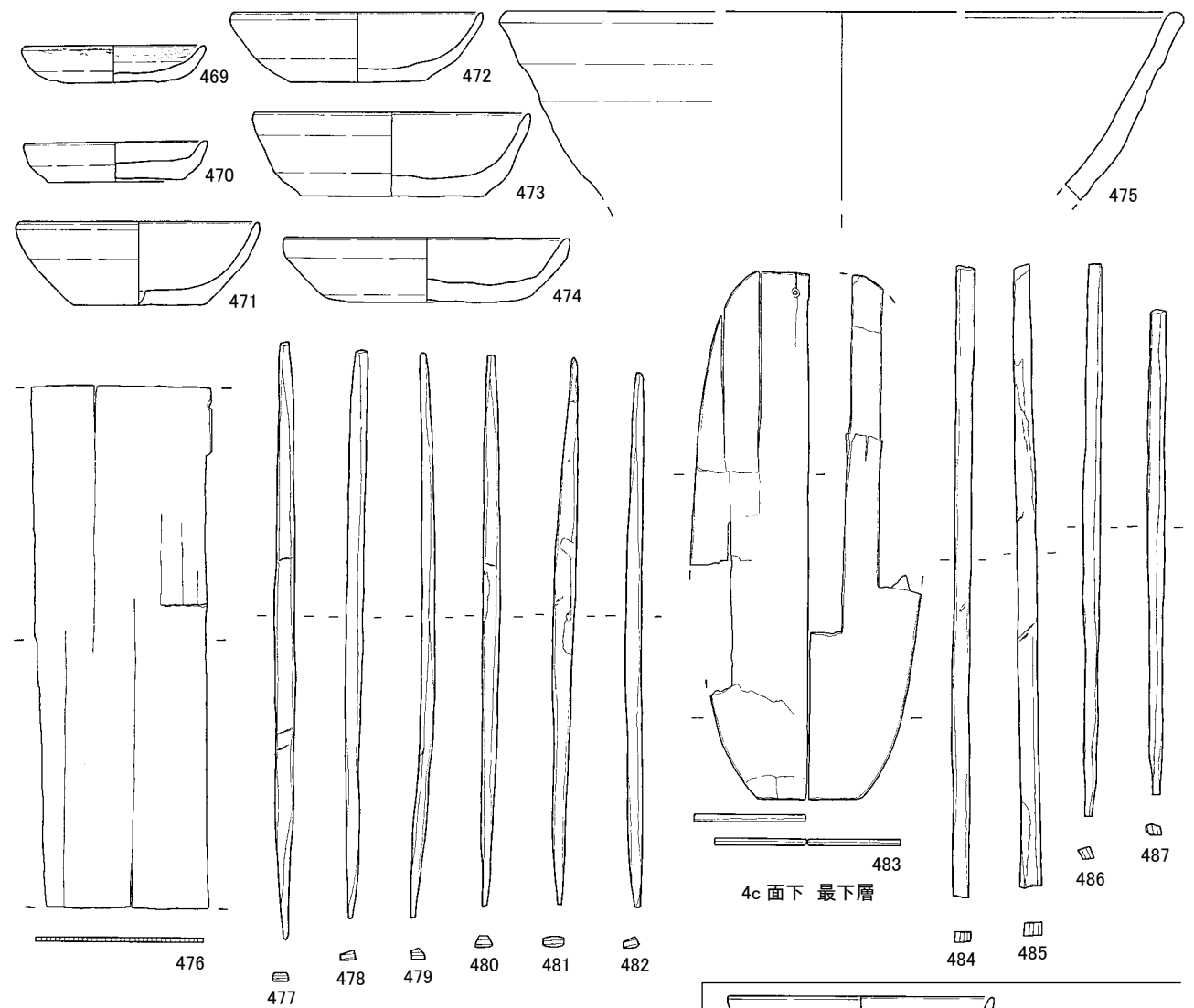


図31 4c面 遺構17・4c面下 出土遺物



5面 遺構9

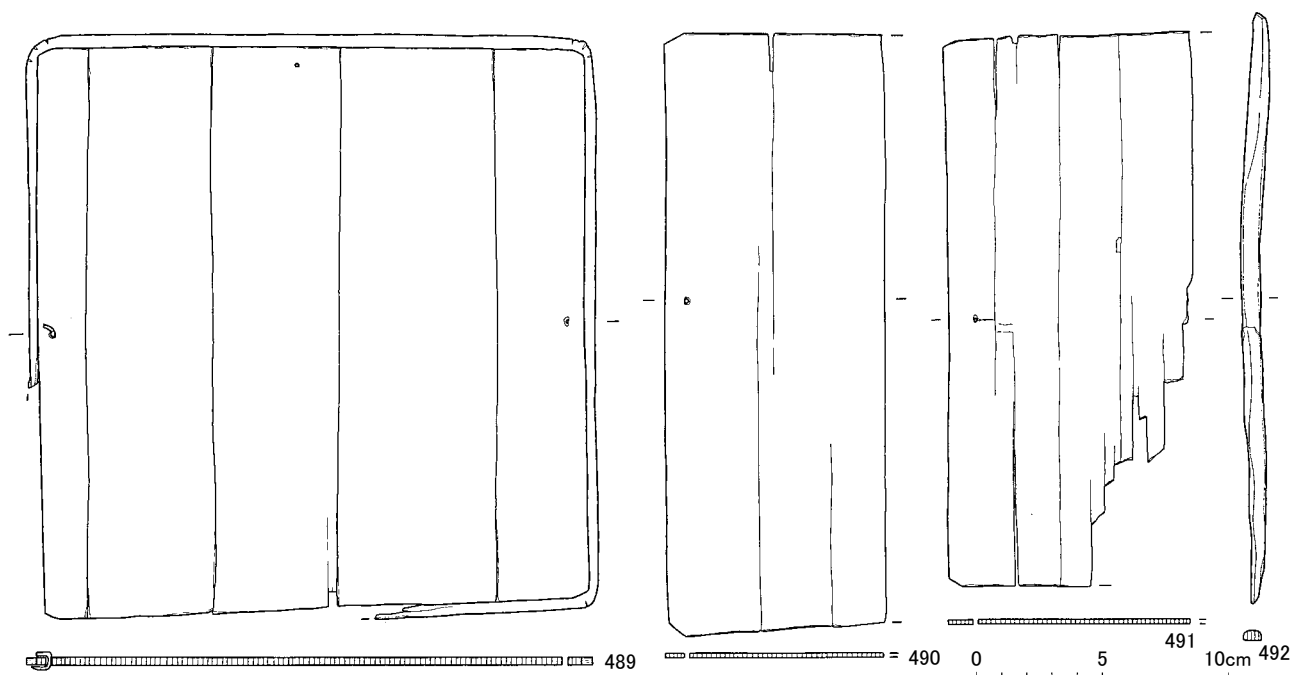


图32 4d面下最下層・5面 遺構9 出土遺物

493～499はロクロかわらけ。小皿は口径8cm前後の資料が主体で、底径6.5cm前後と広底の印象を受ける資料も加わる。大皿は器高が3cm前後にまとまり、提示できた資料は少ないながらも低平→身深という器形変遷の流れが垣間見られる。

496のみ完存する資料で、重量は46gを測る。小皿の総重量は435gなので、約9個体分に相当する。

500は手づくねかわらけの大皿。法量は、ロクロかわらけの大皿と近似している。

501はロクロかわらけ大皿で、底部のみを円板状に再加工し、外底面中央に非貫通孔が一ヶ所ある。

507～511は舶載陶磁器。507は青白磁の合子蓋。外面天井部に鳳凰文のレリーフを彫り込んでいる。508も青白磁で梅瓶の底部。

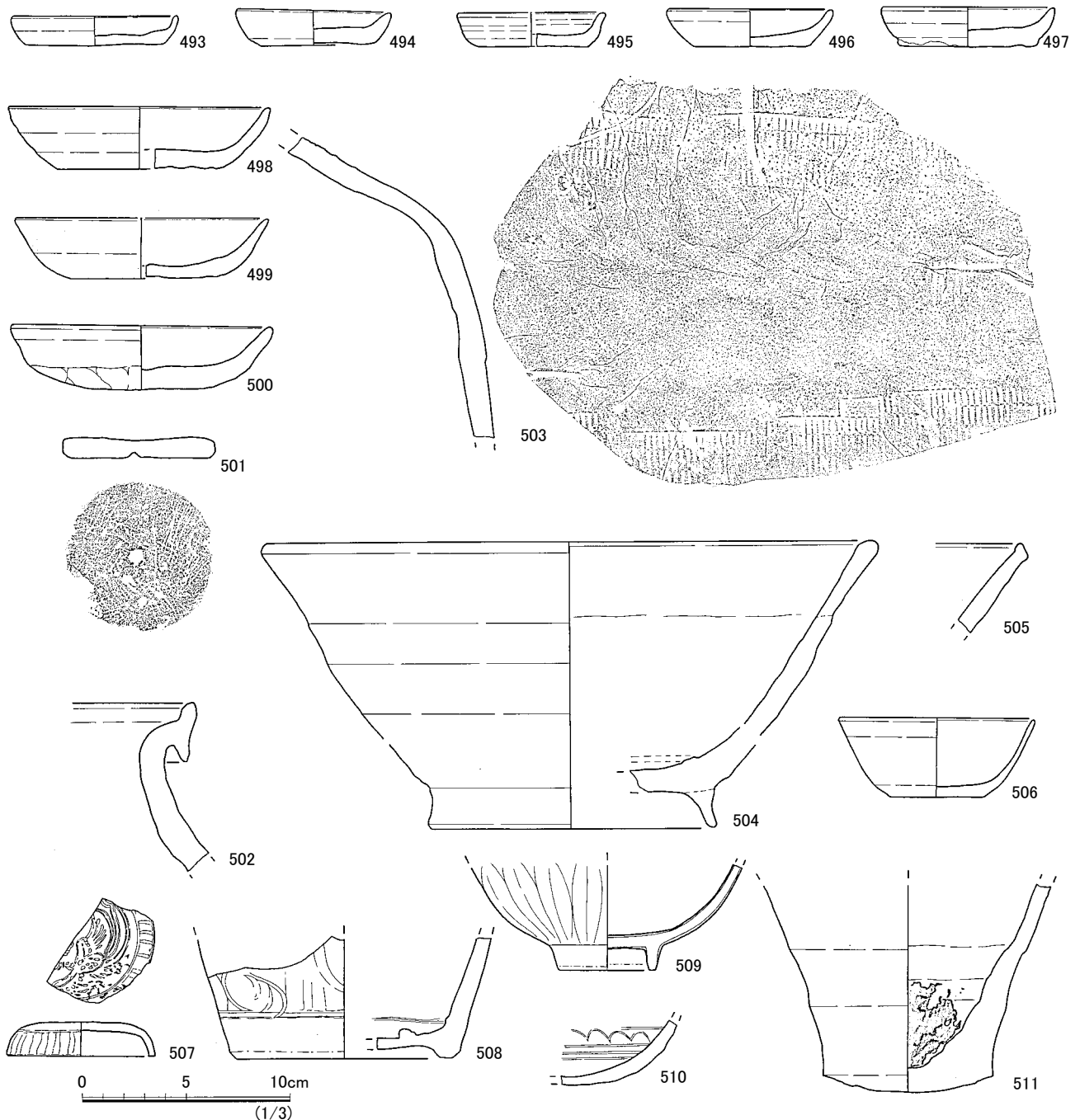


図33 5面下出土遺物①



510 は施釉陶器で二彩盤の底部片。511 も施釉陶器で褐釉壺。胴下部～底部が遺存し、内面は無釉で底部付近に黒色の塗膜（漆か？）が付着する。丸底状を呈し、本来は高台を有していた可能性が高いが、明確な剥落痕は見て取れなかった。5面下においては舶載陶磁器の瓶類や合子といった良品の出土が、破片資料とはいえ目立った印象を持っている。

512・513 は漆器皿。内外面とも黒色系漆で塗られ、無文である。

514～551 は木製品。箸や草履芯などに遺存良好な資料が見られた。540 は蓋（栓）となろう。全面に黒色塗膜（漆か）が見える。541 は半月状の製品で、紡績具の手押木。542・543 は草履芯。

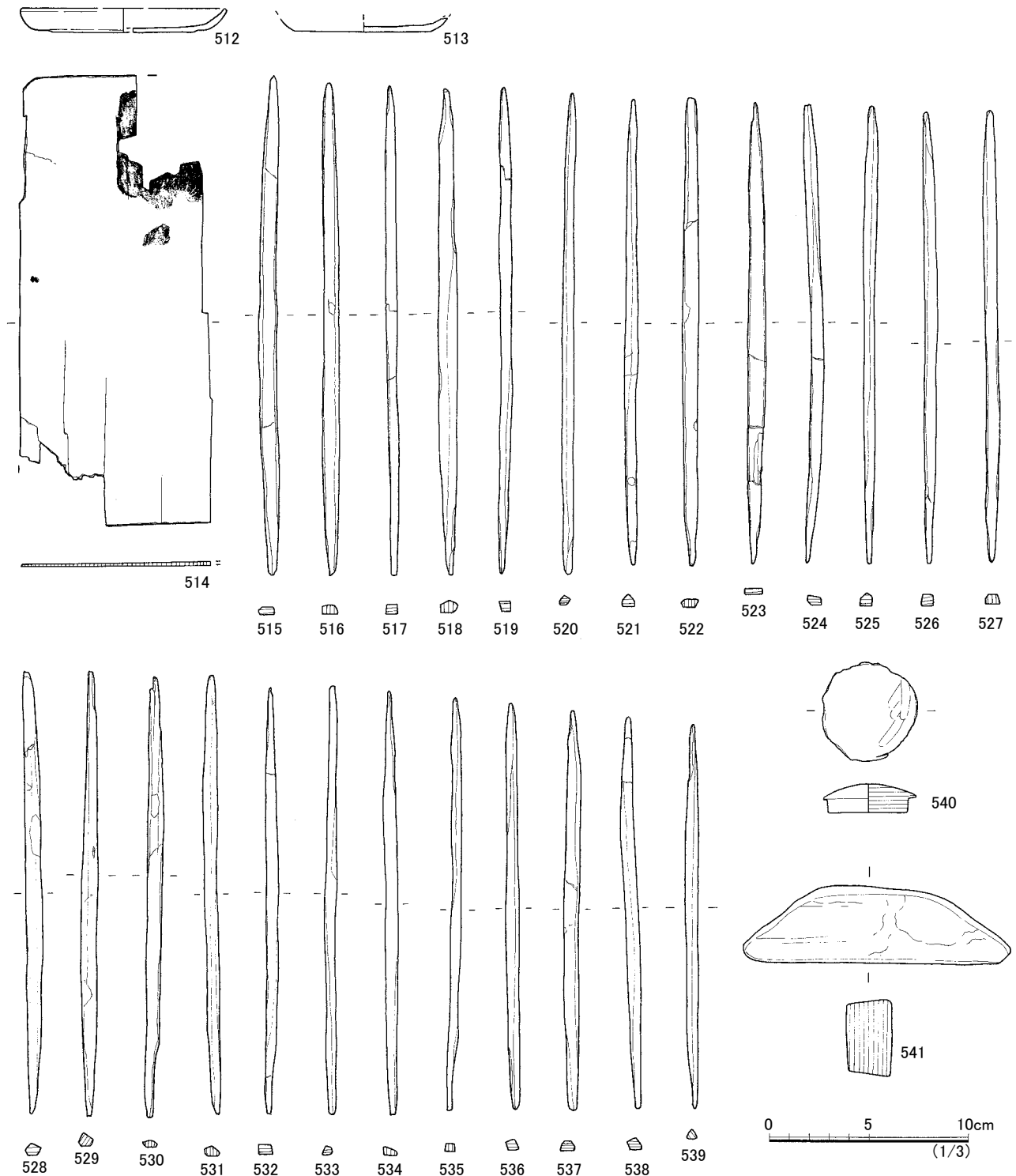


図 34 5面下 出土遺物②

### 6面下出土遺物（図36）

552～558は、6面下から7面までの掘り下げ時に出土した遺物である。この段階、ロクロかわらけが主体となるも手づくねかわらけの出土量が上層までに比べて増してくる。

552～554はロクロかわらけの小皿。図示できた資料数は少ないが、口径が10cm前後の大ぶりの資料も含み、上層での出土例に比べて広底で口縁が短く開く形態を呈する。554は灯明皿の完存品で、重量は64gを測る。これを平均重量とすれば6面下の出土総重量が210gなので、約3個体分に相当する。

555は舶載品の施釉陶器で、盤の口縁部片。

556は鉄製品で刀子。茎の端部付近に柄を固定するための目釘穴が穿たれているものの木質の固着が見られないことから、使用の最終段階には柄を装着していなかった可能性が高い。刃渡り12cm、茎の長さは7.7cmを測る。

557は箱形を呈する軽石製品で、4面に研磨痕を残すことから砥石とした。

558は円板状の木製品。明確な用途は分からないが、紡錘車などの可能性もあるだろう。

### 7面下出土遺物（図36）

559の1点のみを図示した。舶載品の施釉陶器で、二彩盤の底部片。

この段階ではかわらけに占める手づくね成形品の割合が増し、大皿ではロクロ成形品より多い（表3）。

### 8面下出土遺物（図36）

8面下～9面掘り下げ時の出土遺物として、560～564を掲げた。かわらけでは手づくねの割合が増し、大皿ではロクロ成形品を大幅に上回る量が出土している（表3）。

560・561は手づくねかわらけの大皿で、ともに口径13.5cm前後を測り、低平な作りである。口縁部は薄くシャープである。

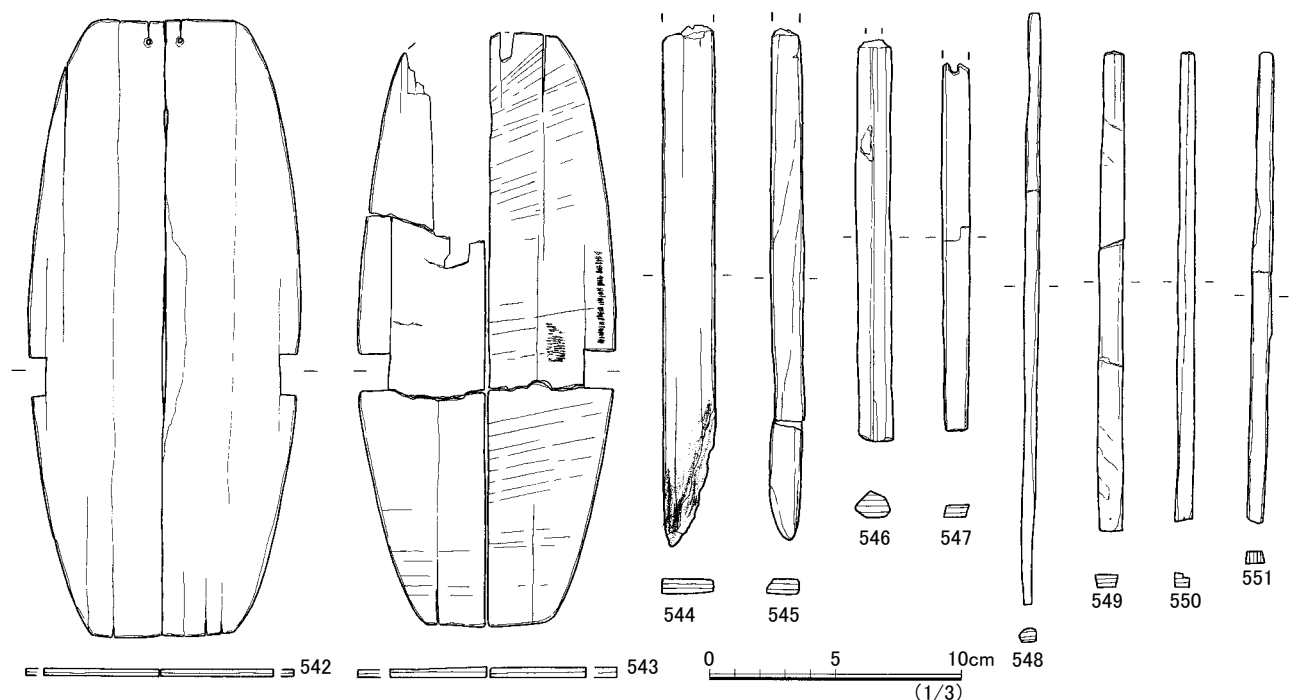


図35 5面下出土遺物③

562～564 は木製品で、564 は用途不明の板状製品。

### 9 面下出土遺物 (図 36)

565 として、ロクロかわらけの小皿 1 点を図示した。復元口径が 10.6cm と大ぶりで、広底かつ低平な外観を呈する。内底面にナデ、外底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。

この段階のかわらけは、手づくねとロクロの数量比が小皿で拮抗し、大皿では手づくねがロクロを大きく上回っている。

### 10 面 遺構 11 出土遺物 (図 36)

566 として、手づくねかわらけの小皿 1 点を図示した。小片のため口径の復元には至らなかった。内底面にナデ調整を施している。

少量ではあるが、かわらけにおける構成比は小皿・大皿とも手づくね成形品がロクロを上回っている (表 3)。

### 調査区壁 出土遺物 (図 36)

567～570 は I 区調査区壁の断面で出土した。567・568 は 1 面の遺構 1 炭層に、569・570 は 3 面に帰属する。

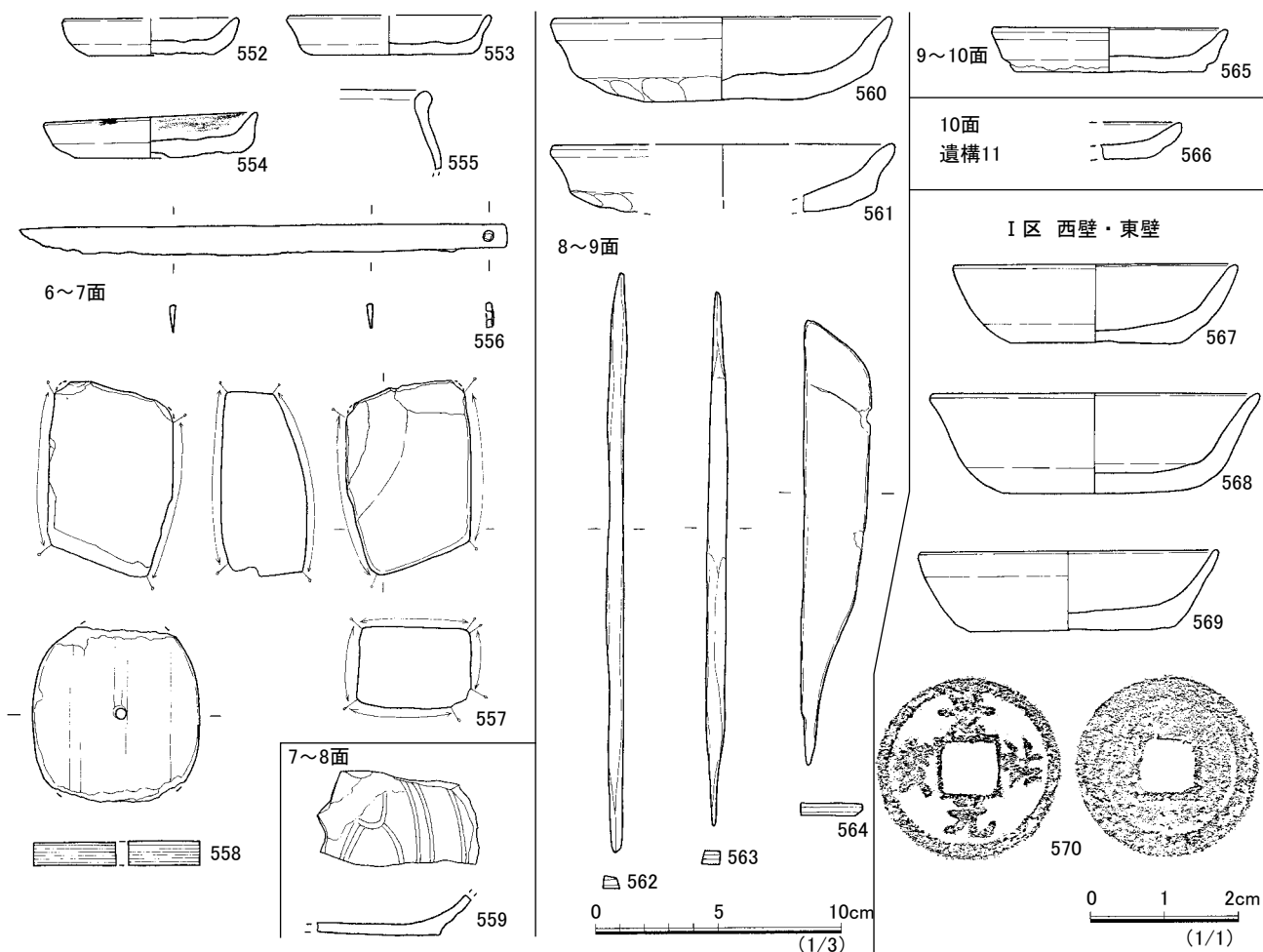


図 36 6 面下～10 面・10 面 遺構 11 出土遺物

表 1 簞計測値分布

全長(cm)	2 面 下		3 面 下		4 面 遺 構 1 5		4 面 下		4 遺 構 1 5 b		4 b 面 下		4 c 面 下		4 c 面 下 層		5 面 遺 構 9		5 面 下			
	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率		
17.6~18.0		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%	1	16.7%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		
18.1~18.5		0.0%	1	3.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.5%		
18.6~19.0	1	16.7%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		2.3%		
19.1~19.5	1	16.7%	4	15.4%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%		0.0%		4.5%		
19.6~20.0		0.0%	4	15.4%	1	33.3%	2	28.6%	1	33.3%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		6.8%		
20.1~20.5	1	16.7%		0.0%	1	3.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%		6.8%		
20.6~21.0		0.0%	2	7.7%	1	3.8%		0.0%	1	33.3%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		4.5%		
21.1~21.5	1	16.7%	2	7.7%	2	7.7%		0.0%		0.0%	2	33.3%	1	33.3%		0.0%		0.0%		6.8%		
21.6~22.0		0.0%	3	11.5%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		11.4%		
22.1~22.5		0.0%	4	15.4%	2	7.7%	1	14.3%	1	33.3%	1	16.7%		0.0%		0.0%		0.0%		4.5%		
22.6~23.0	1	16.7%	4	15.4%	8	30.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%		22.7%		
23.1~23.5		0.0%	2	7.7%	1	3.8%	2	28.6%		0.0%		0.0%	2	28.6%		0.0%	1	100.0%		11.4%		
23.6~24.0		0.0%		0.0%	9	34.6%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	2	28.6%		0.0%		9.1%		
24.1~24.5	1	16.7%		0.0%	1	3.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	2	28.6%		0.0%		2.3%		
24.6~25.0		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%	1	16.7%		0.0%		0.0%		0.0%		2.3%		
25.1~25.5		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		
25.6~26.0		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	16.7%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		
小計	6	100.0%	26	100.0%	26	100.0%	7	100.0%	3	100.0%	6	100.0%	3	100.0%	7	100.0%	7	100.0%	1	100.0%	44	100.0%

簞の法量分布 (表 1)

表 1 は各面・遺構から出土した簞のうち、完存品の全長を 5mm 単位の分布域に帰属させたものである。資料数の多い 3 面下と 4 面遺構 15、それに 5 面下とを比較すると、3 面下では全長 19cm 台と 22cm 台に分布のピークがあるのに対し、遺構 15 では 22cm 台後半と 23cm 台後半にピークがあり、遺構 15 の資料が長い傾向を見て取れる。5 面下では全体に広い分布域を見せる中、22.6 ~ 23.5cm に一定のピークを確認できる。佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）では時期が下るにつれて簞の全長が短くなる傾向が指摘されているが、本地点では 3 面下と遺構 15 との間にその傾向が見て取れた。資料数が少ないこともあって明確な時期別偏差を見出すことはできなかったが、土器様相の面でも 5 面から 3 面までの間に顕著な差を見出し難いことから、この間に大きな時間差がなかったであろうことも推測できよう。

## 第五章 調査成果のまとめ

前章までに、発見された遺構と出土遺物について説明してきた。33㎡と非常に狭い調査範囲であり、安全面への配慮から下層の遺構面ほど調査対象を狭める必要があった。このため、各時期の遺構展開や性格を十分に捉えることができなかった点は残念である。

本章では各遺構面の年代について整理し、近隣での調査内容も参照しながら本成果を補足することにしたい。年代の比定には、各面で数量・遺存状態ともに安定的な出土が見られる「かわらけ」の器形と組成の変化を主たる指標とした。鎌倉のかわらけ年代観に関しては研究者間に見解の相違があることが指摘されて久しい(永田 2014)。新出資料の蓄積に伴う検証が進められるとともに、共通認識の形成が図られることを期待したい。筆者には各々の所見については是非を論じるだけの知識はないが、ここでは宗臺秀明氏の編年案(宗臺 2005)をベースに年代観の提示を行う。

1面では、炭層の落ち込み(遺構 1)とかわらけ集積土坑 1 基(遺構 13)が検出され、切り合いでは後者が新しい。遺構 13 の出土かわらけは全てロクロ成形品で、口縁が外方へ直線的に開き、大・小を中心に中型品も少量含まれる。全体に身深の側面観を呈し、大・中皿の内面は底部～体部の立ち上がりが見え、明瞭である。宗臺編年第Ⅷ期、15 世紀中葉に位置付けられる。遺構 1 の出土かわらけも全てロクロ成形品で、遺構 13 の資料と比べて大・小皿とも器高が 5mm ほど低く、大皿では口径 12cm 台と 14cm 台を中心とする二群が見られた。概ね外傾基調の器形であるが、小皿には体部に丸みを帯びる資料も一定量含まれていた。宗臺第Ⅶ期と同時期、ないしは後出的特徴を持つ資料が混在していると考えられるので、15 世紀前半という年代幅を当てておきたい。

これら 15 世紀代の遺物に関して、大倉～浄明寺地区での出土は市内の他地区に比べて質・量ともに豊富であり、図 1 - 地点 c では遺物組成も含め寺社関連と目される 14 世紀末～15 世紀代の礎石建物が 3 棟検出されている(原・須佐 2002)。当地区でのこうした在り方が偶々後世の削平を免れたためか、或いは鎌倉での人的活動・土地利用が一定の地区に集約されるたことによるものなのか、資料の増加に合わせた考察が必要であろう。

2面では土坑(遺構 14)で完形を含むかわらけが一定量出土しており、やはりロクロ成形品で占められる。1面出土資料と比較して薄作りで器形に丸みがあり、小皿は器高 2cm 未満の低平な一群が中心となる。器形変化が少ない段階であり年代特定は難しいが、下層資料との連続性を考慮すれば宗臺第Ⅴ期後半～第Ⅵ期、14 世紀後半頃の年代が与えられようか。

3面直上と面上炭層で出土したかわらけも、ロクロ成形品で占められる。小皿には深身の資料が殆どなく、広底で体部～口縁が短く開くものが主体となる。大皿は丸みがある深身の器形で、面直上の資料が僅かに大ぶりである。下層での遺物様相も考慮し、宗臺第Ⅴ期のうち 14 世紀前半頃の年代を当てておきたい。囲炉裏を設けた 3 面建物が焼失した後、2面までの堆積層は 30～60cm と厚く何らかの土地利用の転換があったことが推察される。出土土器の年代観からは、幕府滅亡がその一因にあった可能性も指摘できよう。

3面下から 4面下までは土器様相が目立った変化は窺えず、かわらけはロクロ成形品で占められる。大皿は身深で内湾気味のものと、やや広底で低平な一群とに分けられる。手づくねを含まない状況から、宗臺第Ⅴ期のうち 13 世紀後葉を当てておく。4面は堆積状況から 3 時期に細分でき、東西木組み溝が二段階に亘って構築されていた。各期の面構成土は有機質腐植土が主体で、3

面や5面ほど堅固な泥岩整地層は確認できなかった。このことから、比較的短期間で乱雑な整地や溝の造り替えが繰り返された状況も推察できる。

5面では遺存度の良かわらけがなかった。5面下でもかわらけの殆どをロクロ成形品が占めることから、宗臺第Ⅳ期～第Ⅴ期、13世紀中葉～後半に当てておく。

6面以下は調査範囲が狭まったこともあり出土遺物が僅少で、図示できた資料は極端に少なかった。以下は各面構成土からの出土かわらけを基に年代比定を試みるので、当然これに覆われた遺構面の下限年代を示すことになる。

6面下で図示したかわらけはロクロ成形の小皿のみで、広底で体部～口縁部が短く開く。破片数では手づくねかわらけが上層よりも僅かに目立っていることから、この頃が同類の最終段階となる可能性も考えられる。宗臺編年では第Ⅴ期の1280年頃に手づくねかわらけの終焉時期を想定しているが、上層の年代観も鑑みて宗臺第Ⅳ期、13世紀中葉を当てておく。

7面下で図示できたかわらけはなかった。破片数・重量ではロクロと手づくねが拮抗してくるので、概ね宗臺第Ⅳ期、13世紀前半(第2四半期頃)～中葉と捉えておく。

8面下では、大皿において手づくねかわらけがロクロかわらけの破片数を大きく上回る。実測できた手づくね成形の大皿2点は器壁が厚手化しているものの、後続する身深の資料より低平で口径も一回り大きい。ただ宗臺第Ⅲ期まで遡らせるのは難しいので、これも第Ⅳ期、13世紀第2四半期頃の所産と考えておきたい。

9面下でも手づくねかわらけがロクロ成形品の破片数を上回る。図示できたのはロクロかわらけ小皿1点のみであり、広底で低平な側面観を呈する。単体での年代比定は難しいが、上・下層の状況も勘案して13世紀前葉の所産と考えておく。

10面では大型の土坑である遺構11で少量のかわらけが出土しており、破片数はロクロより手づくね成形品が多数を占める。図示したのは手づくねの小皿1点のみで、小片のため径復元はできなかった。従って年代比定も曖昧にせざるを得ないが、鎌倉時代でも初期段階に近いと考えられることから、宗臺第Ⅱ～Ⅲ期、12世紀末～13世紀前葉の所産と考えておく。

10面下は中世基盤層である黒褐色粘質土が堆積し、層中からは古代の土師器片が少量出土したのみである。12世紀後葉以前と見なせる。

以上、土器様相からは9面以下を13世紀第1四半期の**大倉御所時代**と考えたが、泥岩塊を多用する7面より以下の整地面を大倉御所の存続期間に当てる見方も可能であるかもしれない。

大掘みではあるが、6面から3面までが13世紀中葉～14世紀前半の鎌倉時代後期に相当すると考えられる。この各段階では東西木組み溝や礎板持ちの柱穴、杭列、囲炉裏などの遺構が検出された。4面構成土は泥岩ではなく有機質腐植土が主体であり、こうした状況からは整然とした土地造成の上に堅牢な建物を構築したとは考えにくい。東に接する**図1-地点15・16**でも概ね同様の整地状況と遺構展開が窺えるが、14世紀初頭～前半の遺構面では凝灰岩切石を積み並べた方形基壇状遺構や裏込めに切石を積み上げた井戸が検出されるなど(滝澤・宮田2013a・b)、当地の居住者は一定の経済力を保有していたことも想定できる。**地点16**では、標高12.4m付近の第3面で掘立柱建物や木組み溝が検出され、この廃絶後に炭層が堆積している状況から本地点の第3面と同一遺構面と考えられる。この上位に大型泥岩塊による厚い整地層(1・2面)が形成される点も共通しており、3面から2面にかけての土地利用形態が転換した様子が推察される。

このように、御所移転後の当地域は武家屋敷や寺院としてではなく庶民居住区として雑多な賑わいを見せていたと考えられ、概ね周辺での調査成果を追認・補強する成果となった。**【参考文献は280頁を参照】**

表2 出土遺物カウント表

種別・産地 器種	手 かわく わらね かけ		ロ かわ ら け				渥 美		尾 張 常 滑				
	小	大	小	大	薄・丸 小系	薄・丸 大系	極 小	片口鉢	片口鉢	片口 類鉢	片口 類鉢	甕	壺
出土遺構												8	270
試掘坑				75	545							8	270
試掘6層				52	496							1	30
			53	550	98	725						8	375
遺構12			2	15	9	45						5	1595
遺構13			87	1010	1221	22460						9	360
攪乱			86	780	372	3055						7	250
1a~1b面			46	450	576	4370						1	65
遺構1			373	4892	635	13580						2	95
遺構外			1	10	229	2615							1
1b~2面			465	4595	2303	29935						5	150
遺構2			2	55	7	430						12	805
遺構14			162	2560	154	2945						2	160
2~3面		2	20	189	6930	635	7869					7	560
遺構4					3	10							
遺構5					3	20							
遺構外			7	315	7	750	1	10					1
遺構7					1	10							5
3~4面		1	10	128	1320	285	3130	8	65	69	720	1	25
遺構15			14	220	64	1955						3	135
遺構15b			12	185	73	1145	1	10	59	530		1	10
遺構16			4	65	17	100						4	205
遺構17			2	25									2
4~5面		1	10	2	25	106	995	276	4200	2	10	32	505
遺構9					1	10						1	35
		2	15	2	160	37	435	119	1485			1	50
5~6面		2	10	15	125	21	210	67	745			5	595
6~7面		4	25	7	65	10	65	1	10			2	165
7~8面		3	30	94	805	3	30	9	60				1
8~9面		9	45	28	250	5	65	2	25				1
9~10面		12	50	14	80	3	5	1	10				2
遺構11													1
10面下													2
地山													1
不明			15	220	220	3125						6	385
帰属不明													1
													15





種別・產地 器種	土器		瓦器		瓦質土器		瓦				青白磁			白磁	
	黒縁碗	火鉢	碗	火鉢	風炉	軒平瓦	平瓦	丸瓦	不明	合子蓋	梅瓶	瓶	口元皿	碗	不明
出土遺構				2 115									1 5		
試掘坑				2 115									1 5		
試掘6層															
遺構12															
遺構13				1 95			2 65								
攪乱				1 90											
1a~1b面				5 200			1 10	1 145					1 5		
1b面				2 85	1 20		1 60	1 220			3 20				
遺構外				1 15											
1b~2面	1 20			25 1345		1 340	19 1830	4 475			3 50	1 10	1 5		1 5
遺構2															
遺構14				1 30											
2~3面				5 115				5 1835			1 10			1 3	
遺構4															
遺構5															
遺構外															
遺構7															
3~4面				1 70			1 85		2 95					2 13	1 5
遺構15															
遺構15b				1 85					1 45						
遺構16															
遺構17															
4~5面	1 5			1 10	4 415		1 100				1 5				
遺構9															
5~6面				2 265						1 15	2 65				
6~7面															
7~8面	1 5														
8~9面															
9~10面															
遺構11															
10面下															
地山															
10面下															
不明											1 5				
帰属不明															

種別・產地 器種	龍泉青窯磁系				彩施釉種陶器			不明	鐵製品		銅製品
	蓮弁文碗	碗	折緣皿	皿	天目碗	盤	壺		刀子	釘	
面・層位											
出土遺構											
試掘坑											
試掘6層											
1a面											
遺構12											
遺構13											1 5
攪乱											
1a~1b面			2 30								
遺構1	3 25		1 60		1 20		1 5				1 5
遺構外											
1b~2面	4 25	1 10	2 15			1 15	1 15		3 20		
2面											
遺構2											1 5
遺構14	1 5								1 5		
2~3面	4 60	1 10				1 5					1 2
遺構4											
遺構5											
3面											
遺構外	1 5										1 2
3c面											
遺構7											
3~4面	4 55		3 90				1 10	10 490			2 6
4面											
遺構15											
遺構15b											
4b面	1 25										
遺構16											
4c面											
遺構17											
4~5面	4 55		1 10			1 25	2 50		1 35	1 10	1 15
5面											
遺構9											
5~6面	2 80	1 10		1 5		1 55	6 1545				
6~7面						1 10			1 30	1 15	
7~8面						1 10					
8~9面											
9~10面											
10面											
遺構11											
10面下											
地山											
不明											
帰属不明											

種別・產地 器種	石製品								石			骨製品	漆器	土師器			須惠器	
	滑石鍋	砥石	硯	基石	紡錘車	火打石	加工石	輕石	頁岩	筭	蓋			相 模 型	相 模 型	壺？		坏
出土遺構																		
試掘坑																		
試掘6層														1	10			
遺構12																		
遺構13																		
攪乱																		
1a面																		
1a~1b面		3	40															
1b面																		
遺構1															1	15		
遺構外															1	15		
1b~2面	1	10	2	20		1	5	1	25	1	10	1	170				1	25
2面			1	15	1	5												
遺構2																		
遺構14			2	555	1	70											1	5
2~3面																		
遺構4																		
遺構5																		
遺構外																		
遺構7																		
3~4面	1	75	1	35								1	90					
4面																		
遺構15																		
遺構15b																		
遺構16																		
遺構17																		
4~5面		1	5							1	5							
5面																		
遺構9																		
5~6面	4	395																
6~7面	1	155	2	115														
7~8面																		
8~9面																		
9~10面	1	70																
10面																		
遺構11																		
10面下																		
地山																		
不明																		
帰属不明																		



表3 出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
I面 遺構13 出土遺物(図16)						
1	瓦質土器	火鉢	—	—	[4.2]	口小片 胎土:白色粒・雲母・泥岩粒 色調:灰橙色 備考:口縁内面に突起あり。口縁部煤付着
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	3.5	2.5	略完形 [52]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:濃橙色
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	3.8	2.6	略完形 [43]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
4	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	3.8	2.4	略完形 [42]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2 ~6.8	4.8 ~4.3	2.7	略完形 [47]g 胎土:雲母・白色針上物質 色調:橙色 備考:上面観楕円状に歪む
6	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.0	2.7	略完形 [41]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	3.8	2.7	略完形 [34]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
8	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.2	2.5	略完形 [50]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.0	2.9	略完形 [50]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	5.0	2.6	4/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
11	土器	ロクロ かわらけ・小	—	4.2	[2.8]	略完形 [45]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
12	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.4)	(6.0)	3.5	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
13	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	(5.5)	3.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.4)	3.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
15	土器	ロクロ かわらけ・中	11.1	5.7	3.9	略完形 [162]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.0)	3.5	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
17	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	7.0	4.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
18	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	7.5	4.2	完形 209g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
19	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.6	3.8	略完形 [212.5]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
20	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.5	4.0	完形 194.9g 胎土:雲母 白色針状物質 色調:橙色 備考:内底面渦巻状の痕 (ナデが弱い?)
21	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.9	4.5	略完形 [192]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
22	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(8.0)	4.0	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
23	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.2)	4.0	3/4 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
24	土器	ロクロ かわらけ・大	13.1	(6.8)	4.3	略完形 [213]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
25	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	8.6	4.2	略完形 [222]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
26	土器	ロクロ かわらけ・大	13.7	8.4	4.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
27	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	7.1	4.0	完形 211.4g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
28	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.5	4.1	略完形 [207]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
29	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.0)	4.0	1/2 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
30	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	8.1	4.1	略完形 [184.4]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
31	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(7.4)	4.1	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
32	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	7.5	4.3	略完形 [217]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
33	土器	ロクロ かわらけ・大	13.4	8.4	4.4	略完形 [229]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
1面 遺構1 出土遺物①(図17)						
34	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.4	1.8	完形 59g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
35	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	3.9	2.2	完形 42g 胎土:雲母 色調:黄橙色
36	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.4	2.6	略完形 [48]g 胎土:雲母 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
37	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.1	2.2	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
38	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.3	2.0	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
39	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8 ~7.4	4.5 ~5.2	2.9	完形 50g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:楕円状に歪む
40	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6 ~7.0	4.5 ~5.8	2.4	略完形 [41]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:楕円状に歪む
41	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.9	2.3	完形 51g 胎土:雲母 色調:黄橙色
42	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.2	2.3	完形 43g 胎土:雲母 色調:橙色
43	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.1	2.4	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
44	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	3.8	2.1	完形 46g 胎土:雲母 色調:黄橙色
45	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.7	2.2	略完形 [60]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
46	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(6.8)	[2.1]	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
47	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.2	2.0	完形 44g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
48	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	4.6	1.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
49	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.4	略完形 [48]g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
50	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.2	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
51	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.2)	[2.1]	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
52	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.1	2.4	3/5 色調:黄橙色
53	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	4.2	2.1	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
54	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	3.2	2.4	略完形 [51]g 色調:黄橙色
55	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.4	2.2	略完形 [46]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
56	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	3.8	2.3	2/3 胎土:雲母 色調:黄橙色
57	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.1	2.1	略完形 [44]g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
58	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.9	略完形 [58]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
59	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	3.8	2.5	完形 39g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
60	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.7	2.6	完形 58g 胎土:雲母 色調:黄橙色
61	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.2	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
62	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.6	2.0	完形 43g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
63	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.4	2.5	完形 71g 胎土:雲母 色調:黄灰色
64	土器	ロクロ かわらけ・小	6.1 ~6.5	4.3	1.9	完形 35g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
65	土器	ロクロ かわらけ・小	6.5	4.7	2.1	完形 44g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
66	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.0	2.1	完形 44g 胎土:雲母 色調:黄橙色
67	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.5	2.3	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
68	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	9.1	2.4	略完形 [64]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
69	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	(4.2)	2.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
70	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.7	2.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄灰色
71	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.1	2.6	略完形 [26]g 色調:黄橙色
72	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.3	2.3	完形 49g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
73	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.0	2.0	略完形 [40]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
74	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	5.2	2.2	略完形 [44]g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
75	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.7	2.3	略完形 [39]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
76	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.6)	[3.1]	1/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
77	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.7	3.4	2/3 胎土:雲母 色調:黄橙色
78	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.5)	(7.0)	[3.2]	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
79	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	(7.4)	3.4	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
80	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.6)	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
81	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.4	3.2	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
82	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.2	3.6	3/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
83	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	7.2	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
84	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.6)	6.0	3.0	2/5 胎土:雲母 色調:橙色
85	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.4)	(6.6)	3.5	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:外面中心に黒変
86	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.2	6.3	完形 158g 胎土:雲母 色調:黄橙色
87	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.4)	[3.6]	2/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
88	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.0	3.8	完形 134g 胎土:雲母 色調:黄橙色
89	土器	ロクロ かわらけ・大	11.9	7.0	3.6	4/5 胎土:雲母 色調:橙色
90	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.6	3.6	完形 181g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
91	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6	7.9	3.6	完形 208g 胎土:雲母 色調:黄橙色
92	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.2	3.5	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
93	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	6.8	4.1	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
94	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(8.2)	[3.1]	1/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
95	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4 ~11.6	6.4	3.1	完形 146g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
1面 遺構1 出土遺物②(図18)						
96	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	(8.4)	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
97	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.4)	(9.0)	3.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
98	土器	ロクロ かわらけ・大	14.0	9.2	3.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
99	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.4)	(9.0)	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
100	土器	ロクロ かわらけ・大	14.3	8.7	4.1	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
101	土器	ロクロ かわらけ・大	(15.2)	(8.6)	[3.8]	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
102	土器	ロクロ かわらけ・大	14.4	9.2	4.0	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
103	土器	ロクロ かわらけ・大	15.2	10.4	4.6	4/5 色調:黄橙色
104	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	8.5	3.9	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
105	陶器	常滑 甕	—	—	[7.0]	胴小片 胎土:長石粒 色調:赤褐色 備考:傾き
106	陶器	瀬戸 天目茶碗	(12.8)	—	[6.3]	口～体1/3 胎土:精良 色調:淡黄灰色 釉調:黒褐色(鉄釉)、外面下部錆釉 備考:二次焼成を受け釉が濁る
107	陶器	瀬戸 天目茶碗	—	—	[3.7]	口小片 胎土:精良 色調:淡灰色 釉調:黒褐色(鉄釉)
108	瓦器	風炉	—	—	[3.0]	口小片 胎土:やや粗雑 色調:灰黒色 火鉢VI類
109	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	至和通寶 中国北宋代・1054年初鑄
110	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.5	厚さ 0.1	銭銘不明
1面下 出土遺物(図19)						
111	土器	ロクロ かわらけ	(3.8)	(3.4)	1.8	1/2 内折れ 胎土:雲母 色調:黄橙色
112	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.8	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口唇の一部を擦り凹ませる
113	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.1	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
114	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.2	1.7	完形 4.5g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
115	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.9	2.0	略完形 [5.6]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
116	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.0)	1.7	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
117	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.1	1.8	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
118	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.7	略完形 [4.1]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
119	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.8	1.9	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
120	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	2.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
121	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	3.7	2.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
122	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.4	2.0	2/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
123	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.6)	(4.6)	(2.0)	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
124	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	7.0	3.4	3/4 胎土:雲母 色調:黄橙色 備考:口縁部に白色の付着物
125	土器	ロクロ かわらけ・小	6.0	4.0	2.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
126	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	4.6	2.6	3/4 胎土:精良 色調:黄橙色 備考:歪み顕著
127	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	(7.4)	3.2	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
128	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.6)	3.0	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
129	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.6)	3.0	1/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
130	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.6	2.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄灰色
131	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	7.0	2.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
132	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(7.4)	3.9	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
133	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.6	3.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部に煤付着
133	土器	ロクロ かわらけ・大	12.7	7.7	4.8	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
134	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.7	3.7	1/2 胎土:精良 色調:黄橙色



番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
136	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.0)	3.5	3/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
137	陶器	すり常滑	長さ 4.3	幅 4.6	厚さ 1.5	胎土:灰色～黒灰色 白色粒 黒色粒 色調:黄灰色
138	陶器	常滑 甕	—	—	[6.5]	胴小片 胎土:長石粒 色調:赤褐色 備考:外面に三つ鱗文のスタンプ
139	陶器	常滑 片口鉢I類	—	—	[4.2]	口小片 胎土:精良、微砂粒 色調:淡灰褐色 (尾張・山茶碗系)
140	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[7.0]	口小片 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色～暗赤褐色
141	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[6.4]	口～底小片 胎土:長石粒 色調:灰褐色～褐色
142	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[4.0]	口小片 胎土:長石粒 色調:褐色～橙褐色
143	陶器	瀬戸 緑釉皿	(12.0)	(7.4)	[2.0]	1/6 胎土:精良 色調:淡灰色 釉調:灰色 (灰釉)
144	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[2.4]	口小片 胎土:精良色調:黄灰色 釉調:灰色 (灰釉)
145	陶器	東濃 山茶碗	—	—	[4.5]	口～胴小片 胎土:精良 色調:灰色 備考:自然釉かかる
146	陶器	東播系 鉢	—	—	[4.5]	口小片 胎土:粗雑 色調:灰色 焼成:良好
147	青白磁	梅瓶	—	—	—	胴小片、傾き不詳 胎土:精良 色調:白色 釉調:青灰色～灰色、貫入あり
148	陶器	緑釉陶器 盤?	—	—	—	底小片 胎土:精良 色調:灰色 釉調:緑灰色 備考:外底面回転糸切り
149	須恵器?	転用陶片	長さ 3.5	幅 3.4	厚さ 1.3	甕の胴部片を転用か 胎土:精良 色調:灰色 備考:内外面と割れ口一面に擦痕
150	瓦	軒丸瓦	瓦当径 (16.0)	—	—	胎土:やや粗雑、砂粒・白色粒 色調:灰黒色
151	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代、1093年初鋳
152	鉄製品	釘	長さ 4.7	幅 0.8	厚さ 0.7	完形? 錆化顕著
153	鉄製品	釘	長さ [4.3]	幅 1.2	厚さ 1.0	上部欠損 錆化顕著
154	石製品	砥石 仕上げ砥	長さ [3.5]	幅 3.5	厚さ 0.8	1/2以下 表裏2面を使用 灰白色
155	石製品	紡錘車?	長さ 5.0	幅 [2.5]	厚さ 1.9	1/2 中央部に貫通孔 頁岩製
156	石製品	基石	直径 1.9	厚さ 0.6	—	灰黒色
157	石	火打石	長さ 2.5	幅 1.7	厚さ 1.5	石英 稜角2辺に打撃・摩擦痕あり
2面 遺構14 出土遺物(図20)						
158	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.9	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
159	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.6	略完形 [55]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
160	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.4	1.8	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
161	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	4.8	2.1	完形 64g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
162	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.0	1.5	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
163	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8 ～8.3	5.1	1.8	完形 65g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:歪み顕著
164	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.6	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
165	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
166	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
167	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.8	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
168	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	2.0	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
169	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.0	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
170	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	1.9	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
171	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.0	完形 52g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
172	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
173	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.4	2.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
174	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.5	5/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
175	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.8	1.6	略完形 [50]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
176	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.3	1.8	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き2ヶ所
177	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	1.8	略完形 [51]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部に浅い抉り2ヶ所、打ち欠き1ヶ所
178	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き2ヶ所
179	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.4	1.9	略完形 [52]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
180	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.2	略完形 [49]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
181	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.3	2.1	略完形 [48]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
182	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	5.3	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き2ヶ所
183	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(7.0)	2.9	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
184	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	8.2	3.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:底部中央に径0.7~0.5mmの窪みあり
185	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.5	3.4	3/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
186	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6	8.6	3.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
187	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	7.6	2.9	3/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:内底面円形のナデ痕
188	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	7.2	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:底部貫通孔2ヶ所、未貫通孔が多数
189	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.7	3.5	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
190	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.5	3.8	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
191	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.5	3.4	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
192	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(7.0)	3.2	1/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
193	土器	ロクロ かわらけ・大	—	—	[3.0]	口小片 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:側面に貫通孔
194	陶器	瀬戸 入れ子	7.8	3.6	2.8	胎土:精良 色調:灰白色、体部内面~口唇部外面に自然釉 焼成:良好 備考:八弁の輪花形
195	石製品	砥石 仕上げ砥	長さ 5.5	幅 3.0	厚さ 0.6	残存率不明 表裏2面を使用 灰白色
<b>2面下 出土遺物(図21)</b>						
196	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.4	1.5	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
197	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.4	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
198	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	1.6	1/2 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
199	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
200	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
201	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
202	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	6.0	1.9	完形 62g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
203	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.4)	1.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
204	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.0	1.6	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
205	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	2.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
206	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.5	2.2	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
207	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.3	2.4	完形 50g 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
208	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.7	2.5	完形 53g 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
209	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	6.8	3.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
210	土器	ロクロ かわらけ・大	12.7	8.5	3.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
211	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.0	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
212	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.6)	3.1	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:内外面全体に薄く煤付着
213	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	7.1	3.0	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 備考:口縁部煤付着 備考:外底面ササラ状圧痕
214	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(8.0)	3.2	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
215	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.5	4.5	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
216	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	7.2	3.4	3/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
217	陶器	常滑 片口鉢I類	(28.2)	(11.9)	(9.9)	1/6 胎土:長石 小石含有 粗土 色調:灰色 焼成:良好
218	瓦	丸瓦	長さ 15.0	幅 9.8	厚さ 2.0	1/4以下 凸面タキ目ナゲ消し、側縁ヘラケズリ 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 備考:永福寺I期
219	瓦	丸瓦	長さ —	幅 —	厚さ 1.7	1/8 凸面ヘラナゲ 凹面ヘラナゲ、布目痕不明 胎土:精良 色調:黒灰色
220	瓦	丸瓦	長さ 4.5	幅 4.6	厚さ 0.9	小片 胎土:白色粒 色調:灰色 備考:永福寺I期
221	石製品	硯	長さ [5.1]	幅 6.2	厚さ 1.3	赤間産・頁岩
222	石製品	砥石 中砥	長さ 8.5	幅 6.6	厚さ 2.0	伊予産・流紋岩質粗粒凝灰岩 3面を使用 一部再加工のためか切り取られている
223	漆器	皿	(9.0)	(7.0)	1.0	内外面黒色系漆塗、無文
224	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
225	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
226	木製品	箸	長さ 20.3	幅 0.5	厚さ 0.4	完形
227	木製品	箸	長さ [19.7]	幅 0.5	厚さ 0.3	端部欠損
228	木製品	箸	長さ [18.7]	幅 0.8	厚さ 0.5	端部欠損
229	木製品	用途不明	長さ [10.3]	幅 2.3	厚さ 0.5	側縁部に切り込み2ヶ所 筆置き?
<b>2面下 炭層 出土遺物(図22)</b>						
230	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.2	1.6	完形 48g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
231	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.7)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
232	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.7	1.9	完形 53g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
233	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	1.9	完形 52g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
234	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(5.0)	1.8	2/3 胎土:白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
235	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	1.5	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
236	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
237	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
238	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.5	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
239	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	1.8	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
240	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.0	完形 62g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
241	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.8)	1.6	2/3 胎土:白色針状物質 色調:橙色
242	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.4)	1.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
243	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.6)	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:内底回転ナデ痕顕著
244	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.0	1.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
245	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.1	1.8	4/5 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
246	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
247	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	(7.0)	3.0	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
248	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	7.4	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
249	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(6.8)	3.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
250	瓦器	瓦 丸瓦	長さ [15.8]	幅 [8.0]	厚さ 1.7	1/4以下 凸面ヘラナデ、凹面糸切り痕 胎土:粗雑 色調:黒灰色
251	石製品	瓦 丸瓦	長さ [20.3]	幅 14.2	厚さ 2.0	1/2 凸面縄目タタキ痕ナデ消し、凸面布目痕 胎土:粗雑、砂粒・黒色粒・赤色粒 色調:黒灰色 永福寺・弘安改修期瓦(13世紀後半)か
252	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代、1078年初鑄
253	石製品	砥石 中砥	長さ [8.6]	幅 6.8	厚さ 5.2	残存率不明 産地不明、白色 2面を使用、1面に加工痕が残る
254	漆器	皿	8.2	6.8	0.8	内外面黒色系漆塗り→内面に赤色漆・手描きの籠目+カタバミ?文
255	漆器	椀	—	(8.4)	[3.0]	内外面黒色系漆塗り、無文 口縁部内外面に一部茶褐色の付着物
256	木製品	栓か	直径 2.5	高さ 11.2	—	上端部一ヶ所斜めにケズリ
257	木製品	不明	長さ [8.3]	幅 [5.5]	厚さ 2.6	板目材 表面に浮き彫りの加工あり(文様不明)
<b>3面 面上 出土遺物(図23)</b>						
258	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.5	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
259	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.5	1.5	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
260	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	5.2	1.5	略完形 [45]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
261	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.4	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
262	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.2	1.7	完形 52g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
263	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.6)	(4.1)	[1.9]	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
264	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.6	完形 59g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:遺構3(囲炉裏)板材下
265	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.8	3.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
266	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	8.3	3.5	略完形 [155]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
267	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(7.8)	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色
268	土器	ロクロ かわらけ・大	—	7.0	2.0	口縁部全周打ち欠き 胎土:精良、雲母・白色針状物質 色調:黄橙色~橙色
269	木製品	建具 格子子	長さ (61.0)	幅 2.4	厚さ 1.9	均等の間隔で貫通孔(釘穴) 凸面部の長さ2.6~3.0cm 凹面部の長さ1.7~2.0cm
270	木製品	建具 格子子	長さ (25.7)	幅 2.3	厚さ 1.7	均等の間隔で貫通孔(釘穴) 凸面部の長さ2.6~2.8cm 凹面部の長さ1.8~2.4cm

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
3面下 出土遺物(図24)						
271	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	6.0	1.6	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:褐色 備考:口縁部煤付着
272	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(6.2)	1.7	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
273	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
274	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.2	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
275	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.3	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
276	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.3)	1.8	3/4 胎土:精良・雲母 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
277	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	2.1	完形 54g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
278	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	4.6	1.8	3/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
279	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	6.0	2.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
280	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.1	2.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
281	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.0)	1.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
282	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.4)	(5.4)	3.0	1/2 胎土:雲母 色調:橙色
283	白磁	碗	—	—	[1.9]	口縁部片 素地:精良 色調:白色 釉調:白色 釉層非常に薄く、口唇部無釉 内外面に型押しによる文様有り
284	青磁	蓮弁文碗	—	—	[3.2]	口小片 胎土:精良 色調:灰色 釉調:灰緑色～白色 龍泉窯系
285	青磁	折縁皿	—	—	[5.0]	口～胴小片 胎土:精良 色調:灰色 釉調:灰緑色 備考:内面花卉形のケズリ 龍泉窯系・大宰府Ⅲ-3b類
286	石製品	滑石鍋	—	—	[5.0]	口小片 色調:白黄色 内面に工具痕残る
287	瓦	丸瓦	長さ 6.2	幅 7.5	厚さ 2.0	外縁を研磨で整形→凸面に凹部成形、硯として転用か 永福寺Ⅰ期
288	石製品	砥石 仕上げ砥	長さ [5.4]	幅 3.7	厚さ 1.0	鳴滝産・流紋岩質凝灰岩 黄白色～乳白色
289	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代、1068年初鋳
290	漆器	皿	9.2	6.8	1.1	内外面黒色系漆塗り→内底面に朱漆・手描きの楓文(一葉) 低い輪高台
291	漆器	皿	9.0	7.0	1.2	内外面黒色系漆塗り→内面に手描き・朱漆塗り残しによる放射状分割円形文
292	漆器	皿	9.2	7.2	0.9	内外面黒色系漆塗り→内面に朱漆・手描きの植物文(松)
293	木製品	連歯下駄	長さ 17.3	幅 [7.0]	厚さ 1.2	前歯・側縁部欠損 左前方部に母指による窪み
294	木製品	連歯下駄	長さ 22.2	幅 9.5	厚さ 1.5	前端部一部欠損 右前方部に母指による窪み 裏面3か所に刃物痕
295	木製品	箸	長さ 23.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
296	木製品	箸	長さ 23.3	幅 1.0	厚さ 0.6	完形
297	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
298	木製品	箸	長さ 22.8	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
299	木製品	箸	長さ 22.6	幅 0.9	厚さ 0.6	完形
300	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
301	木製品	箸	長さ 22.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
302	木製品	箸	長さ 21.8	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
303	木製品	箸	長さ 21.7	幅 0.8	厚さ 0.4	完形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
3面下ほか 出土遺物(図25)						
304	木製品	箸	長さ 21.3	幅 0.8	厚さ 0.3	完形
305	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
306	木製品	箸	長さ 21.0	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
307	木製品	箸	長さ 20.9	幅 0.7	厚さ 0.8	完形
308	木製品	箸	長さ 19.9	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
309	木製品	箸	長さ 19.2	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
310	木製品	箸	長さ 19.4	幅 0.5	厚さ 0.4	完形
311	木製品	箸	長さ 21.5	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
312	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
313	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
314	木製品	箸	長さ 18.6	幅 0.7	厚さ 0.5	端部欠損
315	木製品	用途不明	長さ 16.5	幅 1.8	厚さ 0.7	完形?
316	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.8	2/3 胎土:雲母 色調:黄橙色
317	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.5)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
318	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.0	1.6	完形 44g 胎土:雲母 色調:橙色
319	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.8)	1.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
320	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	1.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
321	土器	ロクロ かわらけ・中	10.9	6.8	3.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
322	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.4)	3.0	1/3 胎土:白色針状物質 色調:濃橙色
323	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.2)	(5.6)	3.2	1/3 胎土:雲母 色調:薄橙色
324	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.4	3.2	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
325	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	(6.8)	3.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
326	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.2)	(6.4)	2.8	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
327	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	[10.0]	口～底小片 胎土:長石粒 色調:灰褐色 6b型式 (1275～1300頃)
328	陶器	亀山 甕	-	-	[15.9]	胴小片を再利用(硯か?) 胎土:粗雑、白色粒 色調:灰褐色 外面に格子目タタキ痕 割れ口に数か所の擦痕
329	青磁	蓮弁文碗	-	-	[3.0]	口小片 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:緑灰色 龍泉窯系・大宰府碗Ⅱ-b類
330	青磁	蓮弁文碗	-	(4.2)	[2.0]	体～底小片 胎土:精良、黒色微粒、気泡 色調:灰白色 釉調:青白色～灰白色、貫入 龍泉窯系・大宰府碗Ⅱ類
331	銅製品	銭	直径 2.0	孔径 0.5	厚さ 0.2	備考:詳細不明 腐蝕が進み錆が厚く付着
332	漆器	皿	-	6.0	[0.7]	手描き 文様不明 内外面全体に黒色系漆 内底面に朱色漆で文様あり 高台無し
333	木製品	折敷	長さ 30.5	幅 [20.4]	厚さ 0.5	2/3 柾目材
334	木製品	草履芯	長さ (22.5)	幅 (5.1)	厚さ 0.3	1/2弱 板目材 繊維圧痕
4a面 遺構15 出土遺物(図26)						
335	土器	ロクロ かわらけ	4.2	3.5	1.0	完形 13g 内折れ 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
336	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.5)	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
337	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	1.9	3/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
338	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	8.0	3.4	3/4 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
339	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	8.0	3.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
340	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.0	3.4	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
341	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.5	3.0	略完形 [163]g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
342	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.5)	(7.9)	2.8	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
343	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.0)	3.2	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
344	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.5)	3.5	3/5 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙白色
345	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	6.3	3.4	3/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
346	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(7.9)	3.3	1/2 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
347	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(7.0)	3.5	3/4 胎土:精良・雲母 色調:黄橙色
348	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.4)	3.2	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
349	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.7	3.6	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
350	木製品	折敷	長さ 29.5	幅 [23.5]	厚さ 0.6	3/4 榎目材 樹皮紐で結合 上下各5ヶ所に貫通孔 表裏ともに刃物痕多数
351	木製品	草履芯	長さ 23.8	幅 [11.0]	厚さ 0.3	3/4 板目材
352	木製品	草履芯	長さ 24.4	幅 5.8	厚さ 0.3	1/2弱 板目材 表面に曲線の刃物痕
353	木製品	草履芯	長さ (13.0)	幅 5.0	厚さ 0.3	後端部欠損
354	木製品	草履芯	長さ (13.8)	幅 5.0	厚さ 0.3	前端部欠損
355	木製品	工具・篋	長さ (19.8)	幅 1.7	厚さ 0.8	端部欠損 篋面片面のみ削り尖らせている
356	木製品	用途不明	長さ (13.8)	幅 2.6	厚さ 0.3	端部に漆付着 側面切り込み加工 筆置き?
<b>4a面 遺構15・4b面 遺構15b 出土遺物(図27)</b>						
357	木製品	箸	長さ 24.2	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
358	木製品	箸	長さ 23.7	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
359	木製品	箸	長さ 24.0	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
360	木製品	箸	長さ 23.7	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
361	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.4	完形
362	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
363	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
364	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.9	厚さ 0.6	完形
365	木製品	箸	長さ 22.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
366	木製品	箸	長さ 21.3	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
367	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
368	木製品	箸	長さ 20.7	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
369	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
370	木製品	用途不明 棒状	長さ 25.2	幅 0.9	厚さ 0.7	完形?

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
371	木製品	用途不明 棒状	長さ 18.0	幅 0.8	厚さ 0.7	完形?
372	木製品	用途不明 棒状	長さ 13.8	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?
373	木製品	用途不明 棒状	長さ 14.4	幅 0.9	厚さ 0.5	完形?
374	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
375	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.8	1.7	4/5 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
376	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.7)	7.6	3.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
377	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.7	3.1	3/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色 備考:内面煤付着
378	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.1	3.8	3/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁～内底面煤付着
379	木製品	箸	長さ 22.1	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
380	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
381	木製品	箸	長さ 19.9	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
382	木製品	用途不明 棒状	長さ 19.2	幅 0.8	厚さ 0.5	
383	木製品	用途不明 棒状	長さ 15.8	幅 0.6	厚さ 0.4	
384	木製品	用途不明 棒状	長さ 15.2	幅 0.6	厚さ 0.4	
385	木製品	容器 取手	長さ 10.7	幅 1.4	厚さ 1.1	
4面下・4b面下 出土遺物①(図28)						
386	木製品	草履芯	長さ 23.6	幅 10.0	厚さ 0.3	完形 編み藁の痕跡顕著
387	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.6)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
388	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.1)	1.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色
389	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.4)	1.4	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色～黒褐色 備考:内面・側面二次焼成を受けている
390	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
391	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.1)	1.6	1/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
392	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.8)	1.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
393	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	8.3	3.4	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
394	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.6)	3.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
395	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(9.0)	3.6	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
396	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.0)	3.2	1/3 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色～灰褐色 備考:外底面煤付着
397	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 胎土:長石粒 色調:褐色～灰褐色
398	陶器	尾張型 山茶碗	(15.0)	7.2	5.9	1/3 胎土:長石粒 色調:灰色～灰褐色 常滑5型式 (1220～1250頃)
399	陶器	常滑 片口鉢I類	—	(12.2)	[10.1]	底1/3 胎土:長石粒 色調:灰色 5型式 (1220～1250頃) (尾張・山茶碗系)
400	陶器	常滑 片口鉢I類	—	(14.6)	[3.8]	底1/8 胎土:小石粒 黒色粒 白色粒 長石 石英 色調:灰色 5型式 (1220～1250頃) か (尾張・山茶碗系)
401	青磁	青磁 蓮弁文碗	—	—	[4.8]	口小片 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:灰緑色、貫入 龍泉窯系・大宰府碗II-b類
402	陶器	黄釉陶器 盤	—	—	[3.5]	口小片 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 釉調:黄緑色
403	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	祥符通寶か? 中国北宋代、1009年初鑄
404	鉄製品	刀子	長さ [15.0]	最大幅 2.0	厚さ 0.4	茎欠失



番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
405	鉄製品	釘	長さ 8.7	幅 0.5	厚さ 0.5	完形?
406	骨製品	筭	長さ 2.4	幅 2.4	厚さ 0.1	完形
407	漆器	椀	(12.0)	-	[3.5]	口～体小片 内外面黒色系漆塗り→内外面とも赤色漆・手描きで楓文?
408	漆器	椀	-	(7.4)	[2.7]	体～底1/3 内外面黒色系漆塗り、無文
409	漆器	盆	長さ [24.8]	幅 [3.4]	高さ 1.0	1/8以下 外底面以外を黒色系漆塗り→内面に赤色漆・スタンプで亀甲花卉文1ヶ所
410	木製品	折敷	長さ 22.2	幅 (6.6)	厚さ 0.2	1/3以下 二側辺残存 柾目材
411	木製品	折敷	長さ 22.0	幅 (7.6)	厚さ 0.2	1/3以下 二側辺残存 柾目材
4面下・4b面下 出土遺物②(図29)						
412	木製品	折敷	長さ 22.5	幅 (2.9)	厚さ 0.3	1/10 二側辺残存 柾目材
413	木製品	折敷	長さ 20.2	幅 (5.4)	厚さ 0.3	1/4 二側辺残存 柾目材
414	木製品	折敷	長さ (18.4)	幅 6.0	厚さ 0.2	1/3以下 二側辺残存 柾目材
415	木製品	箸	長さ 26.0	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
416	木製品	箸	長さ 24.7	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
417	木製品	箸	長さ 24.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
418	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
419	木製品	箸	長さ 23.5	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
420	木製品	箸	長さ 23.1	幅 0.9	厚さ 0.6	完形
421	木製品	箸	長さ 22.5	幅 0.7	厚さ 0.3	完形
422	木製品	箸	長さ 22.0	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
423	木製品	箸	長さ 22.1	幅 0.9	厚さ 0.4	完形
424	木製品	箸	長さ 21.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
425	木製品	箸	長さ 21.5	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
426	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
427	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
428	木製品	箸	長さ 20.2	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
429	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
430	木製品	箸	長さ 19.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
431	木製品	箸	長さ 19.5	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
432	木製品	箸	長さ 18.0	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
433	木製品	箸	長さ [22.3]	幅 0.8	厚さ 0.5	一端部欠損
434	木製品	箸	長さ [21.2]	幅 0.6	厚さ 0.6	一端部欠損
435	木製品	箸	長さ [20.8]	幅 0.6	厚さ 0.5	一端部欠損
436	木製品	箸	長さ [19.2]	幅 0.6	厚さ 0.5	一端部欠損

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
4面下・4b面下 出土遺物③(図30)						
437	木製品	曲物	—	12.2	[3.0]	底板完存、側板一部残存 厚さ:底板0.7、側板0.3cm 底板内底面に圧迫痕・焦げ痕
439	木製品	栓か	直径 1.5	高さ 2.7	—	完形? 上部側縁に粗いケズリによる面取り加工
438	木製品	栓か	直径 1.7	高さ 13.5	—	完形? 下端部に焦げ痕
440	木製品	草履芯	長さ [21.0]	幅 11.0	厚さ 0.3	4/5 板目材
441	木製品	草履芯	長さ 24.2	幅 5.4	厚さ 0.3	1/2 板目材
442	木製品	草履芯	長さ 20.2	幅 4.4	厚さ 0.3	1/2 板目材
443	木製品	草履芯	長さ 20.2	幅 4.8	厚さ 0.4	1/2 板目材 前端部と同じ大きさの孔が2ヶ所
444	木製品	刀子鞘	長さ 21.7	幅 3.0	厚さ 1.4	略完形 呑入式合わせ構造 合わせ部半円形にケズリ込み 刀身部推定長19.5cm
445	木製品	刷毛柄?	長さ 16.5	幅 1.2	厚さ 0.6	完形? 柁目材 下端部付近を縦に6cmほど裂き、両側縁に切り込み
446	木製品	用途不明	長軸長 7.5	孔径 0.3	厚さ 1.4	完形? 板目材 八角形に成形、上面外縁を面取り 中央に貫通孔
447	木製品	用途不明	長さ [9.1]	幅 5.3	厚さ 0.6	一端部欠損 板目材 上部隅落とし、直径0.3cmの貫通孔
448	木製品	用途不明	長さ 4.3	幅 4.1	厚さ 2.7	完形(加工途中)? 片面に刃物痕
449	木製品	用途不明	長さ 21.0	幅 1.8	厚さ 1.0	完形? 一端を細く加工
450	木製品	用途不明	長さ 7.7	幅 11.8	厚さ 0.8	完形? 板目材 表裏面に刀子傷
451	木製品	用途不明 棒状	長さ 13.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形?
452	木製品	用途不明	長さ (10.9)	幅 2.0	厚さ 0.6	一端欠損 板目材 刀子形に整形
4c面 遺構17・4c面下 出土遺物(図31)						
453	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.0)	1.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
454	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	5.3	1.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色～褐色 備考:内底面二次焼成
455	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(7.0)	4.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
456	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	(7.8)	3.2	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
457	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	7.8	3.4	4/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色
458	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 胎土:長石粒 色調:褐色 外面に簾状格子文のスタンプ
459	木製品	箸	長さ 23.4	幅 0.9	厚さ 0.5	完形
460	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
461	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
462	木製品	箸	長さ 21.0	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
463	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
464	木製品	箸	長さ [28.3]	幅 0.7	厚さ 0.5	一端欠損
465	木製品	箸	長さ [20.2]	幅 0.8	厚さ 0.7	一端欠損
466	木製品	機織部材?	長さ (23.5)	幅 2.4	厚さ 2.2	両端部欠損
467	木製品	用途不明	長さ 22.4	幅 1.5	厚さ 0.7	完形? 板目材 先端部へら状に整形
468	木製品	用途不明	長さ (27.0)	幅 2.6	厚さ 0.7	一端欠損 板目材 先端部へら状に整形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
4c面下 出土遺物(図32)						
469	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.5)	1.6	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色 備考:口縁部煤付着
470	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.8)	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
471	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	(5.8)	3.6	2/3 胎土:精良・白色針状物質 色調:黄橙色
472	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(5.8)	3.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
473	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	8.0	3.6	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:濃橙色
474	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	8.4	2.8	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:濃橙色
475	陶器	常滑 片口鉢I類	(29.0)	—	[8.1]	口〜体1/6 胎土:長石粒 色調:灰褐色 4型式 (1190~1220頃) (尾張・山茶碗系)
476	木製品	折敷	長さ 22.5	幅 [7.3]	厚さ 0.2	1/3 二側辺残存 板目材
477	木製品	箸	長さ 25.9	幅 0.9	厚さ 0.4	完形
478	木製品	箸	長さ 24.5	幅 0.7	厚さ 0.51	完形
479	木製品	箸	長さ 24.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
480	木製品	箸	長さ 23.7	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
481	木製品	箸	長さ 23.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
482	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
483	木製品	草履芯	長さ 22.8	幅 (8.0)	厚さ 0.3	4/5 板目材
484	木製品	用途不明 棒状	長さ 27.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?
485	木製品	用途不明 棒状	長さ 26.8	幅 0.8	厚さ 0.6	完形?
486	木製品	用途不明 棒状	長さ 23.9	幅 0.8	厚さ 0.5	完形?
487	木製品	用途不明 棒状	長さ 20.9	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?
488	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	(6.0)	3.6	1/2弱 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
489	木製品	折敷	長さ 22.6	幅 22.3	厚さ 0.3	縁の枠板一部欠損 柁目材の底板各辺中央に貫通孔、うち1ヶ所に樹皮紐が残存
490	木製品	折敷	長さ 23.7	幅 [8.7]	厚さ 0.2	1/3以下 柁目材
491	木製品	折敷	長さ 21.5	幅 [9.7]	厚さ 0.2	1/2弱 柁目材
492	木製品	箸	長さ 23.2	幅 0.7	厚さ 0.4	完形
5面下 出土遺物①(図33)						
493	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.4)	1.4	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
494	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.7	1.8	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
495	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(5.2)	1.7	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色 備考:内外側面にはっきりと数条の稜線あり
496	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.6	1.8	完形 46g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
497	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	6.7	1.9	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色
498	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.8)	3.0	1/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
499	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.9)	(8.0)	2.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:外側面〜底部煤付着
500	土器	手づくね かわらけ・大	12.4	—	3.2	3/4 手づくね大 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
501	土器	ロクロ かわらけ・大	直径 7.3	厚さ 1.0	—	底部を円板に再加工(用途不明) 色調:橙色 備考:外底面に回転糸切り痕→摩擦痕+中央に非貫通孔

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
502	陶器	常滑甕	—	—	—	口小片 胎土:長石粒 色調:褐灰色 6型式 (1250~1300頃)
503	陶器	常滑甕	—	—	—	胴小片 胎土:長石粒 色調:褐色~灰緑色 外面に簾状格子文のスタンプ
504	陶器	常滑片口鉢Ⅰ類	(28.8)	(13.7)	[13.7]	1/3 胎土:長石粒 色調:灰色 備考:内底面に重ね焼き痕 5~6a型式 (1220~1275頃)
505	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	[4.3]	口小片 胎土:長石粒 色調:黒灰色 6b型式 (1250~1275頃)
506	陶器	瀬戸入れ子	(9.2)	(4.4)	3.8	1/3 外底面回転糸切り痕 胎土:黒色粒・白色粒 色調:褐色
507	青白磁	合子蓋	(7.2)	—	1.6	1/3 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:青白色 天井部に鳳凰文レリーフ 備考:外面一部に煤付着 天井部内面に一部釉付着
508	青白磁	梅瓶	—	(10.4)	[5.7]	底小片 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:青緑色
509	青磁	蓮弁文碗	—	(4.6)	[4.9]	体~底1/3 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:灰緑色、貫入 龍泉窯系・大宰府碗Ⅲ-c類
510	陶器	施釉陶器盤	—	—	[3.0]	体~底小片胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 釉調:黄褐色 (内全面~口縁側外面) 内面に鉄絵 大宰府盤Ⅰ-2b類
511	陶器	褐釉陶器壺	—	(8.2)	[9.8]	胴下部~底完存 胎土:精良 釉調:暗褐色 丸底状 (高台剥離か) 大宰府分類に例なし

5面下 出土遺物②(図34)

512	漆器	皿	(10.4)	(7.0)	1.2	1/3 内外面黒色系漆塗り、無文
513	漆器	皿	-	(7.0)	[0.6]	1/3 内外面黒色系漆塗り、無文
514	木製品	折敷	長さ 22.4	幅 [9.4]	厚さ 0.2	1/2弱 柾目材
515	木製品	箸	長さ 24.9	幅 0.9	厚さ 0.4	完形
516	木製品	箸	長さ 24.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
517	木製品	箸	長さ 24.4	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
518	木製品	箸	長さ 24.2	幅0.9	厚さ 0.6	完形
519	木製品	箸	長さ 24.2	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
520	木製品	箸	長さ 24.0	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
521	木製品	箸	長さ 23.2	幅 0.7	厚さ 0.7	完形
522	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
523	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.9	厚さ 0.3	完形
524	木製品	箸	長さ 22.8	幅 22.8	厚さ 0.5	完形
525	木製品	箸	長さ 22.8	幅 0.6	厚さ 0.7	完形
526	木製品	箸	長さ 22.5	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
527	木製品	箸	長さ 22.5	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
528	木製品	箸	長さ 22.0	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
529	木製品	箸	長さ 22.2	幅 0.9	厚さ 0.7	完形
530	木製品	箸	長さ 21.9	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
531	木製品	箸	長さ 21.9	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
532	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
533	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
534	木製品	箸	長さ 21.1	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
535	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.6	厚さ 0.4	完形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
536	木製品	箸	長さ 20.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
537	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
538	木製品	箸	長さ 19.5	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
539	木製品	箸	長さ 19.1	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
540	木製品	蓋	直径 4.8	高さ 1.4	—	略完形 板目材 全面黒色漆塗りか
541	木製品	手押木	長さ 13.5	幅 3.8	高さ 2.2	略完形 柾目材
5面下 出土遺物③(図35)						
542	木製品	草履芯	長さ 24.4	幅 10.5	厚さ 0.3	完形 板目材
543	木製品	草履芯	長さ 23.4	幅 10.3	厚さ 0.4	略完形 板目材
544	木製品	用途不明	長さ [20.4]	幅 2.1	厚さ 7.6	一端欠損 板目材 刀子形に整形
545	木製品	用途不明	長さ [20.2]	幅 1.3	厚さ 0.6	一端欠損 板目材 ヘラ状に整形
546	木製品	用途不明	長さ [16.0]	幅 1.9	厚さ 1.0	一端欠損
547	木製品	用途不明	長さ [14.2]	幅 1.1	厚さ 0.5	一端欠損 板目材 端部付近に貫通孔
548	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
549	木製品	用途不明 棒状	長さ 19.0	幅 0.9	厚さ 0.5	完形?
550	木製品	用途不明 棒状	長さ 18.5	幅 0.6	厚さ 0.7	完形?
551	木製品	用途不明 棒状	長さ 18.1	幅 0.8	厚さ 0.5	完形?
6面下～10面・10面 遺構11 出土遺物(図36)						
552	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	4.9	1.5	1/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
553	土器	ロクロ かわらけ・小	(10.1)	(6.0)	(1.6)	1/6 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
554	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	7.1	1.9	完形 64g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
555	陶器	施釉陶器 盤	—	—	[3.1]	口小片 備考:二次焼成 大宰府盤 I-2類か
556	鉄製品	刀子	長さ 19.7	幅 1.2	厚さ 0.25	刃長12.0cm 重量27g 備考:茎の尾部に目釘穴
557	石製品	砥石	長さ 7.8	幅 6.0	厚さ 3.4	完形 表裏・側面の4面を使用 軽石製 灰褐色
558	木製品	用途不明 円板状	直径 (7.0)	厚さ 1.0	—	4/5 板目材 中央に貫通孔
559	陶器	施釉陶器 盤	—	—	[1.8]	底小片 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 内全面・体部外面に施釉、外面体部下端～ 底部は無釉 内面に鉄絵 備考:二次焼成で釉が変色 大宰府 I-2b類
560	土器	手づくね かわらけ・大	(13.5)	—	3.4	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
561	土器	手づくね かわらけ・大	(13.6)	—	[2.7]	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
562	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
563	木製品	箸	長さ 21.5	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
564	木製品	不明	長さ 18.0	最大幅 2.5	厚さ 0.5	完形? 板目材
565	土器	ロクロ かわらけ・小	(10.6)	(7.8)	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色～黄橙色
566	土器	手づくね かわらけ・小	—	—	[1.5]	口小片 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
567	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	7.0	3.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
568	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.6	4.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
569	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.2	3.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
570	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	景祐元寶 中国北宋代、1034年

【図 1 に番号を掲載した調査地点と所収文献】

◆大倉幕府跡 (No.253)

1. 雪ノ下四丁目 569 番 1:『大倉幕府周辺遺跡群』1990 年 (馬淵和雄 1990)
2. 雪ノ下三丁目 707 番 1:『神奈川県埋蔵文化財調査報告 34』1992 年
3. 雪ノ下三丁目 651 番 8:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15 (第 2 分冊)』1999 年
4. 雪ノ下三丁目 618 番 4:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 1 分冊)』2002 年 (汐見一夫・山上玉恵 2002)
5. 雪ノ下三丁目 701 番 14:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 1 分冊)』2005 年
6. 雪ノ下三丁目 701 番 3:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 1 分冊)』2005 年 (馬淵和雄ほか 2005)
7. 雪ノ下三丁目 701 番 1:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 1 分冊)』2005 年
8. 雪ノ下三丁目 704 番 3 外:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27 (第 2 分冊)』2011 年 (福田 誠 2011)
9. 雪ノ下三丁目 637 番 4:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27 (第 2 分冊)』2011 年 (熊谷 満 2011)
10. 雪ノ下三丁目 629 番 1:『大倉幕府跡発掘調査報告書』2011 年
11. 雪ノ下三丁目 637 番 6 外:2007 年度調査・未報告
12. 雪ノ下三丁目 635 番 2 外:『大倉幕府跡発掘調査報告書』2012 年
13. 雪ノ下三丁目 693 番 8:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2015 年 (本地点)
14. 雪ノ下三丁目 648 番 3:2009 年度調査・未報告
15. 雪ノ下三丁目 694 番 18:『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書』2013 年 (滝澤晶子・宮田 眞 2013a)
16. 雪ノ下三丁目 693 番 1:『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書』2013 年 (滝澤晶子・宮田 眞 2013b)
17. 雪ノ下三丁目 648 番 8:2010 年度調査・未報告
18. 雪ノ下三丁目 618 番 8・653 番 9:2013 年度調査・未報告
19. 雪ノ下三丁目 628 番 1:2014 年度調査・未報告

◆大倉幕府周辺遺跡 (No.49)

- a. 雪ノ下四丁目 620 番 5:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 (第 2 分冊)』1998 年 (馬淵和雄 1998)  
『大倉幕府周辺遺跡群』1999 年 (馬淵和雄 1999)
- b. 雪ノ下三丁目 606 番 1:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9 (第 3 分冊)』1993 年 (菊川英政 1993)
- c. 二階堂字荏柄 58 番 4:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 1 分冊)』2002 年 (原 廣志・須佐直子 2002)

【引用・参考文献】

- 太田静六 1992『寝殿造りの研究』吉川弘文館
- 馬淵和雄 1994「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって」『中世の風景を読む—2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』網野善彦・石井 進編 新人物往来社
- 馬淵和雄 2004「中世都市鎌倉成立前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』五味文彦・馬淵和雄編 高志書院
- 宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
- 高橋慎一郎 2005『武家の古都、鎌倉』山川出版社
- 永田史子 2014「考古学からみた鎌倉研究の現状と課題」『鎌倉研究の未来』中世都市研究会編 山川出版社



1. 現地調査前 (南西から)



2. I区表土掘削状況 (北西から)



3. I区1面検出状況 (北から)



4. I区1面遺構1 (北西から)



5. I区1面遺構1下層遺物出土状況 (北東から)



6. I区1面遺構1土層断面 (東から)

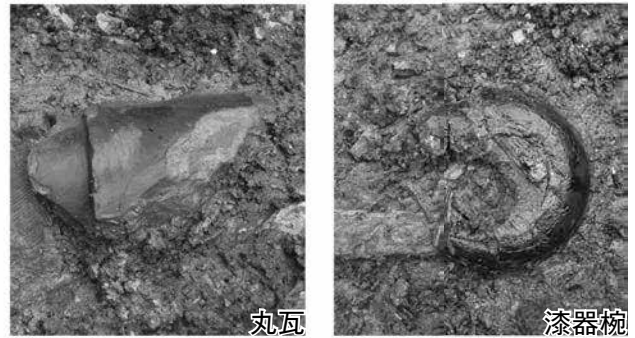
図版2



1. I区3面上炭層検出状況（北から）



2. I区3面上炭層堆積状況（北東から）



丸瓦

漆器椀

3. I区3面上炭層内遺物出土状況



4. I区3面全景（北から）



5. I区3面遺構3（囲炉裏：東から）



6. I区3面遺構3上炭層堆積状況（東から）





1. I区3面上 格子子出土状況 (南西から)



2. I区3面上 格子子出土状況 (板材除去後・西から)



3. I区3面 トレンチ全景 (下層部分・北から)



草履芯

4. I区3面下 遺物出土状況



草履芯



烏帽子

5. I区3面下 遺物出土状況



6. I区4a面 トレンチ全景 (北から)

図版4



1. I区4a面下遺物出土状況(東から)



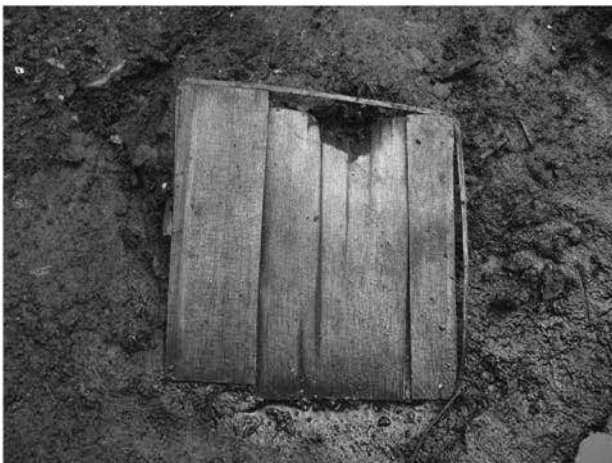
2. I区4a面下かわらけ・ハエのサナギ出土状況



3. I区5面トレンチ全景(北から)



5. I区6a面トレンチ全景(北から)



4. I区5面上折敷出土状況



6. I区6a面上草履芯出土状況





1. I区6b面トレンチ全景(北から)



2. I区7面トレンチ全景(北から)



3. I区7面遺構10礎板検出状況(南から)



4. I区10面トレンチ全景(遺構11プラン・北から)



5. I区10面遺構11未完掘状況(東から)



6. I区10面遺構11土層断面(西から)

図版6



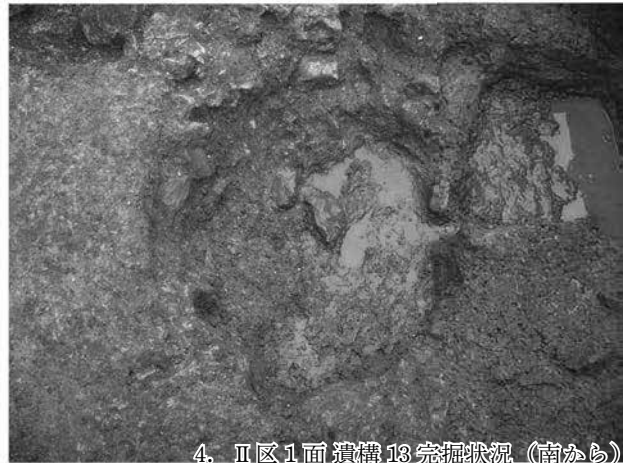
1. II区1面検出状況(北から)



2. II区1・2面遺物出土状況(北から)



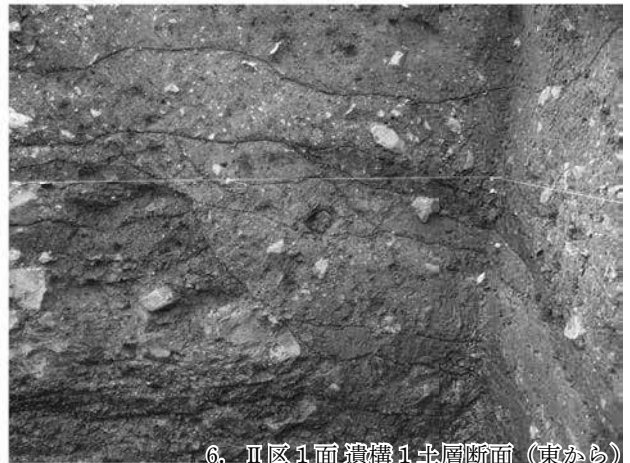
3. II区1面遺構13内かわらけ出土状況(東から)



4. II区1面遺構13完掘状況(南から)



5. II区1面全景(北から)



6. II区1面遺構1土層断面(東から)



7. II区1面遺構1(北から)

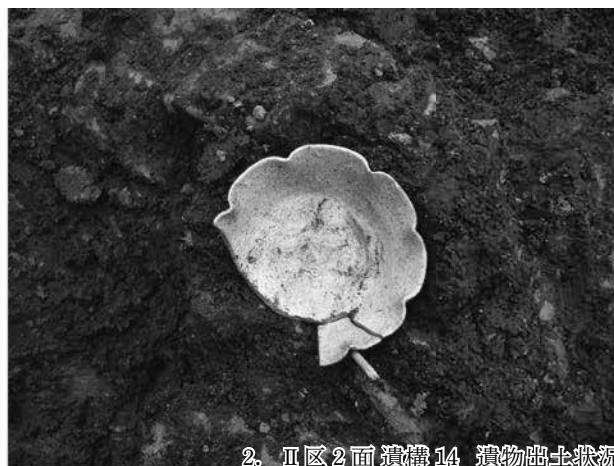


8. II区2面遺構14遺物出土状況(西から)





1. II区2面遺構14土層断面(東から)



2. II区2面遺構14遺物出土状況



3. II区3面上炭層検出状況(北から)



4. II区4a面トレンチ全景(東から)



5. II区4a面遺構15(北西から)



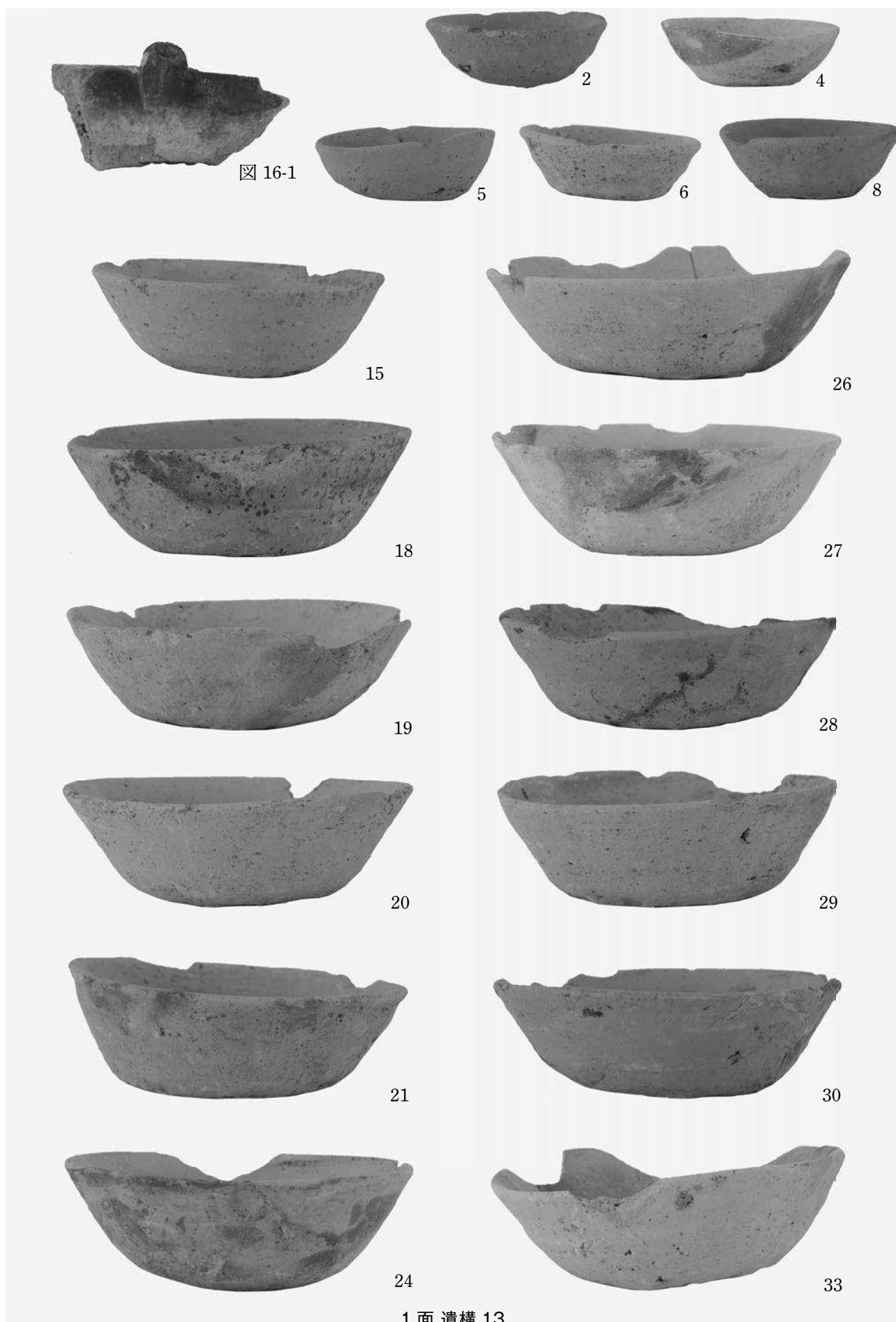
6. II区4a面遺構15土層断面(東から)

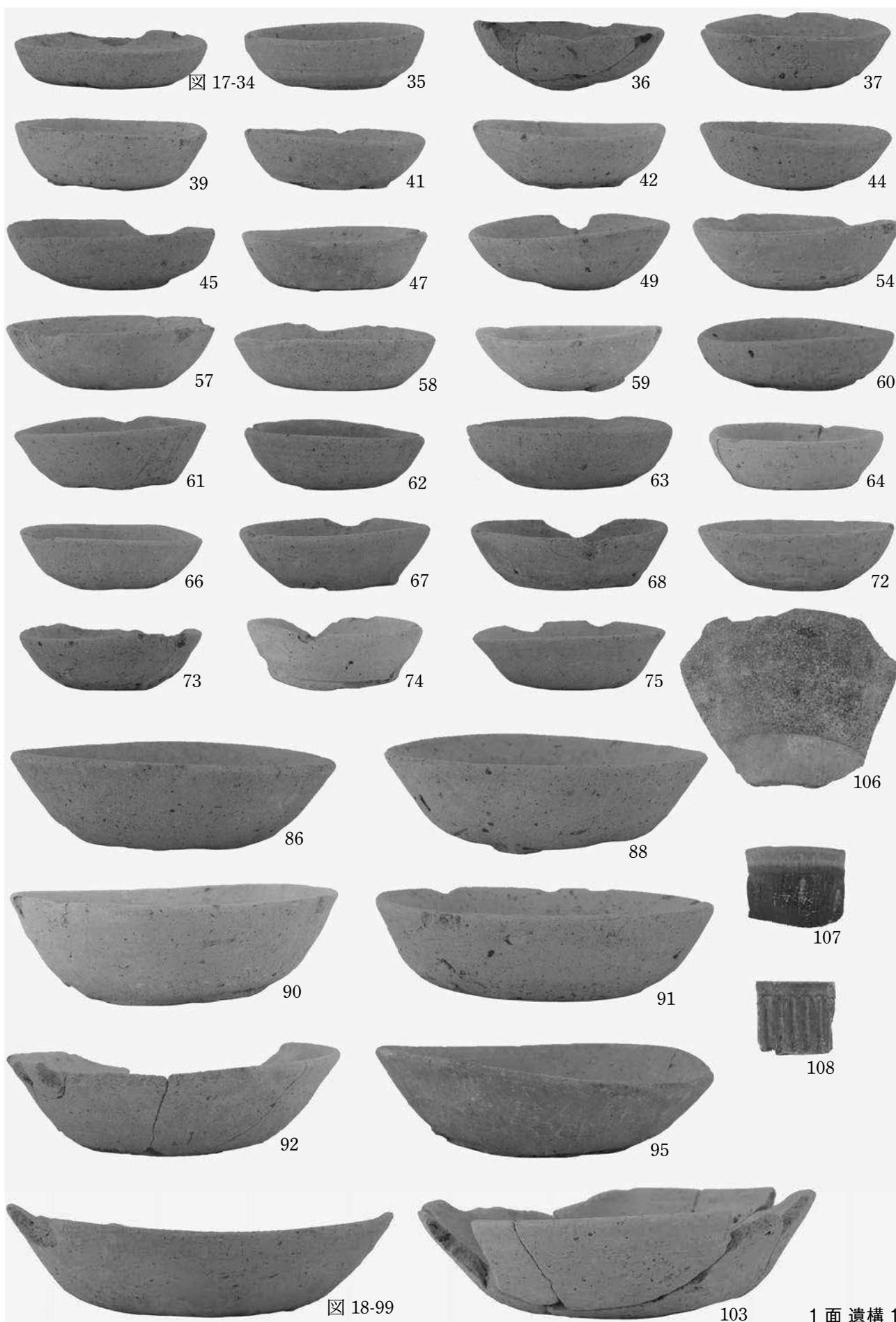


7. II区4b面トレンチ全景(東から)

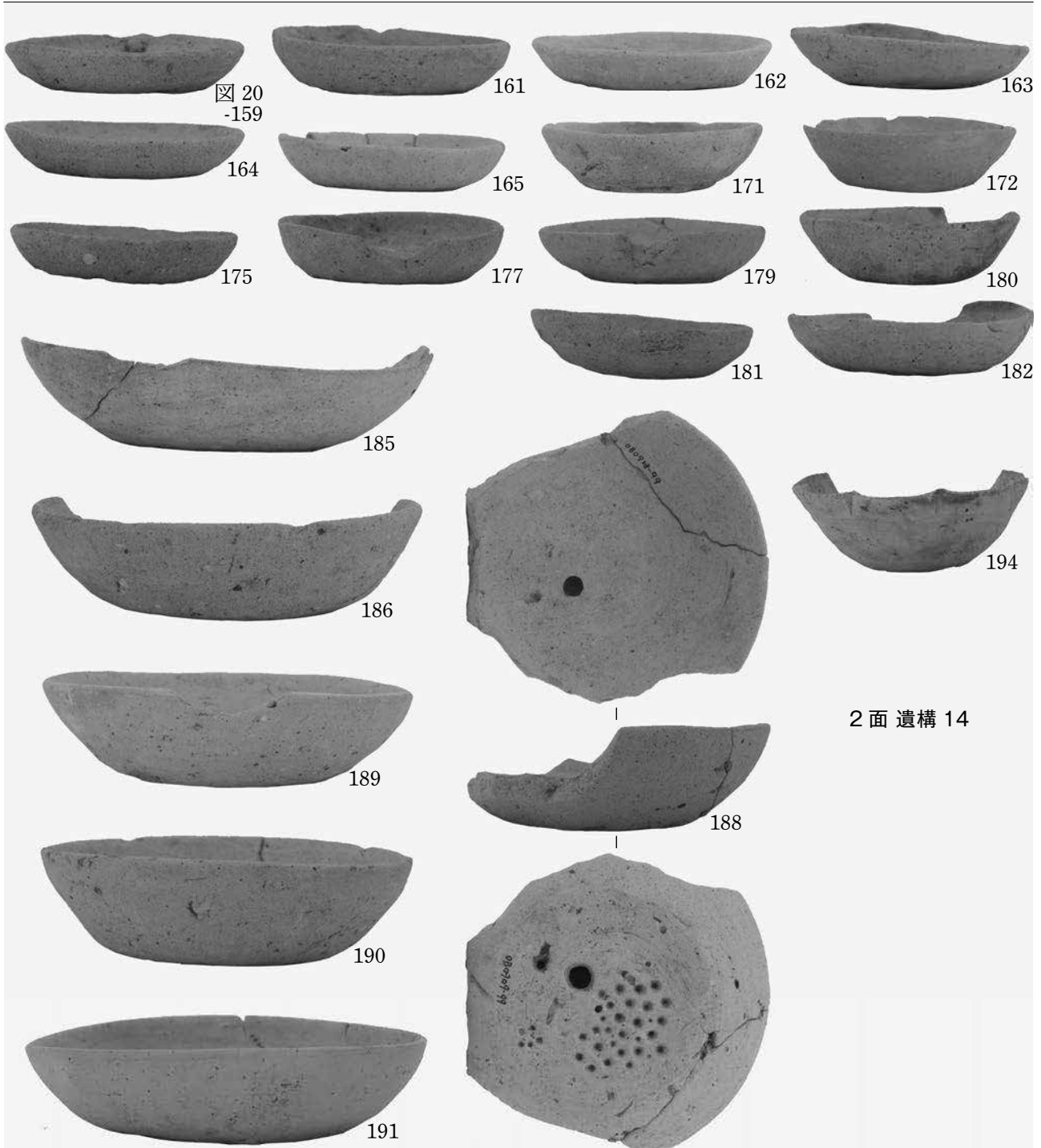
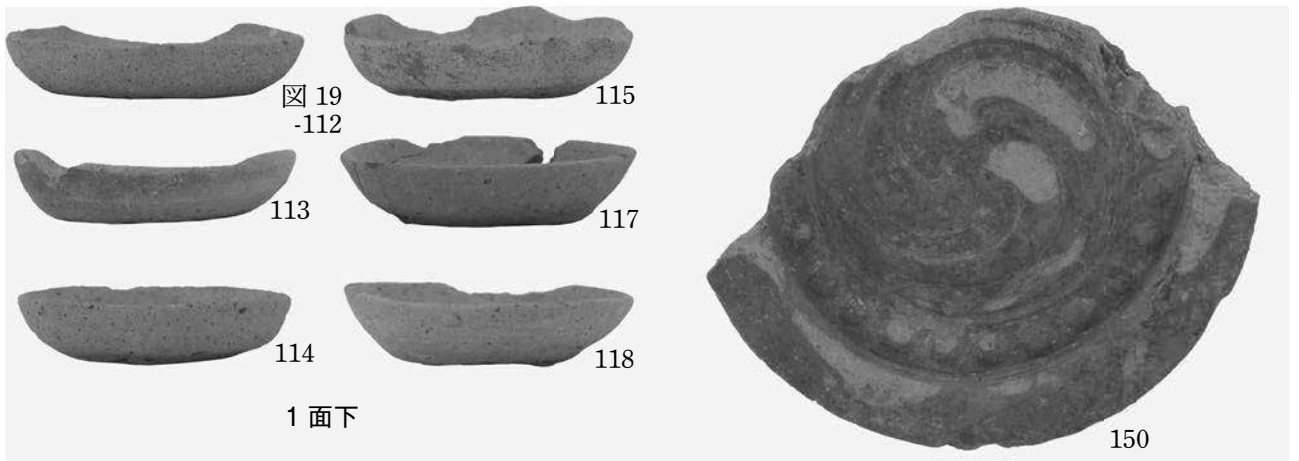


8. II区5面トレンチ全景(東から)

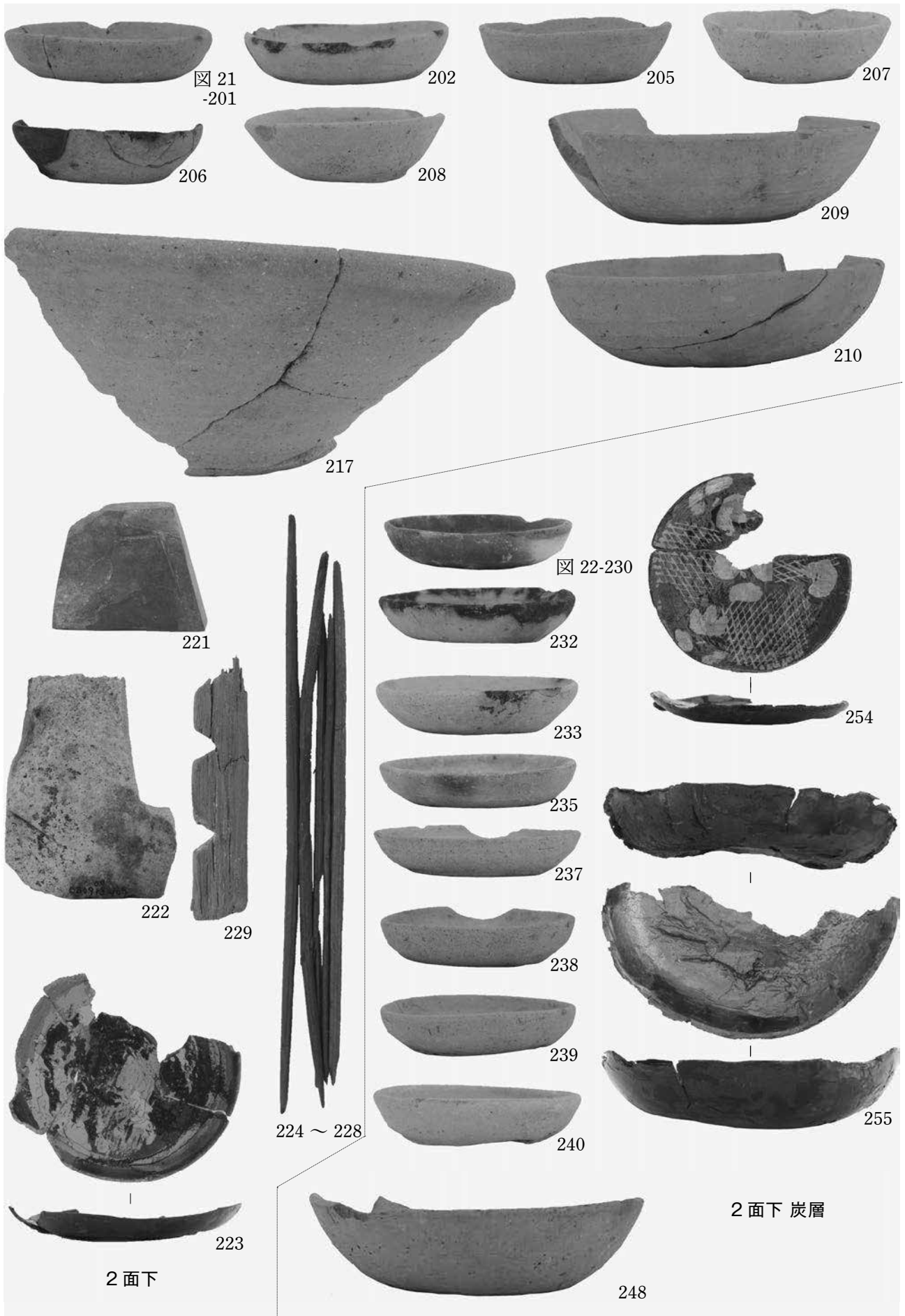




図版 10







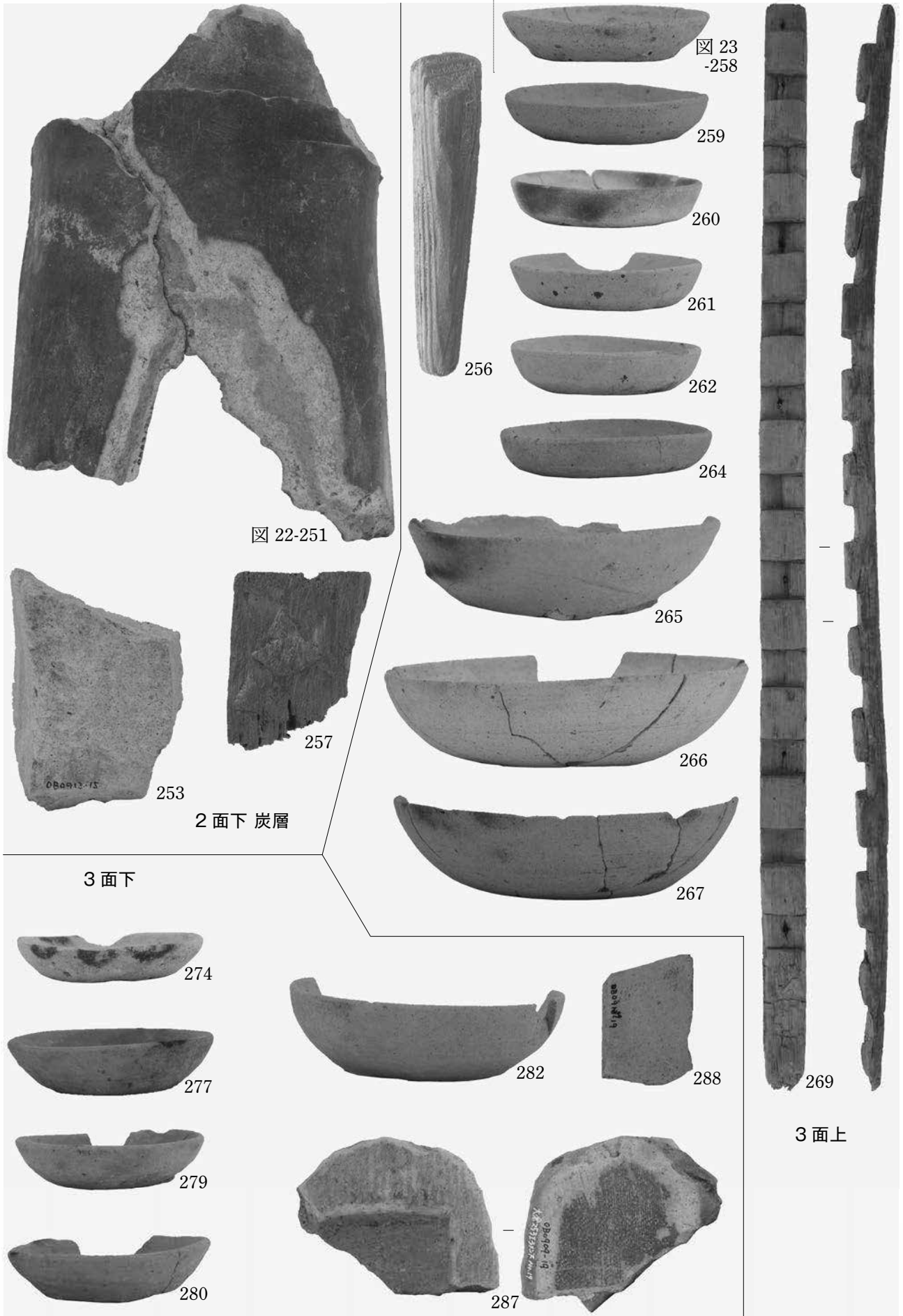


図 22-251

図 23-258

2 面下 炭層

3 面下

3 面上



图 24-290

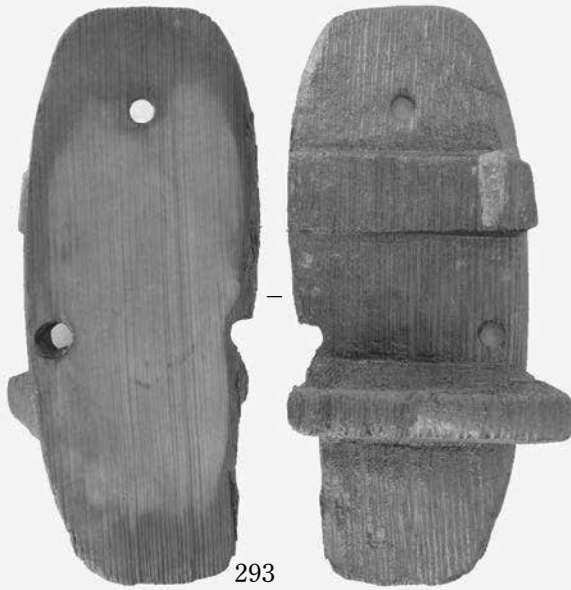


291

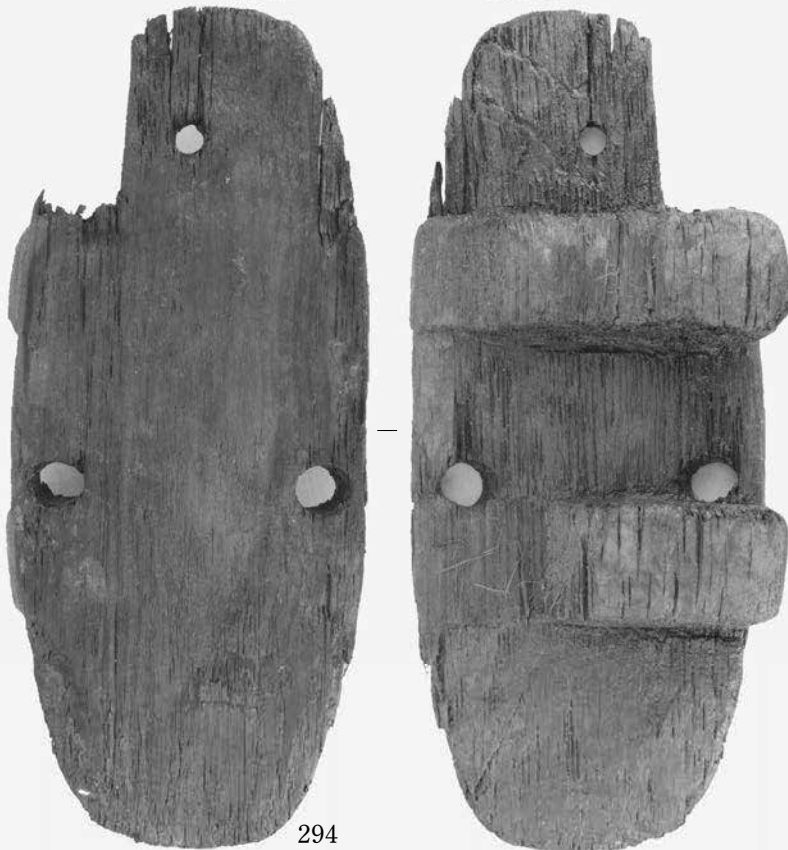


292

3 面下



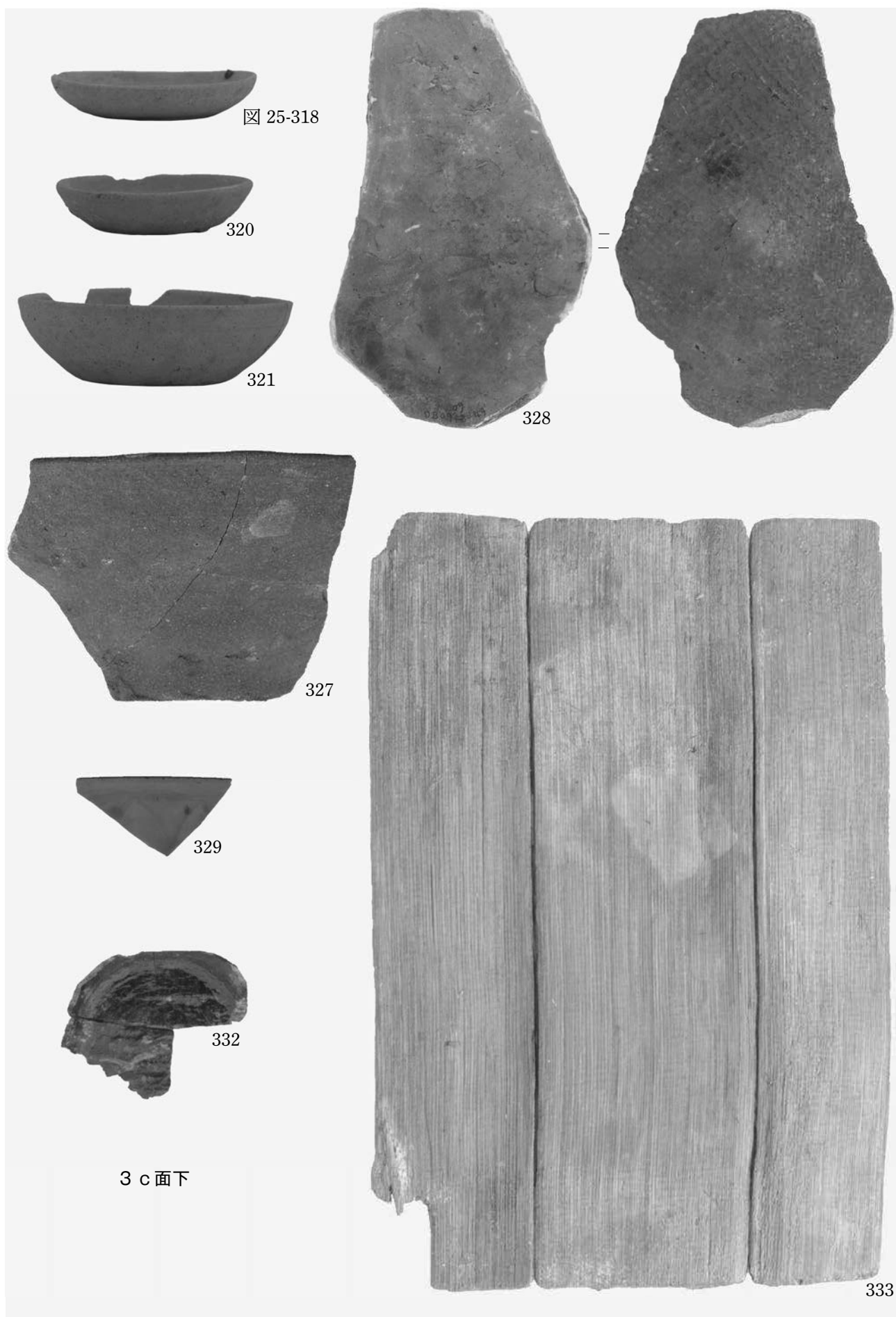
293

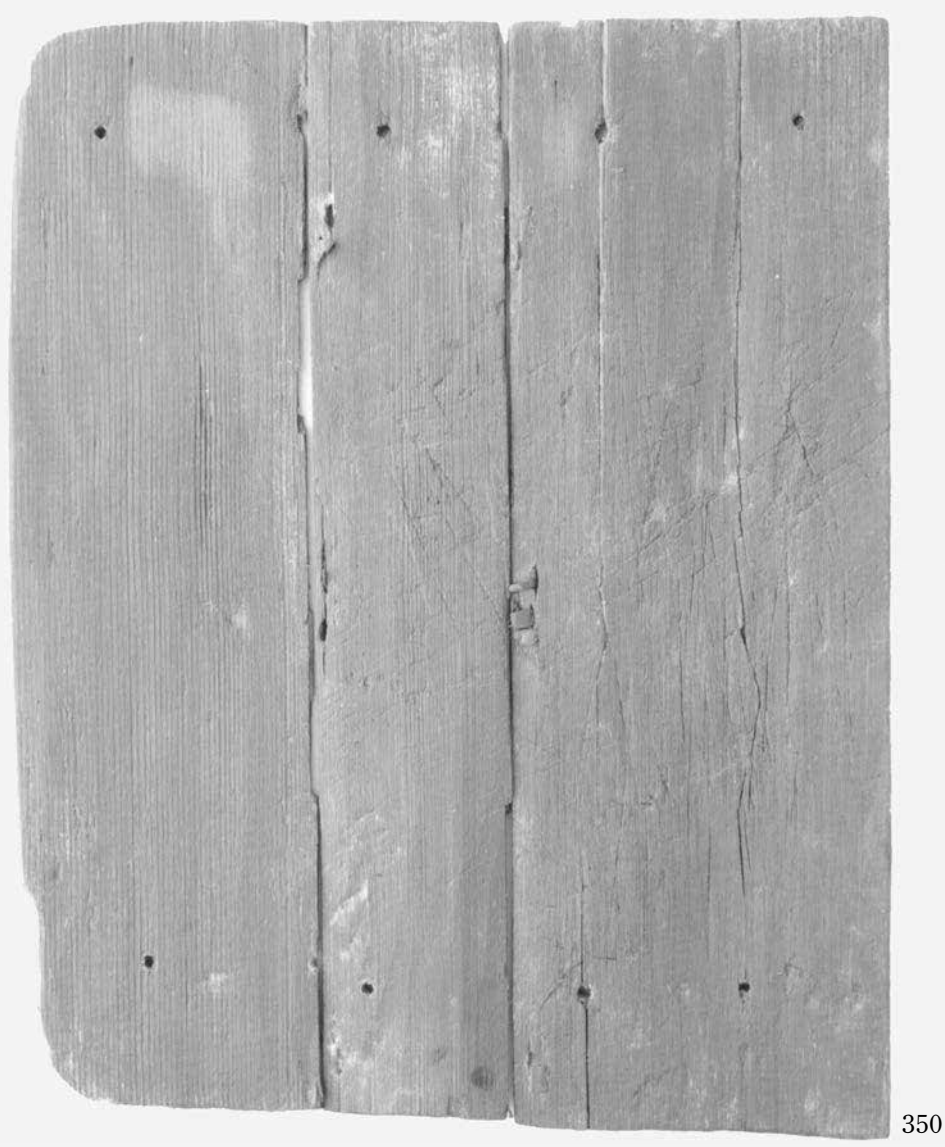
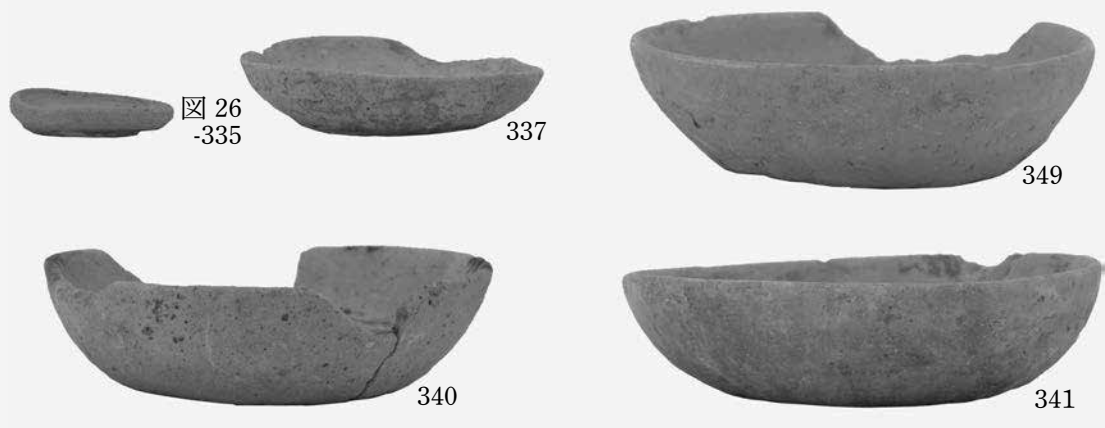


294



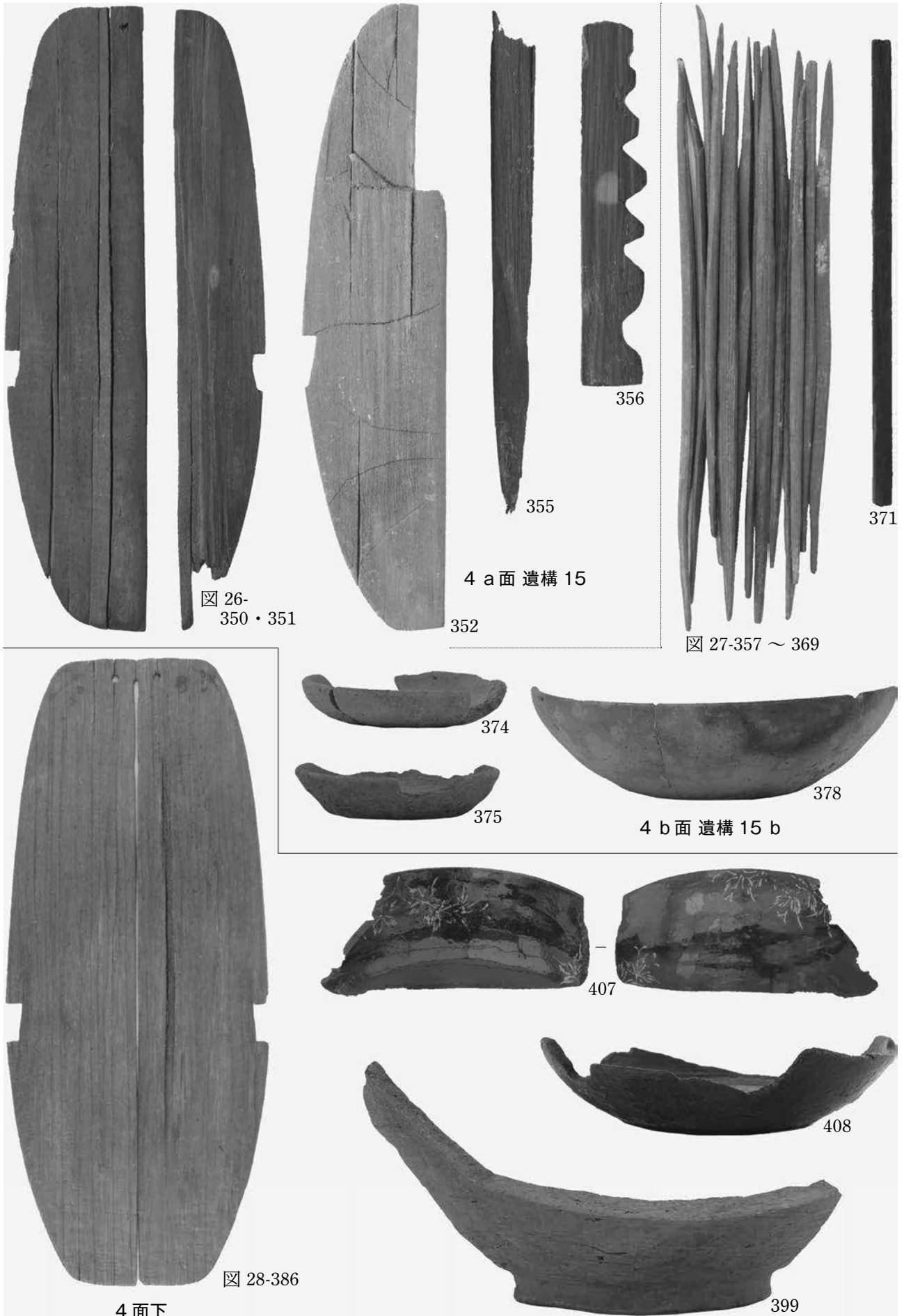
295 ~ 314





4 a 面 遺 構 15





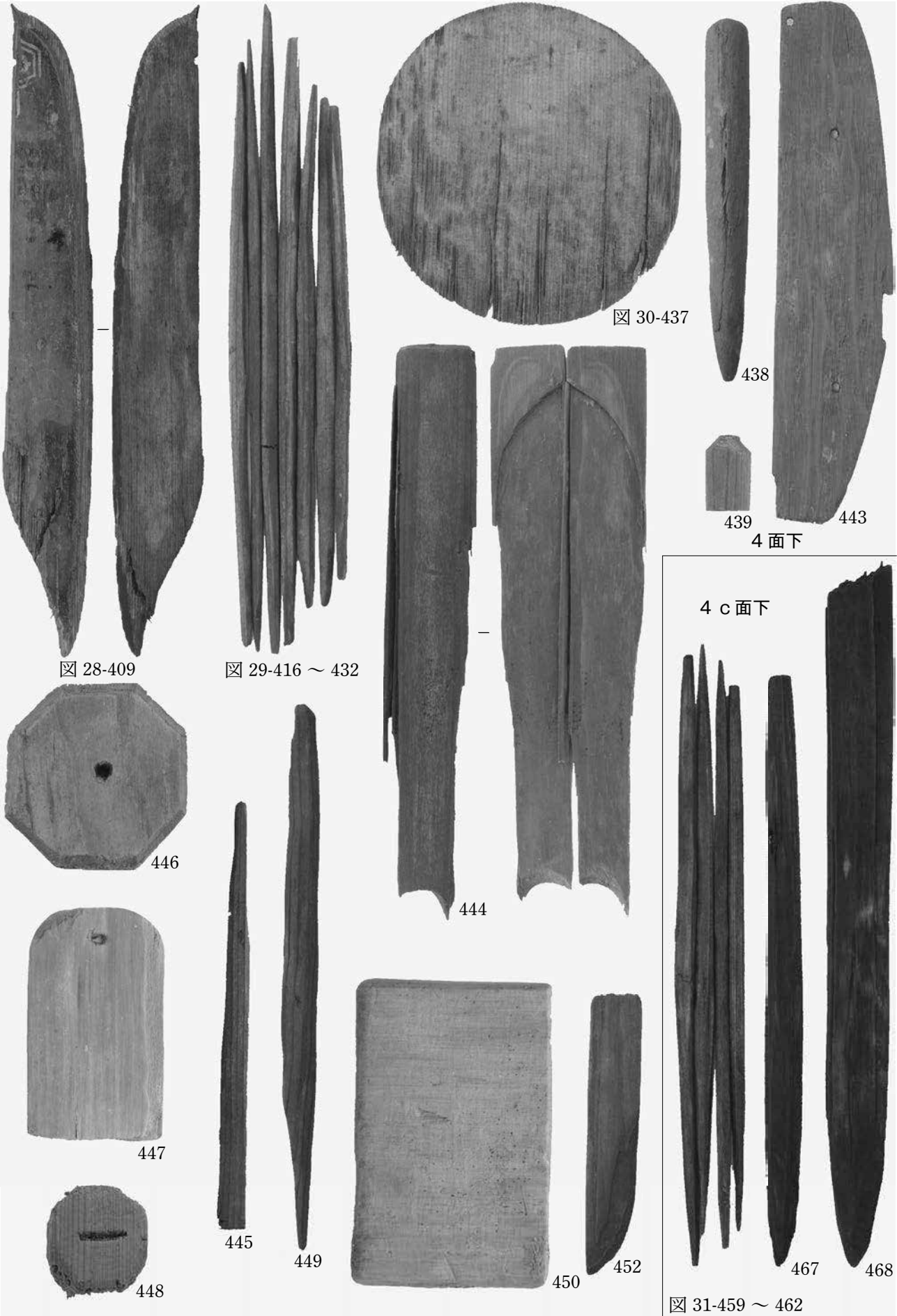


图 28-409

图 29-416 ~ 432

图 30-437

438

439

4 面下

443

444

446

447

448

445

449

450

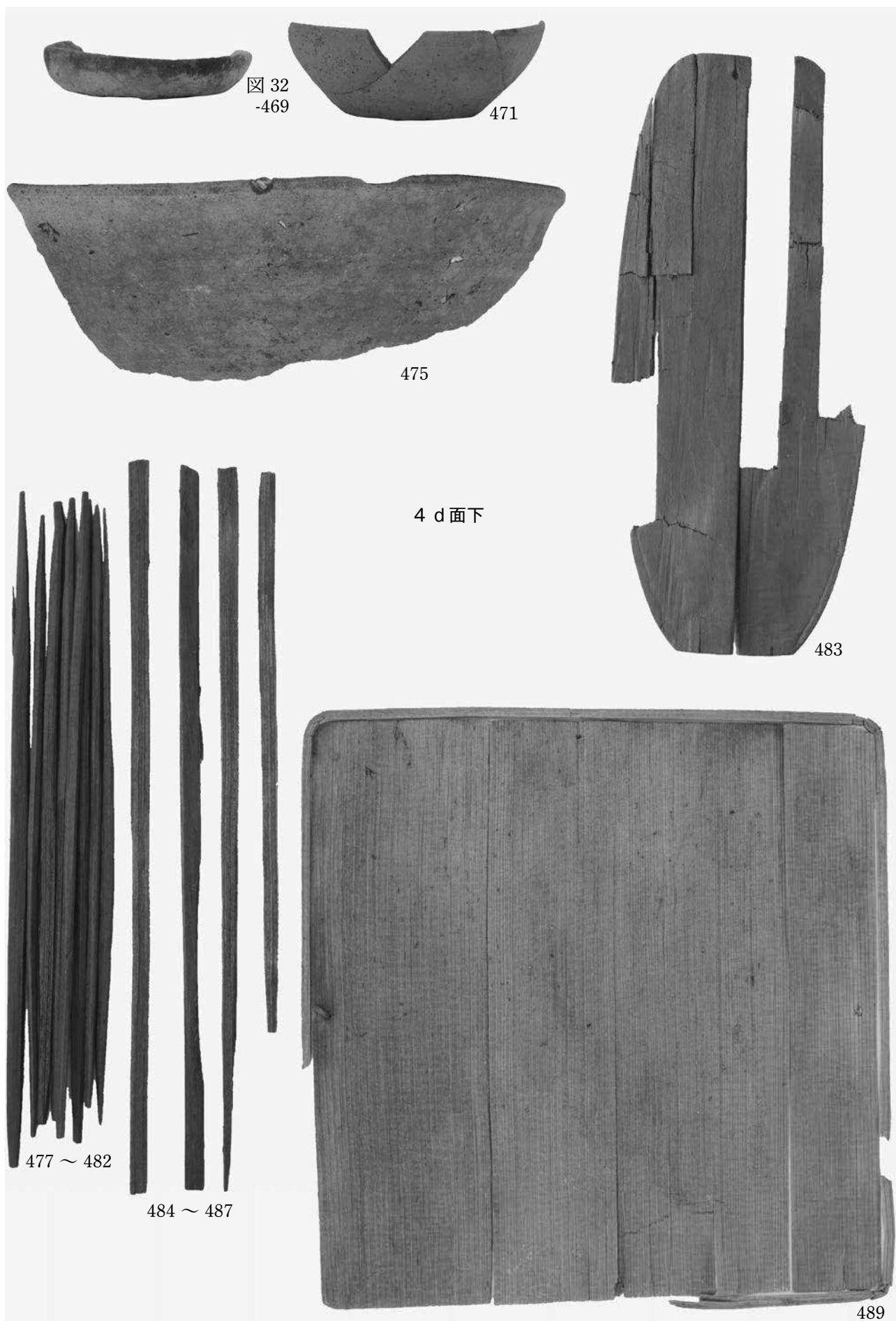
452

4 c 面下

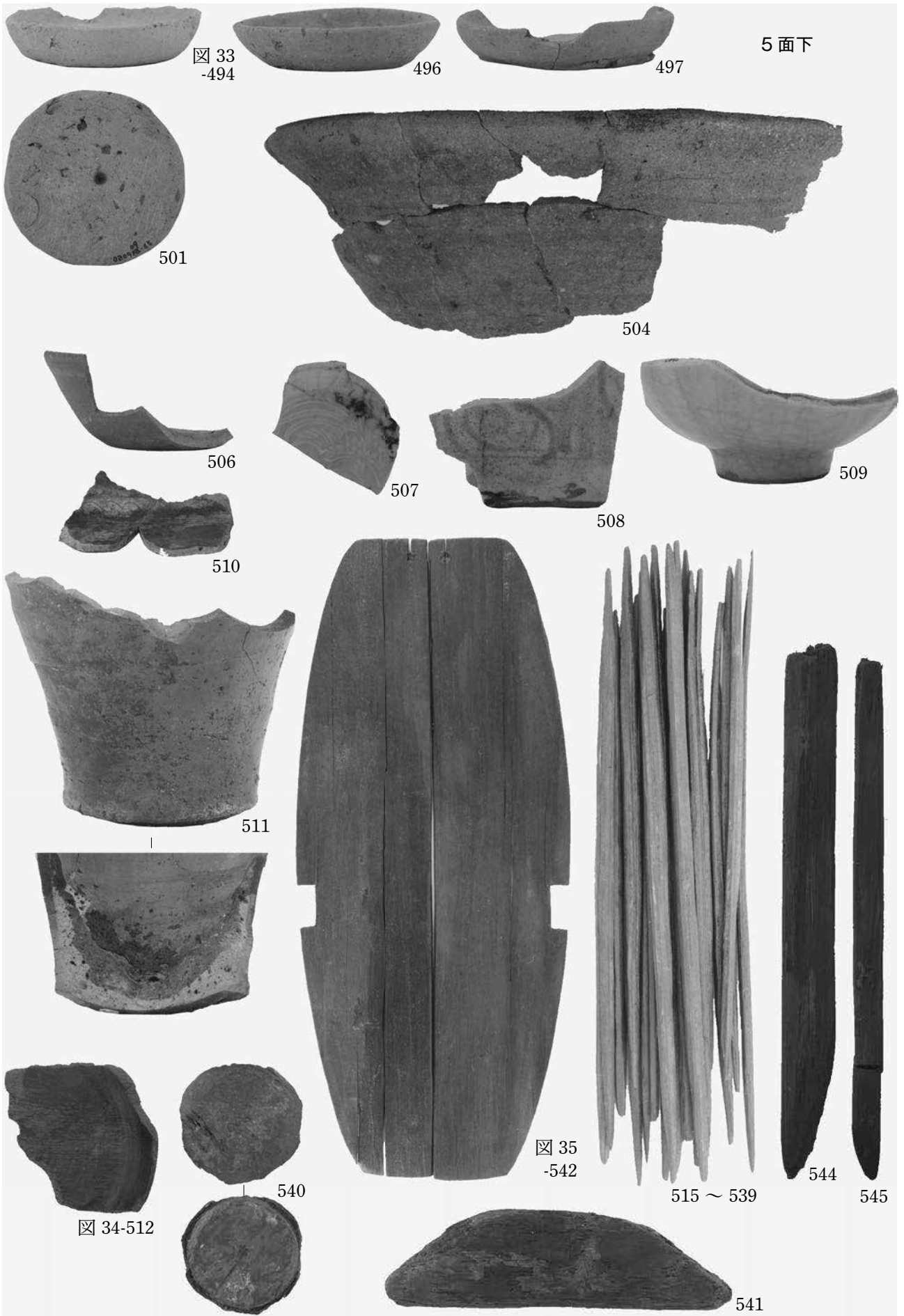
467

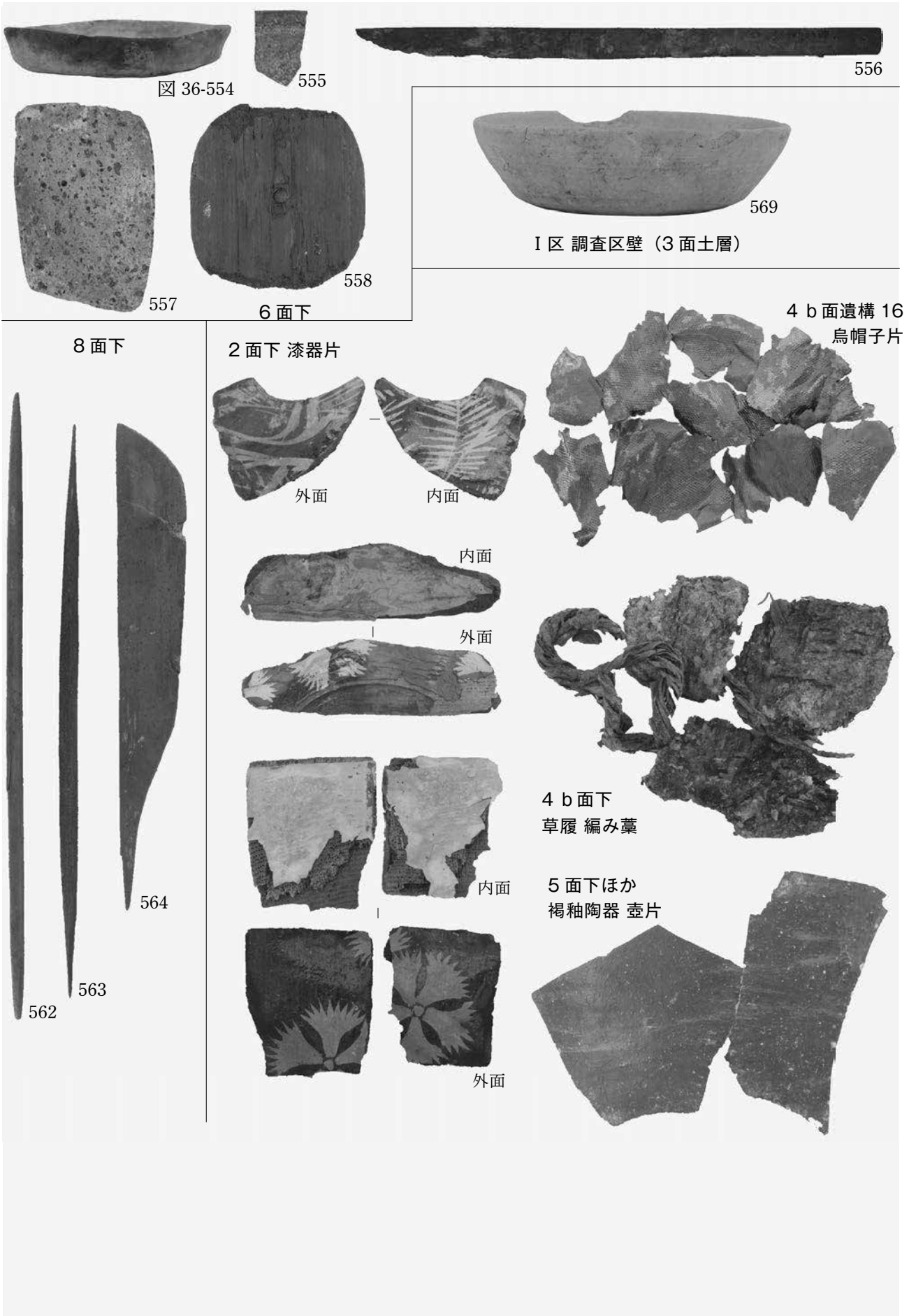
468

图 31-459 ~ 462









# 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町一丁目 333 番 15 地点

## 例 言

1. 本報告は、鎌倉市小町一丁目 333 番 15 地点において実施した若宮大路周辺遺跡群（鎌倉市 No.242）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 22 年 6 月 9 日から同年の 7 月 23 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、22.5㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。  
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）  
調査員 岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）  
作業員 安達越郎、田島道夫、丹野正弘  
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)  
整理作業参加者 岡田慶子、押木弘己、本城 裕（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）  
秋田公佑、天野隆男、串田健一、倉澤六郎、高橋こう子、松岡信喜  
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告では世界測地系（第 IX 系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前の測量基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
5. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
7. 本報告の作成に当たり、出土遺物の年代観などについて次の諸氏からご教示を賜った（五十音順、敬称・所属先略）。  
池谷初恵、伊丹まどか、齋木秀雄、佐々木健策、汐見一夫、霜出俊浩
8. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「WA1003」とし、出土品への注記などに使用した。

## 本文目次

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	305
第二章	調査の方法と経過	307
第1節	調査に至る経緯	
第2節	調査の方法	
第3節	調査の経過	
第三章	基本土層	308
第四章	発見された遺構と遺物	309
第1節	検出遺構	
第2節	出土遺物	
第五章	調査成果のまとめ	325

## 挿図目次

図1	調査地の位置	306	図11	中世上層出土遺物②	317
図2	調査区配置図	307	図12	中世上層出土遺物③	318
図3	中世上層の遺構	310	図13	中世上層遺構3出土遺物①	319
図4	中世上層遺構3土留め材	310	図14	中世上層遺構3出土遺物②	320
図5	中世上層遺構9	311	図15	中世上層遺構3出土遺物③	321
図6	中世下層の遺構	312	図16	中世上層遺構8出土遺物	322
図7	調査区セクション図	313	図17	中世上層遺構9出土遺物	322
図8	表土など出土遺物①	314	図18	中世下層遺構4出土遺物①	323
図9	表土など出土遺物②	315	図19	中世下層遺構4出土遺物②	324
図10	中世上層出土遺物①	316	図20	下層南北溝(遺構4)の推定展開図	327

## 表目次

表1	審計測値分布	324	表3	出土遺物観察表	331
表2	出土遺物カウント表	328			

## 図 版 目 次

<p>図版 1…………… 339</p> <p>① 現地調査前（南西から）</p> <p>② I 区表土掘削状況（南西から）</p> <p>③ I 区中世上層 遺構 3（南から）</p> <p>④ 同上 板材検出状況（北東から）</p> <p>⑤ 同上 杭列検出状況（北東から）</p> <p>⑥ I 区中世上層 遺構 3 完掘状況（北から）</p> <p>⑦ 同上（北東から）</p> <p>図版 2…………… 340</p> <p>① I 区中世下層 遺構 4（北から）</p> <p>② 同上（南から）</p> <p>③ I 区中世上層 遺構 3 断面（南から）</p> <p>④ I 区 遺構 3 - 遺構 4 間の切り合い （南から）</p> <p>⑤ II 区表土掘削後 凝灰岩切石出土状況（北から）</p> <p>⑥ I 区中世上層 漆器塗膜 出土状況</p> <p>⑦ I 区中世上層出土 漆器塗膜</p> <p>図版 3…………… 341</p> <p>① II 区 遺物包含層除去後（北から）</p> <p>② II 区中世上層 遺構 3（北から）</p> <p>③ II 区中世上層 遺構 3 護岸材検出状況（北東から）</p> <p>④ 同上（東から）</p> <p>⑤ II 区中世上層 遺構 3 護岸材下 六器出土状況（北西から）</p> <p>⑥ 同上（西から）</p> <p>⑦ 同上・アップ（西から）</p>	<p>図版 4…………… 342</p> <p>① II 区中世上層 遺構 9 ・下層 遺構 4 検出状況（北東から）</p> <p>② II 区中世上層 遺構 9 調査区西壁断面（東から）</p> <p>③ II 区 南壁断面（北から）</p> <p>④ II 区 北壁断面（南から）</p> <p>⑤ II 区中世上層 遺構 9 土台材（南から）</p> <p>⑥ II 区中世下層 遺構 4 西岸断面（南東から）</p> <p>⑦ II 区中世下層 遺構 4 調査区南壁断面（北から）</p> <p>図版 5…………… 343</p> <p>① II 区中世上層 遺構 9 土台材アップ （東から）</p> <p>② II 区中世上層 遺構 9 調査区西壁断面</p> <p>③ II 区中世上層 遺構 9 調査区南壁断面</p> <p>図版 6 出土遺物 …… 344</p> <p>図版 7 出土遺物 …… 345</p> <p>図版 8 出土遺物 …… 346</p> <p>図版 9 出土遺物 …… 347</p> <p>図版 10 出土遺物 …… 348</p>
---	---

## 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群は鎌倉低地の中心部を占め、史跡若宮大路を挟んで東西に展開している。遺跡の南限は県道鎌倉・葉山線で、西は今小路に、東は滑川および小町大路（道路名はともに現在の通称）で限られている。細かな地形差はあるが、概ね滑川とその支流群の沖積作用によって形成された泥質平野に立地し、東西 650 m、南北 900 m ほどの広がりを持つ。鎌倉の中心市街地を占めることから開発行為に伴う発掘調査例は多く、現在までに 160 件近くを数える。個々の調査は狭小な面積を対象にした事例が多く遺跡全体の様相については未だ解明途上にあるが、概して若宮大路二ノ鳥居以北では武家屋敷を窺わせる様相が強く、一方の南側では 13 世紀中頃以降、倉庫に比定される竪穴建物群の展開が顕著となる傾向が把握されている。

今回の調査地点は遺跡範囲の東側、小町大路の西に位置し、道路を挟んだ南には本覚寺が所在する。本覚寺は元々この地にあった天台宗夷堂を一乗日出が日蓮宗に改めたのがおこりで、開創は永享八年（1436）という。現在も小町大路沿いから大町地区にかけては同宗の寺院が非常に多く分布している。

遺跡名にもなっている若宮大路は寿永元年（1182）三月、源頼朝が妻政子の安産を願って自らの指揮のもと造成し、以後鶴岡八幡宮への参詣道として都市鎌倉の基軸線となる。ただ、その神聖性から日常の交通路ではなく、その役割は東西に並走する小町大路や今小路（の前身）が担っただろうとする見方が通説的な理解であり、小町大路については滑川の水運機能とも関連付けて都市内の流通・経済的要路といった評価もなされている。現行の小町大路は史料解釈により「小町大路」または「町大路」という名称であったと考証され、後者の場合、本覚寺門前の夷堂橋以北と以南とで「小町大路」「大町大路」と呼び分けていた可能性も指摘されている。関連研究については馬淵和雄氏が詳しく論及しているので参照されたいが（馬淵ほか 2007）、歴史名称としての「小町大路」は、未だ範囲の確定に至っていないのが現状である。

若宮大路沿道の調査では大路の側溝が検出され、東西の両側溝とも開削当初は素掘りであったものが木組み護岸をもつ構造へと変化することが確認されている。小町大路沿いでも複数の調査地点で中世の南北道路面やこれに伴う道路側溝が発見され、現在の小町大路が中世まで遡及することを明らかにしている。このうち西側溝については初め素掘りであったものが木組み護岸、次いで凝灰岩切石積みまたは泥岩塊積みへの改変が把握されているが、今のところ東側溝での護岸施設検出例はない。素掘り段階の西側溝は非常に大規模であったことが本地点（図 1-1）や地点 3～5 の調査内容から窺い知れるが、現時点では幅や路面からの深さなど、全体の規模や断面形の把握には及んでいない。今後、開削～存続期間を含めた実態の解明が期待される。

### 【引用・参考文献】

高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』 鎌倉市

田代郁夫 1998「大町大路と小町大路—中世都市の中の「町」と「路」—」『湘南考古学同好会会報 73』 湘南考古学同好会

馬淵和雄ほか 2007「若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目 402 番 9 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 (第 2 分冊)』 鎌倉市教育委員会

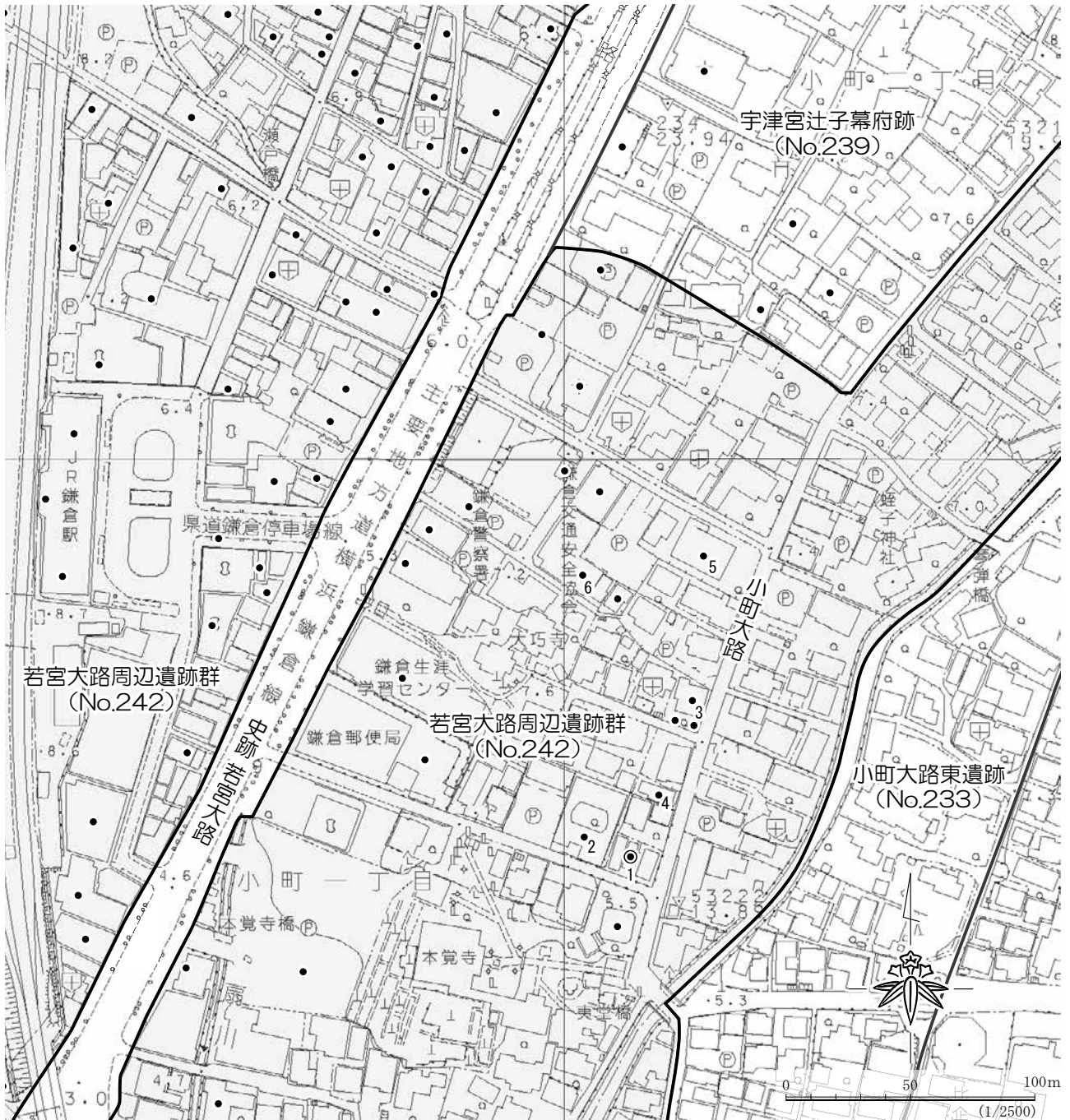


図1 調査地の位置

【図1に番号を付した調査地点と所収文献】

1. 小町一丁目 333 番 15 (本地点)
2. 小町一丁目 332 番 2 : 『貿易陶磁研究 No.28』(原 廣志 2008)  
『第18回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』(山口正紀 2008)
3. 小町一丁目 329 番 1・10 : 『若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 発掘調査報告書』(宮田 眞・滝澤晶子・安藤龍馬 2014)
4. 小町一丁目 331 番 1 : 『第23回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』(松吉里永子・山口正紀 2013)
5. 小町一丁目 325 番イ外 : 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 (第3分冊)』(佐藤仁彦・小林重子 1994)
6. 小町一丁目 322 番 : 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』(宮田 眞・森 孝子・高野昌巳・滝澤晶子 1997)



## 第二章 調査の方法と経過

### 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。建築計画では基礎工事として現地表下3.5 mまでの柱状改良を伴うことから、市教委は平成21年12月8日・9日の二日間、埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下76cmで中世の遺物包含層が、地表下96cm、100cm、165cmでは中世の遺構面と見られる堆積層が確認された。さらに地表下200cmより下位にも中世遺構の存在を予測させる結果が得られたことから、建築計画の実施に先立ち本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った

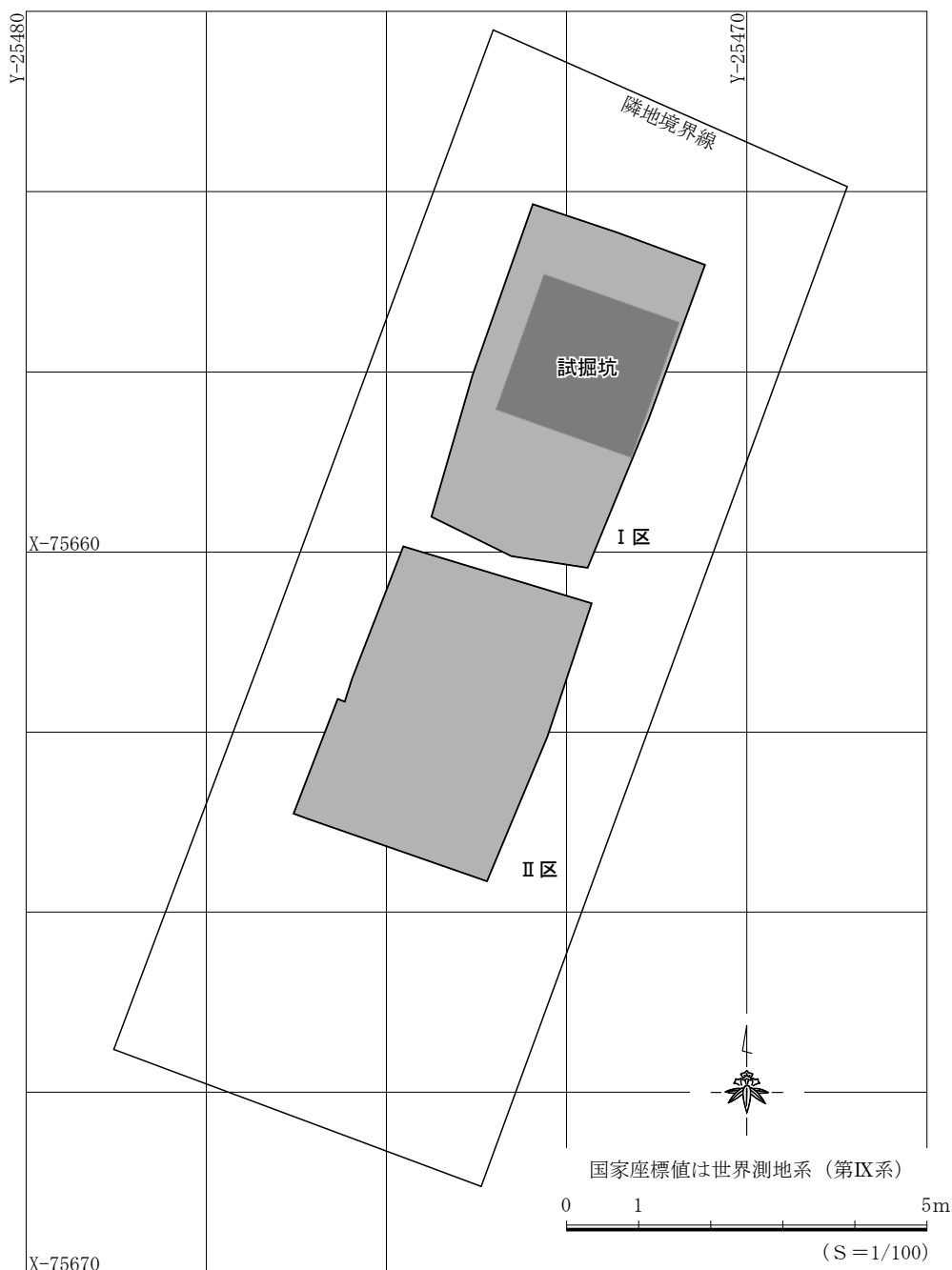


図2 調査区配置図

その後の調整期間を経て、現地調査は、平成 22 年 6 月 9 日～7 月 23 日の約 1 ヶ月半をかけて発掘調査を行った。

## 第 2 節 調査の方法

表土の除去は重機によって実施し、遺物包含層は人力で掘削した。調査・掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査区は 2 分割し、先行して着手した北半を I 区、南半を II 区と呼称した。本報告でも、これに準じて記載を進める。確認調査の結果に基づいて表土および遺物包含層を除去したところを 1 面としたが、調査を進めるにつれて本地点には遺構面（整地層）の重なりがないことを把握できたため、現地で 1 面と呼んだ遺構群を中世上層に、これよりも古く、現地では 1 面下と呼んだ遺構群を中世下層に帰属させて報告することとした。

I・II 区とも順次下層への掘り下げと写真撮影と測量図作成の記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に即した座標軸を設定し、光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。座標移動は市道上に設置された鎌倉市 4 級基準点「U099」と「U100」二点間関係のもと、開放トラバースによって行った。現地では 4 級基準点の成果簿に基づき旧測地系の座標値にを用いて測量を行ったため、本報告の作成に当たって世界測地系の座標値に表記を改めた（図 2）。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web 版 TKY2JGD」を使用した。変換値は東日本大震災後の補正值となっていない。

## 第 3 節 調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成 22 年 6 月 9 日に開始した。重機による I 区の表土掘削を行った後、人力による遺物包含層の掘削を経て、上層遺構面の精査・遺構掘削へと作業を進めた。順次、測量図の作成と写真撮影を行い、下層遺構面でも同様の作業を繰り返し行った。

7 月 1 日には再び重機によって I 区の埋め戻しと II 区の表土掘削を行い、7 月 22 日まで遺構の掘削と記録作業を繰り返し実施した。7 月 23 日には調査器材の撤収・搬出を行い、現地での調査工程を全て終了した。

出土品などの整理作業は平成 25 年度後半から着手し、同年度末までには遺物の実測とトレースを終えた。平成 26 年度には挿図および写真図版を作成し、次いで表組みの作成、本文の執筆へと作業を進めた。これら一連の整理作業は、鎌倉市文化財課分室で行った。

## 第三章 基本土層

本地点の現地表面は標高 6.0～6.4 m を測り、南側が低い。

本地点では、中世上層と下層の遺構群が検出された。両段階とも調査区のほぼ全域が南北の大型溝（堀）が遺存していたため、基本土層として認識できたのは部分的に検出された中世基盤層である黒色粘質土層と、その下に堆積する青灰色砂層のみであった。また、後世の削平も影響して確実な整地層はごく部分的にしか認められず、殆ど全てが遺構覆土という状態であった。

中世基盤層となる黒色粘質土層は、標高 4.7 m 付近で検出された。この層を大型溝が掘り込んでるので、本来もっと高い位置まで堆積していたことは確実である。灰黒色砂が斑文状に混入し、締まりの比較的強い層であった。この層の直下、標高 4.3～4.4 m 前後に青灰色砂の上端がある。観察した場所により砂粒の精粗に差があったが、海棲の貝殻が混入しており、海成砂である可能性が高い（図 7）。

## 調査区壁断面図 土層説明 (図7に対応)

### 【中世上層 遺構 3】

- ① 黄褐色土 砂質土。泥岩ブロック多い。締まりあり。
- ①' 暗黄褐色土 砂+粘質土。締まりややあり。
- ② 黒灰色土 粘質土。泥岩粒少量。締まり弱い。
- ③ 暗褐色土 粗砂、貝殻粒主体。締まりあり。
- ③' 暗褐色土 ③層より砂と貝殻粒減る。
- ④ 暗灰褐色土 粘質土。締まり弱い。
- ⑤ 暗灰褐色土 泥岩ブロック、貝殻粒多量。
- ⑥ 暗灰褐色土 粘質土。木片多量。
- ⑦ 黒褐色土 粘質土+砂。泥岩ブロック多い。

### 【中世上層 遺構 9】

- ① 黒灰色土 粘質土+砂。
- ② 暗褐色土 粘質土が主体。
- ③ 黒灰色土 砂主体+粘質土。
- ④ 暗褐色土 粘質土+砂。
- ⑤ 暗褐色土 粘質土+砂。木片含む。

- ⑥ 暗褐色土 砂質土。
- ⑦ 暗褐色土 粘質土主体+青灰色砂。
- ⑦' 暗褐色土 粘質土主体+青灰色砂が斑文状に入る。

### 【中世下層 遺構 4】

- a. 暗褐色土 砂を多く含む。
- b. 暗褐色土 有機質腐植土。
- c. 暗褐色土 砂、炭化物を多く含む。
- d. 暗褐色土 有機質腐植土
- e. 暗褐色土 砂を多く含む。
- f. 暗褐色土 有機質腐植土。炭化物を多く含む。
- g. 黒褐色土 粘質土。締まりあり。かわらけ片少量。
- h. 暗褐色土 有機質腐植土主体。
- i. 暗褐色土 有機質腐植土。
- j. 暗褐色土 泥岩粒、砂を多く含む。
- k. 暗褐色土 粘質土。締まり弱い。

## 第四章 発見された遺構と遺物

### 第1節 検出遺構

本調査で検出された遺構は全て中世に属するもので、中世上層と下層の遺構群とに大別できる。上層では南北溝1条とこれに先行する竪穴建物1基、下層では南北溝1条が検出された。上・下層の南北溝は概ね同位置に同じ方向で流れており、直接的に連続はしないものの、踏襲性はあるものと考えられる。

#### 中世上層の遺構 (図3～図5)

遺構3 (南北溝) : I区～II区を南北に貫く大規模な溝で、表土と遺物包含層を除去した直下の標高5.1～5.3mで確認された。東西の両岸を確認できたのはII区の北辺近くのみで、ここでの上場幅は150cmを測る。深さはII区南壁の断面で最も残りが良く、110cmを計測した。底面標高はI区の北壁で4.4m、II区北壁で4.35m、II区南壁で4.1mを測り、南に向け流下する。断面観察の結果、砂質土や粘質土で漸次埋没していった状況を見て取れたが、覆土は観察地点ごとに様相を異にしており、部分的に浚渫の痕も窺えた。断面形は逆台形～U字形を呈し、一定した形では貫流していなかった。II区では埋没後に堆積した遺物包含層中に凝灰岩切石(鎌倉石)が散見され、南北に据え並べたような箇所も見られた(図版2-5)。これより上位は表土層となるため定かでないが、近隣の調査事例も参考とすれば、さらに上層の遺構として切石積み護岸を持つ南北溝が存在していた可能性も考えられる。

流下の方向軸はN10°Eを示し、南側では僅かながら正方位に近づくようである。I・II区ともに両岸側に杭列が確認でき、一部横板を抑えている箇所も見られた。打ち込み方が乱雑で使用されている木材にも一定の規格性が見て取れないことから、応急処置的な護岸・補修工事が繰り返されたものと見られる。

現地で遺構1・2・6～8と名称を付した落ち込みについては、遺構中の覆土様相の違いと認識できたことから本遺構に包括することとした。

本遺構から出土した遺物は、図13～16に掲げた。図10～12の遺物は調査の便宜上掘削した排水溝などから出土したもので、新旧遺物の混在はあるものの、多くは遺構3に帰属したであろう。遺物様相の説明は、次節で行う。

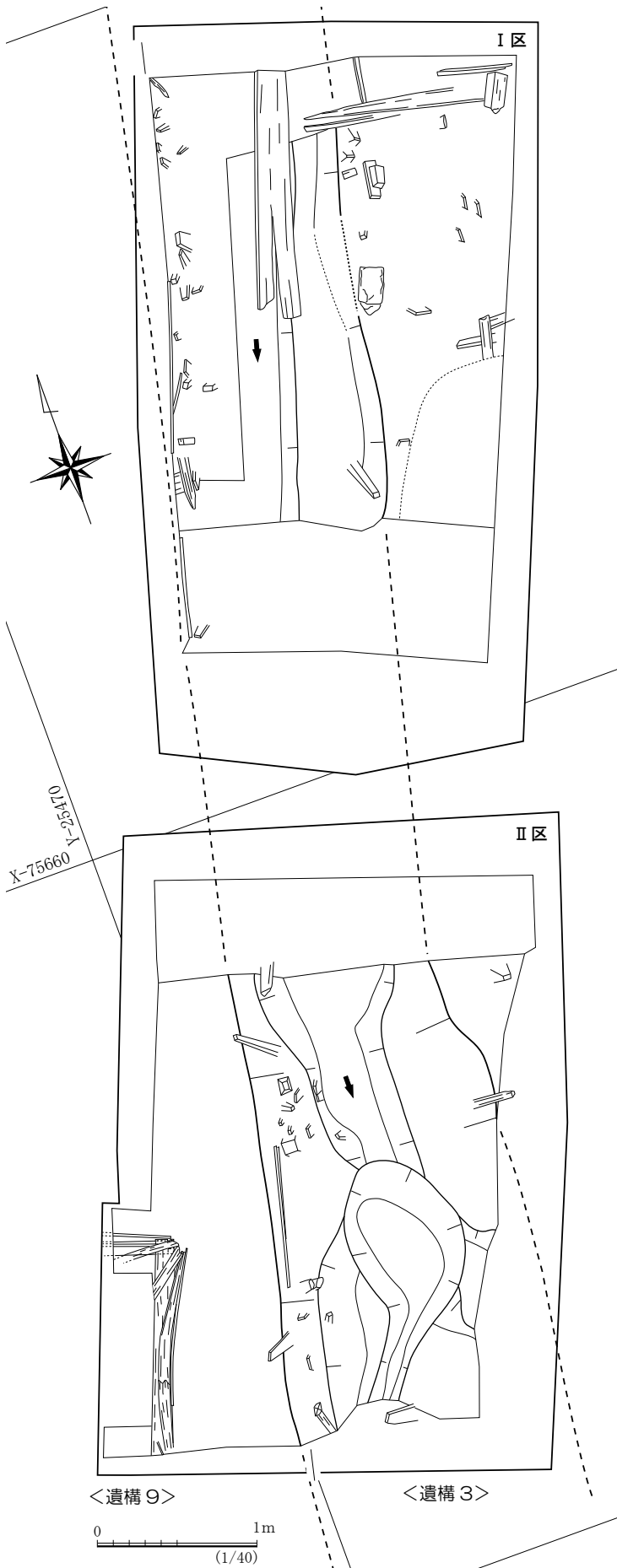


図3 中世上層の遺構

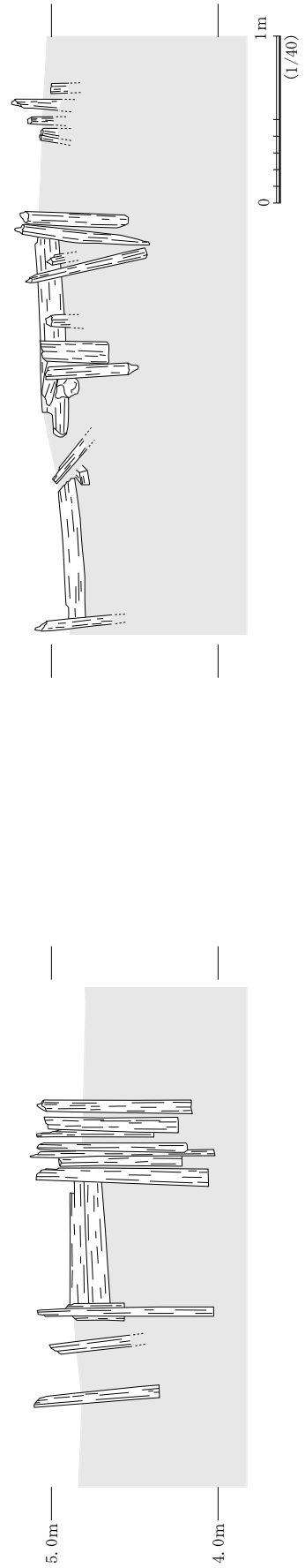


図4 中世上層 遺構3 土留め材

遺構 9 (竪穴建物) : II 区の南西角で、建物北東隅のごく一部が確認された。下層南北溝 (遺構 4) の西岸を切って構築され、本建物が廃絶・埋没した後、粗い泥岩ブロックで地ならしを施した上で上層南北溝 (遺構 3) の開削に及んだことが断面観察から確認された。調査区の制約上、遺構の外方 (裏込め側) から掘削・調査せざるを得なかった。

構造としては地面を (方形か長方形に) 掘り窪めた後、四周の掘り方底面を 10cm ほど埋め戻した上に土台材を据え付け、その外辺から 15 ~ 20cm 幅の横板を 4 段以上積み上げて壁体を構築していた。北辺と東辺の土台材は幅 7cm と 12cm、厚さ 6cm と 5cm で、ともに端部を 3cm の厚さで切り落とし、できた段差同士をコーナー部で咬み合わせていた。東辺土台板の上面に長さ 7cm、幅 3cm の貫通する柄穴が 40cm 間隔で穿たれていたが、ここには束柱が立っていなかった。壁体は、最も遺存の良い部分で 50cm の高さが確認できた。壁体の外側 20cm に掘り方の壁面があり、黒色粘質土と青灰色砂の混交土を裏込めとしていた。泥岩粒などの混入物は殆どなく、掘削残土となった中世基盤層以下の堆積土をそのまま埋め戻したと思われる。

確認できた規模は、壁体が東西 40cm、南北 135cm で、掘り方全体では東西 55cm、南北 150cm までを計測できた。本地点以西の調査地では竪穴建物が多く確認され

ているので、本地点が土地利用の上で境界となっていた様子が把握できたことになる。

ごく限定された範囲での検出に留まったため、本遺構からの出土遺物は僅少であった。図 17 に 5 点を掲げた。説明は次節で行う。

### 中世下層の遺構 (図 6)

遺構 4 (南北溝) : 上層の遺構 3 の下位に、概ね同じ位置で検出された南北溝であるが、規模の面では本遺構の方が遥かに大きい。遺構全体のうち検出できたのは西岸のみで、幅・深さとも確認には至らなかった。検出に及んだ限りでは東西幅 2 m 以上、深さは 1 m 以上を測り、覆土の落ち込み具合から勘案すれば、少なくとも幅員に関しては計測しえた倍以上の規模を有していたことが推測できる。

西岸の傾斜角は 50 ~ 55° と急で、断面形は V 字形 (薬研) または逆台形 (箱薬研) を呈していたと思われる。本遺構に伴う護岸施設の痕跡は確認できず、基本的に素掘り溝と認識して良いだろう。覆土は暗褐色の有機質腐植土 (まぐそ) を主体とし、砂粒や炭化物の混入量によって細分が可能であった。確認できた全ての土層が西岸と同程度の急斜度で東へ向け落ち込んでおり、長時間かけて段階的に埋没したというよりは、短期間のうちに西側から有機物が投棄され腐植していく過程で形成された覆土相という印象を受けた。I 区の覆土中では板材の集中する箇所があっ

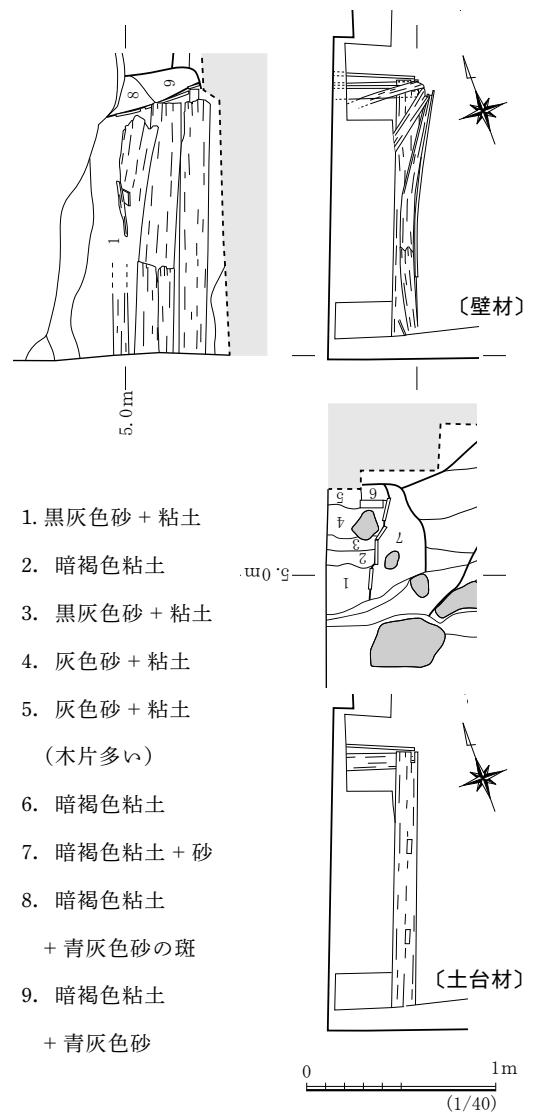


図 5 中世上層 遺構 9

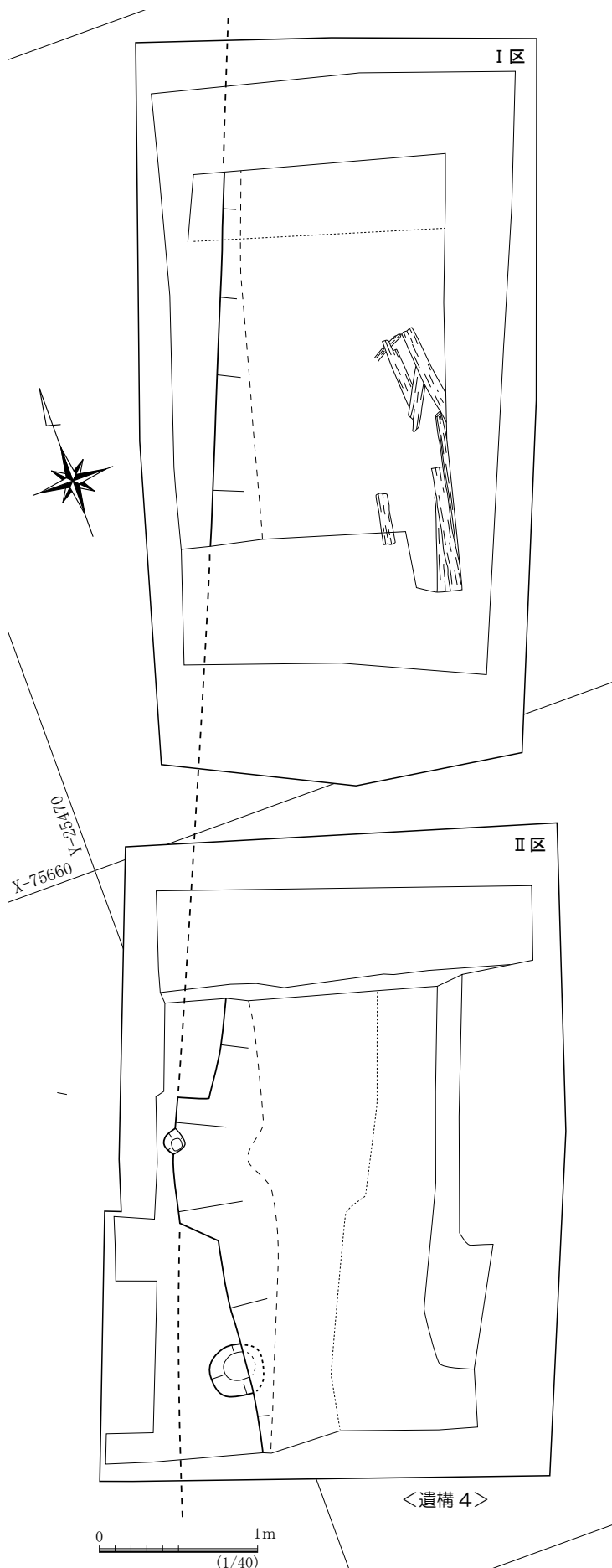


図6 中世下層の遺構

た。流下方向に平行して横たわっていたものが主体であったが杭などで固定された様子は見られなかった。意図的に敷かれたものであったとしても、構築物ではなく投棄の範疇で理解すべき痕跡と考えている。

流下方向軸はN 22° Eを示し、自然地形から南側へ流れていたと考えて良いだろう。

現地で遺構5と名称を付けた落ち込みについて、遺構内での覆土様相の違いと認識できたため、本遺構に包括することとした。

本遺構で出土した遺物は図18・19に掲げた。次節で様相の説明を行う。

## 第2節 出土遺物

本地点では整理箱にして16箱の遺物が出土した。上・下層の南北溝での出土が多かった。

### 表土など出土遺物（図8・9）

確認調査や表土掘削時に出土した遺物をまとめた。

1～7は確認調査時に出土した。帰属遺構・層位の厳密な特定はできないが、確認坑の設定位置・深度から大半の遺物が上層遺構3に帰属する可能性が高い。

1～4はロクロかわらけ。小皿・大皿とも口底径比が大きく、やや深身で丸みの強い器形を呈する。

5は常滑甕の胴部片で、割れ口2ヶ所を研磨具として再利用している。

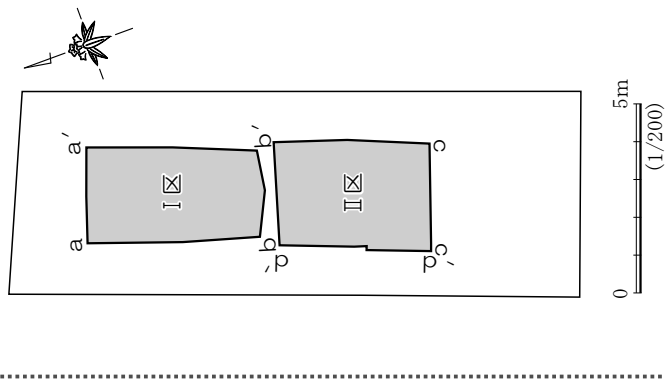
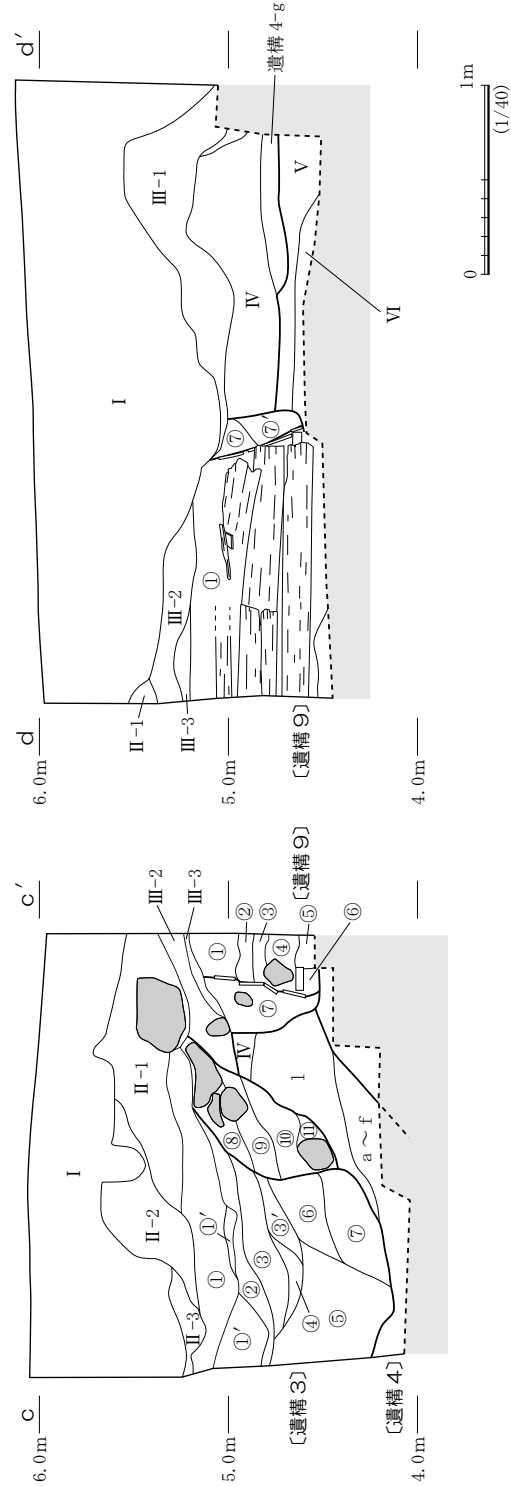
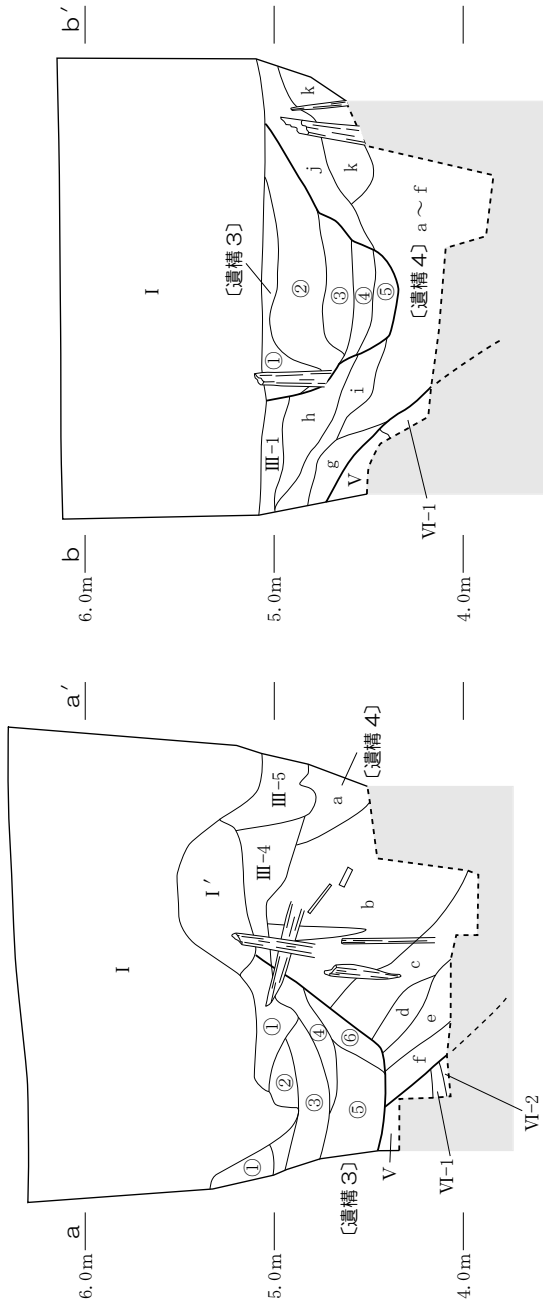
6は瀬戸の折縁深皿。底部外面付近を除いて灰釉が施されている。内底面には円形に釉薬の剥がれた部分が見られる。焼成台（トチン）の痕であろう。古瀬戸中期様式－Ⅲ期か。

7は瓦質土器の火鉢口縁部片。内外面とも横方向のヘラミガキを施し、外面に菊花スタンプと貼り付け連珠文を施す。

8～34は表土掘削時や表採、掘削残

【基本土層】（その他の土層説明は、309頁上段を参照）

- I 表土・攪乱 暗灰褐色土 砂質土。
- II 中世遺物包含層 粘質土+砂。泥岩ブロック少量。
  - 1. 黒褐色土 粘質土。縮まり弱い。
  - 2. 暗灰褐色土 粘質土+砂。縮まり弱い。
  - 3. 暗灰褐色土 粘質土+砂。縮まり弱い。
- III 中世上層
  - 1. 暗褐色土 粘質土+砂。泥岩粒少量。
  - 2. 灰褐色土 粘質土。泥岩粒少量。
  - 3. 黄褐色土 拳大の泥岩ブロックによる整地層。
  - 4. 黄褐色砂 粗砂と泥岩ブロック主体。
  - 5. 黒褐色土 粘質土。縮まりあり。
- IV 中世下層
  - 1. 暗黄褐色土 黄褐色砂を含む。縮まりあり。
- V 中世基盤層
  - 1. 暗褐色土 粘質土。縮まりややあり。部分的に青灰色砂が斑文状に混入。
- VI 海成砂層か
  - 1. 青灰色砂 粗砂と細砂の互層。貝殻粒少量。縮まり弱い。
  - 2. 黒褐色土 粘質土。縮まりあり。



0 1m  
(1/40)

0 5m  
(1/200)

図7 調査区セクション図

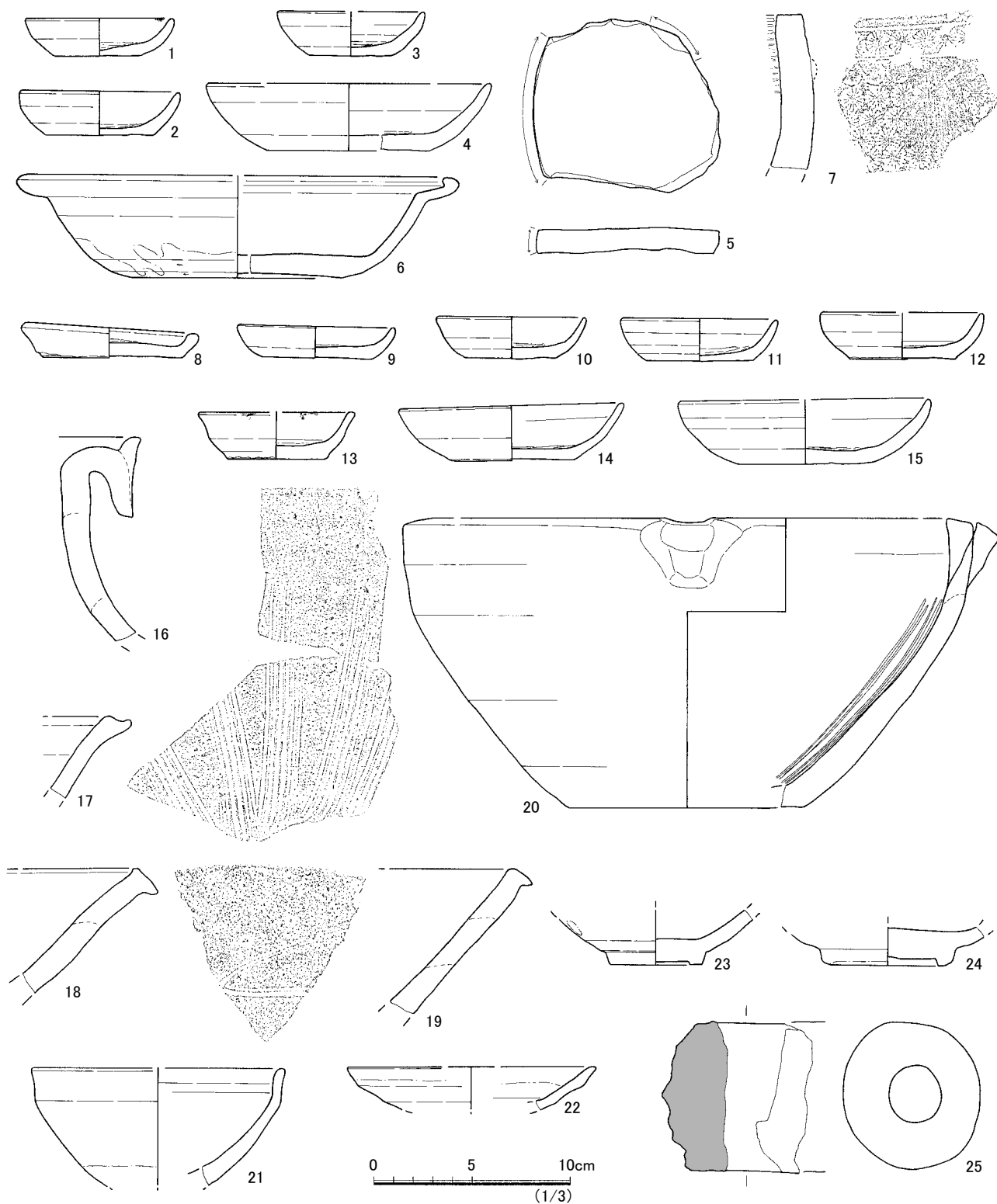


図8 表土など出土遺物①

土から出土した。よって新旧各様相を持つ遺物が混在する。

8～15はロクロかわらけ。小皿は8→9→10以降という順に新しい特徴をもつ。

20は備前のすり鉢。口縁から底部までが遺存するものの、小片であるため復元径には誤差がある。体部内面に6条一単位の櫛歯によるすり目が付く。口縁部には内方から押し出して成形した片口が付いている。体部から口縁部にかけて、やや強い内湾形態を取る。

21は瀬戸の天目茶碗で底部を欠く。内面全体と体部外面に鉄釉が掛かり、外面体部の下端には



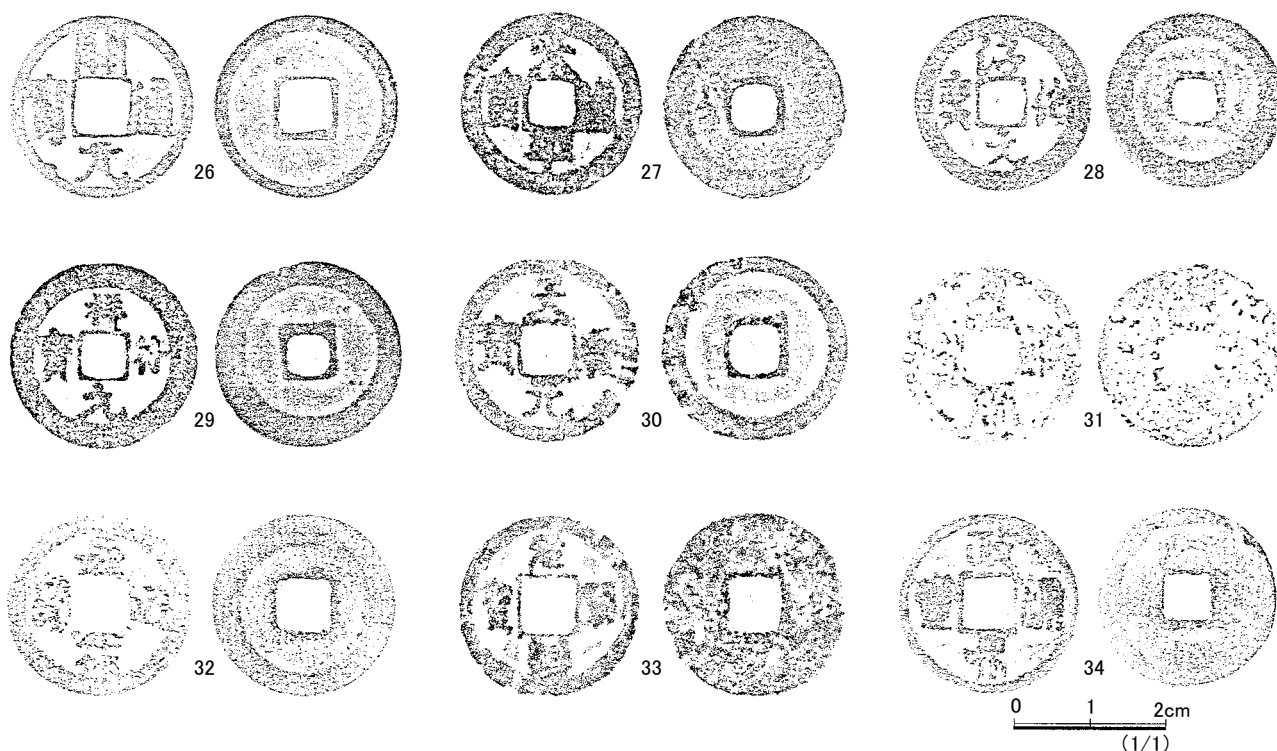


図9 表土など出土遺物②

鉄釉の化粧掛けが施されている。

26～34は銅銭。いずれも中国からの渡来銭で、26は唐代621年初鑄の開元通寶。27以下はいずれも北宋銭である。本地点では概して金属製品の銹化が少なく、非常に遺存度が良い状態で出土している。

#### 中世上層の出土遺物（図10～12）

現地では遺構3と別遺構からの出土と認識した遺物で、新旧資料の混在はあるものの、大半は遺構3に帰属するものと思われる。

35～92はI区で出土した。

35は、現地において遺構1からの出土としたもの。常滑の片口鉢Ⅱ類で、口縁部の小片。

36～38は上層遺構の確認面で出土したロクロかわらけ。遺構3に帰属する可能性が高い。

39も遺構確認面からの出土で瀬戸の入れ子。

40以下は中世上層の遺構面を掘り下げる際に出土した。40～62はロクロかわらけで、54～56など中皿が含まれる。小・中・大皿とも口底径比が比較的大きく、深身で丸みを帯びた資料が主体となる。

63～70は手づくねかわらけ。小皿・大皿とも器高が低く大ぶりの資料が中心となるので、上層より下層の遺構4に帰属させるべき資料である。

71は尾張の山茶碗系片口鉢。口縁部は丸く仕上げられ、端部に沈線がめぐる。体部下位の外面には斜め→横方向のヘラケズリが施される。

74は常滑の片口鉢Ⅱ類。体部の小片だが、内面に菊花文のスタンプが捺されている。

77は備前のすり鉢。口縁～体部の小片で、器形の傾きや復元径には多少の誤差があろう。体部内面に8条一単位の櫛歯によるすり目が施され、モチーフは不明だが薄い墨画の痕跡が認められる。

84・85は銅銭。84は中国・北宋代に鑄造された咸平元寶。85は私鑄銭で銭銘不明。下の字は「元」が左右反転している。

93～106はII区で出土した。

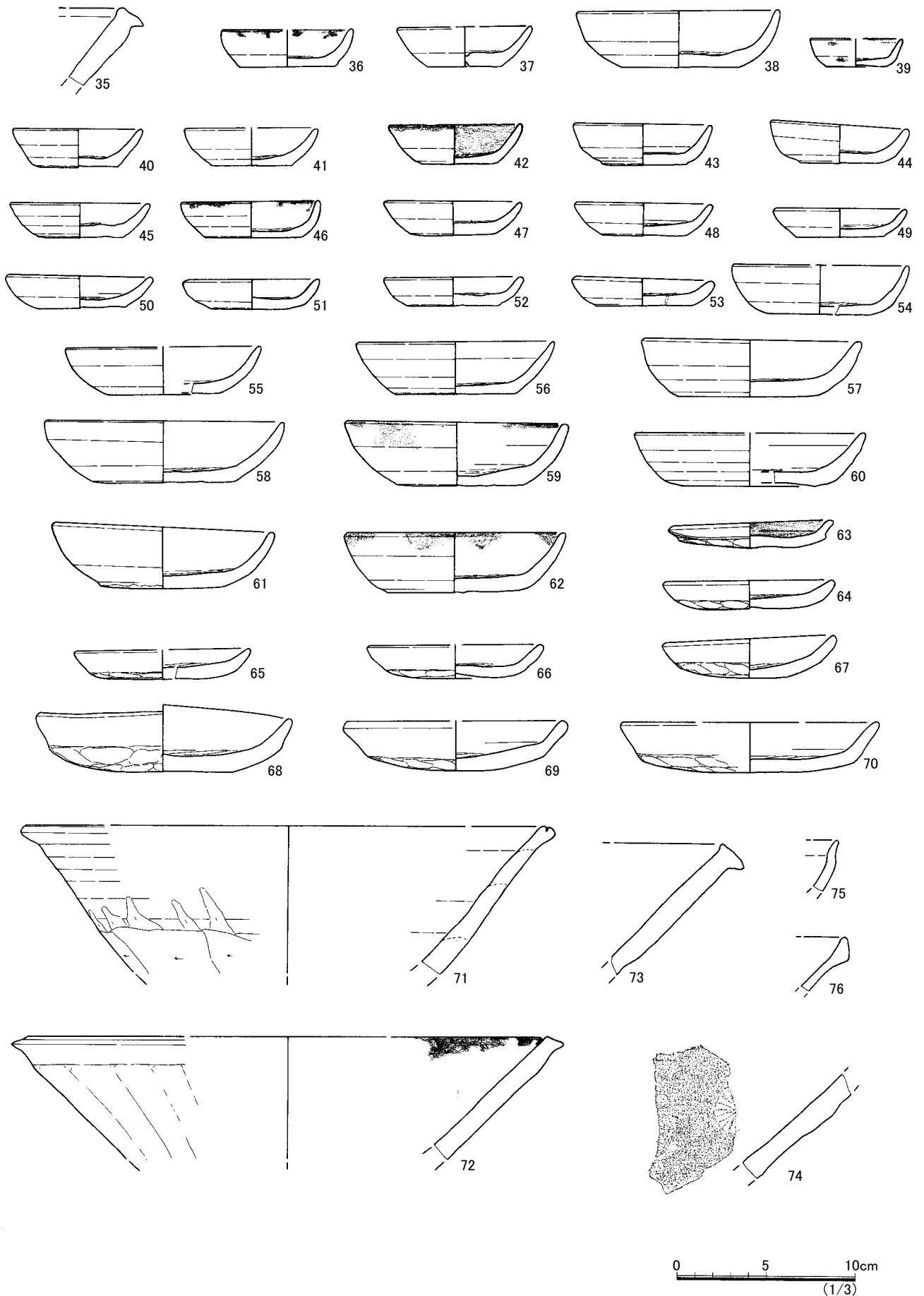


图 10 中世上層 出土遺物①

94 は常滑の鳶口壺で、口縁部を欠く。回転台成形で、肩部に2条の沈線が付く。  
 95 は常滑甕の口縁部。縁帯が頸部に付くもので、15世紀前半頃の所産。  
 96 は東播系須恵器の鉢。口縁部のごく小片。  
 97～106 は銅銭。全て中国からの渡来銭で、97・98 は唐代の開元通寶。106 は嘉定通寶で南宋代・1208年の初鑄。この他は全て北宋代に鑄造されたものである。  
 107～111 は木製品。107 は独楽。外面を粗いケズリによって成形している。

中世上層 遺構3 出土遺物 (図13～16)

現地調査の段階で遺構3に帰属すると認識できた遺物である。手づくねかわらけなど、一部の資料に

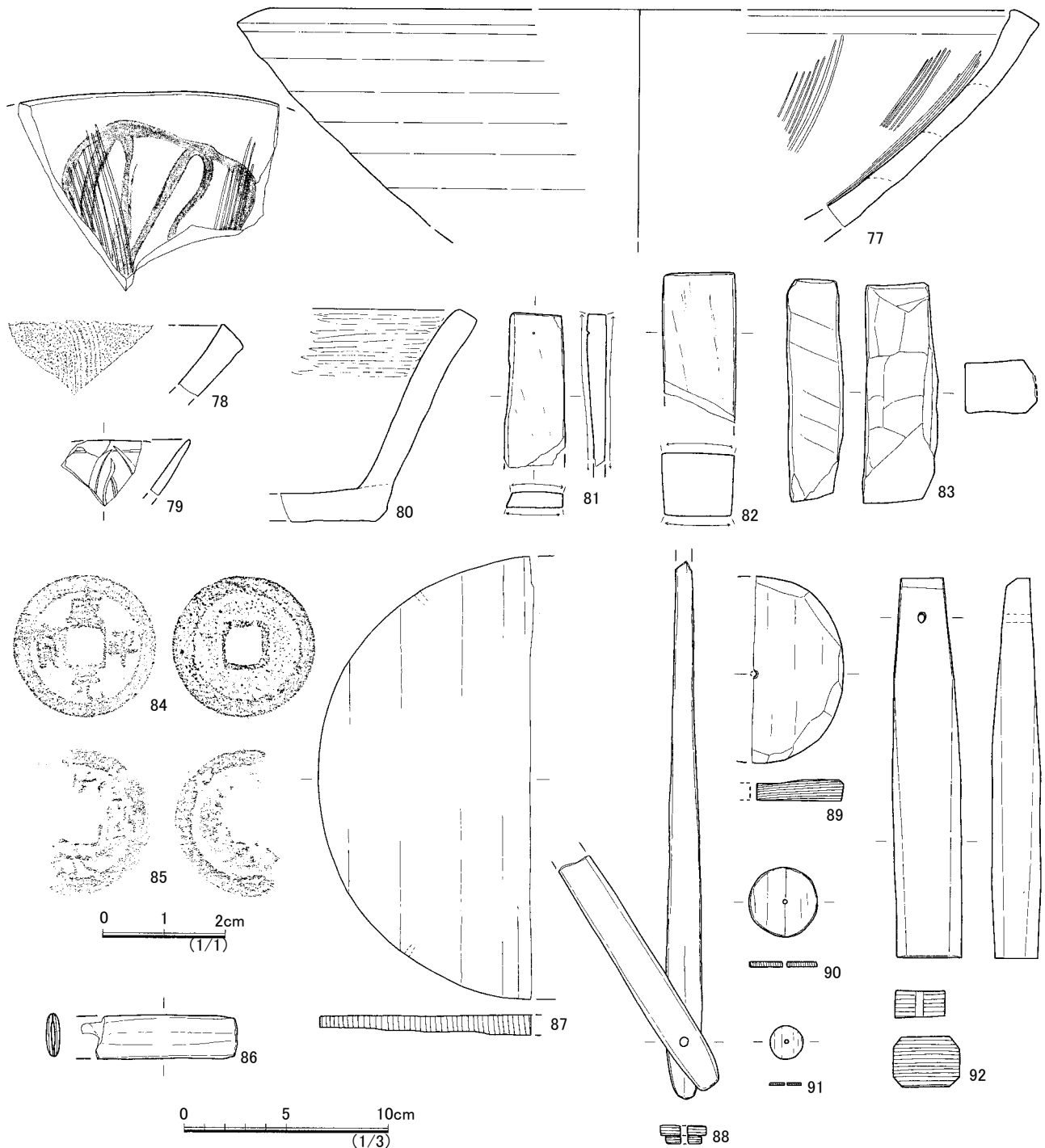


図11 中世上層 出土遺物②

全体の傾向よりも古相を示す遺物が見られ、これらは本来、下層の遺構4に伴う遺物であったと考えられる。

112～133はロクロかわらけ。112は極小の内折れ皿。113～123は小皿。このうち、121～123は他の資料群に比べて大ぶりで、体部が短く開くという古相の特徴を備えている。また、113～115のように器壁が薄く、深身で丸みを帯びる一群、117～120のように口径が8cm前後、器高が2cm未満と低平な器形を呈する一群などがあり、時期的に数段階の遺物が混在している可能性がある。

126は中皿で、124～133は大皿。133のみ他よりも低平な作りで、古い様相を呈している。体部中位に膨らみを持つ資料が中心となり、口径には12cm前後と13cm台という二通りの分布が認められる。

134～137は手づくねかわらけで、134のみ小皿。大皿は口径が13cm台で、全体に低平な作り

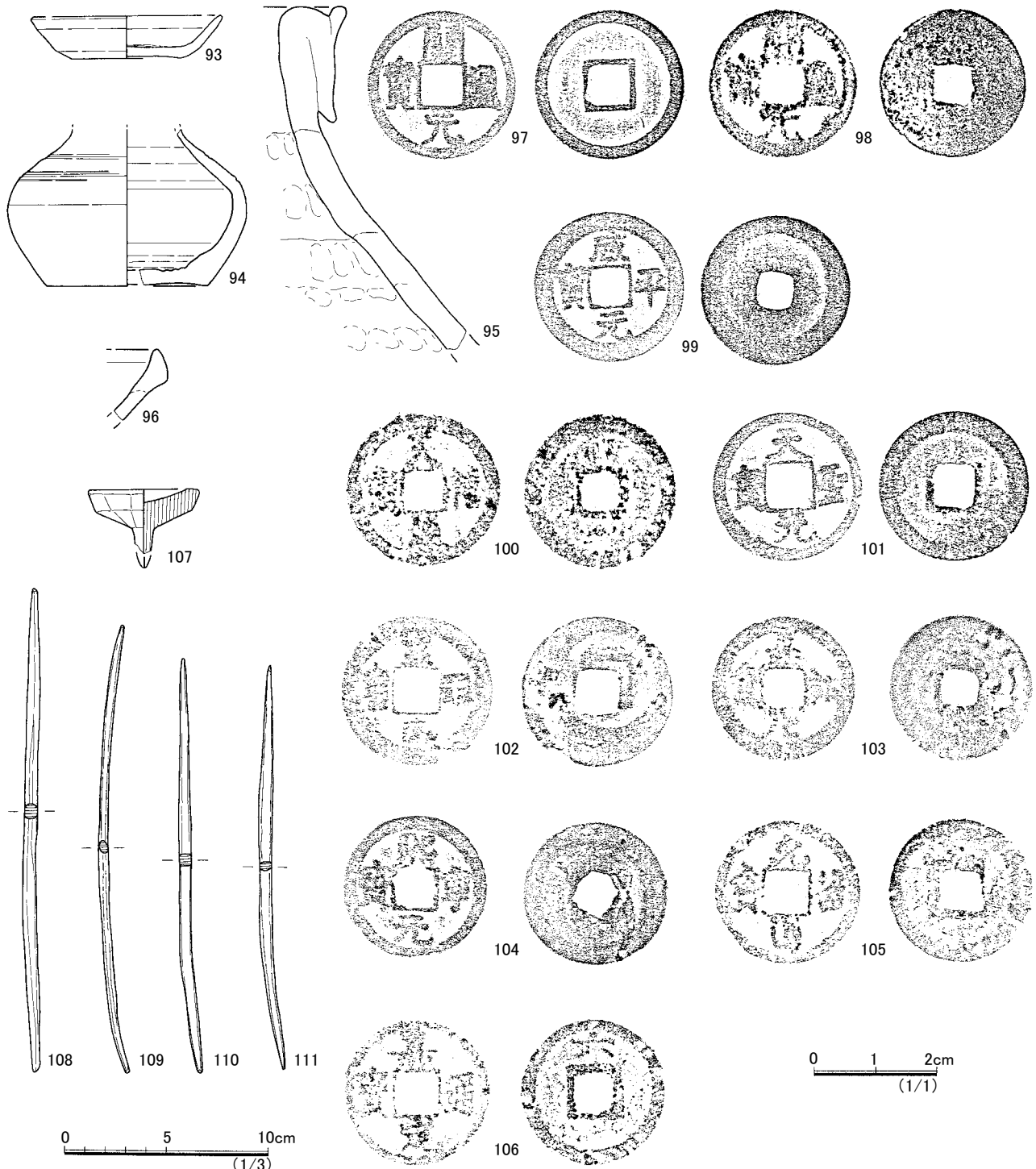


図 12 中世上層 出土遺物③

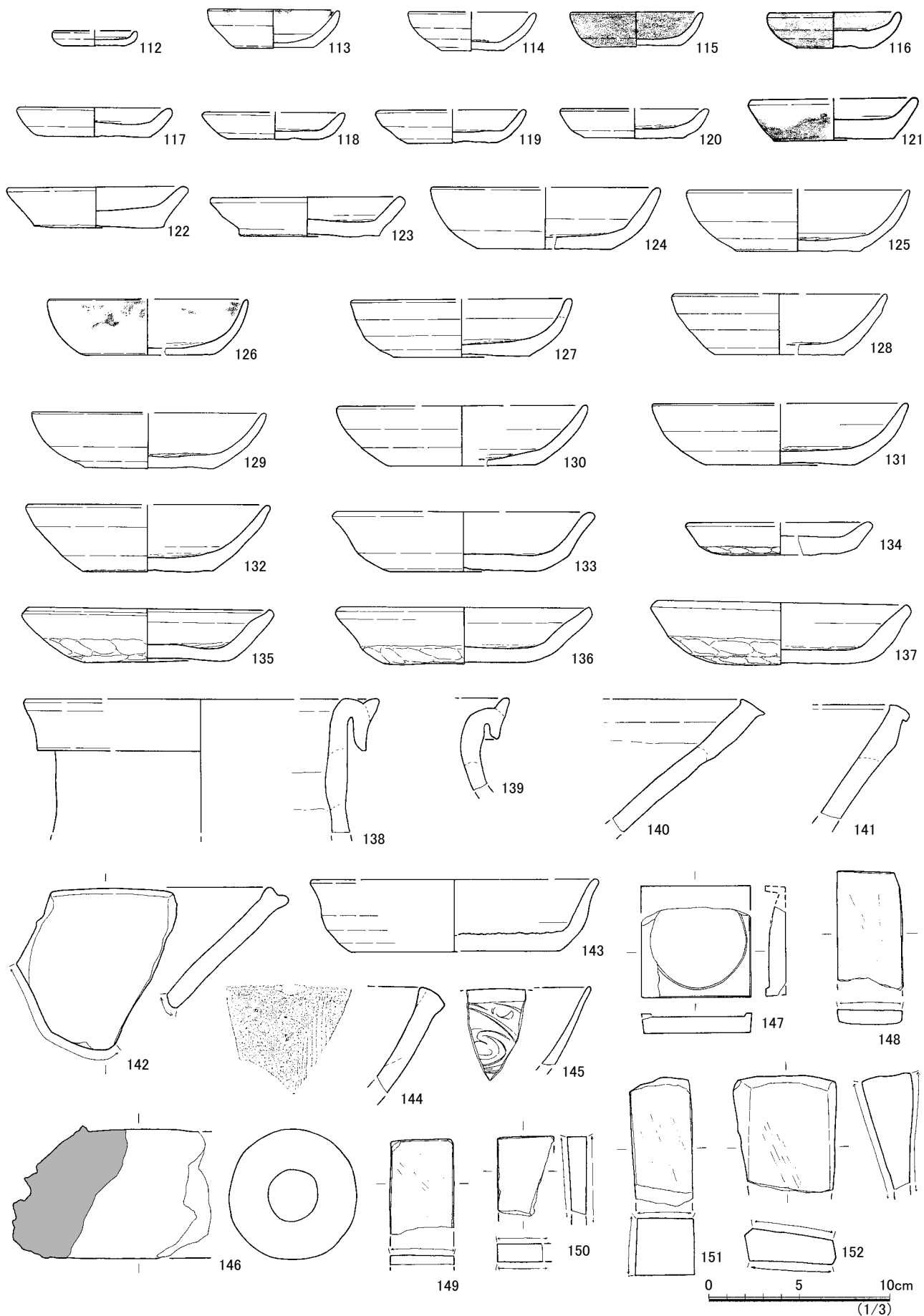


图 13 中世上層 遺構 3 出土遺物①

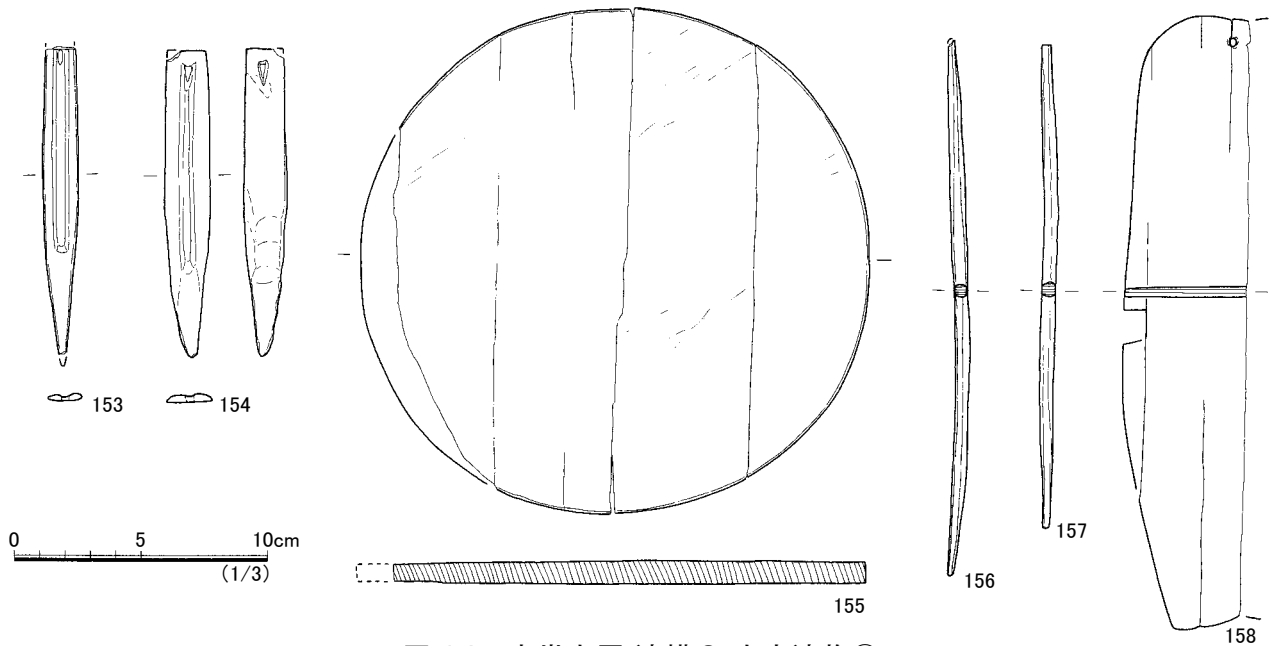


図 14 中世上層 遺構 3 出土遺物②

である。平底形態を取り、大きく開く体部からナデにより外傾する口縁部に至る。口唇部には丸みを帯びた端面がナデによって形成されている。器形・法量ともに 133 のロクロ大皿との相関性が窺われる。

138～145には陶磁器の小片を示した。常滑窯の製品には7～9型式の資料が混在している。

142は片口鉢Ⅱ類の口縁部片で、割れ口の一辺を研磨具として再利用している。

143は瀬戸の卸皿。体部内外面に灰釉が刷毛塗りされる。外底面はヘラケズリ調整。

146は土製品で轆の羽口。熔解炉との接続部は著しい被熱のため黒変し、ガラス質が固着している。

147は長門・赤間産の紫金石正方円面硯。6cm(2寸)四方に製作されている。15世紀以降の所産か。

148～152は砥石各種。

153・154は骨製品で装身具の筭。154は粗いケズリ痕が残り、加工途上品と考えられる。

155～158は木製品各種。155は曲物の底または蓋板。

159は銅製品で六器鉢の完形品。密教法具の一つで、皿台とのセットが六対で一具となる。

160～181は銅銭。全て中国・北宋代の初鑄である。

182～193は現地調査時に遺構8からの出土としたもの。整理段階で遺構3における覆土様相の違いとして認識された。遺構の中では、覆土上層に当たる。

182～187はロクロかわらけ。182は極小の内折れ皿。183～185の小皿、186・187の大皿ともに主体となるのは器壁が薄く深身で丸みを帯びた一群である。

188・189は常滑の片口鉢Ⅱ類。188は常滑9型式か。189は体部下位の小片。内面に焼成前ヘラ書きの「×」が見られる。

190は瀬戸の腰袴形香炉。底部外面を除き鉄釉が施され、二次的被熱のためか表面が発泡または銀化した箇所が見られる。体部には連珠文を二段に配し、底部外縁に三足を付している。

191は土器羽釜の口縁部片。器壁は非常に薄く、罎下部～胴部外面に煤が付着している。

#### 中世上層 遺構 9 出土遺物 (図 17)

竪穴建物の覆土と裏込め土より出土した遺物である。

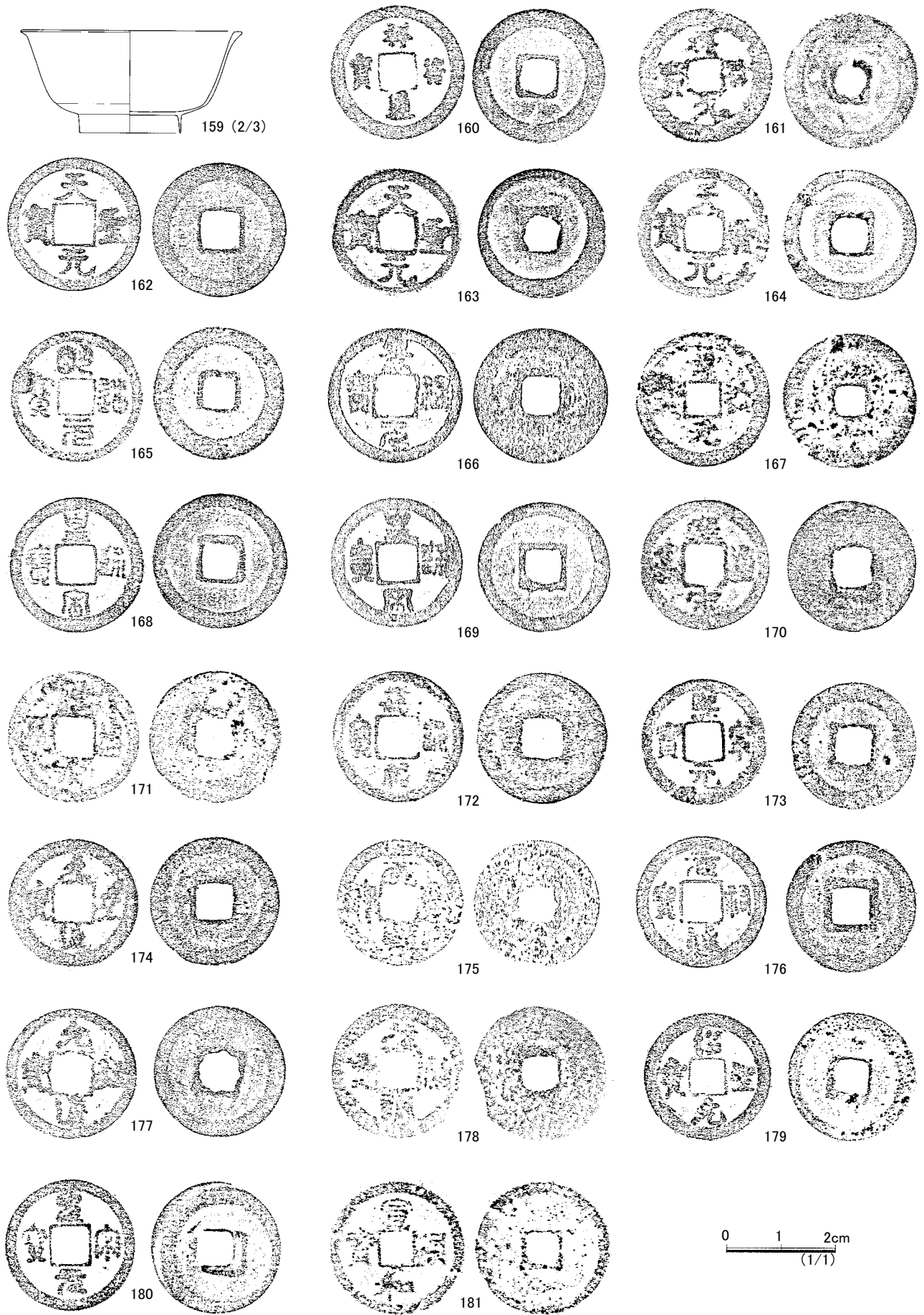


图 15 中世上層 遺構 3 出土遺物③

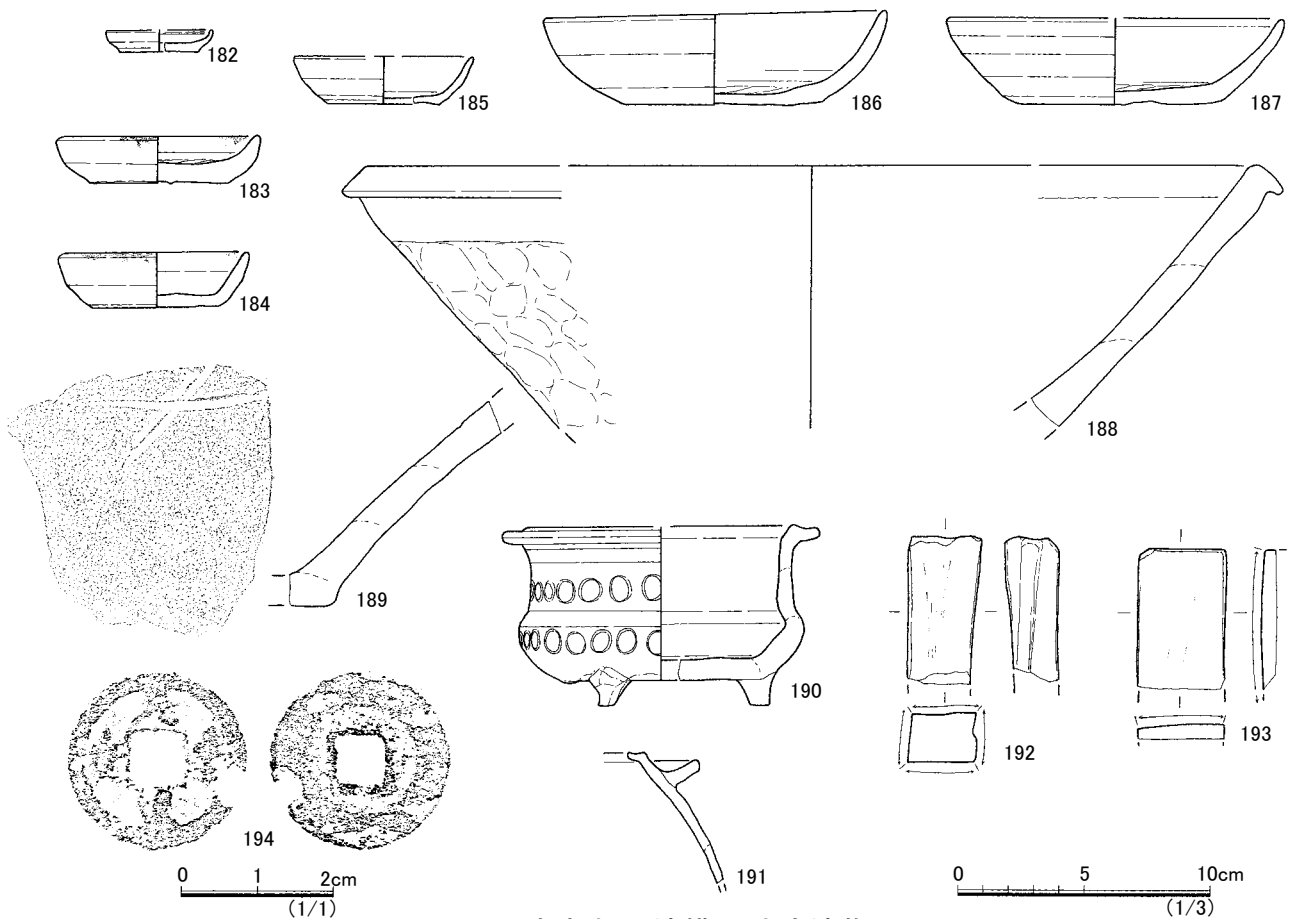


図 16 中世上層 遺構 8 出土遺物

195 は瀬戸の四耳壺。口頸部内・外面に灰釉が刷毛塗りされる。

196 は常滑片口鉢 I 類の口縁部小片。

197～199 は木製品。197・198 の小円板については用途が明らかでない。

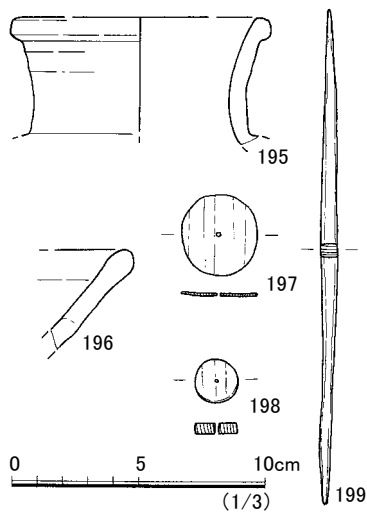


図 17 中世上層 遺構 9 出土遺物

#### 中世下層 遺構 4 出土遺物 (図 18・19)

大型の南北溝(堀)の覆土中から出土した遺物である。調査自体が覆土の下層まで及んでいないため全て上層からの出土資料と認識すべきだが、その中でも出土レベルの違いにより 200～236 の上層と、237～256 の下層(上層下部)とに分けることができた。

200～204 はロクロかわらけ。小皿は口径 9cm 台で底径 8cm 前後、器高 2cm 未満と広底で低平な器形を呈する。大皿は口径 14cm 前後と大ぶりであり、体部の下位～中位に膨らみを持つ。小皿・大皿とも器壁が厚く量感がある。胎土には細砂粒が多く含まれる。

205～214 は手づくねかわらけで、210 までが小皿、以下は大皿である。小皿は口径 9cm 台後半、大皿は口径 14cm 台が中心となり大ぶりである。胎土はロクロ成形品に比べ細砂粒の混入が少ない。

215～218 は陶磁器と瓦器で、いずれも小片資料である。

219～236 は木製品。219 は折敷の再利用品か。表面に墨書様の痕跡が見られる。



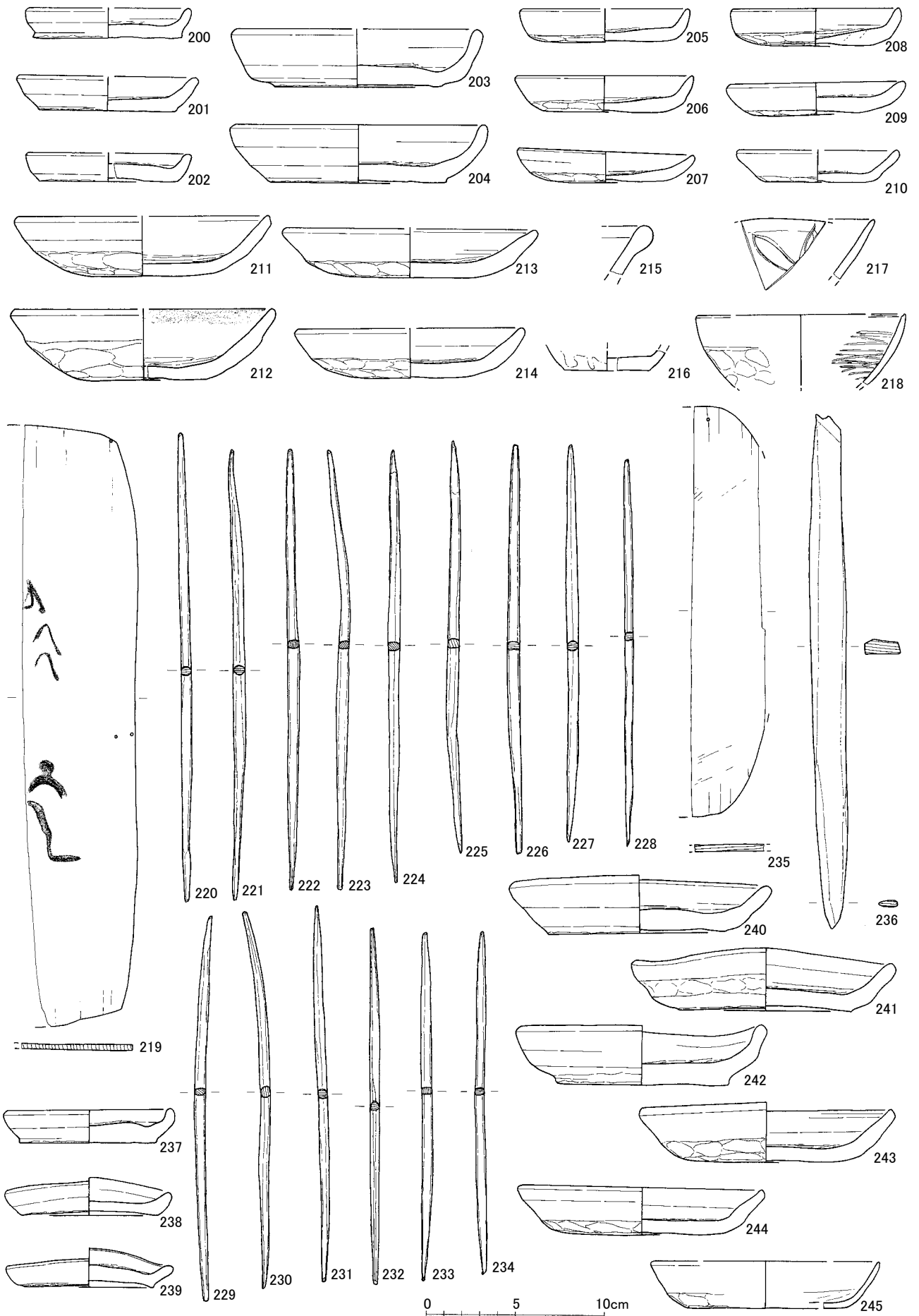


图 18 中世下層 遺構 4 出土遺物①

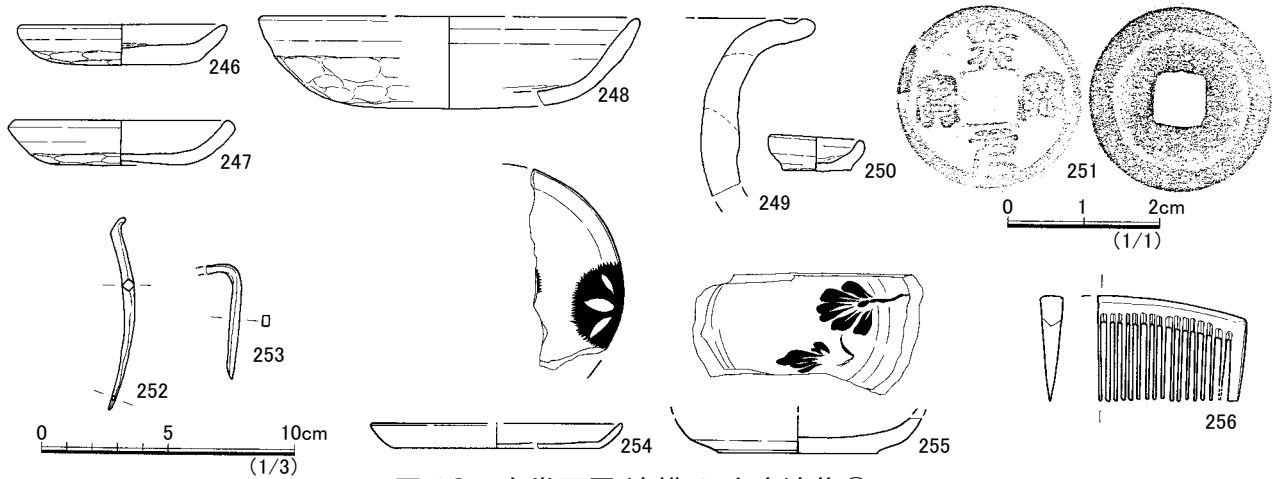


図 19 中世下層 遺構 4 出土遺物②

220～234 は箸。表 1 に示したように、全長の分布は 22cm 台の後半に最も集中する。

237～245 は下層出土資料。237～239 はロクロかわらけの小皿。口径 9cm 前後、底径 7cm 台と広底で、概して器形の歪みが大きい。器壁が厚く量感があるものの、重量には個体差が認められ、一定していない。胎土は細砂粒を多く含む。

240～242 もロクロかわらけで大皿。小皿と同様、器形の歪みが目立つ。口径 14cm 前後と大ぶりで、体部下位～中位が膨らみ低平な器形は手づくね大皿との相関性を窺わせる。241 は体部に手づくね風の指頭調整痕が残る。器壁は厚く、完存資料は 240 g を超え、重量感がある。

243・244 は手づくねかわらけの大皿。口径 14cm 前後と大ぶりで低平な器形である。口縁部内面はナデにより外傾し、口唇部も丸みを帯びた端面が作られている。胎土の細砂粒は少なく、緻密である。

245 は手づくねの白かわらけ大皿。器壁は非常に薄い。

246～255 は遺構 4 からの出土資料として取り上げなかったが、概ね同遺構に帰属するであろう。252・253 の鉄釘は遺構 3 で出土したもので、誤って図 19 への掲載となった。

246・247 は手づくねかわらけの小皿。247 は器壁が薄く口唇部はナデにより面をなしている。

249 は常滑 3 型式頃の甕口縁部片。

250 は子持ち山皿の子皿部分。渥美・湖西型。

251 は中国・北宋代の銅銭で熙寧元寶。

254・255 は漆器の皿と椀。ともに黒色系漆を塗った後、内面に赤色漆による筆描き文様が施される。

256 は横櫛。1/2 ほど遺存し、表面に黒色漆が塗られている。

表 1 箸計測値分布

全長(cm)	上 遺 構 3		下 遺 構 4	
	点数	比率	点数	比率
14.6～15.0		0.0%	1	2.0%
15.1～15.5		0.0%		0.0%
15.6～16.0		0.0%	1	2.0%
16.1～16.5		0.0%	1	2.0%
16.6～17.0		0.0%		0.0%
17.1～17.5		0.0%	2	3.9%
17.6～18.0		0.0%	3	5.9%
18.1～18.5		0.0%	1	2.0%
18.6～19.0		0.0%		0.0%
19.1～19.5		0.0%	3	5.9%
19.6～20.0	1	25.0%	2	3.9%
20.1～20.5	1	25.0%	4	7.8%
20.6～21.0		0.0%	1	2.0%
21.1～21.5		0.0%	2	3.9%
21.6～22.0		0.0%	4	7.8%
22.1～22.5	1	25.0%	2	3.9%
22.6～23.0		0.0%	9	17.6%
23.1～23.5	1	25.0%	5	9.8%
23.6～24.0		0.0%	3	5.9%
24.1～24.5		0.0%	1	2.0%
24.6～25.0		0.0%	3	5.9%
25.1～25.5		0.0%	1	2.0%
25.6～26.0		0.0%	1	2.0%
26.1～26.5		0.0%	1	2.0%
小計	4	100.0%	51	100.0%

## 第五章 調査成果のまとめ

調査の結果、本地点は調査区のほぼ全域が中世の南北溝であることが明らかとなった。Ⅱ区の南西角では竪穴建物のごく一部が検出され、旧溝（下層 遺構 4）の埋没後、この西岸を切って竪穴建物（遺構 9）が、次いで新溝（上層 遺構 3）、という順序で遺構変遷を辿ることが確認できた。以下、各遺構の年代について出土遺物をもとに検討を行い、若干の所見を述べてまとめとしたい。なお、本章の文中で記す地点番号は、図 1 に対応している。

### 中世上層 遺構 3（南北溝）

現地調査時に複数の遺構番号を付したが、資料整理に当たり概ね本遺構内での作り変えや浚渫の結果生じた痕跡と判断した。そのため覆土の堆積状況も一定した形では把握できず、出土遺物も新旧資料が入り混じっていた。

出土かわらけのうち主体となるのはロクロ成形品である。手づくねの構成比率は低く、比較的古手の形態を留める図 13 - 135 ~ 137 などは重複する旧溝（遺構 4）から掘り上げてしまった可能性が高い。同様に、ロクロかわらけの小皿でも大振りである図 13 - 121 ~ 123 も溝 4 に帰属したものであろう。傾向としては大皿・小皿とも側面観が深く丸みを帯びるものが多く、小皿には低平で丸みをもつタイプも含まれる。この手の存続期間については諸見解があるが、概ね 13 世紀末 ~ 14 世紀代の様相と捉えておく。厚手化し外傾する後続形式は含まないが、常滑片口鉢Ⅱ類などに 15 世紀代まで下る要素も散見された。調査時に遺構 8 として取り上げた覆土上層の出土遺物（図 16）も、14 世紀代に収まる様相と考えると良いだろう。

### 中世上層 遺構 9（竪穴建物）

遺物は全て木組み壁体の裏込め土から出土したもので、ごく少量に留まった。個々の遺存状態も良好とはいえ年代比定の根拠としては甚だ薄弱であるが、図 17 - 195 の古瀬戸灰釉四耳壺は前期様式のⅢ期（13 世紀中頃）に相当する可能性を持つ。遺構間の新旧関係から判断しても、概ね 13 世紀中頃 ~ 後半の構築・使用年代を考えて良いだろう。本地点の西に程近い地点 2 では 13 世紀中頃 ~ 14 世紀前半の竪穴建物 23 棟以上が検出されており（原 2008、山口 2008）、齟齬のない年代観といえる。二ノ鳥居以南、若宮大路と小町大路とに挟まれた一画においては軒並み同時期の竪穴建物が重複して確認されており、地点 5 と 6 では柱穴建ちないし木組み構造から切石を用いる土台・壁体への構造変化が捉えられている（佐藤・小林 1994、宮田・森・高野・滝澤 1997）。竪穴建物の用途としては倉庫と考えるのが一般的で、当地域が「倉街」といった様相を呈し、そこに幕府や北条得宗家など政治権力側の関与があったとする理解もなされている。第一章で触れた「小町大路」の経済的重要性を窺わせる遺構群といえる。これら倉庫の所有者や運営形態については十分な解明に及んでなく今後の課題といえるが、本地点の遺構 9 も鎌倉後期における都市内流通を担うべく建てられたのであろう。前段階の南北溝（遺構 4）が埋没した後、中世基盤層が遺存する東限ラインまで建物が進出したところに該期の当地区における土地利用の過密性が見て取れ、一方で重量物を支え得る地盤の合理的選択の跡も窺うことができ興味深い。これと同じ状況は地点 5 でも認められ、倉庫需要の増大を示す現象として理解できよう。

### 中世下層 遺構 4（南北溝）

調査区のほぼ全域を占める大規模な南北溝で、確認できたのは西岸の落ち込みだけで本来の幅や深さを把握することは叶わなかった。こうした部分的な検出状況から、断面 V 字状または逆台形の素掘り溝という判断を行った。覆土は有機質腐植土（まぐそ）をベースにしており、西から東への流入

土として認識できるものであった。また、最上層を除き泥岩粒の混入がなかった点も特徴といえる。

遺構自体を完掘できていないため資料上の制約はあるが、覆土上層の出土遺物のうち大半をかかわらが占めている。大皿は手づくねが多く、小皿では手づくねとロクロ成形品が拮抗した数量となっている。図 18 に掲げた中では 237 ~ 245 がまぐそ層からの出土が確実な資料で、245 の白かわらけを除き完形、またはそれに準じる遺存状態であった。他の資料も含め全体を通して見ると、大皿・小皿とも手づくねとロクロ成形品とに器形・法量面の相関性が窺え、広底かつ低平な側面観を呈する一群が主体となる。ロクロかわらけは胎土に砂粒を多く含む点、比較的古い要素を備えており、概ね 13 世紀前葉の年代が当てられるだろう。後続する堅穴建物（遺構 9）の年代観も参考とすれば 13 世紀中頃には完全に埋没していた可能性が高く、覆土様相も勘案すれば 13 世紀前半の中で漸次堆積が進んだことが推察される。

#### 周辺調査成果との比較—下層南北溝（遺構 4）の展開を中心に—

地点 3 では現小町大路の前身となろう南北道路面と、この西側溝が 7 時期に亘って検出されており、このうち最新段階である第 1 期の道路面と側溝（溝 1）からは 14 世紀後半～15 世紀前半の遺物が出土している。下位の第 2 期～第 4 期道路面と側溝は 13 世紀末～14 世紀前半に、第 5 期が 13 世紀後半、第 6 期が 13 世紀中頃、第 7 期が 13 世紀前半に比定され、第 5 期以降に泥岩細粒による舗装が施されるようになる。第 2 期～第 4 期の道路面に対応する西側溝（溝 2）と第 1 期の西側溝（溝 1）では凝灰岩切石（鎌倉石）や破碎泥岩（土丹）を積み上げた護岸が行われており、溝 2 の下位ではこの前身施設と見られる木組みが検出されている（宮田・滝澤・安藤 2014）。大巧寺の参道を挟み南に位置する地点 4 でも同様の遺構変遷が把握されており（松吉・山口 2013）、この 4 年ばかりの間に「小町大路」前身道路の実態解明に近づく発見が相次いでいる。

本地点で検出された下層の南北溝（溝 4）について、地点 3・4 ではこの東岸と見られる落ち込みが、地点 5 では本地点と同様に西岸からの落ち込みが確認されている（佐藤・小林 1994）。これらはいずれも中世最下層を確認面としており、検出位置や流下方向の他、覆土様相や落ち込みの傾斜度も共通することから同一遺構と考えて間違いないだろう。地点 3 では、確認レベルから 2 m を超える深さがあり、出土遺物から 13 世紀前半という年代観が与えられている。本地点の遺構 4 より新しい遺物も含んでいるが、大よそ 13 世紀中頃までに埋没したと考えて良いだろう。各地点とも河川など自然要因の遺構である可能性が指摘されているが、図 20 で示したように現行の小町大路に沿って一直線に延びる点、また、断面形態（落ち込みの傾斜度）に高い斉一性が窺えると同時に、初期若宮大路側溝に代表される鎌倉時代でも古い時期の溝が概して断面 V 字状ないし逆台形の素掘り溝である実例などを根拠に、筆者は自然流路の改変も含めた人工溝と考えている。図 20 の合成図では上幅が 7 m 強に復元できるものの、同一地点で両岸を確認できていないため、参考値として示すに留めたい。今後、図上での延伸部を調査する際には、両岸および底面まで確認すべく調査計画を立てる必要があるだろう。一定規模の調査面積が必要であることは無論、掘削の規制深度や発生土の処理など諸条件が整わなければならずコスト面も嵩むことになるであろうが、溝の具体的な構築・存続年代の把握とともに鎌倉時代初期～前期における土地造成の在り方を知る上で有用な情報をもたらしてくれる筈である。

#### 付記—出土遺物の年代観について—

出土遺物の年代観について、本報告では宗臺秀明氏の編年案（宗臺 2005）をベースに提示してきた。中世の鎌倉において最も普遍的かつ安定的に出土する「かわらけ」の年代観に関しては研究者間に見解の相違があることが指摘されて久しい（永田 2014）。今後、新出資料の蓄積に伴う検証が進められるとともに、共通認識の形成が図られることを期待したい。

【引用・参考文献】

宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

永田史子 2014「考古学からみた鎌倉研究の現状と課題」『鎌倉研究の未来』中世都市研究会編 山川出版社

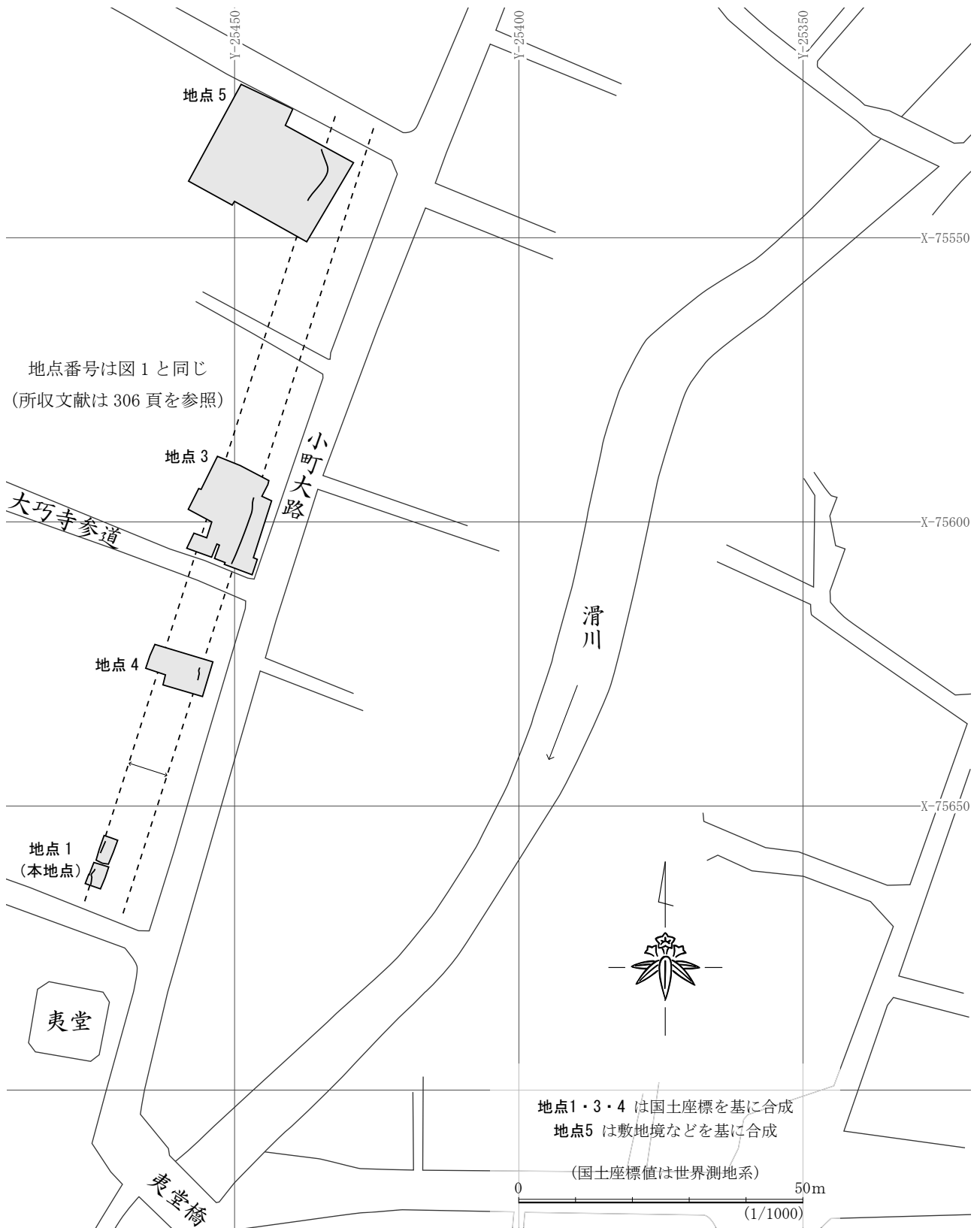


図 20 下層南北溝（遺構 4）の推定展開図

表2 出土遺物カウント表

種別・産地		ロクロ かわらけ			手づくね かわらけ		白かわらけ		土器		
		大	小	内折れ	大	小	ロクロ ・大	手づくね ・大	鍔釜	不明	火鉢
層位	出土遺構	点数	重量								
表採		5	260	2	85						
表土	表土・攪乱	119	2565	39	660	4	180	1	15		
表土ほか	試掘坑	54	930	26	275						
中世上層								1	5	2	35
中世上層	3(新溝)	254	4490	59	1155	2	10	27	540	2	45
中世上層	9(堅穴)	1	15	1	10	1	15			1	35
中世下層	4(旧溝)	31	1555	39	915			178	5385	52	850
黒色土						8	120	2	15		
青灰色砂											

種別・産地		白磁				青白磁		(同安系) 青磁	(龍泉系) 青磁			
		口元皿	口元碗	碗類	瓶類	梅瓶	瓶類	榴槤文碗	劃花文碗	蓮弁文碗	碗・皿類	壺類
層位	出土遺構	点数	重量									
表採											2	90
表土	表土・攪乱					1	5		1	5	6	70
表土ほか	試掘坑										1	30
中世上層							1	5	1	10	4	25
中世上層	3(新溝)	4	40	1	15	2	70		1	20	1	10
中世上層	9(堅穴)								1	10	3	30
中世下層	4(旧溝)			1	25	1	25		4	35	1	5
黒色土											1	20
青灰色砂												

種別・産地		瀬戸											
		卸皿	折縁鉢	天目碗	香炉	柄付片口	すり鉢	縁釉小皿	入子	瓶類			
層位	出土遺構	点数	重量										
表採		1	60		1	80							
表土	表土・攪乱	2	55	1	35	1	80	1	85	1	35		
表土ほか	試掘坑			2	380					1	20		
中世上層				2	380								
中世上層	3(新溝)	3	95	1	10	1	10				3	150	
中世上層	9(堅穴)	4	300	2	100			1	115	2	60	2	30
中世下層	4(旧溝)											5	140
黒色土												1	45
青灰色砂													

種別・産地		湖・渥西・美			尾・常張・滑				東播	備前											
		甕	壺	こね鉢	甕	壺	山茶碗	片口鉢 Ⅰ類	片口鉢 Ⅱ類	こね鉢	すり鉢										
層位	出土遺構	点数	重量																		
表採					1	90		1	65	1	185										
表土	表土・攪乱	8	1010	2	110	46	3405	1	245	12	675	19	1955	2	225						
表土ほか	試掘坑					14	1595			3	125	7	410								
中世上層		5	535			135	10930	4	260	24	1605	54	4440	2	55	3	500				
中世上層	3(新溝)	8	385	1	25	1	70	94	7750			1	15	15	785	35	3115			3	180
中世上層	9(堅穴)									1	15										
中世下層	4(旧溝)	6	575			25	1155														
黒色土						2	125	1	30												
青灰色砂																					

種別・産地		瓦器	瓦質土器	瓦	土製品	銅製品		鉄製品・鉄滓										
		碗	火鉢	平瓦	輪羽口	六器	銭	刀子	釘	鉄滓								
層位	出土遺構	点数	重量															
表採							7	28										
表土	表土・攪乱			19	1970	1	300	2	8									
表土ほか	試掘坑			5	690													
中世上層						3	570	1	65	14	53	1	60	5	60			
中世上層	3(新溝)			34	3545	1	415	1	36	21	88			2	10	1	365	
中世上層	9(堅穴)																	
中世下層	4(旧溝)	1	10	2	110													
黒色土																		
青灰色砂																		

種別・産地		石製品			骨角製品			
		滑石鍋	硯	砥石	筭			
層位	出土遺構	点数	重量		点数			
表採								
表土	表土・攪乱			1	50	3	220	
表土ほか	試掘坑							
中世上層		4	275			10	140	
中世上層	3(新溝)			1	65	13	570	2
中世上層	9(堅穴)							
中世下層	4(旧溝)							
黒色土								
青灰色砂								

(表2の凡例)

か ろ く わ ら く ら け			
大	小	内折れ	
点数	重量		
5	260	2	85
119	2565	39	660
54	930	26	275
254	4490	59	1155
1	15	1	10
31	1555	39	915

破片点数 重量 (g)

(木製品・自然遺物は点数のみ)

種別・産地 器種		木製品 ・ 木材													漆器	
		草履芯	箸	折敷	横櫛	扇骨	独楽	曲物	刀子鞘	工具柄	ヘラ状	棒状	円板	板	不明	碗
層位	出土遺構	点数														
表採															1	
表土	表土・攪乱										1		6			
表土ほか	試掘坑															
中世上層		2	5	2			1	2			17	3	18	1		
中世上層	3(新溝)	1	13	11	1			3			21	1	42		1	
中世上層	9(堅穴)		1								11		6			
中世下層	4(旧溝)	8	155	4	1	2		3	1	1	90	1	58			2
黒色土																
青灰色砂																

種別・産地 器種		人骨		獣骨		種子	
		頭蓋	不明	ウシ・ウマ	魚類	桃核	胡桃核
層位	出土遺構	点数					
表採							
表土	表土・攪乱		5		2		
表土ほか	試掘坑		1				
中世上層			17		2		
中世上層	3(新溝)	1	22			6	1
中世上層	9(堅穴)						
中世下層	4(旧溝)		1				1
黒色土							
青灰色砂							

種別・産地 器種		具																		
		不明	アカニシ	サザエ	バイ	ツメタ	ダンベイキサゴ	ツノマタナガニシ	ウミニナ	カガミガイ	アワビ	カキ	バテイラ	ハマグリ	チヨウセンハマグリ	アサリ	カラスガイ	サクラガイ	サルボウガイ	シオフキガイ
層位	出土遺構	点数																		
表採																				
表土	表土・攪乱		2	2	1	2							1	1						1
表土ほか	試掘坑																		1	
中世上層			10	6	2	20	5					1	1	20	1				2	
中世上層	3(新溝)		33	13	1	36	6		2	3		2	1	68		5			4	1
中世上層	9(堅穴)													1						
中世下層	4(旧溝)		15	7	2		3	1		3	4	1	1	2	159	1				1
黒色土																				
青灰色砂						2			1									1	1	



表3 出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
表土など出土遺物① (図8)						
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.5	2.0	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
2	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.5	3.3	略完形 [50]g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	4.3	2.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
4	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.3)	(8.3)	3.5	1/3 胎土:泥岩粒 色調:淡黄褐色
5	陶器	転用陶片 (すり常滑)	長さ 9.4	幅 8.5	厚さ 1.2	胎土:長石粒 色調:褐灰色～暗褐色 常滑甕の胴部片を転用
6	陶器	瀬戸 折縁深皿	(21.7)	(10.7)	5.2	1/3 胎土:精良 色調:白黄色 釉調:緑白色(灰釉)
7	瓦質土器	火鉢	—	—	[7.9]	口小片 胎土:精良、細砂粒 色調:胎土淡灰黄色、器表黒色 外面に菊花文印+貼り付け連珠文 IVa類
8	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	7.2	1.8	1/2 胎土:砂質 色調:淡褐灰色
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.4	1.7	略完形 [49]g 胎土:緻密 色調:淡黄褐色
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.7	2.2	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄色橙色 外底面の板状圧痕なし
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.3	4/5 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄褐色
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.4)	2.4	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
13	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	2.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
14	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.3	2.9	略完形 [89]g 胎土:精良、白色針状物質・雲母 色調:淡褐灰色
15	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	6.8	3.3	1/3 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
16	陶器	常滑 甕	—	—	[10.5]	口小片 胎土:長石粒 色調:淡橙褐色～暗褐色 8型式(1350～1400頃)
17	陶器	瀬戸 片口鉢	—	—	[4.2]	口小片 胎土:白色礫微量 色調:灰色 (尾張・山茶碗系)
18	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[6.5]	口小片 胎土:長石粒 色調:赤褐色 8～9型式(1350～1450頃)
19	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[7.4]	口小片 胎土:長石粒多量 色調:暗赤褐色
20	陶器	備前 すり鉢	(26.4)	(12.0)	14.8	1/8以下 胎土:白色粗砂粒多量、縞状の練り痕 色調:暗赤褐色
21	陶器	瀬戸 天目茶碗	(12.8)	—	[6.0]	口～体1/3 胎土:精良、黒色微粒 色調:黄白色 釉調:暗褐色(鉄釉)
22	陶器	瀬戸 縁釉小皿	(12.4)	—	[2.2]	口1/5 胎土:精良 色調:淡黄灰色 釉調:緑灰色(灰釉) 古瀬戸後期様式III～IV期・15世紀前半～中葉
23	陶器	瀬戸 平碗	—	4.7	[2.8]	底部のみ 胎土:精良 色調:白黄色 釉調:淡緑灰色(灰釉) ケズリ出し高台、体部外面回転ヘラケズリ
24	磁器	青磁 碗	—	(5.7)	[2.0]	底部1/2以下 胎土:精良、黒色微砂粒・気泡微量 色調:灰色 釉調:淡緑色 高台内回転ヘラケズリ 龍泉窯系
25	土製品	鞆羽口	長さ 7.2	直径 7.4	孔径 3.0	[302]g 炉体接続部が黒変、ガラス質溶解
表土など出土遺物② (図9)						
26	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
27	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	太平通寶 中国北宋代・976年初鑄
28	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	淳化元寶 中国北宋代・990年初鑄
29	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	祥符元寶 中国北宋代・1009年初鑄
30	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
31	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
32	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
33	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
34	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	政和通寶 中国北宋代・1111年初鑄
中世上層 出土遺物① (図10)						
35	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	口小片、傾き不明 胎土:長石粒 色調:暗赤褐色
36	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.3)	2.1	1/3 胎土:白色針状物質・泥岩粒 色調:淡黄褐色 灯明皿、器面の剥落目立つ
37	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	4.0	2.3	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
38	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.7	3.3	略完形 [135]g 胎土:白色針状物質 色調:黄褐色
39	陶器	瀬戸 入れ子	5.2	3.3	1.6	4/5 胎土:精良 色調:灰白色 口縁部内外面に自然釉 焼成時の黒斑あり
40	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.7	2.2	4/5 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
41	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.6	2.1	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
42	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	2.3	完形 49g 胎土:精良 色調:淡黄褐色 灯明皿、口唇部に小さい打ち欠き5ヶ所
43	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.8	2.4	完形 60g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
44	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.4	2.4	完形 60g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
45	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.8	2.0	略完形 [51]g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
46	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.7	2.1	3/4 胎土:精良、白色針状物質、雲母 色調:淡黄褐色 灯明皿
47	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.7	2.1	4/5 胎土:泥岩粒 色調:にぶい橙褐色
48	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.8	1.9	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡褐色
49	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	1.7	完形 42g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
50	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	4.9	2.0	4/5 胎土:白色針状物質・スコリア 色調:にぶい褐色
51	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	1.8	完形 50g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
52	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.8	4/5 胎土:白色針状物質、粗雑 色調:淡黄褐色
53	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.6	1.7	略完形 [55]g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
54	土器	ロクロ かわらけ・中	(9.8)	(6.0)	2.8	1/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色
55	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.1)	2.7	1/5 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色
56	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.8	3.0	略完形 [106]g 胎土:雲母微量 色調:淡黄褐色
57	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.9	3.3	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
58	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	7.9	3.6	4/5 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
59	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.1	3.8	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄色橙色 灯明皿
60	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(7.3)	3.0	1/5 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
61	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.0	3.8	完形 184g 胎土:泥岩粒・白色針状物質 色調:淡黄褐色
62	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.5	3.5	3/4 胎土:白色針状物質、粗砂粒 色調:淡黄褐色 灯明皿
63	土器	手づくね かわらけ・小	8.9	—	1.7	完形 62g 胎土:砂質、白色針状物質 色調:橙褐色 内面薄く黒変
64	土器	手づくね かわらけ・小	(9.4)	—	1.5	1/3 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
65	土器	手づくね かわらけ・小	(9.7)	—	1.7	1/3 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄褐色
66	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	—	1.9	1/2弱 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色
67	土器	手づくね かわらけ・小	9.4	—	2.5	4/5 胎土:やや砂質、白色針状物質 色調:にぶい褐色 内外面とも薄く黒変
68	土器	手づくね かわらけ・大	14.0	—	3.8	略完形 [241]g 胎土:細砂粒多量、白色針状物質 色調:黄褐色
69	土器	手づくね かわらけ・大	(12.2)	—	3.0	1/4 胎土:砂質 色調:淡褐色
70	土器	手づくね かわらけ・大	(14.2)	—	2.9	1/6 胎土:やや砂質 色調:淡灰黄色
71	陶器	尾張 片口鉢	(29.0)	—	[8.3]	口1/8 胎土:長石粒多量、黒色の鈹物粒が器面に表出 色調:灰色 瀬戸産か
72	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(29.2)	—	[6.9]	口1/6 胎土:長石粒多量 色調:淡橙褐色 口縁内面に煤付着
73	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	口小片、傾き不詳 胎土:長石粒多量、粗雑 色調:赤褐色 9型式(1400~1450年頃)
74	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	体小片、傾き不明 胎土:長石粒微量、やや砂質 色調:暗褐色 体部内面に菊花文スタンプ→使用により滑らか
75	陶器	瀬戸 天目茶碗	—	—	[2.9]	口小片 胎土:精良 色調:灰白色 釉調:黒褐色(鉄釉)
76	陶器	東播 こね鉢	—	—	[3.0]	口小片 胎土:黒色砂粒、粗雑 色調:灰色~灰白色 口縁部外面が黒変(焼成時)
中世上層 出土遺物② (図11)						
77	陶器	備前 すり鉢	(36.7)	—	[10.7]	口1/6 胎土:白色粗砂粒 色調:赤褐色 内面に8条一単位の櫛目 内面に墨画(蓮華?)
78	陶器	備前 すり鉢	—	—	[3.5]	口小片 胎土:白色砂粒少量、精良 色調:暗赤褐色 内面に6条一単位の櫛目、自然釉
79	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[2.8]	口小片 胎土:精良 色調:灰白色 釉調:緑灰色 内面に片切り彫りの蓮華文 龍泉窯系・大宰府焼Ⅰ-2a類
80	瓦質土器	火鉢	—	—	[10.5]	口小片 胎土:粗砂粒 色調:灰白色~灰黒色 口縁部内外面ヨコヘラミガキ I d類
81	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [7.6]	幅 2.9	厚さ 0.8	1/2 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
82	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [7.3]	幅 3.7	厚さ 3.1	1/2 伊豆半島・合掌寺砥 薄桃色
83	石製品	滑石鍋	長さ 10.9	幅 3.6	厚さ 2.7	再加工品、用途不明 表面にノミ状工具痕
84	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	咸平元寶 中国北宋代・998年初鑄
85	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	銭文不明
86	木製品	刀子鞘	長さ [7.2]	幅 2.2	厚さ 0.7	残存率不明 板目材2枚を組み合わせ
87	木製品	曲物 底or蓋	長さ 21.8	厚さ 1.0		1/2 柾目材 側辺に木釘2ヶ所
88	木製品	扇骨	長さ [26.5]	幅 1.8	厚さ 0.9	2本遺存 板目材
89	木製品	有孔円板	直径 9.2	厚さ 1.1	孔径 [0.2]	1/2 板目材 上面外縁部を面取り
90	木製品	有孔円板	直径 1.6	厚さ 0.1	孔径 0.1	完形 板目材
91	木製品	有孔円板	直径 2.3	厚さ 0.3	孔径 0.2	完形 柾目材
92	木製品	用途不明	長さ 18.7	幅 3.4	厚さ 2.4	完形? 板目材 直径4mmの貫通孔あり(木釘で埋没)
中世上層 出土遺物③ (図12)						
93	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	5.2	2.1	2/3 胎土:精良 色調:淡黄褐色
94	陶器	常滑 蔦口壺	—	(7.8)	[7.8]	1/2弱 回転台成形 内底面と肩部外面に自然釉
95	陶器	常滑 甕	—	—	[16.9]	口小片 胎土:長石粒・黒色微粒 色調:暗赤褐色 9型式(1400~1450頃)
96	陶器	東磐系 こね鉢	—	—	[3.5]	口小片 胎土:細砂粒・白色粗砂粒 色調:灰色 口縁部外面黒変(焼成時)

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
97	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
98	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
99	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	咸平元寶 中国北宋代・998年初鑄
100	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	天禧通寶 中国北宋代・1017年初鑄
101	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
102	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
103	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	嘉祐通寶 中国北宋代・1056年初鑄
104	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代・1068年初鑄
105	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元符通寶 中国北宋代・1098年初鑄
106	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	嘉定通寶 中国南宋代・1208年初鑄
107	木製品	独楽	直径 (1.8)	高さ [1.6]	軸高 [0.6]	1/2 榎目材
108	木製品	箸	長さ 23.8	幅 0.7	厚さ 0.7	完形
109	木製品	箸	長さ 22.1	幅 0.5	厚さ 0.7	完形
110	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.7	厚さ 0.7	完形
111	木製品	箸	長さ 19.9	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
中世上層 遺構3 出土遺物① (図13)						
112	土器	ロクロ かわらけ	(4.6)	3.4	0.8	内折れ 1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡灰褐色
113	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.5	2.2	完形 44g 胎土:精良 色調:淡黄褐色
114	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	(3.4)	2.1	2/5 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
115	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.0	4/5 胎土:精良 色調:黒褐色
116	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.3	2.1	完形 55g 胎土:白色針状物質 色調:橙褐色 灯明皿
117	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.3	1.7	完形 57g 胎土:精良 色調:暗黄褐色
118	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.0	1.5	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
119	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	4.9	1.9	2/3 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色
120	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(7.4)	1.7	1/4 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
121	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	6.7	2.3	2/3 胎土:砂質 色調:褐灰色
122	土器	ロクロ かわらけ・小	9.7	7.1	2.3	略完形 [107]g 胎土:砂質、白色針状物質 色調:橙褐色 底部回転糸切り痕緩い
123	土器	ロクロ かわらけ・小	10.4	7.7	2.3	4/5 胎土:砂質 色調:橙褐色
124	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.5	3.2	1/3 胎土:泥岩粒・白色針状物質 色調:淡黄褐色
125	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	6.8	3.4	1/2 胎土:雲母微量、精良 色調:淡黄褐色
126	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	(5.6)	3.1	1/4 胎土:砂質、白色針状物質・雲母 色調:淡褐灰色 薄手丸深形
127	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.5	3.2	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
128	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.7)	(7.2)	3.4	1/5 胎土:雲母微量 色調:淡黄褐色
129	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.9)	7.0	3.1	2/3 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色

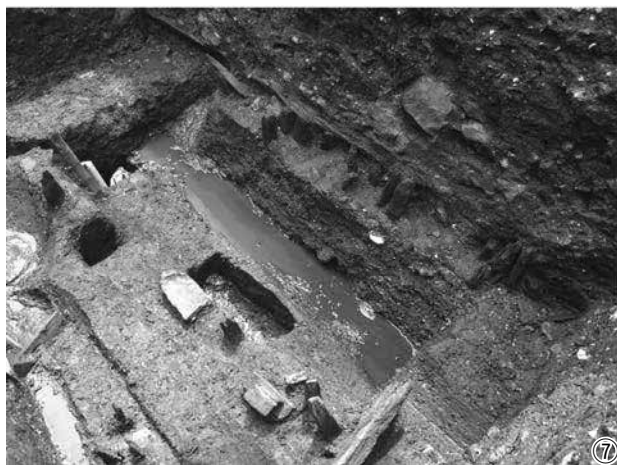
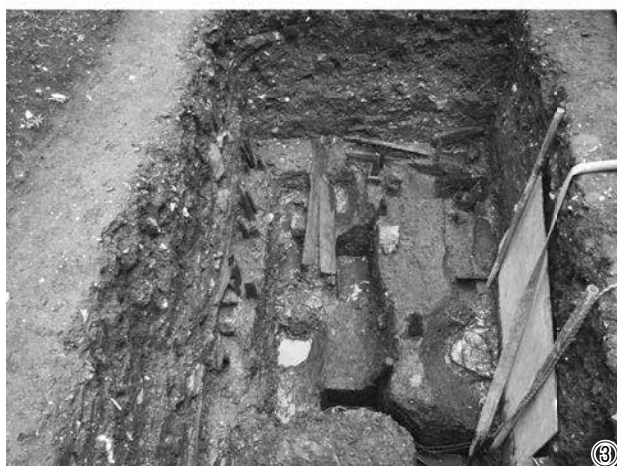
番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
130	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(7.9)	3.4	1/4 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
131	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.9)	8.3	3.4	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
132	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(7.2)	3.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
133	土器	ロクロ かわらけ	14.0	8.0	3.4	3/4 胎土:砂質、白色針状物質・雲母 色調:淡灰褐色
134	土器	手づくね かわらけ・小	(9.9)	—	1.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
135	土器	手づくね かわらけ・大	13.3	—	3.1	略完形 [192]g 胎土:精良 色調:淡褐灰色
136	土器	手づくね かわらけ・大	13.8	—	3.7	4/5 胎土:砂質 色調:橙色 灯明皿
137	土器	手づくね かわらけ・大	13.8	—	3.7	3/4 胎土:精良、白色針状物質 色調:褐灰色
138	陶器	常滑 広口壺	(19.5)	—	[7.4]	1/8 胎土:精良、長石粒 色調:褐灰色 7型式(1300~1350頃)
139	陶器	常滑 甕	—	—	[5.1]	口小片 胎土:精良、長石粒微量 色調:黒灰色
140	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[7.4]	口小片 胎土:長石粒 色調:暗赤褐色 8型式(1350~1400頃)
141	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[6.3]	口小片 胎土:長石粒 色調:暗褐色 9型式(1400~1450頃)?
142	陶器	転用陶片 (すり常滑)	長さ 9.0	幅 8.0	厚さ 1.2	胎土:長石粒微量 色調:暗赤褐色 常滑片口鉢Ⅱ類の口縁を転用 8型式(1350~1400頃)
143	陶器	瀬戸 卸皿	(15.6)	(11.6)	4.0	1/5 胎土:精良、白色礫微量 色調:灰色 釉調:淡緑灰色(灰釉) 古瀬戸前期様式Ⅲ期(13世紀第2四半期頃)
144	陶器	備前 すり鉢	—	—	[5.9]	口小片 胎土:白色砂粒微量、黒色粒子の表出目立つ 色調:灰色~赤褐色
145	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[4.3]	口小片 胎土:精良 色調:暗灰色 釉調:緑灰色 龍泉窯系・大宰府碗Ⅰ-2類 内面に片切り彫りの劃花文
146	土製品	鞆羽口	長さ 11.0	直径 7.1	孔径 2.9	炉体接続部が黒変、ガラス質熔解
147	石製品	硯	長さ 6.1	幅 (6.1)	厚さ 1.1	4/5 赤間産・紫金石正方形面硯
148	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [6.6]	幅 3.7	0.8	1/2 桃白色 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
149	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [5.3]	幅 3.6	厚さ [0.5]	1/2以下 表1面以上使用 桃白色 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
150	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [3.4]	幅 3.2	厚さ 1.1	1/2以下 表裏2面使用 桃白色 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
151	石製品	砥石 (中炉)	長さ [7.2]	幅 3.4	厚さ 3.2	両端欠損 面使用 黄白色 伊豆半島・合掌寺砥
152	石製品	砥石 (中砥)	長さ [6.6]	幅 5.7	厚さ 2.8	1/2以下 表裏2面使用 暗灰色 砂岩
中世上層 遺構3 出土遺物② (図14)						
153	骨製品	筭	長さ [12.2]	幅 1.4	厚さ 0.3	先端部欠損
154	骨製品	筭	長さ 12.2	幅 1.8	厚さ 0.4	未完成、刀子によるケズリ痕を残す
155	木製品	曲物 底or蓋	直径 20.2	厚さ 0.9		一部欠損 柾目材 組板に転用
156	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
157	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
158	木製品	草履芯	長さ 24.4	幅 [4.9]	厚さ 0.5	1/2 板目材
中世上層 遺構3 出土遺物③ (図15)						
159	銅製品	六器	6.3	2.8	2.9	完形 36.1g
160	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	祥符通寶 中国北宋代・1009年初鑄
161	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	祥符元寶 中国北宋代・1009年初鑄

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
162	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
163	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
164	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
165	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	明道元寶 中国北宋代・1032年初鑄
166	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	景祐元寶 中国北宋代・1034年初鑄
167	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	景祐元寶 中国北宋代・1034年初鑄
168	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
169	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
170	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
171	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
172	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	嘉祐通寶 中国北宋代・1056年初鑄
173	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代・1068年初鑄
174	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代・1078年初鑄
175	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代・1078年初鑄
176	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
177	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.8	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
178	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
179	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	紹聖元寶 中国北宋代・1094年初鑄
180	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	聖宋元寶 中国北宋代・1101年初鑄
181	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	宣和通寶 中国北宋代・1119年初鑄
中世上層 遺構8 出土遺物 (図16)						
182	土器	ロクロ かわらけ	(4.1)	(3.1)	0.9	内折れ 1/2 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
183	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.4	1.9	略完形 [70]g 胎土:白色針状物質 色調:淡褐色 灯明皿
184	陶器	瀬戸 入れ子	(7.0)	(4.4)	1.9	1/6 胎土:精良 色調:灰白色 内面に自然釉、滑らかで紅が薄く残る
185	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	2.2	完形 49g 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色 灯明皿
186	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.8	3.9	略完形 [192]g 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
187	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	7.9	3.5	2/3 胎土:雲母微量 色調:淡黄褐色
188	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(35.5)	—	[10.4]	口1/6 胎土:長石粒多量 色調:淡黄褐色
189	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[8.3]	体～底小片 胎土:長石粒多量 色調:橙褐色 内面にヘラ書き記号「×」
190	陶器	瀬戸 腰袴形香炉	(10.6)	(4.0)	7.1	1/3 胎土:やや空気入る 色調:灰白色 釉調:黒褐色(鉄釉) 古瀬戸中期様式Ⅱ～Ⅲ期(14世紀前半) 三足付きか
191	土器	羽釜	—	—	[5.2]	口小片 胎土:細砂粒多量・雲母 色調:灰色～灰桃色
192	石製品	砥石 (中砥)	長さ [5.9]	幅 3.0	厚さ 1.9	1/2弱か 淡緑色 上野産・流紋岩質凝灰岩
193	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [5.5]	幅 3.5	厚さ [0.6]	1/2弱か 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩 薄桃色
194	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代・1078年初鑄

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
中世上層 遺構9 出土遺物 (図17)						
195	陶器	瀬戸 四耳壺	(9.7)	—	[5.0]	口1/8 胎土:精良 色調:灰白色 釉調:淡灰色(灰釉) 古瀬戸前期様式Ⅲ期(13世紀第3四半期頃)?
196	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	口小片、傾き不明 胎土:長石粒 色調:灰色 (尾張・山茶碗系)
197	木製品	有孔円板	直径 2.2	厚さ 0.1	孔径 0.1	完形 柱目材
198	木製品	有孔円板	直径 1.7	厚さ 0.5	孔径 0.1	完形 柱目材
199	木製品	箸	長さ 19.6	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
中世下層 遺構4 出土遺物① (図18)						
200	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(8.2)	1.7	1/2弱 胎土:砂質 色調:淡橙褐色 外底面の回転糸切り痕緩い
201	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.8)	(7.6)	1.9	1/3 胎土:白色針状物・雲母 色調:淡褐灰色
202	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(7.7)	1.6	1/2弱 胎土:砂質 色調:淡黄橙色
203	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.5)	9.3	3.3	2/3 胎土:砂質 色調:淡黄橙色
204	土器	ロクロ かわらけ・大	14.1	9.7	3.3	2/3 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄橙色
205	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	1.9	2/3 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡褐灰色
206	土器	手づくね かわらけ・小	(9.7)	—	2.2	3/4 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄橙色
207	土器	手づくね かわらけ・小	9.7	—	2.0	3/4 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡橙褐色
208	土器	手づくね かわらけ・小	9.3	—	2.2	4/5 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡褐灰色
209	土器	手づくね かわらけ・小	9.7	—	1.9	2/3 胎土:白色針状物質・泥岩粒 色調:淡黄橙色
210	土器	手づくね かわらけ・小	(9.0)	—	1.9	1/2弱 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄橙色
211	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	3.4	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄橙色
212	土器	手づくね かわらけ・大	(14.5)	—	4.0	1/2弱 胎土:白色針状物質 色調:にぶい褐灰色
213	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	2.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
214	土器	手づくね かわらけ・大	(12.6)	—	2.8	1/3 胎土:精良 色調:淡黄橙色
215	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	[2.7]	口小片 胎土:長石粒 色調:灰色 (尾張・山茶碗系)
216	陶器	瀬戸 折縁小皿?	—	(4.8)	[1.1]	底1/3 胎土:精良 色調:淡灰黄色 釉調:白黄色(灰釉)
217	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[3.4]	口小片 胎土:精良 色調:暗灰色 釉調:緑灰色 龍泉窯系・大宰府碗Ⅰ-2類 内面に片切り彫りの蓮華文
218	瓦器	碗	(11.8)	—	[4.0]	口1/8 胎土:精良、層状に剥離 色調:胎土灰色、器面黒色 体部外面指頭痕、内面回転ナデ→粗いヨコヘラミガキ
219	木製品	折敷?	長さ 34.0	幅 [6.5]	厚さ 0.3	1/4程度? 柱目材 一面に墨痕?
220	木製品	箸	長さ 26.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
221	木製品	箸	長さ 25.4	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
222	木製品	箸	長さ 24.8	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
223	木製品	箸	長さ 24.8	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
224	木製品	箸	長さ 24.4	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
225	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
226	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.8	厚さ 0.6	完形

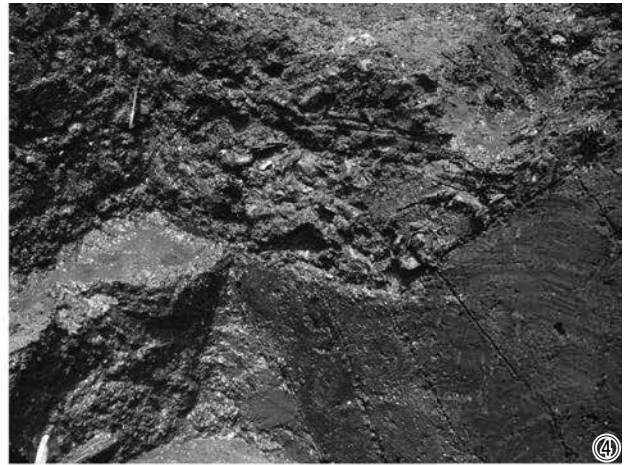
番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
227	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
228	木製品	箸	長さ 21.8	幅 0.5	厚さ 0.6	完形
229	木製品	箸	長さ 21.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
230	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.6	厚さ 0.7	完形
231	木製品	箸	長さ 21.1	幅 0.5	厚さ 0.6	完形
232	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
233	木製品	箸	長さ 19.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
234	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
235	木製品	草履芯	長さ 23.0	幅 [4.2]	厚さ 0.4	1/2以下 板目材
236	木製品	用途不明	長さ 28.9	幅 2.0	厚さ 0.9	完形? 板目材
237	土器	ロクロ かわらけ・小	9.2	7.7	2.0	略完形 [92]g 胎土:砂質 色調:淡黄橙色
238	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.5	2.1	完形(破片接合) 65g 胎土:砂質 色調:淡橙色～淡褐灰色 外底面に板状圧痕なし
239	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.1	2.2	完形 71g 胎土:砂質 色調:淡橙色
240	土器	ロクロ かわらけ・大	14.3	10.0	3.3	完形 241g 胎土:砂質、雲母微量 色調:淡黄橙色 体部外面に手づくね風の指頭痕残る
241	土器	ロクロ かわらけ・大	14.2	9.5	3.5	略完形 [225]g 胎土:砂質 色調:内面淡黒灰色、外面淡黄橙色 体部外面に手づくね風の指頭痕残る 外底面の板状圧痕なし
242	土器	ロクロ かわらけ・大	14.2	9.5	3.5	完形 245g 胎土:砂質、雲母微量 色調:淡黄橙色 体部外面に手づくね風の指頭痕残る 外底面の板状圧痕なし
243	土器	手づくね かわらけ・大	13.9	—	3.4	4/5 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄橙色
244	土器	手づくね かわらけ・大	13.5	—	2.8	4/5 胎土精良 色調:淡褐灰色 内外面とも全体に黒変
245	土器	白かわらけ 手づくね・大	(12.7)	—	[2.7]	1/8 胎土:精良 色調:白桃色
中世下層 遺構4 出土遺物② (図19)						
246	土器	手づくね かわらけ・小	8.1	—	1.6	完形 54g 胎土:白色針状物質 色調:淡橙色
247	土器	手づくね かわらけ・小	(8.4)	—	1.8	1/4 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡橙色
248	土器	手づくね かわらけ・大	(14.8)	—	(3.6)	1/6 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡褐灰色 口縁部二段ナデ
249	陶器	常滑 甕	—	—	[7.0]	口小片 胎土:長石粒 色調:黒灰色～暗褐色 3型式(12世紀末頃)
250	陶器	渥美・湖西 子持ち器台?	3.5	2.7	[1.4]	子皿部分のみ完存
251	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代・1068年初鑄
252	鉄製品	釘	長さ 7.7	幅 0.5	厚さ 0.5	完形 上層 遺構3出土
253	鉄製品	釘	長さ 4.6	幅 0.3	厚さ 0.5	頭部欠 上層 遺構3出土
254	木製品	漆器 皿	(9.9)	8.1	1.0	1/4 内外面黒色系漆塗り→内面朱漆の花弁文(印判)
255	木製品	漆器 椀	—	6.3	1.4	底部のみ 内外面黒色系漆塗り→内面朱漆の花弁文(手書き)
256	木製品	横櫛	幅 [6.0]	高さ 4.2	厚さ 1.0	1/3 表面全体を黒色系漆塗り





- ① 現地調査前（南西から）
- ② I区表土掘削状況（南西から）
- ③ I区中世上層遺構3（南から）
- ④ 同上 板材検出状況（北東から）
- ⑤ 同上 杭列検出状況（北東から）
- ⑥ I区中世上層遺構3完掘状況（北から）
- ⑦ 同上（北東から）

図版2



- ① I区中世下層 遺構4 (北から)
- ② 同上 (南から)
- ③ I区中世上層 遺構3 断面 (南から)
- ④ I区 遺構3 - 遺構4間の切り合い (南から)
- ⑤ II区表土掘削後 凝灰岩切石出土状況  
(北から)
- ⑥ I区中世上層 漆器皿塗膜 出土状況
- ⑦ I区中世上層出土 漆器皿塗膜



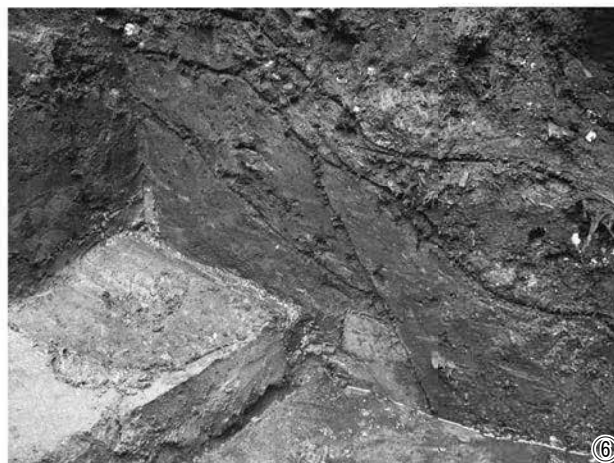


- ① II区 遺物包含層除去後（北から）
- ② II区中世上層 遺構3（北から）
- ③ II区中世上層 遺構3 護岸材検出状況  
（北東から）
- ④ 同上（東から）
- ⑤ II区中世上層 遺構3  
護岸材下 六器出土状況（北西から）
- ⑥ 同上（西から）
- ⑦ 同上・アップ（西から）





図版4



- ① II区中世上層 遺構9・下層 遺構4 検出状況  
(北東から)
- ② II区中世上層 遺構9 調査区西壁断面  
(東から)
- ③ II区 北壁断面 (南から)
- ④ II区 南壁断面 (北から)
- ⑤ II区中世上層 遺構9 土台材 (南から)
- ⑥ II区中世下層 遺構4 西岸断面 (南東から)
- ⑦ II区中世下層 遺構4 調査区南壁断面  
(北から)



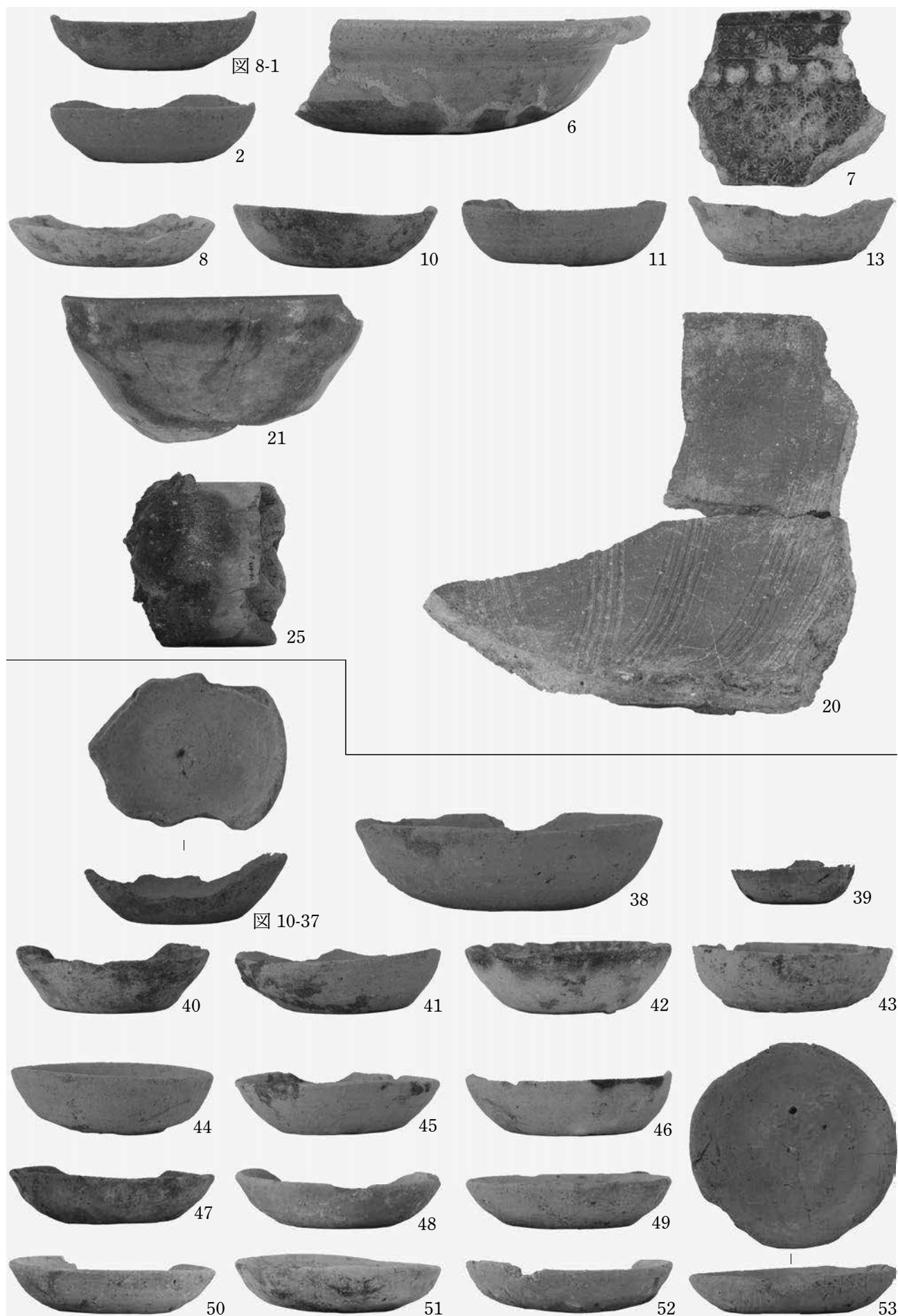
① II区中世上層 遺構9 土台材アップ (東から)



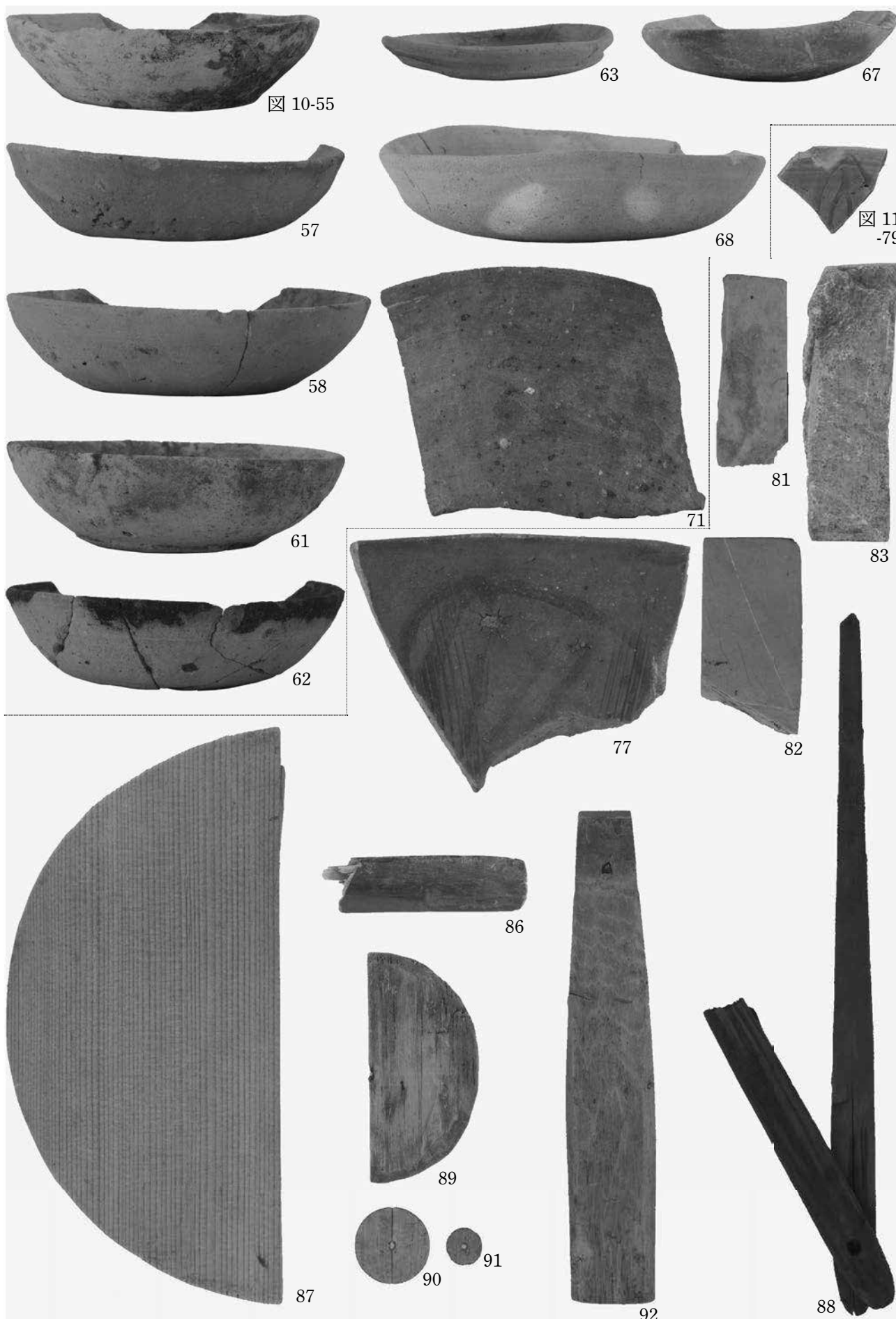
② II区中世上層 遺構9 調査区西壁断面

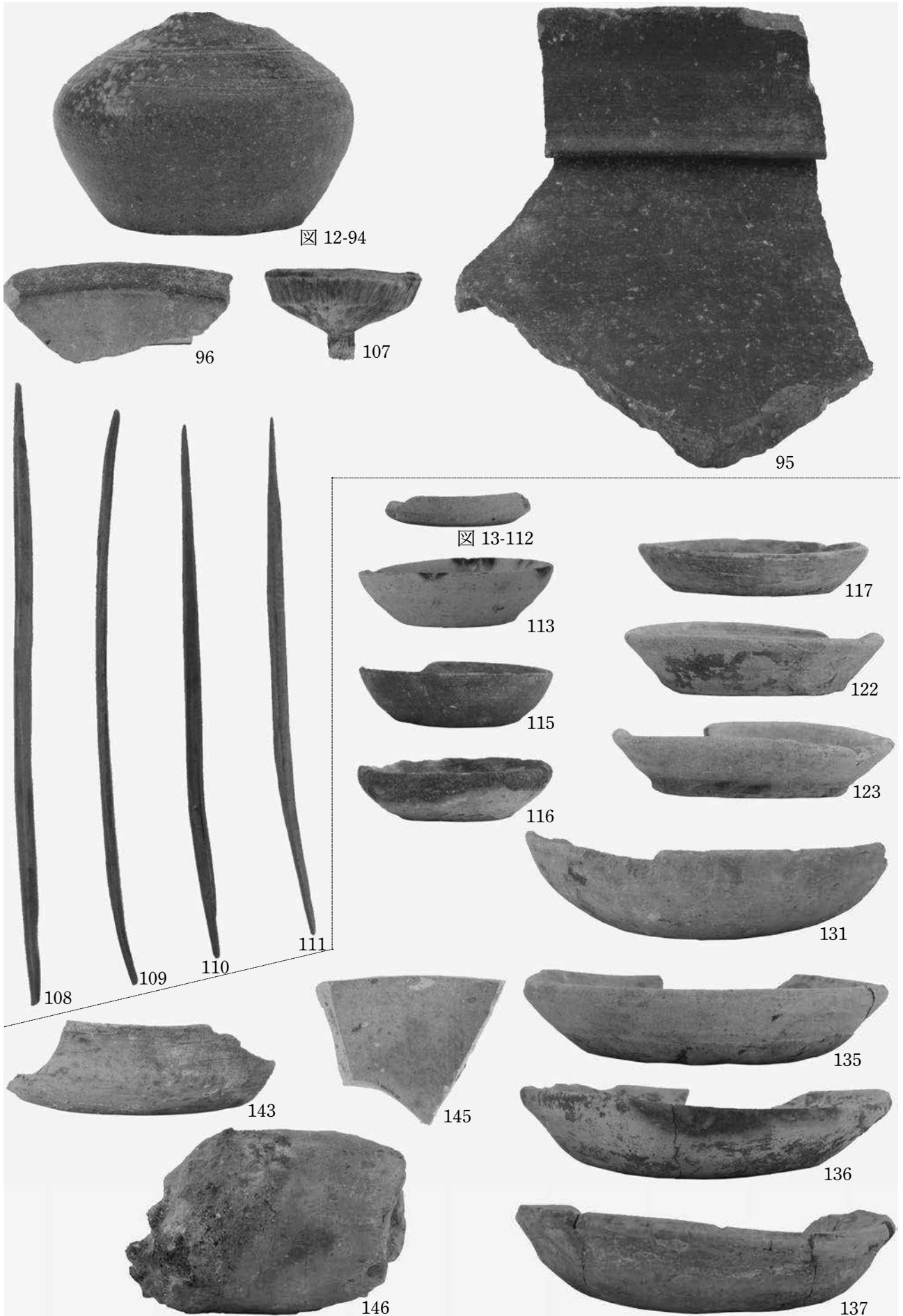


③ II区中世上層 遺構9 調査区南壁断面

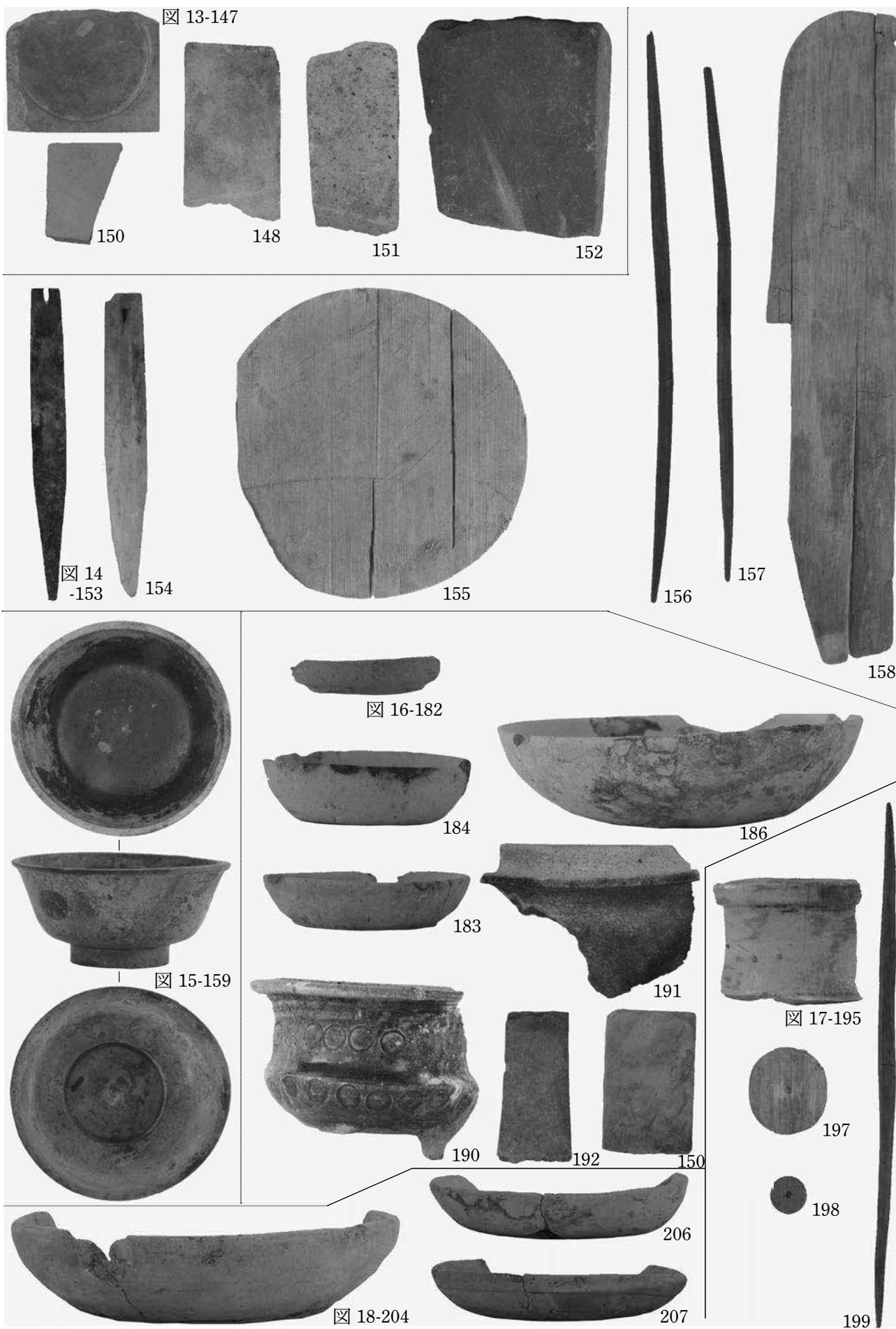


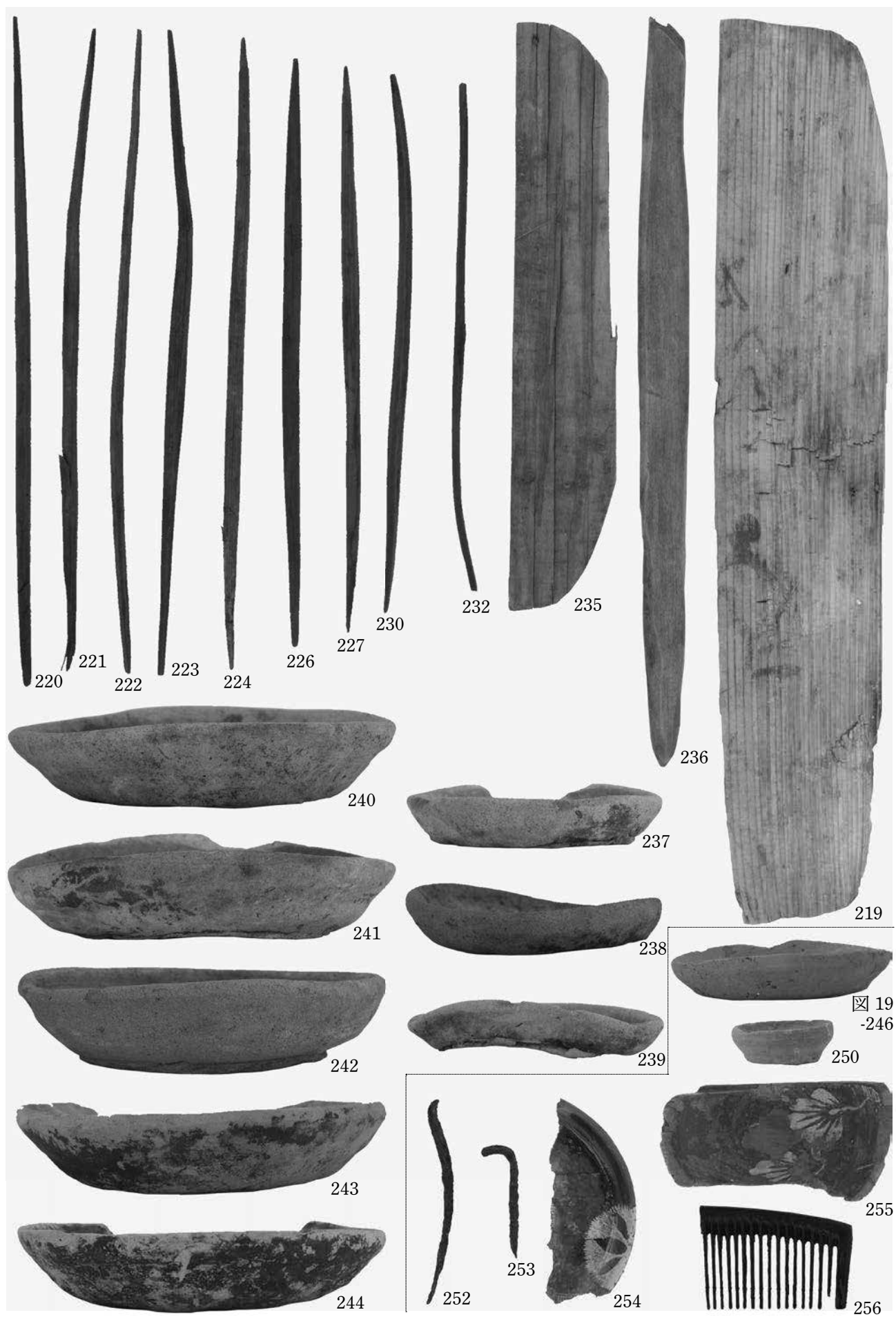












## 横小路周边遺跡 (No.259)

二階堂字荏柄 939 番 10 地点

## 例 言

1. 本書は、横小路周辺遺跡（鎌倉市 No.259）内の神奈川県鎌倉市二階堂字荏柄 939 番 10 地点における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人住宅建設に伴う事前の記録保存調査として、事業主（個人）より委託を受けた株式会社博通（代表取締役：宮田眞 日本考古学協会員）が平成 23（2011）年 7 月 29 日～同年 8 月 17 日にかけて実施した。調査面積は 40m<sup>2</sup>である。
3. 発掘調査体制は次の通りである。  
調査担当者 宮田眞  
調査員 滝澤晶子、安藤龍馬、熊谷満
4. 現地での遺構写真は宮田、滝澤、熊谷が撮影を行った。
5. 記録図面類と出土品は鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 資料整理上の遺跡略記号は NYA である。
7. 本書作成にあたっての整理作業体制は次の通りである。  
遺物実測・トレース 齋藤礼子、坂倉美恵子  
記録図面合成・トレース、遺物写真撮影、図版作成 熊谷満
8. 本書の執筆・編集は宮田の指示の下、熊谷が行った。
9. 現地調査及び本報作成に際しては、次の諸氏より御教示・御協力を賜った。（順不同、敬称略）  
松尾宣方（NPO 法人鎌倉考古学研究所）、永田史子（鎌倉市教育委員会）

## 凡 例

1. 遺構図版  
縮尺 周辺図：1/5000、調査区配置図：1/200、全体図：1/60、個別図：1/60  
断面図に示した水糸高は海拔標高値を表す。  
方位標は国土座標（世界測地系第 9 系）に基づいて真北を示す。
2. 遺物図版 縮尺 1/3（銭のみ 1/2）
3. 遺物法量表（ ）は復元数値、[ ] は残存最大値を示す。
5. 本報での「土丹<sup>どたん</sup>」は、逗子シルト岩層から採石・破碎したシルト岩塊を示す通称であり、「鎌倉石」は、池子火砕岩層から切り出した火山碎屑岩塊を示す通称。

## 目 次 本 文 目 次

第一章	調査に至る経緯	352
第二章	遺跡概観	353
第三章	調査の経過と方法	355
第四章	堆積土層	357
第五章	発見された遺構と遺物	358
第六章	まとめ	372

## 挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	353	図 10	第 2 面出土遺物 (1)	363
図 2	調査地点周辺	354	図 11	第 2 面出土遺物 (2)	364
図 3	調査区配置図	356	図 12	第 2 面出土遺物 (3)	365
図 4	堆積土層	357	図 13	第 3 面全体図	366
図 5	第 1 面全体図	358	図 14	第 3 面出土遺物	367
図 6	第 1 面個別遺構出土遺物	359	図 15	第 4 面全体図	368
図 7	第 1 面遺構外出土遺物 (1)	360	図 16	第 4 面遺構外出土遺物	369
図 8	第 1 面遺構外出土遺物 (2)	361	図 17	深掘りトレンチ出土遺物	369
図 9	第 2 面全体図	362			

## 表 目 次

表 1	出土遺物法量表 1/2	370	表 2	出土遺物法量表 2/2	371
-----	-------------	-----	-----	-------------	-----

## 写 真 図 版 目 次

図版 1 - 1	調査地現況	373	図版 4	出土遺物 (1)	376
	2 現代攪乱確認状況		図版 5	出土遺物 (2)	377
	3 第 1 面全景		図版 6	出土遺物 (3)	378
	4 第 1 面 通路状土丹敷		図版 7	出土遺物 (4)	379
図版 2 - 1	第 2 面全景	374			
	2 第 2 面 通路状土丹敷				
	3 第 3 面全景				
	4 第 3 面通路状土丹敷				
図版 3 - 1	第 4 面全景	375			
	2 調査区北壁堆積土層				
	3 調査区西壁堆積土層				

## 第一章 調査に至る経緯

鎌倉市は、事業者（個人）より二階堂字荏柄 939 番 10 地点における個人住宅建設の申請を受けた。当該地は県遺跡番号：鎌倉市No. 259「横小路周辺遺跡」の包蔵地であることから、遺跡の有無・内容等を確認する目的で試掘確認調査を実施し、その結果に基づいて今後の埋蔵文化財の保護措置、指導を行うこととした。

平成 23 年 5 月 9 日付で事業者より鎌倉市教育委員会に埋蔵文化財確認調査依頼書が提出され、これを受けて平成 23 年 5 月 31 日～6 月 1 日にかけて試掘確認調査が実施された。3 × 2 m の試掘坑を設定し調査を行った結果、現況地盤面より深さ 120cm で中世遺構面が確認され、当該工事計画が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが避けられないとの判断に至った。

平成 23 年 6 月 21 日付で事業者より文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を受理し、これに対して平成 23 年 7 月 8 日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査を実施する旨の指示が通知された。このため、当該地の埋蔵文化財については発掘調査を実施して、記録保存の措置を図ることとなった。

事業者と発掘調査の業務委託契約を締結した株式会社博通代表取締役宮田眞は、平成 23 年 7 月 22 日付で文化財保護法 92 条の規定に基づく発掘調査の届出を提出し、平成 23 年 8 月 19 日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査届出に対する指示通知を受けた。発掘調査は、平成 23 年 7 月 29 日に開始、同年 8 月 17 日に終了した。

横小路周辺遺跡（鎌倉市二階堂字荏柄 939 番 10 地点）発掘調査にかかる届出等の文書

文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
試掘調査					
試掘報告		平成 23 年 6 月 1 日	鎌倉市教育委員会 文化財課	事業主	遺跡の所在を確認
取扱いの判断		平成 23 年 6 月 1 日	鎌倉市教育委員会 文化財課	事業主	発掘調査が必要
文化財保護法第 93 条に基づく土木工事の届出					
土木工事の届出		平成 23 年 6 月 21 日	事業主	神奈川県教育委員会 教育長	鎌倉市を經由
発掘調査の指示	文遺第 61039 号	平成 23 年 7 月 8 日	神奈川県教育委員会 教育長	事業主	鎌倉市を經由
文化財保護法第 92 条に基づく発掘の届出					
発掘届の提出		平成 23 年 7 月 22 日	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	神奈川県教育委員会 教育長	鎌倉市を經由
発掘届の受理通知	文遺第 50054 号	平成 23 年 8 月 19 日	神奈川県教育委員会 教育長	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	鎌倉市を經由
出土品の手続き					
埋蔵物の発見届		平成 23 年 8 月 18 日	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	鎌倉警察署長	
埋蔵文化財保管証の提出		平成 23 年 8 月 17 日	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	神奈川県教育委員会 教育長	鎌倉市を經由
文化財認定		平成 23 年 9 月 9 日	神奈川県教育委員会 教育長	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	鎌倉市を經由

## 第二章 遺跡概観

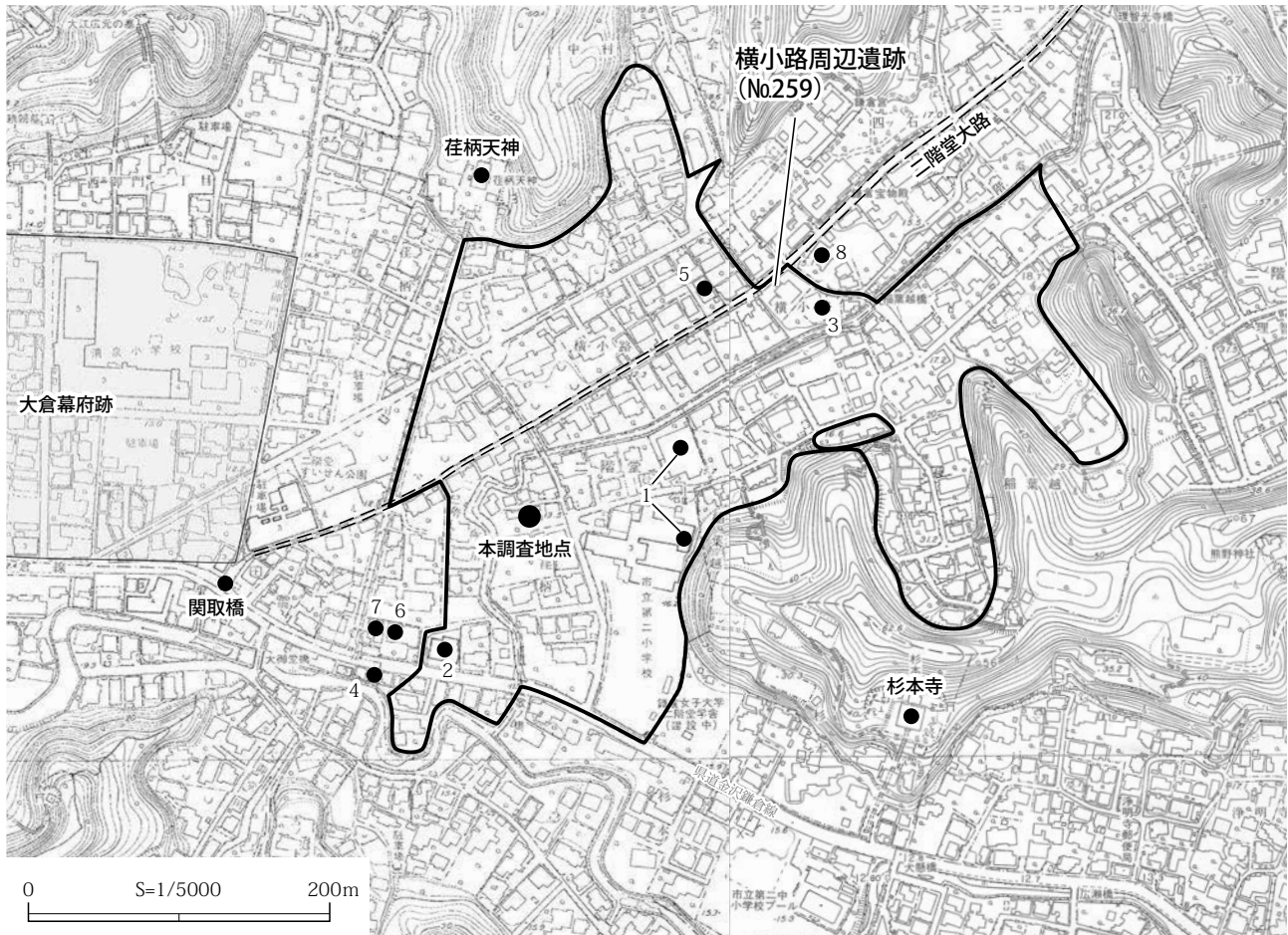
本調査は横小路周辺遺跡（遺跡台帳番号：鎌倉市 No.259）内における埋蔵文化財発掘調査であり、鎌倉市二階堂字荏柄 939 番 10 地点に所在する。本調査地点より西方約 180 m には源頼朝の御所である大倉幕府跡、北方 220 m には長治元年（1104）に開かれたとされる荏柄天神社、南東約 270 m には天平六年（736）に開かれたとされる杉本寺が位置しており、周辺は鎌倉市中でも頼朝入府以前から土地利用されていたことが見込まれる地域である。本調査地点は、杉本寺が鎮座する丘陵から西方へかけて緩やかに延びる山裾の比較的平坦な微高地に立地しており、現況の標高は約 13.6 m を測る。調査地付近一帯は奈良時代には「荏草郷」と呼ばれていたようで、天平七年（735）の「相模国封戸租交易帳」にその名が見え、『和名類聚鈔』には「荏草」はエカラと振られている。さらに、本調査地点に近接する大倉幕府周辺遺跡などの発掘調査では弥生時代中期後半から後期にかけての竪穴住居址や古墳時代初頭の方形周溝墓も検出されており、先史時代からすでに拓けた土地であったことが判る。

また、現在の関取橋の碑が建つところから北東約 800 m の理智光寺橋まで狭い道が真っ直ぐに通じるが、これが鎌倉時代に二階堂大路と呼ばれた道であると考えられている。二階堂大路は六浦道（現在の県道金沢鎌倉線）から永福寺惣門に至る道で、二階堂大路と六浦道の交差する関取橋付近が大倉辻と呼ばれていたと考えられており、この大倉辻は建長三年（1251）十二月と文永二年（1265）三月に鎌倉内の商業地域の一つに定められている。本調査地点は、この二階堂大路とは二階堂川を隔てた東側微高地の縁辺部に位置しており、往時には二階堂大路をはじめとして大倉幕府や荏柄天神社までも川の向こう側に見下ろすことができたのではないかと思われる。

横小路周辺遺跡ではこれまで 8 地点の発掘調査報告がされており、その地点を図 2 に示した。本調査地点から東に 120 m ほどに位置する地点 1 では、昭和 57 年（1982）に調査が実施されている。市立第二小学校体育館新設と同校舎増改築工事に伴いそれぞれやや離れた地点で調査が行われており、2 枚の中世遺構面と古代遺構面も検出されている。古代遺構は竪穴住居址 7 棟が重複する状態で検出されており、奈良・平安時代の遺物が出土している。中世では総数 2000 基近い柱穴から 19 棟の掘立柱建



図 1 調査地点位置図



向在柄遺跡

1. 二階堂字荇柄880・874番地点 『鎌倉市 二階堂 向在柄遺跡発掘調査報告書』 1985 鎌倉市教育委員会

横小路周辺遺跡

2. 二階堂字荇柄9番1地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』1990 鎌倉市教育委員会 / 『横小路周辺遺跡発掘調査報告書 - 二階堂字荇柄9番1地点 -』1991 横小路周辺遺跡発掘調査団
3. 二階堂字横小路110番3地点 『横小路周辺遺跡 二階堂字横小路110番3地点 - 永福寺関連遺跡の調査 -』1996 横小路周辺遺跡発掘調査団
4. 雪ノ下五丁目557番1地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 (第2分冊)』 1998 鎌倉市教育委員会

5. 二階堂字横小路93番11地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 (第2分冊)』1999 鎌倉市教育委員会

6. 二階堂字荇柄10番9外地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 (第2分冊)』 2000 鎌倉市教育委員会

7. 二階堂字荇柄10番1地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』2003 鎌倉市教育委員会

8. 二階堂字四ツ石115-3地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 (第2分冊)』 2007 鎌倉市教育委員会

図2 調査地点周辺

物跡が確認されているほか、井戸、溝などが多数検出されており、建物規模の大きさや濠のような大溝をもつ点などから大きな屋敷地の一画であることが推測されている。舶載陶磁器をはじめとして土器・国産陶磁器・金属製品・石製品・木製品など、多岐にわたる大量の遺物が出土しており、13世紀初頭から14世紀代に至るまで間断のない営為痕跡が確認されている。また南方約120mに位置する地点2は六浦道に面して昭和63年(1988)に調査が実施されており、2枚の中世遺構面が検出されている。上面の遺存状況が悪くほとんどの遺構が第2面で確認されているようであるが、多数の柱穴とともに道路状遺構・溝・井戸・土坑などが発見されており、13世紀中葉から16世紀初頭に至る遺物が出土している。また特筆すべき点として、町屋地域に顕著に見られる方形竪穴建物跡が6棟検出されており、大倉辻周辺が商業地域であったことを表すような成果といえるだろう。ほか、地点6や地点7などでも多数の柱穴などが検出されており、鎌倉時代前期から室町時代に至る遺物を出土している。



## 第三章 調査の経過と方法

### 第1節 調査経過

本調査は個人住宅建設を原因とする事前の埋蔵文化財発掘調査として実施された。事業主（個人）から調査を委託された株式会社博通（代表取締役：宮田真）が、平成23年7月29日～同年8月17日にかけて本格的な調査を行ったものである。現況標高は約13.6 mを測る。調査面積は40㎡である。主な調査経過を以下に示す。

- 7月29日 表土掘削。面精査・現代攪乱坑プランを確認
- 8月1日 攪乱坑・試掘坑掘削。水準点測量、調査基準杭への移設。
- 8月2日 基準点測量、調査基準杭への移設。第1面全景写真撮影、測量。
- 8月3日 第2面への掘り下げ、遺構プラン確認。
- 8月4・5日 第2面遺構掘削。
- 8月8日 第2面全景写真撮影、平面図測量。
- 8月9日 第3面への掘り下げ。
- 8月10日 第3面遺構掘削。
- 8月11日 第3面全景写真撮影、平面図測量。
- 8月12日 第4面への掘り下げ。
- 8月15日 第4面全景写真撮影、平面図測量。調査区セクション図測量。
- 8月16日 調査区埋め戻し。
- 8月17日 器材撤収。

### 第2節 調査方法

調査はまず、試掘調査の成果を基に約80cmの厚さをもつ表土を重機によって除去することから始められた。表土を除去した時点で中世遺物包含層上面が検出され、以降の掘削作業は人力によって行った。調査の結果中世基盤層上面を含めて4枚の遺構面が検出され、各面において遺構掘削および測量・写真撮影などの記録作業を行った。平面測量には光波測距儀を用い、測定値をその場で手作業により直接方眼紙上にプロット・図化する方法を採った。また、記録写真の撮影にあたっては、モノクロ・リバーサルフィルムをそれぞれ装填した35mmフィルムカメラ2台を使用し、作業状況などの補助的な記録にデジタルカメラを併用した。調査が完了したところで鎌倉市教育委員会による終了確認を受け、調査区の埋め戻し及び器材撤収を行い調査を終了した。

測量基準杭の設定にあたっては、測量機材を設置するスペースが限られていたこともあり、ひとまず任意に設定した基準杭を基に測量を行った。後に鎌倉市教育委員会より提供された鎌倉市4級基準点成果表記載のE196 (X=-75377.183,Y=-24091.943)、E197 (X=-75408.918,Y=-24081.923) に基づき、光波測距儀を用いて国土座標軸に倣った座標値の移設を行った。これにより、本書で用いている座標は世界測地系第9系に準じたものとなっている。また、水準点は鎌倉市3級基準点No.53209 (標高12.109 m) より、レベルを用いて調査基準杭へ移設した。

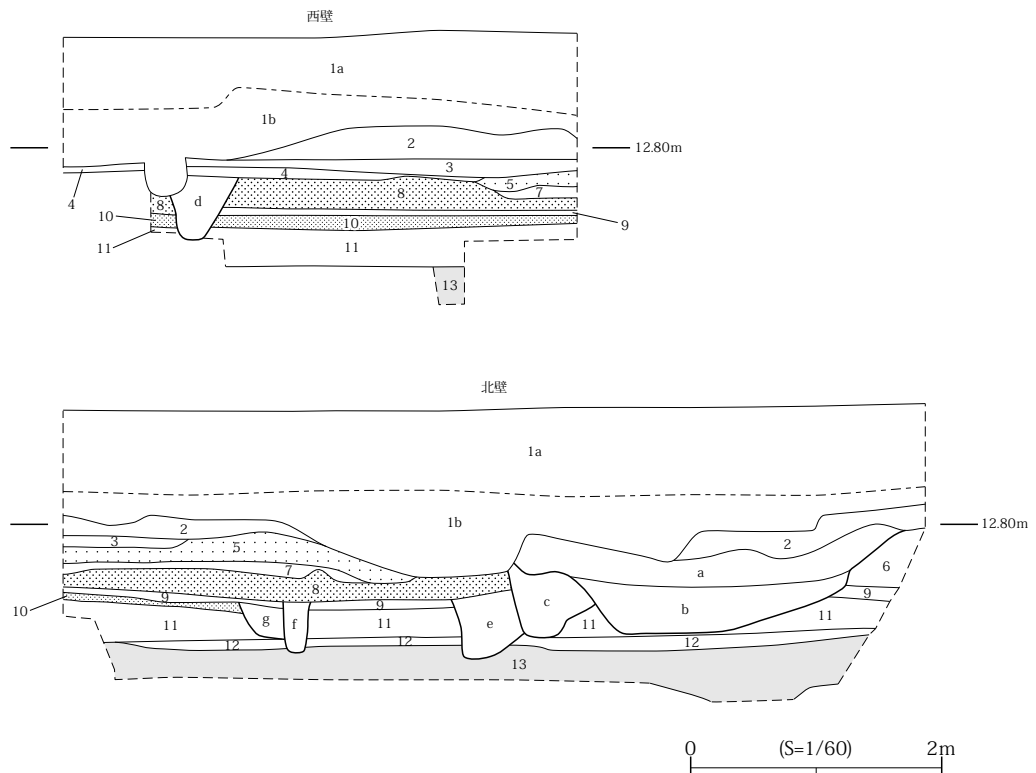


图3 調査区配置図

## 第四章 堆積土層

本調査では4枚の遺構面が検出された。各堆積層毎の詳細な説明は図4に示しているのので、ここでは若干の補足を加えることとする。

今回の調査では、第1層から第10層までの堆積層が人為的に造成された地業層である。第1層は現代の堆積層で、第2層以下が中世期の堆積層となるものであり、それぞれ第3・6層が第1面、第9層が第2面、第11層が第3面、第13層が第4面を構成する。第11、12層は混入物が少なく比較的安定した堆積層で、中世遺物を含むものの、人為によるものでなく自然に埋積した堆積層である可能性がある。第13層が中世基盤層である。第13層中には古代の土師器・須恵器片がわずかに含まれており、調査区北東角部で無遺物の黒褐色粘質土層を確認したが、そこから西側にかけて傾斜をもって落ち込んでいく。安全上の配慮から現地表面より約200cmの深さ以上の掘削を断念したが、谷地形あるいは窪地のような自然地形となることが想定される。



- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1a. 茶褐色土 現代盛土層。土丹を多量含む。締まりなく軟弱。       | a. 黒褐色土 土丹粒をやや多く含む。かわらけ片多量含む。土坑1覆土。 |
| 1b. 黒褐色土 表土層。土丹、玉砂利等を多量含む。            | b. 黒褐色土 土丹粒、かわらけ片をやや多く含む。土坑1覆土。     |
| 2. 暗褐色土 土丹粒をやや多く含む。中世遺物包含層。           | c. 黒褐色土 土丹粒・小ブロックをやや多く含む。土坑2覆土。     |
| 3. 茶褐色砂質土 土丹粒をやや多く含む。                 | d. 黒褐色土 土丹粒・小ブロックを多量含む。             |
| 4. 黒褐色土 土丹粒を微量含む。締まりやや弱い。             | e. 黒褐色土 土丹粒を少量含む。P24覆土。             |
| 5. 土丹地業層 直径5～20cm大の土丹を多量含む。通路状遺構1構成土。 | f. 黒褐色土 土丹粒をやや多く含む。P20覆土。           |
| 6. 黒褐色土 土丹粒を少量含む。締まりややあり。             | g. 黒褐色土 土丹粒を少量含む。P37覆土。             |
| 7. 黒褐色土 土丹粒を微量含む。締まりやや弱い。             |                                     |
| 8. 土丹地業層 拳大～人頭大の土丹塊を多量含む。通路状遺構2構成土。   |                                     |
| 9. 黒褐色土 土丹粒を微量含む。やや砂質。締まりやや弱い。        |                                     |
| 10. 土丹地業層 土丹粒を密に含む。通路状遺構3構成土。         |                                     |
| 11. 黒褐色土 土丹粒、かわらけ片を少量含む。締まりあり。        |                                     |
| 12. 黒灰色土 土丹粒、炭化物を微量含む。粘性あり、締まりあり。     |                                     |
| 13. 黒灰色土 土丹粒微量含む。褐鉄を多く含む。締まりあり。       |                                     |

図4 堆積土層

## 第五章 発見された遺構と遺物

本調査では基盤層上面を含めて4枚の中世遺構面が検出されている。本章では検出された主な遺構・遺物について各面毎に説明を加えることとする。

### [第1面]

本面では通路状の土丹敷のほか、土坑1基、ピット2基を検出している。通路状の土丹敷を境として、西側は茶褐色の砂質土、東側は土丹粒を少量含む黒褐色土が面構成土となっており、西側の茶褐色砂質土は良好な生活面と捉えられたが、東側の黒褐色土は締まりややあるものの、生活面としてはやや軟弱な構成土と見受けられた。面標高は約12.6mを測る。検出されたピット2基はいずれも西側の茶褐色砂質土上面で確認することができたものである。後に調査区壁面で堆積層を観察したところ、この茶褐色砂質土は通路状遺構造成後に貼り増しされたものであることが判った。また、調査区南東付近で安山岩を検出しているものの、傾斜するような状態であったため礎石と認識することは難しいのではないかとと思われる。

### 通路状遺構1 (図5.6)

調査区の中央よりやや西で南北に延びる状態で検出された。規模は幅約250cm、路面標高は約12.7m

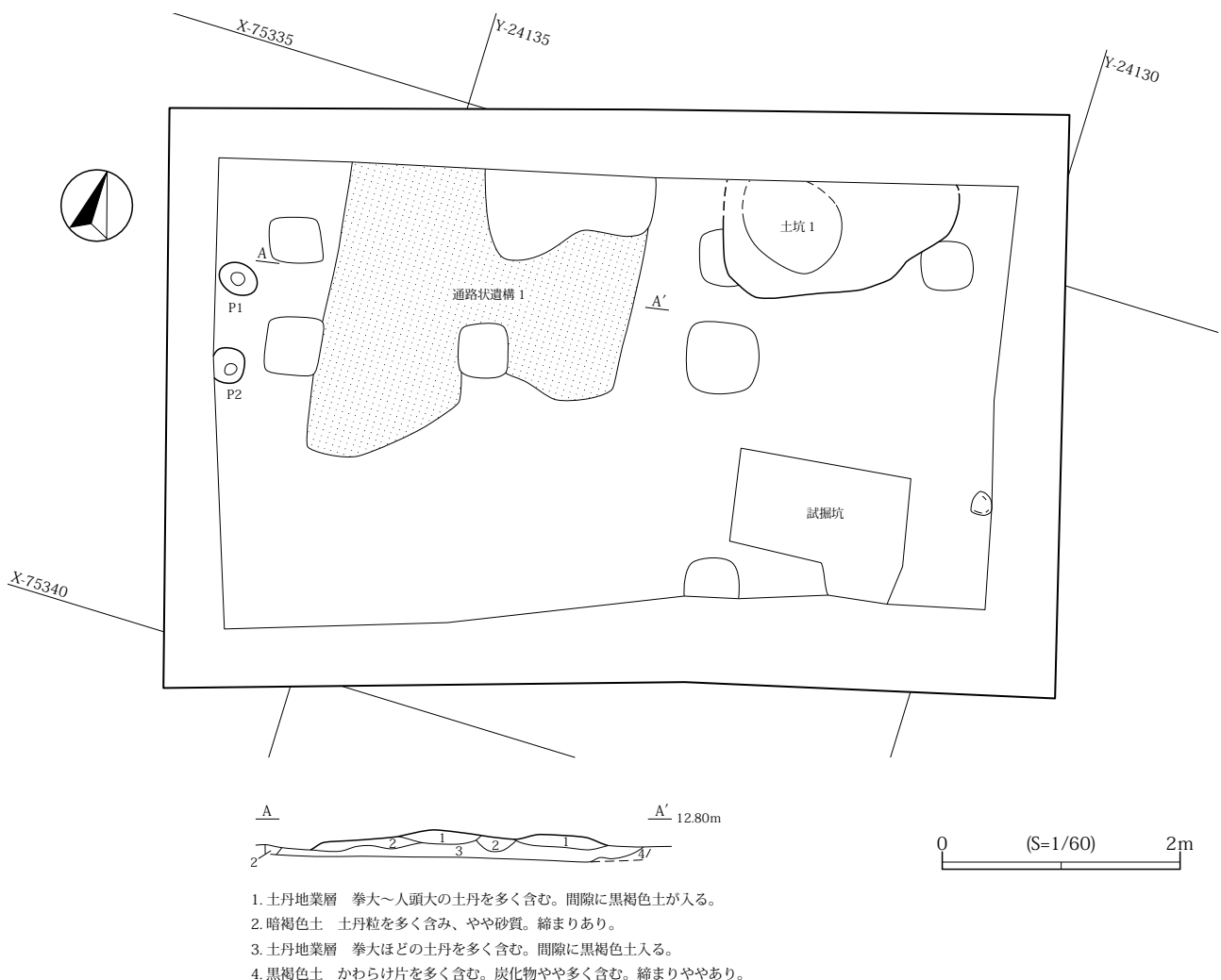


図5 第1面全体図

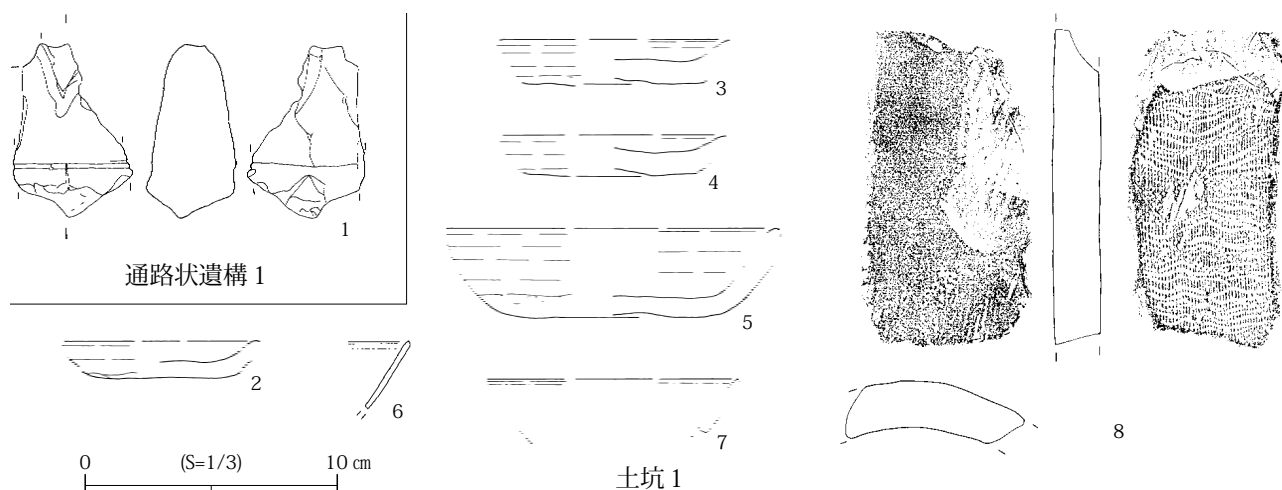


図6 第1面個別遺構出土遺物

を測る。主軸方位はN - 7° - Wを指す。拳大～人頭大の土丹を多く含む土丹地業面であるが土丹間の間隙が多く、南側ほど地業が軟弱となっている。このため南側は途中で途切れているように見受けられたが、おそらくはやや軟弱な地業でありながらもさらに南へ延長していたものと思われる。ただし、調査区南壁の堆積層を観察しても、明確な範囲を捉えることはできなかった。

1は土製品泥人形。着物を着た人体を模した胴体部片。

#### 土坑 1 (図 5,6)

調査区東部の北壁にかかる状態で検出された。第1面調査時にプランを確認することができず、第2面調査時に検出したものであるが、調査区北壁の堆積土層を観察したところ本面に帰属するものであることが判った。調査区外北へ延びるが、検出された範囲内の平面形は不定形で、規模は長軸約200cm×短軸70cm以上、掘り込み面からの深さ約80cmを測る。覆土は土丹を多く含む黒褐色土で、多量のかかわりけ片が含まれる。

2～5はかわらけ。全て手づくね成形。6は青白磁碗。7は白磁口元皿。8は丸瓦。

#### 遺構外出土遺物 (図 7,8)

1～23はかわらけ。全てロクロ糸切り成形。24～27は常滑甕。28は常滑片口鉢。29～31は山茶碗窯系片口鉢。32,33は瀬戸窯製品。いずれも瓶子あるいは壺類と思われる。34,35は青磁碗。34は内面画花文、35は外面鎬蓮弁文。36は青磁皿。37は白磁端反り碗。38は白磁皿。39は青白磁皿。見込み部分に意匠不明の貼付文が認められる。40,41は泥人形。40は着物を着た人体を模した胴体部片、41は台座部分か。42は瓦質火鉢。43は土製品。双六の駒と思われるもの。44は滑石鍋。研磨に転用したものが刃物痕が無数に残る。45は鉄釘。46は銭。紹聖元寶。47～52は瓦。全て平瓦。

#### [第2面] (図 9)

本面では通路状の土丹敷のほか、土坑8基・ピット10基を検出している。土丹粒を微量含むやや砂質の黒褐色土が面構成土となっており、調査区南東部では土丹細粒による地業面が貼り増されていた。面標高は約12.3mを測る。

#### 通路状遺構 2

調査区の西部を南北に延びる状態で検出された。規模は幅約170cm、路面標高は約12.5mを測る。主軸方位はN - 7° - Wを指す。拳大～人頭大の土丹を多量含む土丹地業面である。本址も第1面で検

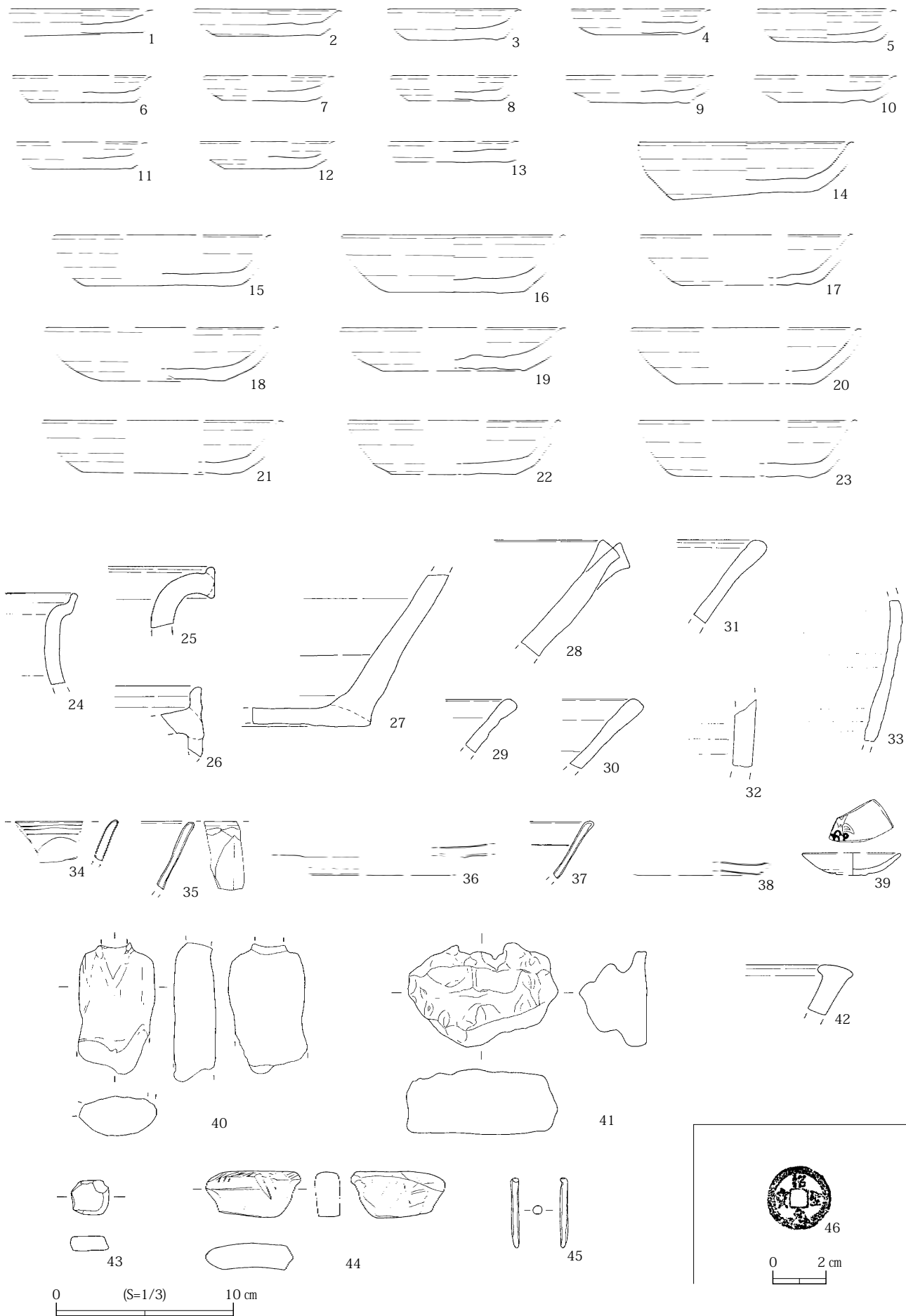


图7 第1面遺構外出土遺物(1)

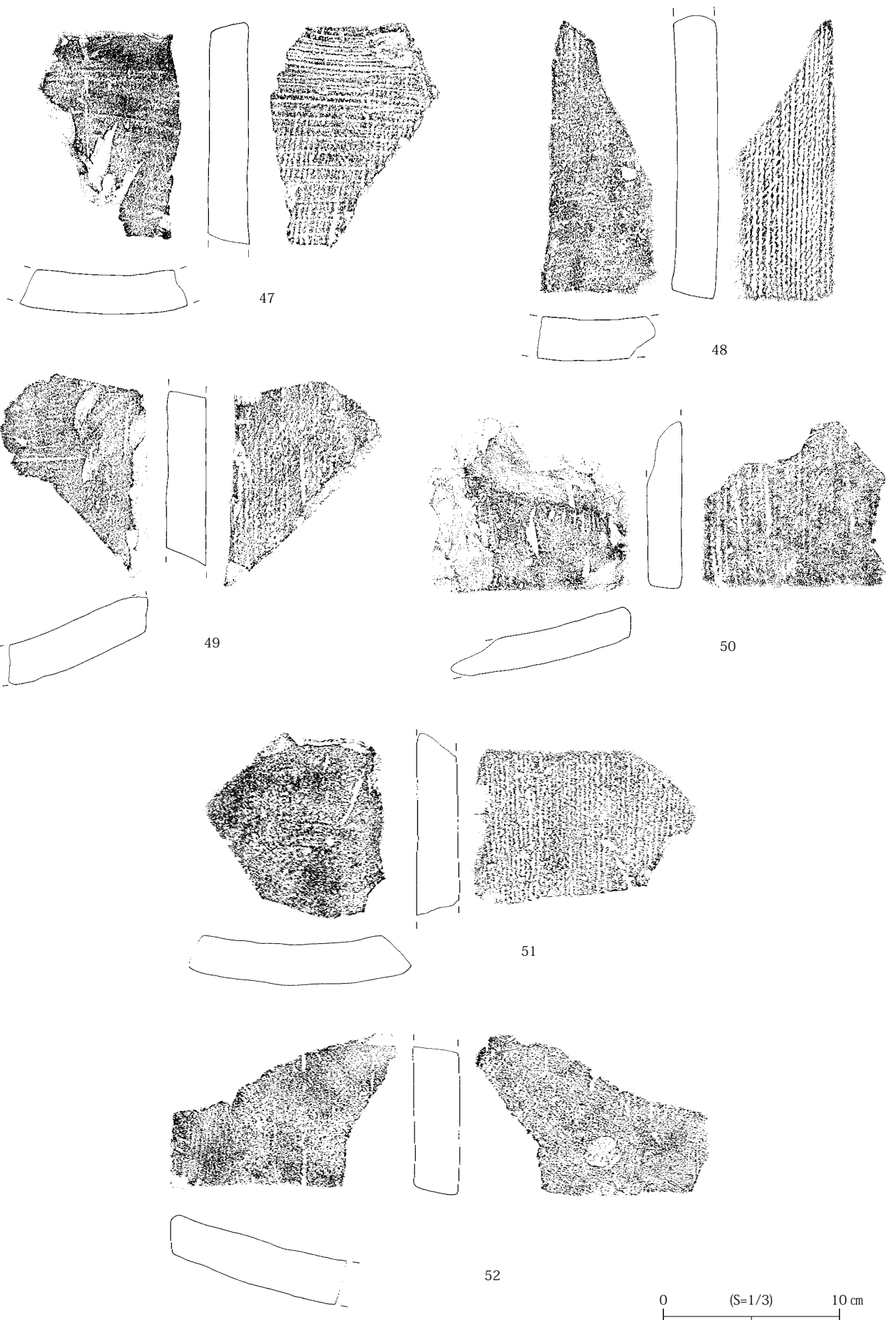


图8 第1面遺構外出土遺物(2)

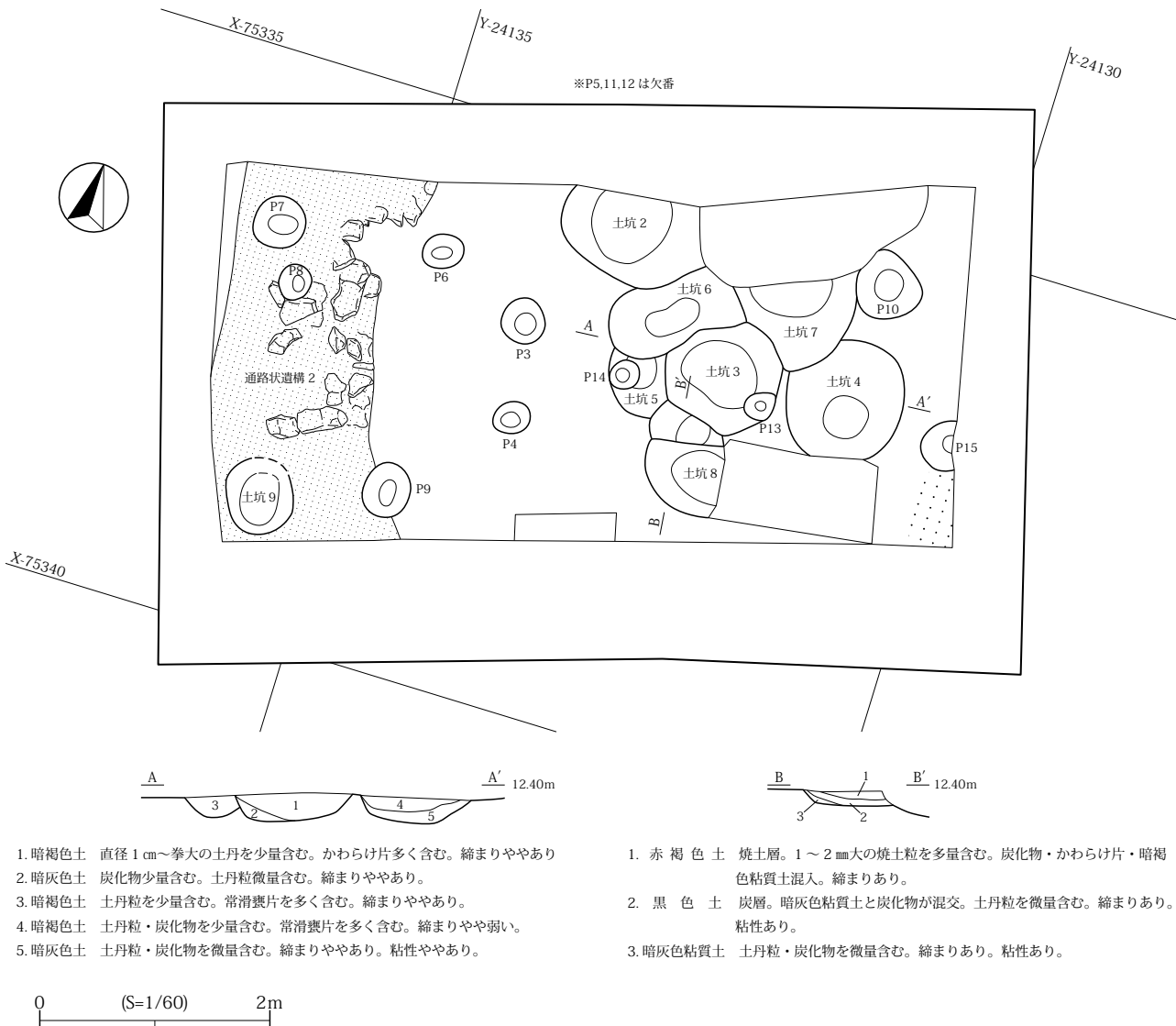


図9 第2面全体図

出された通路状遺構1と同様に南側ほど地業が軟弱になる様子が見受けられた。また、路面東端部より東側も掘り下げ時に土丹が比較的多く含まれていたことが確認されており、これらも本址の一部であったとすれば、記録された範囲よりも東側はもう少し広がっていた可能性がある。

### 土坑2 (図9,10)

調査区中央よりやや東部の北壁にかかる状態で検出された。調査区外北へ延び、東部を土坑1により失われているため平面形は不明瞭であるが、検出している範囲からは楕円形もしくは不定形となることが推測される。規模は長軸130cm以上×短軸80cm以上、掘り込み面からの深さ約50cmを測る。覆土は土丹粒・小ブロックをやや多く含む黒褐色土である。

1～3はかわらけ。1はロクロ糸切り、2,3は手づくね成形。

### 土坑3 (図9,10)

調査区中央よりやや東で検出された。別な遺構の重複が著しく平面形は歪みが大きいのが、略楕円形を呈する。規模は長軸約100cm×短軸約90cm、検出面からの深さ約20cmを測る。覆土は土丹粒を少量含む暗褐色土で、かわらけ片を多く含む。

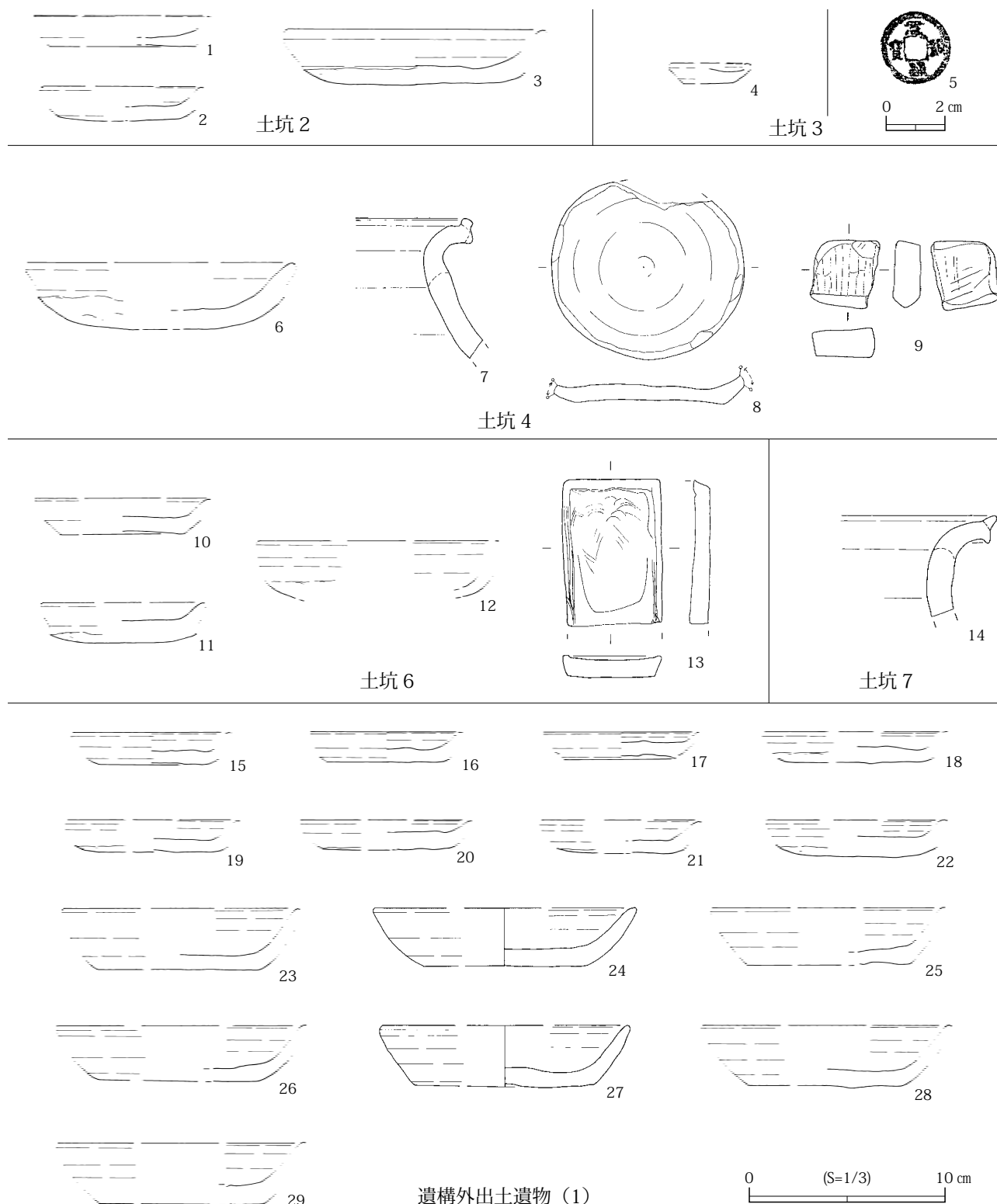
4はかわらけ。俗にコースターと呼称する内折れかわらけ。5は銭。元祐通寶。



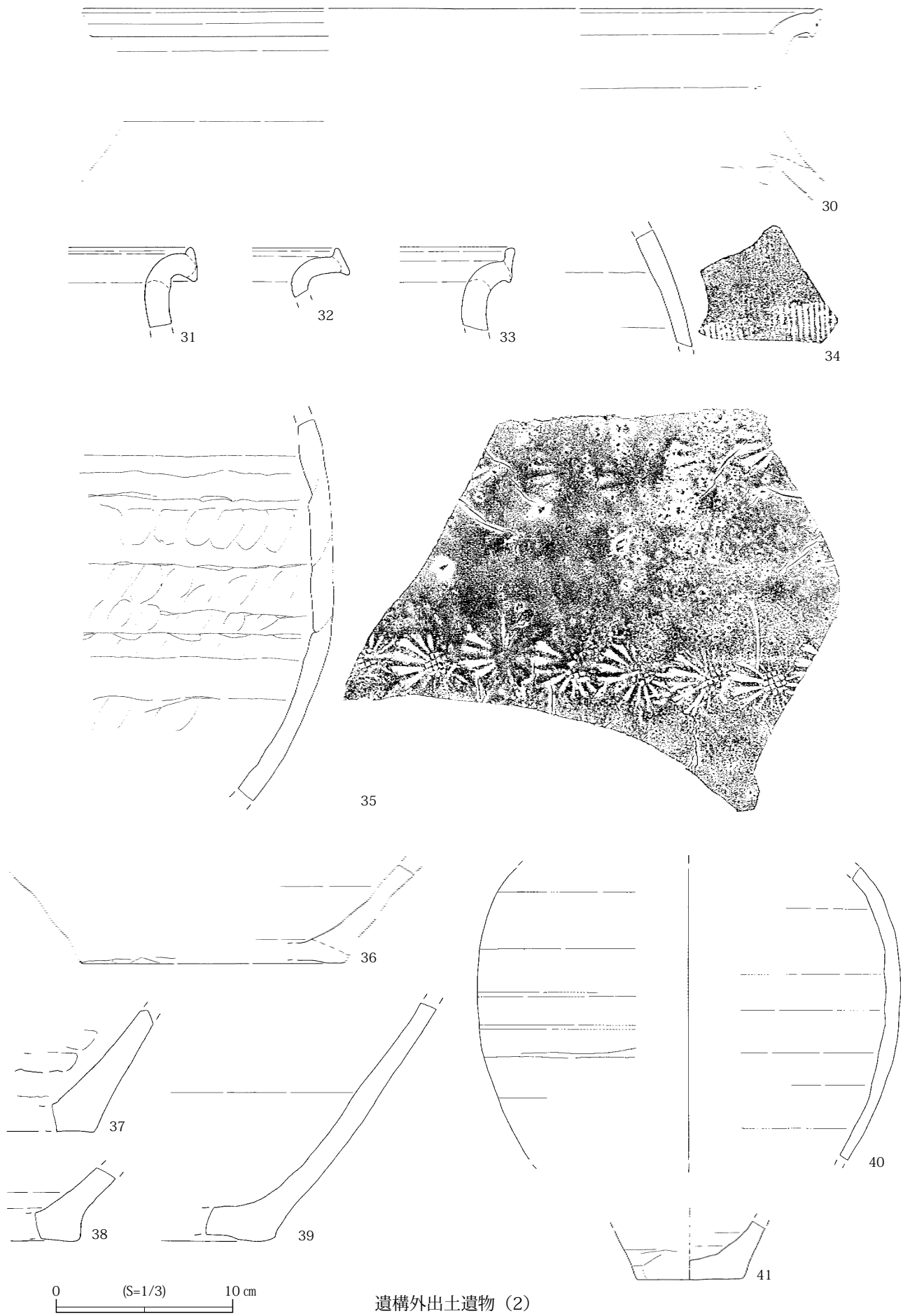
土坑 4 (図 9,10)

調査区東部中央付近で検出された。平面形は略楕円形を呈する。規模は長軸約 110cm×短軸約 100cm、検出面からの深さ約 20cmを測る。覆土は土丹粒・炭化物を少量含み暗灰色土混交する暗褐色土で、常滑甕片を多く含む。

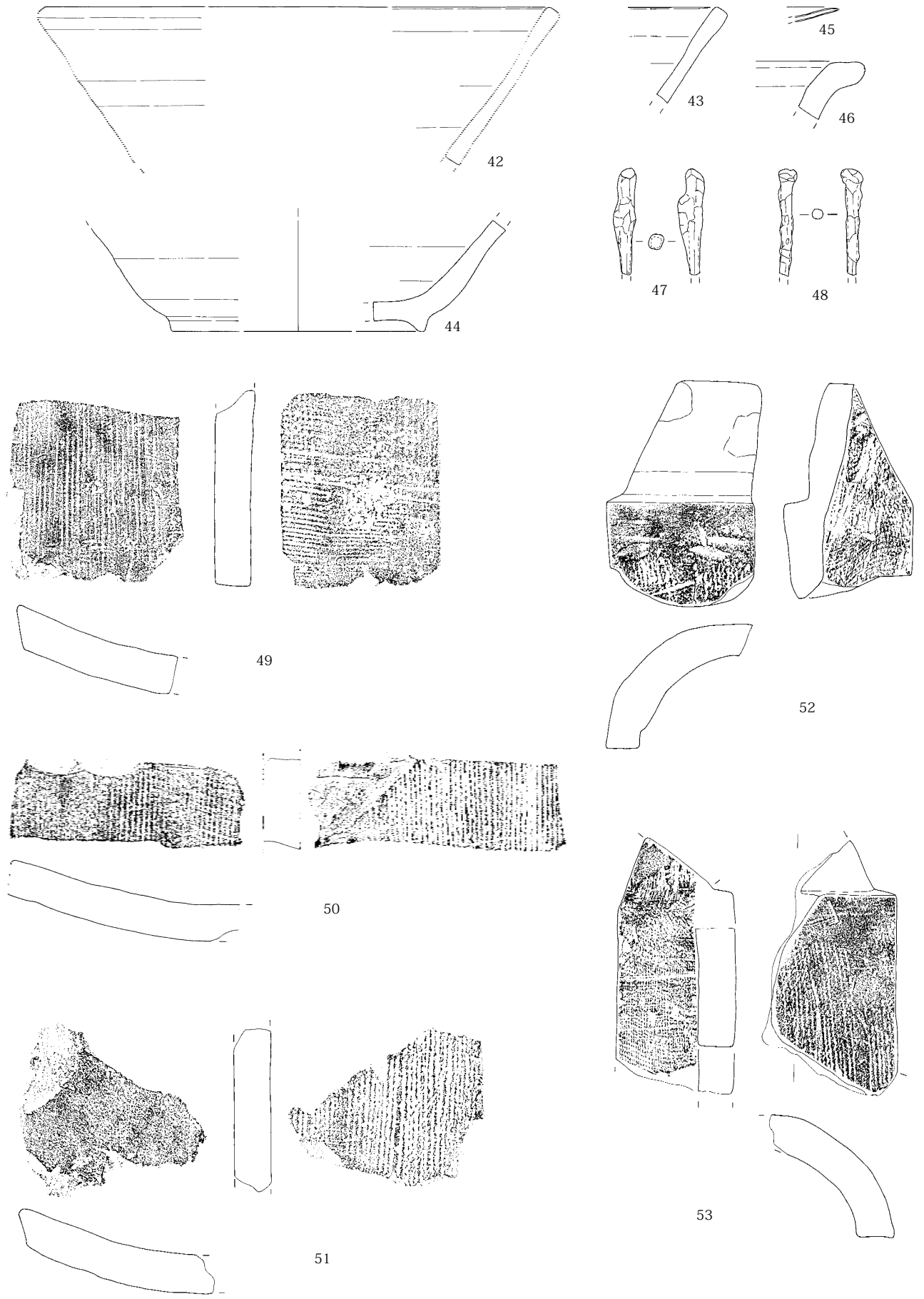
6 はかわらけ。手づくね成形。7 は常滑甕。8 はかわらけ円板。かわらけ口縁部を打ち欠いて円板状にしたもの。9 は滑石鍋。研磨に転用したものか刃物痕が無数に残る。



遺構外出土遺物 (1)  
 図 10 第 2 面出土遺物 (1)



遺構外出土遺物 (2)  
 图 11 第 2 面出土遺物 (2)



遺構外出土遺物 (3)  
 图 12 第 2 面出土遺物 (3)

0 (S=1/3) 10 cm

### 土坑 5 (図 9)

調査区中央よりやや東で検出された。北部が別遺構により切り込まれ失われているが、遺存する部分での平面形は略楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸 60cm 以上×短軸約 50cm、検出面からの深さ約 20cm を測る。覆土は土丹粒を少量含む暗褐色土で、常滑甕片を多く含む。

### 土坑 6 (図 9,10)

調査区中央よりやや東で検出された。別な遺構の重複が著しく平面形は歪みが大きい、略楕円形を呈する。規模は長軸約 110cm×短軸約 60cm、検出面からの深さ約 20cm を測る。覆土は炭層を主体とし、締め弱い黒色土で構成される。

10,11 はかわらけ。10 はロクロ糸切り、11 は手づくね成形。12 は白かわらけ。手づくね成形。13 は石製硯。

### 土坑 7 (図 9,10)

調査区北東部付近で検出された。別な遺構の重複が著しく、北部を土坑 1 に切り込まれ失っているため平面形は不明瞭であるが、遺存する部分では楕円形もしくは不定形を呈するものと思われる。規模は長軸約 100cm×短軸 70cm 以上、検出面からの深さ約 10cm を測る。覆土は土丹を少量含む暗褐色土で、暗灰色土が混交する。

14 は常滑甕。

### 土坑 8 (図 9)

調査区中央よりやや南東で検出された。別な遺構や試掘坑に切り込まれ欠失部分が多いが、平面形は不定形を呈するものと思われる。規模は長軸 100cm 以上×短軸 70cm 以上、検出面からの深さ約 15cm を測る。浅い播鉢状の土坑で底面にはわずかに起伏が見られ、南側が一段深くなっている。覆土上層には

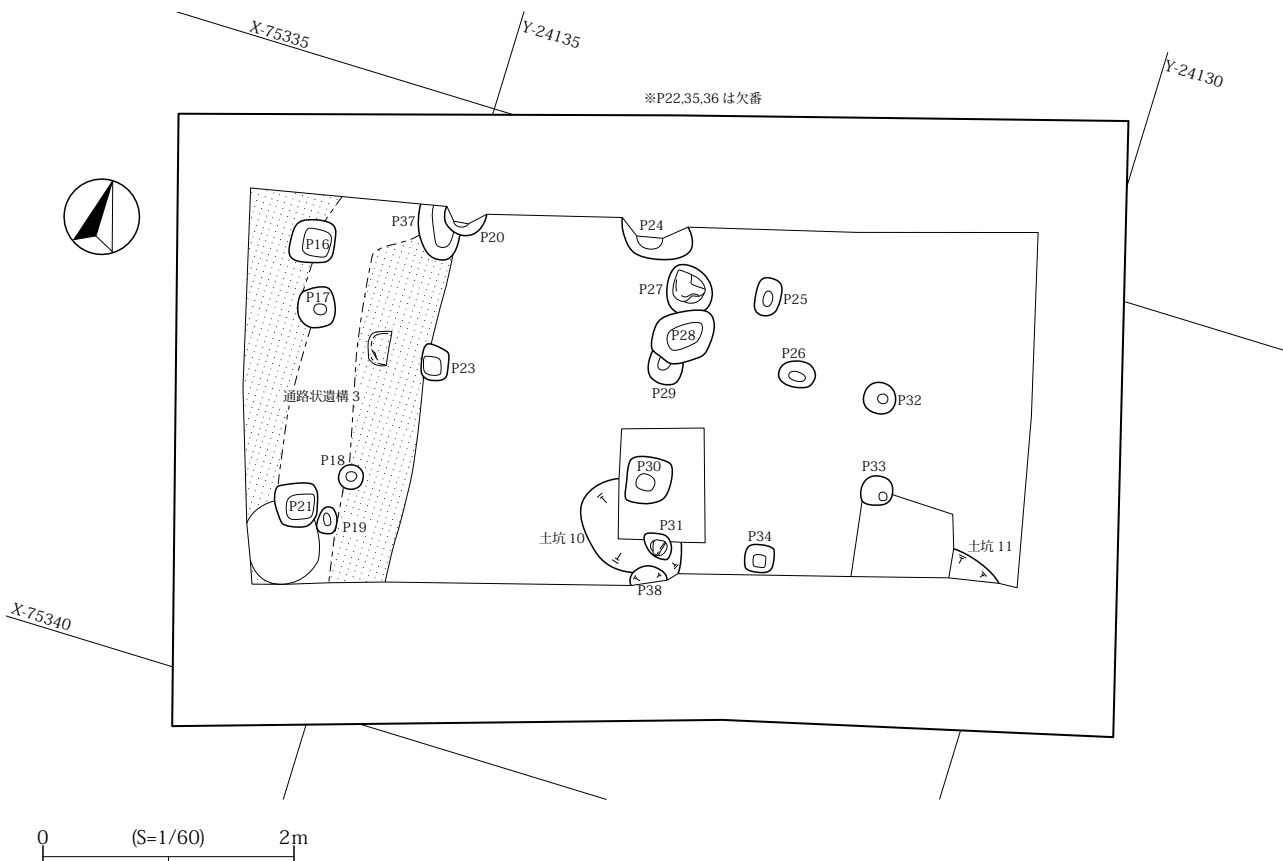


図 13 第 3 面全体図

焼土層が堆積していたが、焼土の純層ではなく暗褐色土が混交している状況であったため、別な場所から持ち込んで投棄したものと考えられる。下層には暗灰色粘質土が混交する炭層が堆積する。

### 土坑 9 (図 9)

調査区南西角部で検出された。本面調査時にプランを確認することができず、第 3 面調査時に検出したものであるが、調査区西壁の堆積土層を観察したところ本面に帰属するものであることが判った。平面形は略楕円形を呈する。規模は長軸約 70cm×短軸約 60cm、掘り込み面からの深さ約 50cmを測る。覆土は土丹粒・小ブロックを多量含む黒褐色土で構成される。

### 遺構外出土遺物 (図 10 ~ 12)

15 ~ 29 はかわらけ。15 ~ 17、23 ~ 29 はロクロ糸切り、18 ~ 22 は手づくね成形。30 ~ 39 は常滑甕。34 は肩部に楡目状の印判文、35 は胴部に菊花の印判文が押印される。40, 41 は常滑壺。42 ~ 44 は

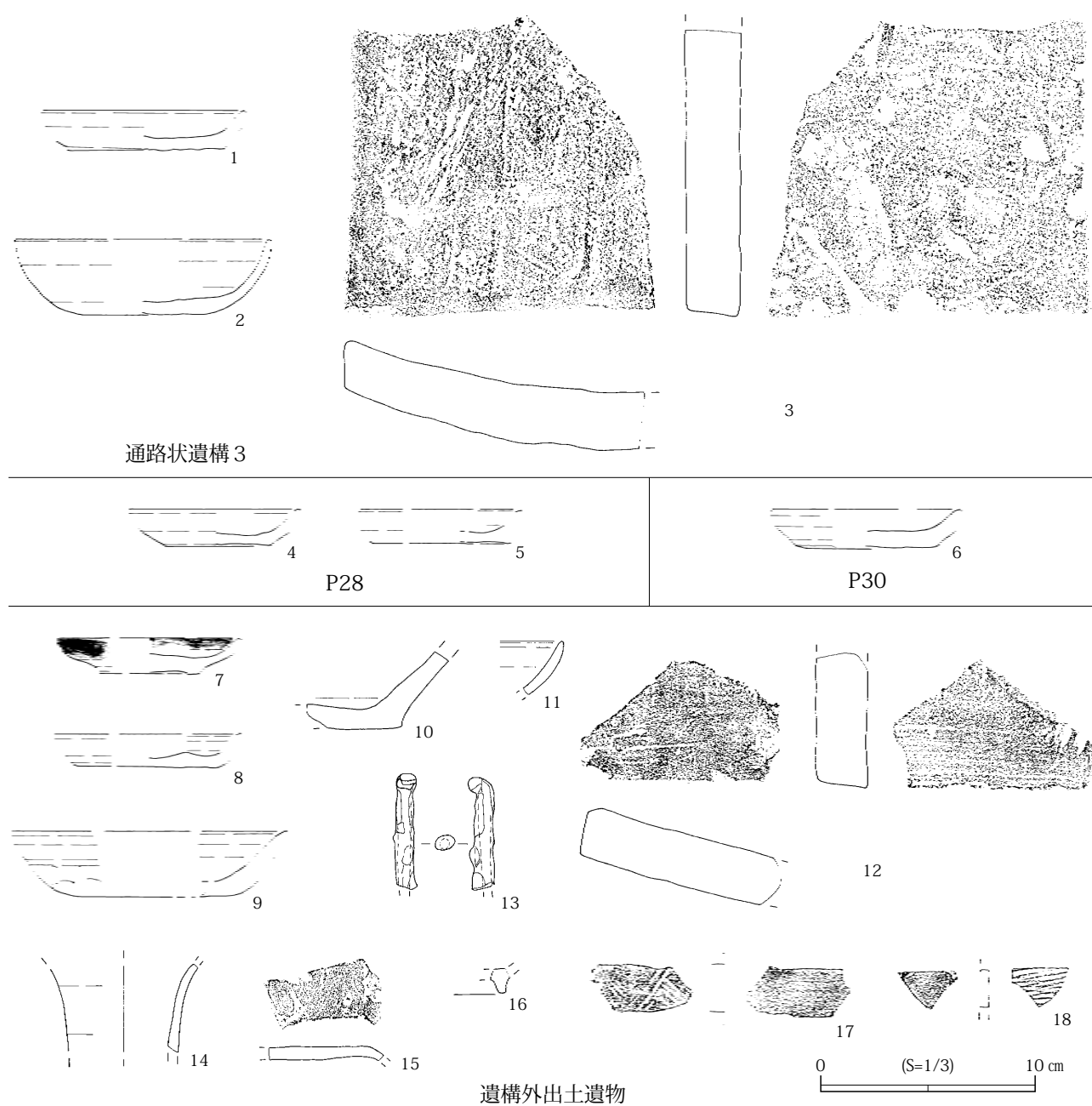


図 14 第 3 面出土遺物

山茶碗窯系片口鉢。45 は青白磁皿。46 は土師質火鉢。47,48 は鉄釘。49～53 は瓦。49～51 は平瓦、52,53 は丸瓦。

[第3面]

本面では通路状の土丹敷のほか、土坑2基・ピット20基を検出している。面構成土は、土丹粒・かわらけ片を少量含む締まり良好な黒褐色土となる。面標高は約12.1mを測る。

通路状遺構3 (図13,14)

調査区の西部を南北に延びる状態で検出された。調査区外西へ延びるため全体幅は不明であるが、少なくとも170cm以上を測る。路面標高は約12.2m。主軸方位はN-7°-Wを指す。土丹粒を密に含む土丹地業面である。本址では中央付近が溝状になるプランが確認されたが、これを切り込むピットの壁面などを観察しても溝となるような掘り込みが確認されなかった。後に調査区北壁で堆積土層を観察したが、やはり溝となるような掘り込みは確認されず、単にこの部分の地業がやや軟弱な様子であった。

1,2 はかわらけ。いずれもロクロ糸切り成形。3 は平瓦。

P28 出土遺物 (図13,14)

4,5 はかわらけ。いずれもロクロ糸切り成形。

P30 出土遺物 (図13,14)

6 はかわらけ。手づくね成形。

遺構外出土遺物 (図13,14)

7～9 はかわらけ。7,8 はロクロ糸切り成形。7 は内・外面に油煙付着し、灯明皿として使用されたもの。

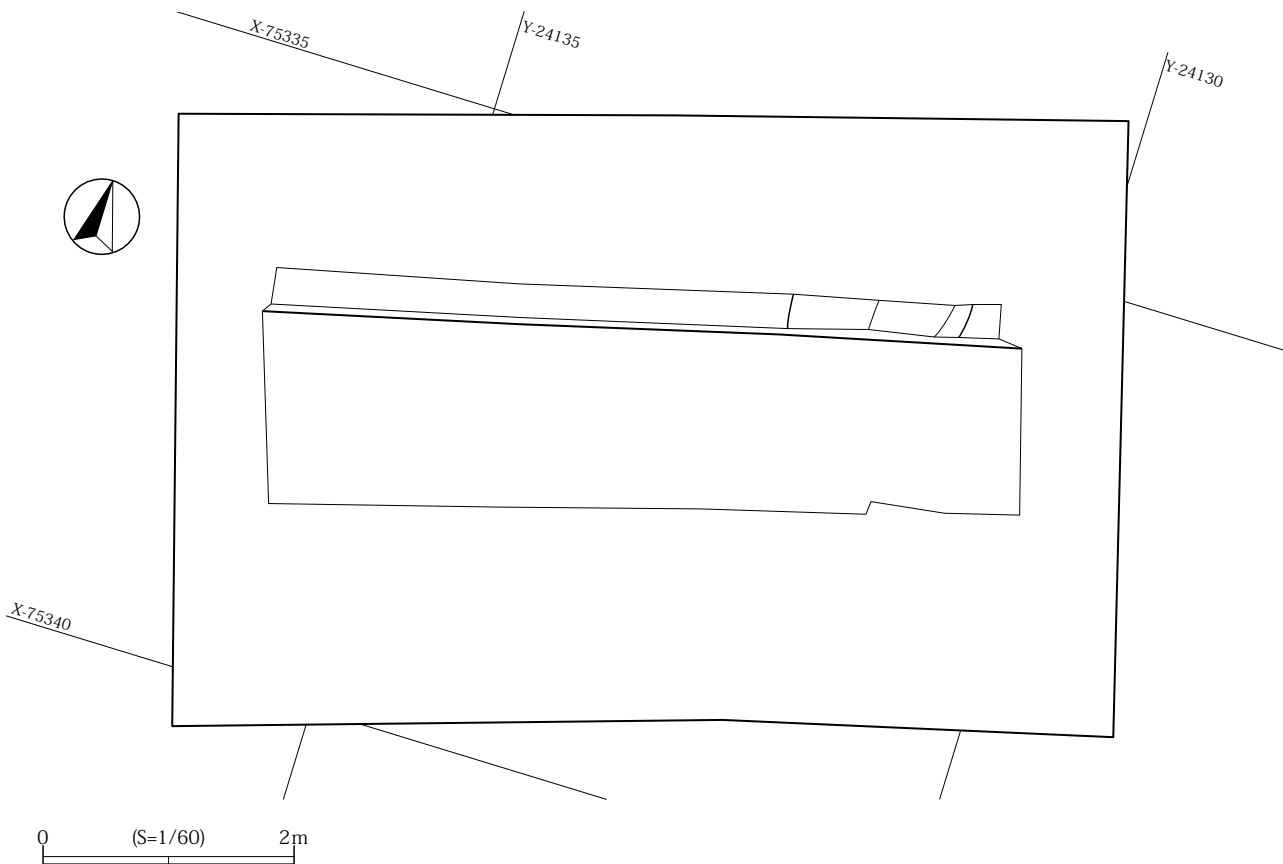


図15 第4面全体図

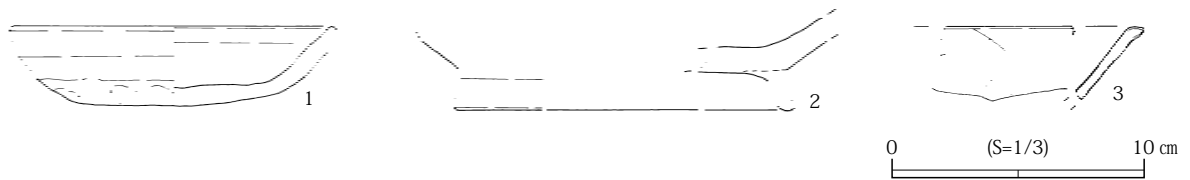


図 16 第 4 面遺構外出土遺物

9 は手づくね成形。10 は常滑片口鉢。11 は白かわらけ。12 は平瓦。13 は鉄釘。14 ~ 18 は須恵器。14 は瓶子の頸部片、15 は蓋、16 は坏の底部片、17,18 はいずれも器種不明の体部片。壺・甕類か。

[第 4 面]

本面は中世基盤層となる自然堆積層の上面であり、土丹粒を微量、褐鉄を多く含む締まり良好な黒褐色土で構成される。面標高は約 11.9 m を測る。

遺構外出土遺物 (図 16)

1 はかわらけ。手づくね成形。2 は山茶碗窯系片口鉢。3 は白磁端反り碗。

[深掘りトレンチ]

調査の結果、第 4 面では遺構が確認されなかった。その後、これより下層となる遺構の有無を確認する目的で調査区北壁に沿ってトレンチを設定し、深掘りを行ったところ、構成土中より古代の土師器・須恵器片が少量出土するものの中世遺物は皆無であり、本面が中世最初期にあたることが確認された。以下に古代遺構が存在するかトレンチ壁面で堆積土層を観察したが、谷地形あるいは窪地と思われる自然地形の落ち込みが確認されたのみで、人為的に掘り込んだと思われるような立ち上がりは確認されなかった。

図 17-1 は土師器坏の底部片。丸底を呈する。

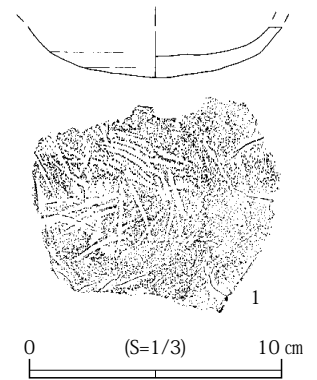


図 17 深掘りトレンチ出土遺物

表1 出土遺物法量表 1/2

No.	面	出土位置	種別	法量 (cm)			備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	
6-1	1	通路状遺構 1	土製品泥人形	長さ [6.8]	幅 4.6	厚さ 3.4	人体の意匠
2	1	土坑 1	かわらけ	(7.8)	—	1.4	手握ね
3	1	土坑 1	かわらけ	(9.2)	—	1.7	手握ね
4	1	土坑 1	かわらけ	(9.0)	—	1.6	手握ね
5	1	土坑 1	かわらけ	(13.4)	—	3.5	手握ね
6	1	土坑 1	青白磁碗	—	—	[2.6]	
7	1	土坑 1	白磁口元皿	(10.0)	—	[2.1]	
8	1	土坑 1	平瓦	長さ [12.5]	幅 [6.4]	厚さ 1.9	
7-1	1	遺構外	かわらけ	8.1	6.6	1.4	ロクロ
2	1	遺構外	かわらけ	8.2	5.9	1.5	ロクロ
3	1	遺構外	かわらけ	7.6	5.1	1.7	ロクロ
4	1	遺構外	かわらけ	(8.0)	5.0	1.4	ロクロ
5	1	遺構外	かわらけ	7.8	5.5	1.8	ロクロ
6	1	遺構外	かわらけ	(7.8)	5.6	1.5	ロクロ
7	1	遺構外	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.4	ロクロ
8	1	遺構外	かわらけ	(7.2)	(5.3)	1.4	ロクロ
9	1	遺構外	かわらけ	(8.4)	5.6	1.5	ロクロ
10	1	遺構外	かわらけ	(8.0)	5.2	1.5	ロクロ
11	1	遺構外	かわらけ	(7.4)	5.4	1.5	ロクロ
12	1	遺構外	かわらけ	(7.6)	5.0	1.5	ロクロ
13	1	遺構外	かわらけ	(7.4)	(6.2)	1.1	ロクロ
14	1	遺構外	かわらけ	12.2	7.9	2.9	ロクロ
15	1	遺構外	かわらけ	(12.4)	8.4	2.8	ロクロ
16	1	遺構外	かわらけ	12.7	7.6	3.2	ロクロ
17	1	遺構外	かわらけ	(12.0)	(7.0)	2.8	ロクロ
18	1	遺構外	かわらけ	(13.2)	(7.0)	3.0	ロクロ
19	1	遺構外	かわらけ	(12.8)	(8.0)	2.4	ロクロ
20	1	遺構外	かわらけ	(13.0)	(7.8)	3.1	ロクロ
21	1	遺構外	かわらけ	(13.6)	(9.0)	3.0	ロクロ
22	1	遺構外	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.0	ロクロ
23	1	遺構外	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.1	ロクロ
24	1	遺構外	常滑甕	—	—	[5.0]	
25	1	遺構外	常滑甕	—	—	[3.4]	
26	1	遺構外	常滑甕	—	—	[4.0]	
27	1	遺構外	常滑甕	—	—	[8.5]	
28	1	遺構外	常滑片口鉢	—	—	[6.5]	
29	1	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[3.0]	
30	1	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[3.9]	
31	1	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[4.7]	
32	1	遺構外	瀬戸瓶子類	—	—	[3.7]	
33	1	遺構外	瀬戸瓶子類	—	—	[8.0]	
34	1	遺構外	青磁碗	—	—	[2.2]	内面画花文
35	1	遺構外	青磁碗	—	—	[3.8]	外面鎬蓮弁文
36	1	遺構外	青磁皿	—	(8.2)	[1.7]	
37	1	遺構外	白磁端反り碗	—	—	[3.2]	
38	1	遺構外	白磁口元皿	—	(6.8)	[0.7]	
39	1	遺構外	青白磁皿	(5.6)	(1.6)	1.2	内底面貼付文
40	1	遺構外	土製品泥人形	長さ [7.4]	幅 4.3	厚さ 2.2	人体の意匠
41	1	遺構外	土製品泥人形	長さ 5.2	幅 8.4	厚さ 3.7	台座か
42	1	遺構外	瓦質火鉢	—	—	[2.8]	
43	1	遺構外	土製品双六駒	長さ 1.9	幅 2.2	厚さ 0.8	
44	1	遺構外	石製品滑石鍋	長さ [5.2]	幅 [2.6]	厚さ 1.3	研磨に転用
45	1	遺構外	鉄製品釘	長さ 3.9	幅 0.5	厚さ 0.5	
46	1	遺構外	金属製品銭	直径 2.4	—	—	紹聖元寶
8-47	1	遺構外	平瓦	長さ [12.5]	幅 [9.6]	厚さ 2.2	
48	1	遺構外	平瓦	長さ [15.7]	幅 [5.8]	厚さ 2.4	
49	1	遺構外	平瓦	長さ [9.4]	幅 [7.7]	厚さ 2.3	
50	1	遺構外	平瓦	長さ [9.4]	幅 [9.1]	厚さ 2.0	
51	1	遺構外	平瓦	長さ [10.0]	幅 [12.5]	厚さ 2.4	
52	1	遺構外	平瓦	長さ [8.0]	幅 [10.0]	厚さ 2.6	
10-1	2	土坑 2	かわらけ	(9.0)	(7.4)	1.6	ロクロ
2	2	土坑 2	かわらけ	(8.4)	—	1.7	手握ね
3	2	土坑 2	かわらけ	13.5	—	2.8	手握ね
4	2	土坑 3	かわらけ	(4.2)	(2.6)	1.0	ロクロ、口縁部内折れ
5	2	土坑 3	金属製品銭	直径 2.4	—	—	元祐通寶
6	2	土坑 4	かわらけ	(13.8)	—	3.4	手握ね
7	2	土坑 4	常滑甕	—	—	[7.1]	
8	2	土坑 4	かわらけ円板	直径 9.8	—	1.4	かわらけ加工品
9	2	土坑 4	石製品滑石鍋	長さ [3.5]	幅 [3.2]	厚さ 1.5	



表2 出土遺物法量表 2/2

No.	面	出土位置	種別	法量 (cm)			備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	
10 - 10	2	土坑 6	かわらけ	(9.0)	(6.2)	1.8	ロクロ
11	2	土坑 6	かわらけ	(8.4)	—	2.0	手捏ね
12	2	土坑 6	白かわらけ	(12.4)	—	[2.8]	手捏ね
13	2	土坑 6	石製品硯	長さ [7.4]	幅 5.1	厚さ 1.1	
14	2	土坑 7	常滑甕	—	—	[5.1]	
15	2	遺構外	かわらけ	8.2	5.7	1.6	ロクロ
16	2	遺構外	かわらけ	7.8	6.1	1.5	ロクロ
17	2	遺構外	かわらけ	7.9	5.7	1.4	ロクロ
18	2	遺構外	かわらけ	(9.6)	—	1.5	手捏ね
19	2	遺構外	かわらけ	(9.0)	—	1.6	手捏ね
20	2	遺構外	かわらけ	(8.8)	—	1.5	手捏ね
21	2	遺構外	かわらけ	(8.2)	—	1.7	手捏ね
22	2	遺構外	かわらけ	(9.2)	—	1.8	手捏ね
23	2	遺構外	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.1	ロクロ
24	2	遺構外	かわらけ	(13.4)	(8.2)	2.9	ロクロ
25	2	遺構外	かわらけ	(12.0)	(8.4)	2.8	ロクロ
26	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(8.2)	2.8	ロクロ
27	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(9.0)	3.1	ロクロ
28	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(7.8)	3.0	ロクロ
29	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(8.3)	3.1	ロクロ
11 - 30	2	遺構外	常滑甕	(42.0)	—	[10.4]	
31	2	遺構外	常滑甕	—	—	[4.5]	
32	2	遺構外	常滑甕	—	—	[2.7]	
33	2	遺構外	常滑甕	—	—	[4.7]	
34	2	遺構外	常滑甕	—	—	[6.5]	肩部櫛目状印判文
35	2	遺構外	常滑甕	—	—	[21.5]	体部菊花印判文
36	2	遺構外	常滑甕	—	(15.0)	[5.5]	
37	2	遺構外	常滑甕	—	—	[6.9]	
38	2	遺構外	常滑甕	—	—	[4.1]	
39	2	遺構外	常滑甕	—	—	[13.6]	
40	2	遺構外	常滑壺	—	—	[16.5]	
41	2	遺構外	常滑壺	—	(6.0)	[3.3]	
12 - 42	2	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	(29.0)	—	[8.7]	
43	2	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[5.3]	
44	2	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	(14.2)	[6.2]	
45	2	遺構外	青白磁皿	—	—	[0.8]	
46	2	遺構外	土師質火鉢	—	—	[3.2]	
47	2	遺構外	鉄製品釘	長さ [5.8]	幅 [0.8]	厚さ [0.9]	
48	2	遺構外	鉄製品釘	長さ [5.9]	幅 [0.6]	厚さ [0.6]	
49	2	遺構外	平瓦	長さ [10.8]	幅 [9.0]	厚さ [2.0]	
50	2	遺構外	平瓦	長さ [4.9]	幅 [12.9]	厚さ [2.0]	
51	2	遺構外	平瓦	長さ [8.3]	幅 [10.8]	厚さ [2.1]	
52	2	遺構外	丸瓦	長さ [12.4]	幅 [8.1]	厚さ [2.1]	
53	2	遺構外	丸瓦	長さ [13.7]	幅 [7.0]	厚さ [2.0]	
14 - 1	3	通路状遺構 3	かわらけ	9.6	7.2	1.8	ロクロ
2	3	通路状遺構 3	かわらけ	(12.0)	5.6	3.5	ロクロ
3	3	通路状遺構 3	平瓦	長さ [13.2]	幅 [14.0]	厚さ [2.5]	
4	3	P28	かわらけ	8.1	4.8	1.7	ロクロ
5	3	P28	かわらけ	(7.6)	(6.2)	1.6	ロクロ
6	3	P30	かわらけ	(9.0)	—	1.8	手捏ね
7	3	遺構外	かわらけ	(8.6)	(4.6)	1.6	ロクロ、口縁部油煙付着
8	3	遺構外	かわらけ	(8.8)	(6.8)	1.5	ロクロ
9	3	遺構外	かわらけ	(12.8)	—	3.0	手捏ね
10	3	遺構外	常滑片口鉢	—	—	[3.6]	
11	3	遺構外	白かわらけ	—	—	[2.5]	
12	3	遺構外	平瓦	長さ [5.6]	幅 [9.1]	厚さ 2.4	
13	3	遺構外	鉄製品釘	長さ [5.2]	幅 [0.8]	厚さ [0.8]	
14	3	遺構外	須恵器瓶子	—	—	[4.0]	
15	3	遺構外	須恵器蓋	—	—	[0.7]	
16	3	遺構外	須恵器坏	—	—	[1.1]	
17	3	遺構外	須恵器器種不明	—	—	[2.2]	
18	3	遺構外	須恵器器種不明	—	—	[1.8]	
16 - 1	4	遺構外	かわらけ	13.0	—	3.1	手捏ね
2	4	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	(13.4)	[3.6]	
3	4	遺構外	白磁端反り碗	—	—	[2.9]	
17 - 1	4下	遺構外	土師器坏	—	—	[2.0]	

## 第六章 まとめ

今回の調査では計4面の調査を行ったが、中世基盤層となる第4面では遺構が検出されず、生活痕跡を残す遺構面としては計3面となる。第1～3面まで、いずれの面においても調査区西部を南北に延びる通路状の土丹敷が検出されており、それより東側の生活面は軟弱な地業面上より掘り込まれた土坑類が目立つ状況となっている。

出土した中世遺物は全体的に見て13世紀前半～14世紀代に至るものと思われる。遺物としてはかわらけが最も多く、次いで常滑窯産の甕片が多く出土している。そのほかの国産・舶載陶磁器類や石製品、金属製品も少量出土しているものの、かわらけ・常滑製品を含め、完形で出土しているものはわずかであった。出土遺物から比定される各面の年代観は、第1面が13世紀後半～14世紀代、第2面が13世紀後半、第3面が13世紀中葉～後半、第4面が13世紀前半～中葉と考えられる。

第4面調査時に設定したトレンチで中世基盤層以下の状況を確認したところ、谷地形あるいは窪地のような自然地形と思われる落ち込みが確認されている。本調査地の北方を西流する二階堂川は、本調査地点のすぐ北側で一度南へとU字型に膨らむが、第4面で検出された落ち込みが北方に向けて開口する谷であれば、これに沿って二階堂川が南へ膨らんだ可能性があるだろう。この落ち込みの埋没土中には、土師器・須恵器片は少量含むが中世遺物が皆無であることから、中世に至る以前の段階でこの古地形はおおよそ埋没したものと思われる。出土した土器はいずれも体部片・細片で、詳しい年代は判らなかった。また、第4面では遺構が検出されず、この上層にも中世遺物を含むものの自然に埋積したと思われる層が堆積していることから、鎌倉時代前期のある段階まではそれほど積極的に土地利用がされていないようにも感じられた。中世に至っても谷地形あるいは窪地のような地形が残り、しばらくは生活に適さないような環境であったのかもしれない。

今回の調査では建物を構成するようなピットの配列なども認められず、検出されたのは通路状の遺構のほか土坑類が主であり、遺跡の性格については判然としない。本調査地点より東側の第二小学校用地の調査では、屋敷地と思われる掘立柱建物跡などの遺構群が多数検出されており、これと対照的に南側の県道204号金沢鎌倉線付近の調査では町屋と思われる方形竪穴建物跡が検出されている。また、北側と西側は二階堂川によって限られており、周辺遺跡の様相から本遺跡地の性格を推定するにも資料はまだ不足していると言わざるを得ない。今後のさらなる調査成果の蓄積が待たれるところである。



1. 調査地現況 (南から)



2. 現代攪乱確認状況 (東から)

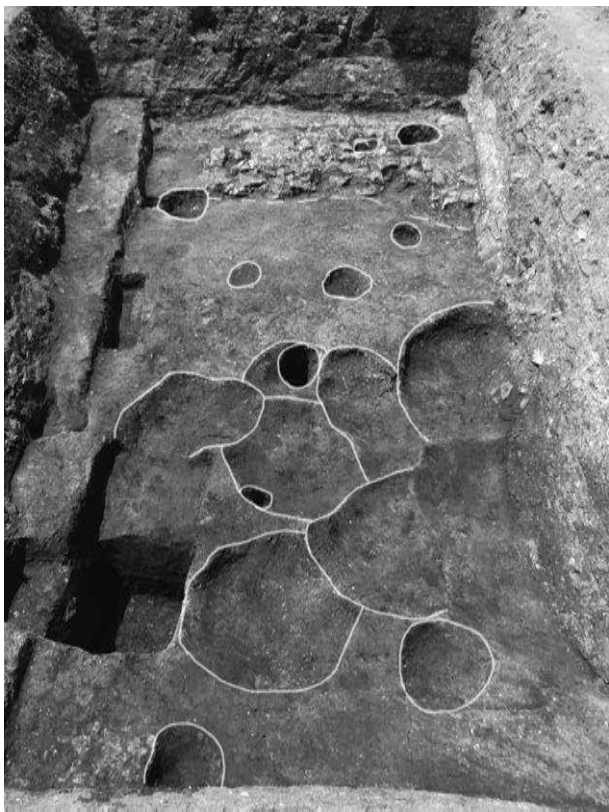


3. 第1面全景 (東から)

4. 第1面 通路状土丹敷 (南から)



図版2

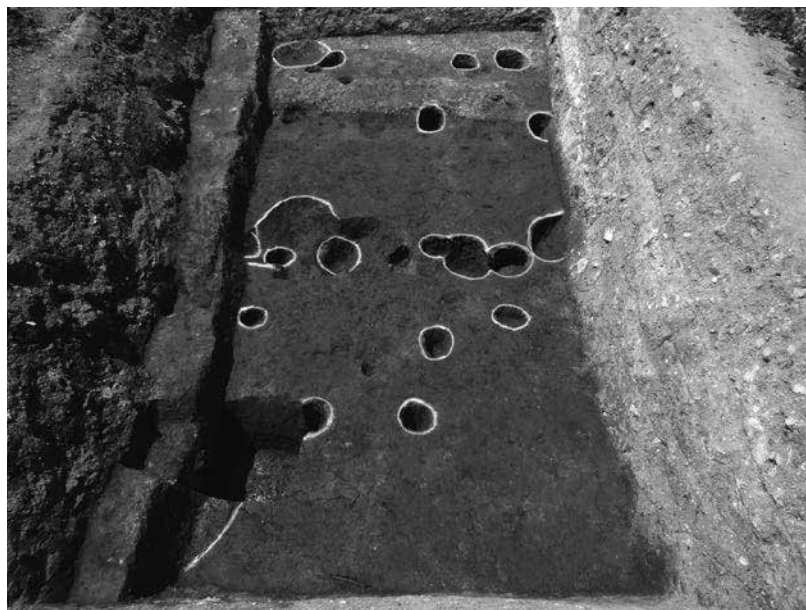


1. 第2面全景（東から）



2. 第2面 通路状土丹敷（南から）

3. 第3面全景（東から）



4. 第3面 通路状土丹敷（南から）

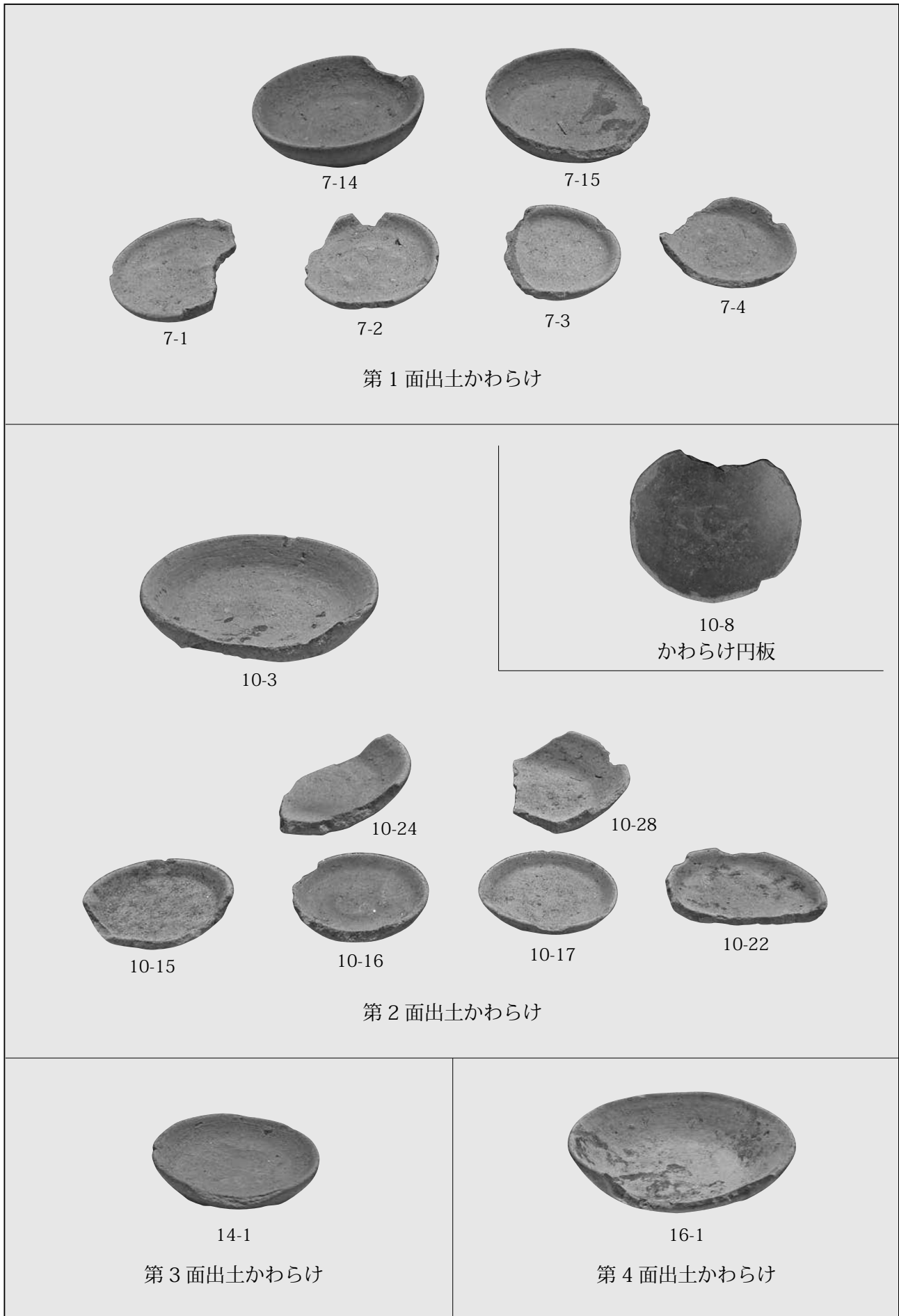


1. 第4面全景（西から）

2. 調査区北壁堆積土層（南から）



3. 調査区西壁堆積土層（東から）

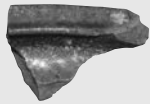


出土遺物 (1)





7-24



7-25



7-26



7-28

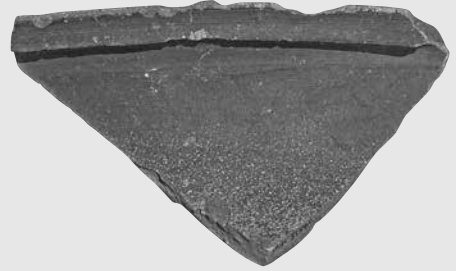
第1面出土常滑製品



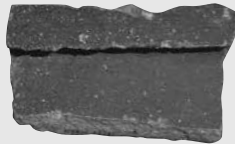
10-7



10-14



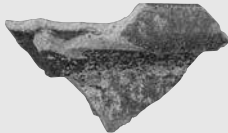
11-30



11-31



11-32



11-33



11-35



11-40

第2面出土常滑製品



14-10

第3面出土常滑製品

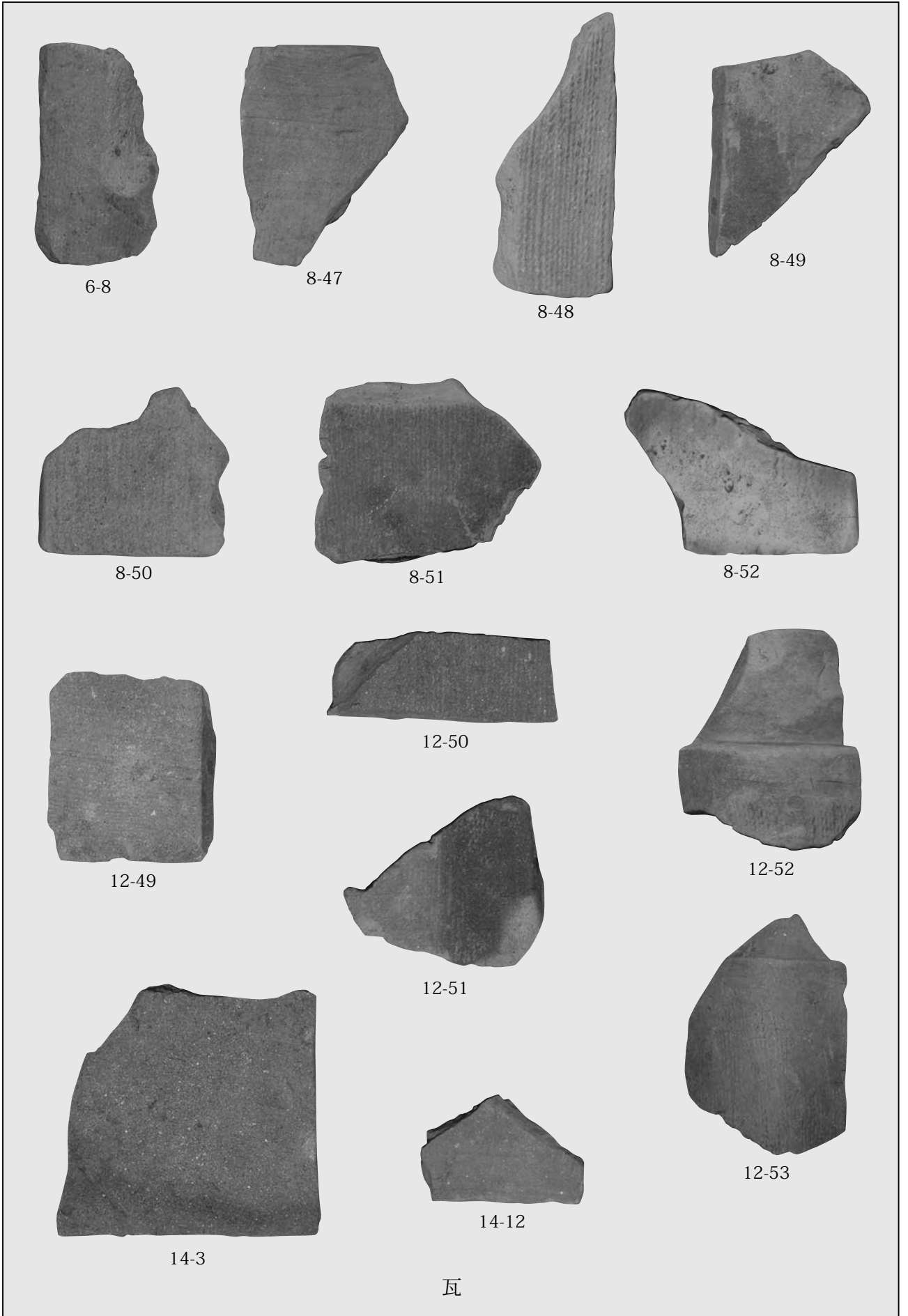
出土遺物 (2)

図版6



出土遺物 (3)





瓦

出土遺物 (4)



# 大慶寺旧境内遺跡 (No.361)

寺分一丁目 939 番 1 の一部地点

## 例 言

1. 本書は、神奈川県鎌倉市寺分一丁目 939 番 1 の一部に所在する、大慶寺旧境内遺跡（鎌倉市 No.361 遺跡）内の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として、平成 26 年 5 月 26 日から平成 26 年 6 月 25 日にかけて実施した。調査面積は 60m<sup>2</sup>である。
3. 発掘調査は事業主（個人）より委託を受けた有限会社鎌倉遺跡調査会（取締役：齋木秀雄）が行い、齋木秀雄が調査を担当した。
4. 本書の執筆・編集は齋木が行った。また、出土遺物構成表は降矢順子が作成した。
5. 本書で使用した写真は遺構・遺物を齋木が撮影した。
6. 発掘調査・資料整理体制

### 現地調査

調査担当者	齋木秀雄
調査員	村松彩美、加藤千尋
作業員	丹野正弘、赤坂進

### 資料整理

担当	齋木秀雄
遺物実測	村松彩美
トレース	(遺物) 村松彩美 (遺構) 村松彩美 (デジタルトレース)

図版作成 加藤千尋

7. 本書で使用している遺稿・遺物の縮尺は以下の通りである。

全体図	1/120
遺構 溝	1/60
遺物	1/1、1/3

8. 本文中で使用している土丹（どたん）は鎌倉の丘陵部を崩した泥岩塊の地域用語である。
9. 発掘調査資料（記録図面、写真、出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括して保管している。

# 目次

## 本文目次

第一章 調査地点概観	384
第1節 調査地点の立地と歴史的環境	
第2節 周辺の調査	
第3節 調査軸の設定と堆積土層	
第二章 検出した遺構と遺物	388
第1節 1面の遺構と遺物	
第2節 2面の遺構と遺物	
第3節 3面の遺構と遺物	
第4節 3古代の遺物	
第三章 まとめと考察	398
第1節 遺構の年代	
第2節 遺跡の性格	

## 挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	385	図6 溝	391
図2 調査区・グリット配置図	386	図7 出土遺物(1)	393
図3 堆積土層	387	図8 出土遺物(2)	394
図4 1面～3面全体図	389	図9 古代の遺物	397
図5 かわらけ集中	390		

## 表目次

表1 古代遺物カウント表	397	表4 遺物観察表(1)	401
表2 遺構観察表(1)	399	表5 遺物観察表(2)	402
表3 遺構観察表(2)	400	表6 出土遺物構成表	403

## 図版目次

図版1	404	2. 遺構7	
1. I区1面(南から)		3. 遺構41	
2. I区1面(東から)		4. 遺構21	
3. かわらけ集中(東から)		5. II区1面(北から)	
4. かわらけ集中(部分)		6. II区かわらけ集中(南から)	
5. I区遺構1堆積土		図版4	407
6. I区2面(南から)		1. II区2面(南から)	
図版2	405	2. 遺構69・78 遺物は灰釉陶器	
1. I区3面(南から)		3. 遺構30	
2. I区3面(東から)		4. 遺構41・45	
3. I区遺構27(溝・東から)		5. I区東壁(部分)	
4. I区据え桶		かわらけ集中の落ち込み。左下は岩盤	
5. 遺構46		図版5 出土遺物(1)	408
6. 遺構30		図版6 出土遺物(2)	409
図版3	406		
1. 遺構6			

# 第一章 調査地点概観

## 第1節 調査地点の立地と歴史的環境

調査地点は、鎌倉市寺分一丁目の北西に向かって開口する谷内に位置する。この谷には幾つかの支谷があり、調査地点は西に向かって開口する支谷内に位置している。この谷の奥には2mほど高い平坦面がある。現在は急角度の坂道で繋がっているが、階段で往来する地形であったと、周辺の状況から推測できる。この平坦面は、現在は谷奥が竹林で南側はアパートが建って明らかではないが、もともと全体が切り立った岩盤面に囲まれた一つの宅地であったと推測できる。岩盤面には、やぐらと思われる痕跡も残されている。調査地点は2m程高い平坦面の北西端にあたる。調査地点の地表面海拔は25mを測る。

調査地周辺はもともと深沢に含まれていた。『鎌倉事典』（東京堂出版、平成四年）に拠れば、深沢は現在の大仏辺から常盤、梶原、寺分、上町屋、笛田、手広、津、腰越、片瀬までも含む広い地域の名称であり、奈良時代は尺戸・片瀬の両郡内に、平安時代には鎌倉郡内の梶原郷に含まれていた。寺分の地名の由来は幾つか説があるが、寺分辺は小田原北条氏の『小田原衆所領役帳』に「須崎大慶寺分」と記された寺領であったが、下の二文字だけ残って「寺分」という地名になったという説が有力である。また深沢は鶴岡八幡宮二十五坊の内二十一坊の本料所になっていた。深沢地区に真言宗の寺院が多いのは鶴岡八幡宮とのつながりが深いためとも言われる。

調査地点周辺には寺院、神社が多くあり、調査地点北側の尾根を越えたところには駒形神社が、西110mには本地点の遺跡名である大慶寺がある。大慶寺は臨済宗円覚寺派の寺院で、山号は靈照山。寺伝等によれば、弘安年間(1278～1285)に無象静照がこの地に居住したのに始まったとされる。その後、元亨三年(1328)に円覚寺で行なわれた北条貞時の十三年供養記に道頭長老他僧衆八十三名が参加している。大きな寺院であったと推定される。大慶寺南100mには東光寺がある。東光寺は真言宗の寺院で、もと手広の青蓮寺末で現在は高野山宝寿院末。永享三年に高野山の慈眼院の法院靈範が隠居所として中興した。

東光寺の背後の山を越えた西には真言宗の等覚寺がある。もと手広の青蓮寺末、現在は高野山宝寿寺末。この寺は今の深沢中学校の辺にあって、御霊神社と境を接していたが明治六年に学校を建設するに際して現在の地に遷った。学校の建築に際して硯が沢山出土したと『鎌倉市史・社寺編』に書かれている。

御霊神社は本地点の南西200m、鎌倉市立深沢小学校の北にある。祭神は鎌倉権五郎景政。創建等は明らかではないが、鎌倉平氏の本居に祖神として祀られたと考えられている。社の南西には梶原景時の墓と伝えられる五輪塔がやぐらの中に安置されている。

本地点の西1100mには柏尾川に架かる古館橋があり、その北西には桓武平氏の村岡氏の居城と伝わる村岡城跡がある。梶原氏は村岡五郎忠通の弟、鎌倉権大夫景通の子景久が鎌倉郡梶原村に住んで梶原太郎を称したのが始まりとされる。

## 第2節 周辺の調査

周辺での調査は少なく、山沿いの横穴墓の調査(地点3)を除けば2地点で行なわれているに過ぎない。



図1 調査地点と周辺の遺跡

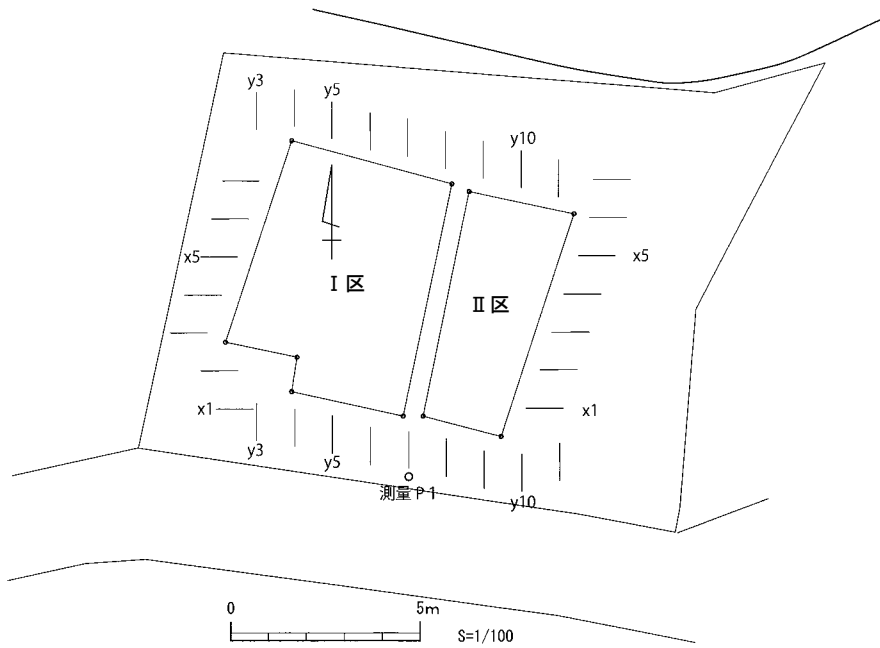


図2 調査区・グリッド配置図

本地点北130mに位置する地点2では4面の生活面が検出されている。最下層の4面では中世以前の遺物が多く、古墳時代中期までの年代が考えられている。次いで新しい3面では溝が多く検出され、中世後期から戦国期頃の年代が考えられている。1面と2面は近世の年代が考えられている。

本地点南300mに位置する地点4では5面の生活面が確認されている。最下層の5面では井戸が検出され、13世紀第4四半期～14世紀第3四半期の年代が考えられている。最も新しい1面では調査区を南北に縦断する土塁状遺構と溝が検出され、13世紀末以降の年代が考えられている。

これらの調査地点は、本地点と夫々が尾根を挟んだ小さな谷内に位置している。各地点の出土遺物の年代が異なるのは、時代によって使用される空間が大きく変化していることを示しているのかもしれない。

### 第3節 調査軸の設定と堆積土層

調査に使用した調査軸は国土交通省が公開している、都市再生街区基本調査杭（街区多角点10B66、節点1A442）から調査員が移動して作成した。調査区南に設定した測量ポイント1は緯度35° 19' 58"、経度139° 31' 22" でy軸は真南北方向を示している。

本地点の調査では10層の堆積を確認した。1層は現代の造成土でコンクリート片などを多く含んでいる。1'層は近世以降のかく乱層。2層は茶褐色の少し砂粒を含んだ土で中世遺物を少量含んでいる。攪拌された近世耕作土と判断した。3層はやや砂粒を含んだ暗褐色粘質土で炭化物や小土丹を含んでいる。中世遺物の包含層である。調査区北側では3層の下が削平岩盤面になる。やや攪拌された堆積と判断した。3'層は近世の遺物包含層。4層は暗褐色粘質土で少量の小土丹と多くのかわらけ皿片が混じっている。上面を1面とした。海拔13.30m前後。5層は明茶褐色粘質土で細かな土丹粒が多く混じり、かわらけ皿片も多く混じっている。6層は暗褐色粘質土で混入物が少なく硬い。鎌倉市街地で確認される中世基盤層に似ている。海拔13.10m前後。7層は黒褐色粘質土で混入物が少なく硬い。8層は暗～黒褐色粘質土で粘性が強い。古代から中世初めの遺物が混じる。9層はやや青みを帯びた褐色土で砂粒を少量含んでいる。上面は北から南に向かって斜面を呈している。10層は明茶褐色粘土層で、ベージュ色と呼称する場合が多い。調査区北側から南に落ち込む岩盤上に堆積している。11層は遺構覆土で炭化物を含んだ暗褐色土。



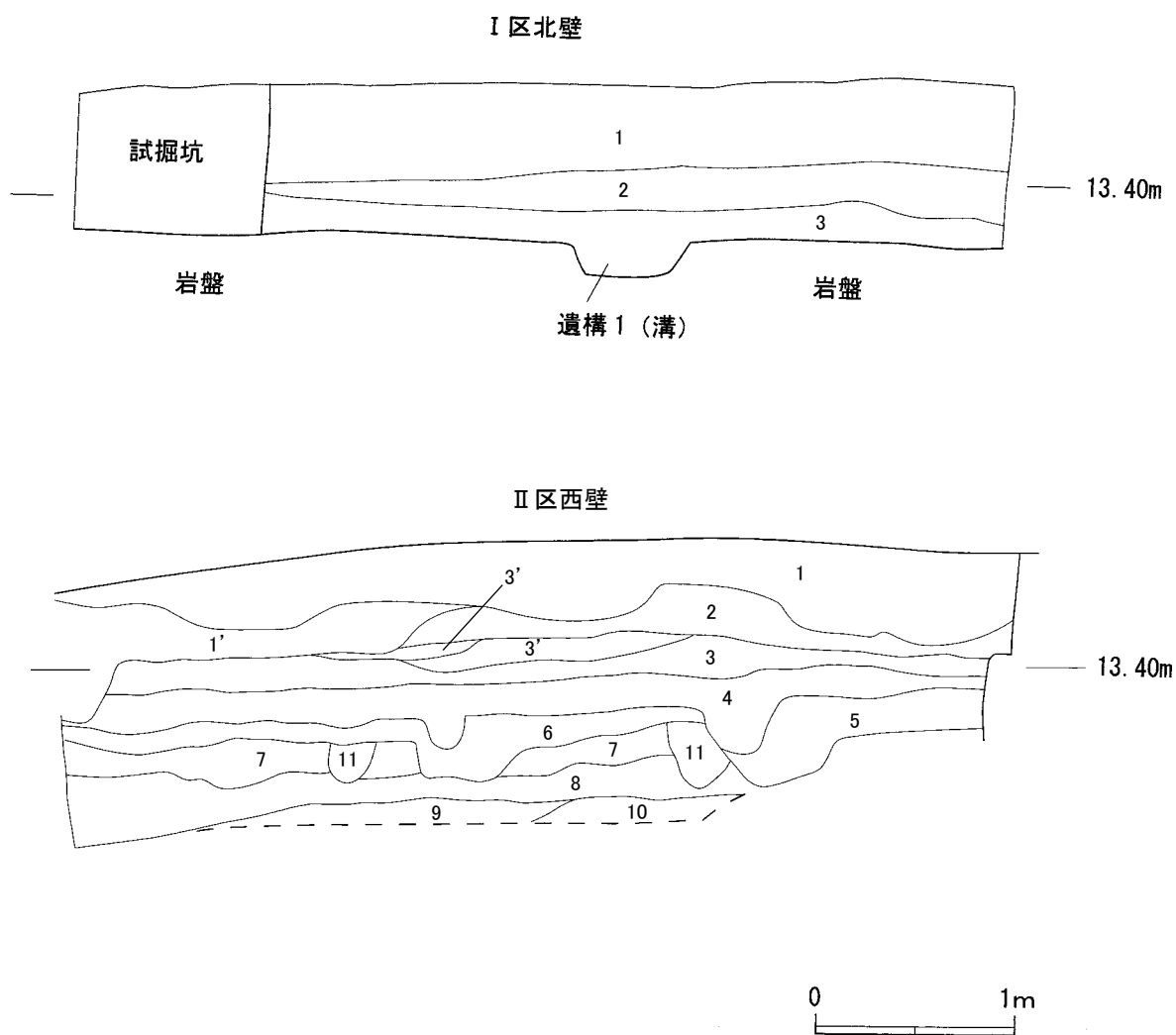


図3 堆積土層

(参考文献)

- ・「大慶寺旧境内遺跡（寺分一丁目943番2外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30』第1分冊  
平成26年（2014） 鎌倉市教育委員会
- ・「大慶寺旧境内遺跡（寺分一丁目819番1地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』第2分冊  
平成12年（2000） 鎌倉市教育委員会

## 第二章 検出した遺構と遺物

調査は残土を場内で処理をする都合もあり、対象地を東西に2分（I区・II区）する方法で実施した。調査では掘削機械でコンクリート片を多く含む表土を除き、以下の調査は人力で行った。まず西側のI区の調査を先行して、次いでII区の調査を行なった。I区の調査を先行したのは、試掘調査のトレンチがI区内に存在するためである。またII区の調査に際しては、崩落を防ぐため50cm幅でベルトを設定した。調査の結果、削平岩盤面とおよそ3枚の生活面（遺構検出面）とそれらの面に伴う遺構が検出された。以下説明を加えるが、調査時点の4面は、整理段階で斜面堆積の一部と判断したので、検出遺構と出土遺物をすべて3面に含めた。また、検出した柱穴・土坑については個々の説明を省いて文末に一覧表で表示した。

### 第1節 1面の遺構と遺物

1面には、現地表から70cm～80cm下、海拔13.30mで検出した削平岩盤面とその高さで検出した遺構群をあてた。しかし、堆積土層と見比べると本来の1面は岩盤面より10cmほど高い。整地層より岩盤面が一段低い状況は不自然なので、岩盤面は1面より下であった可能性が高い。また、かわらけ皿がまとめて廃棄されていた溝は岩盤面より上位から掘り込まれているので、2時期の遺構が混じった状況といえる。したがって本期に示した遺構のうち、かわらけが廃棄されていた溝と面上の遺構が新しく、岩盤面がやや古い年代である。また柱穴は新旧が区別できなかったのをまとめて図示した。

遺構は、北側の山沿いに削平岩盤面があり、その範囲はI区の西で2.5m、I区の東で1.2m、上面レベルは東13.30m、西13.20m、南13.20mを測る。上面はほぼ平坦であるが、緩やかに西と南に向かって傾斜している。南はかわらけ集中の北側で削平面が終わり、自然斜面が急傾斜で落ち込んでいる。岩盤面では溝1条（遺構1）、小さな柱穴2個が確認された。岩盤面南の面上では、明確な遺構は確認できなかったが、埋設桶が確認されている。

1面検出までに少量の遺物が出土し、7点が図示できた。このうち図8-49～52が1面を検出するまでの出土、図8-53～55は1面上の出土である。49はブルーのガラス玉で中央に孔があげられている。径4mm、高さ3mm、孔の径1mm。数珠玉の一部と考えられる。50は糸切りかわらけ皿で比較的薄いつくりである。51、52は瓦器の大皿あるいは焙烙と思われる製品。内外共に丁寧な磨きが施されている。53～55は糸切りかわらけ小皿で、いずれも薄手作りである。

#### 遺構1

岩盤を掘り込んで造られた溝である。断面形は方形で、幅32cm～34cm、底面幅24cm、深さ22cm。底面レベルは東端で13.04m、西端で13.01m、長軸方向N-76°-Eを測る。本溝は調査区を斜めに横断して調査区の東西に延びている。調査地点付近では切り立った崖面まで5mの余地があるが、東側では崖面から1mほどの余地に減少する。調査地点近くの崖面の切り崩しが近代の行為と考えれば、本来は崖面近くに沿って谷内を巡っていたと考えられる。敷地の西は調査区から5mで1.5mほど低い隣地になるが、この溝がどのように延びていたかは不明。山際に掘られた排水路と考えられる。

遺物はかわらけ皿の小片などが少量出土した。うち2点が図示できた。図8-56・57は平瓦の破片で、56は表面に布目痕が残り、57は裏面に格子目の叩き痕が残っている。

#### かわらけ集中

本遺構は削平岩盤面の落ち際に沿って東西に延びている。当初は、試掘坑で確認されたかわらけ皿の廃棄遺構が東に細長く存在すると考えたが、I区の東壁を検討した結果、削平岩盤面の落ち際に作

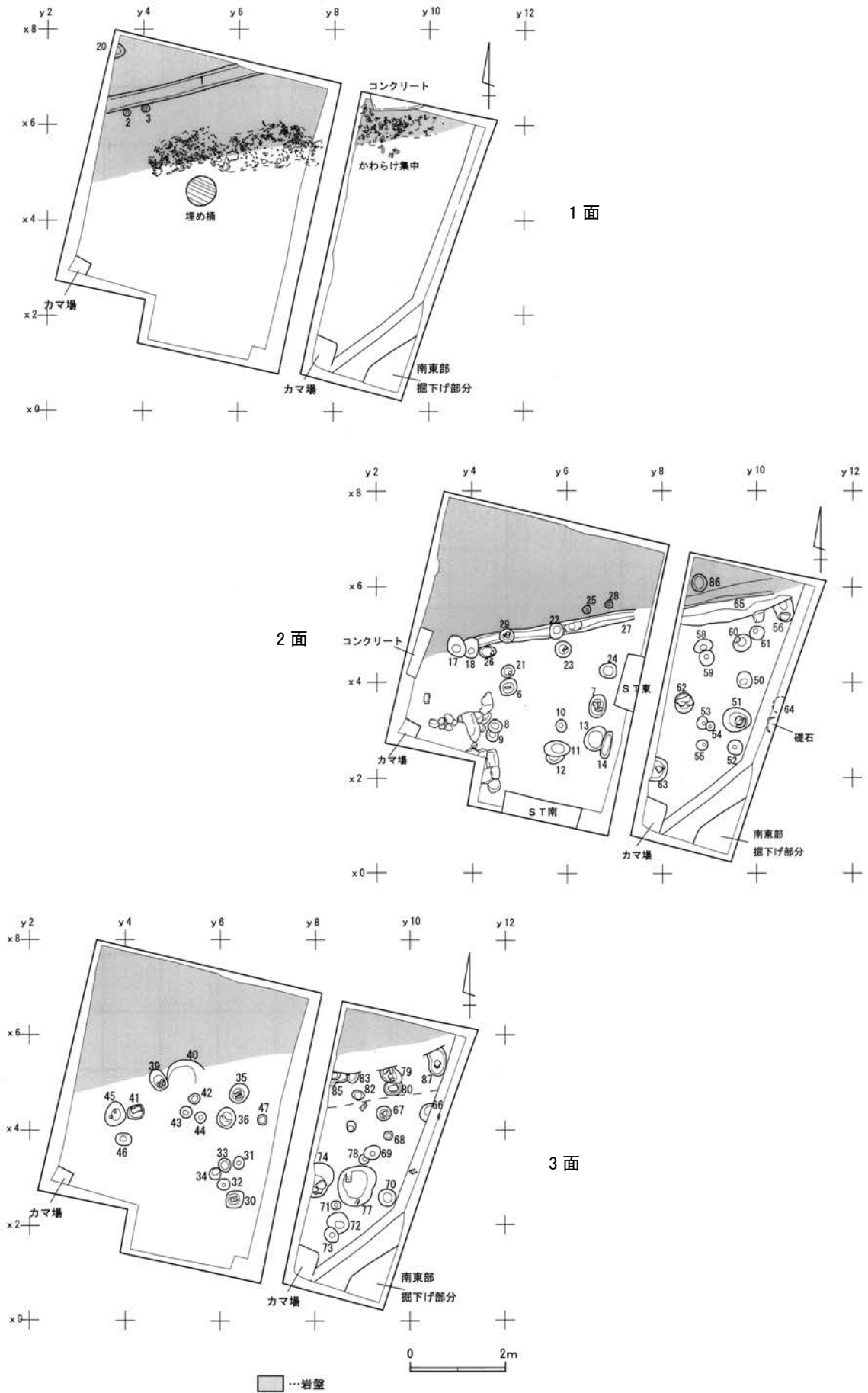


図4 1面～3面全体図

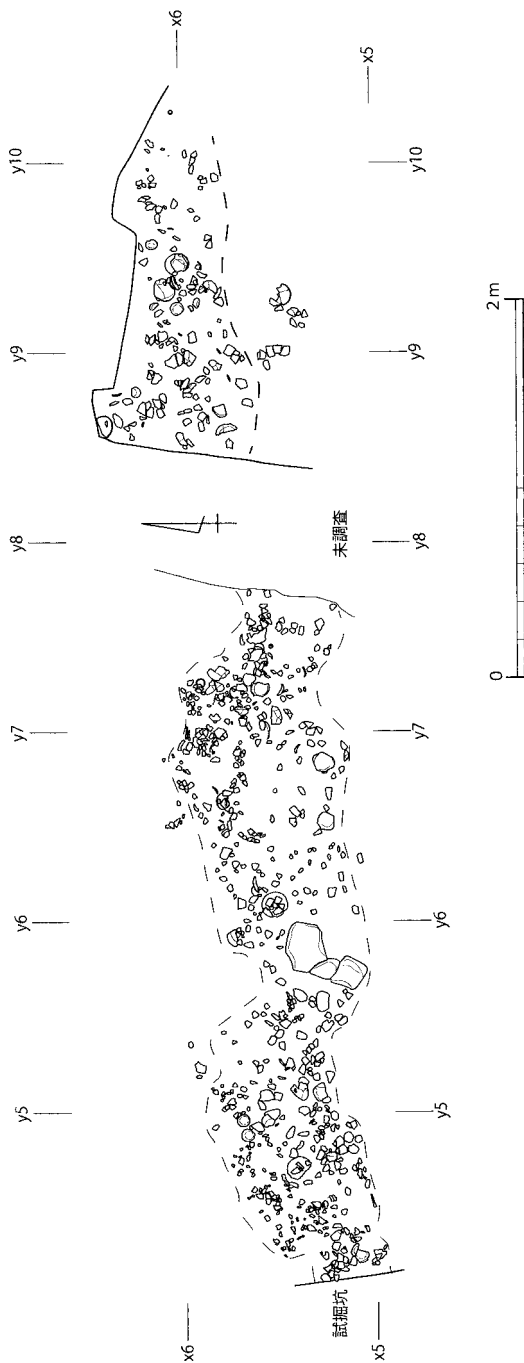


図5 かわらけ集中

られた浅い溝内に廃棄されていることが判明した。そのため、溝の平面形は明瞭に捉えられなかった。Ⅱ区で部分的に現代の建物で壊されているが、調査区の東西に延びていると考えられるので、全体としてはかなり多くのかわらけ皿が廃棄されていると思われる。溝はⅠ区の東壁で見ると、最大幅120cm、深さ20cmで浅い皿型の断面形を呈している。上部は土丹で埋められており、1面のある時期に埋められた遺構と判断した。長軸方向はN-80°-Eで遺構1とほぼ同じ方向である。

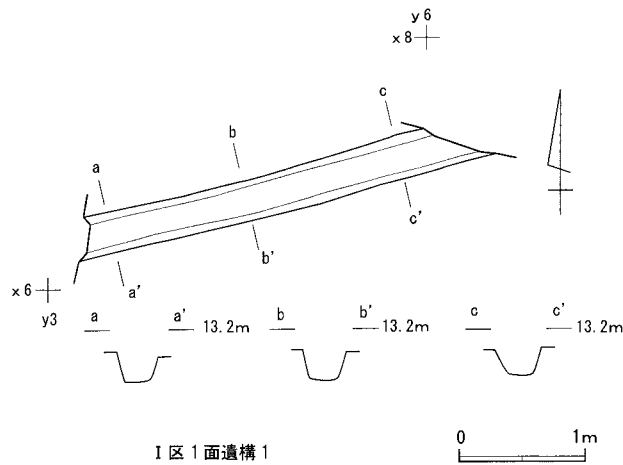
遺物は48点が図示できた。図7-1は鉄製と思われる鋳造された仏像で、胸部より上が残る。高さ(2.4)cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm。径2.1cmの円形後背を持ち、蓮弁のような花卉が頭部上に2箇所、その脇左右に1箇所ずつ作られている。右手に錫杖をもち、服装は僧衣と思われる。微笑みある地藏菩薩かもしれない。2は山茶碗窯系の捏ね鉢底部。3はコースター状の糸切りかわらけ皿で口唇部が僅かに内側に傾いている。4～31は糸切りかわらけ小皿で口径は7cm～8cm弱、薄手作りの皿は器高が高く底径が小さく、口径が大きい皿は器高が低く底径が大きい傾向がある。32～34は所謂中皿で薄手作りである。35～48は大皿で比較的薄手作りの皿が多い。

出土したかわらけ皿は非常に多く、B類(表6出土かわらけ分類、以下同じ)かわらけ皿の大皿が19,330g(重量、以下同じ)、同小皿が2,525g、C類かわらけ皿の大皿が7,125g、同中皿が400g、同小皿が1,722gである。これを個体数換算すると、B類大皿が107個体強(180g/1個体)、小皿が50個体強(50g/1個体)、C類大皿が44個体強(160g/1個体)、中皿が4個体(100g/1個体)、小皿が43個体強(40g/1個体)となる。検出部分で少なくとも248個体のかわらけ皿が廃棄されている事になる。

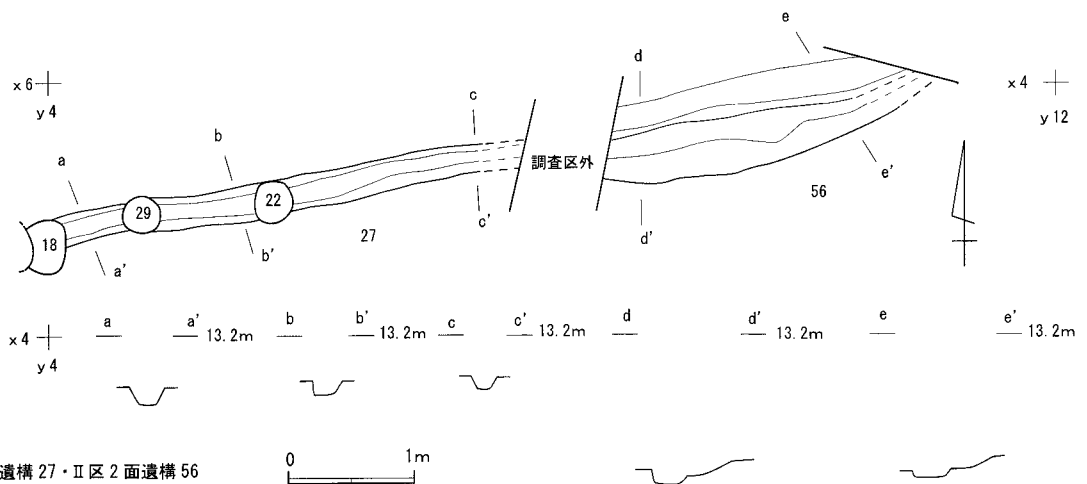
#### 据え桶

底部と3cm～8cmの高さに残った側板が確認できた。側板は厚さ1～2mmの薄さで、桶のように縦板を並べた痕跡が残っている。据えるための掘り方は確認できなかった。直径70cm前後。埋設されたとすれば1面よりかなり高いレベルの生活面からの掘り込みであり、近世以降の埋設と考えられる。

覆土からの出土遺物はない。



I 区 1 面遺構 1



I 区 2 面遺構 27・II 区 2 面遺構 56

図 6 溝

## 第 2 節 2 面の遺構と遺物

2 面には現地表下 90cm 下で確認した薄い版築面をあてた。削平岩盤面より 10cm ~ 20cm ほど低い。遺構は岩盤面の落ち際に溝（I 区遺構 27、II 区遺構 56）が東西に走り、その南側の版築面上からは土坑、柱穴、などが検出されている。検出した柱穴は、配置が不規則で建物は復元できなかったが、類似した柱痕をもつ柱穴が 2 箇所を確認されている。また、I 区南西隅で不規則に集中した土丹、鎌倉石を確認した。おそらく 2 面の段階では削平岩盤面はなかったと考えている。

2 面検出までに少量のかわらけ皿片や常滑甕片などが出土したが、小片が多く図化できた遺物はない。  
溝（遺構 27・遺構 56）

I 区のかかわらけ集中を取上げる段階で確認した溝（遺構 27）である。岩盤斜面上に堆積した 10 層を掘り込んで構築されている。I 区ではかわらけ皿の取上げに集中したため溝の上部を掘り下げてしまった可能性がある。しかし II 区ではかわらけ集中を取上げる際に注意して溝（遺構 56）を掘ったため、本来の規模で確認できた。覆土は細かな土丹と炭化物を含む軟らかい暗褐色でかわらけ片を多く含んでいる。調査中には本溝の覆土上部に 1 面のかかわらけ集中が形成されたと考えていた。整理段階で別遺構と判断したため、ここでは別に提示したが、同一遺構の可能性は残る。

確認規模は I 区で上幅 28cm、深さ 13cm ~ 18cm、軸方向 N-80° -E を測る。II 区では上幅 70cm 前後、深さ 11cm を測る。底面レベルは II 区の東端で 12.79m、I 区の東端で 12.99 ~ 12.87m を測る。レベル数値では西から東に向かって流れる事になるが、II 区では柱穴などが切り合っている可能性があ

り、本来は東から西に向かって流れたと考えている。

出土遺物の多くは少なく、図示できる遺物はない。覆土上部の遺物は1面のかわけ集中と共に取上げられた可能性がある。

#### 遺構 21

I 区の中央近くで検出した。平面形は円形で確認規模は長径 28cm、短径 25cm、深さ 10cm、底面レベル 12.96m を測る。覆土は細かな土丹、炭化物を含む軟弱な暗褐色土で覆土上部から糸切りかわらけ皿がほぼ 3 個体出土している。

遺物は覆土内からかわらけ皿の小片が出土しているがいずれも小片で、覆土上部から出土したかわらけ皿が 2 点図示できた。図 8-58・59 は糸切りかわらけ小皿で、共に口径 8cm、器高は 1.7cm、1.8cm を測る。器肉はやや薄い、器高の低い作りである。

#### 遺構 28

I 区の北東部、1 面のかわけ集中の下で検出した岩盤に掘り込んだ柱穴である。平面形は円形で、確認規模は長径 15cm、短径 15cm、深さ 30cm、底面レベル 12.78m を測る。覆土は細かな土丹、炭化物、岩盤の崩れた砂粒などを含む軟弱な暗褐色土。

遺物は少量出土したが、図 8-60 の 1 点が図示できた。60 は糸切りかわらけ小皿で復元口径 9.3cm、復元底径 6.5cm、器高 2.5cm を測る。器肉はやや厚く、中皿とも言える法量である。

#### I 区南西の石集中

I 区の南西隅で不自然にまとまった土丹、鎌倉石が確認できた。配置を見ると北から東にかけて L 字に曲がっているようにも見える。この集中は 1 面段階で鎌倉石が頭を覗かせており、本来は 1 面あるいはその上に属するものと考えられる。

石の配置を見ると、北側では 20cm 前後の土丹を乱雑に並べ、南では比較的平らな土丹を敷いている。これを本敷地に入る入り口あるいはスロープの一部と仮定し、トレンチを設定して掘り下げたが、確認は得られなかった。しかし、そのような施設の一部であったと考えている。

石の集中あるいはトレンチから遺物が出土しているが、図 8-61～63 が図示できたにとどまった。61 は極小糸切りかわらけ皿で復元口径 5.6cm、底径 4cm、器高 1.6cm で、側壁は直線的に立ち上がっている。62 は側壁が直線的に立ち上がる小皿で口径 8.7cm、底径 6.0cm、器高 2.7cm。本地点出土のかわけ皿では最も新しい 15 世紀後半代の年代が考えられる。63 は平瓦で表面に布目痕が残り、裏面には格子目の叩き痕が残っている。

#### 柱穴列 1

I 区遺構 7 と II 区遺構 51 が樹皮を残した柱が残る柱穴であるが、建物などの構造物である可能性を考えた。木材は腐植が激しく樹木の表皮のみ残る状況で、柱であるのか杭であるのか判断できなかった。柱穴間距離 300cm を測る。遺物はわずかにかわらけ皿片が出土しているが、小片で図化できない。

### 第 3 節 3 面の遺構と遺物

I 区では現地表下 120cm で検出した炭化物等を含む暗褐色粘土層、II 区では現地表下 140cm で検出した暗～黒褐色粘質土(8 層)で確認した遺構を 3 面に含めた。したがって確認レベルには高低差がある。7 層は鎌倉市街地の調査で確認される中世基盤層に似ている土層で、8 層はそれ以下に堆積している土層である。両調査区の面上では柱穴、土坑が検出されているが、2 面から掘り込まれた遺構が混じっている可能性もある。また、II 区では調査時に 8 層で確認した遺構を 4 面遺構として扱ったが、堆積土

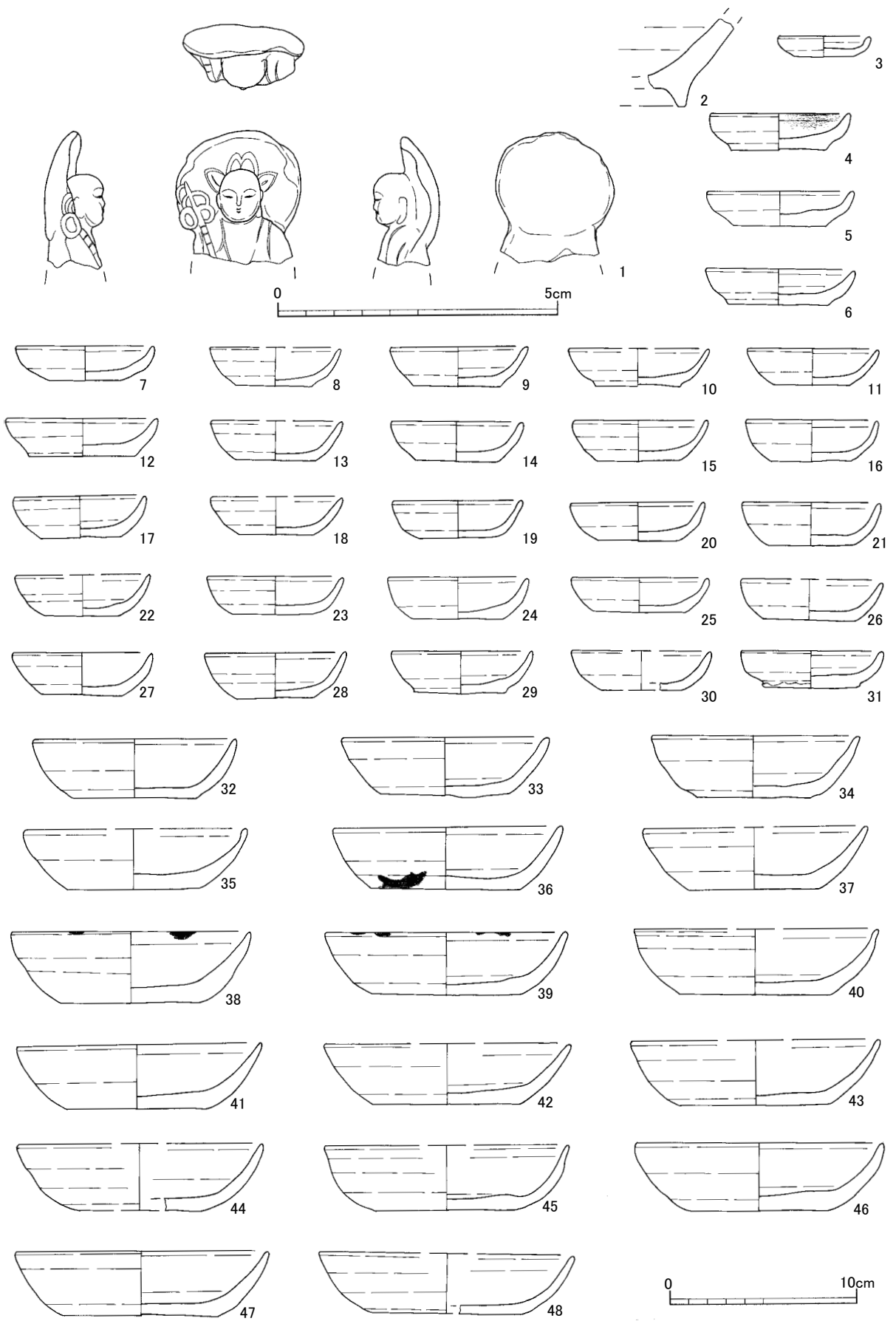


图7 出土遺物(1)

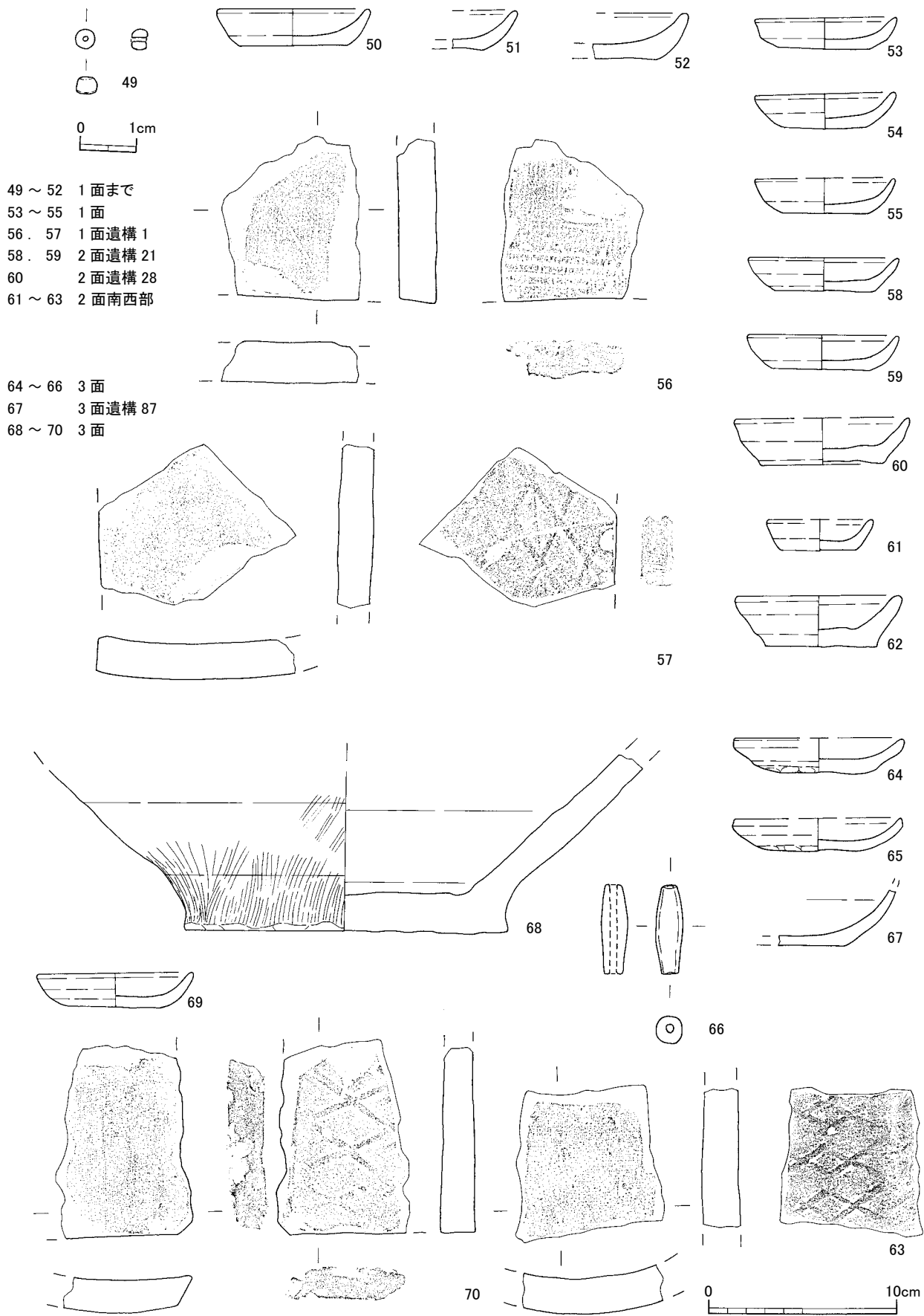


図8 出土遺物(2)



層の検討を含めた整理段階で8層を斜面堆積と判断したので、これらの遺構を3面からの遺構と修正した。そのため、4面は中世基盤層以下の堆積ではあるが生活面ではない。

遺構は土坑、柱穴が確認されたが配置が不規則で、建物としては掴めなかった。出土遺物には渥美窯甕の底部、山茶碗窯系の捏ね鉢、器肉の薄い手づくねかわらけ皿の他に中世以前の遺物が含まれている。図化できた遺物は図8-64～66、68～70に示した。

64・65は手づくねかわらけ小皿で共にやや薄い作りである。64の外低面には粘土板を張りあわせた痕跡が残る。65は口唇部がやや縁帯状に作られている。66は管状土錘で重さ10g弱。68は渥美窯の甕底部で胎土は白灰色で、底部から上に向かって板状の工具でなで上げた痕跡が残る。69は糸切りかわらけ小皿で器壁は薄く作られている。口径は8.2cmで小さい。上層からの混入と考えている。70は平瓦で表面に目の細かい布目痕が残る、裏面には格子目の叩き痕が残っている。

#### 遺構 74

Ⅱ区の南側の西壁際で検出した。調査区外に約半分がある。平面形は円形で確認規模は長軸(70)cm、短軸(40)cm、深さ31cm、底面レベル12.29mを測る。覆土下部から中ほどにかけて焼けた鎌倉石が2個確認されている。柱穴の可能性もあるが、本遺構に対応する柱穴は確認できない。

遺物はかわらけ皿片や常滑甕片が出土しているが、図示できる遺物は無い。

#### 遺構 77

Ⅱ区の中央近くで検出した土坑である。調査時点では2～3個の柱穴が切り合っているようにも見たが、結果として1個の土坑として扱った。確認規模は長軸85cm、短軸75cm、深さ28cm、底面レベル12.33m。底面北側には幅12cm、長さ22cmの礎板があり、南壁には細い角杭が打ち込まれているが、杭は本遺構には伴わない。

覆土は土丹、炭化物を含む軟らかい暗褐色土で、図化できる出土遺物はない。

#### 遺構 87

Ⅱ区の北東部分で検出した。結果的に2個の柱穴が切り合っているような平面形になったが、1個の柱穴と判断した。平面形はやや中央部が括れた楕円形で、確認規模は長軸65cm、短軸40cm、深さ16cm、底面レベル12.57mを測る。覆土は炭化物や小さな土丹を含む暗褐色土で、底面中央に15cm大の土丹が見ついている。礎石代わりと考えたが確証はない。仮にこれが礎石とすると西の遺構79、遺構85も同様に覆土内に土丹が検出されており、関連を考えるべきかもしれない。ちなみにこれらの遺構との距離は遺構79までが100cm、遺構79と遺構85の土丹との間が100cmである。しかし、これに類似する柱穴は、調査区内で確認できていない。

遺物は、図8-67の1点が図示できた。67は糸切りかわらけ大皿で薄い作りである。土丹の下から出土しており、本遺構の年代近いと考えている。

3面からは手づくねかわらけ皿が、比較的多く出土している。出土したかわらけ皿は比較的薄い作りで、鎌倉で最も多く出土する器肉の厚い皿より若干古い様相を持っている。出土重量は大皿が1.670g、小皿が345gである。これを単純に1個体当たりの重量から個体数を算出すると大皿(1個体180g)が9個体、小皿(1個体80g)が4個体強となる。多く出土したといえる数ではないが、狭い面積の調査であり、鎌倉の外であることを考慮すると、注目すべきことと思える。

## 第4節 古代の遺物

本地点では中世各面の掘り下げ時、および中世遺構などから古代の遺物が出土し、Ⅱ区での出土量が比較的多かった。表1には出土位置と種別/器種ごとの破片数を示した。殆どが小片であるため全体の形状を知り得る資料は僅少であったが、こうした中、灰釉陶器や緑釉陶器の碗・皿に遺存状態の良好な資料が確認でき、供膳具の中では同時期の土師器や須恵器の坏より数量面で多い点の特筆できる。個々の遺物は磨滅が進んでいないことから、堆積土に伴う移動があったとしても、本来の使用場所は近くにあったと推察される。以下、図9に掲げた遺物について説明する。

1・2はロクロ土師器の坏。1は口縁1/4ほどが遺存。復元口径は13.0cm、胎土は砂質である。口縁部内面が薄く黒変している。2は底部1/6の破片。復元底径は6.0cm。底部には回転糸切り痕があったと見られるが、磨滅のため不明瞭である。3は土師器の小型甕。口縁部から胴部上位にかけて1/8ほどが遺存。胎土は砂質で雲母粒や泥岩粒を微量含んでいる。相模型の範疇に含まれよう。4も土師器の甕で三浦型。口縁部の小片で、頸部は外方に短く屈曲し、口縁端はヘラによって面取りされている。胎土は砂質で、白色針状物質や角閃石粒を微量含んでいる。5は土師器の口縁部小片で壺となろうか。口縁部外面に煤が付着する。胎土は緻密で、白色針状物質を含んでいる。

6は須恵器坏の底部片で、4/5周ほど遺存している。外底径5.5cm、内底径5.0cm。外底面には右回転の糸切り痕が残る。胎土は粗砂を多く含み、器表は灰色を呈する。7も須恵器で甕の口縁部片。内外面に回転ナデを施し、内面にのみ自然釉が掛かる。胎土は緻密で、白色の微砂を微量含んでいる。器表は暗灰色を呈する。

8～14は灰釉陶器。8～13は碗で、14は皿。小片も図示したが、胎土などの違いから、全て別個体と考えられる。8は口縁～底部まで図上復元できた唯一の個体。体部の外面下位には回転ヘラケズリの後、雑なナデ調整が施される。付け高台は体部の下端側に配され、高台内中央には回転糸切り痕が残る。灰釉は浸け掛けで、釉薬は光沢がなく白色化している。内面には重ね焼きの高台痕が残り、使用により滑らかになっている。上記の要素は折戸53号窯式の資料に伴う特徴であり、概ね10世紀前半の年代観が与えられる。復元値での口径13.8cm、底径6.8cmで、器高は3.9cmを測る。器表は灰色を呈し、胎土には石英粒や白色砂粒が微量含まれる。9は口縁～体部1/4が遺存。復元口径が16.2cmと大ぶりの碗である。灰釉は浸け掛けだが、外面は下地として刷毛塗り施釉されたようにも見える。胎土は微砂を多く含み、微量の黒色粒が器面に表出している。器表は灰色で、釉薬は淡緑灰色を呈する。10は口縁部～体部1/8が遺存し、復元口径は15.6cmを測るが、二次的被熱による歪みが強いため参考値とされたい。内外面に浸け掛けによる灰釉が残る。胎土には微砂が多く含まれ、僅かだが気泡が看取できる。器表は灰色で、釉薬は被熱のため光沢を失い白色化している。11は口縁部～体部の小片。外面には刷毛塗りの灰釉が見て取れ、内面には厚い自然釉が掛かる。体部下位の外面は回転ヘラケズリの後、粗いナデで仕上げられている。胎土は微砂質で、微量の白色砂粒が含まれる。器表は灰色、釉薬は淡緑灰色を呈する。12も口縁部の小片。内外面に刷毛塗りの灰釉が施される。胎土は緻密・ガラス質で、器面には微量の黒色粒子が表出している。器表は灰白色で、釉薬は淡緑灰色を呈する。13・14も刷毛塗り施釉された口縁部の小片。13の内面は人工施釉後に厚めの自然釉が掛かる。胎土は13が微砂質、14が緻密で器面に黒色微粒が表出している。全体形の分かる資料が少ないため窯式の認定は難しいが、浸け掛け施釉の8～10が折戸53号窯式、刷毛塗り施釉の11～14が黒笹90号窯式に比定できようか。生産地は尾張～遠江の中に収まると見られるが、窯場の特定まではできない。

表1 古代遺物カウント表

種別	土師器							ロクロ土師器		須恵器			灰釉陶器		緑釉陶器
	比企型坏	その他坏	相模型甕	三浦型甕	武蔵型甕	その他甕	台付甕	壺	坏	坏	甕	瓶	碗	皿	碗
区	面	遺構													
I	2	35	1				1								
I	2	40			1										
I	2~3	南トレンチ							1						1
I	2~3	—	1				9	2		1					
II	2	58													
II	1~2	—	1	4	1		20	1	1	1	2	5	1		
II	2	—					7								
II	3	72							1						
II	3	—					1								
II	3	77													1
II	3	79		1											
II	2~3	—					20	1			1				

(図9 掲載遺物の出土位置)

1・2・4・5・9～14:

II区1面下～2面

3: II区3面

6: I区3面南トレンチ

7: I区3面

8: II区3面遺構44

15: II区2面遺構17

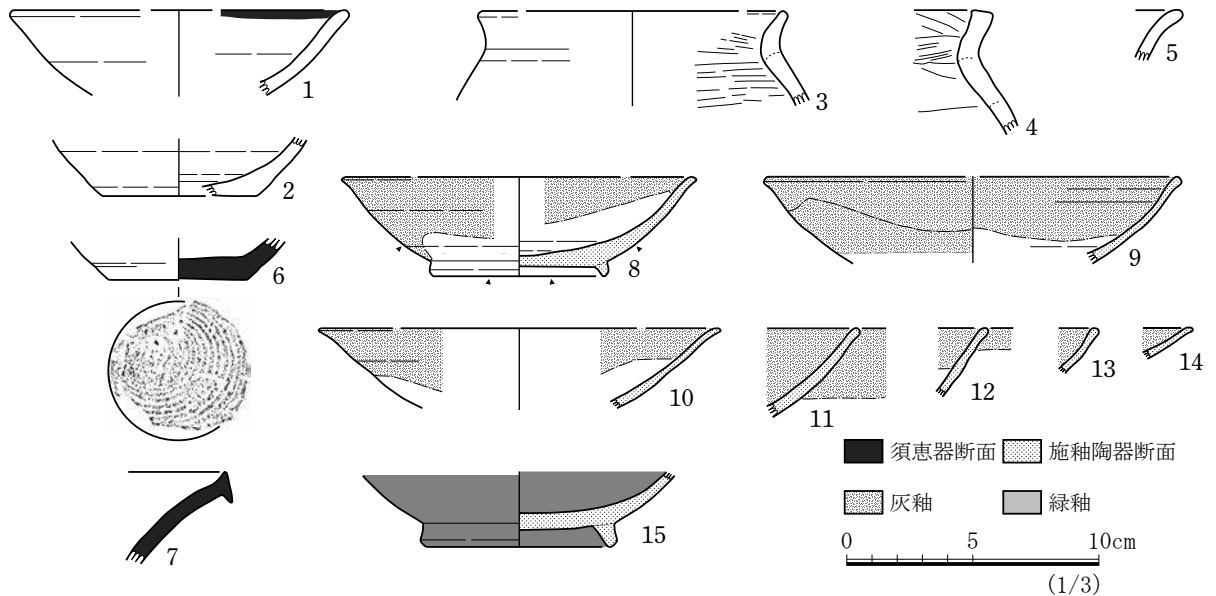


図9 古代の遺物

15は緑釉陶器碗の体部下位～底部。高台内も含め、遺存する器面全体に緑釉が施されている。内底と高台内には三叉トチン痕が残る。器面調整としてのミガキ痕は見て取れず、高台内～体部下位の外面には回転ヘラケズリ痕が確認できる。内面は被熱のためか黒く変色しており、一部で釉薬の銀化も認められた。胎土は緻密で微量の白色砂粒を含み、やや橙色味がかった焼き色を発する。整形・高台の貼り付けなど、非常に丁寧に製作された印象を受ける。具体的な生産窯は特定できないものの、猿投・二川・美濃など東海地方の窯で10世紀前半頃に焼かれたものと考えられる(奈良文化財研究所・尾野善裕氏のご教示による)。高台径は7.0cm。このほか細片のため図示しなかったが、内外面にミガキ調整痕を残す猿投窯産であろう緑釉陶器碗の口縁部がI区3面の南トレンチで出土している。

## 第三章 まとめと考察

本章では調査で検出した遺構や出土遺物などから、検出遺構の性格や年代について若干の考察を加える。

### 第1節 遺構の年代

本地点では、2面から古代の緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。明確な遺構は検出できなかったが、9世紀から10世紀前半の年代が考えられる。3面からは口径9cm前後、器壁厚5mm～7mmの手づくねかわらけ皿が出土している。残念ながら鎌倉には出土かわらけ皿の統一編年がないため個人的な見解になるが、口径やや薄い作りであること等から、13世紀第1四半期頃の年代を考えている。1面のかわらけ集中には、口径7cm～7.5cm、底径が4.2cm前後、器高2.3cm前後で薄手作りの糸切りかわらけ小皿が多く含まれている。これも個人的な編年であるが、13世紀後半から14世紀初め頃の年代を考えている。また、明確な遺構に伴った遺物ではないが、口径8.7cm、底径6.0cm、器高2.7cmで側壁が直線的に外反する小皿も出土している。この年代は15世紀代を考えている。

以上のことから、本遺跡の成立時期は9世紀頃で、しばらく時間を置いて13世紀第1四半期から断続的に15世紀まで存続したといえる。

### 第2節 遺跡の性格

出土遺物から見れば、本地点には9世紀から10世紀前半にかけて緑釉陶器や灰釉陶器を使用できる人物が居住している。また、中世になると鎌倉以外では出土例の少ない手づくねかわらけ皿や渥美窯の甕片を使用できる人物が居住していることになる。しかし、10世紀後半から12世紀代は、相模地域でも土器が不明瞭になる時期であり、9世紀頃からここに居住を始めた一族が中世になって手づくねかわらけ皿を使用した可能性もある。鎌倉の旧市街地を離れた地域で手づくねかわらけ皿が出土することは極めて稀である。手づくねかわらけ皿の出土は、鎌倉時代の初期に鎌倉と密接な関係を持った有力な人物が住んでいたことを表している。とすれば、ここに居住した人物は平安時代後半から中世にかけて相応の力を持った人物ということになる。

本地点の西方1100mには柏尾川に架かる古館橋があり、その西方には平安時代の豪族村岡氏の居城と伝わる村岡城跡もある。梶原氏はこの村岡氏から派生している。ここでは想像をたくましくして、調査地点周辺に残る梶原氏に関する伝承等から、ここに居住した人物は梶原氏と関係があると考えておきたい。

大慶寺は、寺伝に拠れば13世紀第3四半期頃の成立である。1面のかわらけ溜りからは仏像や薄手つくりのかわらけが多量に出土しており、年代も一致する点が多い。また土地を所有する方からも先祖は大慶寺と関わりがあったとも聞いている。この頃までには大慶寺との関係が深くなったと考えられる。

今後この寺分地域と梶原氏あるいは村岡氏との関わりについて研究が必要と考えている。

表2 遺構観察表(1)

区	面	遺構番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	備考
I	1	遺構2	円形	16	12	11.5	13.10	
I	1	遺構3	円形	18	15	14	13.10	
I	1	遺構20	不明	30	(18)	15.5	13.07	
I	2	遺構6	円形	35	35	17.5	12.90	柱あり
I	2	遺構7	楕円形	47	35	6.5	13.00	丸柱、焼けた石あり
I	2	遺構8	円形	30	26	7.5	12.96	
I	2	遺構9	円形?	25	(16)	8	12.94	遺構8に切られる
I	2	遺構10	円形	25	22	15.5	12.89	
I	2	遺構11	楕円形	55	32	12.5	12.93	
I	2	遺構12	不明	(37)	(15)	5	12.99	遺構11に切られる
I	2	遺構13	楕円形	53	(40)	7.5	12.98	遺構14に切られる
I	2	遺構14	楕円形	55	15	7.5	13.00	(旧) 遺構13
I	2	遺構17	楕円形	47	36	24.5	12.81	遺構18を切る
I	2	遺構18	楕円形?	42	(26)	19.5	12.81	遺構17に切られる
I	2	遺構21	円形	28	25	10	12.96	かわらけ皿出土
I	2	遺構22	円形	33	30	12.5	12.94	遺構27の溝内
I	2	遺構23	円形	35	34	17	12.90	礎板?
I	2	遺構24	円形	36	31	17	12.92	
I	2	遺構25	円形	17	15	6	13.01	かわらけ集中の下
I	2	遺構26	楕円形	35	24	24.5	12.77	柱あり
I	2	遺構28	円形	15	15	30	12.78	かわらけ集中の下
I	2	遺構29	円形	30	27	35	12.66	遺構27の溝内、礎板あり
I	3	遺構30	方形	39	36	14.5	11.94	礎板あり
I	3	遺構31	円形	27	25	16	11.90	
I	3	遺構32	円形	27	22	20.5	11.87	
I	3	遺構33	円形	30	25	17	11.89	
I	3	遺構34	方形?	25	25	17	11.88	
I	3	遺構35	円形	45	40	19.5	11.88	礎板2枚あり
I	3	遺構36	楕円形	45	39	32	11.75	
I	3	遺構37	方形	(55)	(30)	15	12.07	
I	3	遺構39	楕円形	45	32	37.5	11.76	礎板2枚あり
I	3	遺構40	方形	(77)	(45)	20	11.96	
I	3	遺構41	方形	35	30	29.5	11.74	礎板あり
I	3	遺構42	方形	21	21	20.5	11.84	
I	3	遺構43	円形	25	25	9	11.94	
I	3	遺構44	円形	25	22	8	11.95	
I	3	遺構45	楕円形	50	45	32.5	11.68	杭あり

表3 遺構観察表(2)

区	面	遺構番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	備考
I	3	遺構 46	楕円形	35	25	16	11.84	礎板あり
I	3	遺構 47	円形	20	19	12		
II	2	遺構 50	円形	35	30	24	12.63	
II	2	遺構 51	円形	57	50	16	12.66	柱(丸太?)あり
II	2	遺構 52	円形	30	30	10	12.71	遺構 54 に切られる
II	2	遺構 53	円形	26	(20)	8.5	12.78	
II	2	遺構 54	円形	20	(19)	24	12.61	
II	2	遺構 55	円形	24	20	4.5	12.82	
II	2	遺構 56	楕円形	55	40	34	12.57	
II	2	遺構 58	円形	40	(23)	14	12.73	遺構 59 に切られる
II	2	遺構 59	円形	32	30	14	12.73	
II	2	遺構 60	円形	40	33	8	12.80	
II	2	遺構 61	円形	30	28	8.5	12.82	
II	2	遺構 62	円形	42	39	24	12.63	焼けた石あり
II	2	遺構 63	不明	50	(30)	6	12.79	焼けた石あり
II	2	遺構 64	不明	-	-	-		壁に焼けた石が見える
II	2	遺構 81	円形	25	24	8	12.22	
II	2	遺構 86	円形	35	32	16	12.62	
II	3	遺構 66	不明	40	(19)	8.5	12.51	
II	3	遺構 67	円形	30	28	14.5	12.44	柱あり(深さは柱のレベル)
II	3	遺構 68	円形	20	17	30.5	12.28	
II	3	遺構 69	円形	36	28	19	12.38	
II	3	遺構 70	円形	36	35	22	12.40	
II	3	遺構 71	円形	20	16	6	12.56	
II	3	遺構 72	円形?	46	(36)	28	12.43	
II	3	遺構 73	楕円形	32	25	30.5	12.30	
II	3	遺構 74	円形	(70)	(40)	31	12.29	石2個あり
II	3	遺構 77	円形	85	75	28	12.33	切り合いのため不明 礎板あり 杭あり
II	3	遺構 78	円形?	20	(16)	5.5	12.51	遺構 69 に切られる
II	3	遺構 79	楕円形	37	30	16	12.62	番号つけた
II	3	遺構 79	不整形	55	34	23	12.59	土丹3個 遺構 80 を切る
II	3	遺構 80	楕円形	38	(25)	-	-	土丹(礎石)あり 遺構 79 に切られる
II	3	遺構 82	円形	26	21	16	12.52	
II	3	遺構 83	楕円形	30	25	21.5	12.54	遺構 85 を切る
II	3	遺構 85	不明	(55)	45	31	12.70	礎石あり 遺構 83 に切られる
II	3	遺構 87	楕円形	65	40	16	12.57	かわらけ、石あり

表4 遺物観察表(1)

No.	図版 No.	面	遺構名	器種		法量			備考
						口径 / 長径	底径 / 短径	高さ / 厚さ	
1	7	1	かわらけ集中	土製品	仏像	[2.4]	2.2	0.9	
2	7	1	かわらけ集中	山茶碗窯	捏鉢	-	-	[4.6]	
3	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	4.9	3.0	1.1	
4	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	5.0	2.0	スス付着
5	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.8	5.0	1.9	
6	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.9	5.2	1.9	
7	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.4	4.0	1.8	
8	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7	4.0	2.1	
9	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.3	4.7	2.1	
10	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.5)	4.5	2.0	
11	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.0	1.9	
12	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.9	5.6	2.0	
13	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.0)	(4.2)	2.1	
14	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.2	2.1	
15	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.3	2.2	
16	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.2	2.3	
17	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.0	4.3	2.2	
18	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.0)	(4.0)	2.0	
19	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.0)	4.0	2.0	
20	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.2	4.2	2.1	
21	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.3	4.5	2.3	
22	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.2)	4.0	2.2	
23	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.3	4.3	2.0	
24	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	4.8	2.2	
25	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.4	5.0	1.8	
26	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	(7.5)	5.0	2.2	
27	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	4.3	2.2	
28	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	4.1	2.4	
29	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	5.0	2.3	
30	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	(4.1)	2.1	
31	7	1	かわらけ集中	かわらけ	小皿	7.5	5.0	1.9	
32	7	1	かわらけ集中	かわらけ	中皿	10.9	6.7	3.1	
33	7	1	かわらけ集中	かわらけ	中皿	11.0	7.0	3.1	
34	7	1	かわらけ集中	かわらけ	中皿	11.0	6.0	3.2	
35	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(11.8)	(7.0)	3.2	
36	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(12.2)	8.0	3.3	スス付着
37	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(12.0)	7.0	3.3	
38	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	12.5	7.5	3.8	スス付着
39	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.0	8.0	3.4	スス付着
40	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	8.0	3.5	
41	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	7.5	3.4	
42	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	8.0	3.2	
43	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	8.0	3.4	
44	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.0)	6.4	3.6	
45	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.0	7.5	3.5	
46	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.2	7.0	3.2	
47	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	13.4	8.2	3.5	
48	7	1	かわらけ集中	かわらけ	大皿	(13.6)	8.0	3.2	

表5 遺物観察表(2)

No.	図版 No.	面	遺構名	器種		法量			備考
						口径 / 長径	底径 / 短径	高さ / 厚さ	
49	8	1	1面まで	ガラス製	珠玉	0.4		0.3	
50	8	1	1面まで	かわらけ	小皿	8.0	5.7	2.0	
51	8	1	1面まで	瓦器	碗?	-	-	[2.1]	
52	8	1	1面まで	瓦器	碗?	-	-	[2.4]	
53	8	1	1面	かわらけ	小皿	7.5	5.0	1.6	3枚並んで出土
54	8	1	1面	かわらけ	小皿	7.4	4.5	1.9	3枚並んで出土
55	8	1	1面	かわらけ	小皿	(7.4)	4.5	1.9	3枚並んで出土
56	8	1	遺構1	瓦	平瓦	[8.5]	[7.0]	2.2	
57	8	1	遺構1	瓦	平瓦	[8.5]	[10.3]	1.8	
58	8	2	遺構21	かわらけ	小皿	8.0	5.0	1.7	
59	8	2	遺構21	かわらけ	小皿	8.0	5.1	1.8	
60	8	2	遺構28	かわらけ	小皿	(9.3)	(6.5)	2.5	
61	8	2	南西部	かわらけ	極小	(5.6)	4.0	1.6	
62	8	2	南西部	かわらけ	小皿	8.7	6.0	2.7	
63	8	2	南西部	瓦	平瓦	[7.8]	[7.7]	2.0	格子状叩き文、布目痕
64	8	3	3面	かわらけ	小皿	(9.0)	-	1.8	手づくね
65	8	3	3面	かわらけ	小皿	(8.9)	-	1.8	手づくね
66	8	3	3面	土製品	土錘	4.8	1.4	0.5	
67	8	3	遺構87	かわらけ		-	-	[3.0]	
68	8	3	3面	渥美窯	甕	-	17.0	[9.5]	
69	8	3	3面	かわらけ	小皿	8.2	5.0	1.8	
70	8	3	3面	瓦	平瓦	[7.1]	[10.2]	1.7	格子状叩き文、布目痕



表6 出土遺物構成表

出土遺物構成(点数) ※かわらけを除く。

出土位置	常滑窯				山茶碗窯		瀬戸窯			
	碗・皿類	甕・壺類	盤・鉢類	その他	碗・皿類	鉢類	碗・皿類	壺・瓶類	盤・鉢類	その他
表採	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土掘削	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
～1面	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
1面	-	8	-	-	-	2	1	-	-	1
1～2面	-	3	-	-	-	1	2	1	-	1
2面	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
3面	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-
試掘坑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	0	18	0	0	0	4	3	1	0	2

出土位置	種別									
	渥美	魚住	亀山	緑釉	白磁	青白磁	青磁	土器質火鉢	瓦質火鉢	瓦質土器
表採	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土掘削	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
～1面	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
1面	-	-	-	1	1	1	1	2	1	2
1～2面	2	-	1	-	1	1	2	1	-	-
2面	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
3面	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
試掘坑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	3	0	1	1	2	2	4	3	3	5

出土位置	種別										合計
	瓦	土製品	木製品	鋳造関係	コースター	白かわらけ	古代土器須恵器	近世陶磁器	その他		
表採	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
表土掘削	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
～1面	5	-	-	-	-	-	-	3	1	-	14
1面	5	1	-	-	-	1	-	6	1	-	35
1～2面	2	1	-	-	-	1	-	29	-	-	49
2面	-	-	1	-	-	-	-	11	-	-	15
3面	2	-	-	-	-	1	-	22	-	-	32
試掘坑	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
合計	16	2	1	0	1	2	68	5	1	148	

出土かわらけ構成(重量) ※単位はg(グラム)

出土位置	種別														合計
	A大	A中	A小	A極小	B大	B中	B小	C大	C中	C小	D大	D小	E大	E小	
表採	-	-	-	-	360	-	40	-	-	-	-	-	-	-	400
表土掘削	-	-	-	-	150	-	25	-	-	10	-	-	-	-	185
～1面	20	-	150	75	990	-	145	30	30	-	-	-	-	-	1,440
かわらけ集中	-	-	-	-	19,330	-	2,525	7,125	400	1,722	-	-	-	-	31,102
1～2面	-	-	-	-	560	-	100	-	-	-	-	-	-	-	660
2面	-	-	-	-	-	-	10	55	-	-	-	-	-	-	65
3面	-	-	-	-	230	-	60	-	-	-	1,670	345	25	30	2,360
試掘坑	-	-	-	-	640	-	5	40	-	20	-	-	-	-	705
合計	20	0	150	75	22,260	0	2,910	7,250	400	1,782	1,670	345	25	30	36,917

※かわらけ分類について

先頭のアルファベットは成形・器形を示し、Aを戦国・室町期(口縁部外反するロクロ糸切り成形)、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを初期かわらけに見られるロクロ底回転糸切り・静止糸切り成形で表面をナデ調整しないタイプとした。後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。コースターは器壁の極端に低い極小型かわらけを示す。

出土位置別かわらけタイプ比率

出土位置	分類					合計
	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ	Eタイプ	
表採	0.000%	100.000%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
表土掘削	0.000%	94.595%	5.405%	0.000%	0.000%	100.000%
～1面	17.014%	78.819%	4.167%	0.000%	0.000%	100.000%
かわらけ集中	0.000%	70.269%	29.731%	0.000%	0.000%	100.000%
1～2面	0.000%	100.000%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
2面	0.000%	15.385%	84.615%	0.000%	0.000%	100.000%
3面	0.000%	12.288%	0.000%	85.381%	2.331%	100.000%
試掘坑	0.000%	91.489%	8.511%	0.000%	0.000%	100.000%
合計	0.664%	68.180%	25.549%	5.458%	0.149%	100.000%

図版 1



1. I区 1面 (南から)



2. I区 1面 (東から)



3. かわらけ集中 (東から)



4. かわらけ集中 (部分)



5. I区 遺構1 堆積土



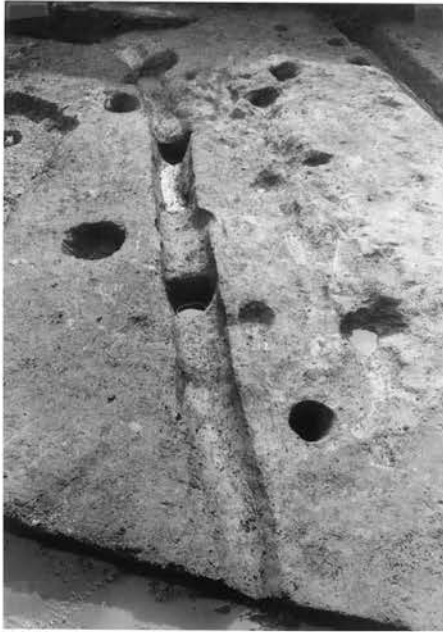
6. I区 2面 (南から)



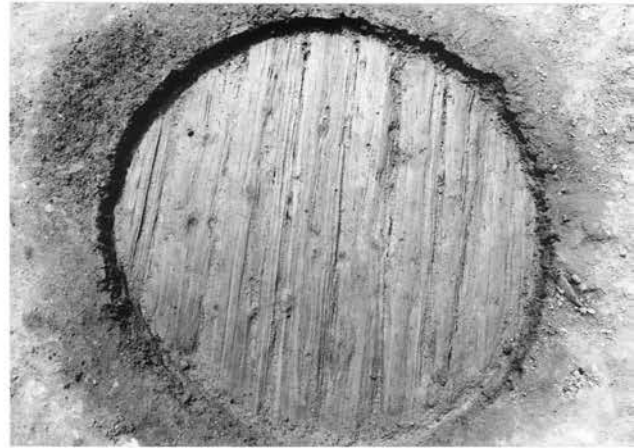
1. I区 3面 (南から)



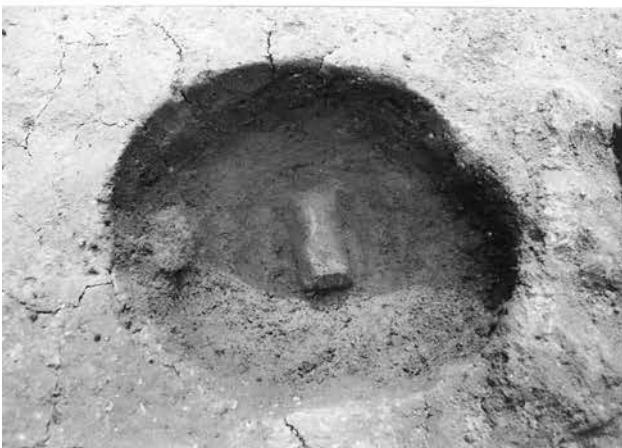
2. I区 3面 (東から)



3. I区 遺構 27 (溝、東から)



4. I区 据え桶



5. 遺構 46

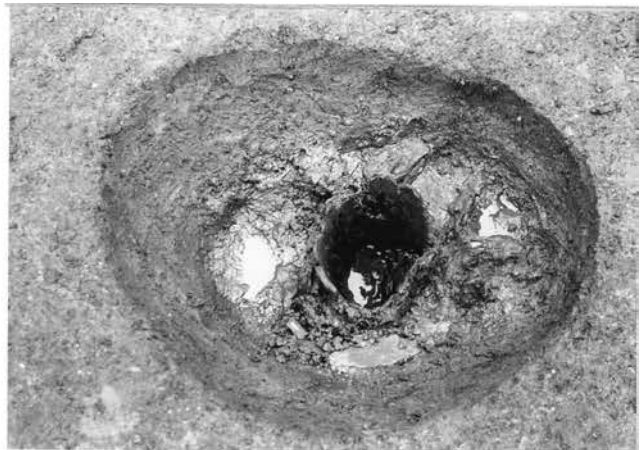


6. 遺構 30

図版3



1. 遺構 6



2. 遺構 7



3. 遺構 41



4. 遺構 21



5. II区1面(北から)

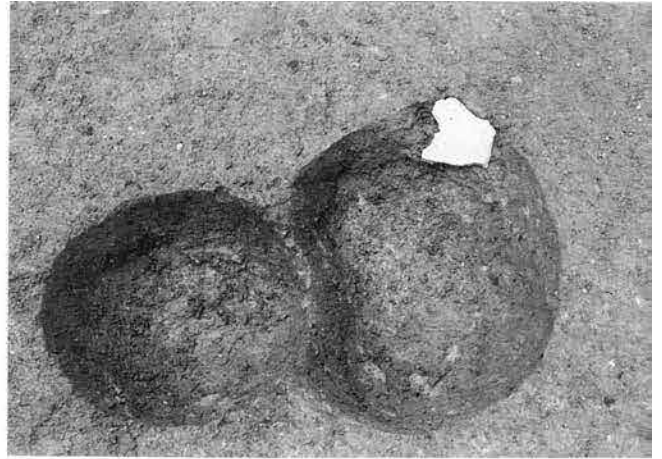


6. II区かわらけ集中(南から)

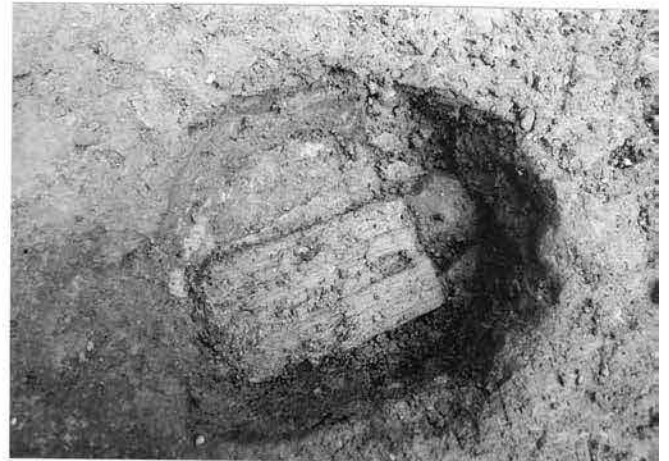




1. II区 2面 (南から)



2. 遺構 69、78  
遺物は灰釉陶器



3. 遺構 30



4. 遺構 41、45



5. I区東壁 (部分)  
かわらけ集中の落込み。左下は岩盤

図版5



図 8-49



図 7-1



図 8-68



図 7-2



図 8-52



白かわらけ (図なし)



山茶碗窯系 = 小鉢 (図なし)



山茶碗窯系 = 小鉢 (図なし)



図 8-56



図 8-63



図 8-70



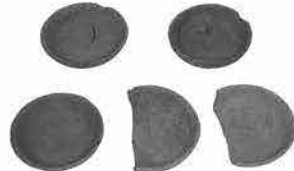
図 8-57



図 8-66



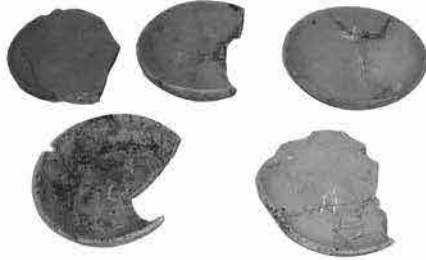
図 8-62



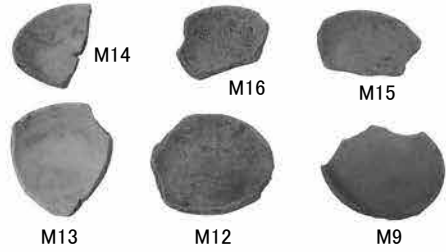
上段 7-23、7-14  
下段 7-19、7-7、7-29



図 7-3



上段 7-40、7-38、7-46  
下段 7-42、7-41



かわらけ集中小皿 (左上から 7-18、7-22、7-13  
左下から 7-15、7-8、7-11)



図 7-42



図 7-34

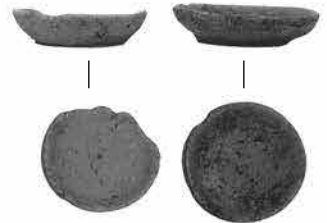


図 7-25

図 7-5



図 7-38



図 7-46



図 7-18

図 7-11



図 8-64



図 8-65



図 8-64 (底部)



図 8-65 (底部)



図 9-15



図 9-8

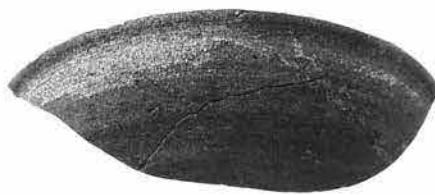


図 9-9

## 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成26年度調査報告							
巻次	31 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	古田土俊一/福田 誠/沖元 道/根本志保/押木弘己/押木弘己/宮田 真・熊谷 満/齋木秀雄							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助二丁目 667番3外	14204	203	35° 19' 32"	139° 32' 37"	20060517 ～ 20060703	33.00	個人専用 住宅 (杭基礎)
どくらくじきゅうけいだいせいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺三丁目 330番6	14204	291	35° 18' 27"	139° 31' 34"	20070205 ～ 20070223	16.00	個人専用 住宅 (車庫の築造)
ほうじょうこまちていあつと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 427番2外	14204	282	35° 19' 19"	139° 33' 18"	20070625 ～ 20070823	51.00	個人専用 住宅 (杭基礎)
べんがやついせき 弁ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座六丁目 640番2	14204	249	35° 18' 22"	139° 33' 18"	20090615 ～ 20090828	49.50	個人専用 住宅 (擁壁築造)
おおくらばくふあつと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 693番8	14204	253	35° 19' 31"	139° 33' 37"	20090914 ～ 20091120	33.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町一丁目 333番15	14204	242	35° 19' 04"	139° 33' 11"	20100609 ～ 20100723	22.50	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 939番10	14204	259	35° 19' 26"	139° 33' 52"	20110729 ～ 20110817	40.00	個人専用 住宅 (杭基礎)
だいけいじきゅうけいだいせいせき 大慶寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 寺分一丁目 939番1の一部	14204	361	35° 19' 58"	139° 31' 22"	20140526 ～ 20140625	60.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	城館 社寺	中世	溝	かわらけ、国産陶磁器、 舶載陶磁器、瓦質製品、 石製品、木製品、獣骨	13世紀後半～14世紀 初頭の溝を検出。江戸 中期以降、崩落により 高台になった。
どくらくじきゅうけいだいせいせき 極楽寺旧境内遺跡	城館	古代	竪穴住居、土坑	土師器、須恵器、鉄滓	9世紀後半頃の竪穴住 居址を検出。
ほうじょうこまちていあつと 北条小町邸跡	都市 城館	中世	掘立柱建物、土坑、 溝、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、鉄製品、 木製品、骨製品	12世紀末～13世紀後 葉にかけての遺構を検 出。遺構の軸方位は全 時期共通。
べんがやついせき 弁ヶ谷遺跡	城館	中世	井戸、溝、柱穴列、 土坑	土師器、須恵器、かわら け、国産陶器、舶載陶 磁器、瓦、石製品、金 属製品、木製品	12世紀末～15世紀前 半頃の池、掘立柱建物、 礎石建物を検出。屋敷 や寺か。
おおくらばくふあつと 大倉幕府跡	官衙	中世	土坑、木組み溝、 柱穴、杭列、	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦、銅銭、 金属製品、木製品	12世紀後葉～15世紀 前半の遺構を検出。御 所移転後は庶民居住区 となった。
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	溝、竪穴建物	かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、瓦質製品、 銅銭、金属製品、木製品、 石製品	13世紀～14世紀の溝 と竪穴建物を検出。
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	城館	中世	土坑、通路状遺構	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、瓦質製品、 金属製品、石製品等	13世紀前半～14世紀 にかけての通路状遺構 を検出。
だいけいじきゅうけいだいせいせき 大慶寺旧境内遺跡	社寺	中世	溝、土坑、柱穴	土師器、かわらけ、国 産陶磁器、瓦、木製品、 鉄製仏像	9世紀～15世紀にか けての遺構、遺物を検 出。梶原氏や大慶寺と 関係か。



鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31

平成26年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成27年3月31日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 テクノヤマモト